





PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

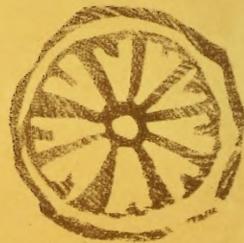
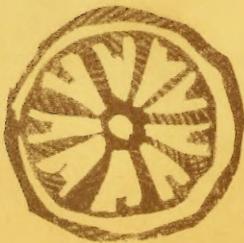
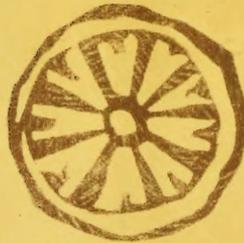
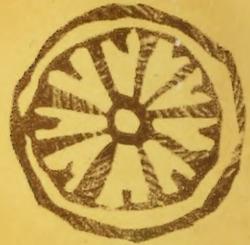
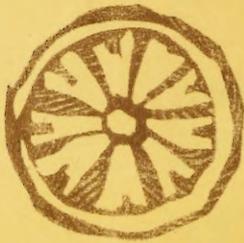
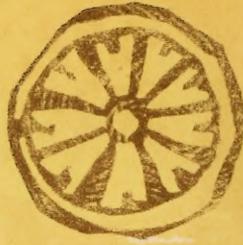
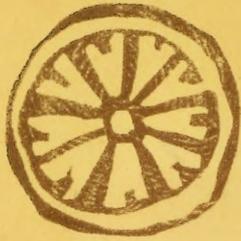
---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

BL            Tripitaka. Japanese. 1927  
1411           Kokuyaku daizokyo  
T8J3  
1927  
v.15

East Asia





國譯大藏經

論部  
第一卷

BL  
1411  
T8J3  
1927  
v. 15



# 目次

## 大智度論解題

●序言——此論の區別——本論と密教との關係——本論と他力教との關係——本論の流傳——

## 國譯大智度論

### 卷の第一

- ◎皈依の頌(一)◎第一問、佛大般若經を説き給ふ理由如何(二)◎第二問、佛經に種種矛盾の説ある理由如何(二)◎第三問二經の矛盾は如何に調和すべきか(三)◎對治悉檀の義解(三)◎第四問、甚深の意義ある因緣觀を愚癡の人に勸むる理由如何(四)◎第五問、無常は何故に第一義にあらざるか(五)◎第一義悉檀の義解(五)◎第六問、第一義悉檀を通と稱する理由如何(六)◎第七問、第一義悉檀の可能なる理由如何(七)◎一切法は實非實等の四句(八)◎長爪梵志皈佛の因緣(九)◎第八問、佛、諍法を説き給へる理由如何(三)◎第九問、如是の語義如何(六)◎梵天王、佛に初轉法輪を請ふ(七)◎信の生熟を蓮華に譬ふ(八)◎俱迦羅は無信の故に惡道に墮す(九)◎信は諸利の根本也(三)◎自讚毀他は惡道に墮す(三)◎摩健提、佛を難す(三)◎第一〇問、無我を主張する佛敎經典の初に『如是我聞』とあるは何故なるか(三)◎第一一問、『聞く』といふ意義如何(三)◎第一二問、『一時』の一の意義如何(三五)◎實には一時なきも、世俗に隨ふが故に一時あり(三五)◎第一三問、一時なかるべからざる所以を論ず(三五)◎第一四問、一と物と一ならば何の咎ありや(三)◎第一五問、一と瓶と異ならば何の咎ありや(三七)◎第一六問、一は瓶と作らざる理由如何(三七)◎第一七問、時とは何ぞや(三七)◎第一八問、易語を採らず難語を採れる理由如何(三六)◎第一九問、時經を擧げて時の意義を問ふ(三六)◎第二〇問、時の存

在を主張す(三九)●第二二問、再び時の在存を主張す(三九)●第二二問、過・現・未の三時には各其相あるを主張す(三九)●第二三問、時無んば如何が時食と非時食とを區別せん(四〇)●第二四問、時を迦羅といはずして三摩耶といふ理由如何(四〇)●卷の第二……………四二八五

●第一問、若し諸佛は一切智人なり、何故に「是の如く我聞けり」といふや(四三)●世間の好語は皆佛より出づ(四三)●佛涅槃の時、阿難、佛に三事を問ふ(四四)●涅槃時の天變地異(四六)●三藏結集の因縁(四六)●第二問、數多の阿羅漢中より唯一人を選べる理由如何(四九)●大迦葉、阿難の不注意を責む(五〇)●第三問、論部は何の處より出でたるか(五九)●婆伽婆の義解(六〇)●佛は轉輪王若くは梵天帝釋に勝る(六二)●第四問、二乘と佛との異同如何(六三)●舍利弗願志の因縁(六三)●畢陵伽婆蹉の慢心(六三)●旃闍盆を帶して佛に無實の難を構ふ(六四)●佛には憂悅なし(六五)●第五問、佛は一名なるや多名なるや(六五)●佛徳無量名も亦無量(六五)●如來の義解(六六)●阿羅漢の義解(六五)●正遍知の義解(六六)●明行足の義解(六七)●第六問、神通と明との異同如何(六七)●第七問、佛と二乗との明の相異如何(六七)●第八問、三明滿足の意義如何(六七)●善逝の義解(六八)●世間解の義解(六九)●無上の義解(六九)●調御丈夫の義解(七〇)●第九問、調御女人を加へざる理由(七〇)●女人の五障(七二)●人天師の義解(七二)●第一〇問、何故に佛を單に人天の師といふか(七二)●佛陀の義解(七三)●第一一問、外道の諸天と佛陀との區別如何(七三)●摩醯首羅天、韋紐天、鳩摩羅天は一切智に非ず(七三)●佛の二事(七四)●第一二問、人間が一切智を有し得るか(七五)●放牛の人の一切智人を試む(七五)●放牛の人に十一の法あり、比丘も亦是の如し(七五)●佛放牛の秘法を説く(七五)●第一三問、世に一切智人あり得べからざるを難す(七五)●不見に二種あり(七九)●第一四問、再び一切智人の有り得べからざるを難す(七九)●函大なれば蓋大なり(七九)●第一五問、釋尊は藥方等を説き能はざるに一切智人といふは何故ぞ(八〇)●第一六問、佛は十四の難に答へ能はざりしが故に、一切智人にあらざるべし(八〇)●十四難間には答ふるの要なし(八二)●十二因縁の作者は誰ぞ(八二)●四種の答へ方(八三)●第一七問、如何なる人を一切智人といふか(八三)

卷の第三……………八六一—二八

●第一問、直に般若を説かずして、王舍城に住し給と云ふ理由如何(八六)●第二問、王舍城と名くる理由如何(八七)●第三問、鷲頭山と名くる理由如何(九一)●第四問、佛は何故に多く王舍城に住せしか(九一)●第五問、迦毘羅婆國に住し給はざりし理由如何(九三)●第六問、舍婆提城の弟子を護らざりし理由如何(九三)●淨飯王、千の釋氏を出家せしむ(九三)●親屬に近づかざるは出家の法なり(九三)●舍婆提城に住せし理由(九四)●第七問、舍婆提城よりも、多く王舍城に住せし理由如何(九四)●大智の人を獅子に譬ふ(九六)●頻婆娑羅王の佛に對する請願(九七)●王舍城の人は聰明博學なり(九七)●帝釋及び八萬の諸天は皆王舍城にて得道せり(九七)●摩伽陀國の豐饒なる三因緣(九八)●王舍城は閑靜なり(九八)●第八問、竹園精舍によりも、多く靈鷲山に住せし理由如何(九九)●第九問、王舍城の五山中、多く靈鷲山に住せし理由如何(九九)●靈鷲山は三世諸佛の住處なり(一〇一)●大乘經は多く靈鷲山上の説なり(一〇三)●共の字義(一〇三)●摩訶の字解(一〇三)●比丘の字義(一〇三)●淨目と舍利弗との四種食に關する問答(一〇三)●四種の不淨食(一〇四)●僧伽の字義(一〇五)●四種の僧(一〇五)●二種の菩薩(一〇五)●阿羅漢の字義(一〇六)●諸漏已に盡く』の義解(一〇六)●復た煩惱なし』の義解(一〇七)●第一〇問、阿羅漢をば心好く解脱を得、慧好く解脱を得といふ理由如何(一〇七)●八清淨道(一〇七)●無功德の人、少功德の人は、生死の大海を渡る、と能はず(一〇八)●須跋陀梵志得道の因緣(一〇八)●佛は大藥師、外道は小藥師(一〇九)●第一一問、染愛と他の煩惱との關係如何(一一〇)●『心調柔なり』の義解(一一〇)●摩訶那伽の字義(一一一)●羅漢は大龍王の如し(一一一)●第一二問、何をか所作といひ、何をか辦すといふ(一一三)●第一三問、擔とは何ぞや、能擔とは何ぞや(一二五)●第一四問、已利とは何ぞや(一二五)●諸有の義解(一二六)●第一五問、眼根等を有しながら、如何ぞ有を盡すことを得んや(一二六)●『正智もて解脱を得』の義解(一二七)●第一六問、諸の阿羅漢は何故に度生に従事せざるか(一二八)●第一七問、阿羅漢は何故に開法の必要ありや(一二九)●學人と數法の人(一二九)●第一八問、阿難陀を除外せし理由如何(一三〇)●第一九問、阿難陀は何故に得道せざりしか(一三〇)●第二〇問、阿難陀てふ名を得し因緣(一三三)●菩薩苦行を棄て降魔成道す(一三四)●惡魔淨飯王を惱ます

(二三)◎阿難陀の出生(二三)◎佛、阿難陀に肩衣を聽す(二三)◎第二二問、比丘の文のみ三千にして、他の三衆は各五百人なりし理由如何(二三)◎第二二問、阿羅漢を讀して、他の三衆を讀せざる理由如何(二三)◎第二三問、説般若時の會衆は、餘經のそれよりも少なき理由如何(二七)

## 卷の第四、……………二一九—二二

- 第一問、菩薩を四衆の次に置く理由如何(一九)◎顯密二種の佛教(二二)◎第二問、菩薩を在家二衆の次に置く理由如何(二三)◎第三問、大乘經にのみ菩薩衆ある理由如何(三〇)◎二種の佛教(三三)◎第四問、在家と出家の菩薩は、何故に各その二衆中に攝せざるか(三三)◎第五問、小乘經の初に菩薩衆を列ねざる理由如何(三三)◎第六問、大乘經の初には何故に菩薩衆のみを列ねざるか(三三)◎大乘は海水、小乘は牛跡の水(三四)◎第七問、菩提薩埵の意義如何(三四)◎第八問、何故に菩提薩埵と名づくるか(三五)◎第九問、菩薩の退轉、不退轉は如何にして知り得るか(三六)◎第一〇問、三十二相の業因縁を種ふたる時期如何(三七)◎第一一問、阿僧祇劫とは幾時を意味するか(三三)◎第一二問、三十二相の業を種うべき場所は如何(三八)◎第一三、四問、三十二相の身、口、意の何れに又識中の何れに屬するか(三九)◎第一五問、三十二相は何れの相より種ふ初むるか(三九)◎第一六問、三十二相は一思の種なるか、又は多思の種なるか(四〇)◎第一七問、一福德の量は幾何なるか(四〇)◎第一八問、菩薩の三十二相を種うる年時は幾何なるか(四一)◎第一九問、釋尊が七日七夜、一偈を以て佛を讀せし理由如何(四二)◎第二〇問、釋迦牟尼に先んじて、弟子の心純淑せし理由如何(四二)◎第二一問、布施波羅蜜多は如何にして満すべきか(四三)◎第二二問、如何にして持戒波羅蜜多を満すべきか(四七)◎第二三問、如何にして忍辱波羅蜜多を満すべきか(四九)◎第二四問、精進波羅蜜多は如何にして満すべきか(五〇)◎第二五問、靜慮波羅蜜多は如何にして満すべきか(五一)◎第二六問、智慧波羅蜜多は如何にして満すべきか(五一)◎第二七問、菩薩は何故に兜率天に生ぜしか(五一)◎第二八問、菩薩最後の身が天上より來りたる理由如何(五三)◎第二九問、菩薩が正慧もて母胎に入りし理由如何(五三)◎三十二相の解釋(五四)◎第三三問、轉輪王の三十二相と菩

薩のそれとの相異如何(二五八)●第三四間、相とは何ぞや(二五九)●第三五間、菩薩は何故に三十二相より多からず少ならざるか(二六〇)●第三六間、菩薩は何故に三十二相を以て身を嚴るか(二六一)●第三七間、佛と名くる理由如何(二六二)●第三八間、未得佛道者を菩薩と名くる理由如何(二六三)●第三九間、小乗の人、大乘の菩薩の義を説かば、何の失ありや(二六四)●大薩陀婆、自ら殺して、海中に死者を救ひし因縁(二六五)●初發心の授記(二六六)●第四〇間、大乘の中に此の語あるも我は信ぜずと難す(二六七)●三十二相は色界無色界及び聲道に種ふすといふを破す(二六八)●一思に一相を種うといふを破す(二六九)●釋迦の心は未熟、弟子の心中已熟といふを破す(二七〇)●上中下の布施(二七一)●第四一間、菩薩は一切衆生の爲に、父母となり、主となるにあらずや(二七二)●第四二間、人壽百歳の後には、佛出世せざるにあらずや●第四三間、大乘經中、過去に一百佛、未來に五百佛ありと説く理由如何(二七三)●第四四間、一時に二佛なし、故に現在に餘佛あり得ざるにあらずや(二七四)●第四五間、十方に佛あらば、何故に難值難遇といふか(二七五)●第四六間、十方に佛あらば、罪惡の諸衆生は何故に度し盡されざるか(二七六)●第四七間、自ら福德智慧あらば、佛の濟度を待つ必要なきにあらずや(二七七)●見佛道は内外の因縁による(二七八)

卷の第五.....一七三—二〇九

●第一間、摩訶薩埵の意義如何(二七九)●第二間、陀羅尼・三昧・忍等を以て菩薩を讀する理由如何(二八〇)●第三間、陀羅尼の意義如何(二八一)●第四間、陀羅尼の種類を問ふ(二八二)●第五間、諸漏を有する菩薩が如何にして諸惡を忍ぶか(二八三)●第六間、菩薩の讀せられて尚も喜ばざる理由如何(二八四)●三種の三昧(二八五)●第七間、種種の三昧中、特に此の三三昧を稱する理由如何(二八六)●第八間、空・無相・無作を行きてふ意義如何(二八七)●第九間、等とは何ぞや、忍とは何ぞや(二八八)●第一〇間、等忍はあり、等觀はあり得べからずと難す(二八九)●第一二間、今復た菩薩の無礙陀羅尼を得といふ理由如何(二九〇)●五道(二九一)●第一二間、獨り天觀のみを讀する理由如何(二九二)●綺語の罪報(二九三)●憍意の害(二九五)●名聞利養の過失(二九六)●甚深の法(二九七)●第一三間、菩薩は如何にして四無所畏を得るか(二九八)●第一四間、菩薩の四無

所畏とは何ぞや(一九) 四種の魔(一九) 第一五問、何經の中に、結使を魔と名くるか(二〇) 第一六問、何經の中に、入を魔となすか(二二) 第一七問、魔と名くる理由如何(二三) 魔の三尋(二四) 第一八問、三種の障の中、但業障のみを擧ぐる理由如何(二五) 十二因縁を釋す(二六) 菩薩の大誓願(二六) 顔色和化せる理由(二六) 乞食の人は見ては、四種を以て待つべし(二七) 小徳無智の者は高座に處るべからず(二七) 智慧あるも多聞なければ、暗中に目あるも、其の用をさざるが如し(二九) 人身の半(三〇) 第一九問、巧に法を出すといふ理由如何(二九)

## 卷の第六……………二〇—二四

●第一問、諸法空ならば、六識の對象となるものは何なるか(三〇) 德女、佛に無明を問ふ(三二) 嬾の如しを釋す(三二) 水中の月の如しを釋す(三三) 虚空の如しを釋す(三四) 第二問、虚空の實在を論じて、其の處を破斥す(三五) 第三問、虚空に相あるを説き、其の實在を主張す(三六) 響の如しを釋す(三六) 聲は七處に響れて出づ(三七) 旻闍婆城の如しを釋す(三七) 第四問、何故に十喻を擧ぐるか(三八) 第五問、小乘教には域を身に比す、今何故に旻闍婆城を喩とするか(三九) 夢の如しを釋す(三九) 五種の夢(三九) 第六問、夢は實なしとの主張を難す(三九) 第七問、心に惑うて、人頭に角ありと見るにあらずや(四〇) 第八問、廣大なる世界には、頭に角ある人あるやも計り難きにあらずや(四〇) 影の如しを釋す(四一) 第九問、影の空無なる説を難す(四二) 旋火輪の譬(四三) 鏡中の像の如しを釋す(四四) 小兒の鏡を破つて像を求むるの譬(四五) 第一〇問、鏡像の空にして、不生不滅なる理由如何(四五) 諸法無自性(四五) 化の如しを釋す(四七) 十四變化心(三七) 第一一問、變化の事は空といふ可らずと難す(四六) 第一二問、空を明すに十喻を以てする理由如何(四九) 第一三問、十喻は心著せざる處といふ理由如何(四九) 第十四問、諸法空ならば譬喩を擧ぐるすら不可能にあらずや(五〇) 第一五問、重れて無礙無所畏を説く理由如何(五三) 第一六問、佛と菩薩との差異如何(五三) 二種の無礙法(五三) 第一七問、菩薩は如何にして衆生の心行の趣く所を知るか(五三) 第一八問、智慧の麤細の區別如何(五三) 意に望なしとは何ぞや(五四) 第一九問、未だ一

切智を得ざる菩薩の、意に墮礙なき理由如何(三三)●第二〇問、菩薩は佛意を成ぞざれば、清淨智あり得べからず(三四)●第二一問、法身の菩薩は佛と異ならず、而も自ら佛を禮し法を奉けるは何故なるか(三五)●佛は十五夜の月、菩薩は十四日の月の如し(三六)●菩薩の無量智は實は有量智なり(三七)●第二二問、菩薩、佛となる時は、何を斷するか(三八)●第二三問、等忍と法忍との外に、大忍を説く理由如何(三九)●生忍と法忍(四〇)●第二四問、甚深の法とは何ぞや(四一)●巧度拙度(四二)●針樂と姉樂の譬(四三)●喜俱、靜意二菩薩の因縁(四四)

卷の第七.....二四三—二七六

◎菩薩は佛國を見て捕縛の願を發す(四五)●第一問、行業清淨の菩薩に願ある理由如何(四六)●第二問、若し支那ぞざれば福を得ざるや如何(四七)●第三問、願を作して報を得ば人は惡をなすも願はされば地獄に墮らざるべきか(四五)●第四問、何故に一場の間、地獄に墮つるを最大の罪といふか(四九)●小乘は聲聞の報應も、大乘は聲聞の報應も(五〇)●第五問、念佛三昧とは何ぞや(五一)●小乘の念佛三昧と大乘の念佛三昧(五二)●第六問、單り念佛三昧を説する理由如何(五三)●一たび南無佛と唱へて、大衆の難を免れたる因縁(五七)●第七問、說法度生は諸佛の法なり、何ぞ人の詩をまつべけんや(五九)●第八問、佛を詩するに二事を以てする理由如何(六〇)●菩薩は一時に三事を行す(六一)●斷言の二見を釋す(六二)●四種の見、五種の見(六三)●煩惱の意義、二種の煩惱、百八煩惱(六四)●三昧の定義(六五)●第九問、菩薩が百千種の三昧を出生し、遊戯する理由如何(六六)●第一〇問、菩薩は如何に遊戯するか(六七)●遊戲の意味(六八)●第一一問、何故に二十二尊のみを學ぶるか(六九)●第一二問、善守を初に學ぶと理由如何(七〇)●第一三問、彌勒息外の薩陬を補處に置く理由如何(七一)●第一四問、佛自ら座を敷ける理由如何(七二)●第一五問、佛の座處を彌子座と稱する理由如何(七三)●第一六問、佛は何故に特に結跏趺坐をなし給ひしか(七四)●第一七問、三昧王三昧を第一とする理由如何(七五)●第一八問、一切智者にして三昧王三昧に入る理由如何(七六)●第一九問、佛力は試劣にあらざるか(七八)●上中下の光明(七九)●第二〇問、諸の三昧は、何故に三昧王三昧に入るか(八〇)●第二一問、佛は三昧王三昧に入

りながら、如何にして世界を観るか(二六〇)●第二二間、佛天眼を用ふる理由如何(二六〇)●第二三間、佛眼を天眼と稱する理由如何(二六〇)●三種の天(二六五)●第二四間、摩訶笑の理由如何(二六六)●第二五間、佛は何故に笑ふか(二六六)●第二六間、佛、光づ身光を放つ理由如何(二六七)●第二七間、餘光の光と佛の光との異同(二六八)●第二八間、是下放光の理由如何(二六八)●第二九間、有限の光明を以て、無限の十方世界を充す理由如何(二六九)●第三〇間、是下よりの光明にて是りなむ何を餘の身分より放光するか(二七〇)●第三一間、佛は同三昧等によりて、放光し給ふや(二七〇)の轉輪王の珠光(二七〇)●第三二間、光明の大氣は上昇せん、然るを如何にして十方世界に充たし得るか(二七〇)●第三三間、光は東方を照し、次に南西北方を照す理由如何(二七〇)●第三四間、光明存続の時期如何(二七一)●第三五間、三千大千世界とは何ぞや(二七一)●第三六間、光の滅せざる理由如何(二七二)●第三七間、恒河沙のみを謂とする理由如何(二七二)●第三八間、恒河の沙は幾何ありや(二七三)●佛、紙衣に在りて、一時に樹葉を敷へ給ひし因縁(二七三)●第三九間、佛の光明に値りて得遣せし者幾何なりや(二七四)●第四〇間、已に舉身皆笑ふと説き、今復た毛孔皆笑ふといふ理由如何(二七五)●母蓮の蓮葉は横の熱未熱による(二七六)

## 卷の第八……………二七七—三二一

●第一間、常光明を放つ理由如何(二七七)●第二間、常光明とは何ぞや(二七七)●第三間、佛の光明は何故に一丈より多からざるか(二七七)●第四間、佛が舌を出すの輕擧をなせる理由如何(二七八)●老女、佛に添澱を供養して大果を得し因縁(二七八)●第五間、佛の舌相の光明、三千大千世界に至るといふ理由如何(二八〇)●第六間、佛の舌相の大千界を覆ふとは信じ難し(二八〇)●佛の神力により畜生と雖も佛心を知る(二八〇)●第七間、舌根より光明を出す理由如何(二八一)●第八間、佛は何故に蓮華座に坐するか(二八一)●第九間、一時に二心ある可らず、佛は如何が一時に六波羅蜜多を試くか(二八二)●外道及び小乘の徒は識して後感化を説くこと能はず(二八二)●第一〇間、佛は何故に化佛して、般若を説くか(二八三)●第一一間、佛の化度を蒙らざる者あるは何故なるか(二八三)●第一二間、能知能聞の人にして、道を得ざる理由如何(二八三)

第一三問、我等は三障なくして聞かざる理由如何(二六六)●第一四問、師子遊戯三昧と名くる理由如何(二六七)●第一五問、佛が此の三昧に入り給へる理由如何(二六八)●第一六問、佛の芥大地を動かす神力ありといふ理由如何(二六九)●第一七問、佛は何故に大千世界を震動せしか(二七〇)●第一八問、六種の動ある理由如何(二七八)●第一九問、地動いて衆生を覆ぼしむる理由如何(二七二)●第二〇問、佛若し三念八道を解脫せしめば、後福行善の必要なきにあらずや(二七三)●第二一問、福を作す者、欲界に生じて、上二界にまざる理由如何(二七四)●第二二問、五蘊は無常無我ならば、生死する者は誰そ(二七五)●諸法は實に生死なし(二七六)●第二三問、諸天生する時は三享あり宿命を知るも、人間には三事なし、如何が宿命を知らん(二七七)●第二四問、人は遠處に住し、如何にして佛所に到るか(二七八)●第二五問、人は長年月の間教養せらるゝ必要あり、如何にして佛所に到るか(二七九)●四種の生(二八〇)●第二六問、佛力の能く十方の衆生に及ぶ理由如何(二八〇)●第二七問、他佛の度生の要ある言は如何(二八二)●第二八問、佛に隨方あらば百千種の衆生を何故に解脫せしめざるか(二八三)●第二九問、佛言者といはずして、衆生の者と云ふ理由如何(二八四)●第三〇問、衆生たる衆何如何(二八五)●第三一問、何故に生壽を説かざるか(二八六)●第三二問、聲者たる因縁如何(二八七)●第三三問、睡者たる因縁如何(二八八)●第三四問、狂者とは何ぞや(二八九)●第三五問、狂と亂との區別如何(二九〇)●第三六問、亂心の因縁如何(二九一)●第三七問、狂と癡との區別ありや(二九二)●第三八問、狂の因縁如何(二九三)●第三九問、佛世に生れて向も無得する理由如何(二九四)●見處二人出家して、一人は衆となり、一人は離衆となりし因縁(二九五)●第四〇問、衆生は如何にせば他滿するか(二九六)●第四一問、病を得る理由如何(二九七)●二種の病(二九八)●佛、病比丘の身を摩で、病を盡せし因縁(二九九)●第四二問、形利者とは何ぞや(三〇〇)●第四三問、未離欲の衆生、如何が等心を討るか(三〇一)●第四四問、一切衆生を、父母兄弟姉妹と見るや如何(三〇二)●第四五問、父母等に奉らざるを父母等と云はば、妄語に隨するにあらずや(三〇三)●第四六問、十善業道の夜の三は業にあらず、然るも業道といふは何故なるか(三〇四)●第四七問、修梵行と行十善の區別如何(三〇五)●第四八問、然然として梵樂すとは、如何なる業なりや(三〇六)●第四九問、其業は三界の何れに屬するか(三〇七)●第五〇問、佛は涅槃を第一の樂とせり、今何ぞ第三禪の樂といふか(三〇八)●第五一問

初禪二禪の樂を措いて、第三禪の樂を擧ぐる理由如何(二九) ● 第五二問、緊の次に好態を説ける理由如何(三九) ● 第五三問、同義異名の持戒と不持戒を別説する理由如何(三〇) ● 第五四問、好んで戒を持つといふ理由如何(三一)

## 卷の第九……………三二—三四一

● 第一問、佛の光明は如何にして諸佛の世界に至るか(三三) ● 第二問、佛は何故に九種の罪報を受け給ひしか(三三) ● 二種の佛身(三四) ● 佛に少疾あり、阿難牛乳を求めし因縁(三五) ● 第三問、佛、常身を以て大千世界の衆生に示し給へる理由如何(三六) ● 第四問、淨居天梵世天と名くる理由如何(三七) ● 第五問、諸天に貴賤の異なる理由如何(三八) ● 第六問、四禪天のうち、初後を説き、中間を説かざる理由如何(三八) ● 第七問、他化自在天と名くる理由如何(三九) ● 第八問、人非人が華を持して、佛を供養する理由如何(三九) ● 第九問、佛身の上に華を散する理由如何(三九) ● 第一〇問、散華化して華臺となり、虚空の中に在る理由如何(三九) ● 第一一問、虚空中の華の落ちざる理由如何(三九) ● 第一二問、佛に神力あらば、散華を變じて華臺となす必要なきにあらずや(三九) ● 第一三問、佛、一身して大千世界に示現するに、諸の衆生は各その前に示現すと見る理由如何(三九) ● 第一四問、佛に多くの光明を放ち、今復た放光する理由如何(三九) ● 第一五問、凡夫の人にして十方諸佛の世界を見得る理由如何(三九) ● 第一六問、彼方の衆生の遂に此方を見るは誰の力なるか(三九) ● 第一七問、世界は無量無邊なり、如何ぞ世界の最も邊にありといふぞ(三九) ● 第一八問、多寶世界とは如何(三九) ● 第一九問、佛は皆寶積と號すべきにあらずや(三九) ● 第二〇問、世には俱釋迦牟尼佛のみ在ますべきか如何(三九) ● 佛、日出三昧に入りし因縁(三九) ● 女人の三障(三九) ● 一世に二佛なく、一國に二主なし(三九) ● 七佛出世の時節(三九) ● 一佛の外に餘佛ある理由(三九) ● 佛經の二義(三九) ● 指と月(三九) ● 説法の五例(三九) ● 舍衛城の一老母、佛に背いて見えざりし因縁(三九) ● 小乘經中、十方有佛の説(三九) ● 第二一問、十方に佛あらば、何故に今この惡世に來らざるか(三九) ● 羅刹女を降し給ふ窟中に、今尙ほ佛影あり(三九) ● 懸跋陀仙人、佛の爪髪を受けて塔を起す(三九) ● 癩人、遍吉の像を新つて病を癒除す(三九) ● 一僧法華經を讀み、普賢の來るを感ず(三九) ● 一僧阿彌陀經を

讀んで、佛の來り給ふを感じ、般若を讀んで死後火葬するも、香鬘けざりし因縁(三元)●第二二間、普明と名くる理由如何(三元)●第二三間、普明菩薩は、何故に佛に問ひしか(四〇)

卷の第十……………二四二—二六六

●第一間、何ものにも動ざる(一)●佛が、普明の問に答へりし理由如何(二)●佛が三苦(三)日蓮、佛の香鬘を尋ね(四)●第二間、妙嚴の佛に、是れ彼の神力ありといふ理由如何(五)●第三間、普明菩薩が佛を見上つらんと欲する理由如何(六)●手屏上二車を以て淨居天に生ず(七)●第四間、普明が諸の三昧の中に自在を得る理由如何(八)●二種の三昧(九)の文殊、女に依つて冥心す(一〇)●第五間、佛は何故に比かんと欲せば、隨意に托びて言しか(一七)●第六間、諸佛の華を以て信となす理由如何(一八)●第七間、自ら身中の法を信受せず、佛法を信受する理由如何(一九)●第八間、佛を信受するは何の爲なるか(二〇)●佛、首比丘の宮に針を拒て、因縁(二六)●第九間、佛は何故に人を遣して敬奉せしむるか(二七)●第三間、蓮華を以て信となす理由如何(二八)●第一一、一二間、復還華を以てして、蘇物を以てせざる理由如何(二九)●三種の蓮華(三〇)●第一三間、佛は何故に普明をして敬奉せしめたるか(三二)●第一四間、華を信受するのみならず自ら敬する理由如何(三三)●第一五間、諸の菩薩は及び難く難く難くと云ふ理由如何(三四)●佛は現、佛の事徳を問ふ(三五)●第一六間、其世世界の菩薩にのみ死つる難しといふ理由如何(三六)●佛の力を食中に著くれば場を生ず(三七)●佛を敬して樂まざれば任ゆる所なし(三八)●第一七間、最上蓮華にゐる多寶世界には如何にして到る可きか(三九)●第一八間、普明菩薩は何故に衆人を着せて來り給ふか(四〇)●第一九間、普明菩薩は何故に出家在家男女衆を等しく來るか(四一)●第二〇間、衆の行くは諸法なるといふ何故に來るか(四二)●佛説と愛羅門教との行法の相違(四三)●第二二間、菩薩は如何にして衆生の菩薩を信受するか(四四)●第二三間、菩薩は何故に中道にして信受するか(四五)●佛と菩薩を以て供養す(四六)●第二四間、彌滿に足を通ずる理由如何(四五)●第二四間、一面に立つ理由如何(四七)●第二五間、普明如來が佛に坐否を問ふは何故なきか(四八)●第二六間、少福少恵なきやと

問ふ理由如何(云云)○二種の病(云云)●第二七問、何故に無漏無患なりやと問はざるか(云云)●第二八問、何故に饑居轉利なりやと問ふか(云云)●第二九問、氣力安樂なりやと問ふ理由如何(云云)●第三〇問、未だ安樂を受けざる理由如何(云云)○二種の問風法(云云)●第三一問、諸天すと問訊せざるに佛の問訊するは何故なるか(云云)○二種の佛身(云云)●第三二問、生死を空觀せず心に執著せざる佛に安否を問ふは何故なるか(云云)●第三三問、佛は勝者なり、然るを轉守自ら東方の諸佛を供養し給ふは何故なるか(云云)○三種の供養(云云)○四種の布施(云云)●第三四問、聖人は豊饒を受けず、然るを此の施は獨最も大なりと云ふは何故なるか(云云)○佛に身寄なし(云云)●第三五問、少許の華を以て如何か多數の世界に滿つることを得るや(云云)●第三六問、已に一一の華上に坐飾ありといふ、今亦一一の華上に坐菩薩ありといふ理由如何(云云)●第三七問、佛法の中には方なし、今何故に十方の諸佛菩薩來り給ふといふや(云云)●第三八問、方なしといふ理由如何(云云)●第三九問、我は一國の中の方相を説けるに、汝は四國を以て答ふ、故に方なしといふ可らざるに非ずや(云云)●第四〇問、大千世界を寶華となすは何人の力なるか(云云)●第四一問、是等の珍寶は何處より出づるか(云云)○千歳の氷は化して水晶となる(云云)●第四二問、華積世界といふ理由如何(云云)●第四三問、阿彌陀佛の安樂世界の如き清淨の世界あり、今何を以て普華世界を以て稱となすか(云云)●第四四問、維摩觀音普賢等の大菩薩の彼處に住し給ふと言はざる理由如何(云云)●第四五問、佛の神力は無量なるが故に、若し十萬の衆生悉く來會せば、世界は空となるに非ずや●若し亦來會せずんば佛の神力に不可能の點あるに非ずや(云云)●第四六問、若し十方の諸佛皆な般若を説かば、十方の諸菩薩は何故に來會するか(云云)●第四七問、佛は法に著せず、然るに七たび神力を現じて、衆生を集め給ひしは何故なるか(云云)●第四八問、十號の中に人天師とあり、されば大摩訶界といはずして但人天の二世界といへば足りるに非ずや(云云)●第四九問、魔梵共に天界に攝す、今之を別説する理由如何(云云)●第五〇問、夜魔、兜率陀、化樂の諸天には各主あり、今た々三主を擧ぐる理由如何(云云)●第五一問、色界中にも天あり、今た々梵の世界に集まるといふ理由如何(云云)●第五二問、諸の沙門婆羅門を説き、他の國王大臣等に言及せざる理由如何(云云)●第五三問、重ねて天界を説く理由如何(云云)●第五四問、但毘闍婆のみを説いて他の龍

玉を説かざる理由如何(六三)●第五五問、地獄鐵鬼畜生を説かざる理由如何(六四)●第五六問、梵闍婆等は鬼神道の中に攝するが故に別説する必要なきに非ずや(六五)●第五七問、龍鬼等の所屬の道は何處なるか(六六)

### 卷の第十一……………三六七—四三〇

●第一問、佛が般若を舍利弗に告げ給ひし理由如何(六七)●第二問、若し智慧第一の爲ならば、須菩提の爲に説くよりも、舍利弗の爲に説く可きに非ずや(六八)●第三問、舍利弗と名づくる理由如何(六九)●第四問、曼波提舍と言はずして舍利弗といふ理由如何(七〇)●第五問、一切種智とは何ぞや、一切法とは何ぞや(七一)●第六問、諸法は深甚微妙にして思議と難し、如何ぞ一人にして之を知るを得んや(七二)●第七問、佛、般若を説くに當り舍利弗をして問はしめて後説き給ひし理由如何(七三)の佛影、佛を覆ふに恐れず、舍利弗の影是を覆へば驚怖す(七四)●第八問、般若波羅蜜多とは何ぞや(七五)●第九問、菩薩は未だ煩惱を斷ぜず、如何ぞ無漏慧を行ずる事を得んや(七六)●第一〇問、菩薩若し煩惱を斷ぜば何ぞ般若を行ずるの要あらんや(七七)●第一一問、上に擧げたる諸説は何れを實とすべきか(七八)●第一二問、如何が般若波羅蜜多の中に住すれば、能く大度を具足すると名くるや(七九)●第一三問、佛は一切の諸法は欲を以てその本となすと説へ給へり、然るを無取無著にして、如何ぞ大度を具足することを得ん(八〇)●第一四問、菩薩は布施に何の功德あれば、般若波羅蜜多の中に住して、布施波羅蜜多を具足するか(八一)●第一五問、布施の意義は如何(八二)●三種の布施と二種の布施(八三)の布施はよく諸の煩惱を斷く(八四)●布施は三十二種の因縁なり(八五)●布施の功德の大なる所以(八六)●大月氏國の一菩薩三十兩の金を見て衆僧に布施せし因縁(八七)●世間の布施と出世間の布施(八八)●小乗の布施と大乘の布施(八九)●婆羅門の一菩薩有施を行じて、感應ありし因縁(九〇)●釋尊因地に大國の王となり、身を離れて一鴈を求め玉ひし因縁(九一)●釋尊因地に一羽の鴈となり、調養の人を救ひ給ひし因縁(九二)●第一六問、法施とは何ぞや(九三)●三種の法施と四種の法施(九四)●第一七問、提婆達多が種種の佛法を説へて、而も地獄に落ちし理由如何(九五)●香日比丘の因縁(九六)●十種の説法の功德(九七)●第一八問、財施と法施との優劣

如何(四九) ● 第一九問、何故に無畏捨と煩惱捨とを説かざるか(四三三)  
 卷の第十二……………四三二—四七一

● 第一問、布施波羅蜜多の滿とは何ぞや(四三) ● 第二問、彼岸に到らずといふ實義如何(四三二) ● 乞眼婆羅門と舍利弗(四三) ● 第三問、二乘は何故に波羅蜜多と名づけざるや(四三) ● 五通仙人、石中に寶を藏せし因緣(四三) ● 第四問、具足し、滿すといふ意義如何(四三) ● 菩薩の二種の身(四三) ● 第五問、如何にして結業生身をもて布施波羅蜜多を滿すや(四三) ● 好愛太子妻子を布施す、一切施王身を以て布施す、月光太子血體を以て瘖人に布施す(四三) ● 釋尊嘗て白象となり、牙齒を彌蘭に施し給ふ。象・猿・鳥、體を致す(四三) ● 三種の布施(四三) ● 布施を生ずる三事の因緣、三種の布施心(四三) ● 群女七寶の璽塔を迦葉佛に布施して三十三天に生ず(四三) ● 第六問、檀那は捨財の義なり、然るに捨つる所なきの法を具足すといふは何故なるか(四三) ● 第七問、三事不可得ならば如何ぞ布施波羅蜜多を具足し滿ぜんや(四三) ● 第八問、因緣相合によらざる微塵の如きは、如何ぞ之を破するを得んや(四三) ● 佛、水中に坐具を敷いて坐し給ふ(四三) ● 第九問、若し施者不可得ならば、菩薩の布施波羅蜜多を行ずるは何故なるか(四三) ● 第一〇問、我の不可得なる理由如何(四三) ● 第一一問、如何にして無我を知る、ことを得んや(四三) ● 神我の不可得なる所以(四三) ● 第一二問、動は常住なり、殺すべからざれど、身を殺せば殺罪ならん(四三) ● 第一三問、人の色を以て我相といふ理由如何(四三) ● 神は心中にありて芥子の如く豆の如くと主張する學處(四三) ● 第一四問、五道の中に入るは細身なり、如何ぞ神に不可得なりと言ふべけんや(四三) ● 第一五問、神通力ある聖人は神を見る、如何ぞなしといふ可けんや(四三) ● 後身の出生を數子の生ずるに喩ふ(四三) ● 第一六問、若し諸法に於て所破なく所滅なく所作なくんば、何を以てか不可得なりといふや(四三) ● 上中下の布施(四三) ● 布施の能く持戒波羅蜜多を生ずる所以(四三) ● 提婆達多本生の因緣を舉げて、貪欲は自家破滅の基なるを説く(四三) ● 布施能く忍辱波羅蜜多を生ずる所以(四三) ● 布施の能く精進波羅蜜多を生ずる所以(四三) ● 能施太子龍宮に入りて寶を採るの因緣(四三) ● 布施の能く禪波羅蜜多を生ずる所以(四三) ● 布施の

能く智慧波羅蜜多を生ずる所以(四六九)

卷の第十三.....四七二—五三三

○上中下の戒(四七〇)破戒の人ば由居苦行すと雖も高取と異らず(四七〇)破戒の人ば淨地に墮あるが如し。持戒の人ば命終の時、心に怖畏なし(四七〇)持戒の人ば二世の業を得、破戒の人ば一切善失ふ(四七〇)持戒の人ば兵仗なしと雖も衆惡加ほらず(四七〇)種種の善を擧げて破戒の罪を説く(四七〇)第一戒、戒相とは何ぞや(四七六)●第二戒、一切の戒律儀を無記なりと云ふ理由如何(四七六)●第三戒、戒の無記なるが爲に墮獄せざるに非ず、惡心生ずるが故に墮獄するに非ずや(四七六)●第四戒、不殺生戒は三界の中の何界の業なるや(四七六)●第五戒、不殺生戒のみを有報有漏といふ理由如何(四七六)●第六戒、不殺生戒の利益如何(四七六)●第七戒、正當防衛の爲にも殺生は不可なりや(四七六)●須陀洹の人、殺家を生れて、羊に代りて自らを殺せし因縁(四七六)●盡の五戒(四七六)●第八戒、不盜の利益如何(四七六)●第九戒、劫奪の人を讀する者あり、如何ぞ劫奪をなさざらんや(四七六)●劫盜の十罪(四七六)●第一〇戒、己の妻を奸して、何故に邪婬なるか(四七六)●第一一戒、若し良人知らず見ず他を挿まざるして姪せば、邪婬とならざるや如何(四七六)●邪婬の十罪(四七六)●第一二戒、妄語に何の罪ありや(四七六)●第一三戒、人ば何處に妄語するか(四七六)●編譯經の口を實まざりし因縁(四七六)●安語の十罪(四七六)●不飲酒の意義(四七六)●第一四戒、酒は能く身を穢め、心を蒙ましむ、何故に飲む可らざるか(四七六)●酒に三十五失あり(四七六)●第一五戒、僧室第は、日律儀の中に於て、三伴遊及び淫會無きは何故なるか(四七六)●五戒の果報(四七六)●第一六戒、持戒波羅蜜多を説けば當に法得すべき善なるに、今大剛を讀するは何故なるか(四七六)●第一七戒、在家の持つべき戒は五戒の半に他の戒ありや(四七六)●第一八戒、一日戒と八齋戒の作法如何(四七六)●第一九戒、五戒を受くる作法如何(四七六)●第二〇戒、大會日に八戒を受くる理由如何(四七六)●第二一戒、諸の鬼神が特に此六日に於て人を惱ます理由如何(四七六)●第二二戒、諸の鬼神の妻が此六日に於て血肉を割いて火中に投ぜし理由如何(四七六)●佛法に日月に好惡なし(四七六)●第二三戒、五戒と一日戒との勝劣如何(四七六)●第二四戒、八正道の中邊にある正語正義

を八正道の初門なりと説くは事實に反するに非ずや(五八)●第二五問、若し在家の戒もて涅槃に入るとを得ば、何ぞ更に出家の戒を要せんや(五九)●佛部へる婆羅門を出家せしめ給ひし因縁(五二)●出家する時の作法(五三)●第二六問、比丘尼は何故に式叉摩那の器具是戒を受くるや(五三)●第二七問、式叉摩那の誦經せられざる理由如何(五三)

卷の第十四……………五二四—五四三

●第一問、何をか持戒波羅蜜多といふや(五四)●菩薩毒龍となりて、一日戒をうけ、身皮を剥かるれども、戒を守りし因縁(五四)●菩薩の持戒は、佛道の爲にして、自身の爲にあらず(五五)●持戒は能く能く施を生ず(五六)●持戒は能く忍辱を生ず(五七)●持戒は能く精進を生ず(五六)●持戒精進を、人の弓を射るに喩ふ。持戒は能く禪定を生ず(五八)●持戒は能く智慧を生ず(五九)●第二問、菩薩の罪と不罪とに於て不可得なる理由如何(五三)●第三問、衆生の不可得なる所以を問ふ(五三)●第四問、衆生の存在は現實なり、然るを何故に無しといふや(五五)●第五問、忍辱とは何ぞや(五五)●二種の忍辱(五五)●第六問、生忍と名づくる理由如何(五六)●第七問、恭敬供養を忍と名づくる理由如何(五六)●淨飯王釋氏をして出家せしめし因縁(五七)●提婆達多が忍心なく、生きながら地獄に落ちし因縁(五七)●三種の供養(五九)●第八問、人また道を得ず、衣食を得るに急むれば、争でかよく心に自ら忍ぶことを得んや(五九)●成道の時、魔王三女を遣したるに、佛説く之を忍びし因縁(五九)●提婆達多が玉女を懸慕せし因縁(五九)●忍辱仙人の因縁(五九)●若し生死の流に迷つて忍を行す。憍傲の人を見ては、廻つて親師と思ふべし(五九)●一切衆生は皆同體なるが故に忍ぶべし、衆生を憍れば佛を憍る所具(六〇)●憍傲の比丘証心甚だ大にして佛忍を受けざりし因縁(五九)●第九問、忍辱は人皆これを好めども、小人は之を怖畏せりと想ひ、忍辱の人を輕慢するを如何せんや(六〇)

卷の第十五……………五四—五七三

●法忍とは何ぞや(五四)●二種の法忍(五四)●第一問、有情の衆生に對して忍ぶば可なり、非情の寒熱風雨に對して忍

ぶば、其理なきに非ずや(五四五)●第二問、内、心法の中に忍ぶとは如何なる事なるや(五四七)●佛陀が苦行六年能く摩軍の來襲を忍び給ひし因縁(五四七)●第三問、未だ煩惱を斷ぜずして、而も能く煩惱に隨はざるを得る理由如何(五四八)●一王脂なき肥羊を求めたるに、智臣之を樂へたる譬喩(五四八)●苦行は煩惱に於て頼らず、功德を獲せず(五四九)●一切法は一相にして無二なり(五四〇)●一切法を觀じて二法となす(五四〇)●一切法を觀じて三法となす(五四〇)●十四難不答法(五四〇)●不信を毒箭を抜くに喩ふ(五四一)●第四問、諸法を觀じて、實相を得る理由如何(五四二)●第五問、諸法の破壊す可らざる理由如何(五四三)●第六問、常も不常も、共に實ならずと云ふ理由如何(五四三)●聖人の二種の論(五四三)●第七問、非有非無を愚癡の論といふ理由如何(五四六)●第八問、名字出生の法に不可得なりと雖も、然も名字の相合あるに非ずや(五四七)●第九問、身根身識の知ると否とに拘らず、地は常に堅相なるに非らずや(五四七)●第一〇問、惡邪と法忍との異同如何(五四七)●第一一問、精進を六度の第四位に置く理由如何(五四七)●佛道成就の二門(五四七)●第一二問、布施乃至智慧の外に精進を要する理由如何(五四七)●第一三問、精進に何の利益ありや(五四七)●第一四問、菩薩にして、尙且つ精進の増益を要するは何故なるか(五四八)

卷の第十六.....五七四一六〇一

●第一問、精進の特性は何ぞや(五七四)●第二問、汝が今記けるは何の精進なるか(五七五)●第三問、今彼若波羅蜜多の精進を説かずして、一切善法中の精進を説くは何故なるか(五七五)●第四問、精進波羅蜜多と精進との異同如何(五七五)●第五問、二乘の精進を波羅蜜多と名付けざる理由如何(五七五)●第六問、有為有作の精進を修するに、無爲無作の實相を首となす理由如何(五七五)●畜生道の業果(五七八)●餓鬼道の業果(五七九)●八大地獄の業果(五八〇)●十二小現獄の相(五八〇)●第七問、何なか精進を満足すといふや(五八二)●第八問、動基は心的作用なり、動るに之を身精進といふ理由如何(五八二)●鹿野苑に於ける梵摩達因縁(五八二)●瞿曇法覺志皮を試とし骨を擊とするの因縁(五八四)●野火の林を燒くに當り、一雉あり、羽毛を以て火を滅せんと試みたる因縁(五八五)●第九問、求むると、こゝ已に無じ、願ふと、こゝ已に成せば、何ぞ

願足なきを得んや(六九)●第一〇回、持戒を修等。精進とは、兩立せざるを如何せんや(六九)●三賢善世界は居て世智を以て五穀を食はざる志志を伏候し給へる因縁(六八)

卷の第十七.....六〇二—六〇七

●第一回、一切業を度するはこれ菩薩の法なり、然るを林澤山間に因縁默然するは何故なるか(六〇二)●寶智は禪定の中であり(六〇三)●摩訶の聖女、佛の坐敷を訪問せんとせし因縁(六〇三)●第二回、人は神波羅蜜多を得るに何の方眼を行す可きや(六〇四)●山神一女となり、法客の歌を誤むるの因縁(六〇四)●五百の仙人、摩訶羅女の惡業を聞いて禪定を失するの因縁(六〇五)●一沙彌者に遇して敬となるの因縁(六〇六)●一比丘の善業を聞いて、地神の爲に河せられたる因縁(六〇六)●月分王の太子、好果に愛著し、道つて善果をばふ(六〇七)●摩訶羅の體態惡名天下に滿ち、諸の釋迦族これを笑ふ(六〇七)●摩訶羅(六〇七)●邪惡の世、世智を無難し、摩訶羅をして、世尊に歡喜えなすらしむ(六〇七)●一角仙人は過去の釋尊にして、聖女は今世の摩訶羅夫人なり(六〇八)●五逆を誦くと一に寶珠の除去(六〇八)●二に佛道書の除去(六〇八)●三に師曠道の除去(六〇九)●四に阿修羅の除去(六〇九)●五に地獄の除去(六〇九)●日月は五事の爲に覆ばれば人は五事に覆はる(六〇九)●佛を求めて法界を其捨すこと、釋尊の如く之を捨てて法界を捨て(六〇九)●第三回、八百四千萬佛、十一切入等を波羅蜜多とてば千佛のみを波羅蜜多とす(六〇九)●四等をば、慈、悲、喜、捨の四無量心のこと(六〇九)●第四回、佛經を對するに、例事を修し、例義に依るべきか(六〇九)●初釋に四種の佛あり(六八)●第五回、有覺、有觀の業福を問ふ(六八)●第六回、阿耨多羅三三菩提は、佛の方便智に於ける現證は相續なりとす。今何が故に佛心・佛心とに分ちや(六八)●佛心は佛の心なりと雖も、佛と佛は定心の佛あり(六八)●第七回、受想は佛あるものな、佛菩薩亦無想しといふ理用如何(六八)●第八回、無能とは何ぞや(六八)●三種の無想(六八)●第九回、佛の禪定と無漏定との不同(六八)●二種の佛、即ち佛佛と行佛との不同(六八)●二十三種の禪定の特徵(六八)●第九回、佛禪と名くる理由如何(六八)●有取禪と名くる理由(六八)●第一〇回、佛禪を得るも更に餘法ありや如何(六八)●第一一回、

禪波羅蜜多を説かずして、單に禪を説く理由如何(六三六)の衆生は禪の樂を知らざることを、盲人の自らの伏藏を見ること  
 能はずして、乞ひ求むるが如し(六三七)の菩薩は禪に著せざれども、外道は禪に著す(六三七)●第一二問、阿羅漢も辟支佛  
 も俱に味に執著せず、而も禪波羅蜜多を得ざるは何故なるか(六三八)の外道の禪には三種の失あり、二乗の禪は佛種を  
 斷じ、菩薩禪の中には衆生を忘れず(六三九)の付闍梨仙人の禪定(六四〇)也耑摩、琴を弾じて、佛を讚するに、迦葉等み  
 な坐に安ずる能はざりし因縁(六四一)の餘人は菩薩の出入の禪心を知れども、住禪の所縁を知らず(六四二)の超越三昧(六四三)  
 ◎二乗は超越三昧中の二を超越る能はざれども、菩薩は超越自由なり(六四四)の黃白二種の獅子の譬(六四五)●第一三問、  
 覺觀を生ぜずして衆生の爲に説法し得るといふ理由如何(六四六)凡夫は覺觀思惟して、而して後説法すれども、法身の  
 菩薩は定に入つて説法自在なること阿修羅の琴の如し(六四七)の毘陀羅伽仙人、定中に亂著し、飛狸と爲つて魚鳥を殺す  
 の因縁(六四八)の四禪の比丘佛を誘つて阿鼻地獄に墮せし因縁(六四九)の菩薩は五蓋に於て捨つるところなし(六五〇)の世智  
 辯聰(六五一)の禪中の不亂不味(六五二)●第一四問、亂とは何ぞや(六五三)の二種の亂(六五四)の三種の微亂(六五五)の暴亂の意義  
 (六五六)の味の意義(六五七)●第一五問、一切の煩惱の中、特に愛著のみを以て、味と名くる理由如何(六五八)

卷の第十八.....六四八 六八四

●第一問、般若波羅蜜多とは何ぞや(六五九)一切智種(六六〇)●第二問、未だ智慧の邊に到らざるを波羅蜜多と稱するは  
 不合理にあらざるか(六六〇)の因中に果ありと説くが故に菩薩の智を波羅蜜多と名く(六六一)●第三問、諸の煩惱未だ洗却  
 し盡さざる菩薩にして、如何ぞ能く諸法實相を得んや(六六二)の佛と菩薩との智慧は、入海の深淺、又は燃燈の前後の  
 如し(六六三)●第四問、諸法實相とは何ぞや(六六四)の能く般若を見る、是を見佛となす(六六五)の般若は衆生の母にして、佛  
 は衆生の父なり(六六六)●第五問、何故に般若波羅蜜のみを大と稱して他の五波羅蜜多を大と稱せざるや(六六七)●第六問  
 智慧とは何ぞや(六七八)の三種の智慧(六七八)の乾慧地(六七九)●第七問、辟支佛の道も亦是の如くならば、聲聞と辟支佛と  
 を分別する理由如何(六八〇)の二乗の道は一なりと雖も、智を用ゆるに異あり(六八一)の某國の玉、林樹の破毀せられたる

を見て、自ら無常を覺れる因縁(六五)●二種の辟支佛(六五)●第八問、三乘の智慧のみ、能く盡く其邊に到ると言つて、餘の智を説かざるは何故なるか(六五)●三乘の智は實にして、餘の智は虛妄なること、摩跋山を除けば樹樁木なきが如し(六五)●佛語と外道の語との同じからざること、鹽乳と牛乳とは其色同じと雖も、攪むる時は、則ち同じからざるが如し(六五)●第九問、外道の經定智慧の過失を問ふ(六五)●第一〇問、外道に觀空あらば、當に一切法を捨つべし、何ぞ一切法を捨てざるが故に實智慧なしと言ふや(六五)●第一一問、外道にも無想定ありて、心王心所すべて滅するが故に、取相變所の智ある理由なきにあらずや(六五)●第一二問、縱令外道の無想定には是の如き失ありとするも、彼等には亦非有想非無想定あり、されば其の中には一切の妄想なく、智慧を以ての故に無想なるべき道理にあらずや、(六五)●外道の觀智は、譬へば尺蠖の如し(六五)●外道の經典中には、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒を聽せども、佛法には決して聞らず(六六)●佛の説は種種あり、愚者は之を誦り、智者は三種の法門に入りて、能く佛語の義を解す(六五)●第一三問、毘勒門、阿毘曇門、空門とは何ぞや(六五)●毘勒門を釋す(六五)●七佛通說の偈(六五)●四正勤五根等は四念處を離れず(六六)●阿毘曇門を釋す(六六)●空門を釋し、併せて廣く大小空の相貌を明す(六六)●第一四問、世間は無常なりといふ説を邪見なりといふ理由如何(六六)●第一五問、有爲法の無常を説くは何故に邪見なるか(六六)●摩訶男、難に値うて念を失するときは、縱令死すとも難に善處に生すべきこと、曲末を祈るに曲方に倒るるが如し、(六六)●第一六問、果して禁らば佛は何故に無常と説きたまひしや(六六)●論力禁志、佛に一寔意の正、多寔意の道とを問ふ(六六)●第一七問、一切諸法は實にして所有なしといはゞ、自ら反つて邪見に墮するにあらずや(六六)●佛法の正宗と邪見の宗との差別(六六)●第一八問、跋闍婆果の二邪見と觀空の人の見解と何の異なるところありや(六六)●第一九問、三種の邪見と觀空の人の見解と何の異する所ありや(六六)●空宗三昧(六六)●第二〇問、菩薩摩訶薩は如何にして、一切の種種の相を知り、又一切法の二相を知るや(六七)●第二一問、無法の中に有心生ずる理由如何(六七)●第二二問、色香味觸の四法に因るが故に地あらば、この地は四法の中に住するや如何(六七)●第二三問、若し上に説ける地の特徴に失あらば、阿毘曇門に於けるが如く説いて可なりや如何(六七)●第二四問、四天は各分離すること能はず、

即ち地中には、水火風の三要素をも含む、唯その多きに随つて名を立つるにあらずや(六七〇)●第二五問、無相といふも亦た非なるにあらずや(六七二)●無相三昧(六七三)●二法の名數、菩薩は二三四五等の無量の法門を觀知する旨を明す(六七四)●菩薩の方便力は、王巧の人の藥力を以て、藥を變じて命となすが如きものなる旨を明す(六七五)●第二六問、若し諸法所空ならん、諸方の種種の名字に如何にして之を分別するか(六七七)●第二七問、世俗の經書、九十六種の外道の經、及び小乘經典中の諸法實相を般若波羅蜜多と名けずして、獨りこの經の諸法實相のみを、般若波羅蜜多と名くる理由如何(六七七)●第二八問、如何にして無相無得の般若の體相を捕捉すべきか(七八〇)●第二九問、智度を得るには要す他の五度を行するの必要ありや、又は一二を行すれば足れりとするや(七八三)●第三〇問、佛の三行を説き給へる理由如何(七八三)●第三一問、若し所得なく所行なくんば、行者は何故に之を求むるや(七八四)●二種の無所得(七八四)

卷の第十九.....六八五—七三

●第一問、三十七の助道品は二乘の道にして、六度ば菩薩の法なり、今それ菩薩の道の中に於て聲聞法を説くは何故なるか(六八五)●第二問、三十七品は獨り二乘の道なりと説かざれども、義を以て之を推知すべきにあらずや(六八六)●第三問、若し四念處中に他の善法を攝すとせば、何故に三十七の道品を説くや(六八七)●第四問、人は先づ道を行じて善得法すべし。今それ八正道を後にして、先づ四念處を説くは何故なるか(六八九)●第五問、四念處に何ぞや(六九〇)●第六問、四念處は如何にして得らるべきか(六九二)●第七問、若し無身ならん五欲を享受するものは誰ぞ(六九三)●第八問、諸聖の禪定より生ずる無漏の樂は、眞實の樂なるべし。如何ぞ、之を善と云はんや(六九四)●第九問、人多く無漏の樂に執著せずして、有漏の樂に執著する理由如何(六九七)●第一〇問、過去未來に樂を享受せざるも、現在一刹那に於て之を享受すべきにあらずや(六九九)●第一一問、如何にして一切の有漏法は無常なりと知るべきか(六九九)●第一二問、我ありて初めて能く欲の樂を享受すべきにあらずや(七〇〇)●第一三問、火は無力ありと雖も、人にあらざれば用ゐざるが如く、心には認識の特性ありと雖も、神あつて初めて其の特性を顯すべきにあらずや(七〇二)●第一四問、内身外身と

は何ぞや(七二六)●第一五問、内受と外受とは如何にして分別するか(七二七)●第一六問、心は内的のものなり、然るを外心も對すると言ふは何故なるはなるか(七二七)●第一七問、法念處は外的のものなり、然るを内法を觀ずといふ理由如何(七二八)●第一八問、七種の中、四種の精進と八道とをのみ正と名け、何故に餘を正と名けざるか(七二九)●四如意足の義解(七三〇)●第一九問、四念處の中にも、四正勤の中にも、已に定あり、何故に如意足と名けざるや(七三〇)●五根の義解(七三〇)●五力の義解(七三〇)●第二〇問、義を説くに阿毘曇の法を以てせる理由如何(七三〇)●八正道の義解(七三二)●第二一問、五種の邪命とは何ぞや(七三二)●第二二問、大乘に於ける三十七品の義如何(七三三)●第二三問、七覺分を略説する理由如何(七三三)●第二四問、一切の業もし空ならば、佛陀は何故に布施等ば善業、殺害等ば不善業、餘事の動作は無記なりと説き給ひしや(七三三)●第二五問、過去と未來とを期ち然り、されど今去るといふは應に是れ去あるべきにあらずや(七三三)●第二六問、若し今去る處に去業ありと言はば、何の謬誤ありや(七三三)●第二七問、去者を去らずといふ理由如何(七三三)

## 卷の第二十……………七四—七五七

●第一問、三十七品の次に八種の法を説く理由如何(七三三)●第二問、空涅槃門とは何ぞや(七三五)●第三問、男女の異なしといふ理由如何(七三六)●第四問、是等の身分は有分の身法と異ならざるか故に何等の矛盾なきにあらずや(七三六)●第五問、三種の智慧を三昧と名くる理由如何(七三七)●第六問、解脫門と名くる理由如何(七三八)●第七問、法の自相の察なるは信す可らず、是は若し自相察なれば無性不滅、無罪無辱にして學道の要なければなり(七三九)●第八問、經の所説によれば涅槃は一門なり、今それ三門と言ふ理由如何(七三九)●第九問、若し諸法の相は空ならば、菩薩は如何に空法の中に於て、能く確定を起すや(七四〇)●第一〇問、四無量乃至十一切處は四禪の中にあり、今之を別説する理由如何(七四一)●第一一問、四無量心は如何にして行すべきか(七四一)●第一二問、三種の衆生あり、何故に慈を行する時は一切衆生皆樂をうけ、悲を行するものは、一切皆苦を受くと觀するや(七四二)●第一三問、慈心の中に苦を受くるの相を取り、

喜心中には喜をうくるの相をとる。捨心の中には何等の相を取るか(高二)●第一四問、是の捨心ば衆生の不苦不樂に於く何等の利益あるか(高三)●第一五問、喜と樂との相異如何(高四)●第一六問、喜と樂との二心を初合して一無量心を作さず、分つて二法と爲す理由如何(高五)●第一七問、何故に樂喜と次第をざるや(高六)●第一八問、若し是の如く深く衆生を愛せば、捨心を行するは何故なるか(高七)●第一九問、菩薩は六度を行じ、佛と成るも亦一切衆生をして離苦得樂せしむる能はず、然るに但この二心徳想の心生じて實事あることなしと言ふは何故なるか(高八)●第二〇問、若し空にして得度すべからずんば、少も尊貴なり、何を以てか中を變するや(高九)●第二一問、先に光明變じて無量の身を化作し、十方無量の衆生を度すと言ひ、今又有解の因縁の故に、變する所も有解なりと言ふは、抑も如何なる理由なるか(高十)●第二二問、樂を二分して、善を二分せざる理由如何(高十一)●第二三問、四無量心を行する人の果報は如何(高十二)●第二四問、善の報として梵天上に生ずと説く理由如何(高十三)●第二五問、善に五功德あらば、何故に悲、喜、捨の功德を説かざるや(高十四)●第二六問、四無量心の果報の究極は善定とれり、何ぞ梵天に生ずるとを得んや(高十五)●第二七問、三種の相を滅する理由如何(高十六)●第二八問、大樂の四無色定とは何ぞや(高十七)●第二九問、諸法實相とは何ぞや(高十八)●第三〇問、色法は初合、分別、困難の故に空なり、然るを此の無色の中に空なりと言ふ理由如何(高十九)

卷の第二十一.....七九—六七

●第一問、若し内に色相なくんば、外を觀するものは誰ぞ(七九)●第二問、内、色相を壞して、外、色を壞すること不能はざる理由如何(七九)●第三問、若し雖て淨背捨ならば、一切處と説くべからざるにあらずや(七九)●第四問、不淨なるを以て淨みなすは無倒なり、今それ淨背捨は、何故に無倒ならざるか(八〇)●第五問、此の三背捨と八勝處と十一切處は實觀なるか、勝た得解の觀なるか(八二)●第六問、無色定と背捨との異同如何(七三)●第七問、無想定と背捨と名はざる理由如何(八二)●第八問、行者は如何にして、内、色想と、外、色を觀するや(八四)●第九問、此の後四勝處と、十一切處中の青等の四處との異同如何(八五)●第一〇問、無所有處、非有想無想處を一切處と名けざる理由如何(七六)

●第一一問、九次第定と繋する理由如何(七七) ●第一二問、諸の禪定の後に九想觀を説く理由如何(七七) ●第一三問、行者の九想觀を修する方如何(七七) ●第一四問、十想を説く理由如何(七七) ●第一五問、九想と十想との相異如何(七七) ●第一六問、九想の體と相數と處とを問ふ(七七) ●第一七問、菩薩は此の九想を觀じて、二乘の證に墮せざる理由如何(七七) ●第一八問、九想の次に八念を説く理由如何(七七) ●第一九問、二念の因縁の恐怖を除くことば經縁によつて之を認む、今それ五念の能く恐怖を除く理由如何(七七) ●第二〇問、何故に佛を念するや(七七) ●第二一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第二九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●第三〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●三九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●四九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●五九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●六九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●七九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●八九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九一問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九二問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九三問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九四問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九五問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九六問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九七問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九八問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●九九問、佛の威徳の大なることば如何(七七) ●一〇〇問、佛の威徳の大なることば如何(七七)

## 以上

龍 樹 菩 薩 造

後秦ニ龜茲國ニ藏法師ニ鳩摩羅什奉詔譯

# 大智度論解題

【序言】英のカアライルは、其の名著『衣服哲學』の中に、新らしき熟語として、永遠の否定と

永遠の肯定なる二語を使用せり。吾人は、彼

が如何なる場合に、又、何れの處より暗示せら

れて、是の如き新熟語を拈出するに至りしか、

今之を穿鑿するの必要を見せり。されど印度にて

は、遠く、奥義書時代より、永遠の否定は、

是れ纏て永遠の肯定に安立する所以の歷程なり

とせられしが、佛陀釋迦牟尼を経て、龍樹菩薩

に至り、畢竟空なる一語を以て、盛んに永遠の否定は、即ち永遠の肯定なる玄旨を力説せり。

人、或は佛典中に散在する空の一字を見て、佛教は虚無を以て宗とせるものゝ如く思惟すれども、

- 【一】 *Naivajñāna Paññāsavā.*
- 【二】 *Kūṭha.*
- 【三】 *Kūṭha-ññā.*
- 【四】 *Grāve Kevāṭṭa.*
- 【五】 *Everlasting No.*
- 【六】 *Everlasting Yes.*
- 【七】 *Dummaḍḍa.*
- 【八】 *Marihadā-Āyāraṇa.*
- 【九】 *Ayambhūyāṭṭa.*

二の三の六、三の九の二六、

四の二の四、四の四の二二、

四の五の一五に、*Naivāññā* (曰く非、曰く非)てふ有名なる成句あり。これ學人をして永遠の否定を以てするにあらざれば、宇宙の本體、即ち神は、容易に捕捉し能はざることを知らしめんが爲なり。

これ確に空の一面を觀て、その他面を觀ざる。擔板漢の妄想に過ぎざるなり。即ち永遠の不定には永遠の肯定の伴ふありて、初めて完全なる意義をなせるものなることを知らざる輩の囁語のみ。是の故に龍樹の空なる一語を正解せんと欲せば、須らく表裏兩面より、其の意義を叩いて、之を突止むるの工夫を怠る可らず。

表裏兩面とは他なし、(一)現象界の空なること、(二)絶對界の空なることなり。

前者は妄想妄念の主觀界、其の分別の對象たる客觀界の、空無にして幻影の如きものなる旨を説くに用る、後者は宇宙の實體たる眞如界の、二文字言語並に思慮を超絶せる相貌を道破するに用ゆ。是の故に空なる一語の中に現象界を目して、(三)幻影の如く、虚空の如く、夢の如く、響の如く、水中の月の如しと觀する時と、絶對の眞如界を目して、有に非ず、無に非ず、亦有亦無にも非ず、非有非無にも非ずと觀する時と、二種の意義を含むものなることを知らざる可らず。蓋し眞如を以て、有りと言ひ、若くは無しと言はば、有は無に對し、無は有に對する語なるが故に、是れ相對的の表言にして、絶對なる眞如界の表言たるに相應しからざればなり。嘗に有無の二語もて表言し得られざるのみならず、一なりと言ふも中らず、多なりと言ふも適せず、一に非ず、多に非ずと言ひ、若くは一なりと同時に多なりと言ふも、十全の表言とい

【一】 板を擔いで歩くものは、左右孰れかの、片方のみ見て、兩方を見ること能はず、これを擔板漢といふ。

【二】 此のことを佛敎の術語にて、「言語道斷、心行處滅」又は「言語不及、意路不到」などといふ。

【三】 本論第六卷、本書二二〇頁を見よ。

ひ難し。その他、生といひ滅といひ、斷といひ常といふも、亦完全なる表言にあらず。要するに唯消極的に『非ず』てふ言葉もて、表言するの外なきなり。これ古來眞如を形容して、『絶言絶慮』と言ひ、又は『四句を離れ、百非を絶す』など、説ける所以なり。是の如く眞如の絶言絶慮なる邊を呼んで、龍樹菩薩は空と名け、空なるが故に絶對自由、手に信せ拈じ來るに不足あることなく、謂ゆる『無一物中、無盡藏、花あり、月あり、樓臺あり』てふ、永遠の肯定に安立することを得と高唱せり。

大智度論一百卷は、大品般若、即ち摩訶般若波羅蜜多經 (Mahāprajñāpāramitā Sūtra) 三十卷(又は二十九卷)九十品の註釋書なりと雖も、實は菩薩の宗とし、原理とせる空哲學をば問答體の平易流暢なる文を以て、有ゆる方面より解説せしものに外ならず。これ吾曹が此の論を目して、一種の『佛敎百科全書』と名くる所以なり。而して其の此を大智度論と言へるは、原名摩訶般若波羅蜜多沙斯怛羅 (Mahāprajñāpāramitā-Sūtra) の漢譯なりとす。蓋し摩訶 (Maha) は大を意味し、般若 (Prajñā) は智慧の義、波羅蜜多 (Pāramitā) は度、又は到彼岸と譯すべく、沙斯怛羅 (Sāsana) は論と翻すべきが故に、鳩摩羅什婆は、此の論を譯して、『大智度論』と名けたり。世に或は『釋論』と言ひ、又は『大論』と呼べるは、即ち本書の略稱なり。

大智度論なる題號の意は、圓滿完全なる佛智もて、理想郷たる涅槃の妙境界を實現し、若くは大智もて、迷の此の岸より、悟の彼の岸に度る、方法を論ずる書の義なり。但し般若を譯して、智は又智

慧といふも、決して尋常一般に謂ふ所の學問的或は理論的の智識を意味するにあらず。是の故に本論第四十三卷に、『般若は一切の諸の智慧の中にて、最も第一なり、無比なり、無上なり、無量なり、更に「これに勝るものなし」と言へり。又、大乘章第十二には、『般若は「法に於いて達観するが故に慧と名く」と言ひ、往生論註下には、『般若は「真」如に達するの慧なり』と釋し、法華義疏四には、『境として照さざるなきを名けて（二）波若と爲す』と言へり。又或は般若を解して、『圓常の大覺なり』といふ。而して此の覺に三德あり、曰く、一に實相般若、二に觀照般若、三に方便般若これなり。一は一切衆生の先天的に具有する所にして、一切の虚妄を遠離せる般若の實性、即ち證らるべき理體をいひ、二は宇宙人生の實相を觀照する實智を意味し、三は萬有を分別する權智、即ち普通に謂ふ所の智識なり。モニエル、キリアム氏が、其の梵英辭典に、佛教の術語としての般若を解して、  
 True or transcendental wisdom — 眞智または超越的の智慧——とせるは、正鵠を得たる譯なりと謂つべし。之を要するに吾人は、是の如き無垢清淨の大智眞智を以てするにあらずんば、迷界の此岸より、悟界の彼岸に度ること能はざるなり。

【此論の區分】 此論は其の内容より分ちて左の四篇となす。

- 一、緣起義篇……………本書卷の第一、初頁より二六頁に至る

【三】 無等とは、相對するものなきをいふ。  
 【四】 法とは、物質的並に精神的の事物をいふ。  
 【五】 波若は般若に同じ。

二、釋初品篇……………本書卷の第一、二六頁より本論第三十四卷に至る

三、釋般若篇……………本論第三十五卷より第七十九卷に至る

四、釋方便篇……………本論第八十卷より第一百卷に至る

第一 緣起義篇に於いては、二十三箇の理由を擧げて、佛が般若を説き給へる因縁となせども、要は一切は實なり、一切は非實なり、及び一切は實にして亦非實なり、一切は非實にして亦非不實なり、是を諸法の實相と名くと説破して、諸法實相 第一義諦を説示する、是れ般若經所説の特色なりと叙べ、終りに般若無量無邊なれば、般若を説き給へる理由因縁も亦無量無邊なりと結べり。惟ふに古來印度の人の書を著はすや、必ず先づ其の崇奉する所の、信仰の對象及び師主等に對して、歎徳讚美敬禮の辭を叙べ、次に其の書を著はす理由、即ち因縁を述ぶるを以て、一般共通の風習となせるものゝ如し。

第二 釋初品篇は、本論の最も重要なる部分を占め、微に入り細に入りて、本經序品中の各語を解釋するのみならず、經中に數々出づる所の名目を捉へ來つて、叮嚀懇切に説明し、迦旃延子等の粗朴なる小乘的實在論を批評し、以て大乘の大に優れたる所以を闡明せり。吾人が前に本論を以て、一種珍重の佛敎的百科全書たるの觀ありといへるは、主として此の部門を指したるなり。然り、人若し大智論一百卷中、本篇三十四卷を色讀せば、佛敎哲學の術語、法數名目等は、殆んど遺漏なく、學び盡

したりといふも過言にあらざるべし。

第三 釋般若篇に於いては、一六菩薩の二道中の般若道を説き、一七法華及び密迹等の諸經も亦般若の中に入ると破し、一八般若の體は是れ諸佛の母なり、一九般若は大明咒なり、二〇諸佛菩薩の説き給へ

る十二部經、八萬四千の法門も、皆悉く此の般若中の一事のみと言ひ、

二三若し人十二部經盡く忘失すと雖も、其の過失は猶輕し、若し般若の

一句を忘失せば、其の罪極めて大なりと力説し、二四般若の一句は、大千世

界の衆生をして、阿羅漢果を得せしむるに勝ると高調し讚美せり。以て般

若の意義を明らかにむべく、以て般若の佛敎中に於ける位置を察すべし。

第四 釋方便篇に於いては、二五菩薩は是の如く般若の實相に住し寂靜

平和の涅槃に入らんと欲すと雖も、方便の力を以て、菩薩の功德を満足

し、體現せんが爲に、入滅し給はずと説き、二六般若と方便とは、其の體二

れ一なれども、所用異なるものあるが故に、二道を分ちて別に説くなり。譬へば金工の巧なる方便を

以て、種種の異なる物を作るに、其の體は皆これ金なりと雖も、而も各各其の名を異にするが如しと

て、方便道成立の必要なる所以を明らかにせり。吾人は以下少しく、此の論に於ける特殊の點を表出

して、學徒の參考に資する所あるべし。

【一六】 本論第一百卷に菩薩に二道ある旨を説けり。

【一七】 本論第四十六卷並に五十七卷。

【一八】 本論第九十八卷。

【一九】 本論第五十八卷。

【二〇】 本論第六十四卷。

【二一】 本論第七十九卷。

【二二】 本論第七十九卷。

【二三】 本論第一百卷。

【二四】 本論第一百卷。

甲 大小乘に關する所説

出所卷數

二種の道——聲聞道即ち小乗と、菩薩道即ち大乘……………四六

聲聞經(即ち小乘經)の初に菩薩衆を列ねざる所以……………四

大乘を大海の水に譬へ、小乗を牛跡の水に喩ふ……………四

大小兩乘に於ける念佛三味の差異……………七

小乗は現在一佛を説き、大乘は現在多佛を説く……………九

小乗には世間即涅繁と説かず、大乘には之を説く……………一九

二乗、即ち聲聞緣覺と、菩薩とは二種の賢士なり……………二四

小乗は解し易く、大乘は解し難し……………二四

小乗の佛は人の法に隨ひ、大乘の佛は方便して示現す……………二七

兩乘間に於ける大慈悲、及び一切智慧觀の相違……………二七

聲聞辟支佛の心は有漏なり、諸佛は爾らず……………二七

小乗には十智を説き、大乘には十一智を説く……………二七

二乗即ち小乘法と、摩訶衍即ち大乘法……………二六

聲聞は總相智、菩薩は總相別相の二智……………二四二四二七二八三

二乗の智は方便なく、大誓なく、大悲なく、佛法を求めず、一切智を求めず……………二六

二乗の智は菩薩の智に及ばず……………二八三五七九

小乘法の中に陀羅尼なき所以……………二六

小乗の三昧と大乘の三昧……………二六

小乗の功德なきは、小家に金錢なきが如し……………二六

菩薩の喜心は、二乗の布施持戒等に優る……………二八六〇

二乗と佛菩薩との慧眼の不同……………二九

聲聞と緣覺と菩薩の態度、鹿野象の譬……………三二五

聲聞には人空を説き、大乘には法空を説く……………三一

大空の義解に對する大小二乗教徒の差異……………三一

小乘にも眞如を説けども但少し、又了了ならず……………三六八

小乘の佛は草を敷き、大乘の佛は天衣を敷いて成道す……………四

大小兩乘の罪業觀(小乘は十不善道を罪業とし、大乘は身口意の所作を見て罪業と爲す)……………三九

大小兩乘に於ける禪定階級超越の差異……………一七九八一

二乗は大乘の説法を聞かず……………三三

大乘中には能く小乗の法を含む……………四九八四・二〇〇

菩薩は二乗の意を耻づ……………四九

小乘は初に無常を説き、大乘は初に法空を説く……………六九

二乗は佛に及ばず、一切の草木は火に如かず……………七四七九

二乗は習氣、即ち煩惱の餘習を斷せず……………八四

大小兩乘に於ける受苦得樂の期間の相異……………二六

乙 佛陀に關する所説

(イ) 佛陀の名義に就て

如來の十號の義解……………二一〇・二一四

佛を無等、又は世尊等と名く……………二

如來は或は如實説と言ひ、或は如實知と言ふ	二六五
佛陀の語義	二六五
佛を聖主と名く	二六六
佛及び菩薩の名義	二六八
佛如來は自然の人、一切智人なり	二七〇
佛を人天の師と名く	二七三
平等の法を得るが故に佛と名く	二九五
(ロ) 佛身・佛智・佛果・及び佛徳等に就て	
佛徳無量なるが故に名も亦無量なり	二二四
佛に二種の身あり——生身と法性身	二二四
五分法身	二八七
法身佛の見ることに難きは、如意珠の見ることに難きが如し	二八七
變化身と生身	二八七
佛は法を以て師と爲し給ふが故に恭敬供養す	二八七
眞身と生身	二八七
佛の法身を見るは眞の供養なり	二八七
佛は入定して雷電を聞かず	二八七
佛は戒定慧を具足す	二八七
佛聲は遠きも近きも増減なし <small>(得度すべき者は聞き、得度すべからざる者は聞かず)</small>	二八七
佛の三業は智慧に随つて行す	二八七

- 小乘の佛は人法に随つて食を用ひ、大乘の佛は實には食せず……………二六
- 佛に二種の道あり——福德道と智慧道……………二六・二九
- 佛のみ獨り一切智及び一切種智を得たまふ……………二七
- 衆生の中にて佛は第一なり(一切衆中、日を第一とし、一切人中、輪王を第一とするが如し。)……………二七・八四
- 佛は習氣を斷するが故に憂なく喜なし……………二八
- 佛は壽命光明……………五〇
- 佛の不思議の力は長をして短ならしむ……………五五・五六
- 如來は五蘊にあらず、五蘊を離れず……………四八
- 佛は五種の方便の故に法を説きたまふ……………五四
- 佛邊に於いては、諸天の光明現する能はず……………五五・五五
- 佛は機に随つて種種に般若波羅蜜を説きたまふ……………五七・五六
- 是の身を以て名けて佛となさず……………七〇・九三
- 佛は衆生の爲に五事を受け、香花等の供養を受けたまふ……………八四
- 化佛と眞佛と供養の福德……………八四
- 佛及び阿羅漢の睡眠の有無……………八九
- 佛は菩薩を離れず、菩薩は佛を離れず(三十二相等を以て佛と名けず、菩提を得るが故に佛と名く)……………九二
- 佛は晝夜六時に度すべき機を見たまふ……………九二
- 佛の音聲は厭足なし、禪定を妨げず……………九三
- 佛は五濁惡世に出るが故に三乘を説きたまふ……………九三
- 佛は從來する所なく、去るも亦至る所なし……………九九

諸佛の身は無量の因縁和合より生ず……………九九  
第一義の故に佛なしと説く……………九九

丙 涅槃に關する所説

涅槃と佛と般若は一相なり……………一八  
世間と涅槃とは一際なり……………一九  
涅槃に種種の名字あり——離、妙、出、解脫等……………三三  
涅槃は一切法中究竟無上の法なり……………三五  
有餘涅槃と無餘涅槃……………三三  
涅槃に三分あり……………七〇  
涅槃を甘露の性と名く……………九五

備考

龍樹の涅槃論を知らんと欲せば、中觀論中の觀涅槃品を熟讀せよ。

丁 禪定及び三昧に關する所説

阿難、電光定に入つて得道す……………二  
坐禪の人は閑靜を樂しむ……………三  
尙閑梨仙人の禪の滿……………四一七  
三三昧に就て……………五二〇  
坐禪の人は結跏趺坐を要す……………七  
念佛三昧に就て……………七  
菩薩の三昧と、佛の三昧……………一〇  
慧は必らず定に依つて生ず……………一五二八三三八一

無諍三昧と空三昧……………二二七四一

五蓋を除くを禪と名く……………二二七四二

散亂心は佛法を成ずる所以にあらず……………二二七四三

禪定を得んと欲せば、五欲を呵し、五蓋を棄て、五行を行せよ……………二二七四四

四禪の中に四等心五神通乃至百八三昧等あり……………二二七四五

練禪と頂禪と願智禪……………二二七四六

禪定は衆生の心内に在り……………二二七四七

覺と觀とは能く三昧を生じ、亦能く壞す……………二二七四八

三三昧を大乘は只一法とし、小乗は四諦に約す……………二二七四九

小乗の三昧と大乘の三昧……………二二七五〇

不受三昧に就て……………二二七五一

百八三昧に就て……………二二七五二

首楞嚴三昧の名義……………二二七五三

不動三昧に就て……………二二七五四

金剛三昧に就て……………二二七五五

定慧の履は五欲の刺を摧く……………二二七五六

禪定と精進との關係……………二二七五七

備考

本論に現はれたる禪定觀と今日の禪宗に於ける所謂禪なるもの、思想と比較せんば全くの従事にあらざるべけれど、餘り多くを望んで之に従事せば、恐らく失望に終るべし。

戊 菩薩に関する所説

菩提薩埵及び摩訶薩の意義……………四四四四五三

菩薩は五障を離る……………四

菩薩の四無所畏……………五二五

菩薩と轉輪聖王との七種の不同……………四

菩薩は晝夜六時に三事を行す……………七

菩薩の供佛、及び七住の菩薩……………一〇四八

菩薩は三事厭足なし……………一〇

菩薩の入定、並に法身の菩薩の説法……………一七

菩薩度生の方便を、巧工の薬力もて、銀を變じて金となすに譬ふ……………一八

菩薩は習を扶けて生を潤す……………二七

菩薩は二乗を畏る、菩薩は世間相を離れず……………二七

菩薩は四法を行じて菩薩位に入る……………二七八六

菩薩の隨喜回向、及び其の隨喜智持力……………二八二九

初心の菩薩を胎中の輪王の子、貴姓の小兒、賴伽鳥に譬ふ……………二八二九

菩薩は五通、佛は六通、菩薩と二乗との功德の勝劣……………二八

菩薩は慈悲の故に神通の相を修得す……………二六

三種の菩薩——羊に乗り、馬に乗り、神通に乗る……………二八三六

菩薩は佛に値はんと欲す……………二九四九七四

菩薩は佛身を現するも佛と同じからず……………二九三〇

菩薩は有漏なるも二乗の智に勝る。二乗に勝る理由……………三五五

菩薩に依つて得度す——石は重しと雖も船に依つて度す……………三五

菩薩は一切衆生の苦に代らんと欲す……………三六

菩薩は惡趣の衆生をして人身を得せしむ……………三六

菩薩は涅槃に入らず……………三六七

二種の菩薩業生身 拔苦 坐禪 得實相  
法性身 興樂 讀誦 未得實相……………三六九四・四三六〇・七一

菩薩は地獄に入り三事を以て之を救ふ……………三九八八

菩薩の二種の天眼……………三九六七

阿鞞跋致——不退轉……………三九八六

跋致の菩薩を上人と名く……………三七七・七三四

菩薩の生死に入るは、鵝の水に入りて、水に濡れざるが如し……………三八

菩薩は三處に來生す。三種の初發意の菩薩……………三八

菩薩は肉眼もて百由旬、或は大千界を見る……………三九

菩薩の法眼は淨相なり。菩薩は天眼慧眼法眼を求む……………三九四〇

菩薩は無益の事を説かず(病を破すれば土石も藥となり、破せざれば、好藥も名けて藥と爲さず。)……………三九

菩薩の智光は暗道に灯を燃すが如く、自を益し他を益す……………三九

菩薩は地獄の衆生を教化す……………三九八八

七地の菩薩に就て……………四〇

初發心の菩薩、企剛心の菩薩、菩薩の大決心不動心等……………四五

凡夫の善根と菩薩のそれとの差異——黒月と白月に譬ふ……………四一

菩薩の伏惑、——未だ賊を殺さずと雖も繋いで一處に閉づ……………四八

菩薩は地より地に至る。十地の菩薩は佛の如し……………四九五〇八五

菩薩の無縁の大慈……………五〇

菩薩は一切衆生に於いて、父母兄弟及び兒の如き想をなす……………五二五九

初心（子鳥の羽翼未だ成らざれば高く飛べざるが如し）の菩薩は無相を行ぜず……………六一

行般若の菩薩に就て……………六四

菩薩の怨賊に二種あり——生と非生——内と外……………六六

菩薩は世間を安穩ならしめんが爲に菩提心を發す……………七一

初學の菩薩、新學の菩薩……………七二

二種の菩薩（諸法空なれば般若も亦空なりと觀する）……………七一

菩薩の等心・慈心・下意安穩心・無礙心・無惱心・愛敬心……………七二

菩薩は方便力なければ退す（大鳥の翅なければ地に墮つるが如し）……………七二

六千の菩薩退して阿羅漢と作る……………七二

跋地の菩薩を上人と名づく……………七三

菩薩は國王等の世事を説かず……………七四

菩薩の般若を念ずるは淫欲の人の恒に女人を念ふが如し……………七四

菩薩の改悔滅罪……………七五

深般若を行する菩薩は惡道下賤の家に生ぜず……………七七九三

菩薩の不惜身命に就て……………七九

菩薩は悲空二法を成就す（日月和合して萬物成熟するに譬ふ）……………七九

菩薩の二種の破戒と持戒：……………八〇

菩薩は有無の二邊を離れ中道に處して衆生を度す……………八四

菩薩の三事具足——良醫、藥草、看病人……………八五

菩薩の衆生を度するは空中に樹を種うるが如し……………八五

初心の菩薩は常に一切智を念す……………八五

菩薩は施を行するに先づ悲田を施す(慈母の先づ病兒を念ふが如し)……………八七

菩薩の大悲——盲子毒を飲み父方便して之を止むる譬……………八九

菩薩は諸法如幻と知れども、衆生の爲の故に菩薩行を修す……………八九

菩薩は諸法を學び諸行を修す……………八九

菩薩は一切性空を知り、發心して菩薩を求む……………九〇

得忍の菩薩は一時に千萬億に變じて衆生を利益す……………九〇

菩薩は多く欲界の人の中に生ず……………九一

菩薩は布施の中に住して衆生をして六處を行せしむ……………九一

菩薩は佛國を淨む。菩薩は度生の爲に畜身を受く……………九二

初心(後心の菩薩は之を避けず)の菩薩は邊國及び邪見の家に生れず……………九三

菩薩の初心は眞金の泥中に在つて壞せざるが如し……………九三

菩薩の度生の巧妙機敏(白鶴の魚を取るに進止機會を失せざるが如し)……………九四

菩薩は神通波羅蜜多に住して能く衆生を度す……………九四

諸法無相なるが故に、菩薩は自を益し他を益す……………八七

菩薩は三事の故に五欲を受く……………九六

自ら益するは下人、自他兼ね益するは中人、他を益するは上人……………九五

衆生若し空を知らば、菩薩は發心修行せず……………九四

薩陀波崙菩薩般若を求む……………九六

薩陀波崙菩薩身を賣つて、法及び法師を供養せんと欲す……………九八

薩陀波崙菩薩は七歳行立して臥せず……………九九

初發心の菩薩は空を觀すれども佛身の空を觀する能はず……………九九

【本論と密教との關係】 龍樹は、『中論』及び『十二門論』に於いて、專ら永遠の否定、即ち空論を力

説せしが、『大智度論』及び『十住毘婆娑論』に於いては、更に一步を進めて、永遠の否定より永遠の肯

定を導き出せり。即ち『空論』の極、『有論』を説くに至りしなり。これ他方

教及び密教に於いて、龍樹を祖師の一人と仰ぐ所以なり。蓋し密教は表徳

的肯定的の方面の最も發達せる教義なるが、大智度論には已に此の方面を道破せるも決して少なか

らざるを以てなり。人或は龍樹が畢生の事業たりし遮情的否定的態度と、永遠の肯定とは、矛盾撞著

の甚だしきものと言はんも、決して矛盾にもあらず、撞着にもあざるなり。そは古來多くの思想家

の經過せし歷程によりて、明かに之を立證することを得べし。斯くて龍樹は本論に於いて、密教的思

想を披歷して言く、

(三五) 『佛身に二種あり、一には眞身、二には化身なり。衆生、佛の眞身を見ば、願として満たさざ

【五】 本論第三十三卷。

るなし、佛の眞身は虚空に満ち、光明遍く十方を照し、説法の音聲も亦遍く、十方無量河沙等の世界に満つ。——中略——是の如く法性身の佛には所説の法あり、十住の菩薩を除き、三乘の人は皆持すること能はず。唯十住の菩薩の、不可思議なる方便智力ありて、悉く能く之を聴受す云々。』

又言く、

『法身佛は、常に光明を放ち、常に説法したまふ。而も罪あるを以ての故に、これを見ず聞かざるなり。譬へば日出るも、盲者は見ず、雷霆地に振ふも、聾者は聞かざるが如し。是の如く法身は、常に光明を放ち、常に説法したまへども、衆生は無量劫の罪垢厚く重きものありて、これを見ず、また之を聞かざるなり。明鏡淨水に面を照せば則ち見、垢翳不淨なれば則ち見る所なきが如し。是の如く衆生の心清淨なれば則ち佛を見、若し心不淨なれば則ち佛を見ず。』

【三】 本論第三十四卷。

此の論の中に、是の如きの文を求めば、決して枚擧に遑あらざるほどなり。これ豈に法身を以て有形有色となし、常に説法して止みたまはずとする、密教思想の先驅にあらずや。讀者若し本論の中より、是の種の文を尋求するの必要を感せば、宜しく前に表出せる本論に於ける「佛陀に關する所説」中より、之を見出されんことを望む。

尙ほ本論中に密教思想の顯著なるものを求めば、陀羅尼の功德を主張せる文これなり。乃ち言く、  
〔三〕諸の陀羅尼の法は、皆字語を分別するより生ず。四十二字は、是れ一切の字の根本なり。字  
に因つて語あり、語に因つて名あり、名に因つて義あり。菩薩は若し字を聞けば、字に因り乃至  
能く其の義を了す云々。』

と。斯くて文典の法則の束縛を破りて、全く譯讀する能はざる陀羅尼なるもの佛教中に發生せしが、  
此の陀羅尼は密教の専有すべきものにして、他の大乘教徒は成るべく于與せざるを可とす。兎まれ角  
まれ、此の四十二字は文字陀羅尼なるが、一々の文字に甚深の義理を有すとするが故に、此の陀羅尼  
の因縁を知る者は、無量無邊の功德を享受すと主張し、更に進一步して、  
其の意義を了解し得ると得ざるとに關せず、此の陀羅尼を讀誦する者よ、  
無邊廣大の功德を得と力説す。龍樹は乃ち這般の消息を道破して言く、

〔三〕如し人、陀羅尼を聞持することを得ば、心曠恚すと雖も、亦失せず、常に人に隨つて行くこ  
と、影の形に隨ふが如し。』

と。由是觀之、人は精神狀態の如何なるにせよ、若し陀羅尼を讀誦せば、無量の功德を得らるゝ  
ものゝ如し。是の如き文字は、明かに本論と密教との間に、密接の關係あることを示すものと謂ふべし。  
四 本論と他力教との關係、佛教の諸宗中、他力教も亦永遠の肯定の上に建てるものゝ一なり。然

〔三〕 本論第二十九卷。

〔六〕 本論第二十八卷。

り而して龍樹と他力教との關係は、密教と龍樹とのそれにも増して、更に一層の濃厚を加へたるものと見ることを得。但し此の方面に就ては、斯道の權威者として、『易行品』の譯者たる、島地大等師が十分明かにせらるべきを信するが故に、吾人は唯此の論に於ける、他力教關係の文を摘出して筆を擱んと欲す。

【二九】と「問うて曰く、更に十方に諸の清淨世界あり、阿彌陀佛の安樂世界等の如し。何が故に但善華世界を以て喩と爲すや。答へて曰く、阿彌陀佛の世界は華積世界に如かず云々。』

又言く、

【三〇】復次に、菩薩は常に善く念佛三昧を修する因縁の故に、生るゝ所に常に諸の佛に値ふ。般舟三昧の中に説くが如し。菩薩はこの三昧に入りて、即ち阿彌陀佛の國に生るゝを見る。便ち其の佛に問ふ、何の業因縁の故に、彼の國に生ずることを得るやと佛即ち答へて曰はく、善男子よ、常に念佛三昧を修し、憶念して廢せざるを以ての故に、我が國に生ずることを得。』

又言く、

【三一】釋迦文佛に更に清淨の世界あり、阿彌陀佛の國の如し。阿彌陀佛に嚴淨不嚴淨の世界あり、

【二九】 本論第二十九卷。  
 【三〇】 本論第三十卷。

釋迦文佛の國の如し云々。

日本の淨土眞宗に於いて、龍樹菩薩を七祖の第一に擧ぐる決して偶然にあらざるなり。若し夫れ印  
度に在りて、他力教の提唱者の鼻祖たる者は、馬鳴菩薩なるか、將た龍樹菩薩なるかの問題に對し  
ては、大乘起信論の著者としての、馬鳴菩薩出世の年代を、十分明確にしたる後にあらざれば、輕卒  
に之を斷じ難し。

【本論の流傳】 此の論は、羅什、三藏長安に於いて、弘始四年夏より、  
七年十二月に至つて譯了せり。僧叡序には、十萬偈の梵本を削つて三分の  
一とし、一百卷となせる旨を記し、論の後記には、初品の釋三十四卷は全

譯にして、他は抄譯なりといへり。

抑も『大品般若』は、三世紀末より盛んに研究せられ、隨つて本論も譯出後大いに研究せられたり。  
慧遠は抄して二十卷となし、南北朝に及んで、慧影は之が疏を造れり。爾來、此の論が和漢兩朝の  
佛教徒間に、如何に普ねく研究せられしかは、その浩瀚老大なるにも拘はらず、數種の單行本として  
久しき以前、上梓せられ、公にせられあるを見て察すべきなり。

譯者 山上曹源 識

【目】 アシトロゾーシヤ  
Aśrahoṣṇ.  
【三】 續藏、第七十五套第三  
册、及び同第八十一套  
第三册に收む。



# 國譯大智度論

## 卷の第一

「智度の大道は、佛のみ善く來りたまひ、智度の大海は、佛のみ窮盡したまふ。智度の相の義は、佛のみ無礙なり。「我いま」智度の無等佛に稽首したてまつる。

有無の二見、滅して餘すこと無く、諸法實相は佛の所説なり、常住不壞にして煩惱を淨む。「我いま」佛の尊重したまふ所の法に稽首したてまつる。

聖衆の大海は福田を行じ、學無學の人を以て莊嚴す。後有の愛種、永く已に盡き、我所既に滅して根も亦除く。

已に世間の諸の事業を捨てて、種種の功德の所住の處となり、一切衆中、最も上と爲る。「我いま」眞淨の大徳僧に稽首したてまつる。

【一】大智度論とは、原名ハルプラアニヤパーラミターイストラ  
【二】善は、結縛には從に作る。  
【三】無等佛とは、與等なく比すべきなき佛の義なり。明本には無子佛とあれども、無等佛の方妥當ならん。  
【四】稽首とは頭を下げて敬意を表するの義。  
【五】諸法實相とは、現象即實在論の立場よりする立言にして、現象と本體とは互に圓融無礙なる旨を意味する術語を

一心に三寶を恭敬し已り、及び諸の救世の彌勒等、智慧第一の(三)舍利弗、無諍空行の(三)須菩提を(恭敬す)。我今力に如つて、大智の彼岸、實相の義を演説せんと欲す。願くは諸の大徳聖智の人、一心に善く順つて、我が説を聴きたまへ。

問うて曰く、佛は何の因縁を以ての故に、摩訶般若波羅蜜(多)經を説きたまひしや。〔それ〕諸佛の法は、無事及び小因縁を以て自ら發言せず。譬へば須彌山王の、無事及び小因縁を以て動かざるが如し。今何等の大因縁あるが故に、佛は摩訶般若波羅蜜(多)經を説きたまひしや。

答へて曰く、佛は三藏の中に於て、廣く種種の諸の喩を引いて、聲聞の爲めに説法したまへども、菩薩の道を説きたまはず。唯だ佛は中阿含本末經の中に、「彌勒菩薩よ、汝當來世に當に佛と作るを得て、號して彌勒と字くべし」と記し、亦た種種の菩薩の行を説きたまはざりき。佛は今彌勒等の爲めに、廣く諸の菩薩の行を説かんと欲す、是の故に摩訶般若波羅蜜(多)經を説きたまふ。復次に、菩薩の念佛三昧を修するものあり。佛は彼等の爲めに、此の三昧に於て、増益を得せしめんと欲するが故に、般若

り。其餘意は法華經に明す。

【六】 學無學とは、學ば學ばべきこと有りする者の義にて、未だ阿羅漢果を證せざる人を意味し、無學ば學ぶべきことなき者の義にて、阿羅漢果を證せしもの事をり。

【七】 後有の愛種とは、死後復た三界に生を受くべき愛、即ち煩惱の種子を云ふ。

【八】 我身とは、身外の事物に執著して我が所有と思ふ煩惱の義なり。

【九】 根とは、梵語 Indriya の譯語なる場合と、三昧の譯語なる場合とあり。今は後者の義に解し、不善の根本と云ふ意に解る。

【一〇】 世間の事業とは、種種の俗事俗務を云ふ。

【一一】 彌勒 Maitreya

【一二】 舍利弗 Sariputta

【一三】 須菩提 Musthi

【一四】 彌勒 Maitreya

波羅蜜〔多〕經を説きたまふ。「そは」般若波羅蜜〔多經の〕初品の中に説くが如し。佛は神通を現じて金色の光明を放ち、遍く恒河の沙〔の數〕に等しきが如き十方の世界を照し、大身を示現し、清淨の光明、種種の妙色、虚空の中に満てり。佛の衆中に在したまふや、端正殊妙なること、能く及ぶ者なく、譬へば須彌山王の、大海に處るが如し。諸の菩薩は、佛の神變を見たてまつりて、念佛三昧に於て倍復た増益す。是の事を以ての故に、摩訶般若波羅蜜〔多〕經を説きたまへり。

復次に、菩薩の初めて生れたまひし時、大光明を放ちて、普く十方に遍じ、行くこと七歩に至つて、四方を觀察し、師子吼を作して、偈を説いて言はく、

『我、二空しやうたい 生胎の分盡く、是れ最最後の身なり、我已に解脱を得、當に復衆生を度すべし。』と  
 是の誓を作し已つて、身漸く長大にして親屬を捨て、出家して道を修せんと欲す。中夜に起て、諸の伎直、妃后、姝女を觀見したまふに、狀臭屍の若し。即ち 車匿に命じて、白馬に鞍せしめ、夜半に城を踰え、行くこと十二 由旬にして、跛伽婆仙人所住の林中に到り、刀を以て髪を剃り、上妙の寶衣を持って、麤布の僧伽梨に質へ、尼連禪河の側に於て六年苦行し、日に一麻を食し、

【四】 第一問、佛、大般若波羅蜜多經を説く理由如何。

【五】 縮藏には觀察四方を四顧觀察に作る。

【六】 生胎の分とは、胎内に宿り生るゝ分際之義なり。

【七】 車匿 (Chariot) 「トジヤナ」

【八】 由旬とは、梵語 Yojana の音譯、約四哩の距離を云ふ。

【九】 跛伽婆仙 (Vilvavati) 僧伽梨 (Kasika) の合或は重と譯す。義淨は之を複衣と譯す。比丘三衣中最も大なるものなり。

【一〇】 尼連禪河 (Niranjana) 。

或は一米等を食す。而も自ら念言すらく、「是處は道に非ず」と。爾時に菩薩

は 三、苦行の處を捨て、菩提樹下に到り、 三、金剛處に坐したまへば、魔王

十八億萬の衆を將ゐ來つて、菩薩を壞らんす。菩薩は智慧功德の力を以

ての故に、魔衆を降し已て、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。是時

に三千大千世界の主、梵天王、名は 三、式棄、及び 三、色界の諸天等、 三、

提洹因、及び 三、欲界の諸天等、並に 三、四天王、皆佛所に詣りて世尊に初

めて法輪を轉じたまはんことを勸請す。亦是れ菩薩の念じて本より願ふ

所、及び大慈大悲の故に、請を受けて説法す。諸法の甚深なるは、般若波

羅蜜「多」是なり。是故に佛は摩訶般若波羅蜜「多」經を説きたまへり。

復次に、有人は、佛 三、一切智を得ずと疑ふ。所以は何となれば、諸法

は無量無數なり。云何ぞ一人にして能く一切の法を知らんと言ふ。而

も「佛は般若波羅蜜「多」の實相清淨に住したまへること虚空の如し。無量

無數の般若波羅蜜「多」の法中に、自ら誠言を發し、「我は是れ一切智人な

り、一切衆生の疑ひを斷せんと欲す」と宣へり。是の故に摩訶般若波羅

蜜「多」經を説きたまへり。

【一】 佛所苦行處の一善蹟として名高き面正堂田(「面正堂田」)

三二に於て、十二尊位の天然の洞窟あり、今尙存在す。此の洞窟こそ釋尊の車窟を凌ぎ給

じし所、我等佛徒をして轉た懐古の情に堪へせしむ。

【二】 金剛處とは、釋尊の成道地即ち佛陀伽耶に諸衆を給へる時、決心の堅きことを金剛石に喩えたるなり。

【三】 式棄(「Śikha」)は、色界(「Rūpābhīra」)は、三界の中の一界なり。色とは

質礙即ち物質の義、或は示現の義、色相場の界なるが故に色界と名く。

【四】 提洹因(「Tivhāna」)は、釋提洹因(「Tivhāna」)

【五】 欲界(「Kāma-dhātu」)は、三界の中の一界なり。飲食欲と性欲と貪欲との所屬の界なるが故に欲界と云ふ。

【六】 色界(「Rūpābhīra」)は、三界の中の一界なり。飲食欲と性欲と貪欲との所屬の界なるが故に欲界と云ふ。

復次に、衆生の得度すべき者あり。佛の大功德智慧は、無量にして知り難く、解し難きを以ての故に、悪師の爲に惑はされ、心邪法に没して、正道に入らず、是輩の人の爲に大慈心を起し、大悲の手を以て之を拔き、佛道に入らしむ。是故に自ら最妙の功德を現じ、大神力を出し給ふ。般若波羅蜜(多經)初品の中に説くが如し。佛は 三昧王三昧に入り、三昧より起ち、天眼を以て十方世界を觀たまふに、擧身の毛孔皆笑ひ、其の足下の千輻輪の相よりは、六百千萬億の種種なる色の光明を放ち、足の指より、上は肉髻に至り、處處に各六百千萬億の、種種なる色の光明を放ち、普く十方無量無數恒河の沙に等しきが如き、諸佛の世界を照して、皆大に明かならしむ。佛は一切諸法の實相を具示し、一切衆生の疑結を斷せんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜(多)經を説きたまへり。

復次に、悪邪の人あり。嫉妬の意を懷き、誹謗して言く、「佛の智慧は人を出でず、但だ幻術を以て世を惑はず」と。彼の貢高邪慢の意を斷するが故に、無量の神力、無量の智慧力を現じ、般若波羅蜜(多)の中に於て自ら説く、「我は神徳無量なり、三界の特尊として、一切に覆護せらる。若し一たび惡念を發さば、罪を獲ること無量なり。一たび淨信を發さば、人天の樂を受け、必ず涅槃の果を得ん」と。復次に、人をして法を信受せしめんと欲するが故に言く、「我は是れ大師なり。

【六】 四天王 (Cātummahārājikā) カイカーデーワ (Devatā) 【五】 一切智とは、Sarvajñaの譯語にて、佛陀の異稱、最上完全なる智人の義なり。 【一】 拔は、縮藏には授に作る。 【三】 三昧(Samādhi)は、等持と譯す、心を對境の上に專注するの義なり。

【三】十力 四無所畏ありて、聖主の住處に安立し、心自在を得、能く師子吼して、妙法輪を轉じ、一切世界に於て最尊最上なり」と。

復次に、佛世尊は、衆生をして歡喜せしめんと欲するが故に、是の般若波羅蜜多經を説いて宣はく、「汝等應に大喜を生ずべし。何となれば一切衆生は邪見の網に入り、異學惡師の爲めに惑はさるれども、我は一切の惡師邪網の中に於て、出づるを得たる十力の大師にして、値ひ見るべきこと難ければなり。汝今已に我に遇ひ、時に隨つて三十七品等の諸の深法藏を開發す、汝恣まゝに採取せよ」と。

復次に、一切衆生は、結・使の病の爲めに煩惱せられ、無始の生死より已來、人の能く此病を治する者無く、常に外道惡師の爲に誤らる。我いま出世して大醫王となり、諸の法藥を集む、汝等當に服すべし。是の故に佛は摩訶般若波羅蜜多經を説きたまへり。

復次に、人有り念言すらく、「佛は人と同じく亦生死あり。實に飢渴寒熱老病を受く」と。佛、彼の意を斷せんと欲するが故に、是の摩訶般若波羅蜜多經を説き、示して言はく、「我が身は不可思議なり。梵天王等諸大

【三】十力は如來の衆生を教化し給ふに必要な根本要件なり。

- (一) 如來は爲すべき事と爲す可らざる事、即ち是處と非處を如實に知り給ふ。
- (二) 如來は衆生の三世の業法に就て、其の現狀、原因、結果を如實に知り給ふ。
- (三) 如來は衆生の至る所の道程經過を如實に知り給ふ。
- (四) 如來は世間の衆生の種々なる境遇を如實に知り給ふ。
- (五) 如來は衆生の種々なる信解を如實に知り給ふ。
- (六) 如來は衆生の種々なる力量根據を如實に知り給ふ。
- (七) 如來は禪定・解脫・三昧・修養の淨穢種別を如實に知り給ふ。
- (八) 如來は前生を知り一生二生乃至無數生に亘りて、生死・苦樂等の一切の状態を如實に知り給ふ。
- (九) 如來は其の神通力によりて衆生の生死・美醜・善惡を如實に知り給ふ。
- (十) 如來は

の祖父、恒河の沙に等しき劫中に於て、我が身を思慮し、我が聲を尋究せんと欲すとも、濁度すること能はず、況んや我が智慧三昧をや」と。偈に説くが如し。

『諸法實相の中、諸の梵天王等の、一切の天地の主は、迷惑して了ずること能はず。』

此法は甚だ深妙なり、能く測量する者無く、佛出でたまひて悉く開解したまふに、其の明かなること日の照らすが如し。』

又佛初めて法輪を轉じたまふ時の如きは、三時に應じて菩薩他方より來り、佛身を量らんと欲するに、上は虚空無量の佛刹を過ぎて華上世界に至るも、佛身を見ること故の如くなりき。「乃ち」偈を説いて言く、

『虚空は邊あること無し、佛の功德も亦然なり。設ひ佛身を量らんと欲するも、唐に勞して盡すこと能はず。』

上は虚空界、無量の諸佛の土を過ぐるに、釋師子の身を見ること、故の如くにして異ならず。

佛身は金山の如く、大光明を演出し、相好自ら莊嚴せること、猶ほ春華の敷けるが如し。』

一切の煩惱・諸漏を滅盡し、心解脱し、現生にて已に十全の通達力を得たまふ。

【三】四無所畏とは、(一)一切智

無所畏 (S. *sra-ñhamabhiśam* ボーデーワイサイラドヤ)

bodhi-viśvānradya) (二)漏盡無所畏 (S. *trāsavaṅkasyāpānava* イサイラドヤ)

(三)愛障道無所畏 (A. *anārahitaṅga-ya-ñā* ヤトワ

*phayikādharmānāy-thava* ナムクワワーニヤ)

(四)盡盡苦道無所畏 (S. *trāsavaṅkasyāpānava* イサイラドヤ)

(五)時他本には捺に作る。

【三】結使。結も使も共に煩惱の異名。身心を繫縛し、苦果を結成するが故に結と云ひ、衆生に隨逐し、又は衆生を驅使するが故に使と云ふ。

【三】時他本には捺に作る。

佛身の無量なるが如く、光明音響も亦無量なり、戒定慧等の諸佛の功德も皆悉く無量なり。密迹經の中の三密の如し。此中に應に廣く説くべし。

復次に、佛の初めて生れたまひし時、地に墮ちて行くこと七歩、口自ら言を發し、言ひ竟りて便ち黙すること、諸の嬰孩の如くなりき。〔乃至〕行かず、語らず、乳哺すること三年、諸母養育し、漸

次に長大したまへり。然るに佛身は無數にして、諸の世間に過ぎたり。衆

生の爲の故に現すること、凡人の如し。凡人に生ずる時、身分、諸根及

び其意識、未だ成就せざる故に、身の四威儀、坐臥行住、言談語默、種種

の人の法、皆悉く未だ了せず。日月歳過ぎ、漸漸に習學して、能く人の法

を具ふ。いま佛は、云何が生れて便能く語り、能く行き、後更に能くせ

ざるや、**〔三七〕**此の事怪むべし。當に知るべし、但方便力を以ての故に、人の

法を現行すると、人の威儀の如くにして、諸の衆生をして深法を信せしむ。若し菩薩生れて便能く

行語せば、世人は當に是の念を作すべし、「いま此の人を見るに、世に未曾有なり。必ず是れ天龍鬼

人ならん。其の所學の法も、必ず我等が及ぶ所に非ず。何となれば我等生死の肉身は、結使の業の

爲に牽かれて、自在なることを得ざればなり。此の如きの深法は誰か能く之に及ばん」と。此を以て

自ら絶て賢聖の法器と成ることを得ず。是の人の爲の故に **〔三六〕**嵐毗尼園の中に於て生れ、即ち能く

【三六】 諸根とは、眼耳鼻舌身意等の根を云ふ。

【三七】 縮減には「以此致怪、恒爲此故以方便力」に作る。

【三八】 嵐毗尼園 Arambhinīya 現今ニゴール王國領内のルムミンデーと稱す。地即ちこれなり。

菩提樹下に至つて成佛す。雖も、方便力を以ての故に、孩童幼〔五〕稚少年〔六〕成人を現作し、諸時の中に於て、次第に嬉戲、術藝、服御、〔七〕五欲を受  
 け、人の法を具足し、後漸く老病死苦を見て厭患の心を生じ、夜中の半に  
 於て、城を踰えて出家し、〔八〕鬱特伽と阿羅羅仙人の所に到りて、現に弟子  
 と作り、而も其法を行せず、常に神通を用ひ、自ら宿命を念するに、〔九〕  
 迦葉佛の時、戒を持し道を行すと雖も、而も今現に苦行を修し、六年〔一〇〕の  
 間道を求む。菩薩は、三千大千世界に主たりと雖も、而も現じて魔軍を  
 破り、無上道を成じ、世法に隨順するが故に、是の衆の變を現じたまふ。  
 今般若波羅蜜〔多〕の中に於て、大神通智慧力を現するが故に、諸人當に知  
 るべし、「佛身は無數にして諸の世間に過ぎたり」と云ふことを。  
〔四〕復次に、人有り、應に度すべきもの、或は〔五〕二邊に墮し、或は無智  
 なるを以ての故に、但だ身の樂、或は〔六〕有爲の道を求む。故に苦行に修  
 著す。是の如きの人等は、第一義の中に於て、涅槃の正道を失せり。佛は  
 此の二邊を抜き、中道に入らしめんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜〔多〕  
 經を説きたまへり。

【元】 縮藏には稚を小に、少年を年少に作る。

【二】 五欲とは、財・色・食・名・睡の五に對する欲望を云ふ。

【三】 鬱特伽、阿羅羅、Uttara、Arāṇāka (Uttara)

【四】 迦葉佛、Kāśyapa Buddha

【五】 三千大千世界とは、小千世界、中千世界、大千世界の總稱なり。欲界即ち日月・須彌山・四大洲・四天王・初利天・夜摩天・都史陀天・樂變化天・他化自在天と、色界の初禪天即ち梵衆天・梵輔天・大梵天とを一世界と名づけ、一世界の千倍を小千界といひ、小千世界に據べて色界の二禪天に覆はる。千の小千世界を中千世界と名づけ、此中に百萬の日月、百萬の須彌山、百萬の四天下、百萬の六欲天、百萬の初禪天、千の禪天あり、總べ

復次に、生身、法身、供養の果報を分別するが故に、摩訶般若波羅蜜  
〔多〕經を説きたまへり。舍利塔品の中に説くが如し。

復次に、阿鞞跋致と、阿鞞跋致の相とを説かんと欲するが故に。復次に、  
に、魔幻と、魔僞と、魔事とを説かんと欲するが故に。復次に、當來世

の人、般若波羅蜜〔多〕を供養する因縁の爲の故に、又三乗の記別を授けん  
と欲するが故に、是の般若波羅蜜〔多〕經を説きたまへり。佛 阿難に告

げたまはく、「我が 般涅槃の後、〔五〕此の般若波羅蜜〔多〕は當に南方に至  
り、南方より西方に至るべく、後の五百歳には、當に北方に至るべし。是

の中に多く法を信する善男子、善女人あり。種種の華香、瓔珞、幢幡、伎  
樂、燈明、珍寶、財物を以て供養し、若くは自らも書き、若くは人をして

書かしめ、若くは讀誦、聽説、正憶念して修行し、法を以て供養せん。是  
の人は是の因縁を以ての故に、種種世間の樂を受け、最後の世の時には、

三乗を得て、無餘涅槃に入らん」と。是の如き等の諸品の中、因縁の事を  
觀するが故に、般若波羅蜜〔多〕經を説きたまへり。

復次に、佛は第一義 悉檀の相を説かんと欲するが故に、是の般若波

て色界の三禪天に覆はる。千  
の中千世界を大千世界とい  
ひ、此中に百億の日月、百億  
の須彌山、百億の四天下、百  
億の六欲天、百億の初禪天、  
千萬の二禪天、一千の三禪天  
を含む。但し今は千萬を一億  
として算ふ。一の大千世界は  
色界の四禪天に覆はる。此の  
小千世界と、大千世界とを合  
して三千世界、又は三千大千  
世界といふ。

【四三】 佛は斷見常見の二の邊見  
を抜かんがために般若を説き  
給ふ。

【四四】 二邊とは、有、無又は斷、  
常の二見をいふ。要するに一  
方の極端に走るを二邊に隨す  
といふ。

【四五】 有爲とは、無爲に對する  
語なり。而して爲とは、造作  
の義。造作を有するもの、即  
ち因縁によつて生ぜられ、覺

羅蜜(多)經を説きたまふ。三種の悉檀あり、一には世界悉檀、二には各各爲人悉檀、三には對治悉檀、四には第一義悉檀なり。四悉檀の中に、總べて一切の十二部經、八萬四千の法藏を攝す。皆是れ實にして相違背すること無く、佛法の中に實有なり。世界悉檀を以ての故に實有なり、各各爲人悉檀を以ての故に實有なり、對治悉檀を以ての故に實有なり、第一義悉檀を以ての故に實有なり。云何が 吾 世界悉檀と名くる。有法は、因縁和合によるが故に有にして、別の性無し。譬へば車の輻軸網等の如し。和合の故にありて、別に車なし。人も亦是の如く、(吾 五衆和合の故に有り、別に人「ある」無し。

問うて曰く、吾佛説きたまはく、「我清淨の天眼を以て諸の衆生の此に死し彼に生ずるを見るに、善惡の業に隨つて果報を受く。善業の者は天人の中に生じ、惡業の者は三惡道に墮す」と。復次に、經に言く、「一人出世すれば、多人慶を蒙る。福樂饒益せるは佛世尊なり」と。法句の中に説きたまはく、「神自ら能く神を救ふ。他人安ぞ能く神を救はん。自ら善を行する智は是最も能く自らを救ふ」と。瓶沙王迎經の中に、佛、説きたまは

作せられたるものを有爲法と云ふ。是故に精神にまれ、物質にまれ、一切の現象は皆悉く有爲法なりと心得べし。

【三七】 阿耨跋致(Avatarīkī)又は Avinītanīya)は、不退、不退轉、不退位等と譯す。

【三八】 佛は、聲聞乘と緣覺乘と菩薩乘に肥殖を授けんが爲に般若を説き給ふ。

【三九】 阿難(Ānanda)。佛陀の十大弟子中、多聞第一と稱せらる。佛に常隨せる弟子。

【四〇】 般涅槃(Anirvanā)には、種々の譯あれども此所には遷化の義に用ひらる。

【四一】 佛の滅後、此の般若は南方より西方に至り、後の五百歳には當に北方に至らんとの豫言。

【四二】 悉檀(Siddhānta)とは、定理または論據の義なり。

【四三】 四種の悉檀の特性。

く、「凡人は法を聞かず、凡人は我に著す」と。又、佛二夜經の中に説きたまはく、「佛、得道の夜より、般涅槃の夜に至るまで、是の兩夜の中間に説く所の經教は、一切皆實にして、顛倒にあらず」と。若し實に人無くんば、佛は云何ぞ人等と説きたまふや。答へて曰く、人等は、世界の故に有り、第一義の故に無し。如如、法性、實際は世界の故に無く、第一義の故にあり。人等も亦是の如く、第一義の故に無く、世界の故にあり。何となれば五衆の因縁有るが故に、人有るを以てなり。譬へば乳の如し、色香味觸の因縁あるが故に有り。若し乳實に無くんば、乳の因縁も亦た應に無かるべし。いま乳の因縁は實に有るが故に、乳も亦た應に有るべし。一八

の第二頭、第三手の如きは、因縁無くして假名あるに非ず。是の如き等の相を名けて、世界悉檀の相と爲す。云何が各各爲人悉檀と名くるや。人の心行を觀じて、爲めに法を説くに、一事の中に於て、或は聽き、或は聽かず。經の中に説く所の如き、雜報業の故に、雜して世間を生じ、雜觸を得、雜受を得。更に破群邪經の中に説くこと有り、「人觸を得ること無く、人受を得ること無し」と。

問うて曰く、(五六) 此の二經は云何が通せん。答へて曰く、人有り、後世を疑ひ罪福を信せず、不善の行を作し、斷滅の見到墮するを以て、彼の疑ひを斷じ、彼が惡行を捨てしめんと欲し、彼が斷見を拔

【五】 世界悉檀の義解。  
 【五】 五衆とは、五種の舊譯にて、意義は全く同じ。  
 【五】 第二問、佛の經に種種矛盾の説ある理由如何。  
 【五】 世界の故に有りとは、般若哲學の骨體たる眞空俗有論の立場よりする俗有と云ふことなり。即ち眞諦門の上よりせば空なるも、俗諦門の上よりせば有なりと云ふ意なり。  
 【五】 第三問、二經の矛盾は如何に調和すべきか。

かんじ欲するが故、世間に雜生して、雜觸を得、雜受を得と説く。是れ群邪の我有り、神ありと計し、計常の中に墮する事を破するなり。群邪、佛に問うて言く、「大徳、誰か受く」と。若し佛、某甲、某甲受くと説きたまはば、便ち計常の中に墮し、其の人は、我見、倍復た牢固にして、移轉すべからず。是を以て受者觸者ありと説かず。是の如き等の相を名けて、各各爲人悉檀と爲す。六〇二云何が對治悉檀と名くや。法あり對治する時は則ち有り、實性は則ち無し。醫へば重熱の膩酢鹹の藥草、飲食等の如きは、風病の中に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に於ては藥となぜに非ず。輕冷甘苦澁の藥草飲食等の若きは、熱病に於ては名けて藥となぜども、餘病に於ては藥に非ず。輕辛苦澁熱の藥草飲食等の若きは、冷病中に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に非ず。佛法中の心病を治するも亦是の如く、不淨觀の思惟は、貪欲病の中に於ては、名けて善對治の法と爲せども、瞋恚病の中に於ては、名けて善と爲さず、對治の法に非ず。何となれば身の過失を觀るを不淨觀と名く、若し瞋恚の人過失を觀れば、則ち瞋恚の火を増益するを以てなり。慈心を思惟するは、瞋恚病の中に於ては名けて善對治の法と爲せども、貪欲病の中に於ては名けて善と爲さず、對治の法に非ず。何となれば慈心は衆生の中に於て好事を求め功徳を觀ず、若し貪欲の人、好事を求め功徳を觀せば、則ち貪欲を増益するを以てなり。因縁の法は、愚癡病

【六九】 計常とは、印度の外道哲學者を大別して、斷見家、常見家のことなり。即ち永久不變の我あり神ありと立論するものを云ふ。  
 【七〇】 對治悉檀の義解。

の中に於て、名けて善對治の法と爲せども、貪欲瞋恚病の中に於ては、名けて善と爲さず、對治の法に非ず。何となれば先づ邪觀の故に邪見を生ず、邪見は即ち是れ愚癡なるを以てなり。

問うて曰く、(三) 佛法中に説ける十二因縁は甚深なり。説くが如くんば、佛、阿難に告げたまはく、是

因縁の法は、甚深にして見難く、解し難く、覺り難く、觀じ難し。細心巧慧の人のみ乃ち能く解す。愚癡の人は、淺近の法に於てすら猶尙解し難し、何に況んや、甚深の因縁をやしと。いま云何ぞ愚癡の人は因縁を觀すべしと言ふや。答へて曰く、愚癡の人とは、牛羊等の如き愚癡を謂ふに非ず。是の人は實道を求めんと欲すれども、邪心觀の故に、種種の邪見を生ず。是の如き愚癡の人は、當に因縁を觀すべし。是を名けて善對治の法と爲す。

若し瞋恚貪欲を行ずる人は、樂を求めんと欲し、他を惱まさんと欲す。

此の人の中に於いては善に非ず、對治の法に非ず。不淨慈心の思惟は、是の二人の中には、是れ善なり、是れ對治の法なり。何となれば是の二觀は、能く瞋恚貪欲の毒刺を抜くが故なり。

復次に、常に著する顛倒の衆生は、諸法の相似相續の有を知らず、是の如きの人は、無常を觀す。是れ對治悉檀の法にして、第一義に非ず。何となれば一切諸法は、自性空なるを以てなり。偈を説いて言へるが如し。

『無常を有常と見る、是を名けて顛倒と爲す。空の中には無常を無す、何の處にか有常を見ん。』

【六】 第四問、十二因縁の理は深甚なり、然るを愚癡の人に因縁觀を勧むる理由如何。

問うて曰く、一切有爲の法は、皆無常の相なり、應に是れ第一義なるべし。何となれば一切有爲の法は、生住滅の「三」相にして、前は生、次は住、後は滅なるが故なり。云何を無常は實に非ずと言ふや。答へて曰く、有爲の法は三相あるべからず。何となれば三相は不實なるを以てなり。若し諸法の生住滅、是れ有爲の相ならば、今の生の中にも、亦た三相あるべし、生は是れ有爲法なるを以てなり。是の如く一一の處に亦た應に三相あらば、是れ則ち無窮となるべし。住滅も亦た是の如し。若し諸の生住滅、各更に生住滅無くんば、有爲法と名づくべからず。何となれば有爲法の相は無なるを以てなり。是を以ての故に諸法の無常は第一義悉權に非ず。

復た次に、若し一切の實性無常ならば、則ち行業の報無けん。何となれば無常を生滅と名づくるの失あるを以てなり。譬へば腐れたる種子の果を生ぜざるが如し。是の如きは則ち行業無し、行業無ければ、云何を果報あらん。今一切賢聖の法は、果報あり、善智の人の信受すべき所は無と云ふべからず。是を以ての故に諸法は無常の性に非ず。是の如き等の無量の因縁あり、説いて諸法無常の性と言ふを得ず。一切有爲の法は無常なり、苦・無我等も亦是の如し。是の如き等の相を名けて、對治悉權と爲す。云何が第一義悉權と名くるや。一切の法性、一切の論議語言、一切の是法非法、一一分別破散すべし。諸

【六二】 第五問、無常を第一義に

あらすといふ理由如何。

【六三】 佛教にては、一切の有爲

法は、苦・空・無常・無我なりと主張す。今や已に有爲法の空なる旨と、無常なる旨を説く、

故に苦・無我等亦是の如しと言ふなり。

【六四】 第一義悉權の義解。

佛、辟支佛、阿羅漢の行する所の眞實の法は破すべからず散すべからず。上の三悉檀は不通にして、此は則ち通なり。

問うて曰く、云何んが通なる。答へて曰く、所謂通とは、一切の過失を離れ、變易すべからず、

勝つべからず。何となれば第一義悉檀を除いては、諸餘の論議、諸餘の悉檀は皆破すべきを以てなり。

衆義經の中に説く所の偈の如し。

『各各自らの見に依つて、戲論して評競を起す。若し能く彼の非を知らば、是れ正見を知ると爲す。』

〔三〕がほふ ころじゆ ぐふが故に、是を愚癡の人と名く。是の論議を爲す者は、眞に是れ愚癡の人なり。

若し 自見の法に依らば諸の戲論を生ず。若し是をしも淨智と爲さば、淨智に非ざる者なし。』

此の三偈の中に於て、佛は第一義悉檀の相を説きたまふ。所謂世間の衆生は、自らの見に依り、自らの法に依り、自らの論議に依りて評競を生ず。戲論は即ち評競の本なり。戲論は諸見に依りて生ず。偈を説いて言ふが如し。

『受法あるが故に諸論あり、若し受あること無くんば、何の論する所かあらん。是の人は有受無

〔六五〕 第六問、第一義悉檀を「通」と稱する理由如何。

〔六六〕 別本には「不受他法。是則無智人。諸有戲論者。悉皆是無智」とあり。

〔六七〕 縮藏には「若依自是見」とあり。

〔六八〕 縮藏には「若是淨智」とあり。

受の諸見等、此に於て悉く已に除けり。」

行者能く實の如く此を知る者は、一切の法、一切の戲論に於て、不受不著不見なり。是れ實に誣訛に共せざれば、能く佛法の甘露味を知らん。若し爾らずんば、則ち謗法なり。

若し他法を受けずんば、知らず取らずして、是れ無智の人なり。則ち是の如き諸有の戲論は皆是れ無智なり。何となれば各各に法を相受けざるを以てなり。所謂有る人は自ら謂はん、「法は第一に實にして淨なり、

餘人の法は妄語不淨なり」と。譬へば世間の治法の如きは、刑罰殺戮種種不淨なれども、世間の人は信受して之を行じ、以て眞淨と爲し、餘の出家善聖人の中に於ては、是れ最も不淨と爲す。外道の出家人の法に、五熱中

に一脚を以て立ち、髮を抜く等を、吉尼鞭子の輩は以て妙慧となし、餘人は此を説いて癡法となす。是の如き等の種種の外道の出家、白衣の婆羅門の法は、各各自ら以て好と爲し、餘は皆妄語とす。是の佛法中にも亦或る

積子比丘は、四大和合して、眼法あるが如く、是の如く五衆和合して人法ありと説く。積子、阿毗曇の中に説く、「五衆は人を離れず、人は五衆を離れず、五衆は是れ人なり、五衆を離れて是れ人なりと説くべからず」と。人とは是れ第五

【六九】 編輯には、實を義に作り。

【七〇】 尼鞭子 (Nirgantika) は、所謂裸形外道のことなり。

【七一】 白衣とは、印度に於ては俗人の代名詞として用ゐらる。即ち出家者の黄衣を著るに對し、俗人は白衣を著るが故に此の名あり。

【七二】 積子 (Vajjiputtika) は、小乘教二十部中の一派にて、上座部に屬す。

【七三】 眼法とは、呼んで眼といふものゝ義。

【七四】 阿毗曇 (Abhidharma) は、舊法と譯す。佛敎聖典三藏中の論藏の原名なり。

の不可說法藏中に攝する所の説なり。一切有道の人の輩の言く、(五)「神人は、一切種、一切時、一切法門の中に求むるに得べからず。(七)譬へば兎角龜毛の常に無なるが如し」と。

復次に、(七)十八界、(七)十二入、五衆は實に自

性あり。而も人は此の中に攝せず。更に佛法中

の(七)方廣道人の言へるあり、「一切法は、不

生不滅、空にして所有無し。譬へば兎角龜毛の

常に無なるが如し」と。是の如き等の一切の論

議師輩は、自ら其法を守り、餘法を受けず、此

は是れ實なり、餘は妄語なり。若し自ら其法を

受くれば、自ら法を供養し、自ら法を修行し

て、他法を受けず、供養せず、爲めに過失を作

す。若し是を以て清淨と爲し、第一義の利を得

ば、則ち一切は清淨に非ざるなし。何となれば彼は一切自受の法なるを以てなり。

問うて曰く、(八)若し諸見皆過失あらば、是の第一義悉檀は何が是なるや。答へて曰く、(八)一切語言の

道斷え、心行の處滅し、遍なく所依無く、諸法を示さず、諸法實相にして、初なく中なく後なく盡き

【七】 神人とは、神といふ義にあらず、人間の靈魂といふほどの意なり。

【六】 兎角も龜毛も、共に本來その實體なく、只名目のみあり、人間の靈魂即ち神人も亦是の如く、本來在るにあらず、只名目あるのみなり。

【七】 十八界とは、六根と六境と六識となり。界とは種族の義。蓋し各自類法の出生する根本なるが故に此の名あり。

【六】 十二入とは、六根と六境となり。新譯には十二處と譯す。蓋し心玉も心所も、之を所依とし所緣として出生する處なるが故に斯く名けたるなり。換言せば六根は六識の所依にして、六境は六識の所緣なり。

【五】 大乘中附佛法の外道也。【八】 第七問、諸見もし過失あらば、第一義悉檀は如何にして可能なるか。

【八】 言語道斷心行處滅とは、第一義諦、即ち大悟界の風光は口もて言ひ表す能ず、心もて考へ盡す能はざるをいふ。

す壞れざる、是を第一義悉檀と名く。摩訶衍の義は偈の中に説くが如し。

『語言盡く竟り、心行亦訖む、不生不滅にして、法は涅槃の如し。』

諸の行處を説くを、世界法と名け、不行處を説くを、第一義と名く。

一切は實、一切は非實、及び一切は實にして亦非實、一切は非實にして非不實なり、是を諸

法實相と名く。』

是の如き等は處處に經の中に説く、「第一義悉檀は是の義甚深にして、

見難く解し難し」と。佛は是の義を説かんと欲するが故に、摩訶般若波羅

蜜〔多〕經を説きたまふ。

復次に、長爪梵志等の大論議師をして、佛法の中に於て、信を生ぜし

めんと欲するが故に、是の摩訶般若波羅蜜經を説きたまふ。梵志あり、號

して長爪と名く。更に先尼婆蹉衛多羅と名づくる有り。更に薩遮加摩健提

等と名づくるあり。是れ閻浮提の大論議師の輩なり。言はく、「一切の

論は破すべく、一切の語は壞すべし、一切の執は轉すべきが故に、實法の信す可く、恭敬すべきもの

有ると無し」と。舍利弗本末經中に説くが如し。舍利弗の舅、摩訶俱絺羅は、姊の舍利と論議して

如かず。俱絺羅思惟し念言すらく、「姊の方にあらず、必ず智人を懷まん。言を母の口に寄せて、未

【八一】一切法は實、非實等の四句を明す。

【八二】長爪梵志 (Dīghanaka) プラマチャヤリン、歸佛の因縁。

【八三】閻浮提 (Jambudvīpa) とは、印度の別名なり。

【八四】舍利弗 (Śāriputra) は、佛の十大弟子中、智慧第一と稱せらる。

【八五】摩訶俱絺羅 (Mahākāśyapa) 以下

だ生ぜざるに乃ち爾なり。生じて長大に及ばば、當に之を如何せん」と。思惟是に已つて、憍慢の心を生じ、廣く論議せんが爲めの故に、出家して梵志と作り、南天竺國に入り、始めて經書を讀む。諸人問うて言く、「汝、何の求めんことを志し、何の經をか學習する」と。長爪答へて言はく、

十八種の大經とは、印度に於ける一切學術の分類を云ふ。其の名稱は左の如し。

【一】 陀吠四

- リグ・ヴェーダ …… 讚頌
- ヤジュル・ヴェーダ …… 祭祀
- サウタ・ヴェーダ …… 歌咏
- アタル・ヴェーダ …… 穢災
- アタル・ヴェーダ …… 穢災
- シクシャ …… 音韻
- キシャ・カカラ …… 語法
- Valaksana …… 語法
- Kala …… 祭式
- ゴウ・アシーヤ …… 天文
- Chandas …… 詩法
- Nilkuta …… 語源

【二】 分陀吠六

【三】 論

- Purana …… 神話
- Mīmāṃsā …… 哲學
- 論理
- 法律

【四】 陀吠小四

- アエユル・ヴェーダ …… 醫藥
- カイン・ヴェーダ …… 音樂
- Chhillava-veda …… 音樂
- Dhanur-veda …… 弓杖
- スタールトヤ・ヴェーダ …… 建築
- Shalpatya-veda …… 建築

【五】 摩伽陀國 (Magadha)

- 王舎城 (Rajagriha)
- 那羅 (Nala)

【六】 摩伽陀國の、王舎城の、那羅聚落に

て、他を破し論議すると、譬へば大力の狂象の搪突蹴踘して、能く制する者無きが如し。是の如く長爪梵志は論議の力を以て、諸論師を摧伏し已つて、還つて

至り、本生の處に至つて、人に問うて曰く、「我が姉の生める子は、今何の處に在るや」と。有人語つて言く、「汝が姉の子は、適て生るると八歳にして、一切の經書を讀み盡し、年十六、論議一切の人に勝るに至り。釋種の道人にして、姓は瞿曇なるものあり。與めに弟子と稱る」と。長爪之を聞き、即ち慚慢を起し、不信の心を生じて、是の言を作さく、「我が姉の子の如きは、聰明なると是の如し。彼何の術を以てか誘誑し、頭を剃つて弟子と作す」と。是の語を説き已つて直に佛所に向ふ。爾時に舍利弗初めて受戒して半月なりしが、佛邊に侍立して、扇を以て佛を扇げり。長爪梵志、佛に見え、問訊し訖つて、一面に坐し、是念を作さく、「一切の論は破すべく、一切の語は壞すべく、一切の執は轉すべし。是中に何者が是れ諸法實相、何者が是れ第一義、何者か性、何者が相にして顛倒せざる」と。是の如く思惟するると、譬へば大海の水の、其の崖底を盡くさんと欲するが如し。之を求むると既に久しけれども、一法の實に以て心に入るべき者を得ず。「彼何なる論議の道を以てか、而も我が姉の子を得たる」と。是の思惟を作し已つて、而して佛に語つて言く、「瞿曇よ、我は一切の法を受けず」と。佛、長爪に問ふ、「汝一切法を受けず、是の見をば受くるや不や。佛に質す所の義は、汝已に邪見の毒を飲む。今是の毒氣を出して、一切法は受けずと言ふ。是の見毒を汝受くるや不や」と。爾時に長爪梵志は、好馬の鞭影を見て即ち覺り、便ち正道に著くが如く、長爪梵志も亦是の如く、佛語の鞭影心に入るを得て、即ち貢高を棄捐

【九】 瞿曇 (Gautama) 又は (Gotama)

し、慚愧低頭して、是の如く思惟す。「佛、我を置いて二處負門の中に著く、若し我是の見を我受くと説かば、是の負處門は難なるが故に多くの入知らん、云何ぞ自ら一切法は受けずと言はん。今是の見を受くと言ふ、是れ現前の妄語なり。是の處負處門は多くの人の知る所なり。第二の負處門は細なり、我之を受けず、そは多くの入知らざればなり」と。是の念を作し已つて、佛に答へて言さく、「嬰曇よ、「我」一切法を受けず、是の見も亦受けず」と。佛、梵志に語げたまはく、「汝一切の法を受けず、是の見も亦受けずんば、則ち受くる所なく、衆人と異ると無し。何ぞ貢高を用ゐて、憍慢を生ずると是の如くなる」と。長爪梵志答ふるとを得ると能はず、自ら負處に墮すと知つて、即ち佛の一切智の中に於て、恭敬を起し、信心を生じ、自ら思惟すらく、我負處に墮す。世尊は我が負を彰さず、是非を言はず、以て意と爲したまはず。佛は心柔軟なり、是れ第一清淨の處、一切語論の處滅して、大甚深の法を得。是れ恭敬すべき處、心淨第一なること佛に過ぐる者なし。佛は法を説き、其の邪見を斷するが故に、即ち坐處に於て、塵垢を遠離することを得、諸法の中に於て法眼淨を得。是の時舍利弗は、是の語を聞いて、阿羅漢を得、是に長爪梵志は便ち出家して沙門を作り、大力の阿羅漢を得たり。若し長爪梵志、般若波羅蜜多の氣分を聞いて四句を離れずんば、第一義相應の法の小信すら尙得ず、何に況んや出家して 道果を得んや。佛は是の如き等の大論議師利根の人を導引せんと欲するが故に、

【九三】 道果とは、聖道の結果といふ意にして、阿羅漢果のことなり。

是の般若波羅蜜「多」經を説きたまへり。

復次に、諸佛に二種の説法あり。一には人心に随つて度す可きを觀、二には諸法の相を觀る。今、佛は諸法實相を説かんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜「多」經を説きたまふ。相不相相の中に説くが如し。諸天子、佛に問ふ、「是の般若波羅蜜「多」は甚深なり、云何の相を作すや」と。佛、諸天子に告げたまはく、「空則ち是れ相なり。無相無作の相、無生滅の相、無行の相、常不生如性の相、寂滅の相等なり」と。

復次に、二種の説法あり。一には諍處、二には不諍處なり。諍處は、餘經の中に已に説くが如し。今無諍處を説かんと欲するが故に、般若波羅蜜「多」經を説きたまふ。有相、無相、有物、無物、有依、無依、有對、無對、有上、無上、世界、非世界、是の如き等の二種の法門も亦是の如し。

問うて曰く、佛は大慈悲心なり、但應に無諍の法のみを説くべし、何を以てか諍法を説きたまふや。答へて曰く、無諍の法は皆は無相、常に寂滅にして説くべからず。今(西)布施等及び無常・苦・空等の諸法を説いて、皆寂滅無戲論、爲すが故に、利根のものは佛意を知つて諍を起さず。鈍根の者は、佛意を知らず、相を取り、心に著し、諍を起すが故に諍と名く。此の般若波羅蜜「多」は、諸法畢竟空なるが故に諍處無し。若し畢竟空にして、得べく諍ふべくんば、畢竟空と名けず。畢竟空は有無の二

【九五】 第八問、佛の諍法を説きたまふ理由如何、  
【九四】 布施等とは、六波羅蜜の第一を擧げて、他の五波羅蜜を略したるなり。

事皆滅す、是の故に般若波羅蜜「多」を無誦處と名く。

復次に、餘經の中には多く三種の門を以て諸法を説けり。所謂、善門、不善門、(畜)無記門なり。今、非善門、非不善門、非無記門の諸の法相を説かんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜「多」經を説きたまふ。學法、無學法、非學、非無學法、見諦斷法、思惟斷法、無斷法、可けん有對、不可けん有對、不可けん無對、上中下法、小大無量法、是の如き等の三法門も亦是の如し。

復次に、餘經の中には聲聞法に隨つて、(五六)四念處を説く。是に於て比丘内身の三十六物を觀じ、饑貪の病を除く。是、如く外身を觀じ、内身を觀す。今、老、異なる法門を以て、四念處を説かんと欲するが故に、般若波羅蜜「多」經を

【九五】無記とは、善にもあらず、惡にもあざる中性のものをいふ。

【九六】四念處(Chattāriṃsaṃvāsaṇā)とは、心を一箇に集中し、之れに依りて、雜念の起るを防ぎ、眞理の徹底悟了に努むる方法を云ふ。而して一心集中の對象に四あり。(一)身體、(二)感覺即ち受、(三)心、(四)諸法これなり。詳言せば身

は不淨と觀じ、受は苦なりと觀じ、心は無常と觀じ、法は無我と觀するなり。

【九七】縮藏には、於四念處欲以異門説般若波羅蜜とあり。

【九八】四正勤は、或は四正斷とも云ふ。共に梵語 Samyakkappa 又は巴利語 sammā-papaṭṭhana の譯名にて、心を制御し、其結果、行爲の善を増し惡を退くる修養法なり。これ

に四あり、(一)には未だ起らざる不善を起らしめざらんと勉めて精進勤行し、熱心に心を把持す。(二)には已に起りたる不善を斷絶せしめんと精進熱中す。(三)には未だ起らざる善法をば起らしめんと精進勤行す。(四)には已に起りし善を久しく住せしめ、擴大弘布せしめ、充實せしめんと努力するを云ふ。

【九九】四如意足は、或は四神足とも云ふ。梵語 Catvāriṃśā Padāni 又は巴利語 Caturāriyāyāsi Padāni の譯名。佛教にては、三明六通の方を得て、一切の障礙を超越したる聖果の實現に到るべき修行の道程を四段に分ち、之を如意神力の足、即ち指段となせり。其第一は神通に到るべき願望又は決心即ち德(ārambha)を起し、此德に心

説きたまふ。所説の如くれば、菩薩は内身を觀

するに、身に於て覺觀を生ぜざれば身を得ず、

無所得なるを以ての故に。是の如く外身を觀

じ、内外身を觀するに身に於て覺觀を生ぜざれ

ば、身を得ず、無所得なるを以ての故に。身念

處の中に於て、身を觀じて覺觀を生ぜざる、是

の事甚だ難し。三念處も亦是の如し。四正勤、

(九) 四如意足、(一〇) 四禪、(一一) 四諦、是の如き等

の種種の四法門も亦是の如し。

復次に、餘經の中に、佛は五衆の無常、苦、

空、無我の相を説きたまふ。今異なる法門を以

て、五衆を説かんと欲するが故に、般若波羅蜜

〔多〕經を説きたまふ。佛、須菩提に告げたまふ

が如きは、菩薩は色は是れ常行、不行の般若波

羅蜜〔多〕、受想行識も是れ常行、不行の般若波

を集中して心の散亂を制止

す。此決心より進みて、精進

(*Samādhi*) となり、心の不亂即

ち定となり、神通を實行する

試練即ち慧に到る。慧とは思

惟の義なり。此四足修行には

專修觀念を要するに勿論、緊

要に過ぎず、凝縮に失せず、

心を内に縮めず、又外に散ら

さず、前後に思慮を平均分配

し、上下四方に心を開放して

光明心に住す。その結果は即

ち神通の實現なり。

【一〇】四禪とは梵語(*Caturāryāna*)

*Samādhi*、巴利語(*Cattāriyāna*)

三の譯名にて、初禪、二禪、

三禪、四禪を云ふ。蓋し心の

一境性を羅漢の次第に由つて

別てるなり。謂く、尋・心の塵

なる性・伺(心の細なる性)・

喜・樂心の極快安適なる性)

の四を具するを初禪とし。尋・

伺を離るゝを第二禪とし。更

に喜と上に謂ゆる樂とを離れ

て、別の樂(心の悦ばしき性)

を具ふるを第三禪とし。前の

一切を離るゝを第四禪とす。

【一一】四諦とは梵語(*Caturāryasatya*)

四の譯名にて、四の真相、

或は四の眞理と云ふ義なり。

蓋し人生を觀察して、佛道修

行に資する爲の見方を教へた

るなり。第一は人生の現實相

を觀察して苦となし、第二は

其の成立原因を探りて集即ち

無明煩惱となし、第三は其の

原因を滅盡したる状態を考へ

て滅と云ひ、第四は其の滅盡

に至る道を講じて、之を道と

云ふ。苦集滅道の四諦即ち、

れなり。今左に之を圖示せむ。

苦(*Dukkha*)……迷界の果

集(*Samudaya*)……迷界の因

滅(*Nirodha*)……悟界の果

道(*Marga*)……悟界の因

「**般若(多)**、色は無常、行不行の般若波羅蜜(多)、受想行識も無常行、不行の般若波羅蜜(多)なりと觀す。五受衆、五道、是の如き等の種種の五法も亦是の如く、餘の六七八等、乃至無量の法門も亦是の如し。摩訶般若波羅蜜(多)は無量無邊なるが如く、般若波羅蜜(多)の因縁を説くことも、亦無量無邊なり。是の事廣きが故に、今は略して摩訶般若波羅蜜(多)の因縁を説き竟ぬぬ。

〔103〕初品の中の、「是の如く我聞けり、一時」を釋す。

是の如く我聞けり、一時。

問うて曰く、諸佛の經は何を以ての故に、初に「是の如く」の語を稱ふるや。答へて曰く、佛法の大海は信を以て能入と爲し、智を以て能度と爲す。「是の如く」とは、即ち是れ信なり。若し人心中に信有りて清淨なれば、是の人は能く佛法に入る。若し信無ければ、是の人は佛法に入ること能はず。不信の者は、是の事是の如くならずと言ひ、信者は是の事是の如しと言ふ。

譬へば牛皮の未だ柔らかならざれば、屈折すべからざるが如く、無信の

〔103〕縮藏には「摩訶般若波羅蜜初品如是其間一時釋論第二」とあり。

〔104〕第九問、如是の語義を問ふ。世或は如是の二字を國語に譯して「是の如きを」と讀む人あり。惟ふに是れ原語の語法に無頓著なるより來れる讀み方なるが如し。蓋し、「如是」の原語 *इति* は不轉語なるが故に、名詞的變化即ち國語の *テニ* ナハを取るものにあらざればなり。

〔105〕佛法の大海は信を以て能入と爲す。此の句は佛教が如何に信仰信心を重んずるかの證言として、數々引用せらるる名高き文句なり。

〔106〕信の有無と牛皮の譬喩。

人も亦是の如し。譬へば牛皮の已に柔らかなれば、用に随つて作すべきが如く、有信の人も亦た是の如し。

復次に、(二〇)經中に、「信を手となすと説く。人は手有りて、寶山の中に入れば、自在に能く取れ

ども、若し手無ければ、取る所あること能はざるが如し。有信の人も亦是の如く、佛法の無漏の根力、覺道、禪定、寶山の中に入りて、自在に取る所あり。無信は無手の如し。無手の人は寶山の中に入るに、則ち所取あること能はず。無信も亦是の如く、佛法の寶山に入つて、都て所得なし。

佛自ら念言したまはく、「若し人信あれば、是人は能く我が大法の海中に入り、能く沙門の果を得ること空しからず。頭を剃り、衣を染むとい

へども、若し信なくんば、是の人は我が法海の中に入るに能はず。枯樹の華實を生ぜざるが如く、沙門の果を得ず。頭を剃り、衣を染め、種種の經を讀み、能く難じ、能く答ふと雖も、佛法の中に於て、空うして所得なけん」と。是を以ての故に「是の如く」の義は佛法の初に在り、善信の相なるが故なり。

復次に、佛法は深遠なり。更に佛有つて乃ち能く知りたまふ。人に信あれば未だ作佛せずと雖も、信力を以ての故に能く佛法に入る。(二〇)梵天王の佛に初轉法輪を請ふが如し。偶を以て請うて曰く、

【二〇】信の手を以て寶山に入るの譬喻。

【二一】無漏(Amsurav)。漏とは煩惱の異名にて、過を泄し、流注相續して絶えざるもの、謂なり。故に無漏とは煩惱に隨順せず、煩惱を滅盡して全く煩惱無きを云ふなり。

【二二】縮藏には、衣を袈裟に作れり。

【二三】梵天王、佛に初めて轉法輪を請ふ。

『閻浮提には、先に多く諸の不淨の法を出せり、願はくは甘露の門を開いて、諸の清淨の道を説きたまへ。』

佛、偈を以て答へたまはく、

『我が法は甚だ得難し、能く諸の結使を斷すれども  
三有に愛著する心あれば、是の人は解する  
ること能はず。』

梵天王、佛に白さく、大徳、世界の中の智に上中下あり、善輒直心の者は得度すべきこと易し。是の人若し法を聞かずんば、諸の惡難の中に退墮せん。  
華の生あり、熟あり、水中より未だ出でざる者あるに、若し日光を得ざれば、則ち開かざるが如し。佛も亦是の如く、佛は大慈悲を以て、衆生を憐愍するが故に爲に法を説きたまふ。佛、過去未來現在を念ふに、三世諸佛の法は、皆衆生を度せんが爲に法を説きたまふ。我も亦應に而るべし。是の如く思惟し竟つて、梵天王等の諸天の請を受け、法を説き偈を以て答へて曰はく。

【一〇】三有とは、欲、色、無色三界の異名なり。  
【一一】信の生熟を蓮華に譬ふ。

『我今甘露味の門を開く、若し信する者あらば歡喜することを得ん。諸人の中に於て妙法を説く、他を惱ますに非ざるが故に而も爲に説く。』

佛は此の偈の中に、布施の人は歡喜するとを得と説かず。亦た多聞、持戒、忍辱、精進、禪定、智

慧の人は歡喜するを得と説かず、獨り信する人はと説きたまふ。佛意定の如し。二三ほ第一甚深微妙にして、無量・無數・不可思議・不動・不倚・不著・無所得の法なり。一切智人に非ずんば則ち解する能はず。是故に佛法の中には信力を初と爲す。信力は能く入れども、布施、持戒等は能く初めて佛法に入るに非ず。偈に曰ふが如し。

『世間の人は心動じて、福の果報を愛好す、而も福因を好まず、有を求めて滅を求めず。』

先づ邪見の法を聞き、心著して深く入る。我が是の甚深の法は、信なくんば云何が解せん。』

(二三)デーワ(多)の大弟子、(二四)俱迦離等の如きは、信法無きが故に惡道の中に墮す。是の人は信無くして、佛法に於いて、自ら智慧を以て求むれども得ること能はず。何となれば佛法は甚深なるを以てなり。梵天王、俱迦離を教へて偈に説くが如し。

『無量の法を量らんと欲す、智者豈に應に量るべけんや。無量の法を量らんと欲せば、此の人は自ら覆沒せん。』

復次に、「是の如く」の義は、(二五)若し人心善直にして信あらば、是の人は法を聽くべし。若し是の

【二三】縮減には、法を我に作れり。  
【二四】提婆達多(Devadatta)  
【二五】俱迦離(Kurukali)等は、無信なるが故に、惡道に墮せり。  
【二六】縮減には、聽者端視に作れり。

相無くんば則も解せず。偈に説く所の如し。

「二〇三」專視して法を聴くこと、渴するもの、飲むが如く、一心に語義の中に入り、踊躍して法を聞

き心悲喜す、是の如き人には應に爲に説くべし。」

復次に、「是の如く」の義は佛法の初に在り。二〇七 現世の利と後世の利と、涅槃の利と、諸利の根本

は、信を大力と爲す。

復次に、二〇八 一切の諸の外道の出家は心に念へり、「我が法は微妙第一清

淨なり」と。是の如き人は自ら所行の法を嘆じ、他人の法を毀訾す。是

の故に現世には鬪誶相打ち、後世には地獄に墮して、種種無量の苦を受

く。偈に説くが如し。

「自法に愛染するが故に、他人の法を毀訾せば、持戒の行人と雖も、

地獄の苦を脱せず。」

是の佛法の中には、一切の愛、一切の見、一切の 吾我・憍慢を棄捨し、悉く斷じて著せず。機喻

經に言ふが如し。「汝等若し我が機喻の法を解せば、是時は善法をも應に棄捨すべし、何に況んや不

善の法をや」と。佛は自ら般若波羅蜜(多)に於て、不念不倚なり、何に況んや餘法に倚著あらんや。

是を以ての故に佛法の初に、「是の如く」と稱ふ。偏意是の如し。吾が弟子には愛法も無く、染法も無

【二七】信・諸利の根本なり。

【二八】自法に愛著して他法を毀訾せば、縱令戒を持つと雖も惡道に墮す。

【二九】吾我とは、俗に云ふ所のわれが、おれがの我見のこと。

く、朋黨も無く、但離苦解脱を求め、諸法の相を戯論せず。(二〇)阿陀婆耆經に説くが如し。(三一)摩健提

の〔佛を〕難する偈に言はく、

『決定の諸法の中に、横まゝに種種の想を生じ、悉く内外を捨つるが故に、云何が道を得べき。』

佛、答へて曰はく、

『見聞覺知に非ず、持戒の所得に非ず、亦た見聞せざるに非ず、不持

戒の得に非ず。是の如きの論は悉く捨て、亦 我我所を捨て、諸法

の相を取らず、是の如くんば道を得べし。』

摩健提問うて曰く、

『若し見聞等にあらず、持戒の所得に非ず、亦た見聞せざるに非ず、

不持戒の得に非んば、我が心の如く觀察し、啞法を持つて道を得ん。』

佛、答へて曰はく、

『汝は邪見の門に依り、我は汝が癡道を知る。汝妄想を見ずんば、爾時に自ら當に啞すべし。』

復次に、我が法は眞實にして、餘法は妄語、(三二)我が法は第一にして、餘法は不實なりといふ、是

を鬪諍の本と爲す。今「是の如く」の義は、人に無諍の法を示す。他の所説を聞く、説く人に咎無し、

是を以ての故に、諸の佛經の初に「是の如く」と稱ふ。略して「是の如く」の義を説き竟んぬ。

〔二〇〕阿陀婆耆經は、譯して、  
德經と云ふ。  
〔三一〕摩健提、佛を難す。  
〔三二〕我我所。我とは自身を云  
ひ、我所とは身外の事物を云  
ふ。是れ我が所有となすが故  
に我所と名く。  
〔三三〕我が法は眞實にして餘法  
は妄語なりと言ふは鬪諍の本  
なり。

「我」とは今當に説くべし。

問うて曰く、【二三】若し佛法の中に、「一切法は空なり、一切は吾我あること無し」と言はゞ、云何が佛經の初に「是の如く我聞く」と言ふや。答へて曰く、佛弟子の輩等は、無我を知ると雖も、俗法に隨つて我と説く、實我には非ざるなり。譬へば金錢を以て銅錢を買ふも、人の笑ふ者なきが如し。何となれば賣買の法は、應に爾るべきを以てなり。我と言ふも亦た是の如く、無我の法中に於て我を説くは、世俗の法に隨ふが故に難すべからず。天問經の中の偈に説くが如し。

『阿羅漢比丘は、諸漏已に永く盡く、最後邊の身に於て、能く吾我を言ふや不や。』

佛、答へて曰はく、

『阿羅漢比丘は、諸漏已に永く盡く、最後邊の身に於て、能く吾我あり』

と言ふ。』

世界法の中に我は第一實義の説に非ず、是を以ての故に諸法は空にして、無我なれども而も我と説くに咎無し。

復次に、世界の語言に三の根本あり。一には【二三】邪、二には慢、三には名字なり。是の中二種は不

【二三】第一〇問、佛敎は「無我説」を高唱す、然るに諸經の開卷第一に「如是我聞」とあるは何故なるか。  
【二三】縮藏には、邪の下に、見の字あり。

淨にして、一種は淨なり。一切の凡人には三種の語あり、邪と慢と名字となり。二種の語あり、慢と名字となり。諸の聖人は、一種の語を用ふ、名字なり。内心實法に違はずとも、世界の人に随つて、共に是の語を傳ふるが故に、世の邪見を除き、俗に順するに諍なし。是を以ての故に二種不淨語の本を除く。

復次に、若し人無我の相に著して、「是は實にして、餘は妄語なり」と言はゞ、是の人は難すべし。「汝が一切の法は、實相無我なり、云何が是の如く我聞けりと言ふや」と。今諸の佛弟子は、一切法空に於て所有なし、是の中に心亦著せず、亦諸法實相に著すと言はず、何に況んや無我の法中に心著せんや。是を以ての故に難じて、「何を以てか我を説く」と言ふべからず。中論の中の偈に説くが如し。

『若し空ならざる所あらば、應當に空なる所あるべし。不空すら尙ほ得ず、何に況んや空を得んや。』

凡人は不空を見、亦復た空を見、見と無見とを見ず、是を實に涅槃、不二安穩の門と名く。能く諸の邪見を破り、諸佛所行の處、是を無我の法と名く。略して我が義を説き竟んぬ。

「聞く」とは今當に説くべし。

【二義】見道とは、初めて無漏智を生じて、眞諦を照見するの位なり。

問うて曰く、三三七 聞くとは云何、聞くは耳根を用ゐて聞くや。三三六 耳識を用ゐて聞くや、意識を用ゐて聞くや。若し耳根もて聞かば、耳根は覺知無

きが故に聞くべからず。若し耳識もて聞かば、耳識は一念にして分別すること能はず、亦聞くべからず。若し意識もて聞かば、意識も亦聞く能はず、何となれば、先づ 三五 五識の 三三三 五塵を識り、然る後意識は識るを以て

なり。三三二 意識は現在の五塵を識る能はず、唯過去未來の五塵をのみ識る。若し意識能く現在の五塵を識らば、官聲の人も亦聲色を識るべし。何となれば意識破れざるを以てなり。答へて曰く、耳根能く聲を聞くに非ず、亦

耳識に非ず、亦た意識に非ず。是の聲を聞く事は、多くの因縁和合するに從るが故に、聲を聞くことを得るなり。一法の能く聲を聞くと言ふとを得ず、何となれば耳根には覺無きが故に、聲を聞くべからざればなり。識は無色無對無處の故に亦聲を聞くべからず。聲は覺無く亦根無きが故に聲を

知ること能はず。爾時に耳根破れず、聲は可聞の處に在りて、意に聞かんと欲する情あり、塵と意と和合するが故に耳識生ず。耳識に隨つて即ち意識生じて能く分別し、種種の因縁あつて聲を聞くことを得るなり。是を以ての故に是の難を作すべか

【二七】第二一問、「聞く」と言ふ意義如何。

【二八】耳根耳識、耳根は聽官、耳識は聽覺なり。

【二九】五識とは、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識、即ち視・聽・覺・嗅・味・觸をいふ。

【三〇】五塵とは、色・聲・香・味・觸、即ち前の五識の對象となるものにして、又の名を五境ともいふ。

【三一】凡そ五識の對象、即ち五塵の存在するや、其の現在に眞に一瞬時一刹那にして、それが意識の對象となる時は、已に次の瞬間即ち過去に落謝するか、又は未だ現はれざる瞬間即ち未來に存するのみなるが故に、本文の如く斷斷するなり。

識生じて能く分別し、種種の因縁あつて聲を聞くことを得るなり。是を以ての故に是の難を作すべか

らず。聲を聞くとも雖も、佛法の中には亦一法として、能作・能見・能知あると無し。偈に説くが如し。

『業あり亦果あり、無作の業果は、此れ第一甚深なり、是の法は佛のみ能く見たまふ。』

空なりと雖も亦斷せず、相續すれども亦常ならず、罪福も亦失せず、

是の如きの法は佛説なり。』

略して聞の法を説き竟んぬ。

「一」とは今當に説くべし。

問うて曰はく、二三佛法の中に數時等の法は實に無し、そは二三陰・入・界

に攝せざる所なればなり、何を以てか一時と言ふや。答へて曰く、二四世

俗に隨ふが故に一時ありといふも答あること無し。晝・泥・木等を以て、二五

天像を作り、天を念するが故に、禮拜するに答なきが如く、一時と説くも

亦是の如し。實に一時無しと雖も、俗に隨つて一時と説くに答なし。

問うて曰はく、二六一時無くんばあるべからず。佛、自ら説き言はく、

一人世間に出づれば、多人樂を得こと。是者は何人ぞや。佛世尊なり。亦

偈に説くが如し。

『我が行は師保無く二七志一にして等侶無く、一行を積んで佛を得、自然に聖道に通ず。』

【二三】第一二問、一の意義如何。

【二四】陰・入・界とは、五陰と十二人と十八界の略。詳くは本書十八頁脚註を見よ。

【二五】實には一時なきも世俗に隨ふが故に一時と説くも答なし。

【二六】天像とは、神像のことなり。梵語の Devata は、神を意味する言葉なるが、支那には常に天と譯せり。

【二七】第一三問、佛語を引證して、一時なかる可らざる所以を論難す。

例。

是の如く佛は處處に一を説きたまふ。「故に應當に一あるべし。」

復次に、一法和合の故に、物の名を一と爲す。若し實には一法無くんば、何を以ての故に一物の中には、一心生じ、二に非ず三に非ず。二物の中には二心生じ、一に非ず三に非ず。三物の中には三心生じ、二に非ず一に非ざるか。若し實に諸數無くんば、一物の中に二心生すべく、二物の中に一心生すべし。是の如く、三四五六も皆爾なり。是の故に定めて知りぬ、「一物の中に一法あり、是の法和合するが故に、一物の中より一心生すといふこと」を。答へて曰く、若くは一と物と一なりといひ、若くは一と物と異なりといはば、二俱に過あり。

問うて曰く、二三六、若し一ならば、何の過ありや。答へて曰く、若し一

瓶は、是れ一の義、因提梨釋迦の如きは亦是れ一の義なり。若し爾れ

ば存在に一あり、處處皆是れ瓶なるべし。譬へば存在に因提梨あれば、處處に釋迦あるべきが如し。

今衣等の諸物は、皆是れ瓶と一なるべし。瓶と一なるが故に、是の如く處處の一は、皆是れ瓶なり。

瓶衣等の如く、悉く是れ一物ならば、分別あること無けん。

復次に、一は是れ數法、瓶も亦應に是れ數法なるべし。瓶の體に五法あらば一も亦五法あるべし。

瓶は有色有體なれば、一も亦有色有體なるべし。若し存在の一を名けて瓶と爲さずんば、瓶と一なる

べからず。一若し一と説かずんば瓶を攝せず。若し瓶を説かば亦一を攝せざるべし。瓶と一と異なら

【二天】第一四問、若し一と物と

一ならば、何の咎ありや。

【三六】因提梨釋迦(三三三三三三三三)

ざるが故に。又復た一を説かんと欲せば、瓶を説くべく、瓶を説かんと欲せば、一を説くべし。是の如くんば則ち錯亂せん。

問うて曰く、(一四) 一の中の過是の如しとせば、異の中に何の咎かある。答へて曰く、若し一と瓶と異ならば、瓶は則ち一に非ず。若し瓶と一と異ならば、一は則ち瓶に非ず。若し瓶と一と合して瓶を一と名づけば、今一と瓶と合す。何を以てか一と名づけて瓶と爲さざるや。是の故に瓶と一とは異なりと言ふを得ず。

問うて曰く、(一四) 瓶と一と合するが故に瓶を一と爲すと雖も、然も一は瓶を作らず。答へて曰く、諸数の初は一なり。一と瓶とは異なれり。是の故に瓶は一を作らず。一は無なるが故に多も亦無なり。何となれば先は一にして後は多なるを以てなり。是の如く、異の中には一も亦不可得なり。

是を以ての故に二門の中に、(一) 一法を求むるは不可得なり。不可得の故に、云何んぞ陰界入に攝せん。但佛弟子は、俗語に隨つて、名けて一心と爲せども、實は著せずして數法、名字あるを知る。是を以ての故に佛法の中に一時、一人、一師と言ふも、邪見の咎に墮せず。略して一を説き竟んぬ。

「時」とは今當に説くべし。

問うて曰く、(一四) 天竺に時を説くに名けて二種あり。一には(一四) 迦羅と名け、二には(一四) 三摩耶と

【一四】第一五問、若し一と瓶と異ならば何の咎ありや。

【一五】第一六問、一は瓶を作らざる理由如何。

【一六】第一七問、時とは何ぞや。

【一七】迦羅(カハラ)。

【一八】三摩耶(サマヤ) (Sammā)。

名く、佛は何を以てか迦羅と言はずして、三摩耶と言ひしや。答へて曰く、若し迦羅と言はば俱に亦疑ひあり。

問うて曰く、二聖、輕易の説の故に應に迦羅と言ふべし。「何となれば」迦羅は二字、三摩耶は三字、重

語は難なるを以てなり。答へて曰く、邪見を除くが故に三摩耶と説いて、迦羅と言はず。有人の言は

く、(四〇)一切天地の好醜、皆時を以て因と爲す」と。(四一)時經の中の偈に説

くが如し。

『時來れば衆生熟し、(四二)時去れば則ち催促す。時は能く人を覺悟せし

む、是の故に時を因と爲す。

世界は車輪の如く、時の變ずるとは輪の轉ずるが如し。人も亦車輪の

如く、或は上り而も或は下る。』

更に有人の言く、「天地の好醜一切の物は、時の所作に非ずと雖も、然

も時は是れ變せず。因は是れ實有なれども時法は細なるが故に見るべからず、知るべからず。華實等

の果を以ての故に、時あるを知るべし。往年・今年・久・近・遲・疾、此の相を見るに、時を見すと雖も、

時あることを知るべし。何となれば、果を見て因ありと知るを以てなり。是を以ての故に、時法あ

り、時法は不壞の故に常なり」と。答へて曰く、泥丸の如きは是れ現在の時、塵土は是れ過去の時、瓶

【四〇】第一八問、易語を採らずして難語を採れる理由如何。  
【四一】第一九問、或人の説を擧げて時の意義を問ふ。  
【四二】時經、古代印度哲學の一派に時論師なるものあり、故に時經とは此の派の經典の謂ひならん。  
【四三】縮減には、時至ればに作る。

は是れ未來の時なり。時相常なるが故に、過去の時は、未來の時と作らず。經書法の如し。時は是一物なり。是を以ての故に (二四九) 過去の時は、未來の時と作らず、亦た現在の時と作らず、過を難ふる

が故に、過去の時の中に亦未來の時無し。是を以ての故に未來の時無し。現在の時も亦是の如し。

問うて曰く、(二五〇) 汝、過去の塵土を受くる時、若し過去の時有らば、必ず未來の時有るべし。是を

以ての故に實に時法有り。答へて曰く、汝は我が先に説くを聞かず、未來の時

時は瓶、過去の時は塵土なり。未來時は過去時と作らず、未來の時相の中

は、是れ未來時なり、云何が過去時と名けん。是を以ての故に過去の時も

亦無なり。

問うて曰く、(二五一) 何を以ての故に時無きや、必ず時有るべし。現在には

現在の相有り、過去には過去の相有り、未來には未來の相有り。答へて曰

く、若し爾れば一切三世の時は自ら相應あり。盡く是れ現在の時にして、

過去未來の時無し。若し未來有りとも未來と名けずんば、已來と名くべ

し、是を以ての故に是の語は然らず。

問うて曰く、(二五二) 過去の時、未來の時は現在相の行に非ず。過去の時は過去相の行、未來の時は未

來相の行なり。是を以ての故に各各の法相は時あり。答へて曰く、若し過去、過去なれば則ち過去の

- 【四】縮藏には、過去時を過去世に作る。
- 【五】縮藏には未來の時を世に作る。
- 【五】第二〇問、時てふ法の存在を主張す。
- 【五】第二一問、重ねて時の存在を主張す。
- 【五】第二二問、過・現・未の時には、各その相行あるべきを主張す。

相を破す。若し過去、過去ならざれば、則ち過去の相なし。未來時も亦是の如し。是を以ての故に時法は實ならず。云何が能く天地好醜、及び華果等の諸物を生せんや。是の如き等の種種の邪見を除くが故に、迦羅時を説かずして、三摩耶を説く。陰界・入・生・滅の假名を時と名け、別の時あることなし。所謂、方・時・離・合・一・異・長・短等の名字を出すに、凡人は心に「執」著して、是を實有の法と謂ふ、是を以ての故に世界の名字、語言の法を除捨す。

問うて曰く、二言若し時無くんば、云何が時食を聽し、非時食を是れ戒なりと遮するや、答へて曰はく、我先に已に世界の名字の法に時あるも、實法に非ざることを説けり、汝難すべからず。亦是の 毗尼の中の結戒の法は、是れ世界の中の實にして、第一一義一實法の相に非ず。吾我の法相は實に不可得なるが故に、亦衆人の嗔呵を爲すが故に、亦佛法を護りて久しく存せしめんと欲して、弟子の禮法を定むるが故に、諸佛世尊は諸戒を結したまふ。是の中に何の實か有り、何の名字等か有り、何者か相應し、何者か相應せず、何者か是法にして、如是の相なる、何者か是法にして、如是の相ならざるやを求むべからず。是を以ての故に、是の事は應に難すべからず。

問うて曰く、(二五)若し時食、時藥、時衣に非ずんば、何を以てか三摩耶と言つて、迦羅と説かざる

【二四】第二三問、若し時なくんば、何を以てか時食と非時食とを區別するや。

【二五】毗尼・Vinayaとは、三藏中の律藏これなり。

【二六】第二四問、時を迦羅と言はずして、三摩耶と言ふ理由如何。

や。答へて曰はく、此は毗尼の中の説にして、白衣は聞くことを得ず。外道は何ぞ聞くことを得るに由りて、而も邪見を生ぜんや。餘經は通じて皆聞くことを得、是の故に三摩耶と説く。三摩耶は假名にして、其をして邪見を生せざらしむ。又佛法の中には多く三摩耶を説き、少しく迦羅を説く、少きが故に難すべからず。略して、如是我聞一時の五語の別義を説き竟んぬ。

## 卷の第二

初品の中の總説の「是の如く我聞けり」を釋す。

「是の如く我聞けり」を、今當に總説すべし。

問うて曰く、若し諸佛は一切智人、自然にして師無く、他の教に隨はず、他の法を受けず、他の道を用ゐず、他に從ひ聞いて法を説かずんば何を以てか「是の如く我聞けり」と言ふや。答へて曰く、汝が言ふ所の如く、佛は一切智人、自然にして師なし。而も佛法は但た佛の口より説けるものみに非ず。是の一切世間の眞實の善語、微妙の好語は、皆佛法の中より出づ、佛、毗尼の中に説きたまふが如し。「何者か是れ佛法なるや。

佛法に五種の人の説あり。一には佛自らの口説、二には佛弟子の説、三には仙人の説、四には諸天の説、五には化人の説なり」と。

復次に釋提桓因得道經に、佛、橋戸迦に、世間の眞實の善語、微妙の好語は、皆我が法より出づと告げたまふが如し。讚佛の偈の中に説くが

如し。

【一】第一問、若し諸佛は一切智人ならば、何故に「是の如く我聞けり」と言ふや。

【二】一切智人とは、薩婆若 (Sarvajñā) の譯語。佛陀の異稱なり。但し原始佛教時代に此の稱を用ふるは稀なり。大乘佛教に至りて、印度民族の智力的分析考察を重んずる風習あるに加へて、主智識の勢力一般哲學勃興に伴ひ、三學中にも慧學を重んじ、般若即ち智慧を以て佛母となすなど智的解釋の意識なく發達せし時代の用語なるが如し。

【三】凡そ佛經に五種の人の説ある事を辨す。

【四】橋戸迦 (Kausika)

『諸の世間の善語は、皆佛法より出づ。善説にして失なく過なきは佛語なり。餘處に善にして過なきの語ありと雖も、一切皆是れ佛法の餘なり。諸の外道の中に、設ひ好語あるも蟲の木を食つて、偶字を成すを得るが如く、初中下の法、自ら其に相破る。鐵より金を出すが如し、誰か當に信する者あるべけんや。』

伊蘭の中の牛頭梅檀の如く、苦禪の中に甘味果を生ずるが如し。設ひ能く此を信するも、是の人は則ち外の經書の中より、自ら出づる好語なりと信せん。

諸の好き實語は、皆佛より出づ、梅檀香の摩梨山より出づるが如し。摩梨山を除いては梅檀を出すとなし。是の如く、佛を除いては實語を出すこと無し。』

復次に「是の如く我聞けり」とは、是れ阿難等の佛の大弟子の輩の説なり。佛の法相に入るが故に名けて佛法と爲す。佛、般涅槃の時の如きは俱夷那竭國、(一)薩羅雙樹の間に於て北首にして臥し、將に涅槃に入らんとす。爾の時に阿難は、親屬の愛末だ除かず、未だ鉢を離れざるが故に、心憂海に没して、自ら出ること能はず。爾の時に長老、(二)阿尼盧豆は阿難に語るらく「汝は佛の法藏を守る人なり。凡人の如

【五】世間の好語は皆佛より出づ。

【六】伊蘭(Elaiwan)は、樹の名しその花愛すべきも、惡臭甚しく四十里に及ぶと云ふ。

【七】牛頭梅檀(Cisstrakacau danna)とは、牛頭山より出づ梅檀といふ意味なれども、今は句妙なる香氣の義に解するを宜しとす。

【八】摩梨山(Mangya)

【九】阿難(Ananda)

【一〇】俱夷那竭國(Kushinagara)

【一一】薩羅雙樹(Salvagrama)

【一二】阿尼盧豆(Anuruddha)

く自ら憂海に没すべからず。一切有爲の法は、是れ無常の相なり。汝、愁憂すること莫れ。又、佛、手づから汝に法を付したまふ。汝今愁悶せば、受くる所の事を失はん。汝當に佛に問ひたてまつるべし。佛の涅槃の後、我曹は云何にしてか道を行せん。誰をか師と作すべき。惡口の車匿と云何が共住せん。佛經の初首には何等の語をか作さん、是の如き種種の未來の事を應に佛に問ひたてまつるべし」と。(二四)阿難は是の事を聞いて、悶心少しく醒め、道力の助を念ずることを得て、佛の末後の臥床の邊に於いて、此の事を以つて佛に問ひたてまつれり。佛、阿難に告げたまはく、「若くは今現前、若くは我が過ぎ去りし後、自ら法の依止に依止して、餘に依止せざれ。云何が比丘自ら法の依止に依止して、餘に依止せざる。是に於いて比丘は内身を觀じ、常に一心に智慧を念じ、勤修精進して、世間の貪愛を除け、外身内外身の觀も亦是の如く、(二五)受、心、法念處も亦復た是の如し。是を比丘自ら、法の依止に依止して、餘に依止せずと名く。今日より解脫戒經は、即ち是れ大師なり。解脫戒經に説くが如く、身業、口業は應に是の如く行すべし。車匿比丘は我が涅槃の後には、梵天の法の如く治せよ。若し心濡伏せば、應に那陀迦旃延經を教へよ。斯くて即ち道を得べ

【二四】佛涅槃の時、阿難、佛に三事を問ふ。  
 【二五】受・心・法念處とは前に擧げる四念處の第二、第三、第四なり。詳しくは本書二十四頁の脚註第九十六を見れば明なり。

し。我が一六三阿僧祇劫一七に集むる所の法寶藏一八は是の藏の初に應に是の説を作すべし。是の如く我聞けり。一時、佛、某の方、某の國土、某の處、林中に在してと。何となれば過去の諸佛の經の初に、皆是の語を稱したまひ、未來の諸佛の經の初にも亦是の語を稱すべく、現在の諸佛の末後、般涅槃の時にも、亦是の語を稱せよと教ふるを以てなり。今我が般涅槃の後の經の初にも亦應に是の如く我聞けり、一時と稱すべし」と。是の故に當に知るべし、是れ佛の教ふる所にして、佛自ら「是の如く我聞けり」と言ふに非ず。佛は一切智人、自然にけり」と説きて、知らざる所あらば此の難あるべし。阿難、佛に問ひたてまつるに、佛、是の語を教へたまふ。是れ弟子の言ふ所の「是の如く我聞けり」なり。「我聞けり」に答あることなし。

復次に、佛法をして久しく世間に住せしめんと欲するが故に、長老摩訶迦葉等の諸の阿羅漢、阿難に問ふ、佛は初めて何れの處にて説法し、何等の法をか説きたまひしや」と。阿難答ふ、「是の如く我聞けり。一時、佛、波羅奈國の仙人鹿林の中に在して、五比丘の爲に、是の苦聖諦を

【一六】三阿僧祇劫とは、菩薩成佛の年時なり。阿僧祇劫(Asankhyeyanika)は無數長時と譯す。菩薩の階位に五十位あり、之を三期の無數の長時に區別す。即ち十信十住十行十廻向の四十位を第一阿僧祇劫とし、十地の中、初地より第七地までを第二阿僧祇劫とし、八地より十地までを第三阿僧祇劫とす。而して第十地を卒伽れば即ち佛果なり。

【一七】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)波羅奈國(Urūvilāsa)現今の Banaras 市を中心とする地方なり。

【一八】苦聖諦とは、所謂四諦中の第一、苦諦即ち「人生は苦なり」とふ原理をいふ。四諦の詳解は、本書二十五頁脚註を見よ。

説きたまふ。我は本より他に從つて法を聞かず、中正に意念して、眼智明覺を得たり」と。是の經は是の中に應に廣く説くべし。集法經の中に説くが如くに、<sup>三</sup>佛涅槃に入りたまふ時、地は六種に動き、諸河反流し、疾風暴發し、黑雲四もに起り、惡雷・掣電・雷雨驟りに墮ち、處處に星流れ、師子惡獸吼喚呼し、諸天人皆大に號咷し、諸天人等皆是の言を發す。「佛、涅槃を取りたまふこと、何ぞ一に疾なるや。世間の眼滅せり」と。是の時間に當つて、一切の草木・藥樹・華葉は、一時に割裂し、諸の須彌山王は盡く皆傾搖し、海水に波揚り、地は大に震動し、山崖は崩落し、諸の樹は摧け折れ、四面より烟起つて甚大に畏る可く、<sup>三</sup>陂池江河は盡く皆撻れ濁り、慧星晝出で、諸人啼哭し、諸天憂慙し、諸の天女等は都咄哽咽して涕淚交も流れ、諸の學人等は默然として樂えず、諸の無學の人は有爲の諸法は一切無常なりと念ず、是の如く、天人 <sup>三三</sup>夜叉 <sup>三三</sup>羅刹 <sup>三四</sup>韃闍婆 <sup>三三</sup>甄陀羅 <sup>三六</sup>摩睺羅伽及び、諸龍等皆大に憂愁せり。諸の阿羅漢は、<sup>三七</sup>老病死海を度り、心に念じて言く、

「已に凡夫の思愛の河を渡り、老病死の券は已に裂破せり。身を見るに、篋中の四大蛇の如し、今無餘滅の涅槃に入らん。」

- 【三〇】 涅槃の瑞相を説き、佛弟子涕淚の事に及ぶ。
- 【三一】 陂池とは、兼流を容れて厭足なき池を云ふ。
- 【三二】 夜叉(ヤクシャ)。
- 【三三】 羅刹(ラスヤ)。
- 【三四】 韃闍婆(タンメルワ)。
- 【三五】 甄陀羅(Kinnara)。
- 【三六】 摩睺羅伽(Mahoraga)。
- 【三七】 老病死海を度りとは、有爲轉變なる人生の苦惱を解脱せるに喩ふ。

諸の阿羅漢は各各意に隨つて、諸の山林流泉巖谷の處處に於て、身を捨てて般涅槃す。更に諸の阿羅漢あつて、虚空の中に於て飛騰し去ること、譬へば雁王の種種の神力を現じ、衆人をして心信清淨ならしむるが如くし、然る後般涅槃す。六欲天、乃至、遍淨天等は諸の阿羅漢の皆滅度を取るを見て、各各心に念じて言はく、「佛日既に没し、種種の禪定・解脱・智慧ある弟子も、先たつて亦滅度す。是の諸の衆生には、種種の姪・癩・癩の病あり。是の法藥師の輩は今疾かに滅度せり、誰か當に治すべき者あらんや。無量の智慧の大海の中に生ずる弟子の蓮華は今已に乾き枯れ、法樹は摧け折れ、法雲は散滅し、大智の象王は既に逝き、象子も亦隨つて去り、法の商人は過ぎ去れり、誰に從つてか法寶を求めん」と。偈に説くが如し。

「佛、已に永寂の涅槃に入りたまひ、諸の結を滅するの衆も亦た過ぎ去れり。世界は是の如く空うして智なく、癡冥は遂に増し、智燈は滅せり。」

爾時に、諸天は摩訶迦葉の足を禮し、偈を説いて言く、  
 「耆年は已に欲と志と慢とを除き、其形は髻へは此紫金の柱の如し。  
 上下端嚴、妙にして比なく、日は明にして清淨なること蓮華の如し。」

【六】六欲天乃至遍淨天。欲界の天部より色界第三禪の最終に位する天部までを云ふ。六欲天とは四天王衆天、三十三天、夜摩天、觀史多天、樂變化天、他化自在天これなり。  
 【七】明本には遂を道に作れり。想本に「癡冥増し、智燈遂に滅せり」といふ意義にて、遂の字は上下その處を顛倒せるならん。

是の如く讀じ已つて、(三〇)大迦葉に白して言く「大徳迦葉よ、仁者知るや否や、佛法の船は破れんと欲し、法城は頽れんと欲し、法海は竭きんと欲し、法幢は倒れんと欲し、法燈は滅せんと欲し、法を説くの人には去らんと欲し、道を行するの人は漸やく少なく、悪人の力は轉た盛なり、當に大慈を以て佛法を建立すべし」と。爾時に大迦葉の心は大海の澄靜にして動かざるが如く、良久うして答ふ、「汝等善く説けり、實に言ふ所の如し。世間は久しからずして、無智盲冥ならん」と。是に於て大迦葉は默然として請を受く。爾の時に諸天は大迦葉の足を禮し、忽然として現はれず、各自ら還り去れり。是の時に大迦葉は思惟すらく、(三一)「我今云何にしてか、是の三阿僧祇劫に得難き佛法をして、久しく住することを得せしめん」と。是の如く思惟し覺つて「我知りぬ、是の法をして久しく住せしむべくんば、應當に修妬路、阿毗曇、毗尼を結集し三法藏を作るべし。是の如くせば佛法は久しく住することを得べく、未來世の人、受け行ふことを得べし。何となれば佛は世世に勤苦し、衆生を慈愍したまふが故に是の法を學得し、人の爲に演説したまふを以てなり。我曹も亦應に佛教を承け用ひ、宣揚し、開化すべし」と。是の時に大迦葉は是の語を作し竟つて、須彌山の頂に住し、銅の麈尾を抛ち、此の偈を説いて言く、

『佛の諸の弟子、若し佛を念せば當に佛恩を報じ、涅槃に入ることなかるべし。』

- 【二〇】 大迦葉は前に擧げたる摩訶迦葉(Mahākāśyapa)なり。
- 【二一】 三藏結集の因縁。
- 【二二】 修妬路(の三蔵)。
- 【二三】 阿毗曇(Abhidharma)。
- 【二四】 毗尼(Vinaya)とは、戒律のこと。法藏と當行時、衆人を集むる爲に打つものなり。

是の難稚の音と大迦葉の語聲とは、遍ねく三千大千世界に至り、皆悉く聞き知り、諸の有ゆる弟子の神力を得たる者は、皆來つて大迦葉の所に集會せり。爾時に大迦葉は、諸の會者に告げていはく、

「佛法滅せんと欲す、佛は三阿僧祇劫より種種に勤苦し、衆生を慈愍し、是の法を學得したまへり。佛、般涅槃したまへば、已に諸の弟子の法を知り、法を持し、法を誦する者も、皆亦佛に隨つて滅度せり。法は今や滅せんと欲す。未來の衆生は、甚だ隣慙すべし。智慧の眼を失ひ、愚癡盲冥ならん。

佛は大慈悲を以て、衆生を愍み傷みたまへり。我曹は應當に佛の教を承け用ひ、須らく經藏を結集し竟らんを待つて、意に隨つて滅度すべし」と。

諸來の衆會は、皆教を受けて住す。爾の時に大迦葉は、千人を選び得て、阿難を除き去せり。〔彼等は〕盡く皆阿羅漢にして、六神通を得、共解脱、無疑解脱を得、悉く三明を得、禪定は自在にして、能く逆類に諸の三昧を

行じて皆悉く礙なく、三藏を誦讀し、内外の經書を知り、諸の外道家の十八種の大經は、盡く亦讀み知り、皆能く論議して異學を降伏せり。問うて曰く、是時に是の如き等の無數の阿羅漢あるに、何を以てか止千人のみを選取して、多く取らざるや。答へて曰く、美頻婆娑羅王は道を得、八萬四千の官屬も亦各道を得たり。是の時に王は宮中に教勅し、常に飯食を設けて千人を供食す。阿闍世王も是の法を斷せず。爾時に大迦葉は思惟して言はく、若し我等常に乞食せば、當に外道強來し、

【一】 第二問、無數の阿羅漢中、唯千人のみを選べるは何故なるか。  
【二】 頻婆娑羅王 (Bimbisara)。  
【三】 阿闍世 (Ajatashatru) 是は、頻婆娑羅王の子、謀して未生怨といふ。

難問すること有りて、法事を廢闕すべし。今、王舍城は常に飯食を設けて千人を供養す。是の中に住して經藏を結集すべし」と。是を以ての故に千人を選み取り、多く取することを得ず。是の時に大迦葉は千人と俱に、王舍城の 天 音闍崛山の中に到り、阿闍世王に告げて語るらく、「我等の食を給し、日中に送り來たせ。今我曹經藏を結集して他行することを得ず」と。是の中に夏安居すると三月、初の十五日に戒を説く時和合僧を集む。大迦葉禪定に入り、天眼を以て今是の衆中、誰か未だ煩惱を盡さずして、應に逐ひ出さるべき者あるかを觀るに、唯阿難一人あつて盡さず。餘の九百九十九人は、已に諸の 漏を盡して清淨無垢なり。大迦葉は、禪定より起つて衆の中に 手づから阿難を牽出して言く、「今、清淨衆の中に經藏を結集す。汝は 結いまだ盡さず。此に住すべからず」と。是の時に、阿難は漸耻し悲泣し、自ら念じて言く、「我は二十五年、世尊に隨侍し、左右に供給せしも、未だ曾て是の如きの苦惱を得ず。佛は實に大徳たり、慈悲を以て含忍したまへり」と。念じ已つて大迦葉に白して言さく、「我は能く力あり、久しく道を得べかりき。但、諸佛の法に、阿羅漢は左右に供給して使令することを得ず、是を以ての故に我は殘結を留めて盡し斷せざるのみ」と。大迦葉の言く、「汝は更に罪あり。佛は意に、女人の出家を聽すことを欲したまはざりき。汝殷勤に勸請す、佛、聽して道と爲せり。是の

【天】音闍崛山 (Siddhacakra)

【无】漏とは過を漏らすの義にして煩惱の異名と思へば大過なし

【四】大迦葉、阿難の不注意を責む

【四二】結とは結縛と熟字し、人を縛して不自由ならしむるもの、則ち又た煩惱の異名なり

【四三】久しき已前にの義なり

故佛の正法は、五百歳にして衰微す、是れ汝が  
突吉羅罪なり」と。阿難、言く「我は、瞿曇彌を隣

惡す。又三世の諸佛の法には、皆 四部の衆あり。我が釋迦文佛のみ、云何が獨り無らんや」と。

大迦葉は復言く、「佛、涅槃せんと欲する時、俱

夷那羯城に近づきて背插み四疊の 瀧多羅僧

〔衣〕を敷いて臥したまひ、汝に詰つて言はく、

我、水を須ゐんと。汝は供給せず、是れ汝が突吉

羅罪なり」と。阿難答へて言く、「是の時に五百

乗の車、流を截つて渡り、水をして渾濁ならし

む、是の故に取らざりき」と。大迦葉復言く、

〔正〕に水をして濁らしむとも、佛には大神力あ

り、能く大海の濁水をして清浄ならしめたま

ふ。汝何故に與へざりしか、是れ汝が罪なり。

汝去つて突吉羅の懺悔を作せ」と。大迦葉復た

言はく、「佛汝に問ひたまはく、若し人ありて、

好く 四神足を修せば、壽住すると一劫なるべく、若くは滅すると一劫なる可し」と。佛は四神足を

【四〇】 突吉羅(梵 *Irakasikā*、巴 *Irakasikā*)は、惡作と譯す。

四分律には、之を二業に分る

て、惡作の身業と惡作の言葉

と譯せり。

【四一】 瞿曇彌(*Gotamī*)

四部の衆とは、比丘と比丘尼と

優婆塞即ち男子の信者と優婆塞即ち女子の信者とな

り。

【四二】 瀧多羅僧(梵 *Wāladhara*)は、七條の袈裟のことなり。

制裁の條數七あるを以て意譯して七條衣といふり、或ば其所用に譯して上衣ともいふ。

蓋し僧侶の衣服中、最も上に著するものなるを以てなり。

【四三】 四神足(梵 *Cattāri-dhūpa*)とは、(一)欲如意足、又は

欲三摩地斷行成就神足(*Chanda-samādhi-pratikhānana-kāraṇa-sambhāva*)、(二)戒如意足、又は

戒三摩地斷行成就神足(*Śīla-samādhi-pratikhānana-kāraṇa-sambhāva*)、(三)精進如意足、又は

勤三摩地斷行成就神足(*Vīriya-samādhi-pratikhānana-kāraṇa-sambhāva*)、(四)慧惟如意足、即ち觀三摩地斷行成就神足(*Viññāna-samādhi-pratikhānana-kāraṇa-sambhāva*)となり。

【四四】 善持(梵 *Samādhāna*)は、七條の袈裟のことなり。

好修して、壽住すること一劫、若くは滅すること一劫ならんことを欲したまふに、汝は默然として答へず。汝に問ひたまふと三たびに至るも汝は故らに默然たりき。汝若し佛に答へば、佛は四神足を好修して、應に住すること一劫、若くは滅すること一劫なるべし。汝に由るが故に佛世尊をして、早く涅槃に入らしむ。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言く、「覺我が心を蔽ふき、是の故に無言なりき。我悪心にして、佛に答へざるに非ず」と。大迦葉復言く、「汝佛の與めに僧伽梨衣を疊むとき、足を以つて上を踏めり。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言はく、「爾時に大風あつて起り、人の助なし、我衣を捉ふる時、風吹き來つて我が脚下に墮つ、恭敬せざるが故に佛衣を踏むに非ず」と。大迦葉復言く、「佛の陰藏の相を般涅槃の後、以つて女人に示す、是れ何れも耻づべきなり。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言く、「爾の時に我思惟す、若し諸の女人、佛の陰藏の相を見ば、便ち自ら女人の形を羞耻して、男子の身を得、佛相を修行し、福德の根を種えんことを欲せんと。是を以ての故に我女人に示せり、無耻にして故らに破戒を爲せしには非らず」と。大迦葉言く、「汝に六種の突吉羅罪あり。盡く應に僧中にて過を悔ゆべし」と。阿難言く、「諾、長老大迦葉及び僧衆の教ふる所に隨はん」と。是の時、阿難長跪して手を合せ、偏へに右の肩を袒ぬぎ革屣を脱ぎ、六種の突吉羅罪を懺悔す。大迦葉は僧中に於て、手づから阿難を牽き出し、阿難に語つて言く、「汝漏を斷じ盡し、然る後來入せよ、殘結いまだ盡さずんば、汝來ること勿れ」と。是の如く語り竟つて、便ち自ら門を閉づ。爾の時に

諸の阿羅漢は議して言く、「誰か能く毗尼法藏を結集する者ありや」と。長老阿泥盧豆言く、「舍利弗は是れ第二の佛にして、好き弟子あり、憍梵波提と字く。柔軟和雅にして閑居に處り、心は寂寞に住し、能く毗尼法藏を知る。今天上の尸利沙樹園の中に在つて住す、使を遣はして請し來らん」と。大迦葉は下座の比丘に語るらく、「汝次で僧使たるべし。」下座の比丘言く、「何の使かある。」大迦葉言く、「僧使として、汝天上の尸利沙樹園の中、憍梵波提阿羅漢の住處に至れ」と。是の比丘は歡喜し踊躍して僧の勅命を受け、大迦葉に白して言く、「我、憍梵波提阿羅漢の所に到り何事をか陳說せん」と。大迦葉言く、「到り已つて憍梵波提に語れ、大迦葉等の漏を盡せる阿羅漢、皆閻浮提に會し、僧の大法事あり、汝疾く來る可し」と。是に下座の比丘は頭面に僧を禮し、右に遶ると三匝し、金翅鳥の如く虚空に飛騰し、憍梵波提の所に往き到り、頭面に禮を作し、憍梵波提に語つて言く、「輕善の大徳、少欲知足にして常に禪定に在り、大迦葉問訊して語あり、今僧の大法事あり、疾く下り來りて衆寶の聚れるを觀る可し」と。是の時に憍梵波提は心に疑ひ、是の比丘に語つて言く、「僧將に鬪諍の事なきに我を喚ばんとするか、破僧の者有ること無きや不や、佛日滅度するか」と。是の比丘の言く、「實に言ふ所の如し、大師、佛は已に滅度したまへり」と。憍梵波提言く、「佛の滅度太だ疾かなり、世間の眼は滅せり。能く佛の轉法輪を逐ふの「法」將たる我が和尚舍利弗は今何所にか在る」と。答へて曰く、「先に涅槃に入れ

【四六】 憍梵波提 (Gandhārī) 尸利沙樹 (Śrīṣṭhā) は譯して合歡樹といふ。

り。橋梵鉢提言く、「大師、法將各自別離せり。當に奈何がすべき。摩訶目伽連は今何所に在りや。」是の比丘の言く、「是も亦滅度せり。」橋梵鉢提言く、「佛法散せんと欲す、大人過ぎ去る、衆生慙むべし。」問ふ、「長老阿難は今何の作す所がある。」此の比丘の言く、「長老阿難は、佛の滅度の後、憂愁啼哭迷悶して自ら喰ふること能はず。」橋梵鉢提言く、「阿難の懊惱は、(五〇)愛結あるに由る、別離して苦を生ず、羅睺羅は復云何」と。答へて言はく、「(五一)羅睺羅は阿羅漢を得るが故に、憂なく愁なく但諸法無常の相を觀ず」と。橋梵鉢提言く、「已に斷じ難きの愛欲」を斷ず、是を以て憂愁なし」と。橋梵鉢提(復)言く、「我、離欲の大師を失す、是の尸利沙樹園の中に於いて住することは亦何の爲す所ぞ。我が和尚大師は、皆已に滅度せり。我今復悶浮提に下ること能はず、此に住して般涅槃せん」と。是の言を説き已つて禪定の中に入り、跏趺して虚空に在りて身より光明を放ち、又水火を出し、手を以て日月を摩で、種種の神變を現はし、自心より火を出して身を燒き、身中より水を出して四道に流下せしめ、大迦葉の所に至る。水中に聲あり、此の偈を説いて言く、

『橋梵鉢提稽首して、妙衆第一の大德僧を禮したてまつる。佛の滅度を聞いて我隨つて去る。大象去れば象の子も隨ふが如し。』

爾の時に下座の比丘は衣鉢を持して僧に還る。是の時中間にして、阿難は諸法を思惟し、殘漏を盡

【五〇】愛結とは、愛欲の煩惱を意味す。蓋し結とは煩惱の結んで解き難きをいふなり。

【五一】羅睺羅(Rohita)

さんことを求む。其の夜、坐禪經行、慇懃にして道を求む。是れ阿難は智慧多くして定力少し、是の故に即ち道を得ず。定と智と等しき者は乃ち速かに得べし。後夜過ざんと欲す、疲極まりて假息し、却き臥して枕に就く。頭未だ枕に至らずして廓然として得悟す。電光出づれば、暗者の道を見るが如し。阿難は是の如く金剛定に入り、一切諸の煩惱の山を破り、三明六通共解脱を得。大力の阿羅漢と作り、即夜に僧堂の門に到り、門を敲いて喚ぶ。大迦葉問うて言く、「門を敲く者は誰ぞ。」答へて言く、「我は是れ阿難。」大迦葉言く、「汝何を以て來る。」阿難言く、「我、今夜諸の漏を盡すとを得たり。」大迦葉言く、「汝が與に門を開かず、汝門の鑰孔の中より來れ。」阿難答へて言く、「爾すべし」と。即ち神力を以て門の鑰孔の中より入り、僧の足を禮拜して懺悔し、「大迦葉よ復た責めらるること莫れ。」大迦葉は手を以て阿難の頭を摩で、言く、「我故らに汝が爲にし、汝をして道を得せしむ。汝嫌ひ恨むること無れ。我も亦是の如し。汝が自證を以て譬ふるに、手づから虚空に盡いて染著する所なきが如し。阿羅漢の心も亦是の如く一切の法中に著する所なきことを得、復た汝座に本け」と。是の時に僧復議して言く、「禰梵鉢提は已に滅度を取れり、更に誰あつてか能く經藏を結集せん」と。長老阿泥盧豆言く、「是の長老阿難は佛弟子の中に於いて、常に佛に近侍し、經を聞いて能く持ち、佛常に嘆譽したまへり。是の阿難は能く經藏を結集せん」と。是の時長老阿難の頭を摩で、言く、「佛、汝に囑累して法藏を持たしむ。汝佛恩を報すべし。佛は何れの處に在して、最初に法を説きた

まひしや。佛の諸の大弟子の能く法藏を守護せん者は皆以て滅度せり。唯、汝一人在り、汝今應に佛心に隨つて衆生を憐愍するが故に佛の法藏を集むべし」と。是の時阿難は僧を禮し已つて師子座に坐す。時に大迦葉は此の偈を説いて言く、

「佛聖は師子王なり、阿難は是れ佛子なり、師子の座處に坐せり、衆を觀るに佛あること無し。是の如きの大徳衆も佛なければ威神を失せり、夜月なき時は、虚空明淨ならざるが如し。」

汝、佛子よ、當に大智人の説を演ぶべし、何の處にてか佛、初めて説きたまひしや、今汝當に布現すべし。」

是の時に、長老阿難は一心に合掌し、佛の涅槃の方に向つて、是の如く説けり。

「佛初めて法を説きたまひし時、爾の時に我は見えず、是の如く展轉して聞けり。」

佛、波羅奈に在して、五比丘の爲に、初めて甘露門を開き、四眞諦の法なる、苦集滅道の四ノ諦を説きたまへり。

【五】阿若憍陳如は、最初に道を見ることを得、八萬の諸天衆は、皆亦道跡に入れり。

是の千の阿羅漢は是の語を聞き已りて、上虚空に昇ること高七、多羅樹、皆言く、「無常の力は

【五】多羅樹(Devil's tree)は、往昔高さを量る特殊の尺度として用ゐらる。而も一多羅樹の高さ幾尺なるかば不明なり。

大なり、我等が如きは、眼のあたり佛の説法を見たるも、今は乃ち我聞けりと言ふ」と。便ち偈を説いて言く、

『我は佛の身相を見たり、猶ほ紫金山の如くなりき。妙相衆徳滅し、唯名のみ有りて獨り存す。是の故に當に方便して、求めて三界を出づべし。諸の善根を勤集するに、涅槃は最も樂となす。』

爾の時に、長老阿泥盧豆は此の偈を説いて言く、

『嗚、世間は無常なり、水月芭蕉の如し。功德は三界に滿つるも、無常の風に壊せらる。』

爾の時に、大迦葉は復た此の偈を説く、

『無常の力は甚だ大なり。愚・智・貧・富・貴・道を得たるも、及び未だ得ざるも、一切能く免るること無し。巧言・妙實にあらす、欺誑力の評にあらず、火の萬物を焼くが如し、無常の相は法爾なり。』

大迦葉、阿難に語るらく、轉法輪經より大般涅槃に至るまで、集めて四阿含と作し、増一阿含、中阿含、長阿含、相應阿含、是を修妬路法藏と名く」と。諸の阿羅漢、更に問ふ、「誰か能く明了に毗尼法藏を集めん」と。皆言く、「長老、憂波利は五百の阿羅漢の中に於て、律を持すること第

【五】増一阿含(巴) Anguttara Nikaya  
 【六】中阿含(巴) Majjhima-Nikaya  
 【七】長阿含(巴) Digha-Nikaya  
 【八】相應阿含(巴) Suttanta-Nikaya  
 【九】憂波利(ウパリー)は、普通には優波利に作る。譯して近取または近執といふ。惡達太子の執事たりし人なり。

一なり。我等いま請せん」と。即ち請して言く、「起つて獅子座に就て處坐せよ、佛何の處に在して初めて毗尼結戒を説きたまひしや」と。憂波利は僧の教を受けて、獅子座に處坐して説けり、「是の如く我聞けり。一時、佛、舍離に在しき。爾の時に須那那迦蘭陀長者の子、初めて姪欲を作す。是の因縁を以ての故に初めて大罪を二百五十戒の義に結び、三部と七法と八法と比丘尼の毗尼増一とを作りたまへり」と。憂波利に維部善部を問ひ、是の如き等の八十部の毗尼藏を作れり。諸の阿羅漢等復た思惟すらく、「誰か能く阿毗曇藏を集めん」と。念じて言く、「長老阿難は五百の阿羅漢の中に於て、修妬路の義を解することは第一なり、我等いま請せん」と。即ち請して言く、「起つて獅子座に就て處坐せよ、佛何の處に在してか初めて阿毗曇を説きたまひしや」と。阿難は僧の教を受け、獅子座に處坐して説く、「是の如く我聞けり。一時、佛、舍婆提城に在しき。爾の時に佛、諸の比丘に告げたまはく、諸の有情の五怖・五罪・五怨を除かず滅せず、是の因縁の故に此の生の中において、身心は無量の苦を受け、復た後世には惡道の中に墮す。諸の有情は此の五怖・五罪・五怨なし、是の因縁の故に今生には種種身心に樂を受け、後世には天上の樂處に生す。何等か五怖にして應に遠ざかるべきや。一には殺生、二には盜、三には邪淫、四には妄語、五には飲酒なり」と。是の如き等を名けて、阿毗曇藏と爲す。三法藏集め竟れり。諸天・鬼人・諸龍・天女・種

【九】 毗尼藏、ゾイサーリ、  
 舍婆提城、ニヤニ、バ都城の  
 名

【一〇】 須那那迦蘭陀 (Sunnakata  
 Lathia)

【一〇】 舍婆提城 (Sapattani) は、  
 また舍衛城ともいふ。

種に供養し、天の華香・幢蓋・天衣を雨らし、法に供養す。故に是に於いて偈を説く、

『世界を憐愍するが故に、三法藏を集結す、十方一切智、説智は無明の燈なり。』

問うて曰く、(三) 八乾度阿毗曇、六分阿毗曇等は、何の處より出づるや。答へて曰く、佛、世に在

す時は法に違錯なし。佛滅度の後、初めて法を

集むる時も亦た佛在すが如し。佛後百年、(四) 阿

輸迦王は、(五) 般闍于瑟大會を作す、諸の大法師

の論議異るが故に別部の名字あり。是より以來

展轉して、(六) 迦旃延を姓とする婆羅門に至る、

道人は智慧利根にして、盡く三藏内外の經書を

讀み、佛法を解せんと欲するが故に發智經八乾

度を作る、初品は是れ世間第一の法なり。後諸

の弟子、後人の盡く八乾度を解すること能はざるが爲の故に

毗曇の中、(七) 第三分八品の分別世處分と名くるは、是れ日健連の作、六分の中の初分の八品四品は是

れ(八) 婆須蜜菩薩の作、四品は是れ(九) 闍賓阿羅漢の作、餘の五分は是れ諸の論議師の作る所なり。有

人の言く、「佛の在す時は舍利弗、佛語を解するが故に阿毗曇を作り、後に

犢子道人等讀誦せり。

【三】 第三問、論部は何の處より出でたるか。

【四】 八乾度阿毘曇論 (Aṭṭhaṅgikāya) 及

び六分阿毘曇 (六足論の異名) の出處如何。

【五】 阿輸迦王 (Ashoka) の出處如何。

【六】 般闍于瑟 (Gandhāra) とは、五年毎に設くる大齋會のこと。義譯して無量會とも云ふ。蓋し一切の人を容受し

【七】 闍賓は闍名、古來我が國にては之をケイヒン國と稱せり。想ふに印度の Kāśmir の訛ならん。

【八】 犢子 (Vātsīputra) て、遮遣せざるを以てなり。

【九】 迦旃延 (Kātyāyana) 轉婆沙 (Vāṭṭya)

【六】 此を樓炭經には「六分中第三分」に作る。

【七】 婆須蜜菩薩 (Vasumitra)

【八】 闍賓は闍名、古來我が國にては之をケイヒン國と稱せり。想ふに印度の Kāśmir の訛ならん。

【九】 犢子 (Vātsīputra) て、遮遣せざるを以てなり。

【一〇】 迦旃延 (Kātyāyana) 轉婆沙 (Vāṭṭya)

乃今に至るまで、名けて舍利弗阿毗曇と爲す。(七)摩訶迦旃延は、佛の在す時、佛語を解して(三)蜺

勒を作れり、乃今に至るまで南天竺に行はる。諸の論議師は皆是れ廣く佛語を解するが故なり、五

戒を説くが如し。五戒は幾か有色、幾か無色、幾か可見、幾か不可見、幾か有對、幾か無對、幾か有

漏、幾か無漏、幾か有爲、幾か無爲、幾か有報、幾か無報、幾か善、幾か不善、幾か有記、幾か無記

なるし。是の如きは是れ阿毗曇なり。復次に七使は欲染使、瞋恚使、有愛使、憍慢使、無明使、見

使、疑使なり。是の七使は、幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾

か見諦斷、幾か思惟斷、幾か見苦斷、幾か見集斷、幾か見盡斷、幾か見道

斷、幾か遍使、幾か不遍使なる。十智とは、法智、比智、世智、他心智、

苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智なり。是の十智は、幾か有漏、幾

か無漏、幾か有爲、幾か無爲、幾か有漏緣、幾か無漏緣、幾か有爲緣、幾か無爲緣、幾か欲界緣、幾

か色界緣、幾か無色界緣、幾か不繫緣、幾か無礙道の中に修し、幾か解脫道の中に修する、四果を得

るの時は、幾か得、幾か失なる。是の如きの一切の法を分別するをも、亦阿毗曇と名く。阿毗曇を三

種と爲す。一に阿毗曇の身及び義は略して三十二萬言を説く。二に六分は略して三十二萬言を説く。

三に蜺勒は、略して三十二萬言を説く。是を阿毗曇略説と爲す。「是の如く我聞けり」の總義(二)に

竟んぬ。

〔七〕 摩訶迦旃延 (Mahakasyapa) 蜺勒とは、論議の名にして、小乘四門の一。秦に「薩藏」と記す、現存せず。

〔三〕 蜺勒は、略して三十二萬言を説く。是を阿毗曇略説と爲す。「是の如く我聞けり」の總義(二)に

初品中の、「婆伽婆」を釋す。

釋 婆伽婆。

釋して曰はく、云何が 婆伽婆と名くるや。婆伽婆とは「婆伽」を徳と言ひ、「婆を」有と言ふ、是を有徳と名く。

復次に、婆伽を分別と名け、婆を巧と名く。巧に諸法の總相別相を分別するが故に婆伽婆と名く。復次に、婆伽を名聲と名け、婆を有と名く、是を有名聲と名く。名

聲を得ることは、佛に如く者あること無し、轉輪聖王、釋梵護世者も佛に及ぶこと有ること無し、何に況んや諸餘の凡庶をや。何となれば轉輪聖

王は結と相應すれども、佛は已に結を離る。轉輪聖王は生老病死の泥中に没在すれども、佛は已に度ることを得たり。轉輪聖王は恩愛の奴僕なれども、佛は已に永く離る。轉輪聖王は世間曠野の災患に處在すれども、佛は已に離るることを得たり。轉輪聖王は無明の暗中に處在すれども、佛は第一明中に處したまふ。轉輪聖王は若し極めて多くして四天下を領すれども、佛は無量の諸の世界を領す。轉輪聖王は財自在なれども、佛は心自在なり。轉輪聖王は天の樂を貪り求むれども、佛は乃至有頂の樂も亦貪著したまはず。轉輪聖王は他に從つて樂を求むれども、佛は内心自ら樂しむ。是の因縁を以て

【七四】 婆伽婆 (Prajapati) の解。  
【七五】 佛は轉輪聖王及び梵釋に勝れたまふ事。

佛は轉輪聖王に勝れたり。諸餘の釋梵護世者も亦復た是の如し。但轉輪聖王より小しく勝れるのみ。復次に婆伽を破と名け、婆を能と名く。是人は能く姪と怒と癡とを破るが故に稱して婆伽婆と爲す。

問うて曰く、阿羅漢辟支佛の如きも亦姪と怒と癡とを破る、佛と何を異ならんや。答へて曰く、

阿羅漢辟支佛は三毒を破ると雖も、氣分を盡さず。譬へば香を器中に在

くに香は去ると雖も、餘氣は故らに在るが如し。又草木の薪は火を以て燒

くに烟を出すも、炭灰を盡さざるが如し。火の力薄きが故なり。佛は三毒

永く盡して餘すこと無きこと、譬へば劫盡の火の、須彌山一切の地を燒く

に、都て盡く烟なく、炭なきが如し。舍利弗の如きは、瞋恚の餘習あり、

難陀は姪欲の餘習あり、畢陵伽婆蹉は慢の餘習あり、譬へば人の鎖を被

り、初めて脱るる時、行くに猶ほ便ならざるが如し。時に佛、禪「定」より

起ちて、經行したまふ、羅睺羅佛に従つて經行するに、佛、羅睺羅

に問ひたまはく、「何を以てか羸瘦する」と。羅睺羅偈を説いて佛に答ふ。

『若し人油を食すれば則ち力を得、若し酥を食する者は好色を得、麻と滓菜とを食すれば色力な

し、大德世尊、自ら當に知りたまふべし。』

佛、羅睺羅に問ひたまはく、「是の衆の中、誰をか上座と爲す」と。羅睺羅答ふらく、「和尙舍

【七六】 第四問、阿羅漢、辟支佛、佛陀の異同如何。

【七七】 氣分とは、佛教哲學書に普通にいふ所の習氣なり。

【七八】 畢陵伽婆蹉(ニヒリガマト)は、比丘の名なり。

【七九】 經行とは、一定の地を旋繞往來すること。即ち坐禪して睡眠を備せしとき、之を防

がんがため、又は攝生藥物のためにするなり。禪宗にては之をきんじんと識む。

【八〇】 舍利弗瞋恚の因縁。

利弗なり」と。佛言はく、「舍利弗は不淨食を食す」と。爾の時に舍利弗は是の語を轉聞し、即時に食を吐いて、自ら誓言を作す、「今日より復た人の請を受けず」と。是の時に 〔一〕波斯匿王、長者 〔二〕須達多等、舍利弗の所に來詣し、舍利弗に請るらく、「佛は無事を以て人の請を受けたまはず、大徳舍利弗も復た請を受けざれば、我等白衣は、云何が當に大信清淨なることを得べけんや」と。舍利弗言はく、「我が大師佛の言はく、舍利弗は不淨食を食すと。故に今人の請を受くることを得ず」と。是に於て、波斯匿等は佛の所に至り、佛に白して言く、「佛は常に人の請を受けたまはず、舍利弗復た請を受けずんば、我等は云何が心に大信を得ん。願くは佛、舍利弗に勅して、還た人の請を受けしめたまへ」と。佛の言はく、「此の人の心は堅くして移轉すべからず」と。佛、爾の時に本生の因縁を引きたまふ。昔、

一の國王あり、毒蛇の爲に害まる。王、時に死せんと欲し、諸の良醫を呼んで蛇の毒を治せしむ。時に諸醫の言はく、「還つて蛇をして毒氣を嚙はしめば、乃ち盡きん」と。是の時に諸醫各咒術を設くれば、王を害める所の蛇、即ち王の所に來る。諸醫毒を積んで火を然し、蛇に勅す、「還た汝毒を嚙へ、若し爾らさんば當に此の火に入るべし」と。毒蛇思惟すらく、「我既に毒を吐く、云何が還つて嚙はん、此の事は死よりも劇し」と、思惟し心を定めて即時に火に入れり。爾の時の毒蛇は、舍利弗是なり。世世心堅くして動すべからず。復次に、長老畢陵伽婆蹉は常に眼病を患ふ。是の人は乞食し

- 〔八〕 ●●●● アラセーゴット  
 ●●●● 波斯匿王 (マヘンダ)
- 〔六〕 須達多 (Sudatta)
- 〔六〕 畢陵伽婆蹉の慢心。

て常に恒水を渡るに、恒水の邊に到りて彈指して言く、「小婢よ、住つて流るること莫れ」と。水即ち  
 兩に斷れて乞食に過ることを得せしむ。是の恒神、佛の所に到り、佛に白さく、「佛弟子畢陵伽婆蹉は  
 常に我を罵つて、小婢よ、住つて流るること莫れと言ふ」と。佛、畢陵伽婆蹉に告げたまはく、「恒神  
 に懺謝せよ」と。畢陵伽婆蹉は即時に手を合せ、恒神に語つて言はく、「小婢よ、瞋ること莫れ、今汝  
 に懺謝す」と。是の時に大衆笑ふ、「云何か懺謝して復た罵るや」と。佛、恒神に語げたまはく、「汝、  
 畢陵伽婆蹉の手を合せて懺謝するを見るや不や。懺謝して慢ること無くし  
 て此の言あり。當に知るべし惡きに非ず。此の人は五百世來、常に婆羅門  
 の家に生れ、常に自ら嬌り貴ぶり、餘人を輕賤す。本來習ふ所の口言にし  
 て、己の心に嬌ること無きなり」と。是の如く諸の阿羅漢は、結使を斷す  
 と雖も猶 餘氣あり。諸の佛世尊の如きは、若し人刀を以て一臂を割り、若し人栴檀香を以て一臂  
 に泥らんに、左右の眼の如くにして心に憎愛なし。是を以て永く餘氣なし。旃闍婆羅門女は、盆を  
 帶して佛を誘り、大衆の中に於いて言く、「汝、我をして嫌ましむ。何を以てか愛ひて我に衣食を與  
 えざる。爾は羞なくして餘人を誑惑することを爲すか」と。是の時に五百の婆羅門の師等は手を舉げ  
 て唱へて言はく、「是なり、是なり。我曹、此の事を知れり」と。是の時に佛は異色なく、亦漸色なし。  
 此の事即時に彰露れ、地は爲に大に動き、諸天は供養して衆の名華を散じ、佛徳を讃嘆すれども、佛

【四】 猶氣には餘氣を殘氣に作  
 れり何れも意味に異りなく、  
 習氣の殘れるを言ふなり。  
 【六】 旃闍婆羅門女、盆  
 を帶して佛を誘れる因緣

は喜ぶ色なかりき。

復次に 佛は馬麥を食すれども、亦た憂惑すること無く、天王食を獻じて百味を具足すれども、以て悦を爲したまはず、一心無二なり。是の如き等の種種の飲食・衣服・臥具・讚・呵・輕・敬等の種種の事

あるも、中心異なること無きなり。譬へば眞金の燒き、鍛ひ、打ち、磨すれども、都て増し損すること無きが如し。是を以ての故に阿羅漢は結を斷じて道を得と雖も、猶ほ餘氣あれば、婆伽婆と稱することを得ず。

問うて曰く、婆伽婆はただ此の一名のみ有りや、更に餘名有りや。答へて曰く、佛の功德は無量なれば、名號も亦無量なり。此の名は其の大なる者を取る、人、多く識るを以ての故に。

復た異名あり、多陀阿伽陀と名くること有り。云何が多陀阿伽陀と名くるや。法相の如くに解し、法相の如くに説く。諸佛の如きは、安隱の道より來れり。佛も亦是の如く來りたまひ更に去らず、後有の中に至る。是の故に多陀阿伽陀と名く。復た、阿羅訶と名く。云何が阿羅訶と名くるや。阿羅を賊と名け、訶を殺と名く。是には殺賊と名く。偈に説くが如し。

『佛は忍を以て鎧と爲し、精進を銅錮と爲し、持戒を大馬と爲し、禪定を良弓と爲し、智慧を好

は喜ぶ色なかりき。

復次に 佛は馬麥を食すれども、亦た憂惑すること無く、天王食を獻じて百味を具足すれども、以て悦を爲したまはず、一心無二なり。是の如き等の種種の飲食・衣服・臥具・讚・呵・輕・敬等の種種の事

あるも、中心異なること無きなり。譬へば眞金の燒き、鍛ひ、打ち、磨すれども、都て増し損すること無きが如し。是を以ての故に阿羅漢は結を斷じて道を得と雖も、猶ほ餘氣あれば、婆伽婆と稱することを得ず。

問うて曰く、婆伽婆はただ此の一名のみ有りや、更に餘名有りや。答へて曰く、佛の功德は無量なれば、名號も亦無量なり。此の名は其の大なる者を取る、人、多く識るを以ての故に。

復た異名あり、多陀阿伽陀と名くること有り。云何が多陀阿伽陀と名くるや。法相の如くに解し、法相の如くに説く。諸佛の如きは、安隱の道より來れり。佛も亦是の如く來りたまひ更に去らず、後有の中に至る。是の故に多陀阿伽陀と名く。復た、阿羅訶と名く。云何が阿羅訶と名くるや。阿羅を賊と名け、訶を殺と名く。是には殺賊と名く。偈に説くが如し。

『佛は忍を以て鎧と爲し、精進を銅錮と爲し、持戒を大馬と爲し、禪定を良弓と爲し、智慧を好

は喜ぶ色なかりき。

復次に 佛は馬麥を食すれども、亦た憂惑すること無く、天王食を獻じて百味を具足すれども、以て悦を爲したまはず、一心無二なり。是の如き等の種種の飲食・衣服・臥具・讚・呵・輕・敬等の種種の事

あるも、中心異なること無きなり。譬へば眞金の燒き、鍛ひ、打ち、磨すれども、都て増し損すること無きが如し。是を以ての故に阿羅漢は結を斷じて道を得と雖も、猶ほ餘氣あれば、婆伽婆と稱することを得ず。

【六】 佛には憂世なきこと、金の燒磨すれども、増損なきが如し。  
【七】 第五問、佛陀には婆伽婆てふ一名のみありや、或は多名ありや。  
【八】 佛の徳は無量なれば、名號も亦た無量なり。  
【九】 多陀阿伽陀(三三三三三三三三)の義解。  
【一〇】 阿羅訶(三三三三三三三三)の義解。  
又阿羅漢とも書き、略して羅漢ともいふ。

箭と爲し、外魔王の軍を破り、内煩惱の賊を滅ぼす、是を阿羅訶と名く。』

復次に、阿を不と名け、羅訶を生と名け、是に不生と名く。佛心の種子は後世の田中に、無明の糠を生せず、脱するが故なり。

復次に、阿羅訶を一供養に應じ受くるものと名く。佛は諸の結使を除き盡して、一切智慧を得るが故に、一切の天地の衆生の供養に應受す、是を以ての故に佛を阿羅訶と名く。

復た三藐三佛陀と名く。云何が三藐三佛陀と名くるや。三藐を正と名け、三を遍と名け、佛陀を知と名け、是を正遍知一切法と言ふ。

問うて曰く、云何が「正遍知」なる。答へて曰く、

『苦をば苦相の如くに知り、集をば集相の如くに知り、滅をば滅相の如くに知り、道をば道相の如くに知る。』

是を三藐三佛陀と名く。

復次に、一切の諸法は實に不壞の相にして、不増、不減なりと知る。云何が不壞の相と名くるや。心行の處滅し、言語の道斷え、諸法を過して涅槃の相の動せざるが如し。是を以ての故に三藐三佛陀と名く。

復次に、一切の十方の諸の世界の名號、六道に攝する所の衆生の名號、衆生先世の因縁、未來世の

【九二】結使は煩惱の異稱  
【九三】三藐三佛陀(サニマツタスサニブツダ)の義解は四諦を如實に知る、之を正遍知といふ。

生處、一切の十方の衆生の心相、諸の結使、諸の善根、諸の出要、是の如き等の一切の諸法を悉く知る、是を三藐三佛陀と名く。

復た 婢修遮羅那三般那と名け、秦には明行足と言ふ。云何が明行足と名くるや。宿命、天眼、漏盡を名けて三明と爲す。

問うて曰く、神通と明と何等の異なること有りや。答へて曰く、直に過去の宿命の事を知る、是を通と名け、過去の因縁と行業とを知る、是を明と名く。直に此に死し、彼に生ずることを知る、是を通と名け、行の因縁の際會して失せざるを知る、是を明と名く。直に結使を盡して、更に生不生を知らざる、是を通と名け、若し漏盡きて更に復生せずと知る、是を明と名く。是の三明は大阿羅漢、大辟支佛の得る所なり。問うて曰く、(空

も、明を満足せず、佛は悉く満足す、是を異なれりと爲す。

問うて曰く、云何が満足せず、云何が満足するや。答へて曰く、諸の阿羅漢、辟支佛の宿命智は自身及び他人を知れども亦能く遍ねからず。阿羅漢は、一世、或は二世、三世、十百千萬劫乃至八萬劫を知ること有れども、是を過ぎて以往は復た知ること能はず。是の故に天眼明を満足せず、未來世も

- 【九二】 婢修遮羅那三般那 (ギツドヤイチヤラササムバツナ) の義解
- 【九三】 第六問、神通と明との異同如何。
- 【九四】 辟支佛 (Prajñā-sambhūta)
- 【九五】 第七問、佛と二乗との三明の相異を問ふ。
- 【九七】 第八問、三明満足の意義如何。

亦た是の如し。佛は一念の中に、生じ住し滅する時、諸の結使の分生するの時、是の如く住する時、是の如く滅する時に、是の如きの苦法忍、苦法智の中に斷する所の結使を悉く覺了し、是の如きの結使解脫の得、爾所の有爲法解脫の得、爾所の無爲法解脫の至道、此の忍を知れり。見諦道十五心の中の、諸の聲聞、辟支佛の覺知せざる所なり、時少しく疾きが故なり。是の如く、過去の衆生の因縁、漏の盡ることを知る。未來、現在も亦是の如し。行は身業、口業に名く。唯佛のみ身口業を具足せり。餘は皆失あり、是の故に明行足と名く。

復た 修伽陀と名く。修は秦に好と言ひ、伽陀は、或は去と言ひ、或は説と言ひ、是に好く去り好く説くと名く。好く去るとは、種種の諸の深き三摩提、無量の諸の大智慧の中に於て去るなり。偈に説くが如し。

「佛は一切智を大車と爲し、八正道を行いて、涅槃に入りたまふ。」

是を好く去ると名く。好く説くと名く。諸法實相と説き、法愛に著せずと説くが如く、弟子の智慧力を觀て、是の人は正しく一切の方便・神通・智力を以て、之を化せしむ、亦之を如何ともすること無し。是の人は度す可きこと、是れ疾し、是れ遲し。是の人は應に是の處に度すべし。是の人には應に布施を説き、或は持戒を説き、或は涅槃を説くべし。是の人には 五衆・十二・因縁四諦等の諸法を説かば、則ち能く道に入るべし。是の如き等種種に弟子の智力を知つて、而も爲に法を説く、是を好く説

【九〇】 修伽陀(ゴガタ)の解。  
 【九一】 五衆とは、五蘊の異名。

くと名く。

復た (100) 路迦憊と名く。路迦は秦には世と言ひ、憊を知と名く、是に世間を知ると名く。問うて曰く、云何が世間を知るや。答へて曰く、二種の世間を知る。一には衆生、二には非衆生なり。實相の如く、世間と世間の因と世間の滅とを知るは出世間の道なり。

復次に世間を知るとは、世俗の如く知るには非ず。亦外道の知にも非ず。世間は無常なりと知るが故に苦、苦なるが故に無我なりと知る。

復次に、世間の相は、有常に非ず、無常に非ず、有邊に非ず、無邊に非ず、去に非ず、不去に非ず、是の如きの相にも亦著せず、清淨にして常に不壞の相なること虚空の如し。是を世間を知ると名く。

復た (101) 阿耨多羅と名く。秦には無上と言ふ。

問うて曰く、云何が無上なる。答へて曰く、涅槃の法は無上なり。佛、自ら是を知る、涅槃は他に從つて聞かず、亦將に衆生を導いて、涅槃に至らしめんとす。諸法の中に涅槃の無上なるが如く、衆生の中に佛も亦無上なり。

復次に、持戒・禪定・智慧の衆生を教化するに、一切與び等しき者あること無し、何に況んや能く過ぎんや。故に無上と言ふ。

【100】路迦憊 (Lokaviti) の解。  
【101】阿耨多羅 (Anuttara) の義解。

復次に、阿を無と名け、耨多羅を上答と名く。一切の外道の法は答ふべく破るべし、實に清淨に非るが故なり。佛法は答ふ可らず、破す可らず、一切語言の道を出で、亦實に清淨なるが故なり。是を以ての故に無上と名く。復た 富樓沙曇藐婆羅提と名く。富樓沙を秦には「丈夫」と言ひ、曇藐を秦には「化す可し」と言ひ、婆羅提を調御師と言ひ、是に「丈夫を化すべき調御の師」と名く。佛は大慈大悲を以ての故に、有る時は軟美の語、有る時は苦切の語、有る時は雜語、此の調御を以て道を失せざらしむ。偈に説くが如し。

『佛法を車とせば、弟子は馬、實にや法寶の主は佛調御なり。若し馬道を出でて、正轍を失せば、是の如きは當に治め調伏せしむべし。』

若し小しく調ひ法治を輕くし、善を好んで成立せば、これを上道と爲す。若し治むべからざれば便ち棄捨す、是を以て調御を無上と爲すなり。』

復次に、調御の師に五種あり。初は父母、兄弟、親里の中の官法は下師の法なり。今世には三種法の治、後世には 閻羅王の治なり。佛は、今世の樂、後世の樂、及び涅槃の樂を以て利益するが故に師上と名く。四種法もて人を治むるは、久しからずして畢に壞れ、常に實に成就すると能はず。佛は人を成ずるに、三種の道を以てし、常に道に隨つて失せず。火の自相を捨てずして乃ち滅に至るが如く、佛の人をして善法を得せしむるも亦是の如し。死に至るまで捨てず、是を以ての故に佛を丈夫

【一〇】富樓沙曇藐婆羅提(Purī-sāṭambyānāhī)の義解。  
 【一一】閻羅は閻摩羅の訛略ならん。而して閻摩羅は閻魔(Māra)に同じ。

を化すべき、調御師と名く。

問うて曰く、(二〇四) 女人をも佛は亦た化して道を得せしむ。何を以て獨り丈夫と言ふや。答へて曰く、男は尊く、(二〇五) 女は卑しきが故に、女は男に従ふが故に、男を事業の主となすが故なり。

復次に、(二〇六) 女人に、五つの礙あり、轉輪王と釋天王と魔天王と梵天王と佛とに作ることを得ず。是を以ての故に説かず。

復次に、若し佛は女人の調御師なりと言はば、尊重せざるが爲なり。若し丈夫と説かば、一切で攝す、譬へば王の來るに、獨り來るべからず、必ず侍従あるが如し。是の如く丈夫と説けば、二根無根及び女を盡く攝す、是を以ての故に丈夫と説く。是の因縁を用ふるが故に、佛を丈夫を化すべき調御の師と名く。復た(二〇七) 舍多提婆魔菟舍喃と名く。舍多を秦に教師と言ひ、提婆を天と言ひ、魔菟舍喃を人と言ひ、是に天人の教師と名く。

云何が天人の教師と名くるや。佛は、是れ應作、是れ不應作、是れ善、是れ不善なりと示導したまふ。是の人は教に隨つて行じ、道法を捨てず、煩惱解脱の報を得、是を天人の師と名く。

問うて曰く、(二〇八) 佛は能く龍鬼神等の餘道の中に墮して生るる者を度したまふ。何を以てか獨り天人の師と言ふや。答へて曰く、餘道の中に生ずる者を度するとは少く、天人の中に生ずる者を度する

- 【二〇四】第九問、調御丈夫と言つて、調御女人を加へざる理由如何。
- 【二〇五】茲に佛教女性觀の一端を窺ふべし。
- 【二〇六】女人の五障。
- 【二〇七】舍多提婆魔菟舍喃(Shetabhisajit)の義解。
- 【二〇八】第一〇問、何故に佛を單に天人の師といふか。

とは多し。白色の人の如きは、黒鬚子ありと雖も黒人と名けず、黒少なきが故なり。

復次に人中は結使薄く、厭心得易く、天中は智慧利し。是を以ての故に二處は道を得易し、餘道の中は隔らず。

復次に、天と言へば則ち一切の天を攝し、人と言へば則ち一切地上の生者を攝す。何となれば天上は則ち天大に、地上は則ち人大なるを以てなり。是の故に天と説けば則ち天上盡く攝し、人と説けば則ち地上盡く攝す。

復次に、人中にては戒律の儀を受け、見諦道、思惟道、及び諸の道果を得、或は有人の言く、「餘道の中には得ず。」或は有人の言く、「多少は得、天人の中は得易ければ多く得」と、是を以ての故に佛を天人の師と爲す。

復次に、人中の行には、樂の因多く、天中には樂の報多し。善法は是れ樂の因、樂は是れ善法の報なり。餘道の中には善の因報少し、是の故に佛を天人の師と爲す。復た佛陀と名く。「秦には知者と言ふ」何等の法を知るや、過去未來現在の衆生の數、非衆生の數、「及び」有常無常等の一切の諸法を知る。菩提樹下において、了了に覺知したまひしが故に名けて佛陀と爲す。

問うて曰く、餘人も亦一切諸法を知る。摩醯首羅天の如きは、「秦には大自在と言ふ」八臂、

三眼にして、白牛に騎れり。韋紐天の如きは、「秦には遍闍と言ふ」四臂にして、具を捉り、輪を持

【一】 佛陀(Buddha)の義解。  
【二】 第一二問、外道の諸天と佛陀との區別如何。  
【三】 摩醯首羅天(Mahābrahmarāṣi)。  
【四】 韋紐天(Vaiśiṣṭhi)。

し、金翅鳥に騎る。(二三) 鳩摩羅天の如きは、(秦には童子と言ふ) 是の天に鶏を撃げ、鈴を持し、赤幡を提り、孔雀に騎る。皆是れ諸天の大將なり。是の如き等の諸天は、各大と言ひ、皆一切智と稱す。人あつて弟子と作り、其の經書を學び、亦其の法を受く、是を一切智と言ふ。答へて曰く、此は一切智なるべからず、何となれば願志憍慢にして心著すればなり。偶に説くが如し。

「若くは彩畫の像及び泥像、聞經中の天及び讚天、是の如きの四種の諸天等は、各各手に諸の兵仗を執る。若くは力如くして他を怖畏し、若くは心不善にして他を怖畏す。

此の天は定んで必らず若くは他を怖れ、若くは少力の故に他を畏る。是天は一切常に怖畏なり。諸の衰苦を除却すること能はず。

人あつて奉事恭敬するもの、現世に憂の海に没することを免れず。人

あり敬せず供養せざるも、現世に福樂を受くるを妨げず。

當に虚誑にして實事なきことを知るべし、是の故に智人は天に屬せず。若し世間の中の諸の衆生は、業因縁の故に循環するが如し。福徳の縁の故に天上に生じ、雜業の因縁にして人中に生ず。

世間の行業は因縁に屬す、是の故に智者は天に依らず。」

復次に、是の三天は、之を愛すれば則ち一切の願を得せしめんと欲し、之を惡めば則ち七世(の子孫)をして滅せしめんと欲す。佛は爾らず、菩薩たりし時、若し怨家の賊來つて殺さんと欲するも、

【二三】 鳩摩羅天 (Kumārā)

尚ほ自ら身肉・頭目・髓腦を以て之を供養す。何に況んや佛を得んをや。佛は身を惜む時あらず、是を以ての故に獨り佛のみ應當に佛の名字を受くべく、應當に佛に歸命したてまつるべし。佛を以て師となせ、應に天に事ふべからず。

復次に、(二四)佛に二事あり、一には大功徳神通力、二には第一淨心にして諸の結使を滅せり。諸天は福徳神力ありと雖も、諸の結使滅せざるが故に心清淨ならず、心清淨ならざるが故に神力も亦少し。聲聞辟支佛は結使滅して心清淨なりと雖も、福徳薄きが故に力勢少し。佛は二法を満足するが故に、一切の人に勝る。餘人は一切の人に勝らず。婆伽婆を有徳と名く。先に己に説けり。復た(二五)阿婆磨と名く。「秦には無等と言ふ」復た(二六)阿婆摩婆摩と名く。「秦には無等と言ふ」復た(二七)路迦那他と名く。「秦には世尊と言ふ」。復(二八)波羅伽と名く。「秦には度彼岸と言ふ」。復(二九)婆檀陀と名く。「秦には大徳と言ふ」。復(三〇)尸梨伽那と名く。「秦には厚徳と言ふ」。是の如き等の無量の名號あり。父母の名字は(三一)悉達多、(三二)秦には成利と言ふ」得道の時一切の諸法を知る、是を名けて佛と爲す。應に諸天世人の供食を受くべし。是の如く名を得るの大徳厚徳あり、是の如き種種の徳に隨つて名を立つるなり。

- 【二四】佛の二事を釋す。
- 【二五】阿婆磨 (Aparima)
- 【二六】阿婆摩婆摩 (Aparimabhamma)
- 【二七】路迦那他 (Lokajana) は 順世外道の梵名なれば、恐らば世尊の梵名 Lokajivana の誤寫ならむ。
- 【二八】波羅伽 (Paraka)
- 【二九】婆檀陀 (Padanta)
- 【三〇】尸梨伽那 (Sikhanada)
- 【三一】悉達多 (Siddhanta)

問うて曰く、(二三)汝は刹利種を愛す。淨飯王の子は悉達陀と字く。是を以ての故に汝は而も大に稱讚して、一切智と云ふも、一切智は人には無きなり。答へて曰く、爾らず、汝惡邪の故に佛を妬み

瞋つて妄語を作せども、(彼は)實に一切智の人あり。何となれば佛は一切衆生の中にて、身色顔貌の端正なると比なく、相徳明具、一切の人に勝れたり。小人も佛の身相を見ば亦是れ一切智の人なりと知る、何に況んや大人をや。放牛譬喻經の中に説くが如し。(二三)摩伽陀國の王、頻婆娑羅、佛及び五百の弟子を請すること三ヶ月、王は新しき乳酪・酥を須めて、佛及び比丘僧に供養せんとし、諸の放牛人に語ぐ、「近處に來つて住せよ」と。

日日新しき乳酪・酥を送り覺ること三ヶ月。王は此の放牛の人を憐愍し語つて言はく、「汝往いて佛を見たてまつり、還つて放牛に出でよ」と。諸

の放牛の人は、佛所に往詣し、道中に於て、自ら共に論じて言はく、(三五)我等人の説を聞くに、佛は是れ一切智人なりと。我等は下劣の小人なり、何ぞ能く實に一切智人ありと別ち知らん。諸の婆羅門は酥酪を好み喜び、常に諸の放牛の人の所に來往して親厚を作す。放牛の人は是に由つて、婆

羅門の種種の經書、名字を聞く故に(二六)四韋陀經の中の治病の法、鬪戰の法、星宿の法、祠天の法、

【二三】第一二問、人にして一切智を有し得るか。  
【二四】摩伽陀(Magadha)  
【二五】放牛人。印度の富豪の家には二百乃至三百頭の牛を飼養するを常とす。而して其等の牛は、毎朝一定の牧者によりて原野に放たれ、毎夕また其の家に連れ歸らる。此の牧牛者を、放牛の人と云ふ。  
【二六】放牛の人云をば、一切智人を試むる因縁。  
【二七】四韋陀(Samavedya)とは、梨俱韋陀(Rigveda)と、薩摩韋陀(Samavedya)と、阿他留韋陀(Atharvavedya)と、耶柔留(Yajurveda)となり。

歌舞・論議・難問の法、是等の六十四種の世間の技藝を言ふ。淨飯王の子は廣學多聞なり。若し是の事を知らば、難を爲すに足らず。其れ生れてより已來放牛せず、我等は放牛の秘法を以て之に問はん。若し能く解せば實に是れ一切智人ならん」と。是の論を作し已つて、前んで竹園に入り、佛の光明林間を照すを見て、進前んで佛に見えんことを覓む。樹下に坐したまふ狀は金山に似たり。蘇を火に投するに、其の焰の大に明かなるが如く、或は鎔かせる金に似たり。竹林の間に散せる紫金の光色あり、之を視て厭ふ心なし。大に歡喜して、自ら相聞つて言はく、

『今此の釋師子は、一切智なきこと有らんや。之を見て喜ばざるもの無し、此の事も亦已に足れり。光明は第一に照し、顔貌は甚た貴重に、身相に威德備はり、佛の名と相稱へり。』

相相皆分明に、威神も亦満足し、福德自ら纏絡して、見る者愛せずといふこと無く、圓光身處の中、觀る者厭足なし。

若し一切智ある(ものに)は、必ず是の功德あらん。一切の諸の彩畫・寶飾・莊嚴の像も此の妙身に比せんと欲するに、以て輪と爲すべからず。能く諸の觀る者を滿(足)せしめて、第一の樂を得せしむ。之を見れば淨信を發す、必ず是れ一切智ならん。』

是の如く思惟し已つて佛を禮して坐す。(三毛)佛に問うて言はく、「放牛の人は幾の法あつて成就して

【三毛】放牛の人に十一の法あり、比丘も亦た是の如し。

能く牛群をして蕃息せしめ、幾の法あつて成就せず、牛群をして増さずして安隱なることを得ざらしむるや」と。佛、答へて言はく、「(三六)十一の法あり、放牛の人は、よく牛群をして蕃息せしむ。何等か十一なる。色を知り、相を知り、刮刷を知り、覆瘡を知り、作烟を知り、好道を知り、牛の所宜の處を知り、好く度濟することを知り、安隱の處を知り、乳を留むることを知り、養牛の主を知る。若し放牛の人、此の十一の法を知らば、能く牛群をして蕃息せしめん。比丘も亦是の如く十一の法を知らば能く善法を増長せん。云何が色を知る。黒と白と雜色とを知る。比丘も亦是の如く、一切の色は皆是れ四大にして、四大の造なりと知る。云何が相を知る。牛の吉、不吉の相を他の群と合せて、相に因つて則ち識る。比丘も亦是の如く、善業の相を見ては、是を智人なりと知り、惡業の相を見ては、是を愚人なりと知る。云何が刮刷する。諸蟲の爲に血を飲まれば、則ち諸瘡を増長す。刮刷すれば、則ち害を除く。比丘も亦是の如く、惡邪覺觀の蟲、善根の血を飲めば、心瘡を増長し、除けば則ち安隱なり。云何が覆瘡なる。若くは衣、若くは草葉、以て蚊蠅の惡刺を防ぐ。比丘も亦是の如く、正觀の法を念じて、六情の瘡を覆ひ、煩惱・貪欲・瞋恚の惡蟲の刺棘をして傷つけられしめず。云何が煙を作りて、諸の蚊蠅を除くとを知る。牛は遙に烟を見て則ち來りて屋舎に趣向す。比丘も亦是の如く、聞く所の如く説いて、諸の結使の蚊蠅を除くに、説法の烟を以て衆生を引き無我・實相・空の舎中に入る。云何が道を知る。牛は行き來り去る所の

【二六】佛、放牛の秘法を説く。

好惡の道を知る。比丘も亦是の如く、二三元はつしやうたりし。八聖道を知り、能く涅槃に至り、(二)斷常の惡道を離る。云何が牛の所宜の處を知る。能く牛をして蕃息し、少病ならしむ。比丘も亦是の如く、佛法を説く時、清淨の法喜を得れば、諸の善根増盛す。云何か度濟することを知る。易く入り、易く渡るに、波浪・惡蟲なき處を知る。比丘も亦是の如く、能く多聞の比丘の所に至りて法を問ふ。法を説く者も前人の心の利鈍・煩惱の輕重を知り、人をして好く濟ひ、安隱に度を得せしむ。云何が安隱の處を知るや。所住の處に、虎・狼・師子・惡蟲・毒獸なきを知る。比丘も亦是の如く、四念處は安隱にして、煩惱の惡魔毒獸なしと知る。比丘は此に入れば則ち安隱にして患無し。云何が乳を留むるや。犢母は犢子を愛念するが故に乳を與へ、以て殘乳を留むるが故に、犢母歡喜すれば、則ち續いて竭きざるあり。牛主及び放牛の人は日日益あり。比丘も亦是の如く、居士・白衣の衣食を給施するに、常に節量を知り、罄竭せしめざれば、則ち檀越歡喜して、信心絶えず、受くる者も乏しきこと無かるべし。云何が養ふことを知るや。牛主は大犢牛を護り、能く牛群を守るが故に、應に養護して羸瘦せしめず、飲ましむるに麻油を以てし、飾るに瓔珞を以てし、標するに鐵角摩刷稱譽等を以てす。比丘も亦是の如く、衆僧の中に威徳の大人あり、佛法を護益し、外道を推伏し、能く八衆をして、諸の善根を殖え、其の宜しき所に随つて、恭敬供養等を得せしむ。

【二九】八聖道とは、前にも早げたるが如く正見・正思惟・正善・正業・正精進・正定・正念・正智の八なり。

【三〇】斷常とは、有情の身心は一期を限つて斷絶すと見る斷見と、身心共に常住不滅なりと見る常見とをいふ。

放牛の人は、此の語を聞き已つて是の如く思惟すらく、「我等放牛人の知る所は、三四事に過ぎず。放牛師の輩も遠く五六事に過ぎず。今此の説を聞いて、未曾有なりと嘆ず。若し此の事を知らば、餘も亦皆爾らん。實に是れ一切智人なり。復た疑ふと無きなり」と。此の經は、此の中に應に廣く説くべし。是を以ての故に一切智人あることを知る。(三三)問うて曰く、世間には、一切智人あるべからず。何となれば一切智人を見し者なければなり。答へて曰く、爾らず、見ざるに二種あり、見ざるを以ての故に便に無しと言ふ可らず。一には事實に有れども、因縁覆ふを以ての故に見ず、譬へば人の姓族の初、及び雪山の斤兩、(三三)恒水の邊の沙の數は有れども知るべからざるが如し。二には實に無きが故に見ず、譬へば第二頭第三手は因縁覆ふと無くして而も見るべからざるが如し。是の如く一切智人も、因縁覆ふが故に見ざるなり、一切智人無きには非ず。何等か是れ覆ふの因縁なる。未だ四信を得ずして、心惡邪に著す、汝は是の因縁覆ふを以ての故に一切智人を見ざるなり。

問うて曰く、(三四)所知の處、無量なるが故に一切智人なし。諸法は無量無邊なり、多人和合するも尙知ること能はず、何に況んや一人をや。是を以ての故に一切智人なし。答へて曰く、(三五)諸法無量なるが如く、智慧も亦無量、無數、無邊なり、爾大なれば蓋も亦大に、爾小なれば蓋も亦小なるが如し。

【三三】第一三問、世に一切智の人あり得べからずと難す。

【三三】見ざるに二種あり。

【三三】恒水とは、恒河といふに同じ。

【三四】第一四問、又他の理由を擧げて、世に一切智人のあり得べからざるを主張す。

【三五】爾大なれば蓋大なるが如く、諸法無量なれば智慧亦た無量なり。

問うて曰く、三業は自ら佛法を説きたまふも、餘經の若くは藥方と、星宿と、算經と世典と、是の如き等の法を説きたまはず。若し是れ一切智人ならば、何を以てか説きたまはざる。是を以ての故に、一切智人に非ざることを知る。答へて曰く、一切の法を知るも、用あるが故に説き、不用なるが故に説かず、人あり問ふが故に説き、問はざるが故に説かず。

復次に、一切の法を釋して説くに三種あり、一には有爲法、二には無爲法、三には不可説の法なり。此の三には已に一切の法を攝す。

問うて曰く、十四の難に答へたまはず、故に知る、一切智人に非ること。何等か十四の難なる。世界及び我は常なり。世界及び我は無常なり。世界及び我は亦有常にして亦無常なり。世界及び我は有邊なり。無邊なり。亦行邊にして亦無邊なり。亦た有邊に非ず、亦た無邊に非ず。死後、神去ることあり。後世神去ること無し。後世亦た神去ること有り、亦た神去ること無し。死後、亦た神去ること有るに非ず、亦た神の後世に去ること無きに非ず。是の身は

【三業】第一五問、釋尊は専ら佛法を説き、藥方・算經・星宿等を説き能はざるに、一切智人といふは何故なるか。

【二七】有爲法とは、梵語サマルスカラ・サマルマツカラ・サマルカ・サマルカ・サマルカ・サマルカの譯語、爲とは造作の義にして、造作を有するものを有爲法といふ。即ち因縁轉生の事物に盡く有爲法なり。能生の因縁は所生の事物を産るもの、所生の事物は必ず此の因縁の造作を有するが故に有爲法といふ。

【二六】無爲法とは、梵語アサマルスカラ・サマルカ・サマルカ・サマルカの譯語にて、(爲は造作の義)、即ち因縁によつて造作されざるもの、造作無常の四相によつて造作されざるものをいふ。約言せば眞理の異名なり。

【二元】第一六問、佛は十四の難に答へ能はざりしが故に一切智人にあらざるべし。

是れ神なり。身は異なり、神は異なり。若し佛一切智人ならば、何を以てか此の十四の難に答へざるや。答へて曰く、(四〇二) 此の事は實なきが故に答へず。諸法の有常は此の理なし、諸法の斷も亦此の理なし、是を以ての故に佛は答へたまはず。譬へば人の牛の角を搆つて、幾斗の乳をか得ると問はば是を問に非ずと爲して、答ふべからざるが如し。

復次に、世界の無窮なるとは、車輪の如く、初も無く、後も無しと答ふ。復次に、此に答ふれば利無くして失あり、惡邪の中に墮す。佛は十四の難は常に四諦、諸法實相を覆ふことを知りたまふ。度る處に惡蟲あれば、人を將ゐて度るべからず。安隱にして患處なくんば、人に示して度らしむ可きが如し。

復次に、有る人の言く、「是の事は一切智人に非ずんば解すると能はず。人知ること能はざるを以ての故に、佛は答へたまはず」と。復次に、若し人「無を有と言ひ、「有を無と言はゞ、是を一切智人に非ずと名く。一切智人は、有を有と言ひ、無を無と言ふ。佛は有を無と言ひたまはず、無を有と言ひたまはず、但諸法實相をのみ説きたまふ。云何ぞ一切智人と名けざらんや。譬へば日の高下を作さず、平地を作さず、等一に照すが如し。佛も亦是の如く、非有を無と作し、非無を有と作し、常に實智慧の光もて、諸法を照すこと、一道の如くに説きたまふ。

【四〇】十四の難問には、答ふるの要なきこと、牛の角を搆つて幾斗の乳を得るやとの間に對して、答ふるの必要なきが如し。

人あり佛に問うて言はく、「大徳、**二四**十二因縁は佛の作なりや、他の作なりや」と。佛の言はく、

「我は十二因縁を作らず、餘人も亦た作らず。佛あるも佛なきも、因縁老死を生ず、是の法は常に定

んで住す。佛は能く是の生の因縁、老死乃至無

明の因縁の諸行を説きたまへり」と。

復次に、十四難の中に、若し答ふれば過罪あり。若し人、石女と黃門の兒の長短、好醜とは、

何の類ぞと問はば、此は答ふべからず、兒なき

を以ての故に。

復次に、此の十四の難は、邪見にして實に非

ず、佛は常に眞實を以てす。是の故に、**二四**置て

答へたまはざるなり。

復次に、置いて答へざる、是を答と爲す。

四種の答あり、**二四**一には決定答、佛は第一涅

槃安穩なりとの如し。**二**には解義答、**三**には反問答、**四**には置答なり。此の中佛は置答を以てしたま

ふ。汝は一切智人なしと言ふも、是れ言あつて義なし、是れ大妄語なり。實には一切智人あり、何と

【二四】十二因縁の作者は誰ぞ。

【四三】置いて答へとは、因明論の所謂置答、即默答のことなり。

【四二】四種の答へ方を擧ぐ。佛地論六、俱舍論十八に之を四記といふ。

(一)決定答。一向記。若し人一切有情は皆當に死すべきや否やと問はば、應に一向に記すべし、一切有情は皆當に死すべしと。

(二)解義答。分別記。若し人凡て死するものば皆當に死すべきや否やと問はば、應に分別して記すべし、煩惱ある者は當に死すべし、餘は然らずと。

(三)反問答。反詰記。若し人は勝とせんか、劣とせんか、と問はば、應に反詰して記すべし、何の所に比して然か言ふや、若し天に比せば應に人は劣れりと記すべく、若し三途に比せば人は勝れたりと記すべしと。

(四)置答。捨置記。若し人五蘊と有情と一とせんや、異とせんやと問はば、應に捨置記なるべし。有情は實在にあらざるが故に一異の性を論ずる能はざればなり。譬へば石女兒の黑白等の性を論ずるが如し。

なれば十力を得て、【罽】處非處を知るが故に、因縁業報を知るが故に、諸の禪定解脱を知るが故に、衆生の根の善悪を知るが故に、種種の欲解を知るが故に、種種の世間の無量の性を知るが故に、一切の至る處の道を知るが故に、先世の行處を憶念して知るが故に、天眼を分明に得るが故に、一切の漏の盡きたるを知るが故に、淨不淨を分別して知るが故に、一切世界の中の上法を説くが故に、甘露味を得るが故に、中道を得るが故に、一切の法、若しくは有爲、若しくは無爲實相を知るが故に、永く三界の欲を離るゝが故に、是の如き種種の因縁の故に、佛を一切智人と爲す。

問うて曰く、【罽】一切智人あらば、何等の人が是なるや。答へて曰く、是れ第一の大人にして、三界の尊なり、名けて佛と曰ふ。讚佛の偈に説くが如し。

『頂生轉輪王は、日月の燈明の如く、釋迦貴族種の淨飯王の太子よ、

生るる時、三千の須彌山の海水を動かす。

老病死を破り、「衆生を」哀愍するが爲の故に世に生ず。生るゝ時行くこと七步、光明は十方に滿ち、四「方」を觀て大音を發して「言く」、「我よ生胎の分盡きたり」と。

成佛して妙法を説き、大音は法鼓を振ふ、此を以て衆生世間の無明の睡を覺る。是の如き等の種

【罽】處非處、處とは爲すべき事(Sthāna)、非處とは爲すべからざる事(Asthanā)なり。而して之を知るは、如來の十力の第一なり。  
 【罽】縮藏には別を明に作る。  
 【罽】第一七問、如何なる人を一切智人といふか。

種の希有の事已に出ず、諸天及び世人とよ、之を見て皆歡喜せり。

佛相は莊嚴の身にして、大光満月の面なり。一切の諸の男女は、之を視て厭足すること無し。

佛身の乳哺の力は、萬億の香象に勝れ、神足の力は無上に、智慧の力は無量なり。

佛身の大光明は佛身の表を照耀す。佛、

光明の中に在すことは、月の光の裏に在るが如し。

種種の惡を以て佛を毀れども、佛には亦た

惡の想なし。種種に佛を稱譽すれども佛に

は亦た喜の想なし。

大慈の一切を視ること、怨親等くして異なること無し。一切の誠あるの類は、咸く皆

此の事を知る。

忍辱慈悲の力の故に能く一切に勝れたり。

衆生を度せんが爲の故に、世世勤苦を受くるも、其の心は常に一定して、衆生の爲に利益を作す。

智慧の力に十あり、一、無畏の力に四あり、二、不共の十八あり、無量の功德藏なり。是の如き等

【四七】無畏とは、如来が他の批評に動ぜず、自覺自信に基きて、その感化を行ふをいふ。

(一)一切正智無所畏 (Ananta-kasambuddha-vastirādhya) とは、他人が如来は一切正智の人にあらずと批評すとも、之を畏れず、之に動ぜざるをいふ。

(二)漏盡無所畏 (Kāśīnārasava-vastirādhya) とは、如来には未だ滅盡せざる諸漏煩惱ありとの批評に動かされざるをいふ。

(三)說障道無所畏 (Antar-jitā-dharmā-vastirādhya) とは、如来には、斯く斯く然かゝの障礙ありとの

批評に動かされざるをいふ。

(四)壽盡苦道無所畏 (Dhikha-kāśīnārasava-vastirādhya) とは、如来所説の法が十分に苦を滅するに足らずとの批評に動かされざるをいふ。

如来は此の自信を以て、大衆の中に師子吼したまふなり。

【四八】十八不共法。これ佛に限る十八種の功德法なり。換言せば佛のみに有りて、他の聲聞、緣覺、菩薩の共有にあらざらんが故に不共法 (Avaṅ-kāraṇa) といふ。詳くは本論第二十六巻を見よ。

の無數むしゆの希有けいうの功德くどく力りきあり。

師子ししの如ごとくにして畏おそるゝこと無く、諸もろもろの外道げだうの法ほふを破やぶり、無上むじやうの梵輪はんりんを轉てんじて、諸もろもろの三界さんがいを度脱どだつしたまふ。』

是こゝを名なけて婆伽婆バガワトと爲なす。婆伽婆バガワトの義ぎは無量むりやうなり。若もし廣ひろく説とかば、則すなはち餘よの事ことを廢はいせん。是を以もつての故ゆゑに略説りやくせつせり。

# 卷の第三

初品中の「王舎城に住したまへり」を釋す。

【一】 王舎城に住したまへり。

問うて曰く、何を以てか直に般若波多蜜多の法を説かずして、佛は王舎城に住したまへりと説くや。答へて曰く、方と時と人とを説き、人をして心に信を生ぜしむるが故なり。云何が住と名くる。四種の身儀あり。坐と臥と行と住となり。是を王舎城に住したまへりと名く。又摩軍を恐るゝ衆を以て、自ら弟子をして歡喜して、種種諸の禪定に入らしむるが故に、是の中に在て住したまふ。

復次に、三種の住あり。天住・梵住・聖住なり。六欲天の住法、是を天住と爲す。梵住等乃至非有想非無想天の住法、是を梵住と名く。諸佛諸支佛阿羅漢の住法、是を聖住と名く。是の三住法の中、聖住法に住して、衆生を憐愍するが故に王舎城に住したまへりと云ふ。

復次に、布施と持戒と善心と三事の故に天住と名く。慈と悲と喜と捨と四無量心の故に梵住と名

- 【一】 第一問、直に般若波羅蜜多の法を説かずして、王舎城に住し給ふと説く理由如何。
- 【二】 信を生ぜしめんが爲に經の初に先づ方・時・人を説く。
- 【三】 住の義を明す。
- 【四】 三種の住法を埒す。
- 【五】 四無量心 (Cātvarāgamaṃ) 一ナチツクイ。

く。空と無相と無作と、是の三の三昧を聖住と名く。聖住の法は、佛、中に於て住したまふ。

復次に、四種の住あり。天住と梵住と聖住と

佛住となり。三住は前に説くが如し。佛住とは、

首楞嚴等の諸佛無量の三昧、十力、四無所畏、十

八不共法、一切智等の種種の諸慧、及び八萬四千

の法藏にして、人を度するの門なり。是の如き

の種種の諸佛の功德、是諸佛の所住處なり。佛

は中に於て住し給ふ。略して住を説き竟んぬ。

王舎城とは、問うて曰く、舎婆提、迦毗

羅、波羅奈大城の如き、皆諸王の舎有り。何を

以ての故に獨り此の城を名けて王舎と爲すや。

答へて曰く、有人は言ふ「是れ摩迦陀國王に子

あり、一頭兩面四臂なり、時人以て不祥なりと

爲す。王即ち其の身首を裂いて之を曠野に棄つ。

羅刹女鬼あり、闍維と名く。還つて其身を合せ而も之を乳養す。後大に成人して力能く諸國王を並兼し、天下を有ち、諸國の王、萬八千人を取つて此を

【六】三三昧。新譯には三三摩

地といひ、三定、三持と譯

す。一に空三昧、苦諦の空、

無我の二行相と相應する定な

り。諸法は因縁生にして、我

なく我所有なしと觀じ、我と

我所との二を空するが故に空

三昧といふ。二には無相三昧、

これ滅諦の滅・靜・妙・離と

相應する定なり。涅槃は色聲

香味觸の五法、男女の二相、

及び三有爲相の十相を離るゝ

が故に無相といひ、無相を緣

る定なり。蓋し苦諦の苦と無

常と、及集諦は厭惡すべきも

のなるが故に、又道諦の道、

如・行・出の四行相は船筏の如

く、必らず捨つべきものなる

が故に、總じて之を願樂せず、

之を緣とするを無願三昧、若

くは無作三昧といふなり。

【七】第二問、王舎城(Varanasi)

といふ理由如何。

【八】五山とは、王舎城の周圍

にある左記の諸山をいふ。

- (一) Varanasi (サフタバルナ)
- (二) Sankharini (インドラサイラ)
- (三) Indrakasita (カルビシユクンデイカ)
- (四) Anantakundina (アンタクンディーナ)
- (五) Odrakuta (オドラクータ)

五山の中に置き、大力勢を以て、閻浮提を治む。閻浮提の人因て此の山を名けて王舍城と爲す」と。

復次に、有人は言ふ、「摩訶陀王の先に住する所の城あり。城中火を失し、一たび焼くれば一たび作り、是の如く七たびに至り、國人疲役す。王大に憂怖し、諸の智人を集め、其意の故を問ふ。有が言く、應に處を易ゆべし」と。王即ち更に住處を求む。此の五山を見るに、周布して城の如し。即ち宮殿を作り中に止住す。是を以ての故に王舍城と名く」と。

復次に、往古の世の時、此の國に王あり、婆藪と名く。心、世法を厭ひ、出家して仙人と作る。是の時、二〇〇居家の婆羅門、諸の出家の仙人と共に論議す。居家の婆羅門の言く、「經書に云ふ、天祀の中に、應に生を殺し、肉を噉ふべし」と。諸の出家の仙人の言く、「天祀の中に、生を殺し、肉を噉ふべからず」と。共に諍うて云云す。諸の出家の婆羅門の言く、「此

【九】 婆藪（ブス）仙人現身に  
墮獄して因縁。  
【二〇】 居家の婆羅門とは、家庭  
生活を楽しむ婆羅門といふ意  
味にて、俗人の婆羅門といふ  
に同じ。

に大王あり。出家して仙人と作る、汝等信せんや不や」と。諸の居家の婆羅門の言く、「信せん」と。諸の出家の仙人の言く、「我は此の人を以て證と爲す、後日當に問ふべし」と。諸の居家の婆羅門、即ち其夜を以て先づ婆藪仙人の所に到り、種種に問ひ已つて婆藪仙人に語るごとく、「明日論議す、汝當に我を助くべし」と。明旦に論議する時、諸の出家の仙人、婆藪仙人に問ふ、「天祀の中に應に生を殺し、肉を噉ふべきや不や」と。婆藪仙人の言く、「婆羅門の法天祀の中に、生を殺し、肉を噉ふべし」

と。諸の出家の仙人の言は、「汝が實心に於て云何。生を殺し肉を噉ふべきや不や」。婆藪仙人の言は、「天祀の爲めの故に、生を殺し、肉を噉ふべし。此の生は天祀の中に在て死するが故に、天上に生ずることを得」と。諸の出家の仙人の言は、「汝大に不是なり。汝大に妄語せり」と。即ち之に唾して言は、「罪人滅し去れ」と。是時に婆藪仙人、尋いで地に陥入し踝を没す。是れ初めて大罪門を開くが故に。諸の出家の仙人の言は、「汝應に實語すべし。若し故らに妄語せば、汝が身當に地中に陥入すべし」と。婆藪仙人の言は、「我、天の爲を知るが故に、羊を殺し肉を噉ふて罪無し」と。即ち復地に陥ち入ること、膝に至る。是の如く漸漸に稍没して、腰に至り頸に至る。諸の出家の仙人の言は、「汝今妄語して現世の報を得たり。更に實語を以てせば、地中に入ると雖も、我能く汝を出し、罪を免るることを得せしめん」と。爾の時に婆藪仙人自ら思惟して言は、「我は貴重の人なり、兩種に語るべからず。又婆羅門の四圍陀法中の種種の因縁、讚祀法の法は、我一人死せば、何ぞ計るに足るべけんや」と。心を一にして言は、「應に天祀の中に生を殺し、肉を噉ふも罪無かるべし」と。諸の出家の仙人の言は、「汝は重罪の人なり、去るを催す、汝を見ることを用ゐず」と。是に於て擧身地中に没す。是より以て乃至今日まで、常に婆藪仙人の法を用ふ。天祀の中に於て羊を殺すに、刀を下だす時に當つて、「婆藪汝を殺す」と言ふ。婆藪の子を名けて廣車と曰ふ。位を嗣いで王と爲り、後亦世法を厭ふ。而れども復出家すると能はず、是の如く思惟すらく、「我が父、先王出家して生きながら地中

に入る。若し天下を治めば復大罪を作さん。我いま當に何を以てか自ら處るべき」と、是の如く思惟す。時に空中に聲を聞く。言く、「汝若し行いて、難値希有の處を見れば、汝は是の中に舍を作つて住すべし」と。是の語を作し已つて、復た復た聲を聞かず。未だ幾時を經ずして、王田獵に出づ。一鹿の走るあり。疾きこと風の如くなるを見る。王便ち之を逐へども、而も及ぶべからず。遂に逐ふて止まらず。百官侍從能く及ぶ者無し。轉た前み見るに五山有り。周市峻固にして其地平正なり。生草細軟にして好華地に遍ねく、種種の林木華果茂盛し、（二）溫泉浴池皆悉く清淨なり。其地を莊嚴し、處處に天華天香を散し、天の伎樂を聞くこと有り。此の時に乾闥婆伎、適ま王の來るを見て、各自ら還り去る。是處は希有にして未だ曾つて見る所にあらず。今我正に是の中に在つて舍を作りて住すべし」と。是の如く思惟し已つて、群臣百官諫を尋ねて到る。王諸臣に告ぐ、「我が前に聞く所の聲の言く、「汝行いて若し希有難値の處を見れば、汝應に是の中に舍を作り住すべし」と。我今此の希有の處を見る。我應に是の中に舍を作り住すべし」と。即ち本城を捨てて此山中に於て住す。是王初始めて是中に在つて住す。是より已後次第に止住せり。是の王先づ起つて宮舍を造立す。故に王舍城と名く。畧して王舍城を説き竟んぬ。

【二】 今尙ほ此の溫泉あり、自然に湧出して流るゝこと宛然満の如し。

春園囑山の中に。

者園をば鷲と名け、囑をば頭と名く。(三)と問うて曰く、何を以てか鷲頭山と名づくるや。答へ

て曰く、是の山の頂鷲に似たり。王舎城の人、其の鷲に似たるを見るが故

に、共に傳へて鷲頭山と言ふ。因つて之を名けて鷲頭山と爲す。

復次に、王舎城の南(四)屍陀林の中に諸の死人多し。諸鷲常に来つて之

を啄ひ、還つて山頭に在り、時人便ち鷲頭山と名づく。是の山は五山の中

に於て、最も高大にして、多く林水を好める聖人の住處なり。

問うて曰く、(五)已に者園囑山の義を知る。佛は何を以ての故に王舎城に

住したまひしや。諸佛の法は普く一切を慈むと、日の萬物を照らして、明

を蒙らざる無きが如し。(六)漚祇尼大城・富樓那跋檀大城・阿藍車多羅大城・

弗迦羅婆多大城の如き、是の如き等の大城、多人豊樂すれども、而も住せ

ず。何が故ぞ、多く王舎城・舍婆提に住し、少く波羅奈・迦毗羅婆(七)瞻婆・

婆翅多(八)拘賤・鞞・鳩樓城等に於ても住する時有りとも雖も、多くは王舎城と舍婆提とに住したまふ

や。云何ぞ多く二處に住することを知れる。佛の諸經を見るに、多く二城に在つて説き、少く餘城に

在り。答へて曰く、佛の大慈、等しく以て漚祇尼等の諸の大城に及ぶと雖も、是は邊國の故に住せ

【三】 春園囑山(Girivakuta)。

【四】 第三間。鷲頭山と名くる理由如何。

【五】 屍陀林(Shitaka)また尸多婆那とも書す、譯して寒林といふ。昔、死屍を棄てし處なり。

【六】 第四間、佛が主として王舎城に住して、他の漚祇尼大城等に住みたまはざりし理由如何。

【七】 漚祇尼(Uddiyani)瞻婆(Champa)。

【八】 拘賤(Kaushambi)。

又彌離車の地は弊惡の人多し、善根未熟なるが故なり。偈に説くが如し。

「日光等しく照せども、華熟すれば即ち時に開き、若し華未だ應に敷くべからずんば、即ち亦強

いて開かざるが如し。

佛も亦復是の如く、等心にして説法したまへども、善根熟すれば則ち

敷き、未熟なれば則ち開かず。

是を以ての故に世尊は、利智と善根熟と結使煩惱の薄き、「是の」三種

の人の中に住したまふ。』

復次に、恩を知るが故に多く王舎城と舍婆提城とに住せり。問うて曰く、

云何が恩を知るが故に多く二城に住せしや。答へて曰く、三橋薩羅國は是

れ佛所生の地なり。佛の賴婆娑羅王に答へたまへる偈に説くが如し。

「妙好の國土行り、雪山の邊に在り、豐樂にして異寶多し、名づけて

橋薩羅と曰ふ。

日種釋の諸子、我是の中に在りて生る。心、老病死を厭ひ、出家して佛道を求む。』

又是の橋薩羅國の主、波斯匿王は舍婆提大城の中に住す。佛、法王と爲りて、亦此の城に住

せり。二主應に一處に住すべきが故に多く舍婆提に住したまへり。

【九一】彌離車 (Milechya)

【九二】橋薩羅 (Kosala)。傳説に

よれば、昔、コーサラ國の甘

庶王 (Ithakshetravijaya) に四王子あり、

普長后の生む所なり。後、少

后王子を生むに及び、事に由

りて四王子を讒す。王怒つて

四王子を放つ。四王子追はれ

て東南に走り、雪山山麓の高

臺に至り、一湖に定住し、

四姉妹と婚して、此の地に國

を建つ。是れ即ち釋迦種族の

祖先なりと云

復次に、是の憍薩羅國は、佛身を生ずるの地なり。恩を知るが故に多く舎婆提に住せり。

問うて曰く、若し恩を知るが故に、多く舎婆提に住さば、迦毗羅婆城は佛の生處に近し、何ぞ

多く住さざる。答へて曰く、佛は諸結盡きて復た餘習なし、諸の親屬に近けれど亦異想無し。然

も釋種の弟子多く未だ欲を離れず、若し親屬に近ければ則ち染著の心を

生ず。

問うて曰く、何を以てか舎婆提の弟子を護らずして、而も多く舎婆

提に住せしや。答へて曰く、迦毗羅婆は弟子多し。佛、初て國に還りた

まふに、迦葉の兄弟千の比丘は、本婆羅門の法を修し、山間に苦行し、形

容憔悴せり。父王之を見たまふに、此の諸の比丘は、世尊を光飾するに足

らざるを以て、即ち諸釋の貴人の子弟にして、兼て人の少壯なるを選ん

で、戸より一人を遣はし、強いて出家せしむ。其中に善心にして、道を樂

しむ有り、樂しまざる者有り。此の諸の比丘をば、本生の處に還らしむべからず。舎婆提の弟子の輩

は爾らず。是を以ての故に、佛、多く舎婆提に住し、多く迦毗羅婆に住したまはず。

復次に、出家の法應に親屬に近づかざるべし。親屬は心著すること、火の如く、蛇の如し。居

家の婆羅門の子すら、學問の爲の故に、尙生處に在るべからず、何に況んや出家沙門をや。

【三】 第五問、迦毗羅婆國に住し給はざりし理由如何。

【三】 迦毗羅婆 (Kapilavastu) 【三】 第六問、シユラーワステ

イの弟子を護らざりし理由如何。

【四】 淨飯王、千の釋氏をして出家せしむ。

【五】 親屬に近づかざるは出家の法なり。

復次に (三三) 舍婆提城は大なり、迦毗羅婆は爾らず。舍婆提城には (三三) 九億の家あり。是の中に若し少時住したまはば多人を度すことを得ず。是を以ての故に多く住したまへり。

復次に、迦毗羅婆城の中は佛の生處なり。是中の人は、已に久しく習行して、善根熟し、利(根)にして智慧あり。是の中には佛少時說法して、久しく住すことを須るす。度し已つて去りたまひしなり。

舍婆提の人は、或は初めて習行し、或は久しく習行し、或は善根熟し、或は善根未熟、或は利根、或は不利根、多く種種の經書を學するが故に、研心にして利ならしめ、種種邪見の網の中に入り、種種の師に事へ、種種の天に屬し、雜行

の人多し。是を以ての故に、佛は此に住したまふこと久し。癩を治するの師は、癩の已に熟するを知つて、破つて膿を出だし、藥を與へて去り、癩未だ熟せざれば、是れ則ち久しく住して塗慰するが如し。佛も亦是の如く、若し弟子善根熟すれば、教化し已つて更に餘處に至り、若し度すべき弟子、善根未熟なれば、則ち久住すべし。佛の世間に出でたまへるは、正しく衆生を度し、涅槃の境界安隱の樂處に著けんと欲するが爲めなり。是の故に多く舍婆提に住し、多く迦毗羅婆に住さず。佛、摩伽陀國尼連禪河の側、(三六) 漚樓頻螺聚落に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得、法身を成就するが故に、多く王舍城に住したまへり。

【二六】 佛、舍婆提城に住し給ひし理由。

【二七】 當時印度に於ては、十萬を以て一億と算したり。

【二八】 漚樓頻螺(ウルクピラ)は、釋尊苦行の靈地なり。

問うて曰く、<sup>三九</sup>已に多く王舎城、舍婆提に住したまふ因縁を知る。此の二城に於て、何を以てか多

くは王舎城に住したまふや。答へて曰く、生地<sup>しやうち</sup>の恩<sup>おん</sup>を報<sup>ほう</sup>ずるを以ての故<sup>ゆゑ</sup>に、

多く舍婆提<sup>しやばだい</sup>に住したまふ。一切衆生<sup>いっしやうしやうじん</sup>、皆生地<sup>みなしやうち</sup>を念<sup>おも</sup>ふ。偈<sup>げ</sup>に説<sup>と</sup>くが如<sup>ごと</sup>し。

『一切の論議師<sup>ろんぎし</sup>、自ら所知<sup>みづか</sup>の法<sup>ほふ</sup>を愛<sup>あい</sup>すること、人の生地<sup>しやうち</sup>を念<sup>おも</sup>ひ、出家<sup>しゆつり</sup>

すと雖も猶ほ誘<sup>あそ</sup>ぶが如<sup>ごと</sup>し。』

法身地<sup>ほつしんち</sup>の恩<sup>おん</sup>を報<sup>ほう</sup>ずるを以ての故<sup>ゆゑ</sup>に、多く王舎城<sup>わうしやじやう</sup>に住したまふ。諸佛<sup>しよぶつ</sup>は、

皆法身<sup>みなほつしん</sup>を愛<sup>あい</sup>す。偈<sup>げ</sup>に説<sup>と</sup>くが如<sup>ごと</sup>し。

『過去未來現在<sup>くわこみらいげんざい</sup>の諸佛<sup>しよぶつ</sup>は、皆法<sup>みなほふ</sup>を供養<sup>くやう</sup>し、師<sup>し</sup>を敬<sup>きやう</sup>し尊重<sup>そんじゆう</sup>したまふ。』

法身<sup>ほつしん</sup>は生心<sup>しやうしん</sup>に勝<sup>か</sup>るが故<sup>ゆゑ</sup>に、二城<sup>じやう</sup>の中<sup>なか</sup>に多く王舎城<sup>わうしやじやう</sup>に住したまへり。

復次に坐禪<sup>ざぜん</sup>の精舍<sup>しやうしや</sup>多きを以ての故<sup>ゆゑ</sup>に「王舎城<sup>わうしやじやう</sup>に住す」、餘處<sup>よしよ</sup>には有ること

無し。<sup>三〇</sup>竹園<sup>ちやくえん</sup>と、<sup>三一</sup>鞞婆羅跋怛薩<sup>にんばらばつたんさつ</sup>と、<sup>三二</sup>多般那求呵<sup>たはんなせうか</sup>と、<sup>三三</sup>因陀世羅求呵<sup>いんどうせいらせうか</sup>と、

薩婆怛現直迦鉢婆羅<sup>さつぱだんげんぢかぱら</sup>と、善闍崛<sup>ぜんがくけつ</sup>と五山<sup>ごさん</sup>の中<sup>なか</sup>の如<sup>ごと</sup>き五精舍<sup>ごしやうしや</sup>あり。竹園<sup>ちやくえん</sup>は

平地<sup>へいち</sup>に在<sup>あ</sup>り、餘國<sup>よこく</sup>には此<sup>こ</sup>く多<sup>おほ</sup>くの精舍<sup>しやうしや</sup>なし。舍婆提<sup>しやばだい</sup>には一處<sup>いちじよ</sup>に、<sup>三四</sup>祇洹精

舍<sup>しやまら</sup>、更に一處<sup>いちじよ</sup>あり。<sup>三五</sup>摩伽羅母堂<sup>まがらぼどう</sup>、更に第三處<sup>だいさんじよ</sup>なし。<sup>三六</sup>波羅奈斯國<sup>はらなせいこく</sup>には一處<sup>いちじよ</sup>、

鹿林中<sup>ろくりんちゆう</sup>の精舍<sup>しやうしや</sup>を、<sup>三七</sup>梨師黎陀那<sup>りしりだな</sup>と名<sup>な</sup>く。<sup>三八</sup>毗耶離<sup>ひやえり</sup>には二處<sup>にじよ</sup>、一を、<sup>三九</sup>摩訶槃<sup>まかぱん</sup>と名<sup>な</sup>け、二を

彌猴池岸<sup>みけうちがし</sup>

【三九】第七問、王舎城と舍婆提城とのうち、多く王舎城に住し給ひし理由如何。

【四〇】竹園 (Tinnavana)。

【四一】鞞婆羅跋怛薩 Vāṭhavana (Yana)。

【四二】多般那求呵 (Tapanana-mahā)。

【四三】因陀世羅求呵 (Indrasaila-raḥa)。

【四四】薩婆怛現直迦鉢婆羅 (Sāpādhānācchikāpāra)。

【四五】祇洹 (Ghṛitavana)。

【四六】摩伽羅母堂 (Māgāradā)。

【四七】因陀世羅求呵 (Indrasaila)。

【四八】摩訶槃 (Mahāpana) 譯して大鉢と云ふ。

【四九】彌猴 (Māka)。

【五〇】彌猴池岸 (Māka-tīrtha)。

精舎と名く。鳩跋彌には一處、劬師羅園と名く。是の如く、諸園には或は一處の精舎あり、或は空しく樹林あり。王舎城には多くの精舎あり。坐禪の人の宜しき所なるを以ての故に、多く此に住したまへり。

復次に、是の中に富那羅等の六師あり。自ら言く、「我は是れ一切智人なり、佛と對せん」と。及び長爪梵志、婆蹉、姓は拘迦那大等、皆外道の大論議師、及び長者尸利曠多、提婆達多、兜阿闍世等、皆是れ佛の怨家にして、佛法を信せず、各妬嫉を懷く。是の人輩あるが故に、佛多くは此に住したまへり。譬へば毒草生ずる處には、近邊に必ず良藥あるが如し。又偈に説くが如し。

『譬へば獅子は、百獸の王なり、小蟲の爲に吼ゆれば、衆の爲に笑はる。若し虎・狼・猛獸の中に在つて、奮迅して大吼すれば、智人の可とする所となるが如し。』

諸の論議師は猛虎の如し。此の衆中に在りて、畏るる所なし。大智恵の人は多く見聞し、此の衆中に在つて最も第一なり。

是の大智多聞の人、皆王舎城に在るを以ての故に、佛多くは王舎城に住したまへり。

- 【四一】鳩跋彌 (Kauśambhi)
- 【四二】劬師羅 (Koliya)
- 【四三】富那羅 (Purāṇa)
- 【四四】長爪梵志 (Dharmakīrti)
- 【四五】婆蹉 (Pāśā)
- 【四六】拘迦那大 (Kūśānāda)
- 【四七】尸利曠多 (Śikharā)
- 【四八】提婆達多 (Devadatta)
- 【四九】阿闍世 (Ajātaśatru)
- 【五〇】續藏には、是は後書佛に作る。
- 【五一】大智人を獅子に譬ふ。

復次に、(五)頻婆娑羅王は伽耶祀舎の中に到り、佛及び結髮を除ける千の阿羅漢を迎ふ。是時、佛、

王の爲に説法したまひしに須陀洹道を得き。即ち佛を請して言く、「願はくは佛及び僧、我が王舎城

に就て、形壽を盡すまで、衣被、飯食、臥具、醫藥を受けたまはば、給所は當に得たまふべし」と。

佛即ち請を受けたまふ。是の故に多く王舎城に住せり。

復次に、(五)閻浮提四方の中、東方を數の始と爲す。日の出なるを以て

なり。「それより」南方、西方、北方と次第す。東方の中にて、摩伽陀國は

最勝なり。摩伽陀國の中にては、王舎城最勝なり。是中に十二億の家あり。

佛涅槃の後、阿闍世王、人民轉た少きを以ての故に、王舎大城を捨てて、

其邊に更に一小城を作る、廣長一由旬。波羅利弗多羅と名く。

〔この城すら〕猶尚諸の城中に於て最大なり、何に況んや木の王舎城を以て

復次に、(五)是の中の人ば、多く聰明にして、皆廣學多識なり、餘國には

此れ無し。

復次に、(五)佛は豫め人の應に得度すべきものあれば、時を待ち、處を待ち、人を待ち、乃ち能

く道を得ることを知り給ふ。是れ(五)釋提桓因及び八萬諸天の應に摩伽陀の石室中に在りて道を得た

【五】 頻婆娑羅王の佛に對する 請願。  
【五】 摩伽陀國は最勝なり。  
【五】 波羅利弗多羅 (Brahmputra) は譯して華子城といふなり。  
【五】 帝釋及び八州の諸天は王舎城に在つて得道せり。  
【五】 釋提桓因 (Sakra Deva nam Indra)

復次に、五八摩伽陀國は豐樂にして食を乞うて得易し、餘國は如かず。（これ）三の因縁を以てなり。

一には頻婆娑羅王宮中に當に千の比丘の食を作れと約勅せり。二には樹提伽は、人中に生ずと雖

も、常に天の樂を受く。又多く富貴なる諸の優婆塞あり。三には阿波羅羅龍王、善心にして化を

受けて、佛弟子と作り、世の饑饉を除かんが爲に常に好雨を降す。是の故に國豐なり。佛涅槃の後の

如きは、長老摩訶迦葉、法を集めんと欲すと思惟す。「何の國か豐樂にして食を乞うて得易く、疾く

法を集むるを得ん」と。是の如く思惟し已つて憶へらく、王舍城中の頻婆

娑羅王は、約勅して常に千の比丘の食を設く。頻婆娑羅王死すと雖も、此

の法は斷えず、是の中は食得易く、法を集むべきこと易し。餘所には是の

如き常供なし。若し乞食を行する時、諸の外道來つて共に論議せんに、若

し共に論議せば集法の事廢れん。若し共に論せずんば便ち言はん、「諸の

沙門は我に如かず」と。是の如く思惟して、最上の千の阿羅漢を擇び取り、將に耆闍崛山に就て、經

藏を集結せんとす。是三の因縁を以ての故に、摩伽陀國は食を乞うて得易きを知る。阿含及び毗尼の

中に説くが如きは、毗耶離國には時に亦飢饉ありと云ふ。降難陀婆難陀龍王經の中に説くが如し。舍

婆提國も飢饉し、餘の諸國も亦時々飢饉あり、摩伽陀國中には是の事無し。是の故に知りぬ、摩伽

陀國は豐樂にして、食を乞うて得易きとを。復次に、六一王舍城は山中に在つて閑靜なり。餘國の精

神なり。

- 【五八】 摩伽陀國の豐饒なる三種の因縁。  
チヤウワイシユカ 樹提伽(Citrakuta)。
- 【五九】 阿波羅羅(Aparāra)。
- 【六〇】 王舍城は山中に在つて閑靜なり。

舎は平地の故に、多くの雜人入來往し易し、故に閑靜ならず。又此の山中に精舍多し、諸の坐禪の人、諸の聖人は、皆閑靜を樂み、多く山に住するを得。佛は是れ聖人、坐禪人の主なり。是故に多く王舎城に住せり。問うて曰く、若し王舎城に住すると爾なるべくんば、何を以てか多く竹園に住せずして、多く普闍崛山に住せしや。答へて曰く、我已に聖人坐禪の人は閑靜の處を樂むと答へたり。

問うて曰く、更に餘の四山あり、何を以てか多く鞞婁羅跋想等に住さずして、多く普闍崛山に在せしや。答へて曰く、普闍崛山は五山の中に於て最勝なるが故なり。云何が勝れたる。普闍崛山の精舍は、城に近くして山上り難し、是を以ての故に雜人來らず。城に近きが故に乞食して疲

れず、是の故に佛は多く普闍崛山中に在して餘處に在さず。復次に、長老摩訶迦葉は普闍崛山に於いて三法藏を集め、度すべき衆生を度し竟つて、佛に隨つて涅槃に入らんと欲し、清朝、衣を著け、鉢を持し、王舎城に入つて乞食し、已つて普闍崛山に上り、諸の弟子に語り「我

今日、無餘涅槃に入らんとす」と。是の如く語り已つて、房に入り、結跏趺坐し、諸の無漏禪定、自ら身に熏ぜり。摩訶迦葉の諸の弟子、王舎城に

住せしめて、若し王舎城に住すると爾なるべくんば、何を以てか多く竹園に住せずして、多く普闍崛山に住せしや。答へて曰く、我已に聖人坐禪の人は閑靜の處を樂むと答へたり。

問うて曰く、更に餘の四山あり、何を以てか多く鞞婁羅跋想等に住さずして、多く普闍崛山に在せしや。答へて曰く、普闍崛山は五山の中に於て最勝なるが故なり。云何が勝れたる。普闍崛山の精舍は、城に近くして山上り難し、是を以ての故に雜人來らず。城に近きが故に乞食して疲

れず、是の故に佛は多く普闍崛山中に在して餘處に在さず。復次に、長老摩訶迦葉は普闍崛山に於いて三法藏を集め、度すべき衆生を度し竟つて、佛に隨つて涅槃に入らんと欲し、清朝、衣を著け、鉢を持し、王舎城に入つて乞食し、已つて普闍崛山に上り、諸の弟子に語り「我今日、無餘涅槃に入らんとす」と。是の如く語り已つて、房に入り、結跏趺坐し、諸の無漏禪定、自ら身に熏ぜり。摩訶迦葉の諸の弟子、王舎城に

【六二】第八問、多く竹園精舍に住せずして、普闍崛山に住し給ひし理由如何。

【六三】第九問、王舎城の五山中、何故に多く普闍崛山に住し給ひしか。

【六四】鞞婁羅跋想 (Vajrasattva) 轉婆羅跋想 (Vajrasattva) 釋尊にても、又その弟子衆にても、一切煩惱の使役を離れ、是が爲に更に生死の苦海に流轉すべき業因を造らざる時は、正に現身に涅槃を證得するなり。但し此時には過去の業因によりて受けたる身心なれば其の涅槃を有餘涅槃といふ。而して此の聖者の壽命盡きたる時は、苦樂憂喜を解脱し、全く涅槃に

入り、諸の貴人に語るらく、「知るや不や、尊者摩訶迦葉は、今日無餘

涅槃に入る」と。諸の貴人は是の語を聞いて、皆大に愁憂して言く、「佛

已に滅度したまひ、摩訶迦葉は佛法を守護せり、今日復た無餘涅槃に入ら

んと欲す」と。諸の貴人、諸の比丘、哺時に皆共に耆闍崛山に集まり、長

老摩訶迦葉は哺時の禪より起つて、衆中に入つて坐し、無常を讚説せり。

一切の有爲の法は因縁より生ずと説くが故に無常なり、(突)本無今有、(三)

已有還無の故に無常、因縁生の故に無常、無常の故に苦、苦の故に無我、

無我の故に有智の者は我我所に著すべからず。若し我我所に著せば、無量

の憂愁苦惱を得ん、一切世界の中に心に厭うて離欲を求むべし」と。是の如く種種に世界の中の苦を

説いて、其心を開導し、涅槃に入らしむ。此語を説き竟つて、即ち佛より得る所の僧伽梨を著け、衣

鉢を持し、杖を捉り、金翅鳥の如く、現に是の虚空に上り、四種の身儀、坐臥行住、一身に無量の身

を現じて、東方世界に滿ち、無量身に於て、還つて一身と爲り、身上より火を出だし、身下より水

を出だし、身の上より水を出だし、身の下より火を出だせり。南西北方も亦是の如し。衆心に世を厭

ひ、皆歡喜し已つて、耆闍崛山の頭に於て、衣鉢を俱にし是の願を作して言はく、「我が身をして壞

せざらしめよ。彌勒成備せば、我は是れ骨身還つて出で、此の因縁を以て衆生を度せん」と。是の如

歸入し、再び世界に生るる事なし。其の涅槃を無餘涅槃といふ。

【突】本無今有とは、一切の有爲法は本來實在のものにあらず、因縁によりて現在の形相を有するのみとの義なり。

【六七】已有還無とは、己に有りたるものは、又因縁の離散によりて、現在の形相が無くなるとの義なり。

く思惟し已つて、直に耆闍崛山の石頭の中に入ると、軟澤に入るが如し。入り已れば山還た合す。  
 後、人壽八萬四千歳、身の長八十尺の時に、彌勒佛出でたまふ。佛身の長百六十尺、佛面二十四尺、  
 圓光十里、是の時衆生、彌勒佛の出でたまふことを聞き、無量の人、佛を遂うて出家すれば、佛は大  
 衆の中に在つて、始めて説法したまふ。時に九十九億の人阿羅漢道を得、六通具足し、第二の大會に  
 九十六億の人阿羅漢道を得、第三の大會に九十三億の人阿羅漢道を得、是より已後、無数の人を度す。  
 爾の時に人民は久しくして後懈散す。彌勒佛衆人の是の如くなるを見て、足指を以て、耆闍崛山を扣  
 開す。是の時長老摩訶迦葉骨身に僧伽梨を著して、出で、彌勒の足を禮  
 し、虚空に上昇し、現變前の如し。即ち空中に於て身を滅して般涅槃す。  
 爾の時に彌勒佛の諸の弟子性んで問うて言く、「此は是れ何人ぞ、人に似  
 て小身なり。法衣を著けて、能く變化を作す」と。彌勒佛の言く、「此の人  
 は是れ過去釋迦文尼佛の弟子、摩訶迦葉と名く。阿蘭若に行き、少欲知足にして、突つて  
 比丘中第一、六神通を得たる其解脫の大阿羅漢なり。彼の時人壽百年にして、少く出で多く滅し、是  
 の小身を以て能く是の如く大事を辦す。汝等は犬身利根、云何が是の如きの功德を作さざる」と。是  
 の時諸の弟子皆慚愧し、大歡心を發す。彌勒佛衆生の心に隨つて、爲に種種の法を説く。有人は阿  
 羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹を得、有は四支佛の善根を種ふ、有は無生法忍不退の菩薩を得、有は

【六八】 阿蘭若(アランニヤ) 阿蘭若(アランニヤ)  
 【九】 頭陀(Dhuta)は譯して修  
 治、持練、洗滌等といふ。衣  
 食住の三種の貧乏を持練奉行  
 法なり。

天人中に生るることを得て、種種の福樂を受く。是故に知りぬ、是の耆闍崛山は福德の吉處にして、諸の聖人の喜んで住する處なることを。佛は諸聖人の主たり、是の故に佛は多く耆闍崛山に住したまへり。

復次に、耆闍崛山は、是れ過去未來現在の諸佛の住處なり。富樓那經の中に説くが如し。佛、

富樓那に語げたまはく、「若し三千大千世界をして劫焼し、若くは更に生ぜしむとも、我は常に此の山中に在りて住す。一切衆生は結使纏縛を以て、見佛の功德を作さず。是故に我を見ず」と。復次に、耆闍崛山は清淨鮮潔の處、三世の佛、及び諸の菩薩更に處らざるなし。是故に多く耆闍崛山に住したまへり。

復次に、講の摩訶衍經は多く耆闍崛山中に在りて説けり、餘處の説は少し。何となれば是の中は清淨にして福德有り、閑靜なるを以てなり。

一切三世諸佛の住處にして、十方諸菩薩も亦是の處を讚歎恭敬したまへり。諸の天、龍、夜叉、阿脩羅、迦留羅、乾闥婆、甄陀羅、摩曠羅迦等の大力の衆神も、是の處を守護し、供養し、恭敬せり、偈に説くが如し。

『是の耆闍崛山は、諸佛所住の處、聖人の止息したまふ所、一切を覆蔭するが故に、衆苦解脱することを得、唯眞法のみ有つて存す。』

【七〇】 靈鷲山は三世諸佛の住處なり。  
 【七一】 富樓那經 (Upaparaka sutra)。  
 【七二】 摩訶衍經 (Mahāvāyākya sutra)。  
 【七三】 ば多く靈鷲山に於ける説法なり。

復次に、是の中には十方無量智慧福徳力の大菩薩、常に來つて釋迦牟尼佛を見、禮拜恭敬して法を聴くが故に、佛、諸の摩訶衍經を説たまふに、多く耆闍崛山に在せり。諸の摩訶衍經に般若を大と爲す、云何が耆闍崛山に住さざらん。略して耆闍崛山を説き竟んぬ。

初品中の、「摩訶比丘僧と共に」を釋す。

摩訶比丘僧と共に。

共とは一處、一時、一心、一戒、二見、一道、一解脱、是を名けて「共」と爲す。

摩訶とは秦に或は大、或は多、或は勝と言ふ。云何が大なる。

一切衆中の最上なるが故に、一切の障礙を斷するが故に、天王等の大人恭敬するが故に是を名けて大と爲す。云何が多なる。數五千に至るが故に名けて多と爲す。云何が勝なる。一切の九十六種の外道の論議を能く破するが故に勝と名く。云何が比丘と名くるや。比丘は乞士と名く。清淨にして活命するが故に名けて乞士と爲す。經中に説くが如し。舍利弗城に入つて乞食し、得已つて壁に向ひ坐して食す。

是の時に梵志の女あり、淨目と名く。來つて舍利弗を見、舍利弗に問うて言く、「沙門よ、汝食するや」。答へて言く、「食す」。

淨目言はく、「汝、沙門よ下口食なりや」。答へて曰く、「不なり」。「仰口食なりや」。「不なり」。「方

- 【七三】 共の字義。
- 【七四】 摩訶（マハー）の字解。
- 【七五】 比丘（Bhikkhu）の字義。
- 【七六】 淨目女と舍利弗との四種食に關する問答。

口食なりや。「不なり」。「四維口食なりや」。「不なり」。淨目言はく、「食法に四種あり。我、汝に問ふに、汝不と言ふ。我解せず、汝當に説くべし」とり。舍利弗言はく、「(七七)出家の人にして荼を合せ、穀を種坐、樹を植うる等の不淨活命の者あり、是を下口食と名く。出家の人にして、星宿・日月・風雨・雷電・清濁を觀視する不淨活命の者あり、是を仰口食と名く。出家の人にして、豪勢なるに曲媚して、四方に通使し、言を巧にし、多く求むる不淨活命の者あり、是を方口食と名く。出家の人にして、種種の呪術・卜算・吉凶を學し、是の如き等の種種の不淨活命の者あり、是を四維口食と名く。姉よ我は是の四不淨食の中に墮せず、我は清淨の乞食の活命を用ゆ」とし。是の時淨目は、清淨法食を説くを聞き歡喜信解す。舍利弗、

【七七】 四種の不淨食を説く。

因て爲に法を説き、須陀洹道を得せしむ。是の如く清淨にして乞食し活命するが故に乞士と名く。

復次に、比を破と名け、丘を煩惱と名け。能く煩惱を破るが故に比丘と名く。

復次に、出家の人を比丘と名くるは、譬へば胡漢羌虜の各名字あるが如し。

復次に、受戒の時、自ら、「我は是れ某甲比丘、形を盡すまで、戒を受持せん」と言ふが故に、比丘と名く。

復次に、比を怖と名け、丘を能と名く。能く魔王及び魔人民を怖れ、出家して頭剃り、染衣を着

けて戒を受く、是時に當りて怖る。何を以ての故に怖るるや。魔王言く、「是の人は必ず涅槃に入

りて、我は是れ某甲比丘、形を盡すまで、戒を受持せん」と言ふが故に、比丘と名く。

るとを得ん」と。佛説の如くんば、人有り、能く頭を剃り、染衣を著け一心に受戒せば、是の人は漸  
 漸に結を斷し、苦を離れ、涅槃に入らん。云何が僧伽と名くるや。僧伽は、秦に衆と言ふ。多く  
 の比丘一處に和合する、是を僧伽と名づく。譬へば大樹の叢聚する是を名けて林と爲し、一一の樹を  
 名けて林と爲さず、一一の樹を除いても亦林無きが如し。是の如く一一の比丘は名けて僧と爲さず、  
 一一の比丘を除いても亦僧なし。諸の比丘、和合するが故に僧の名生ず。是の僧に四種あり。有  
 差僧、無差僧、啞羊僧、實僧なり。云何が有差僧と名くるや。戒を持して破らず、身口清淨にして、  
 能く好醜を別つも、未だ道を得ざる是を有差僧と名く。云何が無差僧と名  
 くるや。破戒にして身口不淨なり、惡として作さざると無き、是を無差僧  
 と名く。云何が啞羊僧と名くるや。戒を破らずと雖も鈍根にして慧なく、  
 好醜を別たす、輕重を知らず、有罪無罪を知らず、若し僧事に有りては二人共に諍ふも斷決すること  
 能はず、默然として無言なること、譬へば白羊の如し。乃ち人の「之を」殺すに聲を作す能はざるが如  
 し、是を啞羊僧と名く。云何が實僧と名くるや。若くは學人、若くは無學人にして四果の中に住し、  
 四向道を行ず、是を實僧と名く。是の中の二種の僧は、百一羯磨、說戒、受戒、種種の得作を共にす  
 べく、是の中に實の聲聞僧は六千五百あり。菩薩僧に二種あり、有差僧、實僧なり、聲聞に一種  
 あり、謂く實僧なり、實僧を以ての故に餘を皆僧と名くることを得、是を以ての故に僧と名く。

【七六】僧伽(Sangha)の解。

【七九】四種の僧に就て。

【八〇】二種の菩薩に就て。

【釋】 大數五千分。

【論】 云何が大數と名くるや。少しく過ぎ少しく減する、是を名けて大數と爲す。云何が分と名くるや。多衆邊の一分を取つて是を分と名く。是の諸の比丘萬衆の中、一分の五千人を取る、是を以ての故に五千分と名く。

【經】 皆是れ阿羅漢。

【論】 云何が阿羅漢と名くるや。(八二)アルをば賊と名け、漢をば破と名け、

一切煩惱の賊を破する是を阿羅漢と名く。

【釋】 復次に、阿羅漢は一切の漏盡くす故に、一切世間天人の供養を得べし。

【釋】 復次に、阿を不と名け、羅漢を生と名け、後生の中に更に生せず、是を阿羅漢と名く。

【釋】 諸漏已に盡く。

【論】 三界の中の (八三) 三種の漏已に盡きて、餘すこと無し、故に漏盡くと言ふなり。

【八二】 阿羅漢(アルハト)の字義。  
【八三】 「諸漏已に盡く」の意義。

復た煩惱無し。

一切結使の流、受扼、縛蓋、見縛等を斷除するが故に「煩惱無し」と名く。

心好く解脱を得、慧好く解脱を得。

問うて曰く、何を以てか心好く解脱を得、慧好く解脱を得と説くや。答へて曰く、外道の欲

を離れたるの人は、一處一道に心解脱を得るも、一切障法に於て解脱を得るに非ず。是を以ての故に阿羅漢を「心好く解脱を得、慧好く解脱を得」と

名く。

復次に、諸の阿羅漢は二道に「於いて」心の解脱を得、見諦道と思惟道と

なり。是を以ての故に「心好く解脱を得」と名く。學人の心も解脱を得ると雖

も、好く解脱するに非ず、何となれば残れる結使あるを以てなり。

復次に、諸の外道等は、助道の法をも滿「足」せず、若くは一功德を行じ、若くは二功德を行じ、道

を求むるも得ること能はず。人の但布施して清淨ならんことを求むるが如く、人の天を祀りて「能く

憂衰を脱し、能く常樂國の中に生るるを得ん」と言ふが如し。亦更に有の言く、「八の清淨道あ

り、一には自覺、二には聞、三には讀經、四には畏內苦、五には畏大衆生苦、六には畏人天苦、七に

【八三】「復た煩惱なし」の意義を説く。  
【八四】第一〇問、阿羅漢をば心好く解脱を得、慧好く解脱を得といふ理由如何。  
【八五】八つの清淨道。

は得好師、八には布施なり。但し第八を説いて清淨道と名くるとありしと。

復次に、有外道は、但布施持戒のみ清淨なりと説き、有は但布施禪定のみ清淨なりと説き、有は但布施して智慧を求むるを清淨なりと説く。是の如き等の種種の道は具足せず、若しは無功徳、

若しは少功徳にして清淨と説く。是の人は、一處には心解脫を得と雖も「好く解脫せり」と名けず、

「そは」淫弊の道を満足せざるが故なり。偈に説くが如し。

「無功徳の人は、生老病死の大海を渡ること能はず、少功徳の人も

亦渡らず、善く道法を行ずるは、佛の所説なり。」

是の中に應に「須跋陀梵志經を説くべし。」須跋陀梵志は、年百二十

歳にして五神通を得、阿那跋達多池邊に住す。夜、夢に一切の肉眼を失

し、裸形にして冥中に立ち、日障ち、地破れ、大海の水竭き、大風起つて

須彌山を吹いて破散すと見、覺め已つて恐怖し、思惟して言く、「何を以

ての故に觸るや、我が命盡きなんと欲するや、若くは、天地の主の墮ちんと欲するや」と。猶豫して

自ら了すること能はず、此の悪夢あるを以ての故に、先世善知識の天あり、上より來下して、須跋陀

に語つて言く、「汝恐怖すること莫れ、一切智人あり、佛と名く。後、夜半に當に無餘涅槃に入るべ

し。是故に汝が夢は汝が身の爲にはあらず」と。是時須跋陀は、明日、拘夷那竭國の樹林の中に到り、

【六一】 無功徳の人は、少功徳の人とば、生老の大海を渡ること能はず。  
【六二】 須跋陀梵志經「五神通」Prahāradisaṅgītiyā. Buddhacattāriyā.  
【六三】 須跋陀梵志、年百二十歳にして佛涅槃の夢を感じ、始めて阿羅漢を成ずるの困難。  
【六四】 阿那跋達多(Anurādhā)。

阿難の經行するを見て、阿難に語つて言く、「我聞く汝が師は新に涅槃の道を説き、今日夜半、當に滅度を取るべし。我心に疑ひ有り、請ふ佛に見えて、我が疑ふ所を決せん」と欲す。阿難答へて言く、「世尊の身極れり、汝若し難問せば世尊を勞擾せしめん」と。須跋陀是の如く重ねて請すると三たびに至る。阿難答ふると初の如し。佛遙に之を聞き阿難に勸語したまはく、「須跋陀梵志に前に來つて自在に難問するを聽るせ、是れ吾が最後の共談、最後の得道の弟子なり」と。是の時に須跋陀は前んで佛に見ゆるとを得、世尊を問訊し已つて、一面に於て坐し、是の如く念ず、「諸の外道の輩は、思愛財寶を捨て、出家すれども、皆道を得ず、獨り瞿曇沙門のみ道を得」と。是の如く念じ竟つて、即ち佛に問うて言く、「是の閻浮提の地の六師の輩は、各自稱して我は是れ一切智人なりと言ふ。是の語は實なりや不や」と。爾の時に、世尊偈を以て答へ曰はく。

「我始めて年十九にして出家し佛道を學す。我出家してより已來、已に五十歳を過ぎ、淨戒禪智慧あり。外道は一分も無く、少分すら尙有ること無し、何に泥んや一切智をや。」

若し八正道無ければ、是の中に第一果第二第三第四果なし。若し八正道あれば、是の中に第一果第二第三第四果あり。須跋陀よ、是の我が法の中に八正道あり、是の中に第一道果第二第三第四の道果あり。餘の外道の法は、皆空しくして道無く、果無く、沙門無く、婆羅門無し。是の如く、我は大衆の中に「於い」て實に師子吼を作すと。須跋陀梵志は是の法を聞き阿羅漢道を得、思惟して言く、「我

は佛の後に般涅槃すべからず」と。是の如く思惟し竟り、佛前に在つて結跏趺坐し、自ら神力を以て身中より火を出だし、身を焼いて滅度を取る。是を以ての故に、佛の言はく、「無功德、少功德は、是れ助道の法滿たす、皆得度せず。佛説は一切く功德を具足するが故に、能く弟子を度す。譬へば小藥師は一種の藥、二種の藥を以てし、「諸藥を」具足せざるが故に重病を差す能はず。大藥師の輩は衆藥を具足し能く諸病を差すが如し」と。

問うて曰く、若し一切三界の煩惱を離るるが故に、心に解脱を得ば、何を以ての故に佛は、「染愛の心を離れて解脱を得」と言ふや。

答へて曰く、愛は能く心を繫閉するの大力あり、是を以ての故に説いて

餘の煩惱を説かず、愛を斷すれば餘は則ち斷ず。復次に 若し人、「王來る」と言はば必ず將あつて從ふことを知る、染愛も亦是の如し。又巾の一頭を捉ふれば餘は則ち盡く隨ふが如し。愛染も亦是の如く、愛斷すれば則ち餘の煩惱皆已に斷するを知る。復次に 諸の結使は、皆愛と見とに屬す。(三) 愛に屬する煩惱は心を覆ひ (四) 見に屬する煩惱は慧を覆ふ、是の如き愛を離るゝが故に、愛に屬する結使も亦離れて、心解脱を得。是の如き無明を離るるが故に、見に屬する結使も亦離れて慧解脱を得るなり。復次に、是の五千の阿羅漢は、不退法に應じて無生智を得たり。是の故に心好く解

- 【三】 佛は大藥師にして、外道は小藥師なり。
- 【四】 第一二問、染愛と他の煩惱との關係如何。
- 【五】 「王來る」と言へば必ず將あつて從ひ、巾の一頭を捉ふれば、餘は則ち盡く隨ふ。愛染も亦た是の如し。
- 【六】 愛は情的煩惱にして、心を覆ひ昏ますの力あり。
- 【七】 見の煩惱とは、智的の迷惑にして、智慧を覆ひ昏ますの力あり。

脱を得、慧好く解脱を得と言ふ。「そは」不退なるを以てなり。退法の阿羅漢は、時解脱を得、劫提迦等の如きは解脱を得と雖も、好く解脱するに非ず、退法を以ての故なり。

其の (五七) 心調のひ柔軟なり。

若し恭敬、供養し、瞋恚し、罵詈し、搥打する者あるも、心等しうして異なることなし。若し珍寶瓦石を得るも、之を視ること一等なり。若し刀を持って手足を斫截するあり、梅檀を持して身を塗るあるも、亦等しうして異なること無し。復次に、姪欲、瞋恚、憍慢、疑見の根本已に斷ずるが故に、是を「心調ひ柔軟なり」と謂ふ。復次に、是の諸の阿羅漢は、欲染に處して染まらず、瞋處に應じて瞋らず、癡に處して癡ならず、六情を守護す。是を以ての故に、「心調ひ柔軟なり」と名ふ。偈に説くが如し。

『人の (五八) 六情を守護すること、好馬の善く調ふが如く、是の如きの實智』

の人は、諸天に敬視せらる。』

諸の餘の凡人の輩は、六情を守護すると能はず。欲と瞋と慢と癡と疑見とを斷せざるが故に、調柔ならざること惡弊の馬の如し。是を以ての故に諸の阿羅漢を「心調ひ柔軟なり」と名ふ。

【九〇】 退法の阿羅漢。一旦阿羅漢を得るも些の惡縁に逢へば所得を失する阿羅漢なり。

【九六】 時解脱。これ二種阿羅漢の一なり。其の根性愚鈍にして、好時好縁を待て煩惱を解脱するをいふ。

【九七】 心調柔を辯す。

【九八】 六情とは、新譯の六根に同じ。蓋し根は情識を有すればなり。

摩訶那伽。

【九】摩訶を大と言ひ、那を無と名け、伽を罪と名く。阿羅漢は諸の煩惱を斷ず、是を以ての故

に大無罪と名く。復次に、那伽は或は龍と名け、或は象と名く、是の五千の阿羅漢は諸の阿羅漢中  
最大力なり、是を以ての故に「龍の如く象の如し」と云ふ。水行の中には龍の力大に、陸行の中には

象の力大なればなり。

復次に、善く調へる象王の能く大軍を破り、直入して廻らず、刀杖を畏

れず、水火を難からず、走らず、退かず、死至れども避けざるが如く、諸

の阿羅漢も亦復た是の如し。禪定智慧を修するが故に、能く魔軍及び諸

の結使の賊を破る。罵詈擻打すれども悔いせず悲らず、老死の水火も畏れ

ず、難からざるなり。復次に、大龍王の大海より出でて大雲を起し、遍なく虚空を覆ひ、大電光明

を放ちて天地を照し、大洪雨を注いで萬物を潤澤するが如く、諸の阿羅漢も亦た復た是の如し。禪定

智慧の大海水の中より出でて、慈悲の雲を起して、潤ほし度すべきに及んでは、大光明種種の變化を

現じ、實法相の雨を説き、弟子の心に善根を生ぜしむ。

【九】摩訶那伽(Mahānaga)の字義を説く。

【一〇】那伽は龍又は象と名く。五手の羅漢は諸の羅漢の中、最大なるが故なり。

【一一】羅漢は大龍王の如し。

【102】所作已に辨ず。

問うて曰く、二〇三云何が「所作」と名け、云何が「已に辨ず」と名くるや。答へて曰く、信・戒・定・

捨等の諸の善法を得るが故に、名けて所作と爲す。智慧・精進・解脱等の諸の善法を得るが故に、是

を「已に辨ず」と名く。二法具足し、滿足するが故に「所作已に辨ず」と名く。復次に諸の煩惱に二

種あり。一種は愛に屬し、一種は見に屬す。愛に屬する煩惱を斷するが故に、已に辨ずと名く。復次に

煩惱を斷するが故に、已に辨ずと名く。復次に色法を善く見るが故に所作と名け、無色法を善

く見るが故に已に辨ずと名く。可見・不可見・有對・無對等の二法も亦是の如し。復次に不善と

無記法とを斷するが故に所作と名け、善法を思惟するが故に已に辨ずと名く。聞思の慧、成就

するが故に所作と名け、修慧成就するが故に已に辨ずと名く。種種の三法も亦是の如し。

復次に、煖法、頂法、忍法、世間第一法を得るが故に所作と名け、苦法忍等の諸

【103】所作已に辨ずを斷す。

【104】第一二問、何等なか所作といひ、何等なか已に辨ずといふや。

【105】煖法。性は聖火の前相なり。聖火とは見道の無漏智に轉じ、其の聖火が時に生ぜんとする前相として、漸かあたままりしを是す性を煖法といふ。

【106】頂法。無漏上品の律念に生ずる善根を頂法と名く。頂とは山頂に譬ふ。山頂は二邊の兩際にあるが如く、此の頂位は邊道の中間に在りて、或

は進んで忍位に上る者あり、忍に上れば邊轉することなく、悉進んで見道に入るなり。或は退いて煖位に下り、若くは無間の業を作つて地獄に墮する者あり。是の如く邊道の中間に在れば、山頂に譬へて頂法と名く。又頂は人の頂なり、人の身中最高勝なるが如く、此の頂位は邊道中の最高廣なればなり。

【107】忍法。頂の概念に生ずる善根を忍法と名く。四聖諦を忍可し決定すること最も殊勝なる位なるが故に忍と名く。

の無漏の善根を得るが故に已に辨すと名く。見誦道を得るが故に所作と名け、思惟道を得るが故に已に辨すと名く。(一〇八)學道を成ずることを得るが故に所作と名け、無學道を得るが故に已に辨すと名く、心の解脫を得るが故に所作と名け、(一〇九)慧の解脫を得るが故に已に辨すと名く。漏盡くるが故に所作と名け、(一一〇)共解脫を得るが故に已に辨すと名く。一切の結使除くが故に所作と名け、(一一一)非時解脫を得るが故に已に辨すと名く。自ら利益し竟るが故に所作と名け、他人を利益するが故に已に辨すと名く。是の如く、所作已に辨するの義は、自在に説けり。

經

擔を棄て能く擔ふ。

論

五衆の麤重、(一一三)常に惱ますが故に名けて

此の位に到れば畢竟三惡道に墮することなし。

【一〇七】世間第一法。忍位の後念に生ずる善根を世第一法と名付く。世とは有漏法のことなり。蓋し有漏法中に於いて、此の觀智に超ゆるものなく、之を以て最勝の法となすが故に世間第一の法といふなり。

【一〇八】學道と無學道。眞理を研究して妄惑を斷するが故に學といひ、眞理究り妄惑盡き、更に修學すべきなきを無學といふ。而して小乘の學道無學道は、四沙門果中の前三果を學道とし、最後の阿羅漢果を無學道とし。大乘にては菩薩の十地を學とし、佛果を無學とす。

【一〇九】慧の解脫とは但智慧の障碍を解脫する阿羅漢をいふ。此の人は道理を悟ることを好

み、事用の功德を好まざる性分なれば、但無漏の智慧を障ゆる見思の煩惱を斷じて、禪定等の功德を障ゆる事用の障を離れざるなり。

【一一〇】共解脫。鈍根の阿羅漢は唯煩惱の障を離るるのみにて之を慧解脫といふ。若し利根の阿羅漢は之と共に一切禪定の障をも離れて滅盡定といへる至極の定を得るに至る。要するに慧と定との二障を離れて自在を得たるものを共解脫といふ。共は或は俱に作ることあり。

【一一一】非時解脫。これ二種阿羅漢の一。即ち根性銳敏にして好時好縁を待つを要せず、隨意に定に入り、煩惱を脱するなり。或は不時解脫ともいふ。

【一一三】羅漢をば、能擔又は棄擔と名く。

擔と爲す。佛の説きたまふ所の如し。二三何をか擔と謂ふや。五衆是れ擔なり。諸の阿羅漢は此の擔已に除く、是を以ての故に擔を棄つと言ふ。能く擔ふとは是れ佛法の中に二種あり、功德擔と應擔となり。一種は自ら利益し、二種は他人を利益す。一切諸の漏盡き、不悔解脫等の諸の功德、是を自ら利益すと名け、信・戒・捨・定・慧等の諸の功德、能く他人に與ふ。是を他人を利益すと名く。是の諸の阿羅漢は自擔、他擔、能く擔ふが故に能く擔ふと名く。復次に、譬へば大牛の壯力にして能く勝けて、重きを載するが如く、此の諸の阿羅漢も亦た復た是の如し。無漏の根力、覺道を得て能く佛法の大事の擔を擔ふ。是を以ての故に諸の阿羅漢を能く擔ふと名ふ。

【二四】 已利を逮得す。

【二五】 已利と名け、何をか已利に非すと云ふ。諸の善法を行す。

是を已利と名け、諸餘の非法是を已利に非すと名ふ。復次に、信・戒・捨・定・慧等の諸の功德は一切財寶に勝るが故に今世後世常に樂を得るが故に、能く甘露城に到るが故に、三の因縁の故に是を已利と名く。信品中の偈に説くが如し。

「若し人、信慧を得ば、是の實は最も第一なり。諸餘の世の財利は、是の法實に及ばず。」

復次に、若し人今世に樂を得、後世に樂を得、及び涅槃を得て常に樂なる是を已利と名く。餘は已

利に非ざるなり。偈に説くが如し。

『世の知れる種種無道の法は、諸の禽獸と等うして異なることなし、當に生智要道の法を求め、老

死を脱することを得て涅槃に入るべし。』

復次に、八正道及び沙門果は是を諸の阿羅漢の己利と名く。是の五千の阿羅漢は得道及び果、二事俱に得るが故に己利と名く、是を以ての故に己利を速得すと言ふ。

論

二三六の諸の有結を盡す。

三種の有あり、欲有と色有と無色有となり。云何が欲有なる。欲

界繫の業は因縁を取り、後世能く亦是の業報を生ず是を欲有と名く。色有無色有も亦是の如し、是を名けて有と爲す。結を盡すとは、二六の結に九の結

あり。愛結・恚結・慢結・癡結・疑結・見結・取結・慳結・嫉結なり。是の結使及び有を盡し、是の有及び結使を盡す、是の故に有・結を盡すと云ふ。

問うて曰く、諸の阿羅漢は結使應に永く盡すべし、一切の煩惱を離るるとを得たるが故なり、

〔而も〕有は盡すべからず。何となれば阿羅漢の未だ滅度せざる時は、眼根等の五陰・十二入・十八界の諸有成就するが故なり。答へて曰く、二〇〇の妨ぐる所無し。是れ果の中に因を説く、佛語の如し。

【二六】「諸の有結を盡す」の意義を釋す。

【二七】諸有の義解。

【二八】九種の結。

【二九】第一五間、眼根等有しながら、如何ぞ有を盡すことを得んや。

【三〇】羅漢は未だ有を盡さずと雖も、果中に因を説くが故に、諸の有結を盡すと云ふことを得るなり。

二三 檀越の食を施す時は五事を與ふ。命・色・力・樂・膳なり。食は必ずしも五事を與ふること能はず。  
〔そは〕人あり大に飲食を得て而も死し、人あり少許の食を得て活すればなり。〔されど〕食は五事の因となる。是の故に佛は食を施して、五事を與ふと言ふ。偶に説くが如し。

『食を斷てば死すること疑なし、食ふ者の死は未だ定まらず、是を以ての故に佛は、食を施せば五事を與ふと説きたまふ。』

亦人の百斤の金を食するが如し、金は食すべからざるも、金は是れ食の因なるが故に金を食すと言ふ。佛の言はく、「女人を戒垢と爲す」と。女人は戒垢に非ざるも、是れ戒垢の因なるが故に女人を戒垢と爲すと言ふ。人の高處より墮るが如し。未だ地に到らざるも、此の人死すと言ふ。未だ死せずと雖も、必ず死せんことを知るが故に、此の人は死すと言ふ。是の如く諸の阿羅漢は結使已に盡くれば、有必ず當に盡くべきことを知るが故に、「有結盡く」と言ふ。

二三 正智を以て解脫を得。

摩躡提梵志の如きは、弟子其戸を擧げて床上に著け、昇きて城市中の多人の處に行き、

唱へて言く、「若し眼に摩躡提の戸を見る者あらば、是の人は皆清淨の道を得ん。何に泥んや、禮拜

二三 檀越の食を施す時は五事を與へ、或は百斤の金を食ふと言ひ、或は女人を戒垢と言ふは、皆果中に因を説くなり、

二三 正智もて解脫を得るを釋す。

二三 摩躡提〇二三〇二三〇見る者は清淨道を得と言へる因縁。

供養する者をや」と。多くの人あつて其の言を信ず。諸の比丘、是の語を聞き佛に白して言さく、「世尊、是の事云何」と。佛、偈を説きて言はく。

『小人は眼に見て清淨を求む、是の如きの無智に實道無し、諸結・煩惱心中に滿つ、云何が眼に見て淨道を得んや。』

若し眼に見て清淨を得ることあらば、何ぞ智慧功德の寶を用ゐん。眼見て淨を求むることは是の事なし、智慧功德を乃ち淨と爲す。』

是を以ての故に正智もて解脱を得と言ふ。

問うて曰く、(二四) 諸の阿羅漢は所作已に辦ず、更に進むとを求めず、何を以ての故に常に佛邊に在つて餘處に衆生を度せざるや。答へて曰く、一切十方の衆生、盡く佛を供養すべしと雖も、阿羅漢は恩を受くること重

きが故に、應に倍供養したてまつるべし。何となれば此の阿羅漢は、佛に從つて無量の功德を成受するとを得たるを以てなり。結使斷えて信心轉た多きことを知る。故に諸の大徳阿羅漢は佛邊にして功德の樂味を受け、供養恭敬して佛恩を報ずるが故に、佛邊に在つて住す。諸の阿羅漢の佛を圍遶したてまつるが故に佛徳益尊し。梵天の人の梵天王を遶るが如く、三十三天の釋提桓因を遶るが如く、諸の鬼人の毗沙門王を遶るが如く、諸の小王の轉輪聖王を遶るが如く、病人の病愈えて

【二四】 第一六問、諸の阿羅漢は衆生濟度に従事せず、尙ほ佛邊に在つて法を聞けるは何故なるか。  
【二五】 毗沙門天(イシシユラワナ) チャヤクワラブラナイ  
【二三】 轉輪聖王 (Cakravatti) (イシシヤ)

大醫の邊に住するが如し。是の如く諸の阿羅漢は、佛邊に在つて住す。諸の阿羅漢の闍遠供養するが故に佛德は益尊し。

問うて曰く、「二三諸の阿羅漢は所作已に辨じて已利を逮得せば、法を聴くを須るす。何を以ての故に般若波羅蜜(多)を説く時、五千の阿羅漢と共に答へて曰く、諸の阿羅漢は所作已に辨すと雖も、佛は甚深の智慧の法を以て試みんと欲す。佛の舍利弗に問ひたまふが如し。波羅延經、阿耨陀羅の中の偈に説くが如し。」

『種種諸の學人及び諸の數法人、是の人の所行の法を、願くは爲に實の如く説くべし。』

是の中に云何が學人、三六云何が數法人なる。爾の時に舍利弗默然たり。

是の如く三たび問ひたまふに三たび默す。佛義端を示し、舍利弗に告げたまはく、「生ありや不や」と。舍利弗答ふらく、「大德、生あり」と。生有る者は滅を爲さんと欲す。有爲は生法の故に學人と名け。智慧を以て無生法を得るが故に數法人と名く。是の經は是の中に應に廣く説くべし。

復次に、若くは有漏、若くは無漏の、諸の禪定を未だ得ざるが故に得んと欲し、已に得たるを堅く深からしめんと欲するが故に、諸の阿羅漢は佛邊にありて法を聴く。復次に、現前の樂の故に、三元難

【二七】 第一七問、阿羅漢は法を聴く必要なるべし、然るを何故に摩訶般若波羅蜜多經を説く時、五千の阿羅漢と共にりしか。

【二八】 學人と、數法の人とを辨す。

【二九】 雜阿含經(三三三)云、三三三。

陀迦經中に説くが如し。今世の樂を以ての故に法を聽く。復次に、諸の阿羅漢は佛邊に在つて法を聽き、心に厭足なし。毘盧提迦經中に説くが如し。舍利弗、毘盧提迦に語るらく、「我、法の中に法を聽いて厭くこと無し」と。復次に、佛大師の、自ら一心に、弟子の邊に從つて法を聽くが如し。難じて、阿羅漢は所作已に辦す、何を以てか法を聽く」と言ふべからず。譬へば飽満する人すら好食をば、猶尙更に食するが如し。云何ぞ飢渴せる人に而も食すべからずと言ん。是を以ての故に諸の阿羅漢は所作已に辦すと雖も、常に佛邊に在て法を聽く。復次に、佛は解脫法の中に住し、諸の阿羅漢も亦た解脫法の中に住す。住法相應の眷屬、莊嚴せること梅檀譬喩經の中に説くが如し。梅檀林あり、伊蘭之れを圍み、伊蘭の林あり、梅檀これを圍む。梅檀あり、梅檀を以て叢林と爲し、伊蘭あり、伊蘭自ら相圍遠す。佛も諸の阿羅漢も亦復是の如し。佛は善法解脫の中に住し、諸の阿羅漢も亦善法解脫の中に住し、住法相應の眷屬莊嚴せり。大衆を以て佛を圍遠すること、須彌山王を十寶山の圍遠せるが如く、白香象の下を白香象の圍遠せるが如く、師子の王を師子衆の圍遠せるが如く、佛も亦是の如し。佛は世間無上の福田たり、諸の弟子の興めに圍遠せられて共に住す。

唯、阿羅漢の學地に在つて、須陀洹を習たるを除く。

問うて曰く、(二〇)何を以てか唯阿難を除くと言ふや。答へて曰く、上に讚する所は、諸の阿羅漢

なり、阿難は其の數に在らず。何となれば學地に在つて、未だ欲を離れざるを以てなり。

問うて曰く、(二一)大徳阿難は第三の師、大衆の法將にして、涅槃の種を種うると、已に無量劫なり。

常に佛に近づき、法藏を持し、大徳にして利根なり。何を以てか今に至るまで、未だ欲を離れずして

學人と作るや。答へて曰く、大徳、善なる阿難の本願是の如し。「我、多聞なること衆中に於て最第

一ならん」と。亦諸佛の法によれば阿羅漢は所作已に辦するを以て、供給

供養の人と作すべからず、其佛法の中に於いて能く大事を辦するを以て、

煩惱の賊破れ、佛と共に解脱の床の上に在つて坐するが故なり。復次に、

長老阿難は、種種の諸經を聽き、持誦し、利觀するが故に智慧多くして

攝心少なし。二つの功德、等しき者は漏盡道を得べし。是を以ての故に長

老阿難は是れ學人にして須陀洹なり。復次に、世尊に供給せんことを貪は

るが故に、是の阿難は佛の爲に供給の人と作り、是の如く念す、「若し我早く漏盡の道を取らば、便

ち世尊に遠ざかり、供給の人とすることを得ず」と。是を以ての故に阿難は能く阿羅漢道を得と雖も、

自ら制して取らざるなり。復次に、處と時と人と未だ合せざるが故なり。何等の處にてか能く法を集

めん、千の阿羅漢は未だ耆闍崛山に在らず、是を處と爲す。世尊の過ぎ去りたまふの時未だ到らず、

【二〇】第一八問、阿難陀を除く理由如何。

【二一】第一九問、阿難陀は常に佛に近侍せる利根の大徳なり、然るに佛の滅し給ふまで、無學位に進む能はざりしは何故なるか。

長老婆耆子在らず、是を以ての故に長老阿難は漏を盡さず、要らず世尊過ぎ去りたまふこと在らば、集法の衆、婆耆子をして説法勸諫せしめん。三事合するが故に漏盡道を得たり。復次に、大徳阿難は、世法を厭ふこと少くして、餘人の如くならず。是の阿難は、世世王者の種にして、端正無比、福徳無量なり。世尊の近親にして、常に侍して佛に従ひ、必ず此の念を有す、「我、佛の近侍として法寶藏を知る、漏盡道法は我畏らくは失せず」と。是の事を以ての故に大に慇懃にして漏を盡さず。

問うて曰く、(二三) 大徳阿難の名は何の因縁を以てするや。是れ先世の因縁なりや。是れ父母の字を作るところなりや、是れ因縁に依つて名を立つるや。答へて曰く、先世の因縁と亦た父母の名を作ると、亦た因縁に依つて字を立つ。

【二三】 婆耆子は婆闍子(Vrijjiputt)の誤か？

【二三】 第二〇問、阿難陀てふ名を得し因縁如何。

問うて曰く、云何が先世の因縁なる、答へて曰く、釋迦文佛は先世に瓦師と作り大光明と名く。爾の時に佛あり、釋迦文と名け、弟子を舍利弗、目犍連、阿難と名く。佛、弟子と俱に瓦師の舎に到つて一宿す。爾の時に瓦師は草坐・燈明・石蜜漿の三事を布施し、佛及び比丘僧を供養し、便ち願を發して言く、「我當來、老病死惱五惡の世に於て佛と作り、今佛の如く釋迦文と名け、我が弟子の名字も亦今佛の弟子の如くせん」と。佛の願を以ての故に阿難と字くることを得たり。

復次に、阿難は、世世願を立て、「我、釋迦文佛の弟子の多聞なる衆中に在つて、願はくは最第一

にして阿難と字けんしと。

復次に、阿難は、世世忍辱にして瞋を除く、是の因縁を以ての故に生れ

て便ち端正なり。父母其の端正を以て、見るもの皆歡喜するが故に

難と字けたり。是を先世の因縁の字とす。云何が父母字を作るや。昔、二

日種王あり、師子頰と名く。其王に四子あり、其の第一を淨飯と名

け、二を白飯と名け、三を解飯と名け、四を甘露飯と名く。

一女あり、甘露味と名く。淨飯王に二子あり、悉達陀と難陀とな

り。白飯王に二子あり、跋提と提沙となり。解飯王に二子あり、提

婆達多と、阿難となり。甘露飯王に二子有り、摩訶男と阿泥盧豆と

なり。甘露味女に一子あり、施婆羅と名く。是の中悉達多菩薩は、漸漸

に長大し、轉輪聖王の位を棄てて夜中に出家し、湏樓鞞羅國の中、尼連禪

河の邊に往き、六年苦行す。是の時、淨飯王は子を愛念するが故に常に

使を遣はして問訊し、消息を知らんと欲す。「我が子、道を得るや不や、

若くは病なるか、若くは死せるか」と。使者來つて王に白す、「菩薩は唯皮

骨筋のみ有つて相連り、身命を持すると甚だ微弱なり、若くは今日なるか、

- 【三三】 蓋し阿難陀とは歡喜、慶喜を意味すればなり。
- 【三五】 以下釋尊近親の名を擧ぐ。
- 【一六】 師子頰 (Shishinaka) 王の四子に各々二子あり。
- 【三七】 淨飯 (Suddhavana) シユクラーダナ
- 【三八】 白飯 (Sakkhavana) シユクラーダナ
- 【三九】 甘露 (Amritakana) ドローノータナ
- 【四〇】 解飯 (Dharmakana) アムリトーマナ
- 【四一】 甘露味 (Amritaka) アムリト
- 【四二】 悉達多 (Siddhartha) シユクラーダ
- 【四三】 難陀 (Nanda) ナンダ
- 【四四】 跋提 (Bhadrika) ナンダ
- 【四五】 提沙 (Tissa) ナンダ
- 【四六】 摩訶男 (Mahamanu) ナンダ
- 【四七】 阿泥盧豆 (Anuruddha) ナンダ
- 【四八】 太子の六年苦行。
- 【四九】 淨飯王その子を愛念し、常に使を遣はして問訊す。

若くは明日にして、復久

しからざらん」と。王は其の言を聞き甚だ大に愁念し、憂惱の海に没す。「我子、既に轉輪王と作らず、又、佛と作ることを得ず、一に何を哀苦し、所得なくして死するや」と。是の如く憂惱・荒迷・憤塞せり。是の時に 一語は菩薩は苦行の處を棄て、百味の乳糜を食して身體充滿し、尼連禪の水中に於て洗滌し已つて、菩提樹下に至り金剛處に坐し、自ら誓つて言く、「要らず此の結跏趺坐を破らずして、一切智を成せん。一切智を得ずんば終に起たず」と。是の時魔王は十八億の衆を將ゐて菩薩の所に到り、敢て菩薩と其の得失を決す。菩薩は智慧力の故に大に魔軍を破る。魔は如かずして退き、自ら念すらく、「菩薩には勝ら難し、當に其の父を惱まさん」と。(二五二) 淨飯王の所に至り詭はつて言く、「汝が子は今日の夜、已に死し了れり」と。王は此の語を聞き、驚き怖れて、床より墮ち、熱沙の中の魚の如し。王哭して言く、

〔二五三〕阿夷陀は虚言せり、瑞應も亦た驗なし、利を得るの吉名も一切獲る所なし。』

是時、菩提樹の神は大に歡喜し、天の曼陀羅華を持ち、淨飯王の所に至り、偈を説いて言く、

「汝が子は已に道を得て、魔衆は已に破散し、光明は日の出づるが如く、普く十方の土を照せりの歡喜して大利を得、一切の苦を解脱し、今、法輪を轉ずることを得て、清淨ならざる所なし。』

王言はく、「前に天あり、來つて言はく、汝が子は已に死せり」と。汝は今來つて、魔を壞りて、

〔二五〕菩薩は苦行の處を棄て、百味の乳糜を食ひ、尼連禪河に洗滌して降魔成道す。  
 〔二五二〕惡魔退散して、淨飯王を驚まし、汝が子今日已に死すと説る。  
 〔二五三〕阿夷陀(Asita)・曼陀羅華(Mandara)。

道を得たりと言ふ。二語相違せり、誰か信すべき者ぞ」と。樹神又言はく、「實に妄語にあらず、前の天は詭りて、已に死せりと云ふ。是れ魔、嫉を懐くが故に、來つて相惱ます。今日、諸天龍神は華香を以て供養し。空中に繒を懸け、汝が子は身より光明を出し、遍ねく天地を照す。王その言を聞いて、一切苦惱の心に於て解脱を得たり。王言はく、「我が子は轉輪聖王を捨つと雖も、今法轉輪王を得たり。定めて大利を得て失ふ所なげん」と、心大に歡喜す。是時 二番 斛飯王の家より使來つて、淨飯王に白して言はく、「貴弟は男を生めり」と。王心に歡喜して言はく、「是の今日は大吉にして、是れ歡喜の日なり」と。來使に語つて言はく、「是の兒は當に字けて阿難(即ち歡喜)と爲すべし」と。是の爲に父母、「歡喜てふ」字を作れり。如何が因縁に依つて名を立つるや。阿難は端正清淨なること好く明かなる鏡の如し。老少・好醜・容貌・顔狀・皆身中より現じ、其の身は明淨なり。女人之を見れば欲心即ち動く、是の故に 二番 佛は、阿難のを聽したまふ。是く阿難は、能く他人の見る者の心眼をして歡喜せしむるが故に阿難と名く。是に於て論を造る者讀じて言はく

「面は淨かなる滿月の如く、眼は青蓮の華の若し。佛法の大海水は阿難の心に流れ入りて、能く人の心眼もて見る者をして大に歡喜せしむ。諸の來つて、佛を見たてまつらんことを求むれば、通

【高】太子成道の日、斛飯王の子、阿難出生す。

【善】佛、阿難に肩衣を聽し給ふ。

【善】肩衣とは、肩に掛くる衣の義にして、黄色の僧服のことならん。

二番 肩衣を著覆すること

現して宜しきを失はず。」

是の如く、阿難は能く阿羅漢道を得と雖も、佛を供養するを以ての故に、自ら漏を盡さず。此の大功德を以ての故に無學に非ずと雖も、無學の數の中に在り、未だ欲を離れずと雖も、欲を離れし數の中に在り。是を以ての故に數を五千と爲す。實には未だ是れ阿羅漢にあらざるを以ての故に、唯阿難を除くと言ふ。

初品の中の四衆品を釋す。

復た、五百の比丘比丘尼優婆塞優婆夷あり、皆聖諦を見たるものなり。

問うて曰く、「一毛を以てか諸の比丘は五千にして、餘の三衆は各五百なるや。答へて曰く、「一毛に女人の多くは智慧短しく、煩惱の垢重く、但喜樂愛行を求むること多きが故なり。少しくは能く結使を斷じ、解脱して證することを得たり。佛の説きたまふが如くんば、是の因縁起の法は、第一甚深にして得難く、一切の煩惱を盡して欲を離れ、涅槃を得ることは倍す復た見難し、是を以ての故に女人は多く得ること能はず、比丘に如かざるなり。

優婆塞、優婆夷は居家に有るが故に、心不淨に、漏を盡して正しく四聖諦を得、學人と作る可きこと能はず。獨に説くが如し。

【一毛】第二問、比丘の數の五千人にして、他の三衆即ち比丘尼・優婆塞・優婆夷の數、各五百人なる理由如何。  
【一毛】女人は短智慧にして但だ喜樂愛行のみを求む、故に斷解の者少し。

【一五】孔雀は色あり、身を嚴ると雖も、鴻鴈の能く遠く飛ぶに如かず。白衣は富貴にして力ありと雖も、出家の功德の勝れたるに如かず。』

是を以ての故に諸の比丘尼は、出家して世業を棄つと雖も智慧短し、是の故に五百の阿羅漢の比丘尼あり。白衣の二衆は居家にして、事違きが故に、道を得る者少し、亦た各五百あり。

問うて曰く、【一六】五千の阿羅漢の如きは皆讚す、三衆は何を以てか讚せざ

るや。答へて曰く、大衆已に讚すれば則ち餘も亦た讚することを知る。

復次に、若し別して讚せば、外道の輩は當に呵して、「何を以てか比丘

尼を讚するや」と言ひ、「この」誹謗を生ずべきが故なり。若し白衣を讚せ

ば、當に「供養を爲すが故に」と云ふべし。是を以ての故に讚せず。

問うて曰く、【一七】摩訶衍經は佛と大比丘衆と俱なり。或は八千人、或

は六萬十萬人と俱なり。是の摩訶般若波羅蜜【多】經は諸經の中の第一な

り、大なること囑累品の中に説くが如し。餘經は悉く忘失するも其の

罪は小少なり、般若波羅蜜【多】は一句を失するも其の罪は大多なり。是を以ての故に般若波羅蜜【多】

經は第一に大なることを知る。是の第一なる經の中には當に第一の大會あるべし。何を以ての故

に、聲聞衆の數は少くなく、止た比丘は五千、比丘尼・優婆塞・優婆夷は各五百あるや。答へて曰く、

【一五】孔雀は身を嚴れども鴻鴈の遠く飛ぶに如かず、白衣は富貴ありと雖も、出家の功德に如かず。  
【一六】第二二問、阿羅漢のみ讀じて、他の三衆は讚せざる理由如何。  
【一七】第二三問、佛陀の般若波羅蜜多經を説き給ふ時の會衆は、餘經のそれよりも少なき理由如何。

(二三) 是の大經は甚深にして解し難きを以てなり。聲聞衆少なきことは、譬へば王の眞實を有し、凡人に示さずして、大人の信愛する者にのみ示すが如く、王の議を謀る時、諸の大信愛する智人と共に論じ、諸の餘の小臣は則ち入ることを得ざるが如し。

復次に、是の六千五百人は盡く道を得、盡く甚深の般若波羅蜜(多)を解

【二三】般若は大なるが故に聲聞衆は少なし。

せずと雖も、皆能く信じて無漏の四信を得たるが故なり。餘經の聲聞衆は大に多しと雖も、雜にして盡く道を得ず。

復次に、是の中に先づ千萬の阿羅漢を讚じ、中に最も勝れたる五千人を擇び取れり、比丘尼・優婆塞・優婆夷も亦た爾なり。勝れたる者は得難きが故に多からず。

# 卷の第四

初品の中の 菩薩を釋す。

復た菩薩摩訶薩あり。

論 問うて曰く 三若し上數に従はば、應に先づ菩薩にして、次第に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷

となるべし。菩薩は佛に次ぐが故なり。若し下數に従はば、應に先づ優婆夷にして、次第に優婆塞、比丘尼、比丘、菩薩とすべし。今何を以てか先

づ比丘を説き、次に三衆、後に菩薩を説くや。答へて曰く、菩薩は佛に次

ぐべしと雖も、諸の煩惱いまだ盡きざるを以ての故に、先づ阿羅漢を説

く。諸の阿羅漢は智慧少なしと雖も、而も已に成慧せり。諸の菩薩は智慧

多しと雖も、煩惱いまだ盡きず、是の故に先づ阿羅漢を説く。佛法に二

種あり、一には秘密、二には顯示なり。顯示の中の佛・辟支佛・阿羅漢は皆是れ福田なり。其の煩惱を

盡して、餘すこと無きを以ての故なり。秘密の中に説く諸の菩薩は 無生法忍を得、煩惱已に斷じ、

六神通を具し、衆生を利益す。顯示の法を以ての故に前に阿羅漢を説き、後に菩薩を説く。復次に、

菩薩は方便力を以て現に五道に入り、五欲を受け、衆生を引導す。若し阿羅漢の上に在かば、諸天

- 【一】菩薩は菩提薩埵 (Bodhisattva) の略稱。
- 【二】第一問、菩薩を四衆の次に置く理由如何。
- 【三】顯密二種の佛教を辨す。
- 【四】無生法忍 無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體なり。眞智此の理に安住して動かざるを無生法忍と云ふ。

世人も當に疑怪を生ずべし、是の故に後に説けり。

問うて曰く、阿羅漢の後に在くことは爾る可し。何を以てか反つて優婆塞優婆夷の後に在くや。

答へて曰く、四衆は漏未だ盡きずと雖も、盡すこと久しからざること有るが故に、通じて聲聞衆と名

く。若し四衆の中間に於て菩薩を説かば、則ち便ならず、比丘尼の如きは無量の律儀を得るが故に、

應に比丘の後に次ぎ、沙彌の前に在くべし。佛は儀法便ならざるを以ての

故に沙彌の後に在けり。此の諸の菩薩も亦是の如し、學人三衆の上に在る

べしと雖も、便ならざるを以ての故に後に説くなり。復次に、有人の言く、

「菩薩の功德智慧は、阿羅漢辟支佛に超殊す。是の故に別説す」と。

問うて曰く、聲聞經の中には但四衆のみを説く、此の中に何を以て

か別に菩薩衆を説くや。答へて曰く、二種の道あり、一には聲聞道、二

には菩提薩埵道なり。若し比丘比丘尼、優婆塞優婆夷の四衆を説かば、當

に是れ聲聞の道を求むる者なることを知るべし。若し別に菩薩摩訶薩衆を説かば、當に是れ佛道を求む

る者なることを知るべし。是を以ての故に聲聞法の中の經の初には、佛某處に在り、某處に住して、

爾所の菩薩と俱なりとは無く、但佛某處某處に住し、爾所の比丘と俱なりと言ふ。佛、波羅奈〔斯

に在して、五比丘と俱なりき。佛、伽耶國の中に在して、千の比丘と俱なりき、佛、舍婆提に在し

【五】 第二問、菩薩を阿羅漢の後に在くは、理由あるとなれども、在家の二衆の後に在くは何故ぞや。

【六】 第三問、小乘經には但四衆のみを説き、大乘經に菩薩衆を説く理由如何。

【七】 佛教に聲聞道即ち小乗と、菩薩道即ち大乘との二種あることを辯す。

て五百の比丘と俱なりきと説くが如し。

問うて曰く、諸の菩薩に二種あり、若くは出家、若くは在家なり。在家の菩薩は、總じて説けば、優婆塞優婆夷の中にあり、出家の菩薩は、總じて説けば、比丘比丘尼の中に在り。今何を以ての故に別に説くや。答へて曰く、總じて四衆の中に在りと雖も、應當に別に説くべし。何となれば是れ菩薩にして必ず四衆の中に墮すると、四衆にして菩薩の中に墮せざると有るを以てなり。何者か是なる。聲聞の人と辟支佛の人とあり、求めて天に生ずる人あり、求めて自活を樂ふ人あり。此四種の人菩薩の中に墮せず。何となれば是の人は發心して、「我は當に佛と作るべし」と言はざればなり。復た次に、菩薩は無生法忍を得るが故に、一切の名字生死の相を斷じて三界を出で、衆生の數の中に墮せず。何となれば聲聞の人は阿羅漢道を得、滅度し已つて、尚ほ衆生の數の中に墮せず、何に況んや菩薩をや。波羅延經優波尸難の中の偈に説くが如し。

『已に滅せば處として更に出づると無きや不や。若し已に永く滅せば出でざるや不や。既に涅槃に入らば常住なりや不や。唯願はくは、大智よ、其の實を説きたまへ。』

佛、答へたまはく、

『滅は即ち是れ量るべからず、因縁及び名相を破壊し、一切言語の道已に過ぎ、一時に都て盡す

【八】 第四問、在家の菩薩は在家の二衆中に攝せられ、出家の菩薩は出家の二衆中に攝せらる。然るを今彼等を別説する理由如何。

こと火の滅するが如し。』

阿羅漢の如きは、一切の名字すら尙斷せり、何に況んや菩薩は能く一切諸法を破し、實相を知り、法身を得て、而も斷せざらんや。是を以ての故に摩訶衍には四衆の中、別に菩薩を説く。

問うて曰く、何を以ての故に大乘經の初には、菩薩衆聲聞衆を兩な

から説き、聲聞經の初には、獨り比丘衆を説いて菩薩衆を説かざるや。答へて曰く、二乗の義を辨せんと欲するが故なり。佛乘と及び聲聞乘のう

ち、聲聞乘は狭小にして、佛乘は廣大なり、聲聞乘は自らを利し、自

らの爲にし、佛乘は一切を益す。復次に、聲聞乘は多く衆生の空を説

き、佛乘は衆生の空と(一)法の空とを説く。是の如き等の種種の分別あり、

是の二道を説くが故に、摩訶衍經には、聲聞衆と菩薩衆と兩ながら説く、

摩訶衍を讚する偈の中に説くが如し。

『此の大乘を得たる人は、能く一切の樂と利益とを與ふるに實法を以てし、無上道を得せしむ。

此の大乘を得たる人は、一切を慈悲するが故に、頭目を以て布施し、之を捨つると草木の如し。

此の大乘を得たる人は、清淨の戒を護持し、羸牛の尾を愛して身の壽命を惜まざるが如くす。

此の大乘を得たる人は、能く無上忍を得、若し身を割截すること有るも、之を視ること草を斷す

【九】 第五問、大乘經の初に菩薩及び聲聞二衆を説き、小乘經の初に菩薩衆を説かざる理由如何。

【一〇】 衆生の空とは、我空の説即ち小我の永久存在を否定するをいふ。

【一一】 法の空とは、一切萬有の個性の永久恒存を否定するの説なり。

るが如し。

此の大乗を得たる人は、精進して厭き倦むこと無く、力め行じて休息せざることを、大海を擘む者の如くす。

此の大乗を得たる人は、廣く無量の定を証し、神通聖道の力、清淨にして自在を得。

此の大乗を得たる人は、諸の法相を分別し、實智慧を壞すること無く、是の中に已に不可思議の智と、無量の悲心の力とを具足し、二法の中に入らずして、等しく一切の法を觀す。

驢馬も馳象も乗することは同じしと雖も相匹はず、菩薩と及び聲聞と

の大小も亦た是の如し。

摩訶衍の人は、大慈悲を軸と爲し、智慧を兩輪と爲し、精進を快馬と爲し、戒定を以て銜と爲し、忍辱心を鎧と爲し、總持を轡勒と爲し、能く一切を度す。」

問うて曰く、(二三) 聲聞經の初に但比丘衆のみを説くが如く、摩訶衍經の初に何を以てか但菩薩衆のみを説かざるや。答へて曰く、摩訶衍は廣大なり。講乘、諸道、皆摩訶衍に入る。聲聞乘は狭小にして摩訶衍を受けず。譬へば恒河の大海を受けざるが如し、其の狭小なるを以ての故なり。大海は能く衆流を受く、其の廣大なるを以ての故なり。摩訶衍の法も亦た是の如し。偈に説くが如し。

【二三】 第六問、小乘經の初に但比丘のみを説くが如く、大乘經の初には、何故に菩薩のみを説かざるか。

『摩訶衍は、海うみの如ごとく、小乗せうじやうは牛跡うしあとの水みづなり。小なるが故ゆゑに大だいを受けず、其そのの喩たとへも亦是またかくの如ごとし。』

是こゝを以もつての故ゆゑに小乗せうじやうの衆しゆは菩薩ぼつさつを受けず。  
問とうて曰いはく、二四にじゆ何等なにかをか菩提ぼつだいと名なづけ、何等なにかをか薩埵さつたと名なづけるや。答こたへて曰いはく、菩提ぼつだいを諸佛しよぶつの道だうと名なづけ、薩埵さつたを或あるは衆生しゆじやう、或あるは大心だいしんと名なづく。是人このひとは其そのの心こころに、諸もろの佛道ぶつだうの功德くどくを盡つくく得えんと欲ほつす。斷だんずべからず、破はすべからざるごと、金剛山こんがうせんの如ごとし。是これを大心だいしんと名なづく。偶がに説とくが如ごとし。

『一切いっさいの諸佛しよぶつの法ほふ、智慧ちゑ及び戒定かいぢやうは、能よく一切いっさいを利益りやくす、是これを名なづけて

菩提ぼつだいと爲なす。

其そのの心こころは動うごかす可べからず、能よく成道じやうだうの事ことを忍しのび、斷だんせず、亦また破やぶらさず、

是こゝろの心こころを薩埵さつたと名なづく。』

復次またつぎに、好法かうほふを稱讚しやうさんするを名なづけて薩さつと爲なし、好法かうほふの體相たいさうを名なづけて埵たと爲なす。菩薩ぼつさつの心こころは自みづかりを利用りするが故ゆゑに、一切いっさい衆生しゆじやうを度たするが故ゆゑに、一切いっさいの法ほふの實性じつしやうを知るが故ゆゑに、阿耨多羅三藐三菩提あなうたらさんみやくさんぼつだいの道みちを行ぎやうするが故ゆゑに、一切いっさい賢聖けんせいの爲ために稱讚しやうさんせらるるが故ゆゑに、是こゝれを菩提薩埵ぼつだいさつたと名なづく。何なんとなれば佛ぶつ法ほふは、一切いっさい諸法しよほふの中うちにおいて最ちよも第一だいいちなり。是こゝの人は是こゝの法ほふを取とらんと欲ほつするが故ゆゑに、賢聖けんせいの爲ために讚歎さんたせらるる。

復次またつぎに、是かくの如ごときの人ひとは、一切いっさい衆生しゆじやうの爲ために、生老死しやうらうしを脱だつするが故ゆゑに佛道ぶつだうを索もとむ、是これを菩提薩埵ぼつだいさつたと名な

【三】 大乘は海の如く。小乗は牛跡の水の如し。  
【四】 第七問、菩提(Bodhi)の體相(サツタ)の意義如何。

づく。

復次に、三種の道は、皆是れ菩提なり。一には佛道、二には聲聞道、三には辟支佛道なり。辟支佛道、聲聞道も菩提を得と雖も、稱して菩提と爲さず。佛の功德の中の菩提を稱して菩提と爲す、是を菩提薩埵と名く。

問うて曰く、「三事に著りて菩提薩埵と名くるや。答へて曰く、大誓願あり、心動かす可からず、精進して退かず、是の三事を以て、名けて菩提薩埵と爲す。」

復次に、有人の言く、「初發心に願を作す、「我當に佛と作りて一切衆生を度すべし」と。是より已來、菩提薩埵と名く」と。偈に説くが如し。

「若し初發心の時、佛と作るべしと誓願せば、已に諸の世間を過ぎ、應に世の供養を受くべし。」

初發心より第九無礙に到り、金剛三昧の中に入る。是の中間を名けて、菩提薩埵と爲す。是の菩提薩埵に兩種あり。一、阿耨跋致と。阿耨跋致となり、退法不退法の阿羅漢の如し。阿耨跋致菩提薩埵は是を實の菩薩と名く。是の實の菩薩を以ての故に、諸の餘の退轉の菩薩も皆菩薩と名く。譬へば四道を得る人は是を實の僧と名け、實僧を以ての故に、諸の未だ道を得ざる者も、皆僧と名くることを得るが如し。

【五】 第八問、菩提薩埵と名くる理由如何。

【六】 阿羅漢は退轉。

【七】 阿耨跋致は不退轉。

問うて曰く、云何が是の菩薩の鞞跋致と阿鞞跋致とを知るや。答へて曰く、般若波羅蜜(多)阿鞞跋致品の中に、佛自ら阿鞞跋致の相を説きたまふ。是の如きの相は是れ退轉なり、是の如きの相は是

れ不退轉なり」と。復次に、若し菩薩にして一法を好修し、好念することを得ば、是を阿鞞跋致菩薩

と名く。何等か一法なる。常に一心に諸の善法を集む。諸佛は一心に諸の善法を集むるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得と説くが如し。復次に、菩薩あつて一法を得ば、是れ阿鞞跋致の相なり。何等か一法なる、正直に精進するなり、佛の阿難に問ひたまへるが如し。阿難よ、汝は精進を説くと

是世尊の如くせよ。阿難よ、汝は精進を讃ずると。是の善逝の如くせよ。阿難よ、常に行じ、常に修し、常に念じ、精進し、乃至人をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしめよ」と、經に廣く説くが如し。復次に、若し二法を得ば、是時は是れ阿鞞跋致の相なり。何等か二法なる、一切の法は實に空なりと知り、亦一切の衆生を捨てざらんとを念ず。是の如きの人を名けて阿鞞跋致の菩薩と爲す。復次に、三法を得。一には若し一心に願を作して佛道を成せんと欲せば、金剛の動かす可らず、破す可

らざるが如くす。二には一切衆生に於て、悲心骨に徹し髓に入る。三には般若舟三昧を得て、能く現在

の諸佛を見たてまつる。是の時を阿鞞跋致と名く。復次に、阿毘曇の中に迦旃延尼子の弟子の輩

【一八】第九問、菩薩の退轉、不退轉は如何にして知ることを得るか。

【一九】般若三昧(Pratyutpanna-samādhi)は、佛立と譯す。此三昧を行すれば諸佛現前すといふ。又は常行道とも譯す。蓋し此三昧を行するには、七日乃至九十日を期して間斷なく修行すればなり。天台には之を常行三昧といふ。

【二〇】般若舟三昧を得て、能く現在

の諸佛を見たてまつる。是の時を阿鞞跋致と名く。復次に、阿毘曇の中に迦旃延尼子の弟子の輩

【二一】般若舟三昧を得て、能く現在

の諸佛を見たてまつる。是の時を阿鞞跋致と名く。復次に、阿毘曇の中に迦旃延尼子の弟子の輩

【二二】般若舟三昧を得て、能く現在

の諸佛を見たてまつる。是の時を阿鞞跋致と名く。復次に、阿毘曇の中に迦旃延尼子の弟子の輩

【二三】般若舟三昧を得て、能く現在

の言く、「何をか菩薩と名く。自ら覺り、復能く他を覺らしむ、是を菩薩と名け、必ず當に佛と作るべき、是を菩薩と名く。菩提とは滿を盡くせる人の智慧に名く。是の人は智慧より生じて、智慧の人に護られ、智慧の人に養はるゝが故に、是を菩薩と名く」と。又言く、「阿耨跋致の心を發す、是より已後を菩薩と名く」と。又言く、「若し五法を離れ、五法を得ば是を菩薩と名く。何をか五法と謂ふや。三惡道を離れて、常に天上人間に生じ、貧窮下賤を離れて常に尊貴を得、非男の法を離れて、常に男子の身を得、諸の形体缺陋を離れて、諸根具足し、意と忘とを離捨し、常に宿命を憶うて、是の宿命の智慧を得、常に一切の惡法を離れ、遠く惡人を捨て、常に道法を求め、弟子を攝取す。是の如きを名けて菩薩と爲す」と。又言く、「三十二相の業を種えてより已來、是を菩薩と名く」と。

問うて曰く、「三〇何れの時か三十二相の業因縁を種えたるや。答へて曰く、三阿僧祇劫を過ぎて、然して後三十二相の業因縁を種えたり。

問うて曰く、三三幾時をか阿僧祇と名くるや。答へて曰く、天人の中には能く算數の法を知るも、極數は知ること能はず、是を一阿僧祇と名く。一と一とを二と名け、二と二とを四と名け、三三を九と名け、十と十とを百と名け、十百を千と名け、十千を萬と名け、千萬を億と名け、千萬億を那由他と

- 【一〇】 第一〇問、三十二相の業因縁を種えたる時期如何。
- 【一一】 阿僧祇劫 (Asankhyanta-kalpa)。
- 【一二】 第一一問、阿僧祇劫とは幾時を意味するか。
- 【一三】 那由他 (Nayuta)。

名<sup>なづ</sup>げ、千萬<sup>せんまん</sup>那由他<sup>なゆた</sup>を。頻婆<sup>びんば</sup>と名<sup>なづ</sup>げ、千萬<sup>せんまん</sup>の頻婆<sup>びんば</sup>を迦他<sup>かた</sup>と名<sup>なづ</sup>け、迦他<sup>かた</sup>を過<sup>す</sup>ぐるを阿僧祇<sup>あそうぎ</sup>と名<sup>なづ</sup>く。是<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>く數<sup>かず</sup>へて三阿僧祇<sup>さんあそうぎ</sup>なり。若<sup>も</sup>し行<sup>ぎやう</sup>するると一阿僧祇<sup>いつあそうぎ</sup>に滿<sup>み</sup>つれば、第二<sup>だいに</sup>の阿僧祇<sup>あそうぎ</sup>を行<sup>ぎやう</sup>じ、第二<sup>だいに</sup>の阿僧祇<sup>あそうぎ</sup>に滿<sup>み</sup>つれば、第三<sup>だいに</sup>の阿僧祇<sup>あそうぎ</sup>を行<sup>ぎやう</sup>す。譬<sup>たと</sup>へば算數<sup>さんすう</sup>の法<sup>はふ</sup>は、一<sup>いつ</sup>を算<sup>かず</sup>へ乃至<sup>なんじひやく</sup>百<sup>かぞ</sup>を算<sup>かず</sup>へ、百<sup>ひやく</sup>を算<sup>かず</sup>へ竟<sup>まは</sup>れば、還<sup>かへ</sup>つて一<sup>いつ</sup>に至<sup>いた</sup>るが如<sup>ごと</sup>し。是<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>く菩薩<sup>ぼさつ</sup>は一阿僧祇<sup>いつあそうぎ</sup>を過<sup>す</sup>ぎて、還<sup>かへ</sup>つて一<sup>いつ</sup>より起<sup>おこ</sup>る。初<sup>はじめ</sup>の阿僧祇<sup>あそうぎ</sup>の中<sup>うち</sup>の心<sup>こころ</sup>は自<sup>か</sup>ら我當<sup>われまさ</sup>に佛<sup>ほとけ</sup>と作るべきか、佛<sup>ほとけ</sup>と作<sup>な</sup>らざるかを知ら<sup>し</sup>らず。二阿僧祇<sup>にあそうぎ</sup>の中<sup>うち</sup>の心<sup>こころ</sup>は能<sup>む</sup>く我必<sup>われかなら</sup>ず佛<sup>ほとけ</sup>と作ることを知<sup>し</sup>ると雖<sup>いへど</sup>も、口<sup>くち</sup>づから「我當<sup>われまさ</sup>に佛<sup>ほとけ</sup>と作るべし」と稱<sup>しょう</sup>せず。三阿僧祇<sup>さんあそうぎ</sup>の中<sup>うち</sup>の心<sup>こころ</sup>は了<sup>りょう</sup>了<sup>りょう</sup>に自<sup>みづか</sup>ら佛<sup>ほとけ</sup>と作ることを得<sup>う</sup>と知り、口<sup>くち</sup>に自<sup>みづか</sup>ら畏<sup>おそ</sup>れ難<sup>はは</sup>かる所<sup>ところ</sup>なく「我<sup>われ</sup>は來<sup>ら</sup>世<sup>せ</sup>に於<sup>お</sup>いて、當<sup>まさ</sup>に佛<sup>ほとけ</sup>と作るべし」と發<sup>ほつ</sup>言<sup>ごん</sup>す。釋迦<sup>しやくか</sup>文佛<sup>もんぶつ</sup>は、過<sup>くわ</sup>去<sup>くわ</sup>の釋迦<sup>しやくか</sup>文佛<sup>もんぶつ</sup>より屬<sup>けい</sup>那<sup>いな</sup>尸棄<sup>しき</sup>佛<sup>ぶつ</sup>に到<sup>いた</sup>るまでを初<sup>はじめ</sup>の阿僧祇<sup>あそうぎ</sup>と爲<sup>な</sup>す。是<sup>こ</sup>の中<sup>うち</sup>において菩薩<sup>ぼさつ</sup>は、永<sup>なが</sup>く女人<sup>にょにん</sup>の身<sup>み</sup>を離<sup>まな</sup>る。屬<sup>けい</sup>那<sup>いな</sup>尸棄<sup>しき</sup>佛<sup>ぶつ</sup>より 然<sup>なん</sup>燈<sup>とう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>に至<sup>いた</sup>るまでを、二阿僧祇<sup>にあそうぎ</sup>と爲<sup>な</sup>す。是<sup>こ</sup>の中<sup>うち</sup>に菩薩<sup>ぼさつ</sup>は、七<sup>しち</sup>枚<sup>まい</sup>の青蓮華<sup>しやうれんげ</sup>を然<sup>なん</sup>燈<sup>とう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>に供<sup>く</sup>養<sup>やう</sup>し、鹿<sup>ろく</sup>皮<sup>ひ</sup>の衣<sup>い</sup>を敷<sup>き</sup>き、髮<sup>はつ</sup>を布<sup>ふ</sup>き、泥<sup>ひ</sup>を掩<sup>おほ</sup>ふ。是<sup>こ</sup>の時<sup>とき</sup>に然<sup>なん</sup>燈<sup>とう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>は便<sup>すなは</sup>ち其<sup>それ</sup>に記<sup>き</sup>を授<sup>さづ</sup>けたまふ、一<sup>なんぢ</sup>汝<sup>な</sup>は當<sup>まさ</sup>に來<sup>らい</sup>世<sup>せ</sup>に佛<sup>ほとけ</sup>と作りて、釋迦<sup>しやくか</sup>牟尼<sup>むに</sup>と名<sup>なづ</sup>くべし」と。然<sup>なん</sup>燈<sup>とう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>より 毗婆<sup>び</sup>尸<sup>し</sup>佛<sup>ぶつ</sup>に至<sup>いた</sup>るまでを第三阿僧祇<sup>だいさんあそうぎ</sup>と爲<sup>な</sup>す。若<sup>も</sup>し三阿僧祇<sup>さんあそうぎ</sup>劫<sup>ごふ</sup>を過<sup>す</sup>ぐれば、是<sup>こ</sup>の時<sup>とき</sup>菩薩<sup>ぼさつ</sup>は三十二<sup>さんじふ</sup>相<sup>さう</sup>の業<sup>ごふ</sup>因緣<sup>いんねん</sup>を種<sup>う</sup>う。

問<sup>と</sup>うて曰<sup>いは</sup>く、三十二<sup>さんじふに</sup>相<sup>さう</sup>の業<sup>ごふ</sup>は何<sup>いづれ</sup>の處<sup>ところ</sup>に種<sup>う</sup>う可<sup>べ</sup>きや。答<sup>こた</sup>へて曰<sup>いは</sup>く、欲<sup>よく</sup>界<sup>かい</sup>の中<sup>うち</sup>にして、色<sup>しき</sup>界<sup>かい</sup>無<sup>む</sup>色<sup>しき</sup>界<sup>かい</sup>

【四】 頻婆 (Pindha)

●●● デーバクラ

●●● 然燈佛 (Dharmakara)

【五】 毗婆尸佛 (Vipashī)

【六】 第一二問、三十二相の業を種うべき場所は如何。

に非ず。欲界の五道に於いては人道の中に在つて種ゑ、四天下に於いては閻浮提の中に種ゑ、三六に拘耶尼・三元・憍單羅・言・越弗婆提には非ず、唯閻浮提に在り。男子の身に於て種ゑ、女人に非ず。佛の出世の時に種ゑ、佛の出世したまはざれば種うる縁を得ず。佛身は種うる縁となるを得、餘は種うることを得ず。

問うて曰く、三十二相の業は、身業、口業、意業に於ては、何の業種なりや。答へて曰く、意業の種にして、身口業に非ず。何となれば是の意業は利なるを以てなり。

問うて曰く、意業に六識あり、是の三十二相の業は、是れ意識の種と爲すや、是れ「餘の」五識の種なるや。答へて曰く、是は意識にして、五識に非ず。何となれば五識は分別すること能はず、是を以ての故に意識の種なり。

問うて曰く、何の相より初めて種うるや。答へて曰く、有人は言ふ、

「足の安立の相より先づ種う。何となれば先づ安立して、然る後に能く餘の相を種うればなり」と。有人の言く、「紺青の眼の相より初めて種う、此の眼の相は大に衆生を慈み観ることを得」と。是の語ありと雖も、必ずしも爾らず。若し相の因縁和合する時は、便ち是れ初めて種うるなり。

- 【六】 拘耶尼 (Kodhiny)
  - ガリヤニヤ
  - クツカラ
  - 憍單羅 (Uttara-Kuru)
  - 越弗婆提 (Purvavidha)
- 【三】 第一三問、三十二相の業は、身・口・意の三業中の何れに屬すべきか。
- 【二】 第一四問、三十二相の業は六識中の何れに屬するか。
- 【一】 第一五問、三十二相の何れの相より種ふ初むるか。

問うて曰く、【西】一思の種となすや、多思の種と爲すや。答へて曰く、三十二思の種なり。三十二相は一一の思に一一の相を種ゑ、一一の相には百の福德莊嚴せり。

問うて曰く、【三】幾許を一の福德と名くるや。答へて曰く、有人の言く、「業報あり、轉輪聖王の四天下に於いて福樂を受け自在を得る、是を一福德と名け、是の如き百福を一相と成す」と。復有人の言

く、「釋提桓因と作りて、二天の中に於て自在を得る、是を一福と名く」と。復有人の言く、「他化自在天王と作りて、欲界の中に於いて自在を得る、是を一福と名く」と。復有

人の言く、「補處の菩薩を除いて、餘の一切衆生の得る所の福報、是を一福と名く」と。復有人の言く、「天地劫盡の一切衆生の福德を共にし、故らに

三千大千世界の報を立つ。是を一福と名く」と。復有人の言く、「是の福は量る可らず、譬喩を以ても知るべからず。三千大千世界の一切衆生の皆旨にして無目なるを、一人ありて能く治して差えしむるが如き、是を一福と爲す。一切の人の皆毒藥を被るに、一人あり、能く治

して差えしめ、一切の人の應に死すべきに、一人あり能く之を救うて脱せしめ、一切の人の戒を破り正見を破るに、一人あり能く教へて淨戒正見を得せしむ、是の如き等を「一福と爲す」と。復有人の言く、「是の福は量る可らず、譬喩す可らず。是の菩薩は第三阿僧祇の中に入り、心思の大行もて是の三十二相の因縁を種う、是を以ての故に是の福は能く量ること無し。唯佛のみ能く知りたまふ」と。

【西】第一六問、三十二相は一思の種なりや、又は多思の種なりや。

【三】第一七問、一福德の量幾何なるか。

【答】第一六問、三十二相は一思の種なりや、又は多思の種なりや。

【三】第一七問、一福德の量幾何なるか。

【答】第一六問、三十二相は一思の種なりや、又は多思の種なりや。

【三】第一七問、一福德の量幾何なるか。

【答】第一六問、三十二相は一思の種なりや、又は多思の種なりや。

【三】第一七問、一福德の量幾何なるか。

【答】第一六問、三十二相は一思の種なりや、又は多思の種なりや。

問うて曰く、〔三七〕 菩薩は幾時にして能く三十二相を種うるや。答へて曰く、極く遅きは百劫、極く

疾きは九十一劫なり。釋迦牟尼菩薩は九十一大劫、行じて三十二相を辦じたまへり。經の中に言ふが

如し。過去久遠に佛あり、〔三八〕 弗沙と名けたてまつる。時に二の菩薩あり、一を釋迦牟尼と名け、一

を彌勒と名く。弗沙佛は、釋迦牟尼菩薩の心純淑せるか、未だしきかを觀んと欲して、之を觀見

したまふに、其の心は未だ純淑せず。而も諸の弟子の心は皆純淑せるを知りたまふ。又彌勒菩薩は

心已に純淑せるも、而も弟子は未だ純淑せず。是の時弗沙佛は是の如く

思惟したまふ、「一人の心は速かに化す可きこと易く、衆人の心は疾く治す

べきこと難し」と。是の如く思惟し竟つて、弗沙佛は釋迦牟尼菩薩をして、

疾疾に成佛することを得せしめんと欲し、雪山の上に上り、寶窟の中に於

いて火定に入りたまへり。是の時に釋迦牟尼菩薩は外道の仙人と作りて山

に上り、薬を採りたまふ。〔三九〕 時に弗沙佛の寶窟の中に坐し、火定に入り、

光明を放ちたまふを見、見已つて、心に歡喜信敬し、一脚を翹だて、立ち、又手して佛に向ひたて

まつりて、一心に觀じ、目未だ曾て胸かざること七日七夜にして、一偈を以て佛を讚す。

『天上にも、天下にも、佛に如くもの無し、十方世界にも亦比なし。我盡く世界の有ゆるものを

見るに、一切佛に如く者あること無し。』

- 【三六】 第十八間、菩薩の三十二相を種うる年時は幾何なるか。
- 【三七】 極遅は百劫、極速は九十劫なり。
- 【三八】 弗沙 (Purusa)
- 【三九】 釋迦牟尼 (Sakyamuni)
- 【四〇】 彌勒 (Maitreya)

七日七夜、諦に世尊を觀、目未だ曾て胸かず、九劫を超越して九十一劫

の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。

問うて曰く、若し釋迦牟尼菩薩は聰明多識にして、能く種種の好偈を

作りたまはゞ、何を以ての故に七日七夜一偈を以て佛を讚じたまひしや。

答へて曰く、釋迦牟尼菩薩は其の心思を貴び、多く言ふことを貴びたまは

ず。若し更に餘の偈を以て佛を讚せば、心或は散亂せん。是の故に七日七

夜一偈を以て佛を讚じたまへり。

問うて曰く、釋迦牟尼菩薩は、何を以てか心未だ純淑せざるに、而

も弟子は純淑し、彌勒菩薩は心純淑すれども、而も弟子は未だ純淑せざ

るや。答へて曰く、釋迦牟尼菩薩は衆生を饒益する心多く、自ら身の爲

にすること少きが故なり。彌勒菩薩は多く己が身の爲にし、少しく衆生の

爲にするが故なり。轉婆尸佛より迦葉佛に至る、其の中間、九十一大

劫に於いて、三十二相の業因縁を種る竟つて、六波羅蜜(多)を滿せり。何

等か六なる。「謂く」檀波羅蜜多 尸羅波羅蜜多 羼提波羅蜜多 毘

梨耶波羅蜜多 禪波羅蜜多 般若波羅蜜多なり。

【四一】 第一九問、釋迦牟尼は聰明多識なるに、何故に七日七夜の間、一偈を以て佛を讚じしか。

【四二】 第二〇問、釋迦牟尼は心純淑せざるに弟子は却て純淑し、彌勒は心純淑せるに弟子は純淑せざる理由如何。

【四三】 釋尊は化他を正とし、彌勒は自行を正とす。

【四四】 轉婆尸 (Kāśyapa) 迦葉波 (Kāśyapa) 檀波羅蜜多 (Dāna-pāramitā)

【四五】 尸羅波羅蜜多 (Śīlapāramitā)

【四六】 羼提波羅蜜多 (Vīriyapāramitā)

【四七】 毘梨耶波羅蜜多 (Vīryapāramitā)

【四八】 禪波羅蜜多 (Dhyāna-pāramitā)

【四九】 般若波羅蜜多 (Prajñā-pāramitā)

【五〇】 檀波羅蜜多 (Dāna-pāramitā)

【五一】 般若波羅蜜多 (Prajñā-pāramitā)

問うて曰く、云何が檀波羅蜜(多)を満つるや。答へて曰く、一切を能く施して遮礙する所なく、

乃至身を施す時も、心に惜む所なし。譬へば、尸毗王の身を以て鶴に施すが如し。釋迦牟尼佛は、本

身王と作り、尸毗と名く。是の王は救護陀羅尼に歸命するを得たり。大に精進にして慈悲心あり、

一切衆生を視ること、母の子を愛するが如し。時に世に佛なし。釋提桓因の命終らんと欲す、自ら念

じて言はく、「何の處にか佛一切智人ある」と。處處に問難すれども疑を斷ずると能はず。盡く佛に非

ずと知つて天上に還り愁憂して坐す。巧なる變化師、吾、尸毗羯磨天問うて

曰く、「天主よ、何を以てか愁憂あるや」と。答へて曰く、「我一切智人を求

むるに得べからざるなり、是を以ての故に愁憂す」と。尸毗羯磨言はく、

「大菩薩あり、布施・持戒・禪定・智慧・具足せり。久しからずして當に佛と

作るべし」と。帝釋偈を以て答へて曰く、

『菩薩の大心を發すと、魚の子と、菴樹の華と、三事の因の時は多けれども、果を成する時は甚だ

少し。』

尸毗羯磨答へて曰く、「是の(垂)僂尸那種の尸毗王は持戒・精進・大慈・大悲・禪定・智慧あり。久しから

ずして佛と作りたまふべし」と。釋提桓因、尸毗羯磨に語る、「當に往いて之を試み、菩薩の相ありや

不やを知るべし。汝は鶴と作れ、我は鷹と作らん。汝は便ち作り怖れて、王の腋の下に入れ、我は當

【五三】 第二二問、如何にして布施波羅蜜多を満すべきか。

【五四】 尸毗王(のこ)の大布施の因縁。

【四五】 尸毗羯磨(Yivakarmann) 僂尸那(Uttara)。

に汝を逐ふべし」と。毗首羯磨言はく、「此の大菩薩は云何が此の事を以て惱まんや」と。釋提桓因偈を説いて言はく、

「我も亦た惡心に非ず、眞金の應に試むべきが如く、此を以て菩薩を試み、其の心の定まれるや不やを知るのみ。」

此の偈を説き竟つて、毗首羯磨は即ち自ら身を變じて、一の赤眼赤足の鶴と作り、釋提桓因は自ら身を變じて一の鷹と作り、急に飛んで鶴を逐ふ。鶴は直に來つて王の腋の底に入り、身を舉げて戦き怖れ、眼を動かし、聲を促がす。

「是時に衆多の人、相與に語つて曰く、「是の王は大慈仁ありて、宜しく一切を保護すべし。是の如きの鶴の小鳥、之に歸すること舎に入るが如し。菩薩の相是の如くんば、佛と作ること必ず久しからず」と。」

是の時に鷹は近き樹の上に在りて尸毗王に語る、「我に鶴を還し與へよ、此は我が受くる所なり」と。王時に鷹に語るらく、「我前に此を受く、是れ汝に受くるに非ず、我初めて意を發す時此を受く、一切衆生は皆之を度せんと欲す」と。鷹の言はく、「王は一切衆生を度せんと欲す、我は一切に非ざるや、何を以てか獨り愍ますして、而も我が今日の食を奪ひたまふや」と。王答へて言はく、「汝は何の食を要するや。我は誓願を作す、「其れ衆生あり、來つて我に歸する者は必ず之を救護せん」と。汝何の食

をか須ふるや、亦當に相給すべし」と。鷹の言く、「我は新に殺せる熟肉を須ふ」と。王念言すらく、「此の如きは得難し、自ら生を殺すに非さんば得るに由なし、我當に云何ぞ一を殺して、一に與ふべけんや」と思惟し、心を定めて即ち自ら偈を説く、

『是れ我が此の身肉は、恒に老病死に屬す、久しからずして當に臭爛すべし、彼我を須ふ、當に與ふべし。』

是の如く思惟し已つて、人を呼んで刀を持ち、自ら股の肉を割いて鷹に與ふ。鷹、王に語つて言く、「王は熟肉を以て我に與ふと雖も、當に道理を用つて、肉の輕重をして、鶴と等しくして、欺かるること勿らんことを得せしむべし」と。王言く、「稱を持ち取れ」と。肉を以て鶴に對するに、鶴の身は轉た重く、王の肉は轉た輕し。王は人をして二の股を割かしむるに、亦た輕くして足らず。次に兩の端と、兩の腕と、兩の乳と頸と脊とを割き、身を擧げて肉を盡せども、鶴の身は猶ほ重く、王の肉は故らに輕し。是時に、近臣・内戚は、輕慢を安施して、諸の看人を却く、王は今此の如く觀る可き無きなり。尸毗王の言く、「諸人を遮ると勿れ」と。聽して入つて看せしめ、偈を説いて言く、

『天人・阿修羅、一切來つて我が大心、無上の志を觀、以て佛道を成せんことを求めよ。』

若し佛道を求むる有らば、當に此の大苦を忍ぶべし。心を堅固にすること能はずんば、則ち當に其の意を思むべし。』

是時に、菩薩は血を以て手に塗り、稱を攀ちて上らんと欲す。心定まり、身を以て盡して、以て鵠に對せんとす。鵠の言く、「大王よ、此の事は辨じ難し、何を用つてか此の如くするや。鵠を以て我に還せし」と。王言く、「鵠來つて我に歸す、終に汝に與へず、我身を喪ふこと無量なりとも、物に於いて益なし。今身を以て易へて、佛道を求めんと欲す」と。手を以て稱を攀づ。爾の時に菩薩は肉盡き、筋斷えて自ら制すること能はず、上らんと欲して墮つ。自ら心を責めて言く、「汝當に自ら堅くすべし、迷悶することを得ること勿れ、一切衆生は憂苦の大海に墮す。汝一人誓を立てて、一切を渡さんと欲す、何を以てか怠り悶ゆるや。此の苦は甚た少なく、地獄の苦は多し。これを以て十六分に相比するに猶ほ一〔分〕にだも及ばず。我今、智慧・精進・持戒・禪定ありて、猶ほ此の苦を患ふ。何に況んや地獄の中の人の智慧なき者をや」と。是の時に、菩薩は一心に上らんと欲して、復た更に稱を攀ちて人に我を扶けよと語る。是の時に、菩薩は心定まつて悔なし。諸天・龍王・阿修羅・鬼神・人民は、皆大に讚して言く、「小鳥の爲に乃ち爾なり、是の事希有なり」と。即時に大地は爲に六種に震動し、大海の波は揚り、枯樹に華を生じ、天は香雨を降らし、及び名華を散じ、天女は歌ひ、必ず佛と成るとを得ん」と讚す。是の時に、四方の神仙は皆來り讚じて言く、「是れ眞の菩薩なり。必ず早く成佛せん」と。鴈は鵠に語つて言く、「衆く試むること此の如し、身命を惜まず、是れ眞の菩薩なり」と。即ち偈を説いて曰く、

「慈悲の地中より、一切智樹の牙を生ず、我曹當に供養すべし、應に憂惱を施すべからず。」

毗首羯磨、釋提桓因に語けて言く、「天主よ、汝は神力あり、此の王の身をして平復することを得

せしむべし」と。釋提桓因の言く、「我を須たざるなり、此の王は自ら誓願を作し、大心歡喜して、身

命を惜まず、一切を感發して、佛道を求めしむ」と。帝釋、人王に語けて言く、「汝、肉を割いて辛苦

す、心惱み沒せずや」と。王の言く、「我は心に歡喜して惱まず沒せず」と。帝釋の言く、「誰か當に汝

が心の沒せざるを信すべき者ありや」と。是の時に菩薩は實に誓願を作さ

く、「我、肉を割き、血を流すも、瞋らず惱まず、一心に悶えず、以て佛道

を求めば、我が身當に平復すべきと故の如くならん」と。即ち語を出すの

時、身復して本の如し。人天之久を見て、皆大に悲喜し、「未曾有なり。此

大菩薩は必ず當に佛と作るべし、我曹は應當に盡く一心に供養すべし、願

くは早く佛道を成せしめん、當に我等を念すべし」と嘆せり。是の時に釋提桓因、毗首羯磨は各天

上に還れり。是の如き等の種種の相は、是れ檀波羅蜜「多」を満すなり。

問うて曰く、「曇、尸羅波羅蜜「多」は云何が満すや」と答へて曰く、身命を惜まず、淨戒を護持すると、

須陀須摩王の劫を以て、沙波陀大王を磨するが故に、乃ち命を捨つるに至るも禁戒を犯さざるが

如し。昔、須陀須摩王あり、是王は精進し持成して常に實語に依れり。晨朝に車に乗り、諸の姝女を

【曇】 第二二問、如何にして持

戒波羅蜜多を満すや。

【七】 須陀須摩(Mulidhamma)王

實語の因縁。

【八】 沙波陀(Sambhuta)

將<sup>ひ</sup>ゐて、園<sup>を</sup>入<sup>り</sup>つて遊<sup>び</sup>戯<sup>す</sup>。城<sup>の</sup>門<sup>を</sup>出<sup>づ</sup>る時<sup>に</sup>、一<sup>は</sup>婆<sup>ら</sup>羅<sup>ん</sup>門<sup>あり</sup>て來<sup>り</sup>乞<sup>ふ</sup>。王<sup>に</sup>語<sup>つ</sup>て言<sup>く</sup>、「王<sup>は</sup>是<sup>れ</sup>大<sup>な</sup>福<sup>く</sup>徳<sup>の</sup>人<sup>なり</sup>。我<sup>が</sup>身<sup>は</sup>貧<sup>び</sup>窮<sup>なり</sup>、當<sup>に</sup>慙<sup>念</sup>せられ、少<sup>し</sup>多<sup>を</sup>賜<sup>ふ</sup>べし」と。王<sup>語</sup>つて言<sup>く</sup>、「諾<sup>し</sup>、如<sup>來</sup>を敬<sup>ひ</sup>、告<sup>げ</sup>て當<sup>に</sup>相<sup>布</sup>施<sup>す</sup>べし、我<sup>が</sup>出<sup>で</sup>還<sup>らん</sup>を須<sup>て</sup>」と。此<sup>の</sup>語<sup>を</sup>作<sup>し</sup>已<sup>つ</sup>て、園<sup>に</sup>入<sup>り</sup>て深<sup>く</sup>浴<sup>し</sup>嬉<sup>し</sup>戲<sup>せり</sup>。時<sup>に</sup>兩<sup>翅</sup>王<sup>あり</sup>、名<sup>を</sup>鹿<sup>足</sup>と曰<sup>ふ</sup>。空<sup>中</sup>より飛<sup>び</sup>來<sup>つ</sup>て姝<sup>女</sup>の中<sup>に</sup>於<sup>て</sup>、王<sup>を</sup>捉<sup>へ</sup>て將<sup>ち</sup>去<sup>る</sup>こと、譬<sup>へ</sup>ば金<sup>翅</sup>鳥<sup>の</sup>海<sup>中</sup>の龍<sup>を取</sup>るが如<sup>し</sup>、諸<sup>の</sup>女<sup>は</sup>啼<sup>哭</sup>號<sup>慟</sup>し、一<sup>園</sup>驚<sup>き</sup>、城<sup>の中</sup>外<sup>は</sup>播<sup>き</sup>擾<sup>悲</sup>惶<sup>す</sup>。鹿<sup>足</sup>は王<sup>を負</sup>うて、虛<sup>空</sup>に騰<sup>躍</sup>し、住<sup>す</sup>る所<sup>の</sup>山<sup>に至</sup>り、九<sup>十九</sup>の諸<sup>の</sup>王<sup>の中</sup>に置<sup>く</sup>。須<sup>陀</sup>須<sup>摩</sup>王<sup>は</sup>涕<sup>零</sup>るると雨<sup>の</sup>如<sup>し</sup>。鹿<sup>足</sup>王<sup>語</sup>つて言<sup>く</sup>、「大<sup>利</sup>利<sup>王</sup>よ、汝<sup>何</sup>を以<sup>て</sup>か啼<sup>く</sup>と小<sup>兒</sup>の如<sup>く</sup>なるや。人<sup>生</sup>るれば死<sup>あり</sup>、合<sup>會</sup>すれば離<sup>る</sup>ると有<sup>り</sup>」と。須<sup>陀</sup>須<sup>摩</sup>王<sup>答</sup>へて言<sup>く</sup>、「我<sup>は</sup>死<sup>を</sup>畏<sup>れ</sup>ず、自<sup>ら</sup>信<sup>を</sup>失<sup>せん</sup>ことを恨<sup>む</sup>。我<sup>は</sup>生<sup>れて</sup>より已<sup>來</sup>、初<sup>より</sup>妄<sup>語</sup>せざりき。今<sup>日</sup>晨<sup>朝</sup>門<sup>を出</sup>づる時<sup>に</sup>、一<sup>婆</sup>羅<sup>門</sup>あり、來<sup>つ</sup>て我<sup>に</sup>從<sup>つ</sup>て乞<sup>ふ</sup>。我<sup>時</sup>に許<sup>して</sup>言<sup>く</sup>、「還<sup>つ</sup>て當<sup>に</sup>布<sup>施</sup>すべし」と。無<sup>常</sup>を慮<sup>らず</sup>、彼<sup>が</sup>心<sup>に</sup>辜<sup>負</sup>して、自<sup>ら</sup>欺<sup>く</sup>の罪<sup>を</sup>招<sup>く</sup>。是<sup>の</sup>故<sup>に</sup>啼<sup>く</sup>のみ」と。鹿<sup>足</sup>王<sup>の</sup>言<sup>く</sup>、「汝<sup>意</sup>に爾<sup>か</sup>く此<sup>の</sup>妄<sup>語</sup>を畏<sup>る</sup>るとを欲<sup>せば</sup>、汝<sup>が</sup>還<sup>り</sup>去<sup>る</sup>るとを聽<sup>さん</sup>。七<sup>日</sup>、婆<sup>ら</sup>羅<sup>門</sup>に布<sup>施</sup>し訖<sup>らば</sup>、便<sup>ち</sup>來<sup>り</sup>還<sup>れ</sup>。若<sup>し</sup>七<sup>日</sup>を過<sup>ぎ</sup>て還<sup>らず</sup>んば、我<sup>に</sup>翅<sup>力</sup>あり、汝<sup>を取</sup>らんと難<sup>から</sup>ず」と。須<sup>陀</sup>須<sup>摩</sup>王<sup>は</sup>本<sup>國</sup>に還<sup>る</sup>るとを得<sup>て</sup>、恚<sup>ま</sup>、に意<sup>のご</sup>とく布<sup>施</sup>し、太<sup>子</sup>を立てて王<sup>と</sup>爲<sup>し</sup>、大<sup>會</sup>せる人<sup>民</sup>に之<sup>を</sup>懺<sup>謝</sup>して言<sup>く</sup>、「我<sup>が</sup>智<sup>周</sup>からず、物<sup>を</sup>治<sup>む</sup>るに多<sup>く</sup>法<sup>の</sup>如<sup>く</sup>ならざりしとは當<sup>に</sup>忠<sup>恕</sup>せらるべし、我

が今日の身の如きは己が有に非ず、正に爾かく還り去らん」と。擧國の人民及び諸の親戚は、叩頭して之を留む。「願くは王よ、意を留めて此の國を慈蔭したまへ。以て鹿足鬼王の虜と爲りたよふと勿れ、常に鐵舍奇兵を設くべし。鹿足は神なりと雖も、之を畏れざるなり」と。王の言く、「爾ることを得ざるなり」と。而して偈を説いて言く、

「實語は第一の戒なり、實語は天に昇るの梯なり。實語は大人と爲り、妄語は地獄に入る。我今實語を守らば、寧ろ身の壽命を棄つとも、心に悔恨あること無し。」

是の如く思惟し已つて、王は即ち發し去り、鹿足王の所に到る。鹿足は遙に見て歡喜して言く「汝は是れ實語の人なり、信要を失はず。一切の人皆壽命を惜む、汝は死より脱することを得て、還つて來りて信に赴く、汝は是れ大人なり」と。爾の

【无】 第二三問、如何にしてか 惡辱波羅蜜多を満すや。

時に須陀須摩王は實語を讚すらく、「實語これを人と爲す、非實語は人に非ず」と。是の如く種種に實語を讚して妄語を呵す。鹿足は是を聞き、信心清淨なる須陀須摩王に語けて言く、「汝、好く此を説く、今相放捨す、汝は解脱を得ん、九十九王も亦た汝に布施せん。意に隨つて各本國に還れ」と。是の如く語り已れば、百王各還り去ることを得たり。是の如き等の種種の相、是を尸羅波羅蜜(多)を満すと爲す。

問うて曰く、屬提波羅蜜(多)は云何が満すや。答へて曰く、若し人來りて罵り、搥捶し、割劓

し、支解し、命を奪ふとも、心に瞋を起さざるなり。闍提比丘の迦梨王の爲に、其手足耳鼻を截

れても、心堅くして動せざりしが如し。

問うて曰く、毗梨耶波羅蜜(多)は云何が満すや、答へて曰く、若し大

心動力あること、大施菩薩の一切の爲の故に、此の一身を以て誓つて大

海を杼み、其をして乾き盡さしめ、心を定めて懈らざりしが如し。亦弗沙

佛を讚すること七日七夜、一脚を翹て目を洵かさざりしが如し。

問うて曰く、禪波羅蜜(多)は云何が満すや、答へて曰く、一切の外道

の如きも禪定の中に自在を得。又尙ほ闍梨仙人は坐禪の時出入の息な

く、鳥、螺髻の中に於て子を生めども動かさず揺れず、乃至鳥の子飛び去る

が如し。

問うて曰く、般若波羅蜜(多)は云何が満すや、答へて曰く、菩薩は大

心にして思惟し分別す。劬孃陀婆羅門大臣の、閻浮提の大地を分つて七

分を作し、若干の大城・小城・聚落・村民も盡く七分と作せしが如く、般若

波羅蜜も是の如し。是の菩薩は六波羅蜜を満し、迦葉佛の所に在りて弟子と作り、淨戒を持し、功德

を行じ、兜率天上に生ぜり。

【六〇】 闍提比丘 (Kāṣṭhībhīkṣu)

【六一】 迦梨 (Kāli) の爲に身を割

截せられし因縁。

【六二】 第二四問、如何にしてか

精進波羅蜜多を満すや。

【六三】 大施太子誓つて大海を杼

むの因縁。

【六四】 闍梨仙人 (Kāśīyārishi) 坐禪

の因縁。

【六五】 第二六問、如何にしてか

智慧波羅蜜多を満すや。

【六六】 劬孃陀 (Kāṣṭhīnā) 大臣

閻浮提を分ちて七分と作せり

問うて曰く、菩薩は何を以てか兜率天上に生じて、上生に在らず、下生に在らざるや。是れ大に福徳あつて、應に自在に生ずべし。答へて曰く、有人は言ふ、「因縁業熟す、應に是の中に在りて生ずべし」と。復次に下地の中の結使は厚濁なり、上地の中の結使は利なり、兜率天上の結使は厚からず利ならず、「そは智慧安隱なるを以てなり。復次に、佛の出世の時を過ぎんと欲せざるが故なり。若し下地に於て生ぜば、命短かく、壽終らん時にも、佛未だ世に出でたまはず。若し上地に於て生ぜば、命長く、壽未だ盡きざるに、復た佛の出でたまふ時を過ぎん。」(そは)兜率天の壽と、佛の出でたまふ時と會ふが故なり。

復次に、佛は常に中道に居たまふが故なり。兜率天は六欲及び梵の中に於いて、上に三、下に三あり。彼の天より中國に下り生じ、中夜に神を降し、中夜に迦毗羅婆國を出でて、中道を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、

中道を以て人の爲に説法し、中夜に無餘涅槃に入り、中法を好むが故に中天に上生す。是の如く、菩薩は兜率天上に生れ竟り、四種を以て人間を観ず。一には時を観じ、二には土地を観じ、三には種姓を観じ、四には生處を観ず。云何が時を観ずるや。時に八種あり、佛は其の中に出でたまふ。第一には人の長壽なること八萬四千歳の時なり。第二には人壽七萬歳、第三は人壽六萬歳、第四は人壽五萬歳、第五は人壽四萬歳、第六は人壽三萬歳、第七は人壽二萬歳、第八は人壽百餘歳なり。菩薩は是の

【五】 第二七問、菩薩の兜率天上に生じ給ひし理由如何。

【六】 利とは鏡利の義なり。

【六】 菩薩は天に生じ四種を以て世間を観じ給ふ。

如く念す、「人壽百歳にして、佛の出でたまふの時到来り」と。是を時を觀すと名く。云何が土地を觀するや。諸佛は常に中國に在つて生ず。金銀寶物多く、飲食豐美に、其の土清淨なり。云何が種姓を觀するや。佛は二種姓の中に生ず、若くは刹帝利、若くは婆羅門なり。刹帝利は勢力大なるが故に、婆羅門種は智慧大なるが故に、時に貴き所の者に隨つて、佛は中に於て生じたまふ。云何が生處を觀するや。「何等の母人能く 毘羅延の力の菩薩を懷き亦た能く自ら淨戒を護らん」と。是の如く觀じ覺りて、「唯、中國の迦毗羅婆の淨飯王の後こそ、能く菩薩を懷まん」と。是の如く思惟し已りて、兜率天より下り、正慧を失はずして母胎に入る。

問うて曰く、何を以ての故に一切の菩薩の最後の身は天上より來り、人中より來らざるや。答へて曰く、上道に乗するが故なり、六道の中に天道は最上なればなり。復次に、天上より下る時は、種種の瑞應は未だ會て所有せず。若し人道に従はば、人道は此を有する能はず。復次に、人の天を敬重するが故なり。

問うて曰はく、一切の人は垢心あつて相續し、母胎に入るを以て一切の邪慧に相應す。云何が菩

【七〇】 迦羅延(Chalindya)。印度神話に於いてナリライヤナと稱せらるゝ神に三種あり。一は世界の初に出でたりといへるナリの子、二は世界の創造者ナリライヤナが初に水流(Chalindya)を造りしが故に、那羅延の稱あり。三は覺識の異名なり。

【七一】 第二八問、菩薩最後の身が人中より來らず、天上より來る理由如何。

【七二】 六道の中、天道を最上と云ふが故に菩薩は必ず天より來下し給ふ。

【七三】 第二九問、一切の人は垢心もて母胎に入る、佛を菩薩が正慧もて母胎に入りし由如何。

薩さつは正しょう慧ぎにして母ぼ胎たいに入いると名なくるや。答こたへて曰いはく、有ある人は言いふ、「相さう續ぞくの時とき一切いっさいの衆しゆ生じやうは、邪じや慧ぎの心こころありて母ぼ胎たいに入いり、菩ぼ薩さつは憶かく念ねんして失しつせざるが故ゆゑに正しょう慧ぎちて母ぼ胎たいに入いると名なく。中ちゆう陰いんの中うちに住すすれば則すなはち中ちゆう陰いんに住するを知しり、入にふ胎たいの時ときは入にふ胎たいを知しり、歌か羅ら羅らの時ときは歌か羅ら羅らに住することを知しり、重じゆう頰げん淨じゆう陀だの時ときは淨じゆう陀だに住することを知しり、五ご胞ぱうの時ときは五ご胞ぱうに住することを知しり、出し生しやうの時ときは出し生しやうを知しり、是この中ちゆう體たい念ねんして失しつせず、是これを正しょう慧ぎを以もつて母ぼ胎たいに入いると名なく。復また次に、餘よ人にんは中ちゆう陰いんに在あつて住する時とき、若もし男なんなれば母ぼに於おいて、此この女にょ人は我われと事ことに従したがふと、欲よく業げんの心こころを生しやうじ、父ちちに於おいて瞋しん恚いを生しやうず。若もし女にょなれば父ちちに於おいて、此この男なん子は我われと事ことに従したがふと、欲よく業げんの心こころを生しやうじ、母ぼに於おいて瞋しん恚いを生しやうず。是この如ごとき瞋しん恚いの心こころ染しん欲よくの心こころは菩ぼ薩さつには此この如ごとき。菩ぼ薩さつは先まより已すでに了りやうす、一いはは父ちち是これは母ぼ、是この父ちち母ぼ能よく我われが身みを長ちやう養やうす、我われは父ちち母ぼの生しやう身みに依よりて、阿あ耨に多た羅ら三さん菩ぼ提だいを得えん」と。是この淨じゆう心しんを以もつて父ちち母ぼを念ねんじ、相さう續ぞくして胎たいに入いり。是これを「正しょう慧ぎを以もつて母ぼ胎たいに入いる」と名なく。是この菩ぼ薩さつは滿まん十じゆう月げつにして、正しょう慧ぎを失しつ念ねんせずして出しゆつ胎たいし、行ゆくこと七しち步ぶし、口くちに言ごを發はつす、「是これ我われが末まつ後ごの身みなり」と。乃な至いた將まさに相さう師しに示しめさんとす、「汝なんぞ、我われが子こを觀みよ、實じつに三さん十じゆう二にの大人だいじんの相さうありや、不いなや。若もし三さん十じゆう二に相さうあつて具ぐ足そくする者ものは、是これ應まさに二に法ぽう

【四】歌羅羅(Kalala)は、受胎後七日、赤白の精和合の時をいふ。

【七】淨浮陀(じゆうぶだ)は、二七日の時に於ける靈の如き胞状の名なり。

【七】伽那(Gana)は、三七日の時に於ける凝縮の如きな云ふ。故に肉團と號す。

【七】五臟(ござう)は、五支、支那の影一くもる、時期を云ふ。

あるべし。若し在家ならば當に轉輪聖王と爲るべく、若し出家ならば當に成佛すべし」と。諸の相師の言く、「地天太子は實に三十二の大人の相あり、若し在家ならば當に轉輪王と作るべく、若し出家せば當に成佛すべし」と。王言く、「何等か三十二相なる」と。師答へて言く、「一には、足下安平にして立つの相なり、足の下の一切の地に著くるに、間に受くる所なく一鍼を容れず。二には、足下二輪の相、千幅と彌穀となり。三事具足し自然に成就して人工を待たず、諸天の工師、毗首羯磨も是の如きの妙相を化作すること能はず」と。

問うて曰く、「何を以ての故に能はざるや。答へて曰く、是の毗首羯磨諸天の工師は隱没せざるの智慧なるに、是の輪相は善業の報なり。天工師は生相得の智慧なるに、是の輪相は行善根の智慧の得なり。是の毗首羯磨は一世に是の智慧を得るも、是の輪相は無量劫の智慧より生ず。是を以ての故に毗首羯磨も化作すること能はず、何に況んや餘の工師をや。三には長指の相なり。指纏くして長く端直にして、次第に嗜好に指節變はず。四には、足の踵廣く平かなるの相なり、五には、手足の指縵網の相なり。鴈王の如く指を張れば則ち現はれ、張らざれば即ち現はれず。六には、手足柔軟の相なり。細なると劫波鏡の如く、餘の身

- 【六】 足下三十二相の名を以て之を譯す。但し、佛經、雜類、佛經の出入不同。
- 【七】 足下安平の *Supratilakā* といふ。
- 【八】 手足具千輪 (千幅) の *Chakrapada* (千幅) といふ。
- 【九】 彌穀相 (彌穀) の *Madhukā* (彌穀) といふ。
- 【一〇】 第三の相、毗首羯磨も能く此の妙相を化作する能はざる理由相例。
- 【一一】 指纏 (纏) の *Dhātā* (纏) といふ。
- 【一二】 足指圓行 (圓行) の *Chakrapada* (圓行) といふ。
- 【一三】 手、指節 (指節) の *Chakrapada* (指節) といふ。
- Hastapada (手足) ユリツカルナ
- 【一四】 手足柔軟 (柔軟) *Mahurmasa* (柔軟) *Hastapada*

分に勝る。七には、**〔七五〕** 足踏高満の相、足を以て地を踏むに廣からず狭からず、足の下の色は赤蓮華の如く、足の指の間の網及び足の邊の色は、眞の珊瑚の如く、指の爪は淨きと赤銅の如く、足踏の上は眞金の色にして、足踏の上の毛の青きとは、**〔七六〕** 毗瑠璃の色の如く、其の足の嚴好なることは、譬へば雜寶履の種種に莊飾せるが如し。八には、**〔七八〕** 伊泥延膈の相なり。伊泥延鹿王の膈の隨次に臍藏なるが如し。九には、**〔七九〕** 正しく立てば、手膝を摩するの相にして、俯せず仰がずして、掌を以て膝を摩するなり。十には**〔八〇〕** 陰藏の相なり。譬へば調善なる象寶・馬寶の如し。

問うて曰く、若し菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸の弟子は何の因縁を以てか陰藏の相を見しや。答へて曰く、衆人を度し、衆の疑を決せんが爲の故に陰藏の相を示すなり。復た有人の言く、佛は馬寶・象寶を化作して、諸の弟子に示して言く、我が陰藏の相も亦是の如しと。十一には**〔八一〕** 身の廣長等しき相なり。**〔八二〕** 尼拘盧陀樹の如く、菩薩の身齋は中と四邊との量等しと爲す。十二には**〔八三〕** 毛上に向ふの相なり。身に諸の毛ありて生え、皆上に向いて靡く。十三には**〔八四〕** 一一の孔に一毛生ずるの相なり。

【七五】 足踏高満 (Ayatana-pāṇi-luṅga)  
 【七六】 毗瑠璃 (Aīrya-rājā)  
 【七八】 伊泥延膈 (Aīrya-jāṅgala)  
 【七九】 正しく不屈二手過膝 (Sūti-tānāyaka-talāraṃbā-pāṇī-ṭṭāra)  
 【八〇】 陰藏如馬王 (Kāśyapa-stambha)  
 【八一】 第三一間、菩薩成道の時、諸の弟子等が菩薩の陰藏の相を見し理由如何。  
 【八二】 身縱廣等如尼拘盧陀樹 (Nigrodha-parimāṇa)  
 【八三】 尼拘盧陀 (Nigrodha) は榕樹なり。  
 【八四】 毛上膝 (Nivveṇṇa-gaṇṇa)  
 【八五】 身毛上生色柔軟 (一一毛右旋) (Ekakāṇṇapariṇāma-ṭṭhā)

毛は亂れずして青きこと琉璃色の如く、毛は右に旋つて上に向ふ。十四には、金色の相なり。

問うて曰く、突等か金色なるや。答へて曰く、若し鐵を金の邊に在れば則ち現れず、今の現在の

金を佛の在す時の金に比すれば則ち現れず、佛在す時の金を、閻浮那の金に比すれば則ち現はれず。

閻浮那の金を大海の中の轉輪聖王道の中の金沙に比すれば則ち現れず。金

沙を金山に比すれば則ち現れず。金山を須彌山の金に比すれば則ち現はれ

ず。須彌山の金を三十三の諸の天の瓔珞の金に比すれば則ち現れず。三十

三の諸の天の瓔珞の金を、炎摩天の金に比すれば則ち現れず。炎摩天の金

を、兜率陀天の金に比すれば、則ち現はれず。兜率陀天の金を、化自

在天の金に比すれば、則ち現はれず。化自在天の金を、他化自在天の金

に比すれば則ち現れず。他化自在天の金を菩薩の身の色に比すれば則ち現

はれず。是の如きの色、是を金色の相と名く。十五には丈夫の相なり。四

邊に皆一丈の光あり、佛は是の光の中に在して、端嚴第一なること、諸天

諸王の寶光の明淨なるが如し。十六には細薄皮の相、聖土の身に著かざること、蓮華の葉の塵水を

受けざるが如し。若し菩薩乾土の山の中に在して經行すれども、土足に著かず、藍風來るに隨つて、

土山を吹き破り、散じて塵と爲らしむるに、乃至一塵も佛身に著かず。十七には、七處平滿の相、雨

- 【九七】 香皮細香金色 (Sambhava)
- 【九八】 第三二問、金色とは何をいふか。
- 【九九】 轉輪聖王 (Cakravartin) ?
- 【一〇〇】 炎摩天 (Vasavati)
- 【一〇一】 兜率陀天 (Tushita)
- 【一〇二】 化自在天 (Nirvāṇa)
- 【一〇三】 他化自在天 (Paranirvāṇa)
- 【一〇四】 七處平滿 (Sattva)

手・兩足・兩肩・項中の七處、皆平滿端正にして、色の淨きこと餘の身體に勝れり。十八には(二〇五)兩腋の下平滿なるの相なり。高からず深からず。十九には(二〇六)上身師子の如きの相なり。二十には(二〇七)大身直身の相なり。一切の人の中に於いて、身、最大にして直し。二十一には(二〇八)肩の圓好なるの相なり。一切の治肩是の如き者なし。二十二には(二〇九)四十の齒の相なり。多からず少からず、餘人は三十二の齒にして、身には三百餘の骨あり、頭の骨は九あり。菩薩は四十の齒にして、頭に一骨あり、菩薩は齒骨多く、頭の骨は少し。餘人は齒骨は少く、頭の骨は多し、是を以ての故に人身に異なれり。

(二一〇) 齒の齊しき相なり。諸の齒は等しうして、麤なる無く、細なる無く、出でず入らず、齒密なる相なれば、人の知らざる者は、謂つて一齒と爲す、齒の間には一毫を容れず。二十四には(二一一) 牙の白き相なり。乃至雪山玉の光に勝れたり。二十五には(二一二) 師子の頰の相なり。師子は獸中の王として、平なる廣き頰なるが如し。二十六には(二一三) 味の中上味を得るの相なり。有人の言く、「佛、食を以て口の中に著けたまへば、一切の食は皆最上の味を作る。何となれば是れ一切の食の中には、最上の味の因あるが故なり。是の相なき人は、其因を發すこと能はずが故に、最上の味を得ず」と。復た有人の言く、「若し菩薩食を擧げ口中に著くれば、是の時咽喉の

- 【二〇五】 兩腋滿相 (Chakrasana)
- 【二〇六】 上身如獅子 (Simhanu-virahakaya)
- 【二〇七】 肩善圓滿 (Susuptavastakandha)
- 【二〇八】 四十齒具足 (Caturvimsatidanta)
- 【二〇九】 齒齊密 (Samadanta)
- 【一一〇】 牙白 (Sukrasparsha)
- 【一一一】 頰如獅子 (Simhanu)
- 【一一二】 得味中上味 (Kasurasya)

邊の兩處より甘露を流し注ぎ、諸味を和合す。是の味は清淨なるが故に、味中の上味を得と名く。

二十七には 二二三 大舌の相なり。是れ菩薩の大舌は、口中より出でて一切の面の分を覆ひ、乃ち髮の際

に至る。若し還つて口に入れば口も亦滿さず。二十八には 二二四 梵聲の相なり。梵天王の如く、五種の聲口より出づ 二二五 一には甚深なること雷の如し。

二には清く徹して遠く聞え、聞く者をして悦樂せしむ。三には心に入りて敬愛す。四には諦了にして解し易し。五には聽くもの厭ふこと無し。菩薩

の音聲も亦た是の如く、五種の聲は口より 二二六 迦陵毗伽の聲相を出し、迦

陵毗伽鳥の聲の愛す可きが如く、鼓聲の相大鼓の音の深遠なるが如し。二

十九には 二二七 眞の青眼の相なり。好き青蓮の華の如し。三十には 二二八 牛の

眼睫の相なり。牛王の眼睫の長く好くして亂れざるが如し。三十一には

二二九 頂髻の相なり。菩薩には骨髻ありて、拳の如く等しく頂上に在り。三

十二には 二三〇 白毛の相なり。白毛眉間より生じ、高からず下からず、白く

して淨く、右に旋りて舒び、長さ五尺なり。相師の言く、「地天太子の三十

二の大人の相は是の如し。菩薩は具さに此の相あり」と。

問うて曰く 二三二 轉輪聖王には三十二相あり、菩薩にも亦た三十二相あり、

何の差別ありや。答へて

二二三 大舌の相なり。是れ菩薩の大舌は、口中より出でて一切の面の分を覆ひ、乃ち髮の際

- 【二三】舌廣薄 (Prahmitamangulīva)
- 【二四】聲如梵王 (Brahmavara)
- 【二五】五種の聲を釋す。
- 【二六】迦陵毗伽 (Kāralīka)
- 【二七】青白分明形如青蓮華葉 (Shvetakamadhatalasakamūyana)
- 【二八】眼睫如牛王 (Netrajogak-sind)
- 【二九】頂上肉髻 (Ustūgar-lasakāṭī)
- 【三〇】眉間白毫 (Pīṭhaka)
- 【三一】第三三間、轉輪聖王の三十二相と菩薩のそれとの相異如何。

曰く、菩薩の相は七事あつて、轉輪聖王の相に勝れたり。菩薩の相は、一には淨くして好し。二には分明なり。三には處を失せず。四には具足す。五には深く入る。六には智慧に隨つて行じ、世間に隨はず。七には遠離に隨ふ。轉輪聖王の相は爾らず。

問うて曰く「三三」云何が相と名づくるや。答へて曰く、知り易きが故に相と名く、水の火に異るが如きは、相を以ての故に知るなり。

問うて曰く「三三」菩薩は何を以ての故に、三十二相にして多からず少からざるや。答へて曰く、有人は言ふ「佛の三十二相を以て、身を莊嚴したまふとは、端正にして亂れざるが故なり。若し少ければ身端正ならず、若し多ければ佛身の相亂れん。是の三十二相は端正にして亂れず、益すべからず、減すべからず、猶ほ佛法の増すべからず、減すべからざるが如く、身相も亦た是の如し」と。

問うて曰く「二二」菩薩は何を以ての故に相を以て身を嚴るや。答へて曰く、人あり、佛の身相を見てまつれば、心に淨信を得ん。是を以ての故に相を以て身を嚴りたまふ。復次に、諸佛は一切の事勝れたるを以ての故に、身色・威力・種姓・家屬・智慧・禪定・解脱の衆の事みな勝れたり。若し佛、身相を莊嚴したまはずんば、是の事便ち少からず。復次に、有人は言ふ「阿耨多羅三藐三菩提は是の身の中

【二三】第三四問、相とは何ぞや。  
【二二】第三五問、菩薩は三十二相よりも多からず少なからざる理由如何。  
【二二】第三六問、菩薩が三十二相を以て、身を嚴りたまふ理由如何。

に住す。若し身相端嚴ならざれば、阿耨多羅三藐三菩提は此の身中に住せずしと。譬へば人の豪貴の家の女を娶らんと欲するが如し。其の女使を遣はして、彼の人に語げて言く、「若し我を娶らんと欲せば、當に先づ房室を莊嚴し、汗穢を除却し、香薫を塗治し、床榻を安施し、被褥・綉襪・轉帳・帷幔・簾蓋は、華と香とを以て必ず嚴飾ならしむべし。然る後我當に汝が舍に到るべし」と。阿耨多羅三藐三菩提も亦復是の如く、智慧の使を遣はして、未來世の中の菩薩の所に到つて言く、「若し我を得んと欲せば、先づ相好を修し、以て自ら莊嚴せよ。然る後我當に汝が身中に住すべし。若し身を莊嚴せずんば我は住せず」と。是を以ての故に菩薩は三十二相を修して、自ら身を莊嚴す。「これ」阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故なり。是の時に菩薩は漸漸に長大し、老病死の苦を見て、厭患の心生じ、夜半に家を出でて、六年苦行し、難陀婆羅門の女に養なはれ、身に十六の功德を益し(二五)石蜜の糈糜を食し竟りて、菩提樹下において、萬八千億の鬼兵と魔衆とを破り已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。

問うて曰く、(二三)何の功德を得るが故に名じて佛と爲すや。答へて曰く、(二七)盡智(二八)無生智を得る

【二五】石蜜は水砂糖の類なり。  
 【二六】第三七問、佛と名くる理出如何。

【二三】盡智とは、十智中の第九にして、既に一切の煩惱を滅盡すれば、我既に苦を知れり。集を斷ぜり、滅を證せり、道を修ぜりと知る。即ち煩惱を斷盡し了りたる時に生ずる自信の智なり。

【二八】無生智とは、是れ又十智中の第十にして、利根の阿羅漢に限りて有する智なり。既に知斷證修の事畢れば、更に知斷證修の事なきを無生といふ。此無生を自覺して我再び知斷證修することなしと知る智なり。鈍根の阿羅漢は更に退没して再び知斷證修を要することあれば、此智を具する能はず。(俱舍論一六卷顯)

盡智(二七) 無生智を得る

が故に名けて佛と爲す。復有人の言く、「佛は十力と四無所畏と十八不共法と三達無礙と三意止とを得たまふ。(三意止とは)一には教を受けて敬重すれども、佛は喜びたまふと無し。二には教を受けず敬重せざれども、佛は憂ひたまふとなし。三には敬ひ重んずるも、敬ひ重んせざるも、心に異なると無く、大慈大悲にして三十七の道品、一切諸法の總相と別相とを悉く知りたまふが故に、故らに名けて佛と爲す」と。

問うて曰く、「二元を以ての故に未だ佛道を得ざるを名けて菩薩と爲し、佛道を得たるを名けて菩薩と爲さざるや。答へて曰く、未だ佛道を得ざれば心愛著し、求めて阿耨多羅三藐三菩提を取らんと欲す。是を以ての故に菩薩と名く。已に佛道を

【一元】第三八問、未だ佛道を得ざるを名けて菩薩と爲し、佛道を得たるを名けて菩薩と名くる理由如何。

成ずれば、更に佛の種種の異なる大なる功德を得るが故に、更に異名あり、名けて佛と爲す。譬へば王子の未だ王と作らざれば、名けて王子と爲し、已に王と作れば復王子と名けず。既に王たれば、是れ王子なりと雖も王子と名けざるが如し。菩薩も亦是の如く、未だ佛道を得ざれば名けて菩薩と爲し、已に佛道を得れば名けて佛と爲す。摩訶衍の中の迦旃延尼子の弟子の輩、菩薩の相を説くの義是の如し。摩訶衍の人の言く、「是の迦旃延尼子の弟子の輩は是れ生死の人なり、摩訶衍經を誦せず讀まざれば大菩薩に非ず、諸法の實相を知らず、自ら利根の智を以て、佛法の中に於いて論議を作し、諸の結使と智と定と根等の中に於て、義を作すすら尙は虚塵に失あり、何に況んや菩薩の論議を作

さんと欲するをや。譬へば少力せうりきの人の如きは小渠せうこを跳るすら尙ほ過ぐるすこと能はず、何に況んや大河たいがをや。大河の中に於ては、即ち没失もつしつすることを知らし。

問うて曰く、(二〇〇)云何が失あるや。答へて曰く、(二〇一)上に三阿僧祇劫さんあそうぎくわつを過ぐるを名けて菩薩ぼさつと爲すなと言

へり。三阿僧祇さんあそうぎの中に、頭目づもく・髓腦ずいなんを布施ふせすれども心に悔ゆるあこと有ると無し。是れ阿羅漢あらかん・辟支佛びやくしぶつの

及ぶこと能はざる所なり。昔の菩薩むかしぼさつの如きは (二〇二)大薩陀婆だいさつたはと爲り、大海水たいかいすいを渡るに、惡風船あくふうせんを壞す。

衆の賈人りやくかじんに語げて言は、「我が頭髮づはつ・手足しゆそくを捉へよ、當に汝等なんぢらを渡すべし」

と。衆人しゆだんとら捉へ已れば刀を以て自殺じせつす。大海の水たいかいのみづは法として死尸ししを停めず、

即時そくじに疾風吹いて岸の邊きしに至る、大慈是の如し。而も非なりと言ふ者誰か

是ならんや。菩薩ぼさつは第二阿僧祇劫だいにあそうぎくわつの行滿ぎやうまんちて、未だ第三阿僧祇だいにあそうぎに入らず、

時に然燈佛ねんとうぶつの所に於いて記を受く、「佛と爲らん」と。即時そくじに虚空こくうに上昇じやうじやう

し、十方じふぱうの佛を見、虚空こくうの中に立ちて然燈佛ねんとうぶつを讚す。然燈佛の言く、「汝は一阿僧祇劫なんぢいちあそうぎくわつを過ぎて當に

佛と作ることを得て、釋迦牟尼しやくぢや牟尼と名くべし」と。記を得ることは是の如し。而るに言く、「爾の時そのときは未だ

是れ菩薩ぼさつにあらず」と。廣大なる尖せんに非ずや。迦旃延尼子かぢんえんにしの弟子でしの輩はいが言く、「三阿僧祇劫さんあそうぎくわつの中には、

未だ佛の相さうあらず、亦佛相またぶつさうの因縁いんねんを種ううること無し。云何が當あたに知るべき。是れ菩薩ぼさつは一切いっさいの法はふは先

づ有相うさうにして、然る後に其の實じつを知るべし。若し無相むさうならば、則ち知らず」と。摩訶衍まかえんの人は言く、

【二〇〇】第三九問、小乗の人に於て大乘の菩薩の義を説かば何の失ありや。  
 【二〇一】大薩陀婆(Mahāsattva)の自ら敬して、海中に死者を救へる因縁。

記を受けて佛と爲り、虚空に上昇して、十方の佛を見る、此れ大相に非ずや。佛の爲に記せられ、當に佛と作ることを得べし。佛と作ることを得ば、此は是れ大相なり。此の大相を捨てて三十二相を取る。三十二相は轉輪聖王にも亦たあり、諸天・魔王も亦た能く此の相を化作す。難陀・提婆達(多)等は皆三十相あり、婆跢・婆羅門は三相あり、二三三摩訶迦葉の婦は金色の相あり。乃至今世の人も亦た各一相二相あり。若し青眼・長臂・上身の師子の如き、是の如き等の種種は、或は多く或は少し。汝は何を以てか此の相を重んずるや。何の經に、「三阿僧祇劫の中に菩薩は相の因縁を種えず」と言ふや。難陀の二三三鞞婆尸佛を澡浴するが如きは、清淨・端正なることを得んことを願ふ。辟支佛塔に於て、青黛を壁に塗り、辟支佛の像を作り、因て願を作し、「願くは我恒に金色の身相を得ん」と。また迦葉佛塔の中の級を作る。

此の三福の因縁を以て世世に樂を受け、處處に生ずる所恒に端嚴なることを得。是の福の餘り、迦毗羅婆の釋種の中に生れて佛弟子と爲り、三十の大人の相を得、清淨・端正にして、出家して阿羅漢道を得たり。佛説きたまはく、「五百の弟子の中に於て、難陀比丘は端正なると第一なり」と。此の相は得易し。云何が九十一大劫の中に於て種々、餘の一生の中に得ると言ふや。是を大失と爲す。汝は言ふ、「初阿僧祇劫の中には當に佛と作るべきか、佛と作らざるかを知らず、二阿僧祇劫の中に當に佛と作るべしと知れども、自ら稱説せず、三阿僧祇劫の中に佛と作り得と知り、能く人の爲に説く」と。

【二三三】摩訶迦葉(Mahakasyapa)  
【二三三】鞞婆尸(Vibhishva)  
【二三三】轉婆尸(Parvati)は譯して勝觀と云ふ。

佛は何の處に是の語を説きたまひ、何の經の中に是の語あるや。若くは聲聞法の三藏の中に説くや、若くは摩訶衍の中に説くや。迦旃延尼子の弟子の輩が言く、「佛口づから三藏の中に説きたまはずと雖も、義理應に爾るべし。阿毗曇鞞婆娑の菩薩品の中には是の如く説けり」

と。答へて曰く、摩訶衍の中に 初發心を説く。是の時に我當に佛と作るべしと知る。

阿遮羅菩薩の如きは、長手佛の邊に於いて初めて發心せし時、乃ち金剛座處に至りて佛道を成じ、其の中間に於いて顛倒の不淨心生ぜざりき。

首楞嚴三昧の中に四種の菩薩の如きは四種の記を受く。未だ發心せざるに授記することあり。適に發心して授記することあり。前の授記に於いて他人己身盡く知ることあり。汝云何が二阿僧祇劫に於いて、授記を

知れども、而も自ら稱説せずと言ふや。復次に、佛の言はく「無量阿僧祇劫に功德を作し、衆生を度せんと言ふ」と。何を以ての故に三阿僧祇劫と言ふや。

三阿僧祇劫は量あり限あり。問うて曰く、二天へ摩訶衍の中に此の語ありと雖も我も亦た都て信せず。答へて曰く、是を大なる失と爲す。是は佛の眞法にして、佛の口づから説きたまふ所なり、汝反すること無れ。復た汝は摩訶衍の

【一】初發心の授記と未發心の授記とを辯ず。

【二】阿遮羅菩薩(Asura)の如きは、長手佛(Shakyamuni)の邊に於いて初めて發心せし時(When he first attained enlightenment)に於いて、佛道を成じ、其の中間に於いて顛倒の不淨心生ぜざりき。

【三】首楞嚴三昧(Samadhi)の如きは、四種の菩薩の如きは四種の記を受く。未だ發心せざるに授記することあり。適に發心して授記することあり。前の授記に於いて他人己身盡く知ることあり。汝云何が二阿僧祇劫に於いて、授記を

知れども、而も自ら稱説せずと言ふや。復次に、佛の言はく「無量阿僧祇劫に功德を作し、衆生を度せんと言ふ」と。何を以ての故に三阿僧祇劫と言ふや。

【四】三阿僧祇劫は量あり限あり。

【五】第二の問。大乘の中に此の語ありと雖も、我は却て信ぜず。

問うて曰く、二天へ摩訶衍の中に此の語ありと雖も我も亦た都て信せず。答へて曰く、是を大なる失と爲す。是は佛の眞法にして、佛の口づから説きたまふ所なり、汝反すること無れ。復た汝は摩訶衍の

中より出生す。云何ぞ我都て信せずと言ふや。復次に摩訶衍の論議は、此  
 の中に應に廣く説くべし。復次に、是の三十二相の業因縁は、欲界の中  
 に種ゑ、色・無色界の中に種うるに非ずと説く。無色界には身なく、色なき  
 を以て、是の三十二相は是れ身の莊嚴なるが故に、無色界の中に種うるこ  
 とを得ざるは爾るべし。何を以てか色界の中に種うることを得ざるや。色  
 界の中には大に諸の梵王ありて、常に佛の初轉法輪を請す。是は智慧清  
 淨にして能く佛道を求む。何を以てか三十二相の因縁を種うることを得ずと  
 言ふや。又言はく、(二四〇)人中には種うることを得、餘道には非ず(二四一)婆伽  
 度龍王の如きは、十住の菩薩なり。(二四二)阿那婆達龍王は七住の菩薩なり。  
 羅睺阿脩羅王も亦た是れ大菩薩なり。復た何を以てか餘道に三十二相の因  
 縁を種うることを得ずと言ふや。(二四三)汝は人中の、閻浮提に種うると言つて、  
 (二四四)憍担羅には種う可らずと曰ふ。有業には、彼の中の人我は吾我なく、樂  
 に著し、利根ならざるが故ならんも、(二四五)勅陀尼、(二四六)弗婆提の二處は、福  
 徳も智慧も壽命も、閻浮提に勝れり。何を以て種うることを得ざる。復次に  
 (二四七)汝は一思に一相を種うと言へり。「然るに」是の心には、(二四八)彈指の頃、

【二四〇】三十二相は欲界の中に種  
 ゑ、色界無色界の中に種みず  
 と言ふを破す。

【二四一】人中に種ゑ餘道に種みず  
 と言ふを破す。

【二四二】憍担羅王 (Brahmavard-  
 an) (Brahmavard-  
 an) (Brahmavard-  
 an)

【二四三】阿那婆達龍王 (Anavada-  
 ra) (Anavada-  
 ra) (Anavada-  
 ra)

【二四四】南洲に種ゑて三洲に種み  
 ずと言ふを破す。

【二四五】憍担羅 (Lohita) は、(二四六)  
 Anuradhapura 西勸陀尼洲の  
 一處。

【二四六】佛婆提 (Puravardhana) は  
 東勝身洲の原處。

【二四七】一思に一相を種うと言ふ  
 を破す。

【二四八】彈指の間とは、一刹那或  
 は一瞬の義にて、時間の最  
 も短き單位をいふ。

六十の生滅あり。一心の中に住せず。是の一心の中は、無力不住にして分別すること能はず。云何が能く大人の相を種るんや。此の大人の相は、了に心に種うることを得ずんばあるべからず。是を以ての故に多くの思、和合して能く一相を種う。重き物は一人にして擔ふと能はず、必ず多人の力を須めるが如し。是の如く相を種うるとも、要す大心多思の和合を得て、爾して乃ち種うるとを得ん。是を以ての故に百福相と名くるとは、百の大心の思を種うる、是を百福相と名く。一思に一相を種うべからず。餘事すら尙ほ一思に一事を種うるとを得ず、いかに況んや百福相をや。何を以ての故に。釋迦文尼菩薩の心は未だ純淑せざるに、弟子の心は純淑し、彌勒菩薩の心は純淑するに、弟子の心は未だ純淑せずと言ふや。是の語は何處の説ぞや。三藏の中にも摩訶衍の中にも是の事なし。此の言は自ら汝が心より出づ。汝は但釋迦文尼菩薩、寶窟の中に於いて、弗沙佛を見たてまつり、七日七夜、一偈を以て讀じたまふを見る。彌勒菩薩も亦た種種に弗沙佛を讀す。但し阿波陀經の中には説かず、汝が知らざる所は因縁なきが故なり。汝は便ち彌勒の弟子の心は未だ純淑せずと謂ふ、是の如きは皆違失なり。汝は菩薩は一の物を能く施して愛惜する所なし、尸毗王の如きは鶻の爲の故に、肉を割いて鷹に與へ、心に悔恨せずと言ふ。財寶を以て布施するが如きは是を下の布施と名け、身を以て布施する是を中の布施と

【四】釋迦の心は未熟、弟子の心は已熟、彌勒の心は未熟、弟子の心は已熟と言ふを破す。  
 【五】阿波陀經(阿波陀經)は、譯して演說解悟經、または覺悟經と云ふ。  
 【五】布施に上中下あり。施財と施身と心不著となり。

名け、種種の施の中に、心著せざる、是を上の布施と爲す。汝は何を以てか中の布施を讚じて、檀那波羅蜜多の満なりと爲すや。此の施は心大に慈悲多しと雖も、智慧を知る有り、智慧を知らざるあり。人の父母親屬の爲に身を惜まず、或は主の爲に身を惜まざるが如し。是を以ての故に爲に身を惜まざるは、是れ中の布施なることを知る。

問うて曰く、菩薩の一切衆生の爲に、父母と爲り主と爲るは、一切の人の爲の故なり。是を以ての故に直に身を惜まざるを檀那波羅蜜多の満なりと爲すに非ず。答へて曰く、一切衆生の爲めなりと雖も、是心は清淨ならずして、己の身に吾我なしと知らず、取る者も人なく主なしと知らず。施す所の物の實性は一なりと説くべからず、異なるとも説くべからざることを知らず。是の三事に於て心著する、是れを清淨ならずと爲す。世界の中に於いて福報を得るも、直に佛道に至ること能はず。般若波羅蜜多の中に説くが如し。三事は不可得なり、亦た不著なり、是を檀那波羅蜜多の満を具足すと爲す。是の如く、乃至般若波羅蜜多は、能く大地・城郭・聚落を分ちて七分と爲す、是を般若波羅蜜多の満と爲す。是の般若波羅蜜多は無量無邊にして大海の水の如く、諸天・聖人・阿羅漢・辟支佛・乃至初行の菩薩も尚其の邊涯を知ること能はず、十地に住するの菩薩のみ、乃ち能くこれを知れり。云何ぞ汝は能く大地・城郭・聚落を分ちて七分と爲す、是を般若波羅蜜多の満と名くと云ふや。是の事は是れ算

【二卷】第四一問、菩薩は一切衆生の爲に父母となり主となるにあらずや。

數の法を以て能く地を分つ、是れ世俗の般若波羅蜜(多)の中の少許の分なり。譬へば大海水の中の一  
 滴雨滴の如し。實の般若波羅蜜(多)は三世諸佛の母と名け、能く一切の法の實相を示す。是の般若波  
 羅蜜(多)は來處もなく、去處も無く、一切處に求むるに得べからず。幻の如く、響の如く、水中の月  
 の見れば便ち失するが如し。諸の聖人は憐愍したまふが故に一相なりと雖も、種種の名字を以て是の  
 般若波羅蜜(多)は、諸佛の智慧の寶藏なりと説きたまふ。汝が言は大なる失なり。汝は四種の觀を言  
 へり。「時を觀、土地を觀、種族を觀、生處を觀る。」(二五)に人壽八萬歲にして、  
 佛出でたまひ、七・六・五・四・三・二萬歲の中に、佛出世したまひ、人壽百  
 歲も是れ、佛の出でたまふ時なり」と。若し諸の佛は常に衆生を憐愍し  
 たまはば、何を以てか止だ八種の時の中に見出せしたまひ、餘時には出  
 でたまはざるや。佛法は時を待たず、好き薬を服する時、便ち病愈ゆるが  
 如し。佛法も亦た是の如く時を待たず。

問うて曰く、(二四)に菩薩は衆生を憐愍し、諸佛は時を待たずと雖も、八萬歲を過ぎては、人長壽にし  
 て樂多く、染愛等の結使厚く、根は鈍にして化すべき時に非ず。若し百歲の後は、人短壽にして苦多  
 く、瞋恚等の諸の結使更に厚し。此の樂時と苦時とは、道を得るの時に非ず。是を以ての故に佛は出  
 世したまはざるなり。答へて曰く、諸天の壽は千萬歲に出でたり。先世の因縁あれば樂多く、染愛厚

【二五】佛は人壽八・七・六・五・  
 四・三・二百萬歲の時のみに出  
 世し給ふ。  
 【二四】第四二問、人壽百歲の後  
 は佛出世し給はずざるにあら  
 ずや。

しと雖も能く道を得、何に況んや人中は大衆にあらず、三十六種の不淨あり、易く教化すべし。是を以ての故に人壽八萬歳を過ぎても佛は出でたまふべし。是の中の人は病なく、心樂しきが故に、人皆利根にして福德なり。福德利根の故に、應に易く道を得べし。

復次に、師子鼓音王佛の時は人壽十萬歳、明王佛の時は人壽七百阿僧祇劫、阿彌陀佛の國は人壽無量阿僧祇劫なり。汝は云何ぞ、「八萬歳を過ぐれば、佛は出世したまはず」と言ふや。

問うて曰く、(五五) 摩訶衍經に此事あり、「我が法の中には十方の佛なし、唯過去には釋迦文尼 (二五) 拘陳若等の二百の佛、未來には彌勒等の五百の佛のみなり」と。答へて曰く、摩訶衍論の中の種種の因縁は、三世十方の佛を説く、何となれば十方世界には老病死姪怒變等あり、是を以ての故に佛は出でたまふべし。其國に經の中に説くが如し。老病死煩惱なければ諸佛は則ち出世したまはず。復次に、病人多ければ應に多くの樂師あるべし。汝等の弊問法なる長阿含の中に、(三五) 佛の國に佛は出でたまふべし、佛に稽首したてまつり、亦復釋迦文佛に歸命したてまつる」と。汝が經に説いて、過去未來現在の諸佛を稽首すと言ひ、釋迦文尼佛に歸命すと言ふ。此を以ての故に現在餘の佛あることを知る。若し餘國の佛なくんば、何を以ての故に前には三世の佛を稽首し、後には別して釋迦文尼佛に歸命せん

【二五】 第四三問、大乘經の中に過去には釋迦牟尼佛等の二百佛、未來には彌勒等の五百佛ありと言ふ理由如何。  
【二六】 拘陳若 Kāśyapa (二五) 毘沙門王 (Vaiśāṇava) (二五)

や。此の王は未だ欲を離れず、釋迦文尼佛の所に在りて、道を得て敬愛の心重きが故に歸命し、餘佛の所に於いて直に稽首す。

問うて曰く、佛は口づから説きたまふ、「一世間に一時に二佛出づること無く、亦た一時に二の

轉輪王出づることを得ず」と。是を以ての故に現在に餘佛あるべからず。答へて曰く、此の言ありと

雖も法は其の義を解せず。佛の説は一の三千大千世界の中に一時に二佛出でたまふこと無しとなり。

十方世界に現在の佛なしと謂ふには非ず。四天下の世界の中の如きは一時に二の轉輪王出づること

無し。此れ大福德の人にして、怨敵の世を共にすること無きが故なり。是

を以ての故に四天下に一の轉輪聖王あり。佛も亦た是の如く、三千大千世

界の中に於いて、亦た二佛出でたまふこと無し。佛及び轉輪聖王は、經説

一種なり。汝何を以てか、餘の四天下に、更に轉輪聖王ありと信じ、而も餘の三千大千世界の中に、

更に佛あることを信ぜざるや。復次に、一佛は一切衆生を度することを得ること能はず。若し一佛の

能く一切衆生を度せば、餘佛は須むざる可く、唯だ一佛のみ出でん。諸佛の法の如きは、度す可き衆

生を度し已つて而して滅す。燭盡きて火滅するが如し。「そは」有爲の法は無常にして性空なるを以て

なり。是を以ての故に現在に更に餘佛あるべし。復次に、衆生無量なれば、苦も亦た無量なり。

是の故に應に大心の菩薩あつて出づべし。亦た無量の佛世に出で、諸の衆生を度したまふこと有る

【二六】第四四問、一時に二佛なし、故に現在に餘佛ある可からざるにあらずや。

べし。

問うて曰く、(二五) 經の中に説くが如く、無量歳の中に佛の時時に出でたまふこと、譬へば 瀉曇婆羅樹の華の時時に一たび出づるが如し。若し佛十方に充滿せば、佛は便ち出で易く得易くして、名けて值、難しと爲さず。答へて曰く、爾らず、一の大千世界の中に、佛無量歳に時時に出でたまふと爲す。一切の十方世界に難しとは言はず。亦罪人は知らざるが爲に、恭敬し勤めて精進して道を求めず。是を以ての故に語つて佛は無量歳に、時時に一たび出でたまふと言ふ。又此の衆生は衆多の罪報の故に惡道の中に墮ち、無量劫に尙ほ佛を聞かず、何に況んや佛を見たてまつらんや。是を以ての故に佛は世に出でたまふこと難しと言ふ。

問うて曰く、(二六) 若し現在十方に多くの諸佛菩薩あらば、今一切衆生は罪惡にして悲惱す、何を以てか來つて之を度せざるや。答へて曰く、衆生は無量阿僧祇劫の罪垢深厚なり、種種の餘福ありと雖も、佛を見たてまつるの功德なきが故に、見だてまつらざるなり。偈に説くが如し。

「好福の報未だ近からず、眞罪未だ除却せざれば、現前に大徳有力の人を見ること能はず。大徳の諸の聖人は、心また分別なく、慈悲もて一切の人を、一時に度らしめんと欲す。衆生福徳

【二五】第四五詞、若し十方に佛あらば、無量歳と言ふ所らるるにあらすや。  
【二六】瀉曇婆羅樹(Shaligram)に佛あらば罪惡の諸の衆生は何故に度せられざるや。

熟し、智慧ありて根また利なれば、爲に〔濟〕度の縁を現じ、即時に解脱することを得せしむ。

譬へば大龍王の願に隨つて、衆雨を雨らすが如し。罪福は本行に隨ふ、各各受くる所の如し。』

問うて曰く、(二三三) 若し自ら福德あり、自から智慧あらば、是の如き人は佛能く度したまふ、若し福

徳智慧なければ佛は度したまはず。爾らば自ら福德智慧あらば、佛の度したまふを待たざらん。答へ

て曰く、此福德智慧は、佛の因縁より出づ、若し佛世に出でたまはずんば、諸の菩薩は、十善の因

縁、四無量意、後世の罪福の報、種種の因縁を以て教導す。若し菩薩なく

とも種種の經中に説くことあり、人此の法を得ば福德の因縁を行せん。復

次に、人に福德智慧ありと雖も、若し佛世に出でたまはずんば、是の世界

の中に報を受け、道を得ること能はず。若し佛世に出でたまはば、乃ち能

く道を得、是を大益となす。譬へば人の目ありと雖も、日の出ざる時は見

る所あること能はず、要らず日の明を須つて見る所あることを得。『我は眼あり、何ぞ日を用ゐるを爲ん』と言ふことを得ざるが如し。佛の説きたまふが如くんば、(二三三) 内外の因縁能く正見を生ず。一に

は他に從つて法を聞く、二には内に自ら法の如く福德の事を思惟するが故に能く善心を生じ、利根智

慧の故に能く法の如く思惟す。是故に佛に從つて度を得ることを知る。是の如き等の種種の多くの違

錯あり、般若波羅蜜(多)の論議を作さんと欲するが故に、復た廣く餘事を論ずること能はず。

【六】第四七問、自ら福德智慧  
あらば、佛の濟度を待つ必要  
なきにあらずや。  
【三三】見佛得道は内外の因縁に  
よることを明す。

# 巻の第五

初品の中の「摩訶薩埵」を釋す。

摩訶薩埵

問うて曰く、云何が摩訶薩埵と名くるや。答へて曰く、摩訶を大と名け、薩埵を衆生と名け、

或は勇心と名く。此の人は心に能く大事を爲し、退かず墮らず、大勇心なるが故に名けて摩訶薩埵と

爲す。復次に、摩訶薩埵は、多くの衆生の中に於て、最も上首たるが故に、名けて摩訶薩埵と爲す。

復次に、多くの衆生の中に大慈大悲を起し、大乘を成立し、能く大道を行

じ、最大の處を得るが故に摩訶薩埵と名く。復次に大人の相を成就するが

故に摩訶薩埵と名く。摩訶薩埵の相は讚佛の偈の中に説くが如し。

『唯佛一人のみ獨り第一なり、三界の父母にして一切智たり。一切の等に於いて與等なく、比する

に稀有なる、世尊を稽首したてまつる。

凡人は惠を行じて己利の爲にし、報を求むるに財を以て給施す、佛は大慈仁にして此の事なく、

怨親憎愛以て等く利す。』

復次に、必ず能く法を説いて、一切衆生及び、己身の大邪見・大愛慢・大我心等の諸の煩惱を破す。

【一】第一問、摩訶薩埵の二二三、(五五三)の意義如何。

が故に、名けて摩訶薩埵と爲す。復次に、衆生は大海の初なく中なく後なきが如く、明知の算師あつて、無量歳に於て計算すとも、盡し竟るゝ能はず。佛の 無盡意菩薩に語りたまふ如きは、一臂へば十方一切世界乃至虛空邊際を合して水と爲し、無數無量の衆生をして共に一髪を持つて、一滴を取つて去らしめ、更に無央數の衆生あつて前の如く、共に一髪を持つて一滴を取つて去り、是の如く彼の大水をして悉く盡して餘ること無らしむるが如く、衆生は故らに盡きず。是を以て衆生等は無邊無量にして數ふべからず、思議す可らず、盡く能く救済して苦惱を離れ、無爲安隱の樂の中に著かしむ」と。此大心あつて多くの衆生を度せん

と欲するが故に摩薩訶埵と名く。不可思議經の中に、三、漚舍那優婆夷、四、須達那菩薩に語つて言ふが如し、「諸の菩薩摩訶薩の輩は、一人を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すにあらざる。亦二三、乃至十人の爲の故に非ず、百に非ず千に非ず、萬に非ず十萬に非ず、百萬に非ず一億十百千萬乃至億億に非ず。阿由他億の衆生の爲の故に發心するに非ず。那由他億に非ず、阿耶陀の衆生の故に非ず、頻婆羅に非ず、歌歌羅に非ず、阿歌羅に非ず、鐵婆羅に非ず、摩婆羅に非ず、波陀に非ず、多婆に非ず、

- 【一】 無盡意菩薩 (Akṣayaṃbhi)
- 【二】 無量壽菩薩 (Amitayus)
- 【三】 漚舍那 (Uśala)
- 【四】 鐵婆羅菩薩 (Sattva)
- 【五】 善美、善愛、好愛、善與、善施など譯す。
- 【六】 阿由他 (Ajita)
- 【七】 阿耶陀 (Aśvata)
- 【八】 頻婆羅 (Pinnava)
- 【九】 歌歌羅 (Kakala)
- 【一〇】 阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)
- 【一一】 阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)
- 【一二】 阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)
- 【一三】 阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)
- 【一四】 阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)
- 【一五】 阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)

多婆に非ず、  
鐵婆羅に非ず、  
摩婆羅に非ず、  
波陀に非ず、  
多婆に非ず、

非ず、(二六)怖摩に非ず、(二七)念摩に非ず、(二八)阿婆迦  
 に非ず、(二九)摩伽婆に非ず、(三〇)毗羅伽に非ず、(三一)  
 僧伽摩に非ず、(三二)毗薩羅に非ず、(三三)謂闍婆に非  
 ず、(三四)鞞闍迦に非ず、(三五)鞞盧呵に非ず、(三六)鞞跋  
 帝に非ず、(三七)鞞迦多に非ず、(三八)兜羅に非ず、(三九)  
 阿婆羅那に非ず、(四〇)他婆羅に非ず、(四一)鞞婆耶婆  
 に非ず、(四二)鞞寫に非ず、(四三)鞞那耶寫に非ず、(四四)  
 鞞婆羅に非ず、(四五)鞞婆羅に非ず、(四六)薩遮多に非  
 ず、(四七)阿跋伽陀に非ず、(四八)鞞施陀に非ず、(四九)泥  
 婆羅に非ず、(五〇)鞞梨浮陀に非ず、(五一)婆摩陀夜に  
 非ず、(五二)比初婆に非ず、(五三)阿梨浮陀に非ず、(五四)  
 阿梨薩寫に非ず、(五五)鞞云迦に非ず、(五六)度于多に  
 非ず、(五七)阿樓那に非ず、(五八)摩樓陀に非ず、(五九)又  
 夜に非ず、(六〇)烏羅多に非ず、(六一)末殊夜摩に非ず、  
 (六二)三摩陀に非ず、(六三)毗摩陀に非ず、(六四)波摩陀に非ず、  
 (六五)阿滿陀羅に非ず、(六六)摩

- |       |                  |       |                  |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 【二六】  | 怖摩 (Boma)        | 【二七】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【二七】  | 念摩 (Nema)        | 【二八】  | 鞞施陀 (Vigista)    |
| 【二八】  | 阿婆迦 (Apocha)     | 【二九】  | 泥婆羅 (Nevala)     |
| 【二九】  | 摩伽婆 (Maghava)    | 【三〇】  | 毗薩羅 (Vishala)    |
| 【三〇】  | 毗羅伽 (Viloga)     | 【三一】  | 謂闍婆 (Vilaha)     |
| 【三一】  | 僧伽摩 (Sagghama)   | 【三二】  | 鞞闍迦 (Vigaha)     |
| 【三二】  | 毗薩羅 (Vissala)    | 【三三】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【三三】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【三四】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     |
| 【三四】  | 鞞闍迦 (Vigaha)     | 【三五】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【三五】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     | 【三六】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    |
| 【三六】  | 鞞寫 (Vilaha)      | 【三七】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【三七】  | 鞞那耶寫 (Vilaha)    | 【三八】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【三八】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【三九】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【三九】  | 他婆羅 (Vilaha)     | 【四〇】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【四〇】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【四一】  | 泥婆羅 (Nevala)     |
| 【四一】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【四二】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【四二】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【四三】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【四三】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【四四】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【四四】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【四五】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【四五】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【四六】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【四六】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【四七】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【四七】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【四八】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【四八】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【四九】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【四九】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【五〇】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【五〇】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【五一】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【五一】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【五二】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【五二】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【五三】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【五三】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【五四】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【五四】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【五五】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【五五】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【五六】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【五六】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【五七】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【五七】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【五八】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【五八】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【五九】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【五九】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【六〇】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【六〇】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【六一】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【六一】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【六二】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【六二】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【六三】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【六三】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【六四】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【六四】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【六五】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【六五】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【六六】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【六六】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【六七】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【六七】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【六八】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【六八】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【六九】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【六九】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【七〇】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【七〇】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【七一】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【七一】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【七二】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【七二】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【七三】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【七三】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【七四】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【七四】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【七五】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【七五】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【七六】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【七六】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【七七】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【七七】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【七八】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【七八】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【七九】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【七九】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【八〇】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【八〇】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【八一】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【八一】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【八二】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【八二】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【八三】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【八三】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【八四】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【八四】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【八五】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【八五】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【八六】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【八六】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【八七】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【八七】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【八八】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【八八】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【八九】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【八九】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【九〇】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【九〇】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【九一】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【九一】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【九二】  | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【九二】  | 泥婆羅 (Nevala)     | 【九三】  | 毗薩羅 (Vilaha)     |
| 【九三】  | 謂闍婆 (Vilaha)     | 【九四】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     |
| 【九四】  | 鞞闍迦 (Vilaha)     | 【九五】  | 鞞盧呵 (Vilaha)     |
| 【九五】  | 鞞跋帝 (Vilaha)     | 【九六】  | 鞞迦多 (Vilaha)     |
| 【九六】  | 鞞婆耶婆 (Vilaha)    | 【九七】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     |
| 【九七】  | 鞞婆羅 (Vilaha)     | 【九八】  | 薩遮多 (Vilaha)     |
| 【九八】  | 薩遮多 (Vilaha)     | 【九九】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) |
| 【九九】  | 阿跋伽陀 (Abyudgata) | 【一〇〇】 | 鞞施陀 (Vilaha)     |
| 【一〇〇】 | 泥婆羅 (Nevala)     |       |                  |

多羅に非ず、(六) 藍兜末多羅に非ず、(五) 釋摩多羅  
 に非ず、(六) 波羅多羅に非ず、(三) 尸婆多羅に非ず、  
 (三) 藍羅に非ず、(五) 爲羅に非ず、(五) 提羅に非ず、  
 (六) 伎羅に非ず、(六) 翅羅に非ず、(五) 尼羅に非ず、  
 (六) 斯羅に非ず、(五) 波羅に非ず、(七) 彌羅に非ず、  
 (七) 婆羅羅に非ず、(五) 迷樓に非ず、(五) 企盧に非  
 ず、(五) 摩屠羅に非ず、(五) 三牟羅に非ず、(五) 阿夜  
 婆に非ず、(七) 劍摩羅に非ず、(七) 摩摩羅に非ず、  
 (五) 阿達多に非ず、(六) 魁樓に非ず、(八) 鞞樓婆に  
 非ず、(三) 迦羅跋に非ず、(三) 阿婆跋に非ず、(八) 鞞  
 婆跋に非ず、(五) 婆婆に非ず、(六) 阿羅婆に非ず、  
 (七) 婆婆羅に非ず、(六) 迷羅浮羅に非ず、(八) 摩遮  
 羅に非ず、(六) 陀摩羅に非ず、(五) 婆摩陀に非ず、  
 (五) 尼伽摩に非ず、(五) 阿跋多に非ず、(五) 泥提舍  
 に非ず、(五) 阿叉夜に非ず、(六) 三浮陀に非ず、(七)

- 【五】 藍兜末多羅(不詳)
- 【五】 釋摩多羅(Primnara)
- 【六】 波羅多羅(Pranitra)
- 【六】 尸婆多羅(Pimnitra)
- 【六】 藍羅(Elin)
- 【六】 爲羅(Voin)
- 【六】 提羅(Tila)
- 【六】 伎羅(Kira)
- 【六】 翅羅(Vayana)
- 【六】 尼羅(Nira)
- 【六】 斯羅(Sira)
- 【六】 波羅(Bhala)
- 【六】 彌羅(Mira)
- 【七】 婆羅羅(Parala) 婆は婆の
- 【七】 迷樓(Mira)
- 【七】 企盧(Kira)
- 【七】 摩屠羅(Marura)
- 【七】 三牟羅(Samula)
- 【七】 阿夜婆(Anaya)
- 【七】 劍摩羅(Kanara)
- 【七】 摩摩羅(Mamara)
- 【七】 阿跋多(Adada)
- 【七】 泥提舍(Nidisa)
- 【七】 阿叉夜(Akaya)
- 【七】 摩摩羅(Mamara)

- 【七九】 阿跋多(Adada)
- 【八〇】 藍羅(Elin)
- 【八一】 釋摩婆(Shimaba)
- 【八二】 迦羅跋(Karaba)
- 【八三】 阿婆跋(Anaba)
- 【八四】 婆婆跋(Paraba)
- 【八五】 婆羅羅(Parala) の
- 【八六】 阿達多(Adada)
- 【八七】 婆婆羅(Parala)
- 【八八】 迷樓(Mira)
- 【八九】 摩摩羅(Mamara)
- 【九〇】 劍摩羅(Kanara)
- 【九一】 婆摩陀(Parabuta?)
- 【九二】 阿夜婆(Anaya)
- 【九三】 泥提舍(Nidisa)
- 【九四】 阿叉夜(Akaya)
- 【九五】 三浮陀(Sambhuta)
- 【九六】 摩摩羅(Mamara)



の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の諸佛に供養し供給せんが故に發心するにも非ず。一國  
 土の微塵等の諸佛に供養し供給せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界  
 の微塵等の諸佛を供養し供給せんが爲の故に發心するにも非ず。一佛土を淨めんが爲の故に發心する  
 にも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛土を淨めんが爲の故に發心するにも非ず。  
 一佛の法を受持するが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛法  
 を受持せんが爲の故に發心するにも非ず。一の三千大千世界の佛種を斷せざらしめんが爲の故に發心  
 するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界、微塵等の三千大千世界の佛種を斷せざらしめ  
 んが爲の故に發心するにも非ず。分別して一佛の願を知るが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別  
 て不可說不可說の三千大千世界の應供等の佛の願を知るが爲の故に發心するにも非ず。一佛土を莊嚴  
 するが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛土を莊嚴せんが爲  
 の故に發心するにも非ず。分別して一佛會の弟子衆を知るが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別し  
 て不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛會の弟子衆を知るが爲の故に發心するにも非ず。一佛の  
 法輪を持せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛の法輪を  
 持せんが爲の故に發心するにも非ず。一人の諸心を知らんが爲の故にも非ず。一人の諸根を知るが爲  
 の故にも非ず。一の三千大千世界の中の諸の劫の次第に相續するを知るが爲の故にも非ず。分別して

一人の諸の煩惱を断せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別して不可説不可説の三千大千世界の微塵等の人の諸の煩惱を断せんが爲の故に發心するにも非ず。是の諸の菩薩摩訶薩は願つて言はく、盡く一切十方の衆生を教化し、盡く一切十方の諸佛に供養し供給せん。願くは一切十方の諸佛の土をして清淨ならしめ、心に堅く一切十方諸佛の法を受持せん」と。分別して一切の諸佛の土を知るが故に、盡く一切諸佛の弟子衆を知るが故に、分別して一切衆生の諸の心を知るが故に、一切衆生の諸の煩惱を断するを知るが故に、盡く一切衆生の諸の根を知るが故に、諸の菩薩は發心し、阿耨多羅三藐三菩提に住す。是の如き等の十門を首となし、乃至百千萬億阿僧祇の門、是を道法の門と爲す。菩薩の應に知るべく、應に入るべきを略説するとは是の如し。諸の菩薩の實道は、一切の諸法皆入り皆知り、知慧知るが故に、一切の佛土は、菩薩道の中に莊嚴するが故に。湏舍那言く、「善男子よ、我願はくは是の如く世界を有してより已來、一切の衆生を盡く清淨にし、一切の煩惱を悉く断せん」と。須達那の言く、「是れ何の解脱ぞや」と。湏舍那答へて言く、「是を無憂安隱幢と名く。我は此の一解世門を知る。諸の菩薩の夫心は、大海の水の如く、一切諸佛の法を能く持し、能く受くることと知らず。諸の菩薩の心は、動かざること須彌山の如し。諸の菩薩は、藥王の如く、能く一切の諸の煩惱を除く。諸の菩薩は日の如く、能く一切の暗を除く。諸の菩薩は地の如く、能く一切の衆生を合受す。諸の菩薩は風の如く、能く一切の衆生を益す。諸の菩薩は火の如く、能く一切の外道

〔及び〕諸の煩惱を燒く。諸の菩薩は雲の如く、能く法水を雨らす。諸の菩薩は月の如く、福德の光明、能く一切を照す。諸の菩薩は釋提桓因の如く、一切の衆生を守護す。是の菩薩の道法は甚だ深し、我云何ぞ能く盡く知らんし。是を以て諸の菩薩は、大願を生じ、大事を得んと欲し、大處に至らんと欲するが故に摩訶薩埵と名く。

復次に、是の般若波羅蜜(多)經の中に、摩訶薩埵の相は、佛自から説きたまふこと是の如し。是の如きの相は、是れ摩訶薩埵の相なり。舍利弗・須菩提・富樓那等の諸の大弟子、各各彼の品を説けり。此の中に應に廣く説くべし。

初品中の菩薩の功德を釋す。

【一七】陀羅尼及び諸の三昧を得、空・無相・無作を行じて、已に等と忍とを得たり。

問うて曰く、二(二)を以ての故に此の三事を以て、次第に菩薩摩訶薩

を讚するや、答へて曰く、諸の菩薩の實の功德を出さんと欲するが故に讚すべきを則ち讚じ、信すべきを則ち信す、一切衆生の信する能はざる所の、

【一七】陀羅尼(Dhāraṇī)は、能轉・能進・總持等と譯す。咒或は明の義に解せらるゝ場合と、觀或は智の義に解せらるゝ場合と二種の解あり。前者即ち咒文を陀羅尼と稱するは、其咒の一字二字或は數字、語數の多少に拘らず、字々、無量の義理を含み、これを誦する者をして、一切の障得を除き、無邊の利益を得せしむる力用あるを以て總持能進の義ありと説き、これを陀羅尼と名く。後者の義は智能く無邊の事理を窮め、無量の法門を總理するが故に名づく。經に無量陀羅尼門、無量三昧を説けるは此義によれり。

【一八】第二問、空・無相・無作を以て菩薩を讚する理由如何。

甚深なる清淨の法を以

て菩薩を讀す。復次に、先づ菩薩摩訶薩の名字を説き、未だ菩薩摩訶薩たる所以を説かず。諸の陀羅尼・三昧及び忍等の諸の功德を得るを以ての故に、名けて菩薩摩訶薩と爲す。

問うて曰く、(二四) 已に次第の義を知れり。何を以ての故に陀羅尼と名け、云何が陀羅尼なるや。答へて曰く、陀羅尼は、秦に能持と言ひ、或は能遮と言ふ。能持とは種種の善法を集めて能く持ち、散

せず失せざらしむるなり。譬へば完き器に水を盛るに、水漏れ散せざるが如し。能遮とは惡しき不善

根の心生ずるを能く遮つて生ぜざらしむ。若し惡罪を作さんと欲すれば持して作さざらしむ。是を

陀羅尼と名く。是陀羅尼は、或は心相應し、或は心相應せず。或は有漏、

或は無漏、無色不可見、無對、一持、一入、二陰攝、九智知、一識識、阿毗曇

法なり。陀羅尼の義は是の如し。

復次に、(二五) 陀羅尼を得るの菩薩は一切聞く所の法を念力を以ての故に能く持して失せず。復次に、

是の陀羅尼の法は常に菩薩を逐ふと、譬へば間日の癩病の如し。是の陀羅尼の菩薩を離れざることを、

譬へば鬼の著くが如し。是の陀羅尼の常に菩薩に隨ふことは、善不善の律儀の如し。復次に、是の陀

羅尼の菩薩を持して、二地の坑に墮さしめざること、譬へば慈父の子を愛して子の坑に墮ちんと欲す

るに、持して墮ちざらしむるが如し。復次に、菩薩は陀羅尼を得るの力あるが故に、一切の魔王・魔

民・魔人も動かすこと能はず、能く破ること無く、能く勝つこと無し。譬へば須彌山を凡人の口もて

【二一】 第三問、陀羅尼と言ふ意  
義如何。  
【二二】 陀羅尼の功德を讚説す。

吹けども、動かさしむること能はざるが如し。

問うて曰く、三三三 是の陀羅尼は幾種ありや。答へて曰く、是の陀羅尼は多種あり、一を聞持陀羅尼と名

く。是の陀羅尼を得る者は、一切の語言の諸法、耳に聞く所のもの皆忘失せず。復た分別知陀羅尼あ

り。是の陀羅尼を得る者は、諸の衆生、諸法の大小、好醜の分別を悉く知る。偏に説くが如し。

「諸の象馬・金木・石諸の衣男女・及び水は、種種にして同じからず、諸物の名は一にして、貴

賤の理は殊なるも、此の總持を得れば、悉く能く分別す。」

復た、入音聲陀羅尼あり。菩薩の此の陀羅尼を得る者は、一切語言の音

を聞いて喜ばず暝らず、若し一切衆生、恒河沙等の如き劫に、惡言を以て

罵言すとも心に憎み恨まざるなり。

問うて曰く、三三三 菩薩は諸漏未だ盡さず、云何が能く恒河沙等の如き劫に、此の諸の惡を忍ぶや、答

へて曰く、我先に言へり、此の陀羅尼を得る力の故に能く爾なり」と。

復次に、是の菩薩は未だ漏を盡さずと雖も、大智利根にして能く思惟し、瞋心を除遣し、是の念を

作さく、「若し耳根、鼻邊に到らざれば惡聲誰にか著かん。又罵る聲を聞くに便ち直に過るが如し。

若し分別せずんば、誰か當に瞋るべき者あらん」と。凡人は心、吾我に著し、是非を分別して悲恨を

生ず。復次に、若し人能く語言を知るも、隨つて生じ隨つて滅し、前後俱ならざれば則ち瞋恚無し。

【三】第四問、陀羅尼の種類を問ふ。  
【三三】第五問、菩薩は諸漏を有しながら、如何にして諸惡を忍ぶや。

亦諸法は内に主あること無しと知れば、誰か罵り誰か瞋らん。若し人あり、殊方の異語を聞き、此の言を好しと爲し、彼を以て惡と爲して、好惡を定むること無くんば罵ると雖も瞋らざらん。若し人あり、語聲を知るも、定むること無ければ、則ち瞋り喜ぶこと無けん。親愛の之を罵るが如きは、罵ると雖も恨まず、親からざるもの、惡言は聞いて則ち悲を生ず。風雨に遭へば、則ち舎に入り、蓋を持するが如く、地に刺あれば則ち鞣鞋を著くるが如く、大寒には火を然し、熱時には水を求む。是の如く諸の患は、但遮るの法を求めて之を瞋らず。罵言・諸惡も、亦復た是の如く、但慈悲を以て、是の諸の惡を息むれば瞋の心生せざるなり。

復次に、菩薩は諸法の不生不滅にして、其の性皆空なることを知る。若

し人瞋恚し、罵詈し、若くは打ち、若くは殺すも、夢の如く、化の如く、誰か瞋り、誰か罵らん。復た次に、若し人あり、恒河沙等の如き劫に、衆生讚歎し、衣食・臥具・醫藥・華香・瓔珞を供養すとも、忍を得るの菩薩は其の心動かず、喜ばず、著せざるなり。

問うて曰く、(三三) 已に菩薩の種種の瞋らざるの因縁を知るも、未だ實に功德を讚するに、而も亦喜ばざることを知らず。答へて曰く、種種の供養恭敬は、是れ皆な無常なることを知る。いま因縁あるが故に來つて讚歎供養すとも、後ち更に異なる因縁あれば、則ち瞋恚し、若くは打ち、若くは殺さん。是の故に喜ばざるなり。復次に、我に功德・智慧あるを以ての故に、來つて讚歎し供養す。是れ功德

【二五】第六問、菩薩の讚歎せられて而も喜ばざる理由如何。

を讚歎するが爲にして、我を讚するには非ざるなり。我何を以てか喜ばんや。復次に、是の人は自ら果報を求むるが故に、我が所作の因縁に於いて、我が所作の功德を供養す。譬へば人の穀を種うるに、氾灌修理すれども、地も亦た喜ばざるが如し。復次に、若し人我を供養せんに、我若し喜んで受けば、我が福則ち薄く、他に於いても亦少し、是の故に喜ばず。復次に、菩薩は一切の法を觀るに夢の如く響の如し。誰か讚じ誰か喜ばん。「我は三界の中に於いて、未だ脱することを得ず、諸漏未だ盡さず、未だ佛道を得ず。云何が讚を得て而も喜ばん」と。若し喜ぶべき者は唯佛一人のみなり。何となれば一切の功德都て已に滿すを以てなり。是の故に菩薩は種種の讚歎供養供給を得れども心に喜を生ぜず、是の如き等の相を名けて、入音聲陀羅尼と爲す。復た、寂滅陀羅尼、無邊旋陀羅尼、隨地觀陀羅尼、威德陀羅尼、華嚴陀羅尼、淨音陀羅尼、虚空藏陀羅尼、海藏陀羅尼、分別諸法地陀羅尼、明諸法義陀羅尼と名くるあり。是の如き等は略して五百の陀羅尼門を説く、若し廣く説けば則ち無量なり。是を以ての故に諸の菩薩は皆陀羅尼を得と言ふ。

【二四】三種の三昧を説く。

諸の三昧とは、(三四)の三昧なる、空と無作と無相となり。有人の言く、「五陰の我なく、我所なきを觀ず、是を名じて空と爲す。是の空三昧に住して、後世の爲の故に三毒を起さざる、是を無作の縁と名く。十相の法と五塵と男と女と生と住滅とを離るるが故に是を無相と名く。有人の言く、是の三

味の中に住すれば、一切諸法の實相を知る。所謂、畢竟空は是を空と名け、是を空三昧と名く。是の空を知れば已に無作なり。云何が無作なる。諸法の若くは空、若くは不空、若くは有、若くは無なる等を觀ぜざるなり。佛、法句の中の偈に説きたまふ如し。

『有を見ては則ち恐怖し、無を見ては亦恐怖す。是の故に有に著せず、亦復無に著せず。』

是を無作三昧と名く。云何が無相三昧なる。一切の法は相あること無し、一切の法を受けず、著せず、是を無相三昧と名く。偈に説くが如し。

『言語已に息み、心行も亦滅す。不生不滅なると、涅槃の相の如し。』

復次に、十八の空、是を空三昧と名く、(二三)種種の有の中に心に求めざる、是を無作三昧と名く、一切の諸相を破壊して、憶念せざる、是を無相三昧と名く。

三昧と名く。

問うて曰く、(二三)種種の禪定の法あり、何を以ての故に獨り此の三の三昧を稱するや。答へて曰く、

三の三昧の中の思惟は涅槃に近きが故に、人心をして高からず下からず、平等にして動せざらしむ、

餘處は隔らず。是を以ての故に獨り是の三の三昧を稱す。餘の定の中には或は愛多く、或は慢多く、

或は見多し。是の三の三昧の中の第一實義は、實に利にして能く涅槃門を得。是を以ての故に諸の禪

定法の中に、是の三の定法を以て三の解脱門と爲し、亦名けて三の三昧と爲す。是の三の三昧は實

【二三】種種の有とは、五道の生有と本有と死有と中有との業を云ふ。  
【二六】第七問、世に種々の定あり、然るを獨り此の三三昧を稱するは何故なるか。

の三昧なるが故に、餘の定も亦定と名くることを得るなり。

復次に、四の根本禪を除き、(三七)未到地より

乃至有頂地を名けて定と爲し、また三昧と名

く、非禪の四禪も亦定と名け、亦禪と名け、ま

た三昧と名く。諸餘の定もまた定と名け、また

三昧と名く。四無量 (三六) 四辯 (三七) 八背捨 (三〇)

八勝處 (三一) 九次第定 (三二) 十一切處等の如き

も諸定の法なり。

復た有人の言く、一切の三昧の法に二十三種

ありと。有は言ふ、六十五種ありと。有は言

く、五百種ありと、摩訶衍は最大なるが故に、

無量の三昧あり。謂ゆる遍法性莊嚴三昧、能

照一切三世法三昧、不分別知觀法性底三昧、入

無底佛法三昧、如虚空無底無邊照三昧、如來力

【三七】未到地は、未至定ともいひ、又は未到定ともいふ。上

界の八地に各根本定と近分定

とあり。欲界の修惑を斷じて

發する禪定を初禪の根本定と

し、乃至無所有處の修惑を斷

じて得る禪定を、非想處の根

本定とす。又欲界の煩惱を伏

して初禪の根本定に近似せる

禪定を發するを初禪の近分定

とし、乃至、無所有處の煩惱

を伏して、非想處の根本定に

近似せる禪定を發するを非想

處の近分定となす。此の如く

八根本定、八近分定ある中に

初禪の近分定は、他の近分定

に異なる點あれば、別名を立

は四無礙辯ともいふ。是れ菩薩

薩説法の智辯なれば、意樂に約

して解といひ、口業に約して

辯といふなり。一に法無礙、

名旬文句の體證の教法令法と

名け、教法、於いて講るべき

を法無礙といふ。二に義無礙、

教法所證の義理を知りて辯る

なきを義無礙といふ。三に辭

無礙、及び詞無礙、諸方の言

辭に於て適宜自在なるを詞無

礙といふ。四に樂說無礙、又

は辯說無礙、前の三種の智を

以て樂牛の喙に樂說自在なる

を樂說無礙と名く。又正理に

契み無礙の言説を堪ゆるを辯無

【三六】八背捨、新譯に八解脫といふ。一に内有色界二禪、外

色解脫、内身に於て色想の實

あり、此貪を除くが爲に外の

不淨青瘀等の色を觀じて貪を

行觀三昧、佛無畏莊嚴力顯呻三昧、法性門旋藏三昧、一切世界無礙莊嚴通月三昧、遍莊嚴法雲光三昧なり。菩薩は是の如き等の無量の三昧を得。

復次に、般若波羅蜜(多)摩訶衍義品の中に略して説くに、則ち一百八の三昧あり。初めを首楞嚴三昧と名け、乃至虚空不著不染三昧なり、廣く説けば則ち無量の三昧あり。是を以ての故に諸の菩薩は諸の三昧を得と説く。

空・無相・無作を行ずとは、問うて曰く、(三)前に菩薩に諸の三昧を得と言へり、何を以ての故に復た空・無相・無作を行ずと言ふや。答へて曰く、前には三昧の名を説いて、未だ相を説かず、今相を説かんと欲す、是の故に空・無相・無相を行ずと言ふ。若し人ありて、空・無相・無作

して起らざらしむ、故に解脫と名く。此初解脫は初禪定に依て起り、欲界の色を緣するなり。二に内無色想・觀・外色・解脫、四身に於て色想の貪なけれども、更に堅牢ならしめん爲に、外の不淨青瘀等の色を觀じて貪を起らざらしむれば解脫と名く。此は二禪に依て起り、初禪の色を緣するなり。已上の二は不淨觀なり。三に淨解脫身作證具足住、淨色を觀すれば淨解脫と名く。定中に於て不淨相を除き、唯八色の光明清淨光潔淨實の色の如きを觀するなり。淨色を觀じて貪を生ぜざるは觀の轉た勝ることを顯はず。此淨解脫を身中に證得すれば身作證と名け、具足圓滿して此定に住するを得れば具足住と名く。此第三解脫の位は第四禪に依て起り、亦欲界の色を緣

するなり。唯異なる所は初二は可憎の不淨色なり、此は可愛の淨色なり。故に是れ淨觀なり。四に空無邊處解脫。五に識無邊處解脫。六に無所有處解脫。七に非想非非想處解脫。此四は四無色定に依て起り、各所得の定に於て苦空無常無我を觀じて、厭心を生じ之を棄捨するが故に解脫と名く。八に滅受想定・定身作證具足、滅受想定とは滅盡定なり、是亦第四禪に依て前非非想即ち一場の所緣を棄捨する故に解脫と名く。問ふ唯第三禪に於て解脫なきは云何ん。答ふ第三定中には眼識所作の顯色貪なきが故に、又自地の妙樂に動亂せらるゝが故に解脫なきなり。

(三)八勝處 勝知勝見を起發し以て貪愛を捨つる八種の禪定なり。是れ勝地勝見を起す

を行せば、是を實相の三昧を得と名く。偈に説くが如し。

『若し戒を持して清淨なる、是を實の比丘と

名け、若し能く空を觀すること有る、是を

三昧を得を名く。若し能く精進すること有

る、是を道を行する人と名け、若し涅槃を

得ること有る、是を名けて實樂と爲す。』

已に等と忍とを得とは、問うて曰く、三番云何

が等にして、云何が忍なるや。答へて曰く、二

種の等あり、衆生等と法等となり。忍に亦二種

あり、衆生忍と法忍となり。云何が衆生等な

る。「謂く一切衆生の中の等心、等念、等愛、

等利、是を衆生等と名く。

問うて曰く、慈悲の力の故に、一切衆生の

中に於て、應に等念なるべきも、應に等觀なる

依處なれば勝處と名く。一に  
内有色想觀外色少勝處。内に  
色想を有すれば内有色想と云  
ひ、又觀道未だ增長せざるを  
以て若し多色を觀すれば悉ら  
くは攝持し難し、故に色少と  
云ふ。但内身の不淨を觀じ、  
或は少許の外色の清淨を觀す  
るなり。二に内有色想觀外色  
多勝處。内心に色想を有する  
義は上の如し、但行人の觀道  
漸く熟するを以て多く外色を  
觀するも亦妨なし、一死屍を  
諦觀して十百千萬の死屍に至  
る、若し一の尸骸を觀する時  
悉く一切の尸骸を觀じ、廣大  
の外色の清淨を觀すれば觀外  
色多と云ふ。三に内無色想觀  
外色少勝處。觀道漸く勝妙に  
して外色を觀するも、内心に  
色想を存せざれば内無色想と  
云ふ。觀外色少の義は第一勝  
處の如く、又淨不淨を觀する

事初めの如し。四に内無色想  
觀外色多勝處。内心に色想を  
留めざれば内無色想と云ふ、  
觀外色多の義は第二勝處の如  
く、淨不淨を觀する前の如し、  
已上の四。淨不淨雜觀なり。  
五に青勝處。外の青色を觀じ  
て轉變自在、少をして能く多  
ならしめ多をして能く少なら  
しむ、所見の青相に於て法愛  
を起さざるを云ふ。六に黃勝  
處。黄色を觀じて法執を起さ  
ざる事青勝處の如し。七に赤  
勝處。赤色を觀するに青勝處  
の如し。八に白勝處。白色を  
觀する事青勝處の如し。此八  
勝處の相は八解脫と同じく、  
即ち初の二勝處は第一解脫の  
如く、次の二勝處は第二解脫  
の如く、後の四勝處は第三解  
脫の如し。されば云何ぞ之を  
重説するかと云ふに、八解脫  
の觀心をして自在勝妙、所緣

べからず。何となれば菩薩は實道を行じて顛倒せず、法相の如くなるを以てなり。云何が善人・不善人・大人・小人・人及び畜生に於て、一等に觀するや。不善人の中には實に不善の相あり、善人の中には實に善相あり、大人・小人・人及び畜生も亦爾なり。牛相は牛の中に住し、馬相は馬の中に住し、牛相は馬の中に非ず、馬相は牛の中に非ず、馬は牛と作らざるが如し。故に衆生は各各の相あり、云何が一等に觀じて、而も顛倒に墮せざるや。答へて曰く、若し善相・不善相、是れ實ならば、菩薩は應に顛倒に墮すべし。何となれば諸法を破るが故なり。諸法は實に非ざるを以て、善相は實に非ず、不善相は多相に非ず、少相に非ず、人に非ず、畜生に非ず、一に非ず、異に非ず。是を以ての故に

に對して執惑を起さざらしめん爲に此八勝處を進修するなり。之を人の馬に乗じて能く前陣を破り、亦能く自ら其馬を制するに譬ふ。

【三】九次第定。四禪、四無色、及び滅受想定、又は滅盡定とも云ふの九種の禪定は他心を離へず、次第に一定より一定に入る法なり。一に初禪次第定。二に二禪次第定。三に三禪次第定。四に四禪次第定。已上は名の如く色界四禪の根本定なり。五に空處次第定。六に識處次第定。七に無所有處次第定。八に非想非非想處次第定。已上は名の如く無色界四處の根本定なり。九に滅受想定次第定、一切の心識を止息する定にして、是を禪定の至極とす。

【三】十一切處。新に十遍處と云ふ。青黃赤白地水火風空識

の十法を觀じ、其一一に於て一切處に周遍せしむるなり。十の中に前八は前の第三淨解脫の如く色の清淨を觀するなり。其の所依の禪定亦前の如く、第四禪定に依て欲界の色を緣するなり。後の二は空無邊處識無邊處定を所依とし、自他の受想行識の四蘊を緣するなり。謂く解脫を修するは但所緣に於て總じて淨相を取る、未だ能く青黃赤白を分別せず、後の四勝處は能く青黃赤白を分別すと雖も未だ能く無邊の行相を作さず、又前の四一切處は青黃赤白一一に無邊なりと觀す、又此の所覺の色何に依て廣大なるかを思ふに虚空に依るを知る、故に次に虚空無邊を觀す。又此能覺の識何を所依と爲すかを思ふに識に依るを知る、故に次に識無邊を觀す。此所依の識は

汝が難は非なり、諸の法相の偏に説くが如し。

『生せず滅せず、二美なる常ならず、一におらや異にあらず、去にあらず來にあらず、因縁生の法は、諸の戲論を滅す。佛能く是を説きたまふ、我今當に説くべし。』

復次に、一切衆生の中、種種の相・衆生の相・空相に著せず、一等にしく異なる無し。是の如く觀する、是を衆生等と名く。若し人是の中に心等しくして無礙ならば直に不退に入る、是を等と忍とを名く。等と忍とを得るの菩薩は一切衆生に於て、瞋らず惱ます、慈母の子を愛するが如くす、偏に説くが如し。

『聲を觀するに呼響の如く、身行は鏡像の如し。此の如く觀することを得る人は、云何が忍ならざらんや。』

是を衆生の等忍と名く。云何が法の等忍と名くるわ。善法・不善法・有漏・無漏・有爲・無爲等の法、是の如きの諸法の不二法門に入る、實の法相の門に入る。是の如きの人は、竟に是の中に深く諸法の實相に入る時、心忍にして直に無礙無礙に入る。是を法の等忍と名く。偏に説くが如し。

別の所依なきが故に、更に第九の遍處なきなし。

【一】第八問、空・無相・無作を行ずといふ意義如何。

【二】第九問、等とは何ぞや、忍とは何ぞや。

【三】第一〇問、等念はあり得べきも、等觀はあり得べからずと難す。

【四】不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來、これを八不と云ふ。

「諸法は生せず滅せず、生ぜざるに非ず滅ぜざるに非ず、亦生滅せず、生滅せざるに非ず、亦生滅せざるに非ず、生滅せざるに非ず。」

〔三三〕 已に解脱を得て、空と非空と、悉く是等は諸の戲論を捨滅し、言語の道断え、深く佛法に入り、心通じて礙なく、動かす邊かざるを無生忍と名く。是れ佛道を助くるの初門なり。是を以ての故に已に等忍を得たりと説く。

無礙陀羅尼を得たり。

問うて曰く、前に已に諸の菩薩は陀羅尼を得と説けり。今何を以

てか復無礙陀羅尼を得と説くや。答へて曰く、「そは」無礙陀羅尼は最も

大なるを以てなり。一切の三昧の中に「於て」、三昧、王三昧の最も大なる

が如く、人中の王の如く、諸の解脱の中の無礙解脱の如く、是の如く無礙陀羅尼は、一切諸の陀羅

尼の中に「於て」大なり。是を以ての故に重ねて説けり。復次に、先に諸の菩薩は、陀羅尼を得と説

けり、是れ何等の陀羅尼なるかを知らず。小陀羅尼あり、轉輪聖王仙人等の得る所の如し。聞持陀羅

尼、分別業生陀羅尼、歸命救護不捨陀羅尼、是の如き等の小なる陀羅尼は餘人にも亦有り。是の無礙

陀羅尼は、外道聲聞辟支佛・新學の菩薩皆悉く得ず。唯だ無量の福德・智慧・大力の諸の菩薩のみ獨

〔三三〕 無生忍を釋す。

〔三六〕 第一問、已に菩薩の陀羅尼を得る旨を説き、今復無礙陀羅尼を得といふは何故なるか。

〔三九〕 諸の陀羅尼の中、無礙陀羅尼を最大となす。

り是の陀羅尼あり、是を以ての故に別して説けり。

復次に、是の菩薩の輩は、自らを利すること已に具足し、但彼を益せんと欲す。説法教化の無盡なること無礙陀羅尼を以て根本と爲す。是を以ての故に諸の菩薩は常に無礙陀羅尼を行す。

【一〇〇】 悉く是れ五通。

【一〇〇】 如意と天眼と天耳と他心智と自ら宿命を識ると【これを五通と云ふ】。云何が如意なる。

【一〇一】 如意通に三種あり、能到と轉變と聖如意となり。能到に四種あり。一には身能く飛行し鳥の如くにして礙なし。二には遠きを移して近からしめ往かすして到る。三には此に没して彼に出づ。四には一念能く到る。轉變

【一〇一】 五通を釋す。  
【一〇二】 三種の如意通を釋す。  
【一〇三】 天眼通の相驗。

とは大を能く小と作し、小を能く大と作し、一を能く多と作し、多を能く一と作し、種種の諸物を能く轉變す。外道の輩の轉變は極めて久しきも七日に過ぎず、諸佛及び弟子は轉變自在にして久近あること無し。聖如意とは、外の六塵の中の愛すべからざるの不淨物を能く觀じて淨ならしめ、愛すべきの淨物を能く觀じて不淨ならしむ、是れ聖如意法なり。唯佛のみ獨り是の如意通あり。四如意足より是の如意足通を生ず。等しく色を緣するが故に次第に生ず、一時には得べからず。【一〇三】 天眼通とは、眼に於いて色界の四大造の清淨色を得る、是を天眼と名く。天眼の見る所は、自地及び下地、六道の

中の衆生の諸物、若くは近き、若くは遠き、若くは麤なる、若くは細なる諸色を照す能はざることを無し。是の天眼に二種あり。一には報に従つて得、二には修に従つて得。是の五通の中の天眼は修より得、報より得るに非ず。何となれば常に憶念して、種種の光明を得るが故なり。有人の言く、是の諸の菩薩の輩は、無生法忍の力を得るが故に六道の中に攝せず、但衆生を教化するが爲の故に法身を以て十力に現す。三界の中に未だ法身を得ざる菩薩は、或は修得、或は報得なり。

問うて曰く、(二四) 是の諸の菩薩の功德は阿羅漢辟支佛に勝れたり。何を以ての故に凡夫も共にする所の小功德たる天眼を讃じて、諸の菩薩の慧眼、法眼、佛眼を讃せざるや。(二四)

答へて曰く、三種の天あり。一には假號天、二には生天、三には清淨天なり。

【二四】第一二問、天眼を讃じて、何故に慧眼・法眼・佛眼を讃せざるや。

【二四】三種の天を辯す。

【二四】天耳通の相貌。

り。轉輪聖王諸餘の大王等は是を假號天と名け、四天王天より、乃至有頂の生處は、是を生天と名け。諸佛・法身の菩薩・辟支佛・阿羅漢は是を清淨天と名く。是の清淨天の修得の天眼は是を天眼通と謂ひ、佛と法身の菩薩の清淨の天眼は、一切の欲を離れたる、五通の凡夫も得ると能はざる所、聲聞・辟支佛も亦得ざる所なり。何となれば小阿羅漢の小用の心は一千世界を見、大用の心は二千世界を見、大阿羅漢の小用の心は三千世界を見、大用の心は三千大千世界を見るを以てなり。辟支佛も亦爾なり。是を天眼通と名く。云何が(二五)天耳通と名くるや。耳に於いて色界の四大造の清淨色を得、能く一切の聲と、天の聲と、人の聲と、三惡道の聲

とを聞く。云何が天耳通を得るや。「謂く」修得して、常に種種の聲を憶念す。是を天耳通と名く。云何が二異宿命通なるや。「宿」本事を常に憶念し、日月年歳より胎中に至り、乃至過去世の中の一、十世、百世、千萬億世の「事を知り」、乃至大阿羅漢・辟支佛は八萬大劫を知り。諸の大菩薩及び佛は無量劫を知る。是を識宿命通と名く。云何が「二異」知他心通と名くるや。他心を知るに、若くは垢あり若くは垢なし。自ら心の生住滅を觀する時、常に憶念するが故に「これを」得るなり。

復次に、他人の喜相・瞋相・怖相・畏相を觀じ、此の相を見已つて、然る後心を知る。是を他心智の初門と爲す。是れ五通の略説なり。

【二異】宿命を識るの通を釋す。

【二異】宿命を識るの通を釋す。  
 【四七】本事とは、現世に生れる前の宿世の事柄を云ふ。  
 【四八】五通の中の他心を知るの通を釋す。  
 【四九】綺語の罪報を辯す。

言必ず信受す。

【二異】宿命を識るの通を釋す。

天・人・龍・阿修羅等及び一切の大人は、皆其の語を信受す。是れ不綺語の報の故なり。二異の綺語の報は實語ありと雖も、一切の人は皆信受せずし。偈に説くが如し。

「鐵鬼の中に墮すること有りて、火焰口より出で、四に向つて大聲を發す、是を口過の報と爲す。復た多く聞見し、大衆の説法ありと雖も、誠信ならざるの業を以て人皆信受せず。

是の故に若し廣く多聞にして、人の爲に信受せられんと欲せば、當に至識にして、綺語を作すべからず。」

【一四】 復た懈怠すること無し。

【一五】 懈怠は在家の人の財利と福利とを破り、出家の人の天樂と涅槃の樂とを生ずるを破り、在家出家の名聲俱に滅す。大失と大賊とは、懈怠に過ぎたるは無し。偈に説くが如し。

「懈怠は善心を没し、癡闇は智明を破り、妙願皆滅せられ、大業も亦已に失す。」  
是を以ての故に「復た懈怠すること無し」と説くなり。

【一六】 已に利養・名聞を捨つ。

【一七】 是の利養の法は、賊の如く功德の本を壞る。譬へば天菴の五穀を

【一五】 懈怠の害を説く。  
【一六】 名聞利養の過失を説く。

傷害するが如し。利養名聞も亦復是の如く、功德の苗を壞りて增長せざらしむ。佛の譬喩を説きたまふが如し。「毛繩の人を縛して、膚を斷り骨を截るが如く、利養を貪るの人の功德の本を斷ずること、亦復是の如し」と。偈に説くが如し。

「梅檀林に入ることを得て但其の葉を取り、既に七寶の山に入りて而も更に水精を取る。  
人あり、佛法〔の中〕に入つて涅槃の樂を求めず、反つて〔名〕利供養を求む、是の輩は自ら欺くことを爲す。」

是の故に佛弟子よ、甘露味を得んと欲せば、當に雜毒を棄捨し、涅槃の樂を勤求すべし。  
 譬へば惡毒の雨れば、五穀を傷害するが如く、若し「名」利供養に著せば、慚愧、頭陀を破り、  
 今世には善根を燒き、後世には地獄に墮せん。提婆達多が利養の爲に自ら沒せしが如し。  
 是を以ての故に「已に利養名聞を捨つ」と云ふ。

法を説いて、(二重) 桶望する所なし。

大慈悲憐愍して、衆の爲に法を説くは、衣食と名聲と勢力との爲の故  
 に説くにあらず、大慈悲の故に、心清淨なるが故に、無生法忍を得るが  
 故に「説くなり」。偈に説くが如し。

「多聞辯慧にして巧に言語し、美はしく諸法を説いて人心を轉するも、

自ら如法ならず行ひ正しからざれば、譬へば雲雷して雨らざるが如し。

博學多聞にして智慧あるも、訥口拙言にして巧便なければ、法寶藏を顯發すること能はず、譬へ  
 ば雷無くして雨小なきが如し。

廣く學問せず智慧なく、説法すること能はず行ひを好くすること無き、是の弊れたる法師には慚  
 愧なし。譬へば雲小なく雷雨なきが如し。

【三】頭陀 (Dhuta) は、修治、  
 修行時と譯す。僧侶の衣食住  
 に對する桶餘の念を去り、行  
 持を奮勵する方法なり。  
 【二重】法を説くに桶望する所あ  
 るべからず。

多聞廣智にして美はしく言語し、巧に諸法を説いて人心を轉じ、法を行じて心正しければ、畏る所無きこと、「譬へば」大雲雷の洪雨を澎ぐが如し。

法の大将の法鏡を持して、佛法の智慧の藏を照明し、持し誦し廣く宣べて法鈴を振ふこと、海中の船の一切を渡すが如く、

亦蜂王の諸味を集むるが如し。説くこと佛言の如く佛意に隨ひ、佛を助け法を明にして衆生を度す、是の如きの法師は甚だ値ひ難し。』

甚深の法忍を度る。

云何が 〔番〕 甚深の法なる。十二因縁、是を甚深の法と名く。佛の阿

〔二番〕 甚深の法とは何ぞや。

難に告げたまへるが如く、是の十二因縁の法は甚深にして、解し難く、知り難し。復次に、法を説いて、過去未來世の六十二の邪見の網を破る、是を甚深の法と名く。佛の比丘に語げたまへるが如く、凡夫は聞くこと無く、若し佛を讀せんと思ふも讀する所甚だ少し。謂ゆる若くは戒の清淨を讀じ、若くは諸欲を離るゝことを讀じ、若くは能く是の甚深にして、解し難く知り難きの法を讀す、是を實の讚佛と爲す。是の中梵網經に應に廣く説くべし。復次に、三解脱門、これを甚深の法の後とす。佛の般若波羅蜜〔多〕を説きたまふ中に、諸天の讀して言ふが如し。「世尊よ、是の法は甚深なり」と。佛の

言はく、「甚深の法とは、空則ち是れ義なり。無作無相則ち是れ義なり」と。復次に、一切諸法の相を

解すれば、實に破すべからず、動すべからず、是を甚深の法と名く。

復次に、内の心想智力を除いて、但心を諸法の清淨の實相の中に住せんと定む。譬へば熱氣盛なれば、黄に非るを黄と見るが如し。心想智力の故に諸法に於いて轉觀す、是を淺法と名く。譬へば人の

眼の清淨にして熱氣なければ、實の如く黄を見て是れ黄とするが如し。是の如く内の心想智力を除いて、慧眼清淨なれば諸法の實相を見る。譬へば眞の水精を黃物の中に著

くれば、則ち隨つて黄色を作り、青黄赤白色みな隨つて色變するが如し。心も亦是の如く、凡夫人の内の心想智力の故に諸法の異相を見る。諸

法の實相を見るに、空に非ず不空に非ず、有に非ず有ならざるに非ず、是

の法の中に深く入つて、轉せず罣礙する所なき、是を「深法の忍を度る」と名く。「度る」とは甚深の法

を得るに名く、具足し滿じて、礙る所なく、彼岸に度ることを得る、是を名けて「度る」と爲す。

無畏の力を得。

諸の菩薩は四無所畏の力を成就す。問うて曰く、二垂は菩薩の如きは所作未だ辦せず、未だ一切

智を得ざるに、何を以ての故に四無所畏を得と説くや。答へて曰く、無所畏に二種あり。菩薩の無所

【二垂】第一三問、所作未だ辦せず、一切智を得ざる菩薩が、如何にして四無所畏を得ることありや。

畏と、佛の無所畏となり。是の諸の菩薩は未だ佛の無所畏を得ずと離も、菩薩の無所畏を得、是の故に名けて「無畏の力を得」と爲す。

問うて曰く、(二五)何等をか菩薩の四無所畏と爲すや。答へて曰く、一には一切を聞いて能く持するが故に、諸の陀羅尼を得るが故に、常に憶念して忘れざるが故に、衆中に法を説いて畏るゝ所なし。二には一切衆生の解脱を欲するの因縁と、諸根の利鈍とを知り、其の應ずる所に随つて爲に法を説くが故に、菩薩は大衆の中に在つて法を説くに畏るゝ所なし。三には若し東方南西北方、四維上下より來つて難問すること有るも、我をして如法に答ふること能はざらしむる者あるを見ず。是の如きの少許の相をも見ざるが故に、衆中に於いて法を説くに畏るゝ所なし。四には一切衆生の聽受して問難するも、意に随つて如法に答へ、能く巧に一切衆生の疑ひを斷するが故に、菩薩は大衆の中に在りて、法を説いて畏るゝ所なきなり。

諸の魔事を過す。

論 魔に四種あり、(二七) 一には煩惱魔、二には陰魔、三には死魔、四には他化自在天子魔なり。是の諸の菩薩は菩薩の道を得るが故に煩惱の魔を破し、法身を得るが故に陰魔を破し、道を得て法性身

【二五】第一四問、菩薩の四無所畏とは何ぞや。  
【二七】四種の魔を釋す。

を得るが故に死魔を破し、常に一心なるが故に、一切處に心著せざるが故に、不動三昧に入るが故に、他化自在天子魔を破す。是を以ての故に「諸の魔事を過ぐ」と説く。復次に、是の般若波羅蜜多覺魔品の中に、佛自ら魔の業と魔の事を説きたまふ。是の魔業魔事盡く已に過すが故に、是を「已に魔事を過ぐ」と名く。復次に、諸法の實相を除いて、餘殘の一切の法を盡く名けて魔と爲す。諸の煩惱・結使・欲縛・取纏・陰・界・入・魔王・魔民・魔人の如し。是の如き等を盡く名けて魔と爲す。

問うて曰く、「(天)何の處にか欲縛等の諸の結使を説いて魔と名くるや。答へて曰く、雜藏經の中に佛偈を説いて魔王に語りたまふ。

『欲は是れ汝が初軍、憂愁の軍は第二、飢渴軍は第三にして、愛軍は第四に在り。

第五は眠睡軍、怖畏軍は第六、疑を第七軍と爲す、含毒軍は第八なり。

第九軍は利養にして、虛妄の名聞に著す。第十軍は自ら高うして、他人を輕慢す。

汝が軍等は是の如し。一切世間の人、及び諸の一切の天、能く之を破る者なし。

我智慧の箭、修定・智慧の力を以て、汝が魔軍を摧破すること、坏瓶を水に没するが如し。

一心に智慧を修し、以て一切を度せよ。我が弟子よ精進して、常に念じて智慧を修せよ。

隨順して如法に行けば、必ず涅槃に至ることを得ん。汝は欲を放たすと雖も、汝が不到の處に到

【天】第一五問、何經の中に結使を説いて魔となすか。

らん。

是の時魔王はこれを聞き、愁憂して即ち滅し去り、是の魔惡の部黨も、亦没して現はれざりき。』  
是を諸の結使の魔と名く。

問うて曰く、「五の處に五衆・十八界・十二入は、是れ魔なりと説くや。答へて曰く、「百・莫拘羅山の  
中に、佛、弟子の羅陀に教へたまふ、「色衆は是れ魔、受・想・行・識も亦是の  
如し」と。

復次に、若し未來世を作り、色身を作らんと欲する、是を動處と爲す。

若し無色身を作らんと欲する、是も亦動處と爲す。若し有想・無想・非有  
想・非無想身を作らんと欲する、是を一切動處と爲す。動は是れ魔の縛、

不動は則ち不縛にして惡より脱することを得。此の中に衆・界・入は是れ魔  
なりと説く。自在天子・魔・魔民・魔人の則ち是れ魔なることは説くことを須  
めず。

問うて曰く、「二の以てか魔と名くるや。答へて曰く、慧命を奪ひ、道法、功德の善本を壞す。是  
の故に名けて魔と爲す。諸の外道人の輩の言く、「是を欲主と名け、亦た華箭と名け、亦  
五箭と名  
け、種種の善事を破る」と。佛法の中には名けて 魔羅と爲し、是の業と是の事を名けて、魔事と爲

【一五】第一六問、何經の中に五  
藏・十二處・十八界を説いて魔  
となすか。

【一六】莫拘羅山 (Kāruṇḍya)

【一七】第一七問、魔と名くる理  
由如何。

【一八】五箭とは、財・色・食・名・  
睡の五欲を人を傷くるの弓の  
箭に譬へたるなり。

【一九】魔羅 (Māra)

す。是れ何等の魔事なる、覺魔品の中に説くが如し。復次に、人の世間に展轉して苦樂を愛くるは、結使の因縁、亦魔王の力の因縁なり。是の魔を諸佛の怨讎、一切聖人の賊と名づく。一切の逆流の人の事を破り、涅槃を言はざる、是を魔と名く。二百一 是の魔に三事あり。戲笑の語言、歌舞の邪視、是の如き等は愛より生ず。縛打・鞭撻・刺割・斫載、是の如き等は瞋より生ず。身に炙し、自ら凍え、髪を抜き、自ら飢え、火に入り、淵に赴き、巖に投ず、是の如き等は愚癡より生ず。又大過失あり、不淨にして世間に染著する、皆是れ魔事なり。惡を憎んで益なく、涅槃及び涅槃の道を用ゐざる亦是れ魔事なり。大苦の海に没して自ら覺知せず、是の如き等の無量は皆是れ魔事なり。已に棄て已に捨つ、是を諸の魔事を過ぐと爲す。

【一〇五】一切の惡障悉く解脱することを得。

【一〇六】一切の惡業解脱することを得る、是を「業障解脱することを得」と名く。

問うて曰く、二障の中、業力は最も大なるが故に、諸の業を積集して、乃至百千萬劫の中にも失

せす壊せず、壞せず、果報と合する時亡せざればなり。是の諸の業は能く久しく住して和合する時果

や。答へて曰く、二障の中、業力は最も大なるが故に、諸の業を積集して、乃至百千萬劫の中にも失

せす壊せず、壞せず、果報と合する時亡せざればなり。是の諸の業は能く久しく住して和合する時果

【一〇五】 度に三事あることを辨す。  
 【一〇六】 第一八問、三種の障のうち、但業障のみを擧ぐるは何故なるか。

報を與ふ。穀草の〔種〕子の地中に在りて時節を得て、而も生じ、失せず壞せざるが如し。是れ諸佛の一切智の第一尊重なる須彌山王の如きすら、尙ほ是の諸の業を轉ずること能はず、何に況んや凡人をや。偶に説くが如し。

『生死の輪は人を載せ、諸の煩惱・結使は、大力にして自在に轉じ、人能く禁止すること無し。

先世の業自ら作り、轉じて種種の形と爲る、業力を最も大と爲す、世界の中に比なし。

先世の業は自在に、人をして果報を受けしむ、業力の故に輪轉して、生死海中を廻る。

大海の水は乾き竭き、須彌山の地は盡くるとも、先世の因縁業は、燒けずまた盡きず。

諸業久しく和集すれば、造者自ら逐ひ去る、譬へば貨物の主の、人を追逐して置かざるが如し。

是の諸業の果報は、能く轉ずる者有ること無く、また逃げ避くる處なく、哀を求むるも免るべき

に非ず。

三界の中の衆生は、之を追うて暫くも離れざること、珂梨羅刺の如し、是の業は佛の所説なり。

風は實に入らず、水は流れて仰いで行かず、虚空は害を受けざるが如く、業なきも亦是の如し。

諸業の無量の力は、造らざる者を逐はざれども、果報の時節來るまでは、亡びず亦た失せざる

なり。

地より飛んで天に上り、天より雪山に入り、雪山より海に入るも、〔業は〕一切處に離れず。

常恒に隨つて我を遂ひ、一時も相捨つること無く、直に至つて失ふ時なきこと、星流れて月に翹くが如し。』

是を以ての故に「一切の諸の業障悉く解脱することを得」と説くなり。

巧に因縁の法を説く。

十二因縁生の法は、二突しめども種種の法門能く巧に説けり。煩惱と業と事と次第に展轉し相續して生ず。

是を十二因縁と名く。是中の無明と愛と取の三事を煩惱と名け、行と有との二事を業と名け、餘の七分を事と名く。是十二因縁の初の二は過去世に攝し、後の二は未來世に攝し、中の八は現在世に攝す。是略して三事を説く。煩惱・業・苦、是の

三事は展轉して、更に互に因縁と爲る。是の煩惱は業の因縁、業は苦の因縁、苦は苦の因縁、苦は煩惱の因縁、煩惱は業の因縁、業は苦の因縁、苦は苦の因縁なり。是れを展轉して更に互に因縁と爲ると名く。過去世の一切の煩惱は是を無明と名く。無明より業を生ず、「こは」能く世界の果を作るが故に名けて行と爲す。行より垢心を生ず、初め身の因は犢子の母を誑るが如く、自ら相誑るが故に名けて識と爲す。是の識は共に生じて色なし、四陰及び是の所住の色、是を名色と名く。是の名色の中に眼等の六情を生ず、是を六入と名く。情と塵と識と合する、是を名けて觸と爲す。觸より受を生ず。

【二六】十二因縁を釋す。

受の中に心著する、是を渴愛と名く、渴愛の因縁、是を求むるを取と名く、取よりは後世の因業なり、是を有と名く。有より還た後世の五衆を受く、是を生と名く。生より五衆熟し壊る、是を老死と名く。老死は憂悲哭泣種種の愁惱を生じ、衆苦和合して集まる。若し一心に諸法の實相を觀じて清淨なれば、則ち無明盡く。無明盡くる故に行も盡き、乃至衆苦の和合の集皆盡く。是の十二因縁の相は是の如し。能く方便して邪見に著せず、人の爲に演説する、是を名けて、「巧に」と爲す。

復た次に、是の十二因縁觀の中に法愛を斷じて心著せず實相を知る、是を名けて「巧に」と爲す。

般若波羅蜜(多)不可盡品の中に説くが如くんは、佛、須菩提に告げたまはく、「癡は虚空の如く盡すべからず、行は虚空の如く盡すべからず、乃至衆苦の和合集は、虚空の如く盡すべからず、菩薩は當に是を知るをを作すべし。是を知るとをを作す者は、癡棄を捨て、應に入る所無しと爲す」と。是の十二因縁起を觀することを作す者は、則ち道場に坐して 薩婆若を得と爲す。

阿僧祇功より已來大誓願を發す。

阿僧祇の義は菩薩義品の中に已に説けり。劫の義は、佛、譬喩もて説きたまふ。「四十里の

石山あり。長壽の人、細縷の衣を持つて、百歳ごとに一たび來つて拂拭し、是の大石山をして盡さし

【六七】薩婆若(Sarvajñā)は、一切智と譯す。  
 【六八】劫(Kalpa)の義を釋するに譬喩を以てす。盤石劫と芥子劫となり。

むるも、劫は故らに未だ盡きず。四十里の大城の中に芥子を満し樂して平かならしめず。長壽の人あり、百歳ごとに一たび來つて一の芥子を取らんに、芥子は盡くとも、劫は故らに盡きず。菩薩は是の如き無數劫に大誓願を發し、衆生を度脱せんと願ふ。これを「大心要誓」と名く。必ず一切衆生を度し、諸の結使を斷じ、阿耨多羅三藐三菩提を成せん、是を名けて「願」と爲す。

【二〇六】 顔色相悦して、常に先づ同誡し語る所願ならず。

【二〇七】 瞋恚の本を抜くが故に、嫉妬を除くが故に、常に大慈・大悲・大喜・大捨を修するが故に、四種の邪見を斷するが故に、顔色和悦なることを得、偈に説くが如し。

「若し」を道の人を見ては、能く四種を以て待てよ、初めて見て好く眼視し、迎逆には敬つて問訊し、床座を好くして供養し、充滿して欲する所を施せ。

布施の心是の如くなれば、佛道は掌に在るが如し。若し能く、四種の口の過（即ち）妄語の毒、兩舌・惡口・綺語を除かば、大美の果報を得ん。

善觀の人道を求め、諸の衆生を度せんと欲して、四の邪なる口業を除くは、譬へば馬に轡あるが

【二〇六】 菩薩の大誓願。  
 【二〇七】 顔色相悦なる所以の理を説く。  
 【二〇七】 四種の邪見は、無常なるを常とし、苦なるを樂とし、無我なるを我とし、不淨なるを淨とする四顛倒のことならん。  
 【二〇七】 比丘の人を見ては四種を以て待つべし。

【如し。】

【釋】大衆の中に於て、畏るる所なきことを得。

【論】大徳なるが故に、堅實なる功徳・智慧あるが故に、最上の辯・陀羅尼を得るが故に、大衆の中に於て畏るる所なきことを得。偶に説くが如し。

【内心に】智徳薄く、外善く美言を以てするは、譬へば竹の内なく、但だ其の外あることを示すが如し。内心に智徳厚く、外善く法言を以

てするは、譬へば妙なる金剛の中外の、力具足するが如し。復次に、畏るる無きの法を成就するが故に、端正なる貴族にして大力な

り。【而して】持戒・禪定・智慧・語議等皆成就す。是の故に畏るる所なし。是を以ての故に大衆の中に於て畏るる所なし。偶に説くが如し。

【少徳にして】智慧なければ、應に高座に處るべからず。豺の師子を見、竄伏して敢へて出でざるが如し。

大智なれば畏るる所なく、應に師子の座に處るべし。譬へば師子の吼ゆるに、衆獸みな怖畏するが如し。】

【七】智薄きは外に美言を以てすること竹の如く、徳厚きは外に法言を以てすること金剛の如し。  
【七】小徳無智の者は高座に處るべからず。

無量無邊の智慧福徳の力集まるが故に畏るる所なし。獨に説くが如し。

『若し人衆の惡を滅し、乃至小罪も無ければ、是の如き大徳の人は、願として滿たざる無し。

是の人は大智慧にして、世界の中に惱なし。是の故に此の如きの人には、生死も涅槃も一なり。』  
復次に、獨り菩薩のみ無所畏を得るが故に、毗那婆那王經の中に説くが如きは、「菩薩のみ獨り四無所畏を得し」と。先に説くが如し。

無量徳劫、説法巧に出す。

不放逸等の諸の善根、自身に好く修す。是の諸の菩薩は一世二三世に非ず、乃至無量阿僧祇劫の間に、功徳智慧を集む、獨に説くが如し。

「衆生の爲の故に大心を發す。若し不敬にして慢を生ずる者あらば、其の罪の甚だ大なると説くべからず、何に況んや復三善の惠を加ふる者をや。」

復次に、是の菩薩は無數無量劫の中に、身を修め戒を修め、心を修め慧を修め、生滅の縛を解き、順逆の中において自ら了了たり。諸法の實相を知るに三種の解あり、聞解と義解を得解となり。種種に法門を説く中に罣礙せらるるなく、皆説法方便智慧波羅蜜(多)を得。是の諸の菩薩の説は、聖人の語の如く、皆應に信受すべし。獨に説くが如し。

【二七五】縮藏には「何況而復加惠心しに作る。」

『慧あるも (二六) 多聞無ければ、是れ實相を知らず。譬へば大闇の中に目あるも見る所なきが如し。多聞にして智慧なければ、亦實相を知らず。譬へば大明の中に燈あるも而も目なきが如し。』

多聞にして (二七) 利き智慧あるもの、是の所説は應に受くべし。聞無く亦智なければ、是を人身にして牛と名く。』

問うて曰く、(二六) 應に「無數億劫、巧に法を説く」と言ふべし、復何を以てか「出だす」と言ふや。答へて曰く、無智の人の中、及び弟子の中に於ては法を説くこと易し、若し多聞利智にして、論議を善くする人の中に於いては法を説くこと難し、若し小智の法師なりせば是の中に退縮す。若し大學多聞なりせば、問難の中に大膽にして欣豫し、一切衆の中に於いて大威徳あり。天會經の中の偈に説くが如し。

『面目齒の光明は、普く大會を照らし、諸天の光を映じ奪つて、種種皆現せず。』

是を以ての故に名けて「無數億劫、巧に法を説く中に、能く出すことを得」と爲す。

【二六】慧あるも多聞なければ、暗中に目あつて物を見るも所見なきが如し。  
【二七】無聞無智なれば人身にして牛と名く。  
【二八】第一九問、巧に法を説くと云はずして、出すといふ理由如何。

# 卷の第六

初品の中の十喻を釋す、

諸法は幻の如く、焰の如く、水中の月の如く、虚空の如く、響の如く、鏡中の像の如く、化の如しと釋了す。

【一】 第一問、諸法もし空にして幻の如くならば、眼耳鼻舌身意の諸識の對境となるは何者なるか。

【二】 諸法は空なりと雖も、亦た應に分別すべし。

是の十喻は、空法を解せんが爲の故なり。問うて曰く、若し一切の諸法は空にして幻の如くならば、何を以ての故に諸法に見るべく、聞くべく、嗅くべく、嘗むべく、觸るべく、識るべき者ありや。若し實に所有なくんば、應に見るべく、乃至識るべきこと有るべからず。復次に、若し無なるを而も妄に見るものならば、何を以てか聲を見、色を聞かざるや。若し皆一等に空にして所有なくんば、何を以てか見るべきと、見るべからざる者とありや。一指の第一の甲なければ、第二の甲も無きが如し。何を以てか第二の甲を見ずして、獨り第一の甲を見るや。是を以ての故に第一の甲は實有なるが故に見るべく、第二の甲は實無なるが故に見るべからざることを知る。答へて曰く、三諸法の相は空なりと雖も亦見るべきと、見るべからざるとを分別するとあり、譬へば幻化せる象、馬及び種種の諸の物の如し。實なること無しと知ると雖も、然も色は見る可く、

諸法は空にして幻の如くならば、何を以ての故に諸法に見るべく、聞くべく、嗅くべく、嘗むべく、觸るべく、識るべき者ありや。若し實に所有なくんば、應に見るべく、乃至識るべきこと有るべからず。復次に、若し無なるを而も妄に見るものならば、何を以てか聲を見、色を聞かざるや。若し皆一等に空にして所有なくんば、何を以てか見るべきと、見るべからざる者とありや。一指の第一の甲なければ、第二の甲も無きが如し。何を以てか第二の甲を見ずして、獨り第一の甲を見るや。是を以ての故に第一の甲は實有なるが故に見るべく、第二の甲は實無なるが故に見るべからざることを知る。答へて曰く、三諸法の相は空なりと雖も亦見るべきと、見るべからざるとを分別するとあり、譬へば幻化せる象、馬及び種種の諸の物の如し。實なること無しと知ると雖も、然も色は見る可く、

聲は聞く可く、六情の相對は相錯亂せず。諸法も亦是の如く、空なりと雖も、而も見る可く、聞く可く、相錯亂せず。徳女經に説くが如し。徳女 佛に白して言さく、「世尊よ、無明の如きは内に有りや不や。」佛の言はく、「不な。」外に有りや不や。」佛の言はく、「不な。」内外に有りや不や。」佛の言はく、「不な。」世尊よ、是の無明は、先世より來るや不や。」佛の言はく、「不な。」此世より後世に至るや不や。」佛の言はく、「不な。」是の無明に生者、滅者ありや不や。」佛の言はく、「不な。」法の定まれる實性ある、是を無明と名づくるや不や。」佛の言はく、「不な」と。爾の時に、徳女復佛に白して言さく、「若し無明は内に無く、外に無く、亦内外に無く、先世より今世に至り、今世より後世に至らず、亦眞實の性なくんば、云何ぞ無明は行に縁たるより、乃ち衆苦集るに至るや。世尊よ、譬へば樹あるが如し。若し根なくんば、云何が莖節枝葉華果を生ずるとを得んや」と。佛の言はく、「諸法の相は空なりと雖も、凡夫は無聞無智の故に、而も中に於て種種の煩惱を生じ、煩惱の因縁は身口意業を作り、業の因縁は後身を作り、身の因縁は苦を受け樂を受く。是の中に實に煩惱を作ると有ること無く、亦身口意の業なく、亦苦樂を受くる者あること無し。譬へば幻師の種種の事を幻作するが如し。汝が意に於て云何。是の幻の所作は内に有りや不や。」答へて言く、「不な。」外に有りや不や。」答へて言く、「不な。」内外に有りや不や。」答へて言く、「不な。」先世より今世に至り、今世より後世に至る

【三】 徳女、佛に無明を問ふに、佛、四句の不可得を以て答へ給ふ。

や不<sup>いな</sup>や。」答<sup>こた</sup>へて言<sup>いは</sup>く、「不<sup>が</sup>な。」「幻<sup>げん</sup>の所作<sup>しよさく</sup>に生<sup>なま</sup>者<sup>しやう</sup>滅<sup>めつ</sup>者<sup>じや</sup>ありや不<sup>いな</sup>や。」答<sup>こた</sup>へて言<sup>いは</sup>く、「不<sup>が</sup>な。」「實<sup>じつ</sup>に一<sup>いつ</sup>法<sup>ぽう</sup>の是<sup>これ</sup>幻<sup>げん</sup>の所作<sup>しよさく</sup>なる有<sup>あ</sup>りや不<sup>いな</sup>や。」答<sup>こた</sup>へて言<sup>いは</sup>く、「不<sup>が</sup>な。」佛<sup>ほとけ</sup>の言<sup>ことば</sup>はよく、「汝<sup>なんぢ</sup>、頗<sup>た</sup>る見<sup>み</sup>、頗<sup>た</sup>る聞<sup>き</sup>くに幻<sup>げん</sup>の所作<sup>しよさく</sup>の伎<sup>ぎ</sup>樂<sup>らく</sup>ありや不<sup>いな</sup>や」と。答<sup>こた</sup>へて言<sup>いは</sup>く、「我<sup>われ</sup>も亦<sup>また</sup>聞<sup>き</sup>き亦<sup>また</sup>見<sup>み</sup>る」と。佛<sup>ほとけ</sup>、徳<sup>とく</sup>女<sup>にょ</sup>に問<sup>と</sup>ひたまはく、「若<sup>も</sup>し幻<sup>げん</sup>は空<sup>くう</sup>にして欺<sup>ご</sup>誑<sup>じやう</sup>無<sup>む</sup>實<sup>じつ</sup>ならば、云<sup>い</sup>何<sup>なに</sup>が幻<sup>げん</sup>より能<sup>あた</sup>く伎<sup>ぎ</sup>樂<sup>らく</sup>を作<sup>な</sup>すや」と。徳<sup>とく</sup>女<sup>にょ</sup>、佛<sup>ほとけ</sup>に白<sup>まを</sup>して言<sup>まを</sup>さく、「世<sup>せ</sup>尊<sup>そん</sup>よ、是<sup>こ</sup>の幻<sup>げん</sup>相<sup>さう</sup>は法<sup>ぽう</sup>爾<sup>に</sup>として根<sup>こん</sup>本<sup>ぽん</sup>なしと雖<sup>い</sup>ち而<sup>しか</sup>も聞<sup>き</sup>見<sup>み</sup>すべし」と。佛<sup>ほとけ</sup>の言<sup>ことば</sup>はよく、「無<sup>む</sup>明<sup>めい</sup>も亦<sup>また</sup>是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>し。内<sup>ない</sup>に有<sup>あ</sup>らず、外<sup>がい</sup>に有<sup>あ</sup>らず、内<sup>ない</sup>外<sup>がい</sup>に有<sup>あ</sup>らず、先<sup>せん</sup>世<sup>ぜ</sup>より今<sup>こん</sup>世<sup>ぜ</sup>に至<sup>いた</sup>り、今<sup>こん</sup>世<sup>ぜ</sup>より後<sup>ご</sup>世<sup>ぜ</sup>に至<sup>いた</sup>らず、亦<sup>また</sup>實<sup>じつ</sup>性<sup>じやう</sup>なく、生<sup>しやう</sup>者<sup>じや</sup>滅<sup>めつ</sup>者<sup>じや</sup>あること無<sup>な</sup>しと雖<sup>い</sup>ち而<sup>しか</sup>も無<sup>む</sup>明<sup>めい</sup>の因<sup>いん</sup>縁<sup>げん</sup>は諸<sup>しよ</sup>行<sup>ぎやう</sup>を生<sup>なま</sup>じ、乃<sup>な</sup>至<sup>いた</sup>衆<sup>しゆ</sup>苦<sup>く</sup>集<sup>じふ</sup>れり。幻<sup>げん</sup>息<sup>そつ</sup>めば幻<sup>げん</sup>の所作<sup>しよさく</sup>も亦<sup>また</sup>息<sup>そつ</sup>むが如<sup>ごと</sup>く、無<sup>む</sup>明<sup>めい</sup>も亦<sup>また</sup>爾<sup>に</sup>なり。無<sup>む</sup>明<sup>めい</sup>盡<sup>じん</sup>くれば行<sup>ぎやう</sup>も亦<sup>また</sup>盡<sup>じん</sup>き、乃<sup>な</sup>至<sup>いた</sup>衆<sup>しゆ</sup>苦<sup>く</sup>の集<sup>じふ</sup>みな盡<sup>じん</sup>く」と。

【四】 焰の如しを釋す。

復<sup>また</sup>た次<sup>つぎ</sup>に、是<sup>こ</sup>の幻<sup>げん</sup>の譬<sup>へい</sup>喩<sup>ゆ</sup>は、衆<sup>しゆ</sup>生<sup>じやう</sup>に示<sup>し</sup>すに、一<sup>いつ</sup>切<sup>せつ</sup>有<sup>いう</sup>爲<sup>ゐ</sup>法<sup>ぽう</sup>は空<sup>くう</sup>にして堅<sup>けん</sup>固<sup>こ</sup>ならざることを以<sup>も</sup>てす。一<sup>いつ</sup>切<sup>せつ</sup>の諸<sup>しよ</sup>行<sup>ぎやう</sup>は幻<sup>げん</sup>の小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>を欺<sup>ご</sup>誑<sup>じやう</sup>するが如<sup>ごと</sup>く、因<sup>いん</sup>縁<sup>げん</sup>に屬<sup>ぞく</sup>すれば自<sup>みづか</sup>ら在<sup>あ</sup>らず、久<sup>ひさ</sup>しく住<sup>ぢゆう</sup>せずと説<sup>と</sup>くが如<sup>ごと</sup>し。是<sup>こ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に諸<sup>しよ</sup>の善<sup>ぜん</sup>薩<sup>さつ</sup>は諸<sup>しよ</sup>法<sup>ぽう</sup>は幻<sup>げん</sup>の如<sup>ごと</sup>くなることを知<sup>し</sup>ると説<sup>と</sup>く。

焰<sup>えん</sup>の如<sup>ごと</sup>しとは、焰<sup>えん</sup>は日<sup>にっ</sup>光<sup>くわう</sup>に風<sup>かぜ</sup>の塵<sup>ちん</sup>を動<sup>うご</sup>かすを以<sup>も</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に、曠<sup>くわう</sup>野<sup>や</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に於<sup>お</sup>ける野<sup>や</sup>馬<sup>ま</sup>の如<sup>ごと</sup>く、無<sup>む</sup>知<sup>ち</sup>の人は初<sup>はつ</sup>めて見<sup>み</sup>て之<sup>これ</sup>を謂<sup>い</sup>つて水<sup>みづ</sup>と爲<sup>な</sup>す。男<sup>おとこ</sup>相<sup>さう</sup>女<sup>にょ</sup>相<sup>さう</sup>も亦<sup>また</sup>是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>く、結<sup>けつ</sup>使<sup>し</sup>、煩<sup>ぼん</sup>惱<sup>なう</sup>の日<sup>にっ</sup>光<sup>くわう</sup>に諸<sup>しよ</sup>行<sup>ぎやう</sup>の塵<sup>ちん</sup>を熱<sup>ねつ</sup>し、邪<sup>じや</sup>憶<sup>おく</sup>念<sup>ねん</sup>の風<sup>かぜ</sup>によりて生<sup>なま</sup>死<sup>じ</sup>曠<sup>くわう</sup>野<sup>や</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に轉<sup>てん</sup>ず。智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>なき者は謂<sup>い</sup>つて一<sup>いつ</sup>相<sup>さう</sup>と爲<sup>な</sup>し、男<sup>おとこ</sup>と爲<sup>な</sup>し女<sup>にょ</sup>と爲<sup>な</sup>す。是<sup>こ</sup>を

焰ほほの如ごとしと名なく。復また次に、無む若し遠とほく焰ほほを見ては想おもつて水みづと爲なせども、近ちかづけば則すなはち水相すゐさうなし。無む智ちの人も亦また是こゝの如ごとく、若もし聖法しやうほふに遠とほざかれは無我むがを知らず、諸法しよほふの空くうを知らず、陰界おんかい・入にふの性空しやうくうの法ほふの中に於おひて、人相にんさう・男相なんさう・女相によさうを生しやうずれども、聖法しやうほふに近ちかづけば、則すなはち諸法しよほふの實相じつさうを知る。是こゝの時とき・虛誑こゝろの種しゆ種じゆの妄想まうさう盡ことく除のぞく。是ゆゑの故ゆゑに諸しよの菩薩ぼさつは、「諸法しよほふは焰ほほの如ごとしと知る」と説とく。六ろく 水中すゐちゆうの月つきの如ごとしとは、月つきは虚空こくうの中に在あり、影かげは水みづに於おひて實法じつほふの相さうを現げんす。月つきは法性ほつしやうの如ごとく、實際じつさきの虚空こくうの中に在あれども、凡人はんじんの心こゝろは水みづの中に我我所ががしよの相さうあつて現げんす。是これを以もつての故ゆゑに「水中すゐちゆうの月つきの如ごとし」と名なく。

復また次に、小兒せうじは水中すゐちゆうの月つきを見て、歡喜くわんぎして取とらんと欲ほつし、大人だいじんは之これを見て則すなはち笑わらふが如ごとく、無智むちの人も亦また是こゝの如ごとく。身見しんけんの故ゆゑに吾我ごがありと見み、實智じつちなきが故ゆゑに種種しゆじゆの法ほふを見み、見已みよつて歡喜くわんぎして、諸相しよさう・男相なんさう・女相によさう等とうを取とらんと欲ほつす。諸しよの道みちを得えたる聖人しやうにんは之これを笑わらふ。偶げに説とくが如ごとく。

【五】 遠く焰を見て想て水となし、近づいて水相なきことを知る。無智の者も亦是の如く、若し聖法に遠ざかれは無我を知らず。

【六】 水中の月の如しを釋す。

【七】 小兒水月を取らんとすれば大人これを笑ふ。

【八】 靜水には月影を見るも、擾水には則ち然らず。

是こゝの人は癡ちにして惑まどへり聖しやうの笑わらふ所ところなり。』

復また次に、(云々) 譬たとへば靜水じやうすゐの中ちゆうには月つきの影かげを見みれども、水みづを擾かきたせば則すなはち見みざるが如ごとく、無明むみやうの心こゝろの靜じやう水すゐの中ちゆうには吾我ごが・嬌慢けうまん・諸しよの結使けつしの影かげを見みれども、實智じつち・慧えの杖つゑもて心水しんすゐを擾かきたせば、則すなはち吾我等ごがとうの諸しよの

結使の影を見ず。是を以ての故に「諸の菩薩は諸法は水中の月の如しと知ると説く。」元虚空の如しとは、但た名のみ有つて實法なし、虚空は見るべきの法に非ざるも、遠く視るが故に、眼光轉じて、標色を見る。諸法も亦是の如く、空にして所有なきも、人は無漏の實智慧に遠かるが故に實相を棄てて、彼我・男女・屋舎・城郭等の種種の雜物を見て心著すること、二〇小兒の青天を仰ぎ視て實色ありと謂ふが如し。人あつて飛び上らんには、極て遠くして見る所なし。遠く視るを以ての故に青色を爲すと謂ふ。諸法も亦是の如し。是を以ての故に「虚空の如し」と説く。

復次に、二二虚空の性は常に清淨なるも、人は謂つて陰瞋にして、不淨なりと爲すが如く、諸法も亦た是の如し。性は常に清淨なれども、淫欲・瞋恚等の瞋の故に、人謂つて不淨なりと爲す。偈に説くが如し。

【九】 虚空の如しを釋す  
 【一〇】 小兒の青天を視て實色ありと謂ふが如し。  
 【一一】 虚空の性は常に清淨なれども、陰瞋を以て人は不淨となす。諸法の性は常に淨なれども、瞋見を以て不淨となす。

夏月の天は雷電して雨り、陰雲覆隠して清淨ならざるが如く、凡夫の無智も亦是の如く、種種の煩惱常に心を覆ふ。

冬天の日の時に一たび出づるも、常に昏氣にして雪陰瞋を爲すが如く、初果と第二道とを得と雖も、猶ほ欲染の爲に蔽はる。

若くは春天の日の出でんと欲する時、陰雲の爲に覆隠せらるるが如く、欲染を離ると雖も第三果は、餘殘の癡慢の猶ほ心を覆ふことあり。

若し秋日の雲陸なきが如く、亦大海水の清淨なるが如く、所作已に辨せる無漏心の〔阿〕羅漢は、是の如く清淨なることを得。」

復次に、(三) 虚空は初なく、中なく、後なし。諸法も亦是の如し。

復た次に、摩訶衍〔那〕の中に、佛、須菩提に語りたまふが如くんば、「虚空は前世なく、また中世なく、また後世なし。諸法も亦是の如し」と。彼の經を此の中に應に廣く説くべし。是の故に「諸法は虚空の如し」と説く。

問うて曰く、(三) 虚空は實有の法なり。何となれば若し虚空に實法なければ、若くは擧、若くは下、若くは來、若くは往、若くは屈、若くは申、若くは出、若くは入等の所作あり。應に有ると無くんば、動する處なかるべきを以てなり。答へて曰く、(四) 若し虚空の法にして實有ならば、虚空は應に住する處あるべし。何となれば住處なければ則ち無法なるを以てなり。若し虚空は孔中に在つて住し、是を虚空と爲さば虚空の中に在つて住す、是を以ての故に孔中に住すべからず。若し實中に在つて住せば是れ實にして、空にあらず。則ち住することを得ず、「そは」受くる所なきを以てなり。

復次に、(五) 汝は住處は是れ虚空なりと言ふも、石壁の實中には住處あること無きが如く、若し住處なければ則ち虚空なし。虚空の住處なきを以ての故に虚空なし。

【三】 虚空には初中後なし。

【三】 第二問、虚空の實在なる所以を論じて、虚空の虚なる説を破斥す。

【四】 虚空は實有の法にあらずる所以を説く。

【五】 虚空は住處なし。

復次に、二天無相の故に虚空なし。諸法は各各相あり、相あるが故に法あることを知る。地の堅相、水の濕相、火の熱相、風の動相、識の識相、慧の解相、世間の生死の相、涅槃の永滅の相の如し、是の虚空は相なきが故に無なり。

問うて曰く、虚空には相あり、汝知らざるが故に無しと言ふ。無色の處は是れ虚空の相なり。答へて曰く、爾らず、無色は是を彼色と名く、更に異なる法なし。燈の滅するが如し。是を以ての故

に虚空の相は有ること無し。復次に是の虚空の法は無なり、何となれば汝は色に囚つての故に、無色の處を以て、是れ虚空の相なりと云ふ。若し爾らば色の未だ生ぜざる時は、則ち虚空の相無ければなり。復次に汝は「一八」色

は是れ無常の法、虚空は是れ有常の法なり」と謂へり。色の未だ有らざる時、應に先づ虚空の法あるべし、「そは」有常なるを以ての故に。若し色未だ有らずんば即ち無色の處なし。若し無色の處なければ、即ち虚空の相な

し。若し相なければ即ち法なし。是を以ての故に虚空は但だ名のみ有つて實なし。諸法も亦是の如く、但だ假名のみ有つて實なし。是を以ての故に諸の菩薩は諸法は虚空の如しと知る。

【二九】響の如しとは、若しは深山狭谷の中、若しは深き絶澗の中、若しは空なる大舎の中に於いて、若

くは語聲、若くは打聲の、聲に從つて聲あると名けて響と爲す。無智の人は「人あり、語聲を爲す」と

- 【二二】 空虚は無相なり。
- 【二三】 第三問、虚空に相ある旨を説き、以て其の實在を主張す。
- 【二四】 虚空は無常にして但名のみにあり。
- 【二五】 響の如しを釋す。

謂ふ。智者は心に念ずらく、「是聲は人の作すと無し、但だ聲の觸るるを以ての故に、名けて響を爲すのみ」と。響事は空にして能く耳根を誑かす。人の語らんと欲する時の如きは口中の風を、曼陀那と名く。還つて入つて、齋に至り、齋に觸れて響を出す。響出る時七處に觸れて退く、是を語言と名く。仍に説くが如し。

『風を曼陀那と名く。齋に觸れて上り去る、是の風七處に觸る。〔七處とは〕項と及び斷と齒と唇と、舌と咽と及び胸となり、是の中より語言生ず。』

愚人は此を解せず、惑著して瞋癡を起し、中人は智慧あつて、瞋らず亦著せず、亦復愚癡ならず、但だ諸法の相の、曲直及び屈申、去來に隨つて語言を現はす、都て作者あること無し。

是の事は是れ幻なりとせんや、機關木人とせんや、是れ夢中の事とせんや、我熱氣に悶ゆとせんや、是れ有りとせんや、是れ無しとせんや。是の事誰か能く知る。是れ骨人筋纏して、能く言語の聲を作す、鏝せる金を水に投ずるが如し。』

是を以ての故に、諸の菩薩は、諸法は響の如しと知る」と言ふ。

三 毘闍婆城の如しとは、日の初めて出る時、城門・樓櫓・宮殿に行人の出入するを見る、日轉た高ければ轉た滅す。此の城は但眼に見るべく、而も實あること無し、是を毘闍婆城と名く。人あり、初

- 【一】 聲は七處に觸れて出づ。
- 【二】 曼陀那(マントナ)
- 【三】 毘闍婆城の如しを釋す。

より鞬闍婆城を見ず。晨朝に東に向つて之を見、意に實と謂ひ、樂んで疾く行き、之に趣くに轉た近  
 ば轉た失し、日高ければ轉た滅す。飢渴して悶極つて熱氣を見れば、野馬の如く、之を謂つて水と爲  
 し、疾く走り之に趣くに、轉た近ければ轉た滅し、疲極り困厄す。窮山狭谷の中に至り、大に喚き啼哭  
 す。響あつて應ずるを聞き、居民ありと謂ひ、之を求むるに疲極り見る所なし。思惟して自ら悟り、  
 渴を願ふの心息む。無智の人も亦是の如く、空なる陰・界・入の中に、吾我及び諸法を見、婬瞋の心に  
 著して、四方に狂走し、樂を求めて自ら滿さんとし、顛倒し欺誑して、窮極懊惱す。若し智慧を以て  
 我なく實法なしと知らば、此の時は顛倒の願息む。復次に、鞬闍婆城は、  
 城に非ず、人の心に想ふて城と爲すのみ。凡夫も亦是の如く、身に非るを  
 想ふて身と爲し、心に非るを想ふて心と爲すなり。

【三】 第四問、一の譬喩にて足  
 り且つ充分なり、然るを何ぞ  
 多くの譬喩を擧ぐるや。

問うて曰く 一事もて知るべし、何ぞ多くの喩を以てするや。答へて曰く、我先に已に答ふ、是  
 の摩訶衍「那」は大海の水の如く、一切の法は盡く摩訶衍「那」に攝す、因縁多きが故に譬喩多きも答な  
 し。復次に、是の菩薩は甚深なる利智の故に、種種の法門、種種の因縁、種種の喩もて諸法を壞す。  
 人をして解せしめんが爲の故に、應に多くの喩を引くべし。

復次に、一切の聲聞法の中には鞬闍婆城の喩なく、種種の餘の無常の喩あり。色は聚沫の如く、受  
 は泡の如く、想は野馬の如く、行は芭蕉の如く、識は幻及び幻網の如しといふ、經の中の空の譬喩

に、是の鞆闍婆城を以てするも、喩異なるが故に此の中に説けり。

問うて曰く、(二四) 聲聞法の中には城を以て身に喩ふ。此の中に何を以てか、鞆闍婆城の喩を説くや。答へて曰く、聲聞法の中には、城を衆縁の實有なるに喩ふ。但だ城は是れ假名のみ、鞆闍婆城は衆縁も亦無にして、旋火輪の如く、但だ人の目を惑はす。聲聞法の中には、吾我を破せんが爲の故に城を以て喩と爲す。此の中の菩薩は利根にして、深く諸法の空の中に入るが故に、鞆闍婆城を以て喩と爲す。是を以ての故に「鞆闍婆城の如し」と説く。

(二五) 夢の如しとは、夢中は實事なく、「而も」之を實ありと謂ひ、覺め已つて無なるを知り、還つて自ら笑ふが如し。人も亦是の如く、諸の結使の眠の中には、實は無なれども而も著す、道を得て覺むる時は、乃ち實なしと知つて亦復自ら笑ふ。是を以ての故に「夢の如し」と言ふ。

復次に、夢は眠力の故に法無きを而も見る。人も亦是の如く、無明の眠力の故に、種種無なれども而も有りとする。謂ゆる我我所・男女等なり。

復次に、夢中には、喜ぶ事なきに而も喜び、瞋る事なきに而も瞋り、怖るる事なきに而も怖る。三界の衆生も亦是の如く、無明の眠の故に瞋るべからざるに而も瞋り、喜ぶべからざるに而も喜び、怖るべからざるに而も怖るるなり。

【二四】 第五問、小乗教には城を以て身に比す、然るを今この經中に、鞆闍婆城の喩を説くは何故なるか。  
【二五】 夢の如しを釋す。

復次に 三六の 夢に五種あり、若くは身中調はず、若くは熱氣多ければ、則ち多く夢に火を見、黄なるを見、赤きを見る。若し冷氣多ければ、則ち多く水を見、白きを見る。若し風氣多ければ、則ち多く飛ぶことを見、黒きを見る。又た復た聞見する所の事を多く思惟し念ふが故に則ち夢を見る。或は天の夢を興へて未來の事を知らしめんと欲するが故に「夢を見る」。是の五種の夢は、皆實事なくして而も妄に見るなり。人も亦是の如く、五道の中の衆生は、三身見の力の因縁の故に四種の我を見る。「謂く」色陰は是れ我、色は是れ我所、我中の色、色中の我なり、色の如く受想行識も亦た是の如し。四五の二十あり。得道の實智慧もて覺め已れば實なきことを知る。

問うて曰く、三六の 夢は實なしと言ふべからず、何となれば識心の因縁を得て使も夢中の識を生じ、種種の縁あればなり。若し是の縁なくんば云何が識を生ぜんや。答へて曰く、無にして也た見るべからざるを而も見る、夢中に人の頭に角あるを見、或は夢に身の虚空に飛ぶを見るも、人は實に角なく、身も亦飛ばざるなり。是故に實なし。問うて曰く、實に人に頭あり、餘處に亦實に角あり。心惑ふを以ての故に、人の頭に角あるを見る。實に虚空あり、亦實に飛ぶ者あり、心惑ふを以ての故に自ら身飛ぶと見るも、實なきには非るなり。答へて曰く、實に人に頭ありと雖も、實に角ありと雖

【一】 五種の夢を説く。  
 【二】 身見とは五種假相合の一個の身心をば、常恒眞實の我なりと執するをいふ。即ち小我に著する見解なり。  
 【三】 第六問、夢は實なしとの主眼を釋す。  
 【四】 第七問、人に頭あり、他物に角あり、人は心に惑ふ故に人の頭に角ありと見るにあらずや。

も、但だ人の頭に角を生ず〔と見〕るは、是れ妄見なり。

問うて曰く、三〇世界は廣大なり先世の因縁も種種同じからず。或は餘國には人頭に角を生じ、或は

一手一足なるもの有らん、一尺の人あらん、九尺の人あらん。人に角ある、何の恠しむ所ぞ。答へて

曰く、若し餘國の人に角あるは爾るべし、但だ夢に此の國の識る所の人に、角ありと見るは則ち得べ

からざるなり。復た次に、若し人夢に虚空の邊と方の邊と時の邊とを見れば、是の事云何が實あらん。

何の處にか虚空なく方なく時なけん。是れを以ての故に夢中には、無なる

を而も有と見る。汝は先に縁なければ、云何が識を生せんと言へり。五塵

の縁なしと雖も、自ら思惟するの念力轉するが故に法縁生ず。若し一人、

二頭ありと言はば、語に因つて想を生ず。夢中に無なるを而も有と見る

も、亦復是の如く、諸法も亦爾なり。諸法は無なりと雖も而も見るべく、聞くべく、知るべきなり。

偈に説くが如し。

『夢の如く幻の如く、鞞闍婆の如く、一切の諸法も、亦復是の如し。』

是を以ての故に「諸の菩薩は、諸法を夢の如しと知る」と説く。

三 影の如しとは、影は但だ見る可くして捉ふる可らず。諸法も亦た是の如く、眼情等の見聞覺知は實に不可得なり、偈に説くが如し。

【三〇】 第八問、廣大なる世界には、頭に角ある人あるやも計り難きにあらずや。  
【三一】 影の如しを釋す。

『是の實智慧は、四邊捉へ匡し、大火聚の如く、亦觸る可らず。法は受く可らず、亦受くるに應せず。』

復次に、影の如きは、光映するときは則ち現じ、映せざるときは則ち無し。諸の結〔使〕煩惱、正見の光を遮れば、則ち我相・法相の影あり。

復次に、影の如きは、人去れば則ち去り、人動けば則ち動き、人住すれば則ち住す。善惡業の影も亦是の如く、後世に去るときは亦た去り、今世に住する時は亦た住し、報斷せざるが故に、罪福熟する時は則ち出づ。偈に説くが如し。

『空中にも亦逐ひ去り、山石の中にも亦た逐ひ、地底にも亦た隨ひ去り、海水の中にも亦た入る、處處に常に隨ひ逐うて、業の影は相離れざるなり。』

是を以ての故に「諸法は影の如し」と説く。

復次に、影の空無にして、實を求むるに得べからざるが如く、一切の法も亦た是の如く、空にして實あること無し。

問うて曰く、影は空にして、實あること無しと云ふも、是の事は然らず、何となれば阿毗曇に「云何が色入と名くるや、青・黄・赤・白・黒・縹・紫・光明・影等及び身業の三種の作色、是を可見の色入と名

【三】 影の人に隨つて動止するが如く、善惡の影も亦た然り。  
【三】 第九問、影の空無なる證を難す。

く」と説くを以てなり。汝云何が無なりと言ふや。復次に、實に影あり、因縁あるが故に。因を樹と爲し、縁を明と爲し、是の二事合して影生ず。云何が無しと言ふや。若し影無くんば、餘法の因縁ある者も亦た皆應に無かるべし。復次に、是の影の色は見るべし。長短・大小・麤細・曲直の形動けば影も亦た動く。是の事は皆見るべし。是を以ての故に應に有なるべし。答へて曰く影は實に空無なり。汝が言ふ阿毗曇の中の説は、是れ阿毗曇の義を釋する人の作す所の説なり。一種の法門の人、其の意を體せずして執して以て實と爲す。〔三〕轉婆娑の中に説くが如きは、「微塵の至つて細なるは破す可らず、焼く可らず、是れ則ち常有なり。復た、三世の中に有る法は、未來の中より出でて、現在に至り、現在より過去に入つて失ふ所なし。是を則ち常と爲す」と。また言はく、「諸の有爲の法は、新新に生滅して住せず」と。若し爾れば是れ則ち斷滅の相を爲す。何となれば先には有にして、今は無なるを以てなり。是の如き等の種種の異説は佛語に違背す、此を以て證と爲す可らず。影はいま色法に異なる、色法の生ずるには、必ず香・味・觸等あり。影は則ち耐らす、是れ有に非るが爲めなり。瓶の如きは二根〔これを〕知る、眼根と身根となり。影もし有ならば亦た應に二根〔これを〕知るべし。而も是の事なし。是を以ての故に影は實物あるに非ず。但た是れ眼を誑する法のみ。〔三〕火燄を捉ふるが如し。疾く轉すれば輪を成すも實に非ず。若

【四】此處に引證せる『阿毘達磨論』の説とは、彼の一切有部宗にて主張する「三世實有、法體恒有」の説とて、物質及び精神の實體を七十五に分類し、其の常恒不滅を高唱する説なり。

【三】旋火輪の譬。

し影是れ「實」有の物ならば、應に破すべく滅すべし。若し形滅せざれば、影は終に壞せず、是を以ての故に空なり。復次に、影は形に屬し、自ら存在にあらざるが故に空なり、空なりと雖も而も心に眼を見を生ず。是を以ての故に「諸法は影の如し」と説く。

三

鏡中の像の如しとは、鏡中の像の如きは鏡の作にも非ず、面の作にも非ず、鏡を執する者の作にも非ず、亦た自然の作にも非ず、亦た因縁なきに非ず。何を以てか鏡の作に非ざる。若し面未だ鏡に到らざれば則ち像なし、是の故に鏡の作に非ず。何を以てか面の作に非ざる。鏡なければ則ち像なし。何を以てか鏡を執する者の作に非ざる。鏡なく面なければ則ち像なし。何を以てか自然の作に非ざる。若し未だ鏡あらず、未だ面あざれば則ち像なし。像は鏡を待ち面を待つて然る後に有るなり、是を以ての故に自然の作に非ず。何を以てか因縁なきに非るや、若し因縁なければ、應に常有なるべし。若し常有ならば、若し鏡を除去面を除くも、亦た應に自ら出づべし、是を以ての故に因縁なきに非ず。諸法も亦た是の如く、自作に非ず、彼作に非ず、共作にも非ず、因縁なきにも非ざるなり。云何が自作に非ざる。我は得べからざるが故に、一切の因より生ずるの法は自ら存在らざるが故に、諸法は因縁に屬するが故に、是を以て自作に非ず。亦は他作に非ずとは、自ら無なるが故に、他も亦た無なり。若し他作ならば則ち罪福の力を失せん。他作に二種あり。若くは善、若くは不善「これなり」。若し善ならば應に一切の樂を與ふべく、若

【三】「諸法は鏡中の像の如し」を釋す。

不善ならば應に一切の苦を興ふべし。若し苦樂雜らば、何の因縁を以ての故に樂を興へ、何の因縁を以ての故に苦を興ふるや。若し其ならば二の過あるが故に。自過と他過となり。若し因縁無くして苦樂を生ぜば、人は應に常に樂にして、一切の苦を離るべし。若し因縁なければ人は樂の因を作り、苦の因を除くべからず。一切の諸法は必ず因縁あり、愚癡の故に知らざるなり。譬へば人の木より火を求め、地より水を求め、扇より風を求むるが如し。是の如き等の種種、各の因縁あり。是の苦樂和合の因縁は、先世の業因より生ず。今世の若しは好行、若しは邪行の縁は、是より苦樂を得、是の苦樂種種の因縁は、實を以て之を求むるに、人の作ることも無く、人の受くることも無し。五衆の作を空し、五衆の受を空す。無智の人は樂を得れば姪心に愛著し、苦を得れば瞋恚を生ず。是の樂滅する時は、更に求めて得んと欲す。小兒の鏡中の像を見て、心に樂しみ愛著して己を失ひ、鏡を破つて求索するが如し。智人は之を笑ふ。樂を失つて更に求むるも、亦復た是の如く、亦道を得たる聖人の爲に笑はる。是を以ての故に、「諸法は鏡中の像の如し」と説く。復次に、鏡像の如きは實に空にして、不生不滅なれども、人の眼を誑惑す。一切諸法も亦復た是の如く、空にして實ならず、生ぜず滅せざれども、凡夫人の眼を誑惑す。

問うて曰く、鏡中の像は因縁より生ず。面あり、鏡あり、鏡を持つの人あり、明あり、是の事

【三七】 小兒の鏡を破つて像を求むるの譬。  
【三六】 第一〇問、鏡像の空にして不生不滅なる理由如何。

和合するが故に像生ず。是の像に因つて憂喜を生じ、亦は因と作り、亦は果と作る。云何が實に空にして、生せず滅せずと言ふや。答へて曰はく、因縁より生じて、自ら存らざるが故に空なり。若し法實有ならば、是は因縁より生ずべからず。何となれば若し因縁の中に、先より有ならば、因縁は用ふる所なく、若し因縁の中に先に無ければ、因縁も亦た用ふる所なきを以てなり。譬へば乳の中に若し先より酪あらば、是の乳は酪の因に非ざるが如し、酪は先より有るが故なり。若し先に酪なければ水中に酪なきが如く、是の乳も亦た因に非ず。若し因なくして酪あらば、何を以てか水中に酪を生ぜざるや。若し乳は是れ酪の因縁なりとせば、乳も亦自ら存らざる、亦た因縁より生ず。乳は牛に従つて有り、牛は水草に従つて有り。是の如く、無邊に皆因縁あり、是を以ての故に因縁の中に、果して有りと言ふことを得ず、無しと言ふことを得ず、有無と言ふことを得ず、有に非ず、無に非ずと言ふことを得ず。諸法は因縁より生じて自性なきこと、鏡中の像の如し。偈に説くが如し。

『若し法因縁生ならば、是の法性は實に空なり。若し此の法空ならんずんば、因縁によつて有なるにあらず、

譬へば鏡中の像の如く、鏡に非ず亦た面に非ず、亦た鏡を持つ人に非ず、自に非ず無因に非ず。

有に非ず亦無に非ず、亦復た有無に非ず、此の語も亦受けず、是の如きを中道と名く。』  
是を以ての故に、「諸法は鏡中の像の如し」と説く。

(四〇) 化の如しとは、十四の變化心あり。初禪に二つ、欲界と初禪となり。二禪に三つ、欲界と初禪と二禪となり。三禪に四つ、欲界と初禪と二禪と三禪となり。四禪に五つ、欲界と初禪と二禪と三禪と四禪となり。是の十四の變化心は八種の變化を作す。一には能く小と作つて、乃ち微塵に至る。二には能く大と作つて、乃ち虚空に滿つるに至る。三には能く輕と作つて、乃ち鴻毛の如きに至る。四には能く自在と作つて、能く大を以て小と爲し、長を以て短と爲す。是の如く種種あり。五には能く主力あり。六には能く遠きに到る。七には能く地を動かす。八には意の欲する所に隨つて盡く能く得。〔即ち〕一身を能く多と作し、多身を能く一と作し、石壁皆過ぎ、水を履み、虚を踏み、手に日月を捫り、能く四大を轉じ、地を水と作し、水を地と作し、火を風と作し、風を火と作し、石を金と作し、金を石と作す。是の變化に復た四種あり。欲界の藥草・寶物・幻術は能く諸物を變化す。諸の神通ある人は神力の故に能く諸物を變化す。天・龍・鬼神の輩は生報の力を得るが故に能く諸物を變化す。色界の生報は定を修する力の故に能く諸物を變化す。化人の生老病死なく、苦なく樂なく、亦人に異なつて生ずるが如し。是を以ての故に、空にして實なし。一切諸法も亦是の如く、皆生住滅なし。是を以ての故に、「諸法は化の如し」と説く。

【四〇】「諸法は化の如し」を釋するに、十四の變化心を擧ぐ。

復次に、<sup>四二</sup>化生は先づ定まれる物なく、但た心生するを以て便ち所作あり、皆實あることなし。

人身も亦是の如く、本所因なし。但だ先世の心に從つて今世の身を生ず、皆實あること無し。是を以

ての故に、「諸法は化の如し」と説く。變化の如きは、心滅すれば則ち化滅す。諸法も亦是の如く、

因縁滅すれば、果も亦滅して自ら存らず。化事の如きは、實に空なりと雖も、能く衆生をして、憂

苦・瞋恚・喜樂・癡惑を生ぜしむ。諸法も亦是の如く、空にして實なしと雖も、能く衆生をして歡喜・瞋

恚・憂怖等を起さしむ。是を以ての故に、「諸法は化の如し」と説く。復次に、<sup>四三</sup>變化生法の初なく、

中なく、後なきが如く、諸法も亦是の如し。變化生ずる時、從來する所

なく、滅するも亦所去なきが如く、諸法も亦是の如し。復次に、變化の想

の清淨なるが如く、虚空の染著する所なく、罪福の爲に汚されざるが如

く、諸法も亦是の如し。法性の如なるが如く、眞際自然に常に淨なる

が如し。譬へば閻浮提の四大河の一河に五百の小河あつて屬し、是の水は種種に不淨なれども、大海

水の中に入れば、皆清淨なるが如し。

問うて曰く、<sup>四四</sup>變化の事は空なりと言ふべからず。何となれば變化の心も亦た定を修するより得、

此の心より種種の變化を作せばなり。若くは人、若くは法は、是の化に因あり果あり、云何が空なら

んや。答へて曰く、「影の如し」の中に已に答へたるも、今當に更に答ふべし。此の因縁は有なりと雖

【四二】 化生は本定物なし。

【四三】 諸法は化生法の初中後なきが如し。

【四四】 第一一問、變化の事は空と言ふべからずと難す。

も、變化の果は空なり。口言の所有なきが如し。心は口言を生ずと雖も、心口を以て有とす可らざるが故に、言ふ所は所有なけれども便ちこれ有なり。若し第二頭第二手ありと言はば、心口より生ずと雖も、頭あり手ありとは言ふ可らず。佛の説きたまふが如きは、無生を觀るに有生に從つて脱することを得、無爲に依ることは有爲に從つて脱することを得。無生の法を觀するに無なりと雖も、而も因縁と作るべし。無爲も亦た爾なり」と。變化は空なりと雖も、亦た能く心の因縁より生ず。譬へば幻・焰等の九の譬喩の如く、無なりと雖も能く種種の心を生ず。

復次に、化事は六因四縁の中に於いて、求むるに得べからず、是の中に六因四縁相應せざるが故に空なり。復次に、空は見えざるを以て空と爲さず、其の實用なきを以ての故に空と言ふ。是を以ての故に「諸法は化の如し」と言ふ。

問きて曰く、(聖)若し諸法の十の譬喩は、皆空にして異なる無しとせば、何を以てか但だ十事を以て喩と爲し、山河石壁等を以て喩と爲さざるや。答へて曰く、諸法は空なりと雖も、而も分別あり。「乃ち解し難きの空あり、解し易きの空あり。今は解し易きの空を以て、解し難きの空に喩ふるなり。復た次に、諸法に二種あり。心の著する處あり。心の著せざる處あり。心の著せざる處を以て、心の著する處を解す。

【四時】 變化は空なりと雖も亦た能く因縁より生ず。

【四時】 第一二問、空を明すに但十事を以て譬喩とせる理由如何。

【四六】問うて曰く、此の十の譬喩は何を以てか是れ心の著せざる處なるを答へて曰く、是の十事は久しく住せず、生じ易く滅し易し、是を以ての故に是れ心の著せざる處なり。復た次に、人あり十の喩は耳目を誑惑する法なりと知るも、諸法の空なることを知らざるが故に、此を以て諸法に喩ふ。若し人あり、十の譬喩の中に於て心著して解せず、種種に難論し、此を以て有と爲さば、是の十の譬喩は其の用を爲さず、應に更に爲に餘の法門を説くべし。

【四七】問うて曰く、若し諸法は都て空にして生ぜず滅せずんば、是の十の譬喩等の種種の譬喩、種種の因縁の論議は、我已に悉く知つて空と爲す。

若し諸法は都て空ならば是の喩を説くべからず。若し是の喩を説かば不空と爲す。

答へて曰く、我は空を説いて、諸法の有を破す。今説く所は、若し有と説かば、先に已に破す、若し無と説くも難すべからず。譬へば執事の比丘の高聲に、手を舉げて唱へて、衆皆寂靜なれしと言ふが如し。是れ聲を以て聲を遮らんが爲にして、聲を求むるには非ざるなり。是を以ての故に諸法を説くと雖も、空にして不生不滅なり。衆生を憫念するが故に説くと雖も、有には非るなり。是を以ての故に、諸法は化の如しと説く。

【四六】 第一三問、此の十の譬は心の著せざる處なりといふ理由如何  
 【四七】 第十四問、若し諸法空ならんば、譬喩を擧げて説くこと能はざるにあらずや。

礙ること無く、畏るる所無きことを得。

論

種種の衆の界入の因縁の中に心礙ること無く、盡くる無く、滅する無し、是を「礙ることなく、畏るる所なし」と爲す。

問うて曰く、先に説くが如きは、「諸の菩薩は、無量の衆の中に於て畏るる所なし」と。

今何を以てか更に「礙るとなく、畏るる所なし」と説くや。答へて曰く、先には畏る所なきの因を説けり、今は畏るる所なきの果を説く。諸の大衆乃至菩薩衆の中に於て、法を説けども盡ると無く、論議すれども滅するとなく、心に疑難なし。已に礙るとなく、畏るる所なきを得るが故なり。復次に、先に無量の衆の中に於て畏るる所なきことを説くが如きは、何等の力を以ての故に畏ること無きかを知らず。是を以ての故に更に畏るる所なきは、礙るとなきの力を得るが故なることを説くなり。

問うて曰く、吾も若し諸の菩薩に亦礙るとなく畏るる所なきと有らば、佛と菩薩と何等の異なること有りや。答へて曰く、我先に説くが如く、諸の菩薩は自ら無所畏の力あるが故に、諸法の中に於て畏るる所なし。佛の無所畏にはあらず、復次に、無礙の法に二種あり、一には一切處、二には非一切處なり。非一切處とは、人、一の經書乃至百千の經書の中に、無礙なれば、若しは一衆に入り、若しは

【四八】 無礙無所畏を釋す。

【四九】 第一五問、先に已に菩薩の無所畏を説く、今何ぞ重ねて無礙無所畏と言ふや。

【五〇】 第一六問、若し菩薩も無礙無所畏ならば、佛と菩薩と何の異なる所ありや。

【五一】 二種の無礙法。

百千衆の中に入るも畏るる所なきが如く、諸の菩薩も亦た是の如し。自らの智慧の中に無礙なり、佛の智慧には非ず。佛の如きは針を放ちたまふ時、五百の阿羅漢及び彌勒等の諸の菩薩も皆取ると能はず。諸の菩薩も亦た是の如く、自力の中には無礙なるも、佛の智慧方の中には礙あり。是を以ての故に「諸の菩薩は礙るとなく、畏るる所なきことを得」と説く。

【釋】 悉く衆生の心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脱す。

問うて曰く、云何が悉く衆生の心行を知るや。答へて曰く、衆生の心の種種なる法の中の處處の行を知ると、日光の遍ねく照すが如し。菩薩は悉く衆生の心行の趣向する所あるを知つて、之に教へて言く、「一切衆生の趣くに二種あり。一には心常に樂を求め、二には智慧分別して能く好惡を知る。汝、著心に隨ふこと莫く、常に智慧に隨ふべく、常に自ら心を責むべし。汝、無數劫來諸の雜業を集めて厭足すること無く、但だ世樂を馳せ逐ふて、苦の爲なることを覺らず。汝、世間を見ずや、樂を貪れば患を致す。五道に生を受くるは、昔心の爲す所なり、誰か爾らしむる者ならんや。汝、狂象の蹄踏殘害して拘制する所なきが如くんば、誰か汝を調ふる者ならん。若し善く調ふることを得ば、則ち世の患を離れん。當に知るべし、胎に處つては不淨にして、苦厄なると猶は地獄の如く、既に生れて世に在れば

【釋】 第一七問、菩薩は如何にして衆生の心行の趣く所を知るや。

れん。當に知るべし、胎に處つては不淨にして、苦厄なると猶は地獄の如く、既に生れて世に在れば

老病・憂悲・萬端なり。若し天上に生せば當に復た墮落すべし。三界は安きこと無し、汝何を以てか樂に著するやと。是の如く種種に其の心は誓つて汝に隨はずと呵責す。是を菩薩の衆生の心行を知ると爲す。

問うて曰く、云何が微妙の慧を以て之を度脱すと名くるや。是の中に云何が微妙の慧と名け、云何が麤なる智慧と名くるや。答へて曰く、世界の巧なる慧は、是を麤なる智慧と名け、施と戒と定とを行するは、是を微妙の慧と名く。復次に、布施の智は是を麤なる慧と爲し、戒定の智は是を微妙の慧と名く。復次に、施・戒の智は是を麤慧と爲し、禪定の智は是を微妙の慧と名く。復次に、禪定の智は是を麤慧と爲し、無猗の禪は是を微妙の慧と名く。復次に、諸法の相を取るは是を麤慧と爲し、諸法の相に於て取らず捨てざるは、是を微妙の慧と名く。復次に、無明等の諸の煩惱を破つて、諸法の相を得るは是を麤慧と名け、如法の相に入る者は、譬へば眞金の損せず失せざるが如く、亦た金剛の破れず壞せざるが如く、又虚空の染むこと無く、著すること無きが如き、是を微妙の慧と名く。是の如き等の無量の微妙の慧は、菩薩の自ら得て復た衆生に教ゆるところなり。是を以ての故に、「諸の菩薩は、悉く衆生の心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脱す」と説く。

【三】 第一八問、智慧の麤細の區別如何。

【四】 意に聖礙なし。

【四】 云何が意に聖礙なしと名くるや。 善菩薩は一切の怨親・非怨・非親の人の中に於て、等うして心

無礙なり。 復次に、一切世界の衆生の中より、若くは來つて侵害すれども心に悲り恨まず、若くは

種種恭敬すれども亦た喜悅せず、偈に説くが如し。

『諸佛菩薩をも、心に愛著せず、外道惡人をも、心に憎恚せず。』

是の如きの清淨の心を名けて、意に聖礙なしと爲す。 復次に、諸法の中

に於て、心、無礙なり。

問うて曰く、 是の菩薩は未だ佛道を得ず、未だ一切智を得ず、云何を

諸法の中に於て、心無礙なるや。 答へて曰く、 是の菩薩は無量の清淨の智

慧を得るが故に、諸法の中に於て、心無礙なり。

問うて曰く、 諸の菩薩は、未だ佛道を得ざるが故に無量の智あるべ

からず。 殘結あるが故に清淨の智あるべからず。 答へて曰く、 是の諸の菩薩は、三界の中の結業の肉

身には非ず、皆法身の自由を得、老病死を過ぐれども、衆生を憐愍するが故に、世界の中に在つて行

じて佛土を莊嚴し、衆生を教化すると爲す。 已に自由を得、佛と成らんと欲すれば能く成る。

問うて曰く、 (五) 法身の菩薩の如きは則ち佛と異なること無し。 何を以てか名けて菩薩と爲し、何を

【五】 意に聖礙なしとの意義。  
【五】 第一九問、菩薩は未だ一切智を得ず、然るを如何ぞ心無礙なるを得ん。

【六】 第二〇問、菩薩は佛道を得ざれば、無量の智慧なく、殘結あれば、清淨の智ある可らざるに非ずや。

【七】 第二一問、法身の菩薩は佛と異なるに、而も佛を憐と法を聽くは例彼なるか。

以てか佛を禮し法を聽くや。若し佛と異ならば云何ぞ無量の清淨智あらん。答へて曰く、是の菩薩は法身と爲りて、老病死なしと雖も、佛と小しく異なると。譬へば月の十四日の如し。衆人は「若しくは満か、若しくは不滿か」との疑ひを生ず。菩薩も亦是の如く、能く佛と作りて、能く法を説くと雖も、然も未だ實に佛と作らず。佛は月の十五日の満足して疑ひ無きが如し。復次に、無量の清淨に二種あり。(五) 一には實に量あるも、量る能はざる者に於いて之を無量と謂ふ。譬へば海水の如く、恒河の沙等の如き、人の量ること能はざるを名けて無量と爲す。諸佛菩薩に於いて無量と爲すに非ず。菩薩の無量の清淨智も、亦復た是の如く、諸の天・人・及び聲聞・辟支佛に於いては、量ること能はざる所なれば、名けて無量の智と爲す。菩薩は無生道を得る時、諸の結使を斷するが故に清淨の智を得るなり。

問うて曰く 答 若し爾の時、已に諸の結を斷せば、佛と成る時、復何をか斷する所とするや。答へて曰く、是の清淨に二種あり。一には佛を得るの時、餘の結を都て盡くして實の清淨を得、二には菩薩の肉身を捨てて法身を得る時、諸の結を斷じて清淨なり。譬へば一燈の能く諸の暗を除いて、所作あることを得れども、更に大燈あれば倍復た明了なるが如く、佛及び菩薩の諸の結使を斷するも亦復是の如し。菩薩の斷すべき所は、已に斷すと曰ふと雖も、佛の斷すべき所に於ては未だ盡くさずと

【天】 佛は十五夜の月の如く、菩薩は十四日の月の如し。  
 【五】 若薩の無量智は實は有量智なり。  
 【六】 第二二問、菩薩已に諸の結使を斷せば、彼が佛となる時は何を斷するか。

爲す。是を「無量の清淨智を得るが故に諸法の中に於て意に罣礙なし」と名く。

大忍を成就す。

問うて曰く、先に已に等忍と法忍を説けり、今何を以ての故に復「大忍を成就す」と説くや。答へて曰く、此の二忍の増長するを名けて大忍と爲す。復次に等忍は衆生の中に在つて、一切能く忍じて柔順なり。法忍は深法の中に於て忍す。此の二忍増長して證を作し、無生忍を得、最後の肉身に悉く十方の諸佛を見るに、化現して前に在り、空中に於て坐す。是を大忍を成就すと名く。譬へば聲聞法の中に、疑法の増長せるを名けて頂法と爲し、頂法の増長せるを名けて忍法と爲すが如し。更に異法の増長して異と爲ると無し。等忍と大忍とも亦復是の如し。復次に「二種の忍あり、生忍と法忍となり。生忍を衆生の中の忍と名く。恒河沙劫等の如き衆生種種に瞋心を加ふるも瞋恚せず、種種に恭敬供養すも心に歡喜せざるなり。復次に衆生の初なきことを觀す。若し初あれば則ち因縁なし。若し因縁あれば則ち初なし。若し初なければ亦應に後無かるべし。何となれば初と後とは相待なればなり。若し初後なければ中も亦無かるべし。是の如く觀する時常斷の二邊に墮せず、安隱の道を用ひて衆生を觀じ邪見を生せず、是を生忍と名け、甚深の法の中に心に罣礙なき、是を法忍と名く。

【六二】第二三問、先に菩薩の等忍と法忍を得給ふを説く、今復大忍を得と説くは何故なるか。

【六三】生忍と法忍を釋す。

問うて曰く、何等か甚深の法なる。答へて曰く、先に逮に深法忍の中に説くが如し。復次に甚深の法とは、十二因縁の中に於て、展轉して果を生ずれども、因の中に果あるに非ず、亦た果なきに非ず、是の中より出づる是を甚深の法と名く。復次に、三解脱門なる空と無相と無作とに入つて、則ち涅槃の常樂を得るが故に是を甚深の法と名く。復次に、一切の法は空に非ず、不空に非ず、有相に非ず、無相に非ず、有作に非ず、無作に非ずと觀じ、是の如く觀する中に心亦著せず、是を甚深の法と名く。偈に説くが如し。

『因縁生の法、是を空相と名け、亦た假名と名け、亦中道と説く。』

若し法實有ならば、應に遷つて無なるべし、今無にして先有なる、是を名けて斷と爲す。

常ならず、斷ならず、亦有無ならず、心識の處滅すれば、言説も亦た盡く。』  
此の深法に於て信心無礙にして、悔いす没せざる、是を、大忍を成就す」と名く。

【五】 實の如く巧に度す。

【論】 外道の法あり、衆生を度すと雖も實の如く度するにあらず。何となれば種種の邪見の結使残

るを以てなり。二乗は度する所ありと雖も、所應の如くに度せず。何となれば一切智なく、方便心薄

【六】 第二四問、甚深の法とは何ぞや。  
【六】 巧度拙度を釋す。

きを以てなり。唯だ菩薩のみ有つて、實の如く巧に度す。譬へば渡師の、一人は浮囊草蓆を以て之を渡し、一人は舢舨を以て渡し、二渡の中、相降ること懸に殊なるが如く、菩薩の巧に衆生を度すことも亦是の如し。

〔六五〕 復次に、譬へば病を治するが如し。苦藥と針灸とは痛んで差すを得。妙藥あり、突をば蘇陀扇陀

と名くるが如きは、病人眼に見れば衆の疾みな愈む。病を除くとは同じと雖も、優劣の法異なるなり。聲聞と菩薩との教化して人を度するも、亦復是の如し。苦行頭陀の初中後夜、勤心に坐禪し、苦を觀じて道を得るは聲聞の教なり。諸法の相の縛する無く、解く無きを觀じて、心に清淨を得るは菩薩の教なり。文殊師利の本縁の如し。文殊師利、佛に白さく、「大徳よ、昔、我先世に無量阿僧祇劫を過ぐ。爾の時に佛有り、師子首王と名く。佛及び衆生の壽は十萬億那由也變なり。佛は三乘を以て衆生を度したまふ。國を千光と名け、其國の諸樹は七寶を以て成る。樹は無量の清淨の法音・空・無相・無作・不生・不滅・無所有の音を出す。衆生之を聞き心に解して道を得たり。時に師子首王佛の初會の説法に、十九億の人阿羅漢道を得き、菩薩衆も亦復是の如し。是の諸の菩薩は、一切皆無生法忍を得て種種の法門に入り、無量の諸佛を見たてまつりて恭敬供養し、能く無量無數の衆生を度し、無量の陀羅

【六五】 針灸と妙藥との不同の譬喩。  
 【六六】 蘇陀扇陀 (Sudhasthanta)。  
 【六七】 文殊師利 (Manjushri)。  
 【六八】 無生法忍は略して無生忍ともいふ。無生法とは生滅を遠離せる眞如眞相の理體なり。譬喩此の理に安住して動かざるを無生法忍といふ。

尼門を得、能く無量の種種の三昧を得、初發心に、新に道門に入るの菩薩は稱數す可らず。是の佛土の無量の莊嚴は説き盡す可らず。時に佛は教化已に訖り、無餘涅槃に入りたまひ、法に住したまふこと六萬歳なり。諸樹の法音も亦復た出でず。爾の時に、二の菩薩の比丘あり。一を喜根と名け、二を勝意と名く。是の喜根法師は容儀質直にして、世法を捨てず亦善惡を分別せず。喜根の弟子は聰明にして、法を樂しみ深義を聞く。其の師は少欲知足を讚せず、戒行頭陀を讚せず、但諸法の實相の清淨のみを説いて、諸の弟子に語るらく、「一切の諸法は婬欲の相、瞋恚の相、愚癡の相、此の諸の法相は、即ち是れ諸法の實相にして、罣礙する所なし」と。是の方便を以て、諸の弟子に教へ（七〇）一相智に入らしむ。

時に諸の弟子は、諸人の中に於て、瞋ること無く、悔ゆること無し。心に悔いざるが故に生忍を得、（七一）生忍を得るが故に則ち（七二）法忍を得、實法の中に於て、動ぜざること山の如し。勝意法師は戒を持すること清淨に、十頭陀を行じ、四禪と四無色定とを得。勝意の諸の弟子は、鈍根にして求むること多く、分別して是は淨、是は不淨と爲し、心即ち動轉す。勝意は異時に聚落の中に入り、喜根の弟子の家に至り、坐處に於て坐し、持戒・少欲・知足行・頭陀行・閑處・禪寂を讚説し、喜根を皆毀

【六九】喜根、勝意二菩薩の因縁。  
 【七〇】一相智とは諸法の實の相を證悟する智なり。  
 【七一】生忍とは具には衆生忍といふ。忍は忍耐の義なり、諸の衆生ありて、種種の善惡を加ふるも、我に於て能く忍耐して、瞋恚を起さざるを衆生忍といふ。

【七二】法忍とは無生法忍の略稱、この時の忍は安忍なり。理もと不生不滅なり、今は但不生といひ又無生といふ。菩薩は無生の法に於て安忍して心を動かさざるを無生法忍と名く。

して言く「是の人は法を説き、人をして邪見の中に入らしむ。是れ姪欲・瞋恚・愚癡の至礙する所なきの相を説く。是れ難行にして、純清淨に非らず」と。是の弟子は利根にして法忍を得。勝意に問うて言く、「大徳、是の姪欲の法は何等の相とか名くるや」と。答へて言く、「姪欲は是れ煩惱の相なり」と。問うて言く、「是の姪欲の煩惱は内に在りや、外に在りや」と。答へて言く、「是の姪欲の煩惱は内に在らず外に在らず。若し内に在らば、應に外の因縁を待つて生ずべし。若し外に在らば我に於て事なく、我を惱すべからず」と。居士言く、「若し姪欲の煩惱内に非らず外に非ず、東西南北四維上下より來るに非ずんば、遍ねく實相を求むるに得べからず。是の法は即ち不生不滅ならん。若し生滅の相なくんば、空にして所有なけん。云何が能く煩惱を作さんや」と。勝意は是語を聞き已つて、其の心悅ばず、答を加ふると能はず、座より起つて是の如く説いて言く、「喜根は多く衆人を誑はし、邪道の中に著く」と。是の勝意菩薩は未だ音聲陀羅尼を學ばず、佛の所説を聞いては便ち觀喜し、外道の語を聞いては便ち瞋恚す。三不善を聞けば則ち歡喜せず、三善を聞けば大に歡喜す。生死を説くことを聞けば則ち憂ひ、涅槃を聞けば則ち喜ぶ。居士の家より林樹の間に至り、精舍の中に入り、諸の比丘に語るらく、「當に知るべし、喜根菩薩は虛誑にして、多く人をして惡邪の中に入らしむ。何となれば其れ姪・恚・癡の相、及び一切の諸法は、皆無礙の相なりと言ふを以てなり」と。是の時喜根は是の念を作さく、「此の人は大に瞋つて惡業の爲に覆ぼる、當に大罪に墮つべし。我今當に爲に甚深

の法を説くべし。今所得無しと雖も、爲に後世佛道の因縁と作さん」と。是の時に喜根は僧を集めて一心に偈を説く、

『姪欲は即ち是れ道なり。悲と癡とも亦是の如し。此の如き三事の中に、無量の諸佛の道あり。

若し人あり姪・怒・癡、及び道を分別せば、是の人ハ佛を去ること遠し、譬へば天と地との如し。道と及び姪と怒と癡とは、是れ一法にして平等なり。若し人聞いて怖畏せば、佛道を去ること甚だ遠し。

姪法は生滅せず、能く心をして惱ましめず。若し人吾我を計して、姪せば將に惡道に入るべし。有無の法の異なるを見れば、是れ有無を離れず。若し有無等しきことを知らば、超勝して佛道を成

せん。

是の如き等の七十餘の偈を説く時、三萬の諸天子は無生法忍を得、萬八千の聲聞の人は、一切の法に著せざるが故に皆解脱を得たり。是の時勝意菩薩の身は即ち地獄に陷入して、無量千萬劫の苦を受け、出でて人中に生れ、七十四萬世常に誹謗せられ、無量劫の中に佛の名を聞かず。是の罪漸く薄くなりて、佛法を聞くことを得、出家して道の爲にし、而も復た戒を捨つ。是の如く六萬二千世、常に戒を捨て、無量世の中に沙門と作り、戒を捨てずと雖も、諸根闇鈍なり。是の喜根菩薩は、いま東方に於て、十萬億の佛士を過ぎて佛と作る、其の土を寶嚴と號し、佛を光踰日明王と號すと。文殊師

利よ、「爾の時の勝意比丘は我が身是なり。我爾の時を觀るに是の無量の苦を受く」と。文殊師利復た佛に白さく、「若し人あり、三乗の道を求め、諸苦を受くるとを欲せざる者は、應に諸法の相を破り、瞋恚を懷くべからず」と。佛、文殊師利に問ひたまはく、「汝諸の偈を聞いて、何等の利を得るや」と。答へて言ひく、「我、此の偈を聞くとを得て、衆苦を畢り、世世に利根の智慧を得、能く深法を解し、巧に深義を説くこと、諸の菩薩の中に於て最も第一と爲す」と。是の如き等を、「巧に諸法の相を説く」と名け、是を「實の如く巧に度す」と名く。

# 巻の第七

初品の中の「佛の世界の願」を釋す、

無量の諸佛の世界を受けんことを願ふ。

諸の菩薩は、(二)諸佛の世界の無量嚴淨なるを見て、種種の願を發せり。佛の世界あり、都て

衆苦なく、乃至三惡の名なるものなし。菩薩は見已つて自ら願を發して言く、「我、佛と作る時、世

界に衆苦なく、乃至三惡の名なきこと、亦た當に是の如くなるべし」と。佛の世界あり、七寶もて莊

嚴し、晝夜に常に清淨の光明あつて日月あるとも無し。便ち願を發して

言く、「我、佛と作るの時、世界に常に嚴淨の光明あること、亦た當に是

の如くなるべし」と。佛の世界あり、一切衆生みな十善を行じ、大智慧あつて、衣被飲食は念に應じ

て至る。便ち願を發して言く、「我、佛と作るの時、世界の中の衆生の衣被飲食亦た當に是の如くな

るべし」と。佛の世界あり、種種の菩薩のみにして、佛の色身の如く、三十二相あつて、光明

徹照し、乃至尋常時佛の名あること無し。亦た女人なく一切みな深妙の佛道を行じ、十方に遊至

し、一切を教化す。便ち願を發して言はく、「我、佛と作る時、世界の中の衆生亦當に是の如くなる

べし」と。是の如き等の無量の佛の世界の種種の嚴淨、皆之を得んとを願ふ。是を以ての故に「無量の

【一】菩薩は佛國を見て種種の願を發す。

諸佛の世界を受けんことを願ふしと名く。

問うて曰く、三諸の菩薩は行業清淨にして、自ら淨報を得。何を以てか要らず願を立てて、然

る後に之を得ることを須るんや。譬へば田家の穀を得るが如き、豈に復た願を待たんや。答へて曰

く、福を作るとは、願なければ標とする所なし。立願を導師と爲して、能く成す所あり。譬へば金を

銷するに、師に隨つて作る所の金は定まると無きが如し。佛の所説の如きは、人あつて少施の福を修

し、少戒の福を修し、禪法を知らず、人中に富樂の人あるを聞いて、心に常

に念着し、願樂して捨てざれば、命終の後富樂の人の中に生ず。復人あ

り、少施の福を修し、少戒の福を修し、禪法を知らず、四天王天處、三十

三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天あるを聞いて、心に常に願

樂して、命終の後おのおの其中に生ず。此れみな願力の所得なり。菩薩も

亦是の如く、世界を淨むるの願を修し、然して後之を得。是を以ての故に願に因つて勝果を受くるこ

とを知る。

復次に、佛界を莊嚴する事は大にして、獨り行つて功德を成ずると能はざるが故に、要らず願力を

須ゆ。譬へば牛力は能く車を挽くと雖も、要らず御者を須つて、能く至る所あるが如し。世界を淨む

るの願も亦復是の如し。福德は牛の如く、願は御者の如し。

【一】 第一問、行業清淨の菩薩にして、尙且つ願ある理由如何。  
【二】 福を作すに願なければ所標なし。

問うて曰く、若し願を作さざれば福を得ざるや。答へて曰く、得と雖も願あるには如かず。願は能く福を助け、常に行ふ所を念ずれば福徳増長す。

問うて曰く、若し願を作して報を得ば、人の十惡を作して、地獄を願はざるが如きも、亦地獄の

報を得べからざるか。答へて曰く、罪福には定報あり、但願を作す者は少

福を修すると雖も、願力あるが故に大なる果報を得。先に罪中の報苦を説

くが如し。一切衆生皆樂を得んとを願ふとも、苦を願ふ者なし、是故に地

獄を願はず。是を以ての故に願には無量の報あれども、罪報には量あり。

有人の言く、「最大の罪は阿鼻地獄に在つて、一劫の間の報を受く。最大の

福は非有想非無想處に在りて、八萬大劫の報を受く。諸の菩薩の世界を淨

むるの願も、亦無量劫にして道に入り、涅槃を得、是を常樂と爲すしと。

問うて曰く、泥梨品の中の如きは、般若波羅蜜(多)を誘ふ罪は、此の

間の劫盡くれば、復た他方の泥梨の中に在る。何を以てか最大の罪は、地

獄の中に一劫の報を受くと言ふや。答へて曰く、佛法には衆生の爲の故

に二道の教化あり。一には佛道、二には聲聞道なり。聲聞道の中には五逆罪を作る人は、佛「地獄の

一劫を受く」と説き、菩薩道の中には、「佛法を破する人は、此の間の劫盡き、復た他方に至つて無量

【四】 第二問、若し立願せざれば、福を得ざるや如何。

【五】 福は報を得と雖も、願あるに如かず。

【六】 第三問、願を作して報を得ば、人は惡を作すも、願にざれば地獄に墮るざるべきか。

【七】 第四問、誘般若波羅蜜多の罪は地獄より地獄に入るといふ。然るも最大の罪は一劫の間の地獄に墮つと説くは何故なるか。

【八】 小乗は罪福の報軽く、大乘は罪福の報重し。

の罪を受く」と説きたまふ。聲聞法には、最も第一の福は八萬劫の間に受け、菩薩道の中には大福は無量阿僧祇劫の間に受く。是を以ての故に福德は願に頼ず。是を「無量の諸佛の世界を受けんことを願ふ」と名く。

【一】 無量の佛土、諸佛の三昧を念すれば、常に現じて前に在り。

【二】 無量の佛土を十方諸佛の土と名く。念佛三昧を十方三世の諸佛、常に心眼を以て見るに前に在つて現するが如しと名く。

問うて曰く、云何が念佛三昧と爲すや。答へて曰く、念佛三昧に二種あり。一には聲聞法の中に、一佛身の心眼に於て、滿十方を見る。二には菩薩道にして、無量の佛土の中に於て、三世十方の諸佛を念す。是を以ての故に、「無量の佛土、諸佛の三昧を念すれば、常に現じて前に在り」と言ふ。

問うて曰く、菩薩の三昧の如きは種種無量なり。何を以ての故に「是の菩薩、念佛三昧すれば、常に現じて前に在り」と讚するや。答へて曰く、是の菩薩は佛を念するが故に、佛道の中に入ることを得。是を以ての故に念佛三昧すれば常に現じて前に在るなり。

【九】 第五問、念佛三昧とは何ぞや。  
【一〇】 小乗の念佛三昧と大乘の念佛三昧。  
【一一】 第六問、菩薩の修すべき三昧に種種あり、然るを念佛三昧のみを讚して、佛常に現じて前にありといふは何故なるか。

(三)

復次に念佛三昧は、能く種種の煩惱及び先世の罪を除く。餘の諸の三昧は、能く姪を除くこと有れども、瞋を除くこと能はず。能く瞋を除くこと有れども、姪を除くこと能はず。能く癡を除くこと有れども、姪と恚とを除くと能はず。能く三毒を除くこと有れども、先世の業を除くこと能はず。是の念佛の三昧は、能く種種の煩惱と種種の罪とを除く。復次に、念佛三昧は大福德ありて、能く衆生を度す。是の諸の菩薩は衆生を度せんと欲す、諸餘の三昧は、此の念佛三昧の福德の能く速に諸罪を滅するが如き者なし。説くが如くんば (三) 昔五百の估客あり、海に入つて寶を採り、摩伽羅魚王値にふ。口を聞くに海水中に入り、船去ること駛疾なり。船師、樓上の人に問ふ、「汝、何等をか見る」と。答へて言く、「三の日出で、白山羅列し、水流れて奔り趨き、大なる坑に入るが如くなるを見る」と。船師の言く、「是れ摩伽羅魚王の口を開くなり。一は是れ實の日、兩日は是れ魚の眼、白山は是れ魚の齒、水の流れて奔り趨くは、是れ其の口に入るなり。我曹了りなん。各各諸の天神の以て自らを救濟せんことを求めよ」と。是の時、諸人は各各其の事ふる所を求むれども、都て益する所なし。中に五戒の優婆塞あり。衆人に語つて言く、「吾等當に共に南無佛と稱すべし。佛は無上たり、能く苦危を救ひたまふ」と。衆人一心に同聲に、「南無佛」と稱す。是の魚は先世是れ佛の破戒の弟子なり。宿命智を得、佛を稱ふるの聲を聞いて、心自ら悔悟し、即便ち口を合し、船人脱する

【一】念佛三昧は餘の三昧に優るを説く。  
 【二】一たび南無佛と稱へ大魚の難を免れたる因縁。  
 【三】摩伽羅魚王(Makara)

ことを得たり。佛を念ずるを以ての故に能く重罪を除き、諸の苦危を濟ふ、何に況んや、念佛三味をや。復次に、佛は法王にして、菩薩は法將たり。尊ばれ、重んぜらるる所は、唯だ佛世尊のみなり。是の故に應に常に佛を念ずべし。

復次に、常に佛を念ずれば、種種の功德の利を得。譬へば大臣の特に恩寵を蒙つて、常に其の主を念ずるが如し。菩薩も亦た是の如く、種種の功德無量の智慧は、皆佛より得ることを知つて、恩の重きことを知るが故に、常に佛を念ず。汝云何が常に佛を念じ、餘の三味を行せざる者と言ふや。今常に念ずと言ふも、亦た餘の三味を行せずとは言はず。念佛三味を行すること多きが故に、常に念ずと言ふ。復次に、先に空と無相と無作の三味を説くと雖も、未だ念佛三味を説かず、是の故に、今説くなり。

能く無量の諸佛を請す。

論

請するに二種あり。佛初めて道を成じたまふとき、菩薩は夜三たび晝三たび、六時に禮請し、

偏へに右の肩を袒ぬぎ合掌して言さく、「十方佛土の無量の諸佛、初めて道を成じたまふ時、未だ法輪を轉じたまはず、我某甲一切諸佛の衆生の爲に、法輪を轉じて一切を度脱したまはんことを請ふ」と。二には諸佛の無量の壽命を捨てて、涅槃に入らんと欲したまふ時、菩薩も亦た夜三時、晝三時に

偏へに右の肩を袒ぬぎ、合掌して言さく、「十方佛士の無量の諸佛、我某甲、久しく世間に住せしめて、無央數劫一切を度脱し、衆生を利益したまはんことを請ふ」と。是を能く「無量の諸佛を請す」と名く。

問うて曰く、(一)五しよぶつ 諸佛の法は必ず應に説法して、廣く衆生を度すべし。其の法自ら應に爾るべし。何を以てか請を須たんの。若し目前に於いて、面たり諸佛を請するは則ち可なり。今十方無量の佛士の諸佛も亦た目に見えず、云何が請す可けんや。答へて曰く、諸佛は必ず説法すべく、人の請ふことを待たずと雖も、請する者も亦た應に福を得べし。大國王の如きは、美膳多しと雖も、人有り請すれば、必ず恩福を得、其の心を録するが故なり。又慈心の如きは、諸の衆生をして快樂を得せしめんと念す。衆生は得る所なしと雖も、念する者は大に其の福を得。佛の説法を請するも、亦復是の如し。

復次に、諸佛ありとも、人の請する無ければ、便ち涅槃に入つて法を説かず。法華經の中の多寶世尊の如きは、人の請すること無きが故に、便ち涅槃に入り。後、佛身及び七寶の塔を化して、法華經を説くことを説するが故に、一時に出現したまふ。亦た須扇多佛の如きは弟子の本行未だ熟せざれば、便ち捨てて涅槃に入り、化佛に留まると一劫、以て衆生を度したまふ。今是の釋迦文尼佛は、

【一〇】第七問、説法度生は諸佛の法なり、何ぞ人の請を須つて度すべけんや、  
【二六】須扇多佛(スセナタ)は譯して甚淨といふ。

道を得るの後、五十七日、寂として法を説かず、自ら言はく、「我が法は甚深にして、解し難く知り難し。一切衆生は世法に縛著して、能く解する者なし。默然として涅槃の樂に入らんには如かず」と。是の時に諸の菩薩と及び釋提桓因と梵天王と諸天とは、合掌敬禮して、佛を請すらく、「諸の衆生の爲に初めて法輪を轉じたまへ」と。佛、時に默然として請を受け、後、波羅奈の鹿林の中に到り、法輪を轉じたまへり。是の如くんば云何が請して益する所なしと言はん。復次に、佛法は等しく衆生を視て、貴ふこと無く、賤むこと無く、輕んずること無く、重んずること無く、人の請する者あれば、其の請の爲の故に、法を説くと爲す。衆生は佛を見すと雖も、佛は常に其の心を見て、亦彼の請を聞きたまふ。假令諸佛は聞かず見ずとも、佛を請せば亦た福德あり。何に況んや、佛悉く聞見して而も益する所なからんや。

【二七】第八問、佛を請するに二事を以てする理由如何。

問うて曰く、既に佛を請して益あることを知る。何を以てか正しく二事を以て請するや。答へて曰く、餘は請すべからず、此の二事を以て要必ず請すべし。若し請せずして説かば外道の輩あつて言はん、「體道常に定れり、何を以てか法に著して多言多事なる」と。是を以ての故に須らく請して而して説くべし。有人の言ふが若し、若し諸法の相を知らば、壽を貪り久しく世間に住すべからず、而るを早く涅槃に入らず、是を以ての故に須らく請すべし。若し請せずして説かば、人當に謂ふべし、「佛は法に愛著し人をして知らしめんと欲す」と。是を以ての故に要す人の請するを待つて法輪を轉

す。諸の外道の輩は自ら法に著し、若くは請し、若くは請せざれども、而も自ら人の爲に説く。佛は諸法に於て著せず愛せず、衆生を憐愍したまふが爲の故に、佛説を請ふ者あれば、佛便ち爲に説きたまふ。諸佛は請すること無きを以て、初めて法輪を轉じたまはず。偈に説くが如し。

「諸佛の説は何れが實、何れが是れ不實なる、實と不實と、二事不可得なり。

是の如きは眞實の相にして、諸法に戯れず、衆生を憐愍するが故に、方便して法輪を轉ず。」

復次に、佛、若し請せらるること無くして自ら法を説きたまはば、是れ自ら顯はし、自ら執するの法と爲す。應に必ず十四の難を答ふべし。今諸天佛の説法を請するは、但だ老病死を斷するが爲にして戲論する處なし。是の故に十四の難を答へざれども答なし。是の因縁を以て、請を須つて法輪を轉じたまふ。復次に、佛は人中に在つて生れ、大

【二八】菩薩は晝夜三時に常に三事を行す。

人の法を用ふるが故に、大慈ありと雖も、請せざれば説きたまはず。若し請せずして説かば、外道に譏られん。是を以ての故に初は要す請を須つ。又復外道は梵天に宗事す、梵天自ら請するときは、則ち外道の心伏す。復次に、菩薩の法は、晝三時、夜三時、常に三事を行す。一には清旦に偏へに右の肩を袒ぬぎ、合掌して十方の佛を禮して言さく、「我、某甲、若くは今世、若くは過世、無量劫の身口意に惡業の罪を、十方現在の佛前に於て懺悔したてまつる。「願くは滅除して、復た更に作らざらしめんとを」と。中、晝・夜の三も亦是の如し。二には十方三世の諸佛の行じたまふ所の功德、及び

弟子衆の行する所の功德を念じ、隨喜し勸助す。三には現在の十方の諸佛の初めて法輪を轉せられんことを勸請し、及び諸佛、久しく世間に住して、無量劫の間に一切を度脱したまはんことを請ふ。菩薩は此の三事を行する功德無量にして、轉た佛を得るに近し。是を以ての故に請を須つ。

論

能く種種の見滯及び諸の煩惱を斷す。

論

見に二種あり、一には常、二には斷なり。

り。常見とは五衆の常を見て常に心に忍樂す。

斷見とは五衆の滅を見て心に忍樂す。一切の衆

生は多く此の二見の中に墮す。菩薩は自ら此の

二を斷じ、亦能く一切衆生の二見を除いて、中

道に處らしむ。復た二種の見あり、有見と、無

見となり。復三種の見あり、一切法忍と、一切法不

見あり、世間常と、世間無常と、世間亦常亦無常と、世間亦非常亦非無常となり。我及び世間の有

無邊も亦是の如し。死後如去あり、死後不如去あり、死後亦不如去あり、死後亦不如去亦不如去

あり。(一)復た五種の見あり、(二)身見と(三)邊見と(四)邪見と(五)見取と(六)戒取となり。是の如き等の

【一九】 斷常の二見を釋す。

【二〇】 三種の見。

【二一】 四種の見を擧ぐ、見とは審に思慮し推求して事理を決擇するをいふ。

【二二】 五種の見。

【二三】 身見とは、身を以て實存せりとし、之を我なりとなすの邊見なり。

【二四】 邊見とは、斷常の二見に偏執する誤見なり。

【二五】 邪見とは、因果の理を無視するの誤えにして、之を撥無因果の見といふ。

【二六】 見取(見)とは、自己の誤見を斷絶して動かざるなり。

【二七】 戒取とは、詳しくは戒禁取見と戒若くは禁衛等を以て、解脫に至るの道なりと執する誤見なり。蓋し邊見門教の徒苦行若くは祈禱によりて、天上に生れ、又は解脫涅槃に至るを得べしとなす。

【二八】 復た四種の見あり、世間常と、世間無常と、世間亦常亦無常と、世間亦非常亦非無常となり。我及び世間の有無邊も亦是の如し。死後如去あり、死後不如去あり、死後亦不如去亦不如去あり。

復た四種の見あり、世間常と、世間無常と、世間亦常亦無常と、世間亦非常亦非無常となり。我及び世間の有無邊も亦是の如し。死後如去あり、死後不如去あり、死後亦不如去亦不如去あり。

復た五種の見あり、(一)身見と(二)邊見と(三)邪見と(四)見取と(五)戒取となり。是の如き等の

復た五種の見あり、(一)身見と(二)邊見と(三)邪見と(四)見取と(五)戒取となり。是の如き等の

復た五種の見あり、(一)身見と(二)邊見と(三)邪見と(四)見取と(五)戒取となり。是の如き等の

種種の諸見、乃至六十二見を斷ず。是の如き諸見は種種の因縁より生じ、種種の智門の觀は種種の師邊に聞けり。是の如きの種種の相は能く種種の結使と爲り、因と作つて、衆生に種種の苦を與ふ。是を種種の見と名く。見の義は後に當に廣く説くべし。纏とは十纏にして、瞋纏・覆罪纏・睡纏・眠纏・戲纏・掉纏・無慚纏・無愧纏・憚纏・嫉纏なり。

復次に、一切の煩惱は結んで心を繞るが故に、盡く名けて纏と爲す。煩惱とは能く心をして煩

ひ、能く惱を作さしむるが故に名けて煩惱と爲す。煩惱に二種あり、内著と外著となり。内著とは五見と癡と慢と等なり。外著とは婬瞋等の無明なり。内外共に復た二種の結あり。一は愛に屬し、二は見に屬す。復た三種あり、婬に屬し、瞋に屬し、癡に屬す。是を煩惱と名く。纏とは有人の言く、十纏なりと。有人の言く、五百の纏ありと。煩惱を一切結使と名

く、結に九あり、使に七あり、合して九十八結と爲す。迦旃延子の阿毗曇の義の中に説くが如し。十纏と九十八結とを百八の煩惱と爲す。犢子兒の阿毗曇の中には、結使も亦た同じく纏に五百ありと。是の如きの諸の煩惱を、菩薩は能く種種の方便を以て自ら斷じ、亦た能く巧に方便を以て他人の煩惱を斷せしむ。佛在す時の三人の如きは、伯、仲、季たり。聞くならく、毗耶離國に婬女人あり、菴羅婆利と名く。舍婆提に婬女人あり、須蔓那と名く。王舍

- 【六】纏とは結と殆んど同じ意味にて煩惱の異名なり。今その十名を擧ぐ。
- 【一】煩惱の意義。
- 【二】二種の煩惱。
- 【三】百八煩惱の名數。
- 【四】毗耶離國(Vijaya)にあり。
- 【五】菴羅婆利(Amralakshya)にあり。
- 【六】須蔓那(Sumana)にあり。

城に姪女人あり、**三**優鉢羅槃那と名く」と。三人あり、各各人の「三女人は端正無比なり」と讚するを聞き、晝夜に専念し、心著して捨てず、便ち夢中に於て夢に與に事に従ふ。覺め已つて心に念すらく、**三**「彼の女も來らず、我も亦た往かず、而も姪事を辨することを得たり、是に因つて一切諸法も皆是の如くなりやと悟れり」と。是に於て 毘陀婆羅菩薩の所に往き到り、是の事を問ふ。毘陀婆羅答へて言く、「諸法は實に閑なり、皆念に従つて生ず」と、是の如く種種に此の三人の爲に方便して巧に諸法の空を説けり。是の時三人は即ち阿鞞跋致を得たり。是の諸の菩薩も亦復是の如く、諸の衆生の爲に種種に巧に法を説き、諸の見と纏と煩惱とを斷ず。是を「能く種種の見纏及び諸の煩惱を斷ず」と名く。

**三** 百千三昧に遊戯し出生す。

**三** 諸の菩薩は 禪定心を以て、清淨の智慧、方便力を調ふるが故に能く種種の諸の三昧を生ず。何等をか三昧と爲す。「謂く」善心一處に住して動せざる、是を三昧と名く。復三種の三昧あり、**三**有覺有觀と無覺有觀と無覺無觀三昧となり。復た四種の三昧あり、欲界繫三昧、色界繫三昧、無色界繫三昧、不繫三昧なり。是の中、用ふる所の菩薩の三昧は先に

【二五四】 三昧の定觀  
 【一】 有覺有觀、若譯には之の有覺有伺といふ。所對の境を  
 【二】 優鉢羅槃那 (Uppalavaśī) 佛鉢羅槃那 (Uppalavaśī) 夢に覺を行じて空を解せし因縁  
 【三】 毘陀婆羅 (Vidura) は、善守、賢護、妙護などと譯す。  
 【四】 菩薩は廣く衆生を度せんが爲に諸の三昧を行す。諸の貧人を救ふには、衆賢を備ふるが如くし、衆の病を治するには衆の藥を備ふるが如くす。  
 【五】 三昧の定觀  
 【六】 有覺有觀、若譯には之の有覺有伺といふ。所對の境を

と説くが如し。佛の三昧の中に於て、未だ勤行動修を満さざるが故に「能く出生す」と言ふ。

問うて曰く、(四) 諸の菩薩は何を以ての故に是の百千種の三昧を出生し遊戯するや。答へて曰く、衆生無量なれば、心行同じからず。利あり鈍あり、諸の結使に於て、厚きあり薄きあり、是の故に菩薩は百千種の三昧を發行じ、其の塵勞を斷ず。譬へば諸の貧人の爲に大富ならしめんと欲せば、當に種種の財物を備へ、一切を備具して、然る後乃ち能く諸の貧者を濟ふが如し。又復人の廣く諸病を治せんと欲せば、當に種種の衆藥を備へて、然る後に能く治するが如し。菩薩も亦是の如く、廣く衆生を度せんと欲するが故に種種百千の三昧を行す。

問うて曰く、(三) 但當に此の三昧を出生すべし、何を以ての故に復た其の中に遊戯するや。(四) 答へて曰く、菩薩の心、諸の三昧を生じ、欣樂して出入自在なる、之を名けて遊戯と爲す、結愛の戲には非なるなり。戲を自在と名く、師子は鹿の中に在つて、自在に畏なきが如くなるが故に名けて戲と爲す。是の諸の菩薩の、諸の三昧に於て、自在の力あつて、能く出で

觀察するの觀想を尋又は覺といひ、其の細想を何或は觀といふ。色界と無色界とに屬する諸定を此の尋伺即ち覺觀の有無に依て三種に分つ。一に有尋有何(舊譯有覺有觀)は定心に尋伺ともにあるもの、初禪天の根本定及び其未至定これなり。二に無尋有何(舊譯無覺有觀)定心に唯何あるもの、初禪天と二禪天との間にある中間定。三に無尋無何即無覺無觀、定心至妙にして尋伺ともに無きもの、二禪天より以上非想處に至る定これなり。

【一】第九問、菩薩が百千種の三昧を出生し、遊戯する理由如何。

【二】第一〇問、然らば菩薩は但諸の三昧を出生せば即ち足る、然るを何故に其の中に遊戯するや。

【三】出入自在これを遊戯といふ。獅子の鹿の中に在りて自在無畏なるが如し。

能く入ること、亦復是の如し。餘人は三昧の中に於て、能く自在に入れども、自在に住し、自在に出づること能はず。自在に住するもの有れども、自在に入り自在に出づること能はず。自在に出づること有れども、自在に住し自在に入ること能はず。自在に入り自在に出づること有るも、自在に出づること能はず、自在に住し自在に出づること有るも、自在に入ること能はず。是の諸の菩薩は能く三種自在なるが故に「百千の三昧に遊戯し出生す」と言ふ。

【四四】 諸の菩薩は是の如き等の種種無量の功徳を成就す。

【四五】 諸の菩薩は是の如き等の無量の功徳を成就すとは、是の諸の菩薩は佛と共に住し、其の功徳を讃せんと欲すること無量億劫なるも盡すことを得べからず、是を以ての故に「無量の功徳を成就す」と言ふなり。

【四六】 其の名も阿陀婆羅菩薩、制那伽羅菩薩、淨師菩薩、那羅達菩薩、星得菩薩、水天菩薩、主天菩薩、大慈菩薩、三意菩薩、增立菩薩、不慮見菩薩、善趣菩薩、勢動菩薩、常勤菩薩、不捨精進菩薩、日誦菩薩、不捨意菩薩、觀世音菩薩、文殊師利菩薩、執寶印菩薩、常持手菩薩、阿耨多羅三藐三菩提菩薩と曰ふ。是の如き等の、無量百千萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩は、皆是れ攝處にして尊位を新く者なり。

- 【四四】 制那伽羅 (Chankara)
- 【四五】 淨師 (Nayaka)
- 【四六】 那羅達 (Narada)
- 【四七】 星得 (Shōtoku)
- 【四八】 水天 (Suzaku)
- 【四九】 上天 (Ten)
- 【五〇】 大慈 (Mahakaruna)
- 【五一】 三意 (San'i)
- 【五二】 增意 (Zōgi)
- 【五三】 不慮見 (Anryūgan)
- 【五四】 善趣 (Zō)
- 【五五】 勢動 (Shōdō)
- 【五六】 常勤 (Jōjin)
- 【五七】 不捨精進 (Anshōshūjin)
- 【五八】 日誦 (Nichijō)

論

是の如き等の諸の菩薩は、佛と共に王舍城の耆闍崛山の中に住す。

問うて曰く、是の如きの菩薩は衆多なり、何を以てか獨り二十二菩薩の名を説くや。答へて曰く、諸の菩薩は無量百千萬億にして、説き盡くすべからず。若し都て説くも、文字の載すること能はざる所なり。復次に是の中に、二種の菩薩あり、居家と出家となり、善守等の十六の菩薩は、是れ居家の菩薩なり、毘陀婆羅居士菩薩は、是れ王舍城の舊人、寶積王子菩薩は、是れ毗耶離國の人、星得長者子菩薩は、是れ(宅)波國の人、導師居士菩薩は、是れ舍婆提國の人、那羅達婆羅門菩薩は、是れ(宅)波國の人、彌梯羅國の人、水天は、優婆塞の菩薩なり。慧(宅)德菩薩等は、是れ出家の菩薩なり。觀世音菩薩等は、他方の佛土より來れり、若し居家を説かば一切の居家の菩薩を攝す。出家他方も亦是の如し。

問うて曰く、善守菩薩は何の殊勝なるを有りてか最も前に在つて説くや。若し最大なるものを前に在かば、應に(宅)道吉(觀世音)得大勢菩薩等を説くべし。若し最小なるものを前に在かば、應に(宅)肉身初發意の菩薩等を説くべし。大を以てせず小を以てせず、善守菩薩は是れ王舍城の舊人、白衣の菩薩の中に最大なるを以て、

- 【五】 不・缺・意 (Anupatamanti)
- 【六〇】 觀・世・音 (Avalokitesvara)
- 【六一】 文・殊・尸・利 (Manjusri)
- 【六二】 執・實・印 (Khammudrapan)
- 【六三】 常・舉・手 (Nityokshipanas)
- 【六四】 彌・勒 (Maitreya)
- 【六五】 第一二間、菩薩に數多あり、然るに上記の二十二章を擧ぐるは何故ぞや。
- 【六六】 二種の菩薩。
- 【六七】 彌・波・圖 (Mibato)
- 【六八】 彌・梯・羅國 (Mitaro)
- 【六九】 第一二間、善守菩薩を最初に擧ぐる理由如何。
- 【七〇】 道吉は善賢 (samasthit)
- 【七一】 得大勢至 (Mahastharmapranishta)

佛、王舍城に在して、般若波羅蜜(多)を説きたまはんと欲す。是を以ての故に最も前に在つて説くなり。復次に、是の善守菩薩は無量の種種の功德あり、(三)般舟三昧の中の如き、佛、自ら現前に其の功德を讃じたまふ。

問うて曰く、(三)若し彌勒菩薩は應に補處と稱すべし。諸餘の菩薩は、何を以てか復た尊位を紹ぐ者と言ふや。答へて曰く、是の諸の菩薩は、十方の佛土に於て皆佛處を補へばなり。

爾の時に世尊は自ら師子座を敷き、結跏趺坐して身を直くし、繫念前に在つて、三昧王

三昧に入りたまへば、一切の三昧は悉く其の中に入る。

問うて曰く、(三)佛には侍者及び諸の菩薩あり、何を以ての故に、自ら師子座を敷きたまふや。答へて曰く、此は是れ佛の化成したまふ所なり、以て大衆に適す可きことを欲す。是を以ての故に阿難は、敷くことを得ること能はず。復次に、佛心の化作の故に自ら敷くと云ふ。

問うて曰く、(三)何を以て師子座と名くるや。佛の化作の師子と爲すや。實の師子來ると爲すや。金銀木石を以て師子を作ると爲すや。又、師子は善獸に非ざるが故に佛の須ひたまはざる所なり。亦た

【七】 般舟三昧 (Prajñāpāramitā-gāthā) 此の解釋は前の一三六頁を見よ。

【七】 第一三問、彌勒菩薩以外の諸菩薩を補處位に置く理由如何。

【七】 第一四問、侍者の手を敷き給ふ理由如何。

【七】 第一五問、佛の坐處を師子座と稱する理由如何。

因縁なきが故に來るべからず。答へて曰く、是を號して師子と名くれども、實の師子には非ざるなり。佛は人中の師子たり。佛の坐したまふ處は、若くは床、若くは地、皆師子座と名く。譬へば、今は國王の坐處を、亦た師子座と名くるが如し。復次に、毛王は健かなる人を呼んで、亦た人師子と名け、人は國王を稱して、亦た人師子と名く。又師子の如きは四足獸の中に、獨歩無畏にして、能く一切を伏す。佛も亦是の如く、九十六種の道の中に於て、一切を降伏して、畏ること無きが故に人師子と名く。

問うて曰く、(毛)多くの坐法あり、佛は何を以ての故に唯だ結跏趺坐を用ゐたまふや。答へて曰く、諸の坐法の中、結跏趺坐は最も安隱にして疲極せず。此は是れ坐禪の人の坐法なり。手足を攝持し心も亦た散せず。又た一切四種の身儀の中に於いて、最も安隱なり。此は是れ禪坐にして、道法を取るの坐なり。魔王は之を見て其の心憂怖す。此の如きの坐は出家人の法なり。林樹の下に在りて結跏趺坐す、衆人は之を見て皆大に歡喜し、「此の道人は必ず當に道を取るべし」と知る。偈に説くが如し。

『若し結跏趺坐すれば、身安く三昧に入り、威徳の人敬仰す。日の天下を照すに、睡嬾の覆心を除くが如く、身輕くして疲れ懈らず。覺悟も亦た輕便なり、安坐すること龍の蟠るが如し。』

【七】 佛を人師子と稱する理由を説く。  
【七】 第一六問、多くの坐法中佛が結跏趺坐を用ひ給ふ理由如何。

畫ける跏趺坐を見て、魔王亦愁ひ怖る。何に況んや入道の人の安坐して、傾き動せざるをや。』  
是を以ての故に結跏趺坐す。

復た次に、佛は弟子に是の如く坐すべきを教へたまふ。外道の輩あつて、或は常に翹足して道を求め、或は常に立ち、或は荷足す、是の如き狂狷は心邪海に没し、形安隱ならず、是を以ての故に佛は弟子をして結跏趺し、身を直くして坐せしむ。何となれば身を直くすれば心を正し易きを以てなり。

其身直く坐すれば則ち心嬾からず、端心正意なれば、繫念前に在り。若し心馳せ散すれば、之を攝めて還つて三昧に入らんと欲せしむ。故に種種に馳念すれども、皆亦た之を攝す。此の如く繫念すれば三昧王三昧に入る。云何が三昧王三昧と名くるや。天二。是の三昧は諸の三昧の中に於て、最も第一自在にして、能く無量  
【七六】 三昧王三昧を釋す。  
【七九】 第一七問、三昧王三昧を第一とする理由如何。

の諸法を緣す。諸人の中、王は第一にして、王の中には轉輪聖王を第一とし、一切の天上天下には佛第一なるが如し。此の三昧も亦た是の如く、諸の三昧の中に於て最も第一なり。

問うて曰く、若し佛力を以ての故に、一切の三昧は皆第一なるべくんば、何を以ての故に獨り三昧を王と稱して第一と爲すや。答へて曰く、應に佛の神力を以ての故に、佛の行じたまふ所の諸の三昧は、皆第一なるべしと雖も、然も諸法の中に、應に差降あるべし。轉輪聖王の衆寶の如きは一切諸

王の寶に勝ると雖も、然も此珍寶の中にも自ら差別ありて、貴賤懸に殊なれり。是三昧王三昧は、何

の定にか攝し、何等の相にか攝せん。有人の言く、三昧王三昧を名けて自在の相と爲し、善の五衆に攝し第四禪の中に在り。何となれば一切の諸佛は第四禪の中に於て、合見諦道を行じ阿那含を得、即時に十八心の中に佛道を得、第四禪の中に在りて壽を捨て、第四禪の中に於て起つて無餘涅槃に入ればなり。第四禪の中に八生住處あり。背捨勝處一切入は、多く第四禪の中に在り。第四禪を不動と名け、禪定の法を遮るとなし。欲界の中の諸の欲は禪定心を遮る、初禪の中には覺觀の心動き、二禪の中には大喜動き、三禪の中には大樂動く、四禪の中には動く無し。

復次に、初禪は火に焼かれ、二禪は水の及ぶ所、三禪は風の至る所なるも、四禪には此の三の患なく、出入の息なく、念を捨てて清淨なり。是を以ての故に王三昧は應に第四禪の中に在るべし。好き實物は、之を好き藏に置くが如し。更に有人の言く、佛の三昧は誰か能く其の相を知らんや。一切の諸佛の法は一相として相なく、無量無數にして不可思議なり。諸餘の三昧すら尚ほ量るべからず、數ふ可らず、思議す可らず、何に況んや三昧王三昧をや。此の如きの三昧は唯だ佛のみ能く知りたまへり。佛の神足持戒の如きは、尚ほ知る可らず、何に況んや三昧王三昧をや。復次に、三昧王三昧といふは、一切の諸の三昧皆其の中に入るが故に、三昧王三昧と名く。譬へば閻浮提の衆川萬流、皆大海に入るが如く、亦た一切の人民、皆國王に屬するが如し。

【八二】見諦道。見諦とは眞理を證悟すること。聲聞の預流果已上、菩薩の初地以上の聖者の道を見諦といふ。

問うて曰く、佛は一切智にして、知らざる所なし。何を以ての故に此の三昧王三昧に入つて、然る後に能く知りたまふや。答へて曰く、智慧は因縁より生ずることを明にせんと欲するが故に、外道の六師の輩の「我等が智慧は一切時に常に常に有り常に知ると言ふ」を止めんが故なり。是を以ての故に佛は王三昧に入りて知りたまひ、入らざれば則ち知りたまはずと言ふなり。

問うて曰く、若し是の如くんば、佛の力は減劣なりや。答へて曰く、是の三昧王三昧に入るは、時に以て難しと爲さず、念に應じて即ち得、聲聞・辟支佛「及び」諸の小菩薩の方便して、求めて入るが如きには非ず。復次に、是三昧王三昧の中に入れば、六神通をして十方に通徹せしめて限なく量なし。復次に、佛は三昧王三昧に入りて種種に變化し、大神力を現はしたまふ。若し三昧王三昧に入らずして神力を現はさば、人あり心に念じて、「佛は幻力咒術の力を用ひたまふ。或は是れ大力の龍神、或は是れ天にして、是れ人に非ず。何となれば一身より無量の身を出だし、種種の光明變化あるを以てなり」と謂ひ、人に非ずと爲さん。此の疑を斷するが故に佛は三昧王三昧に入りましたまふ。

復た次に、佛もし餘の三昧の中に入りたまはば、諸天・聲聞・辟支佛、或は能く測り知らん。佛の神力は大なりと言ふと雖も、猶ほ知る可くんば、敬するの心重からず、是を以ての故に三昧王三昧の中

【八二】 第一八問、佛は、一切智者なれば知らざる所なかるべし。然も三昧王三昧に入つて知り給ふ理由如何。

【八三】 第一九問、若し爾らば佛力は減劣なるにあらざるか。

に入りたまふ。一切諸の衆聖乃至十住の菩薩も測り知ること能はず。佛心は何の依る所、何の縁する所といふことを知らず。是を以ての故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。復次に、佛は有時は大光明を放ち、大神力を現じたまふ。生れたまふ時、道を得たまふ時、初めて法輪を轉じたまふ時の如く、諸天・聖人の大に集會する時も、若くは外道を破する時も、皆大光明を放ちたまふ。今其の殊特を現はさんと欲するが故に、大光明を放ち、十方の一切の天人・衆生及び諸の阿羅漢・辟支佛・菩薩をして、皆見知することを得せしむ。是を以ての故に三昧王三昧に入りたまふ。

復次に、(八四) 光明神力に上中下あり。咒術、幻術の能く光明變化を作すは下なり。諸天の功德心力より大光明を放ち大神力を現するは上なり、是を以ての故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。

問うて曰く、(八五) 諸の三昧の如きは各各相あり、云何が一切の三昧悉く其の中に入るや。答へて曰く、是の三昧王三昧を得る時は、一切の三昧悉く得るが故に、悉く其の中に入ると云ふ。是の三昧力の故に、一切の諸の三昧、皆得ること無量無數にして思議す可らず、是を以ての故に名けて入ると爲す。復次に、是の三昧王三昧の中に入れば、一切の三昧に入らんと欲して即ち入る。復次に、是の三昧王三昧に入れば、能く一切の三昧の相を觀ること山上より下を觀る

【八三】 十住。已に前の十信の位に於いて信を得たるを以て進んで佛地に住する位なり。此の位の菩薩は佛心を知らず。  
 【八四】 光明に上中下の別あり。  
 【八五】 第二〇問、諸の三昧は三昧王三昧に入る理由如何。

が如し。復次に、佛は、是の三昧王三昧の中に入つて、能く一切十方の世界を觀し、亦た能く一切の衆生を觀す。是を以ての故に三昧王三昧に入りたまふ。

爾の時に世尊は三昧より、安庠として起ち、天眼を以て世界を觀視し、身を擧げて微笑したまふ。

問うて曰く、云何が世尊は三昧王三昧に入り施作する所なくして、定より起つて世界を觀視

したまふや。答へて曰く、佛は是の三昧王三昧に入り、一切の佛法の寶藏悉く聞き悉く見たまふ。是の三昧王三昧の中に觀已つて自ら念じたまは

く、「我が此の法藏は無量無數にして思議す可らず」と。然る後に安庠として三昧より起ち、天眼を以て衆生を觀、衆生の貧苦を知りたまふ。此の寶藏は因縁に従つて得、一切衆生も皆亦得べし。但だ癡冥に坐して、求めず

索めず。是を以ての故に身を擧げて微笑したまへり。

問うて曰く、佛には佛眼・慧眼・法眼あつて天眼よりも勝れたり、何を以てか天眼を用ゐて世界を

觀視したまふや。答へて曰く、肉眼に見る所は遍ねからざるが故なり。慧眼は諸法の實相を知り、法眼は、是の人は何の方便を以て何の法を行じて、道を得るかを見る。佛眼は、一切の法を現前に了了に知るを名く。天眼は、世界及び衆生を緣じて、障なく礙なし、餘眼は爾らず。慧眼・法眼・佛眼

【六】 第二二問、佛は三昧王三昧に入りながら、如何にして世界を觀たまふや。  
【七】 第二二問、佛には天眼以上に見れたる眼あり、然るに其の眼を用ひずして天眼を用ひ給ふ理由如何。

は勝れたりと雖も、衆生を見るの法には非ず。衆生を見んと欲すれば、唯だ二眼を以てす。肉眼と天眼となり。肉眼は遍ねからず。障る所あるを以ての故に、天眼を用ゐて觀するなり。

問うて曰く、今是の眼は佛に在り、何を以てか、名けて天眼と爲すや。答へて曰く、此の眼は多く天中に在り、天眼の見る所は山壁樹木を礙へず。若し人精進、持戒、禪定、行力の得は、是の生の分に非ず、是を以ての故に名けて天眼と爲す。

復た次に、人は多く天を貴び、天を以て王と爲す、佛は人心に隨ひたまふ。是を以ての故に名けて天眼と爲す。復次に、天に三種あり、名天と生天と淨天となり。名天とは

天王天子是なり。生天とは釋梵の諸天是なり。淨天とは佛・辟支佛・阿羅漢是なり。淨天の中の尊者は是れ佛なり。今天眼と言ふも答なし。天眼を

以て世界を觀視するに、世界の衆生は常に安樂を求むるを以て、更に苦心を得て吾我に著す。是の中實に吾我なし、衆生は常に苦を畏れて而も苦を行ふ。盲人の好き道を求む

れども、反つて深坑に墮するが如し。是の如き等をば、種種に觀已つて、身を擧げて微笑したまふ。問うて曰く、(九〇)の如く、笑は口より出るも、或時は眼笑ふ、今云何が一切の身笑ふと言ふや。答へて曰く、

佛は世界の中の尊にして自在を得、能く一切の身をして、口の如く眼の如くならしむるが故に皆能く笑ふ。復次に、一切の毛孔皆開くが故に名けて笑ふと爲す。口笑ひ、歡喜するに由るが故に一切の毛

【八八】 第二三問、佛眼を天眼と稱する理由如何。

【八九】 三種の天。

【九〇】 第二四問、舉身笑ふ理由如何。

孔皆開く。

問うて曰く、(九)佛は至つて尊重なり、何を以ての故に笑ひたまふや。答へて曰く、大地の如きは無

事及び小因縁を以て動かす。佛も亦是の如く、若し無事及び小因縁なれば、則ち笑ひたまはず。今は

大因縁の故に一切の身笑ひたまふ。云何が大と爲す、佛は摩訶般若波羅蜜(多)を説いて、無央數の衆

生の當に佛種を續ぐべきを欲したまふ、是を大因縁と爲す。

復次に、佛の言はく、「我は世世曾つて小蟲・惡人と作り、漸漸に諸の善本を集め大智慧を得て、今

自ら佛と作ることを致す。神力無量にして最上最大なり。一切衆生も亦爾

ることを得べし。云何ぞ空しく勤苦を受け小處に墮せん」と。是を以ての

故に笑ひたまふ。

復次に、小因大果・小縁大報あり。佛道を求むるが如きは、一偈を讀し、

(一〇)一たば南無佛と稱し、一捻の香を焼くも、必ず佛と作ることを得。何に況んや、諸法は實に生ぜず

滅せず、生ぜざるにあらざり、滅せざるにあらざるとを聞き知つて、因縁の業を行じて失せざるをや。

是を以ての故に笑ひたまふ。

復次に、般若波羅蜜(多)の相は清淨にして、虚空の與ふ可らず、取るべからざるが如し。佛は種種

の方便・光明・神徳を以て、一切衆生を教化し、心を調柔にし、然して後能く般若波羅蜜(多)を信受せ

【九】 第二五問、佛は尊重なり、何故に笑ひ給ふか。

【一〇】 一稱一捻の小善も必ず作佛す。

しめんことを欲したまふ。是を以ての故に笑ひに因つて光を放ちたまふ。(巻四) 笑ふに種種の因縁あり。有人は歡喜して笑ひ、有人は瞋恚して笑ひ、有人は人を輕んじて笑ひ、有人は異事を見て笑ひ、有人は羞恥すべき事を見て笑ひ、有人は殊方の異俗を見て笑ひ、有人は希有の難事を見て笑ふ。今は是れ第一希有の難事なり。諸法の相は生ぜず滅せず、眞空にして字なく名なく、言なく説なければども、而も名を作し字を立て、衆生の爲に説いて、解脱を得せしめんと欲す、是れ第一の難事なり。譬へば百由旬の大火聚の如き、人あつて乾草を負ふて過るも、一葉をも焼かざる、是を甚だ難しと爲す。佛も亦た是の如く、八萬の法の衆の名字の草を持つて、諸法實相の中に入り、染著の火の爲に焼かれずして、直に過ぎるに無礙なる、是を甚だ難しと爲す。是の難事を以ての故に笑ふ。是の如き種種の稀有の難事の故に、身を舉げて微笑したまふ。

【三】

足下の千幅相輪の中より六百萬徳の光明を放つ。

問うて曰く、佛は何を以ての故に、先づ身光を放ちたまふや、答へて曰く、上の笑ひの因縁の中に已に答へたり。今當に更に説くべし。人あり、佛の無量の身より大光明を放ちたまふを見て、心に清淨にして恭敬するが故に非常の人なりと知る。復次に、佛は智慧を現さんと欲したまふ。

【九二】 笑に種々あり。

【七四】 第二六問、佛の先づ身光を放ち給ふ理由如何。

光明は初の相なるが故に、先づ身光を出したまふ。衆生は佛の身光既に現るれば、智慧の光明も亦た應に出づべきことを知る。復次に、一切衆生は常に欲樂に著す、五欲の中にて第一なる者は色なり。此の妙光を見れば、心必ず愛著して、本樂ふ所を捨つ。其の心をして漸やく欲を離れしめ、然る後爲に智慧を説く。

問うて曰く、(蠢) 其餘の天人も亦た能く光を放つ、佛の光明を放ちたまふと、何等の異なること有りや。答へて曰く、諸の天人は能く光を放つと雖も限あり量あり。日月の照す所は唯四天下のみ。佛の放ちたまふ光明は三千大千世界に滿ち、三千大千世界の中より出でて、遍ねく下方に至る。餘人の光明は唯だ能く人をして歡喜せしむるのみ。佛の放ちたまふ光明は能く一切をして、法を聞き度を得せしむ。是を以て異れりと爲す。

問うて曰く、(蠢) 一身の中の如きは頭を最上と爲す。何を以ての故に先ず足の下より光を放つや。答へて曰く、身の住處を得るは皆足に由ればなり。復次に、一身の中頭は貴く足は賤しと雖も、佛は自ら光を貴びたまはず、利養の爲にせず、是を以ての故に賤しき處より光を放ちたまふ。復次に、諸の龍・大蛇・鬼神は口中より光を出し、毒して前の物を害す。若し佛の口より光明を放ちたまはば、衆生は「是れ、何の光明ぞ」と怖畏せん。復た恐らくは害を彼らん、是故に足の下より光を放ちたまふ。

【九〇】 第二七問、餘天の光と、佛のそれとの差異如何。

【九一】 第二八問、頭上より放光せずして、足下より放光する理由如何。

問うて曰く、(七) 足の下の六百萬億の光明乃至肉髻は、是れ皆數ふ可し、三千大千世界に尙ほ滿つべからず、何に況んや十方をや。答へて曰く、此の身光は是れ諸光の本なり、本より枝流は無量無數なり。譬へば 迦羅求羅蟲は其の身微細なれども、風を得れば轉た大にして、乃至能く一切を吞食するが如し。光明も亦た是の如く、度すべきの衆生は轉た増して限なきことを得るなり。

經

足の十指・兩の踝・兩の膝・兩の脛・脊・腹・背・胸・心・脅・腋・肘・腕・手の十指・項・口・四十の齒・鼻・兩の乳・兩眼・兩耳・白毫の相・肉髻・各各六百萬億の光明を放つ。

論

問うて曰く、(九) 足の下の光明は能く三千大千及び十方の世界を照す、何ぞ身分各各六百萬億の光明を放つことを用ふるや。答へて曰く、我先に言へり。足の下の光明は下方を照せども餘方に滿たず、是の故に更に身分の光明を放つ。有人の言く、一切の身分は足を立ち處と爲すが故に最大なり、餘は爾らず。是の故に佛は初めて足の下より、六百萬億の光明を放ら、以て衆生に示したまふ。三十二相の中の、初種なる足下安住相の如く、一切の身分は皆神力あり。

問うて曰く、(一〇) 何の三昧に依り、何の神通に依り、何の禪定の中に依りて、此の光明を放ちたまふ

【七】 第二九問、有眼の光明を以て、如何ぞ無限の十方世界を充たし得んや。

【九】 迦羅求羅 (Kalaskula) は、身細なれども風を得れば轉た大なり。

【九】 第三〇問、足下よりの光明にて足りなむ、何ぞ餘の身分よりの放光を用ゆるや。

【一〇】 第三一問、何の三昧と神通と禪定とによりて光明を放ち給ふや。

や。答へて曰く、三昧王三昧の中より此の光明を放ちたまふ。六道の中の如意通、四禪の中の第四禪は此の光明を放つ。第四禪の中の火、勝處の火は、一切此の中に入りて光明を放つ。復次に、佛の初めて生れたまふ時、初めて佛と成りたまふ時、初めて法輪を轉じたまふ時、皆無量の光明を放ちて十方に滿てたまふ。何に況んや、摩訶般若波羅蜜(多)を説きたまふの時、光を放ちたまはざらんや。

【二〇】 譬へば轉輪聖王の珠寶の如きは常に光明あつて、王の軍衆を照すこと、四邊各一由旬なり。佛も亦是の如く、衆生縁の故に、若し三昧に入らず、恒に常光を放ちたまふ。何となれば佛は衆の法寶を成じたまふを以てなり。

釋

是の諸の光より大光明を出し、遍れく三千大千世界を照し、三千大千世界より遍れく東方如恒河沙等の諸の世界を照す。南西北方四維上下も亦復是の如し。若し衆生あつて、斯の光に遇ふ者は必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

論

問うて曰く、二〇三、火の相は上を炎し、水の相は下を潤ほし、風の相は旁に行くが如く、是の光明の火氣も應當に上に去るべし。云何が遍れくの三千大千世界及び十方世界に滿つや。答へて曰く、光明に二種あり。一には火氣、二には水氣なり。日球は火氣にして、月球は水氣なり、火の相は焰上すと雖も、而も人の身中の火は上下に遍れく到る。日火も亦た爾なり。是の故に夏月には地水

【二〇】 轉輪聖王の珠光。  
 【二〇三】 第三二問、光明の大氣は上昇せん、然るな如何にして十方世界に滿し得るか。  
 【二〇三】 光明に火氣水氣の二種あり。

盡く熟す。是を以ての故に火は皆上らざることを知る。

復次に、是の光明は、佛の力の故に、遍ねく十方に至る。譬へば彊弓の箭を遣れば、隨所に向ひ至るが如し。

問うて曰く、(一〇四)何を以てか先づ東方を照し、南・西・北を後にするや。答へて曰く、日の出づるは東方を上と爲すを以ての故に、佛は衆生の意に隨つて、先づ東方を照したまふ。復次に、俱に一難あり。若し先づ南方を照さば、當に「何を以てか先づ東・西・北方を照さざる」と言ふべし。若し先づ西方・北方を照すも亦た爾なり。

問うて曰く、(一〇五)光明は幾時か當に滅すべきや。答へて曰く、佛は神力を用ゐたまふ。「是の故に」住せんと欲すれば便ち住し、神力を捨つれば便ち滅す。佛の光は燈の如く神力は脂の如し。若し佛神力を捨てたまはすんば光滅せざるなり。

【一〇四】

光明出でて東方、如恒河沙等の世界を過ぐ、乃至十方も亦復た是の如し。

【一〇五】

問うて曰く、云何が 三千大千世界と爲すや。答へて曰く、佛、二空を離阿含の中に分別して説きたまへり。千の日・千の月・千の閻浮提・千の瞿陀尼・千の鬱怛羅越・千の弗婆提・千の須彌山・千の四

【一〇四】第三三問、先づ東方を照し、次に南西北方を照す理由如何。  
【一〇五】第三四問、光明存續の時期如何。  
【一〇六】第三五問、三千大千世界とは何ぞや。  
【一〇七】雜阿含(Samyutta Nikaya)

天王天處・千の三十三天・千の夜摩天・千の兜率陀天・千の化自在天・千の他化自在天・千の梵世天・千の大梵天・是を小千世界と名け、二(二〇)より名く、周利と名く、周利千世界を以て一と爲し、一より數へて千に至るを、二千中世界と名く。二千中世界を以て一と爲し、一より數へて千に至るを、三千大千世界と名く。初の千は小、二の千は中、第三を大千と名く。千千と數を重ぬるが故に大千と名く。二に過ぎ千に復するが故に三千と言ふ。是を合し集めて、百億の日月乃至百億の大梵天と名け、是を三千大千世界、一時に生じ一時に滅すと名く。有人の言く、住する時一劫、滅する時一劫、還た生ずる時一劫、是れ三千大千世界なり」と。大劫に亦三種あり、水火風に破らる。小劫に亦三種あり、刀病飢に破らる。此の三千大千世界は虚空の中に在り。風は水を上にし、水は地を上にし、地は人を上にす。須彌山に二天處あり、四天處と三十三天處となり。餘殘は夜摩天等、福德の因縁、七寶の地なり。風は空中に擧り、乃至大梵天は皆七寶の地にして皆風の上に在り、此の三千大千世界は光明遍ねく照し、照し竟つて餘光過出し、東方の恒河沙等の如き諸の世界を照す。南西北四方維上下も亦復是の如し。

問うて曰く、(二〇九) 是の光は遠く照して云何が滅せざるや。答へて曰く、光明は、佛の神力を以て本と爲す、本在るが故に滅せず。譬へば龍泉は龍の力の故に竭きざるが如く、是の諸の光明は佛の心力を以ての故に、遍ねく十方を照し、中間にして滅せざるなり。

●●● (208) 周利 (Sāradhi)

【二〇九】第三六問、光の滅せざる理由如何。

問うて曰く、二〇 閻浮提の中の種種の大河の如きは、亦恒河に過ぐる者あり。何を以てか常に恒河の沙等と言ふや。答へて曰く、恒河は沙多し、餘の河は爾らず。

復次に、是の恒河は是れ佛の生れたまふ處、遊行したまふ處にして、弟子の眼に見るが故に、以て喩と爲したまふ。復次に、佛は閻浮提に出でたまふ。閻浮提に四大河あり、此邊より出でて、四方の

大海の中に入る。北邊の雪山の中に、阿那婆達多池あり。是の池の中に金色の七寶の蓮華あり、大さ車蓋の如し。阿那婆達多龍王は、是れ七住の大菩薩なり。是の池の四邊に四の水洑あり。東方は象頭、南方は牛頭、西方は馬頭、北方は獅子頭なり。東方の象頭より恒河を出す、底に金沙あり。南方の牛頭は、二三 幸頭河を出す、亦底に金沙あり。西方の馬頭は、二三 婆叉河を出す、底に亦金沙あり。北方の獅子頭は、二三 私陀河を出す、底に亦金沙あり。是の四河は、皆北山より出づ。恒河は北山より出でて、東海

に入り、幸頭河は北山より出でて南海に入り、婆叉河は北山より出でて西海に入り、私陀河は北山より出でて北海に入る、是の四河の中にて、恒河は最大なり。四遠の諸人の經書に、皆恒河を以て福德の吉河と爲す。若し中に入つて洗ふ者は、諸の罪垢惡、皆悉く除き盡す。人、此の河を敬事するを以て共に識知す、故に恒河の沙を以て喩と爲す。

- 【二〇】 第三七問、恒河沙をのみ譬に引く理由如何。
- 【二一】 阿那婆達多池 (Anavatapta) (二一) は、無熱惱池と譯す。
- 【二二】 幸頭河は現今のインダス河なり。
- 【二三】 婆叉河 (Pacavati) 又は、*Prayati* (二四) 私陀河 (Sita)

復次に、餘の河は名字屢轉すれども、此の恒河は世世に轉せず。是を以ての故に、恒河の沙を以て喩と爲し、餘の河を取らず。

問うて曰く、(二五)恒河の中の沙は幾許ありと爲すか。答へて曰く、一切の算數も知る能はざる所な

り、唯、佛及び法身の菩薩のみ有つて能く其の數を知る。佛及び法身の菩薩は、一切の閻浮提の中の微塵の生滅の多少を皆數へ知れり。何に況んや

恒河の沙をや。佛、祇桓の外の林中の樹下に、在して坐したまひし時、

一婆羅門あり、來つて佛の所に到り、佛に問ひたてまつる、「此の樹林に、幾〔許〕の葉ありや」と。佛、即時に便ち答へたまはく、「若干の數あり」と。

婆羅門は心に疑ふらく、「誰か證知する者ならんや」と。婆羅門去つて一樹の邊に至り、一樹の上の少しばかりの葉を取つて藏し、還た佛に問ひたて

まつる、「此の樹林には、定んで幾〔許〕の葉ありや」と。「佛」即ち「今や若

干の葉を少ぐ」と答へて、其の取る所の如く之を語りたまふ。婆羅門知り已つて、心に大に敬ひ信じ、

佛に求めて出家し、後、羅阿漢道を得たり。是を以ての故に佛は能く恒河の沙の數を知りたまふことを知る。

問うて曰く、(二七)幾許の人あつてか、佛の光明に値うて、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得るや。若し

【二五】第三八問、恒河の沙の數は幾許ありや。

【二六】佛、祇桓(Geyuan)の外林の中に在して一時に樹葉を數へ給ひし因縁。

【二七】第三九問、佛の光明に值うて得道するもの幾許ありや。又佛は何故に常に光明を放つて衆生を得道せしめ給はざるや。

光明くわうみやうに値あうて便すはなも道みちを得うる者ものならば、佛ほとけは大慈だいじあり、何を以もつてか常つねに光明くわうみやうを放はなつて、一切いっさいをして道みちを得えせしめざるや。何ぞ持戒ぢかい・禪定ぜんぢやう・智慧ちゑを須まつて、然しかる後のちに道みちを得えんや。(二八) 答こたへて曰いはく、衆生しゆじやうは種種しゆじゆの因縁いんねんあれば、度どを得うること同おなじからず。禪定ぜんぢやうにして度どを得うる者ものあり、持戒ぢかい・説法せつぽうにして度どを得うる者ものあり、光明くわうみやう身に觸ふれて度どを得うる者ものなり。譬たとへば城しろに多おほくの門もんありて、入いる處ところは各各かくかくなれども、至いたる處ところは異ことならざるが如ごとし。人ひとは光明くわうみやうの身みに觸ふれて度どを得うる者ものあり、若もしくは光明くわうみやうを見み、若もしくは身みに觸ふるも度どを得えざる者ものあり。

【二八】

佛ほとけの時に、世尊よそんの舉身こしんの毛孔まうくは、皆みな亦また微笑びぎやうして、諸しよの光くわうを放はなる、遍まれく三千大千世界さんぜんたいせんせかいを照てし、復また十方じふぱうの恒河こつがはの沙すなの如ごとき等の世界せかいに至いたる。若もし衆生しゆじやうあつて、斯この光くわうに遇あふ者ものは、必かならず阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだいを得えん。

【二九】

衆生しゆじやうに因縁多おほきが故ゆゑに得え道の縁えんも亦また不同ふたうなり。重ちゆうに其その譬たとへ。

【三〇】

問とうて曰いはく、二九にじゅうきゅう上かみに已まに身みを舉あげて微笑びぎやうすと云いふ。今何いまなにを以もつての故ゆゑに、復また一切いっさいの毛孔まうく、皆みな笑わらふと云いふや。答こたへて曰いはく、身みを舉あげて微笑びぎやうするは、是これ麤そ分ぶんなり。今一切いまいっさいの毛孔まうく、皆みな笑わらふは、是これ細さい分ぶんなり。

復次またつぎに、先まづの身みを舉あげて、微笑びぎやうするの光明くわうみやうは有あり數かずなり。今一切いまいっさいの毛孔まうく皆みな笑わらふは、光明くわうみやうあつて而しかも無な數かずなり。

復次に、(三〇) 先の擧身の光明に、未だ度せざる所の者は、今毛孔の光明に値うて、卽便ち度することを得。譬へば樹を搖がして菓を取るに、熟する者前に墮ち、若し未だ熟せざる者は、更に復後に搖がすが如し。又魚を捕ふるに、前の網に盡さざれば、後の網に乃ち得るが如し。笑ふの因縁は上に説くが如し。

【三〇】得道の遲速は機の熟未熟に依ることなり明す。

# 巻の第八

【經】 初品の中の「光を放ちたまふ」の餘を釋す。

爾の時に、世尊は常光明を以て、遍れく三千大千世界を照し、南東方の恒河の沙の如き等の諸佛の世界に至る。乃至十方も亦復是の如し。若し衆生あつて斯の光に遇ふ者は必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

## 論

問うて曰く、上に已に舉身微笑し、毛孔より光明を放つと云へり。今何を以てか復常光を放

つて、十方を照すと云ふや。答へて曰く、人あり、異なる光明を見ては

佛の光に非すと謂ひ、佛の常光の轉た大なるを見ては、心則ち歡喜し、此

れ實の佛の光なりと〔謂ひ〕。便ち必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ればなり。

問うて曰く、云何が常光と爲すや。答へて曰く、佛身の四邊に各一丈の

光明あり。菩薩生ずれば便ち此あり。是れ三十二相の一なり。名けて丈光の相と爲す。

問うて曰く、佛は何を以ての故に、光常に一丈より多からざるや。答へて曰く、一切の諸佛の常光

は無量にして、常に十方世界を照す。釋迦牟尼佛の神通身光も無量なり。或は一丈・百丈・千丈・萬億

乃至三千大千世界乃至十方に滿つこと、諸佛の常法の如し。但だ五濁世に於ては、衆生の少徳・少智

の爲の故に、一丈の光明を受く。若し多くの光を受けば、今の衆生は福薄く根鈍にして、目其の明

- 【一】 第一問、常光明を放つといふ理由如何。
- 【二】 第二問、常光とは何ぞや。
- 【三】 第三問、佛の光明の一丈より多からざる理由如何。

に堪へず。人、天の身を見るが如きは、眼則ち明を失す。光は盛にして、眼は微なるを以ての故なり。若し衆生利根にして福重ければ、佛は則ち之を爲に無量の光明を現じたまふ。復次に人あり、佛の常光を見て、歡喜して得度す。譬へば國王の常食の餘を以て、諸の群下に賜ふに、得るもの大に喜ぶが如し。佛も亦た是の如く、人あり、佛の種種の餘光を見ては、心に歡喜せざれども、佛の常光を見れば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。

【三】

爾の時に、世尊は廣長舌相を出だし、遍行く三千大千世界を覆ひ、照怡し微笑して、其の舌根より、無量千萬億の光を出したまふ。是の一一の光は、化して千葉の金色の寶華と成り、是の諸の華の上に皆化佛あつて、結跏趺坐し、六波羅蜜(多)を説きたまふに、衆生の聞く者、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得。復た十方の恒河の沙の如きの等道佛の世界に至ることも、皆亦是の如し。

論

問うて曰く、佛世尊の如きは、大徳にして尊重なり、何を以ての故に廣長舌を出して、輕相の如くに似たるや。答へて曰く、上の三種の放光は、十方の衆生を照して、度脱することを得せしむ。今摩訶般若波羅蜜(多)を口説したまはんと欲す。摩訶般若波羅蜜(多)は、甚深にして、解し難く、知り難く、信愛すべきこと難し。是の故に、廣長舌を出して證と爲す。舌相是の如くなれば、語は必ず眞實なり。如昔一時、佛は舍婆提國に於いて、受歲し竟りたまふ。阿難は佛に從つて諸國に遊行

【四】 第四問、佛は大徳なり、舌を出すが如き輕舉をなし給ひしは何故なるか。

し、婆羅門城に到らんと欲す。 婆羅門城の王、佛の神徳ありて、能く衆生を化し、群心を感動した

まふを知り、「今此に來り到らば、誰か復我を樂はん」と、便ち制限を作さく、「若し佛に食を與へ、佛

語を聴く者あらば、五百の金錢を輸さしめん」と、制限を作して後、佛、其の國に到り、阿難を將

て鉢を持し、城に入つて乞食したまふに、城中の衆人、門を閉ぢて應せず、佛は空鉢にして出でたま

ひき。是時に一家に一の老いたる使人あり。破れたる瓦器を持し、臭き瀝灑を盛り、門を出でて之を

棄つ。佛世尊の空鉢にして來たまふを見て、老いたる使人は、佛の相好の金色の白毫、肉髻、丈光あつ

て、鉢空しく食なきを見、見已つて思惟すらく、「此の如きの神人は、應に

天厨を食すべし。今自ら身を降し、鉢を持して乞を行じたまふは、必ず是

れ大に一切を慈愍したまふが故ならん」と。信するの心清淨にして、好

き供養を欲すれども、願の如くするに由なし。慚愧して佛に白さく、「供を

設けんと思欲すれども、更に得ること能はず。今此の弊食を、佛須るたまはば取りたまふ可し」と。

佛は其の心の信敬にして清淨なることを知り、手を申べ鉢を以つて其の施食を受けたまふ。佛、時に

即ち笑ひたまひ、五色の光を出して、普ねく天地を照らし、還つて眉間の相より入る。阿難、時に

て、長跪し、佛に白さく、「唯だ然なり、世尊、願くは今笑ひたまふ因縁の意を聞かん」と。佛、阿

難に告げたまはく、「汝、老女人の信心にして、佛に食を施すを見るや不や」と。阿難言さく、「見るし

【五】 佛、婆羅門城に入り空鉢にして出て給へば、老女瀝灑を供養して、廣大の報を得たり。

と。佛の言はく、「是老女人は、佛に食を施すが故に、十五劫の中に天上人間にして、福を受け快樂にして惡道に墮せず、後、男子の身を得て、出家學道して辟支佛と成り、無餘涅槃に入らん」と。爾の時に、佛の邊に一の婆羅門あり、立どころに偈を説いて言はく、

『汝は是れ日種利の姓にして、淨飯國王の太子なり。而るに食を以ての故に大妄語せり、此の如きの臭食の報何を重からんや。』

是の時に、佛は面上を覆ふこと髪の際に至れる廣長舌を出し、婆羅門に語つて言はく、「汝、經書を見るに、頗し此の如きの舌ある人にして、而も妄語を作すや不や」と。婆羅門の言く、「若し人は舌能く鼻を覆へば虚妄なし、何に況んや乃ち髪の際に至るをや。我は心に佛の必ず妄語したまはざるを信すれども小施の報の多きと是の如くなるをを解せず」と。佛、

婆羅門に告げたまはく、「汝、頗し曾つて世に希有にして見難き所の事を見しや不や」と。婆羅門の言く、「見たり。我曾て婆羅門と共に道中を行くに、尼拘盧陀樹を見る。「その」際、賈客の五百乗の車を覆へども、蔭は猶盡きず、是れ謂ゆる希有にして見難きの事なり」と。佛の言はく、「此の樹の種子の、其形の大小いかに」と。答へて言く、「大さ芥子の三分の一の如し」と。佛の言はく、「誰か當に汝が言を信すべき者あらんや。樹は大にして、爾して種子は甚だ小なり」と。婆羅門の言はく、「實に爾

【六】 尼拘盧陀樹の種子は芥子の三分の一なれども、其の蔭は五百乗の車を覆ふの喻を擧げて、小施の功德の大なるを説す

なり。世尊よ、我は眼を以て之を見る、虚妄に非るなり」と。佛の言はく、「我が老女人の淨き信心の施の大果報を得るを見るも亦た此の如し。樹の因少にして、報の多きも又是れ、如來の福田の良美の致す所なり」と。婆羅門は心開け意解し、五體投地し過を悔いて佛に向ひ、「我が心、無狀に愚にして、佛を信じたてまつらす」と。佛、爲に種種に説法したまへば 初道の果を得、即時に手を舉げて、大に聲を發して言く、「一切の衆人よ、甘露の門は開けたり、如何が出でざる」と。一切の諸の婆羅門は、皆五百の金錢を送つて王に與へ、佛を迎へて供養し、皆言はく、「甘露味を得るに、誰か當に此の五百の金錢を惜むべき」と。衆人みな去りて、制限の法は破れたり。是の婆羅門の王も亦た臣民と共に佛法に歸命し、城中の人は一切皆淨き信を得たり。是の如く佛の廣長舌相を出したまふは、不信者の爲の故なり。

問うて曰く、(八) 婆羅門の爲の如きは、舌相を出して面を覆ふ。今舌相の光明は、何を以てか乃ち三千大千世界に至るや。答へて曰く、覆面髮際ふくめんはつさいは小信の爲の故なり。今は般若波羅蜜はんにかはらみつた「多」の大事を興すおこが爲の故に、廣長舌相の三千大千世界を覆ふなり。

問うて曰く、(九) 是の一城の人、盡く此の面を覆ふの舌相を見ることを得るすら猶尙難しと爲す。何

【七】 初道の果とは聲聞四果の第一なる須陀洹即ち預流果のことにて、正しく三界の見惑を斷じ盡したる位をいふ。

【八】 第五問、佛の舌相の光明三千大千世界に至ると言ふ理由如何。

【九】 第六問、佛の舌相の、大千世界を覆ふとは、信じ難しと排す。

に況んや、今摩訶般若波羅蜜「多」を説くに、一切の大會、及び他方の無量の衆の集つて、而も盡く見  
ることを得るをや。又人の目に觀る所は數里に過ぎざるを以て、今三千大千世界に遍すと云ふは、

無乃大にして信じ難し。答へて曰く、佛は方便を以て其の神力を借り、能く一切をして皆吾相の此の

三千大千世界を覆ふことを見せしめ給ふ。若し神力を加へずんば、復た十住と雖も亦佛心を知らず。

【一〇】若し神力を加ふれば、乃ち畜生に至るも、能く佛心を知る。般若波羅蜜「多」の後品の中に説くが

如し。一切の衆人皆 阿闍佛會を見ることが、眼と對することを作す。亦

た佛、阿彌陀佛の世界の種種の嚴淨を説きたまふとき、阿難の言さく、「唯

だ願くは、見たてまつらんと欲す」と。佛、時に即ち一切の衆會をして、

皆無量壽佛世界の、嚴淨なることを見せしめたまふ。佛の吾相を見るこ

とも、亦復た是の如し。佛は廣長の吾相を以て、遍ねく三千大千世界を覆ひ已りて、然る後に便ち笑

ひたまふ。笑ふの因縁は上に説くが如し。

問うて曰く、前に已に吾相より光明を出す。今何を以ての故に吾根より、復た光明を放つや。

答へて曰く、一切をして重信を得せしめんと欲するが故に、又吾相の色は、珊瑚の如く、金光明淨

にして、共に相發起するを以ての故に、復た光を放ちたまふ。復次に、是の諸の光明は、變じて千

葉の金色の寶華と成り、吾相より此の千葉の金色の寶華を出し、光明徹照して、日の初めて出づる

【一〇】佛の神力を加ふれば、畜  
生と雖も佛心を知る。  
【一一】阿闍佛（アツカブツ）  
【一二】第七問、吾根より光明を  
出す理由如何。

が如し。

問うて曰く、何を以ての故に光明の中より、變化して此の寶華を作すや。答へて曰く、佛の坐せんと欲したまふが故なり。

問うて曰く、諸の床に坐すべし、何を必ずしも蓮華なるや。答へて曰く、床を世界と爲るは、白衣の坐法なり。又蓮華は軟かき淨きを以て、神力を現さんと欲して、能く其の上に坐すれば、壞れざらしむるが故なり。又妙法を莊嚴するの座なるを以てなり。又諸の華は、皆小にして、此の華の香淨くして大なるに、如くもの無きを以てなり。人中の蓮華は、大なることに尺に過ぎず。(四)漫陀耆尼池、及び、阿那婆達多池の中の蓮華は、大さ車蓋の如し。天上の寶蓮華は、復た此より大なり。是れ則ち、結跏趺坐に容るべし。佛の坐したまふ所の華は、復た此に勝れたること百千萬倍せり。又此の蓮華の臺の如きは、嚴淨香妙にして坐しつべし。

復次に、劫盡き焼る時は、一切皆空なり。衆生の福德の因縁力の故に、十方より風至り、相對し、相觸れて能く大水を持す。水上に一千頭の人、二千の手足なるあり。名けて(五)草紐と爲す。是の人の齋の中より、千葉の金色の妙寶なる蓮華を出すに、其の光の大に明かなること、萬日の俱に照すが如し。華の中に人あつて結跏趺坐す、此の人又無量の光明あり、名けて梵天王と曰ふ。此の梵天王の

【三】 第八問、佛の蓮華座に坐し給ふ理由如何。  
【四】 漫陀耆尼(Mandagiri)。  
【五】 草紐(草紐)。

心より八子を生じ、八子は天地、人民を生ず。是の梵天王は、諸の姪と曠とに於て、已に盡して餘すことなし。是の故に言く、「若し人ありて、禪の淨行を修し、姪欲を斷除せば、名けて梵道を行すと爲し、佛の轉法輪、或は法輪と名け、或は梵輪と名く」と。是の梵天王は蓮華の上に坐す。是の故に諸佛は世俗に隨ふが故に、寶華の上に於いて結跏趺坐して、六波羅蜜〔多〕を説きたまふ。「而して」此の法を聞く者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。

問うて曰く、(云六)釋迦文尼佛は無量千萬億の諸佛を化作したまふ。云何が

一時に能く法を説きたまふや。阿毗曇に説くが如きは、一時に二心なし。

若し化佛の語りたまふ時は化主は默すべし、化主の語りたまふ時は、化も亦默すべし。云何が一時に皆六波羅蜜〔多〕を説きたまふや。答へて曰く、

此の如きの説は外道及び聲聞變化の法なるのみ。佛の變化無量の三昧力の如きは不可思議なり。此の故に、佛自ら語りたまふ時は、無量千萬億の化佛も、亦一時に皆語りたまふ。又諸の外道及び聲聞の化は、化を作すこと能はず。佛世尊の如きは、化も復た化を作す。諸

の外道及び聲聞は滅して後、化を留むること能はず、佛世尊の如きは、身滅度して後、復た能く化を留め、佛の如くして異なること無し。復次に、阿毗曇の中によ、「一時に二心なし」と。今佛も亦た是

の如く、當に化語すべき時、亦た心は有ざれども、佛心は化を念じて、化語せしめんと欲すれば、即

【六】第九問、一時に二心はあり得べからず、然るを釋迦牟尼佛は、如何にして一時に六波羅蜜を説き給ふや。  
 【七】外道及び小乘の徒は滅して後、感化を残す事能はず。

便ち皆語る。

問うて曰く、佛は今般若波羅蜜(多)を説かんと欲したまふ。何を以てか化佛をして六波羅蜜(多)を説かしむるや。答へて曰く、是六波羅蜜(多)及び般若波羅蜜(多)は、一法にして異なること無し。

是五波羅蜜(多)は、般若波羅蜜(多)を得ざれば、波羅蜜(多)と名けず、檀(那)波羅蜜(多)の如きは般若波羅蜜(多)を得ざれば、世界に没在して盡法の中に有り。或は阿羅漢(辟支佛)道の般涅槃を得るもの、若し般若波羅蜜(多)を得れば、共に合して是

れを波羅蜜(多)と名け、能く佛道に至る。是を以ての故に般若波羅蜜(多)は、六波羅蜜(多)と一法にして異なることなし。般若波羅蜜(多)に二種あり。一には莊嚴(莊嚴)なり。人の好き環珞を著けて、其の身を莊嚴するが如し。人あり、著けざるは未莊嚴と名く。亦た國王の諸の營從を

將ゆれども、是を「王來る」と名け、若し營從なければ是を獨身と名くるが如し。是の如く東方の恒河の沙の如き等の世界、乃至十方も亦た爾なり。

問うて曰く、(二九)若し佛に是の如き大神力あり、無數千萬億の化佛、乃至十方に六波羅蜜(多)を

説いて一切を度脱せば、應に盡く度するを得べく、應に残あるべからざるや。答へて曰く、(三〇)三障あり、三惡道の中の衆生に解し知ると能はず。人中天上の、若くは大小、若くは大老、若くは大

【一八】 第一〇問、佛は般若波羅蜜多を説くに、何故に化佛し給ふや。  
【一九】 第一一問、佛は斯の如く大神力を具し給はゞ、正に度し盡して殘黨者あらざるべき道理ならずや。  
【三〇】 三障あるが故に盡く度する能はず。

病、及び上の無色の無想天は、皆聞くこと能はず、知ること能はざるなり。

問うて曰く、(三) 諸の能く聞き、能く知る者は、何を以てか皆道を得ざるや。答へて曰く、是亦た

盡く道を得べからず、何となれば結使の業障あるを以てなり。人あり結使の重きによつて、常に

結使の爲に心を覆はる。是を以ての故に盡く道を得ず。

問うて曰く、(三) 當今十方の諸佛も、亦應に化を遣はして六波羅蜜多を説くべし。我等も亦三障無

し、何を以てか聞かざるや。答へて曰く、(三三) 當今の衆生は、生れて惡世に

在り、則ち三障の中に入る。生れて佛の後には不善業の報なり。或は

世界に惡業障のみあり、或は厚く重き結使の障あつて、佛の後に障在

す。人多く厚重の結使の爲に障へらる。或は姪欲薄くして瞋恚厚く、瞋恚

薄くして姪欲厚く、姪欲薄くして愚癡厚く、愚癡薄くして瞋恚厚く、是の

如し等の展轉して互に厚薄あり。是の結使の障の故に、化佛の説法を聞か

ず知らず、諸佛の光明を見ず。何に況んや道を得るをや。(三四) 譬へば日出づれども、盲人には見えす、

便ち「世界に日月あること無し」と謂ふが如く、日に何の咎か有らん。又雷電の地を震へども、瞽人は

聲を聞かざるが如し。聲に何の過かあらん。今十方の諸佛は、常に經法を説き、常に化佛を遣はし

て、十方世界に至り、六波羅蜜多を説きたまへども、罪業の盲瞽の故に、法の聲を聞かず。是を以

【二】 第二二問、能知能聞の人にして、而も道を得ざる理由如何。

【三】 第一三問、我等が三障なくして聞かざる理由如何。

【三】 罪業あるが故に佛説を拜聽すること能はず。

【四】 盲人衆人の譬喩。

ての故に盡く聞見せず、復た聖人は大慈心ありと雖も、皆聞き、皆見せしむること能はず。若し罪滅びんと欲し、福將に生せんとすれば、是の時は乃ち佛を見、法を聞くことを得ん。

【釋】 獅の時に、世尊は故らに獅子座に在りて、獅子遊戯三昧に入り、神通力を以て、三千大千世界を感動し、六種に震動す。

問うて曰く、三昧は何を以てか獅子遊戯と名くるや。答へて曰く、譬へば獅子の鹿を搏つて、自在に戯れ遊ぶが如し。佛も亦た是の如く、此の三昧に入つて、能く種種に此の地を回轉し、六反震動せしめ給ふ。復次に、獅子遊戯とは、譬へば獅子戯るゝ日は、諸獸安隱なるが如し。佛も亦是の如く、是の三昧に入る時は、三千大千世界を震動し、能く三惡の衆生をして、一時に息ふことを得て、皆安隱なるとを得せしめ給ふ。復次に、佛を人の師子と名く、獅子遊戯三昧は、是れ佛戲三昧なり。此三昧に入る時は、此大地は六種に震動し、一切の地獄惡道の衆生は皆解脱を蒙り、天上に生ずることを得せしむ、是を名けて戲と爲す。

問うて曰く、佛は何を以てか此三昧に入りたまふや。答へて曰く、三千大千世界を動かし、三惡道の衆生を出し、三善道の中に著けんと欲するが故なり。復次に、上の三種の變化は佛身より出づ。人或は信心深からず。いま大地を動かして、衆生をして佛の神力の無量なることを知らしめんと欲し

【一】 第一四問、此を獅子遊戯三昧 (Simhāvivṛtīto bhūmi-samādhi) と名くる理由如何。

【二】 第一五問、佛が此の三昧に入り給ひし理由如何。

て、能く外物をして皆動せしめば、信淨の心を以て喜んで皆苦を離るゝことを得ん。

問うて曰く、二三 諸の阿羅漢及び諸天あり、亦能く地を動かす、何を以てか獨り是を佛の神力なり

と言ふや。答へて曰く、諸の阿羅漢及び諸天は具足して動かすこと能はず。唯だ佛世尊のみ能く大地

をして、六種に震動せしめたまふ。

問うて曰く、二六 佛は何を以ての故に、三千大千世界を震動せしめたまふ

や。答へて曰く、衆生をして、一切は皆空無常なることを知らしめんと欲す

るが故なり。諸人あり言はく、「大地及び日月・須彌・大海は、是れ有常な

り」と。是を以て世尊は、六種に地を動かして、此の因縁を示し、無常な

ることを知らしめたまふ。復次に、人の衣を染むるに、先づ塵土を去らん

と欲するが如し。佛も亦た是の如く、先づ三千世界の衆生をして、佛の神

力を見せしめ、敬心柔軟ならしめ、然る後に法を説きたまふ。是の故に六

種に地を動かし給ふ。云何が六種に動かすや。

【二三】 第一六問、餘地の諸天等も大地を動かすことを得、然るを今何故に佛にのみ此神力あるが如く言ふか。

【二六】 第一七問、佛が三千大千世界を震動せしめ給ひし理由如何。

【二八】 第一八問、六種の動ある理由如何。

釋

東に涌き西に没し、西に涌き東に没し、南に涌き北に没し、北に涌き南に没し、邊に涌き中に没し、中に涌き邊に没す。

問

問うて曰く、二九 何を以ての故に正しく六種の動あるや。答へて曰はく、地の動くに、上中下あ

り、下には二種の動あり。或は東に踊り西に没し、或は南北、或は邊中なり。中には四あり。或は東  
西、南北、或は東西邊中、或は南北邊中なり。上には六種の動あり、種種の因縁ありて地をして大に  
動かしむ。佛、阿難に告げたまふらく、八因八縁あつて地をして震動せしむと。別に説くが如し。

復次に、有人の言く、四種の地動あり。火動・龍動・金翅鳥動・天王動なり。二十八宿に日月は一

たび周繞す。若し月、昂宿・張宿・氏宿・婁宿・室宿・胃宿・是の六種の宿の中に至れば、爾の時に地動

じて崩るるが若し。是の動は火神に屬す。是の時は雨なくして江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天

子に凶あり、大臣は殃を受く。若し柳宿・尾宿・箕宿・壁宿・奎宿・危宿、是の

六種の宿の中なれば、爾の時は地動じて崩るるが若し。是の動は龍神に屬

す。是の時は雨なくして江河枯竭し、年に麥に宜しならず、天子に凶あり、

大臣は殃を受く。若し參宿・鬼宿・星宿・軫宿・元宿・寬宿、是の六種の宿の中なれば、爾の時は、若くは

地動き、若くは崩る。是の動は、金翅鳥に屬す。是の時は雨無くして、江河枯竭し、年は麥に宜しか

らず、天子に凶あり、大臣は殃を受く。若し心宿・角宿・房宿・女宿・虛宿・井宿・畢宿・觜宿・斗宿、是の

九種の宿の中なれば、爾の時は地動じて崩るるが如し、是の動は天帝に屬す。是の時は安隱にして、

風雨五穀に宜しく、天子は吉に、大臣は福を受け、萬民は安隱なり。復次に、地の動く因縁に小あ

り大あり。一閻浮提を動かすことあり、四天下を動かし、一千・二千・三千大千世界、小しく動するこ

【一】 四種の地動。  
【二】 地動くに大小の因縁あり。

と有り。小因縁を以ての故に、若くは福德の人、若くは生れ、若くは死して、一國の地動く、是を小動と爲す。大動は大因縁の故なり。佛初めて生れたまふ時、初めて佛と成りたまふ時、將に滅度せんとしたまふ時の如きは、三千大千世界皆震動せり、是を大動と爲す。今、佛は大に衆生を集めんと欲したまふが故に、此の地をして六種に震動せしめたまふ。

復次に、般若波羅蜜(多)の中に、諸の菩薩に記を授けて、「當に佛と作ることを得べし」と。佛は天地の大主たり。是の時に地神大に、「我今主を得たり」と喜ぶ。是の故に地動く。譬へば國王初めて立てば臣民喜慶し、皆萬歳と稱して、踊躍し歌舞するが如し。復次に、三千大千世界の衆生の、福德の因縁の故に、此の大地山河樹木一切の衆物あり。而も衆生は無常を知らず、是の故に佛は福德智慧大力を以て、此の世界を動かし、衆生の福德の微薄にして、一切磨滅し、皆無常に歸することを知らしめたまふ。

地は皆柔順にして、衆生をして和悦せしむ。

問うて曰く、(三三) 地動いて、云何が能く衆生の心をして、和悦することを得せしむるや。答へて

曰く、心は身に隨ふが故に、身樂しむ事を得れば、心則ち欣悦す。悦ぶとは共住の人、及び便身の具、能く心をして悦ばしむるなり。今是の三千大千世界の雜惡の衆生は其の處麤獷にして、善事あること

【三三】 第十九問、地動いて衆生の心を和悦せしむる理由如何。

無し。是の故に世尊は此の大地を動かし、皆柔順にして心に利益を得せしめたまふ。譬へば三十三天王の歡樂園の中に諸天の入る者は、心皆柔順にして歡樂し和悦して歡心生ぜざるが如し。若し阿脩羅の兵を起して來る時も都て闘心なし。是の時に、釋提婆那民、諸の天衆を將ゐて靈園の中に入れば、此の園中の樹木草實は、氣、和悦せず、靈園なるを以ての故に、諸の天人衆の闘心即ち生ず。佛も亦是の如く、此の大地は靈園・繁盛なるを以ての故に、變じて柔軟ならしめ、一切衆生の心をして喜悅を得せしめたまふ。又咒術の藥草を人の鼻に熏する時は、悲心便ち生じ、即時に開語するが如し。復た咒術藥草は人の心をして和悦し歡喜し、敬心に相向はしむることあり。咒術藥草すら尚ほ能く此の如し、何に況んや三千大千世界の地、皆柔順なるをや。

【譯】 諸天に歡樂園に入れば和悦し、靈園に入れば闘心を生ず。  
 【釋】 釋提婆那民 (Śakrabandhava) 第二〇問、佛もし能く三途八難をして解脱せしめ給はば、福を修し善を行ずる必要何處にありや。  
 【譯】 獅子遊戯三昧 (Simhacharya) 第三三章の初め (p. 110) 獅子遊戯三昧 (Simhacharya) (p. 110) 獅子遊戯三昧 (Simhacharya) (p. 110)

是の三千大千世界の中の、地獄・餓鬼・畜生及び八難處は、即時に解脱して天上に生ずること得、四天王天處より乃ち他化自在天に至る。

問うて曰く、若し佛、獅子遊戯三昧に入つて、能く地獄・餓鬼・畜生及び餘の八難をして、皆解脱するとを得て、四天處乃至他化自在天に生れしめたまはば、復た何ぞ福を修し、善を行じて乃ち果報を得ることを用ゐんや。答へて曰く、此は上に説くが如し。福德多き者は光を見て得度し、罪

垢深き者は地動じて乃ち度す。譬へば日出でて蓮華の池を照すに、熟する者先づ開き、生の者未だ敷かざるが如し。佛も亦是の如く、先づ光明を放ちたまふに、福熟し智利なるは、先づ解脱することを得、其の福未だ熟せざれば、智心利ならず、是の故に未だ得ず。佛の大慈悲は等しく一切を度して憎愛なし。亦樹果の、人其樹を動かせば、熟する者先づ墮つるが如く、佛も亦是の如し。是の三千大千世界は樹の如く、之を動かすものは佛なり。

先づ度する者は、果の熟せるにて、未だ度せざる者は果の生なるなり。

問うて曰く、毛 何を以ての故に善心の因縁は欲界の天に生じ、色界及び

無色界に生ぜざるや。答へて曰く、佛は此衆生を度し、道證を得せしめ

んと欲したまふ。無色界の中は身なきを以ての故に説法を爲す可らず、色

界の中は則ち厭心なく道を得べきこと難く（三六）禪樂多きが故に、慧心則ち

鈍し。復次に、佛は神通を以て感動し、此の三千大千世界の地をして、

皆柔順ならしめたまふ。衆生は信心にして歡喜を得るが故に、欲界の天に

生じ四禪及び四空定を得ざるが故に、色無色界に生ずることを得ず。

問うて曰く、（四〇）五陰は無常・空・無我なり。云何が天人の中に生れ、誰か死し、誰か生ずる者ぞ。答

へて曰く、是の事は讚菩薩品の中に已に廣く説けり。今當に略して答ふべし。

（四一）汝は「五は無常・空・

【三〇】 第二二問、福を作す者は但だ欲界に生じて、上二界に生ぜざる理由如何。

【三六】 道證。佛道修業の證果。

【三六】 禪樂とは、修行の人、諸の禪定に入れば、一心清淨にして萬慮俱に寂し、自然に道悅の妙味を得るをいふ。即ち三樂の一なり。

【四〇】 第二二問、五陰は無常・空・無我ならば、生死するものは誰ぞ。

【四一】 諸法は實に生死なし、譬へば幻師の殺すが如し。

無我なり」と言ふも、是の般若波羅蜜「多」の中には、五陰に常・無常・有・空・無・有・我・無我あること無し。若し外道の實我を求索するが如きは、是れ得べからず、但假名のみあり。種種の因縁和合の有にして、此れ名字のみ有るなり。譬へば幻人の人を相殺せば、其死を見、幻術の人をして起たしむれば、其生を見るが如し。生死は名字のみ有つて實無し。世界の法の中には實に生死あれども、實相の法の中には生死あると無し。復次に、生死の人には生死あり、不生死の人には生死なし。何となれば不生死の人は、大智慧を以て生の相を破るを以てなり。説くが如し。

『佛法の相は空なりと雖も、亦復斷滅ならず。生すと雖も、亦常に非ず。諸の行業を失はず。』

諸法は芭蕉の如し、一切は心より生ず。若し法の實なきことを知らば、是の心も亦復空なり。若し人あり空を念せば、是れ即ち道行に非ず。諸法は生滅せず、念あるが故に相を失す。有念は魔網に墮し、無念は則ち出づることを得、心動するが故に道に非ず、動せざるは是れ法印なり。』

經

是の諸の天人は、自ら宿命を識りて、佛大に敬慕し、佛の前に來詣し、眞實に佛の足禮し、即ち一面に住す。

論

問うて曰く、諸天生する時は三事自ら知ることあり。所來の處を知り、所修の福田の處を

【釋】第二三問、諸天生する時は三事あつて宿命を知る、人間の生るゝ時は三事なし、如何が宿命を知らん。

知り、本作る所の福德を知る。「然るに是に人の生する時は此の三事なし、云何が宿命を識るや。答へて曰く、人道は不定なり、或は識る者あり、或は識らざる者あり。復次に、佛の神力を假れば、則ち宿命を識る。」

問うて曰く、諸天の報は五神通ありて自ら宿命を識り、能く佛の所に到る。人は佛の神力を蒙り、宿命を知ることを得と雖も、所住の處遠きときは、云何ぞ能く佛の所に至らんや。答へて曰く、或は人あり生報に神通を得、轉輪王・聖人等の如し。或は人あり佛の神力を假るなり。

問うて曰く、人は十月にして生れ、三年乳哺し、十歳の後能く自ら出づ。今佛の威神を蒙れば三惡八難皆解脱するを得、天人の中に生じて即ち佛の所に至る。天は則ち爾るべし、人の法は未だ成せず、云何が來るとを得んや。答へて曰く、五道の生法は、各各同じからず、諸天と地獄とは皆化生。餓鬼には二種の生あり、若くは胎、若くは化生。人道と畜生には四種の生あり、卵生と濕生と化生と胎生となり。卵生とは、毘舍佉彌伽羅母の三十二子の如し、是の如き等を卵生の人と名く。濕生とは、揜羅婆利姪女・頂生・轉輪聖王の如し、是の如き等を濕生と名く。化生とは佛四衆と遊行したまふに、比丘尼衆の中に比丘尼あつて阿羅婆と名け、

【四三】 第二四問、人もし遠處に住せば如何にして佛陀の所に到るか。  
 【四四】 第二五問、人は長日月の間教養せらるゝ必要あり、如何にして佛所に到るべきか。  
 【四五】 五道の生法は各各同じからず。  
 【四六】 四種の生を釋す。  
 【四七】 毗舍佉彌伽羅母(三十二子)。  
 【四八】 揜羅婆利(Amalakhiya)。

毘舍佉彌伽羅母の三十二

子(三十二子)

揜羅婆利姪女・頂生・轉輪聖王の如し、是の如

き等を濕生と名く。化生とは佛四衆と遊行したまふに、比丘尼衆の中に比丘尼あつて阿羅婆と名け、

地中より化生す。及び劫の初に生るる時の人の如きは、皆化生なり。是の如き等を名けて化生と爲す。胎生とは常人の生るるが如し。化生の人は即時に長大し、能く佛の所に到る。人は報得の神通あるが故に能く佛の所に到る。復次に、佛の神力を借るが故に能く佛の所に到る。

【釋】

是の如く、十方の恒河沙等の如き世界の地は皆六種に震動し、一切の地獄餓鬼畜生及び餘の八難處は即時に解脫し、天上に生ずることを得て、第六天に奔る。

【論】

問うて曰く、三千大千世界には無量無數の衆生甚だ多し、何を以てか復十方の恒河沙等の如き、世界の衆生に及ぼすや。答へて曰く、佛力は無量にして、三千大千世界の衆生を度すと雖も、猶以て少しと爲す。是を以ての故に復十方に及ぼすなり。

問うて曰く、若し釋迦文尼佛、大神力を以て廣く十方を度したまはば、

復何ぞ餘の佛を須たんや。答へて曰く、衆生は無量にして一時に熟せざるが故に、又衆生の因縁は各各同じからざればなり。聲聞法の中に説くが如し。舍利弗に因縁ある弟子は、舍利弗を除いて

は諸佛すら尙度すること能はず、何に況んや餘人をやと。復次に、今は但東方の一恒河沙等のみを説き、二三四乃至千萬億恒河沙等の諸の世界の若きを説かず。又世界は無量無邊なるを以て、有邊有

【四九】第六天。他化自在天也。  
 【五〇】第六六問、十方の恒河沙の衆生に及ぼす理由如何、  
 【五一】第二七問、釋尊の神力よく十方を度せば、何ぞ更に餘佛の度生を俟たらんや。  
 【五二】舍利弗に縁ある弟子は彼以外には何人も或は諸佛も尙ほ度すること能はず。

量の衆生の若きは盡すべし。是を以ての故に十方の無量の世界の諸佛も應に度すべきなり。

經

爾の時に 三千大千世界の衆の生盲の者は視ることを得、聾者は聽くことを得、瘡者は能く言ひ、狂者は正しき事を得、

亂者は定まることを得、裸者は衣を得、飢渴者は飽満することを得、病者は愈ゆることを得、形残る者は具足することを得たり。

論

問うて曰く、一畜衆生の苦患は百千種あり。若し佛に神力あらば、

何を以てか遍ねく解脱することを得せしめざるや。答へて曰く、一切皆救ふ。今は但だ略して、巖なる者を説く、種種の結使を説略して三毒と爲すが如し。

問うて曰く、但だ盲者は視ることを得と言へば則ち足れり、何を以て

の故に生盲と言ふや。答へて曰く、生盲の者は先世の重罪の故なり。重罪の者すら猶尙能く視ることを得せしむ、何に況んや輕き者をや。

問うて曰く、奚が先世の重罪にして生盲ならしむるや。答へて曰く、若くは衆生の眼を破り、若くは衆生の眼を出し、若くは正見の眼を破つて罪福なきを言ふ。是の人は死して地獄に墮ち、罪畢つて人と爲り、生るるより盲なり。若くは復佛塔の中の火珠及び諸の燈明を盜み、若くは阿羅漢辟支

【五二】 佛力によつて盲聾瘡狂等皆癒ゆることを得。

【五三】 第二八問、若し佛に神力あらば、何故に百千種の衆生の苦患を解脱せしめざるや。

【五四】 第二九問、但だ盲者と言はずして、生盲の者と言ふ理由如何。

【五五】 第三〇問、生盲なる原因如何。

佛塔の珠及び燈明、若くは餘の福田の中の光明を奪取す。是の如き等の種種の先世の業因縁の故に、眼を失し、今世には若くは病、若くは打たるるが故に眼を失す、是れ今世の因縁なり。復次に（五三） 十六種の眼病あり。闍耶迦藥王も治すること能はざる所の者をば、唯佛世尊のみ能く視ることを得せしめたまふ。

復次に、先づ視ることを得せしめて後、智慧の眼を得せしむ。聾者の聽くことを得るも亦是の如し。

問うて曰く、（五六） 若し生盲あらば、何を以てか生聾を説かざるや。答へて曰く、生盲の者は多くあれども、生聾の者は少し、是の故に説かず。

問うて曰く、（五七） 何の因縁を以ての故に聾なる。答へて曰く、聾は是れ先世の因縁にして、師父の教訓を受けず、行せずして、反つて瞋恚す、是の罪を以ての故に聾なり。

復次に、衆生の耳を截り、若くは衆生の耳を破り、若くは佛塔僧塔諸の善人の福田の中の鞞摩鈴（五八） 貝及び鼓を盗むが故に此の罪を得。是の如き等の種種は先世の業因縁なり。今世の因縁は若くは病、若くは打、是の如き等は、是れ今世の因縁にして聾を得るなり。

問うて曰く、（五九） 啞は言ふと能はず、何等の罪を作すが故に瘡なるや。答へて曰く、先世に他の舌

【五】 闍耶迦藥王も九十六種の眼病を治する能はず。

【六】 第三一問、唯生盲のみを説いて、生聾を説かざる理由如何。

【五】 第三二問、聾者たる因縁如何。

【六〇】 第三三問、啞者たる因縁如何。

を截り、或は其の口を塞ぎ、或は惡藥を與へて語ることを得ざらしめ、或は師の教、父母の教勅を聞  
 いて其の語を斷じ、其の教を非とし、或は惡邪の人と作つて罪福を信せず、正語を破りて地獄の罪を  
 受け、世に出生して人と爲りては、瘧にして言ふこと能はず、是の如きの種種の因縁の故に、瘧とな  
 るなり。

問うて曰く、〔六二〕狂者は正なるを得しと、云何が狂と爲すや。答へて曰く、先世に罪を作り、他の  
 坐禪を破り、坐禪の舍を破り、諸の咒術を以て人を咒ひ、瞋り鬪ひ諍つて  
 姪欲ならしめ、今世には諸の結使厚重なり、婆羅門の其の稻田を失ひ、其  
 の婦復た死すれば、即時に發狂し、裸形にして走るが如し。又〔六三〕翅舍伽  
 橋曇比丘尼の本白衣たりし時、七子皆死し、大に憂愁するが故に、心を失  
 つて發狂せるが如し。有人は大に瞋れども、自ら制すること能はず、大癡  
 狂と成り、有愚癡の人は、惡邪の故に、灰を以て身に塗り、髮を抜き、裸  
 形狂癡にして糞を食す。人あり、若くは風病、若くは熱病の、病重くして狂と成る。有人は惡鬼に著  
 かれ、或は有人は癡にして雨水を飲んで狂す。是の如くして心を失ふ。是の如きの種種を名けて狂と  
 爲す。佛を見たてまつることを得るが故に、狂は即ち正となることを得るなり。

【六二】 第三四問、狂者とは何ぞや。  
 【六三】 翅舍伽橋曇(ケイシヤカゴトク) 比丘尼の七子みな死して發狂せし因縁。  
 【六四】 第三五問、狂と亂との別如何。

問うて曰く、〔六四〕亂は定まるとを得しと、狂は即ち是れ亂なり、何を以てか〔この〕事を別つや。答へ

て曰く、有人は狂せざれども、而も心多く散亂し、志は獼猴の如くにして、専ら住すること能はず、是を亂心と名く。復た有は遷務忿忿として、心衆事に著して則ち心力を失し、道を受くるに堪へざるなり。

問うて曰く、(畜) 亂心は何の因縁あるや。答へて曰く、善心轉た薄くして、不善に隨逐す、是を心亂ると名く。復次に、是の人は無常を觀せず、死相を觀せず、世の空を觀せず、壽命に愛著し、事務を計念し、種種に馳散す、是の故に心亂るるなり。復次に、佛法の中の内樂を得ず、外に樂事を求めて、樂因を隨逐す、是の故に心亂る。是の如きの亂人にして、佛を見たてまつることを得るが故に、其の心定まることを得るなり。

問うて曰く、(畜) 先に「狂者に正しきことを得」と言ひ、今裸者は衣を得と言ふ。狂を除いて、云何ぞ更に裸あるや。答へて曰く、狂に二種あり。一は人皆狂と知り、二は惡邪の故に自ら裸なるも、人(その)狂なるを知らず、説くが如くんば、(畜) 南天竺國の中に法師あり、高座にて五戒の義を説く。是の衆中に多くの外道あつて來聽せり。是の時に國王難じて曰く、「若し所説の如くんば、有人は酒を施し及び自ら酒を飲み、狂愚の報を得、當今の世人は態に狂者多く、正しき者は少かるべし。而るに今狂者は更に少く、狂せざる者は多し。何を以

【畜】 第三六問、亂心の因縁は何ぞや。  
【六畜】 第三七問、狂と裸と何の別ありや。  
【畜】 南天竺の一法師「飲酒の者を狂者となす」と説破せし因縁。

ての故に斷るべし」と。是時に、諸の外道の輩の言く、「善い哉、斯の難や甚だ深し、是の禿高座は必ず答ふること能はざらん、王は利智なるを以ての故に」と。是の時法師は指を以て諸の外道を指し、而して更に餘事を説く。王は時に即ち解す、諸の外道は王に語つて言く、「王の難は甚だ深し。是答ふることを知らず、知らざる所を耻ぢて、但だ指を擧げて、更に餘事を説く」と。王は外道に語るらく、「高座の法師は、指答は已に訖れり、汝を護らんとするが故に言を以て説かず、向ふ者は汝を指して言く、「汝等は是れ狂なり、狂は少からざるなり」と。汝等は灰を以て身に塗り、裸形にして耻なく、人の鬮體を以て糞を盛りて食し、頭髮を抜き、刺上に臥し、倒まに懸り、鼻を重じ、冬は則ち水に入り、夏は則ち火に炙る、是の如きの種種の所行は、道に非ず、皆是れ狂相なり。」

「復次に、汝等が法は肉を賣り、鹽を賣るを以て、即時に婆羅門の法を失す。天祠の中に於て牛を布施することを得れば、即時に之を賣つて自ら法を得と言ふ。牛は則ち是れ肉なり、是れ人を誑惑す、豈に失に非ずや。又言く、吉河の水中に入れば、罪垢みな除くと、是は罪福の爲に因となり、縁となること無し。肉を賣り、鹽を賣つて、此れ何の罪かあらん。吉河の水中に入れば、能く罪を除くと言ふ。若し能く罪を除かば、亦能く福を除かん。誰か吉なる者かある。是の如きの此の諸事は、因なく縁なし、強いて因縁と爲す、是を則ち狂と爲す。是の如きの種種の狂相は、皆是れ汝等にあり。法師は汝を護らんとするが故に、指して説かず」と。是を名けて、裸形の狂と爲す。復次に、有人は

貧窮にして衣なく、或は弊衣、纏繞なるも、佛力を以ての故に、其をして衣を得せしむ。

問うて曰く、**〔五〕** 飢えたる者は飽くことを得、渴せる者は飲むとを得」と、云何が飢渴するや。答へ

て曰く、福德薄きが故に、先世に因なく、今世に縁なし、是の故に飢渴す。復次に、是の人は先世に

佛・阿羅漢・辟支佛の食及び父母所親の食を奪ひ、佛世に値ふと雖も、猶故らに飢渴す、「そは」罪重き

を以ての故なり。

問うて曰く、**〔六〕** 惡世に生せる人あり、好き飲食を得、佛世に生れ値うて

更に飢渴す。若し罪人は佛世に生れ値ふべからず、若し福人は惡世に生る

べからず、何を以ての故に爾るや。答へて曰く、業報の因縁、各各不同なり、或は有人は佛を見たてまつるの因縁あるも、飲食の因縁なく、或は飲

食の因縁あるも、佛を見たてまつるの因縁なし。譬へば黒蛇にして而も摩

尼珠を抱へて臥し、阿羅漢の人あり、食を乞うて得ざるが如し。**〔七〕** 又迦葉

佛の時の如きは、兄弟二人あり。出家し道を求む、一人は戒を持し、經を誦し坐禪し、一人は廣く檀

越を求め、諸の福業を修す。釋迦文佛世に出でたまふに至りて、一人は長者の家に生れ、一人は大白

象と作つて力能く賊を破す。長者の子は出家し道を學んで、六神通の阿羅漢を得たり。而も薄福なる

を以て、食を乞へども、得ること難し。他日鉢を持し、城に入りて食を乞ふ。遍なく得ると能はず。

**〔五〕** 第三八問、何をか飢渴の因縁と言ふ。  
**〔六〕** 第三九問、人或は惡世に生れて好飲食を得、或は佛世に値うて飢渴する理由如何。  
**〔七〕** 迦葉佛の時、兄弟出家し、一人は象となり、一人は羅漢となりし因縁。

白象の廐に到りて見るに、王は象に供し、種種豊足す。此の象に語つて言はく、「我と汝と俱に罪過ありし。象は即ち感結して、三日食はず。象を守る人は怖れて、道人を求覓め見えて問うて言はく、「此の何の呪を作して、王の白象をして、病んで食すること能はざらしむるや」と。答へて言はく、「此の象は是れ我が先身の時の弟なり、共に迦葉佛の時に於て、出家し道を學べり。我は但戒を持し、經を誦し、坐禪のみして、布施を行せず。弟は廣く檀越を求め、諸の布施を作すも、戒を持せず、學問せざりき。「而して」其の戒を持し、經を誦し、坐禪せざるを以ての故に此の象と作り、大に布施を修するが故に飲食備具し、種種豊足せり。我は但だ道を行じて布施を修せざるが故に、今道を得と雖も、食を乞ふて得ること能はず」と。是の事を以ての故に因縁同じからず、佛の世に値ふと雖も猶ほ故らに飢渴す。

【七〇】 第四〇問、衆生は如何にして飽満するか。

問うて曰く、乞此の諸の衆生は、云何が飽満するや。答へて曰く、有人は言ふ、佛は神力を以て食を變作し、飽満することを得せしむと。復た有人は言ふ、佛の光身に觸れて、飢え渴せざらしむ、譬へば如意摩尼珠の如し。人あり、念すれば則ち飢え渴せず、何に況んや佛に値はんをやと。病は愈ゆることを得とは、病に二種あり。先世の行業報ゆるが故に種種の病を得、今世に冷熱の風發るが故に亦種種の病を得。今世の病に二種あり。一には内病、五臟調はず、結堅せる宿疾なり。二には外病、奔車逸馬より堆壓墜落し、兵刃刀仗の種種の諸病なり。

問うて曰く、三の因縁を以てか病を得るや。答へて曰く、先世に好んで鞭杖拷掠・閉繫を行ひ、種種に惱ますが故に今世に病を得。現世の病は身を將ゆるとを知らずして飲食を節せず、臥起常なるも無し、是事を以ての故に種種の諸の病を得るなり。是の如く四百四病あり。佛の神力を以ての故に、病者をして愈ゆるとを得せしめたまふ。説くが如きは、佛、舍婆提國に在すとき、一の居士あり、佛及び僧を請して、舍に於て飯食せしむ。佛、精舎に住して食を迎へたまふに五の因縁あり。一には定に入らんと欲す。二には諸人の爲に法を説かんと欲す。三には遊行して諸の比丘の房を觀んと欲す。四には諸の病める比丘を見る。五には若し未だ結戒せざれば諸の比丘の爲に結戒せんと欲す。是の時に佛は手づから戸を持して排き、諸の比丘の房に入りて見るに、一の比丘病み苦めども、人の瞻視するなく、臥して大小便し、起居すること能はず。佛、比丘に問ひたまはく、「汝何ぞ、苦しむ所あるに、獨として人の看ること無きや」と。比丘答へて言く、「大德よ、我が性懶にして、他人の病あるも初より看視せず、是の故に我病むも他亦看ざるなり」と。佛の言はく、「善男子、我當に汝を看るべし」と。時に釋提婆那民は水を盥にし、佛は手を以て其の身を摩てたまふ。其の身を摩する時、一切の苦痛は即ち皆除き愈え、身心安隱なり。是時に世尊は安徐として、此病比丘を扶け起し、將ゐて房を出し、澡洗し、著衣せしめ、

【七〇】 第四一問、病を得る因縁如何。

【七一】 病に二種あり、先世の業病と今世の不攝生病となり。

【七二】 佛は諸病を癒し給ふ。

【七三】 佛、病める比丘を看て、手を以て身を摩し、病を癒除し給ひし因縁。

安徐として將け入れ、更に華を興へ敷いて坐せしめ、佛、病比丘に語りたまはく、「汝久しきより來勤求せず、未だ得ざる事を得せしめ、未だ到らざる事に到らしめ、未だ識らざる事を識らしめ、諸の苦患を受くること是の如し。方當に更に大苦痛あるべし」と。比丘聞き已りて、心に自ら思念すらく、「佛恩は無量にして、神力無數なり、手を以て摩でたまへば、我が苦痛は即ち除き、身心は快樂なり」と。是を以ての故に佛は神力を以て、病者をして愈ゆることを得せしめたまふ。

「形殘者は具足することを得」とは、(七五) 第四二問、何をか形殘と云ふや。

り、先世に他身を破り、其の頭を截り、其の手足を斬り、種種の身分を破り、或は佛像を壞し、佛像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀ち、或は父母の形像を破る。是の罪を以ての故に形を受くること多くは具足せず。復次に、不善法の報は身を受くること醜陋なり、若し今世には賊を被り、或は刑戮

を被り、種種の因縁以て殘毀を致す、或は風・寒・熱病の身に惡瘡を生じて、體分爛壞す、是を形殘と名く。(七六) 佛の大神を蒙つて、皆具足することを得。譬へば臍洩の中の奴の字は、(七七) 難抵といへもの

如きは、是れ波斯匿王の兄の子なり。端正勇健にして、心性向善なり。王の大夫夫人これを見て、心著し、即ち微に之を呼んで已に従はしめんと欲す。難抵従はず、夫人夫人に怒り王に向つてこれを讒し、

反つて其の罪を狀す。王聞いて即ち節節に之を解き、塚の間に棄つ。命未だ絶えざる頃、其の夜虎狼

【七五】 第四二問、何をか形殘と云ふや。  
 【七六】 佛は形殘者をして具足せしめ給ふ。  
 【七七】 難抵(Granthi) 譯して言續と言ふ。

羅刹來つて之を食はんと欲す。時に佛その邊に到り、光明之を照せば、身即ち平復し、其の心大に喜ぶ。佛爲に法を説きたまへば三道を得。佛其の手を牽いて、將に祇洹に至らんとす。是人の言く、「我が身は已に破られ已に棄てらる。佛、我が身を續ぎたまふ。今當に此の形壽を盡すまで、身を以て佛及び比丘僧に布施すべし」と。明日波斯匿王は、是の如きの事を聞き、祇洹に來至して、韃抵に語つて言く、「汝に向つて過を悔ゆ。汝は實に罪なし、枉げて相刑害せり。今當に汝が與に國の半を分ちて治せしむべし」と。韃抵の言く、「我已に厭へり、王も亦罪なし。我が宿世の殃咎罪報應に爾るべし。我は今身を以て、佛及び僧に施したてまつる、復還らざるなり」と。是の如く、若し衆生の形殘ね、具足せざる者あれば、佛の光明を蒙つて、即時に平復す。是の故に「乃至形殘ふも、皆具足することを得」と言ふ。佛の光明を蒙つて、即時に平復するなり。

【論】

一切の衆生、皆等心を得て相視ること父の如く、母の如く、兄の如く、弟の如く、姉の如く、妹の如く、赤親及善智識の如くす。是の時衆生は、等しく十善業道を行じ、梵行を淨修し、諸の瑕穢なく、快然として快樂す。譬へば比丘の第三禪に入つて、皆好樂を得、戒を持し、自ら守り、衆生を總ざざるが如し。

【論】

問うて曰く、是の諸の衆生は、未だ欲を離れず、禪定なく四無量心を得ず、云何が等心を得

【七〇】 第四三問、未離欲の衆生にして、如何ぞ能く等心を得ることあらんや。

んや。答へて曰く、(五九) 是の等は禪中の等に非ず、是れ一切衆生の中に於て、怨ます悲らざるなり。此の等を以ての故に善心を以て相視るなり。復次に、等心とは經の中に言へるあり、「云何が等心なる。相視ること、父の如く、母の如き、是を等心と名く」と。

問うて曰く、(六〇) 一切衆生は便ち是父母兄弟姉妹なりと視るや不や。答へて曰く、不なり、老者を見ては父母の如くし、長者は兄の如くし、少者は弟の如くす。姉妹も亦爾なり。等心の力の故に皆親親の如し。

問うて曰く (六一) 云何が父母に非るを父母と言ひ、乃至親親に非るを親親と言はん、妄語に墮せずや。答へて曰く、一切の衆生は、無量世の中に、父母兄弟姉妹親親に非る者なし。復次に、實相の法中には父母兄弟のひなし。吾我の顛倒の計に著するが故に名けて父母兄弟と爲す。今、善心の力を以ての故に、相視ると父の如くし母の如くするも、妄語に非るなり。復次に、人は義を以て相視しむ。父に非れども、之に事へて父と爲し、母に非れども、之に事へて母と爲すが如し。兄弟兒子も亦復是の如く、人は子あれども、惡を行すれば黜けて之を棄て、他姓の善く行へば養つて以て子と爲すが如し。是の如く、相視るを則ち等心と爲す。偈に説くが如し。

「他の婦を視るとは母の如く、他の財を見ることは火の如く、一切は親親の如し、是の如きを等

【七九】 等心の意義を辨す。

【八〇】 第四四問、一切衆生を父母なり兄弟なり姉妹なりと視るや如何。

【八一】 第四五問、父母に非ざるを父母と言ひ、兄弟にありざるを兄弟と言はば、妄語に墮するにあらずや。

見と名く。」

（八）是の時に衆生等しく、十善業道を行す」とは、身業道に三種あり。不殺と不盗と不邪姪となり。口業道に四種あり。不妄語と不兩舌と不惡口と不綺語となり。意業道に三種あり。不貪と不惱害と不邪見となり。自ら生を殺さず、他をして殺さしめず、殺さざる者を讚じ、人の殺さざるを見て其に代りて歡喜す。乃至邪見にも亦四種あり。

問うて曰く、（三）後の三業は業に非ず、前の七業道は亦業なり、云何が十善業道と言ふや。答へて曰く、少きを没して多きに從ふが故に通じて業道と名く。後の三は業に非ずと雖も能く業を起す、又復業の爲の故に生ず、是の故に總じて業道と名く。

「梵行を淨修し、諸の取穢なし」とは、問うて曰く、（四）上に十善業道を行

することを説き、此の理已に定れり。今何を以てか復梵行を淨修すと言ふや。答へて曰く、有人は十善業道を行すれども姪を斷せず、今更に此に梵天の行を行じ、姪欲を斷除することを讚するが故に「梵行を淨修す」と言ふ。

「諸の取穢なし」とは、姪を行するの人は身惡にして名臭る、是を以ての故に姪を斷するの人を讚じて、「諸の取穢なし」と言ふ。

【八三】 十善業道を明す。  
【八四】 第四七問、梵行を修すると、十善を行すると何の區別ありや。

「惛然として快樂すと」は、問うて曰く、(三七)此は何等の樂なりや。答へて曰く、是樂に二種あり。内樂と涅槃の樂となり。是の樂は五塵より生ぜず。譬へば石泉の水は中より出で外より來らざるが如し。心の樂も亦是の如く、等心を行じ、梵行を修し、十善業道を得て、清淨にして穢なき、是を内樂と名く。

問うて曰く、(三八)此の樂は何の界繫なりや、欲界繫なりや、色界(繫)無色界繫なりや。答へて曰く、是の樂は欲界には繫にして亦不繫なり、色、無色界には繫に非ず。今言く、「譬へば比丘の第三禪に入るが如し」と。若し是れ色界の繫ならば「然か」言ふべからず、「然るに今」譬へば比丘の第三禪を得るが如しと言ふ。是の事を以ての故に色界の繫に非るざことを知る。此は欲界の心に喜樂を生じ、一切身に滿ること、譬へば爛蘇を身に漬くれば、柔軟にして和樂なるが如し。不繫とは、般若波羅蜜(多)の相を觀するを得れば、諸法は不生不滅にして、實智慧を得、心に著する所なく、無相の樂なり。是を「不繫」と爲す。

問うて曰く、(三七)佛の言はく、「涅槃は第一の樂なり」と。何を以てか第三禪の樂と言ふや。答へて曰く、二種の樂あり、有受樂と有受盡樂となり。受盡樂とは一切の五陰盡きて更に生ぜず、是れ無餘涅槃

【三八】 第四八問、惛然として快樂すと如何なる樂なりや  
 【三九】 第四九問、惛然として快樂するときは樂は三界中の何れの界に屬するや  
 【四〇】 第五〇問、佛は涅槃を以て第一の樂なりと説きたまへり、然るを何ぞ第三禪の樂といふか

樂の樂なり。能く憂愁の煩惱を除き、心中歡喜す、是を樂受と名く。是の如きの樂受は満足して第三禪の中に在り。是を以ての故に「譬へば第三禪の樂の如し」と言ふ。

問うて曰く、(八六) 初禪二禪にも亦樂受あり、何を以ての故に但だ第三禪と言ふや。答へて曰く、樂に上中下あり。下は初禪、中は二禪、上は三禪なり。初禪に二種あり、樂根と喜根となり。五識相應は樂根、意識相應は喜根なり。二禪の中の意識相應は喜根にして、三禪の意識相應は樂根なり。一切の三界の中、三禪を除いては、更に意識相應の樂根なし。是れ五識は分別すること能はず、名字の相を知らず、眼識の生ずるは彈指の頃の如く、意識は已生なり。是を以ての故に五識相應の樂根は樂を満足すること能はず、意識相應の樂根は能く樂を満足す。是を以ての故に三禪の中には諸の功德少く、樂多きが故に、「背捨・勝處・一切入」なし。是の三禪を過ぎては更に樂なきなり。是を以ての故に「譬へば比丘の第三禪に入り、一切衆生、皆好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を燒さざるが如し」と言ふ。

問うて曰く、(八七) 何を以ての故に樂に次いで、後「皆好慧を得」と言ふや。答へて曰く、人は未だ樂を得ざれば能く功德を作し、既に樂を得已れば、心樂に著すると多きが故に功德を作さず、是の故に樂の後に次第に心に好慧を得。好慧とは、戒を持して自ら守り、衆生を燒さざるなり。

【八六】 第五一問、初禪二禪の樂を措いて、第三禪の樂のみ擧ぐる理由如何。  
【八七】 第五二問、樂の次に好慧を説ける理由如何。

問うて曰く、**持戒は、是を自ら守ると名け、亦衆生を嫉さすと名く。**何を以ての故に復た「自ら守り、衆生を嫉さす」と言ふや。答へて曰く、**身口の善は是を「持戒」と名け、心を檢して善に就くは、是を「自ら守る」と名け、亦「衆生を嫉さす」と名く。**一切の諸の功德は、皆戒身・定身・慧身の攝する所なり。言く、**好んで戒を持つは、是れ戒身に攝し、好んで自ら守るは是れ定身に攝し、衆生を嫉さす、禪中の慈等の諸の功德は、是れ慧身に攝す。**

問うて曰く、**（五）**亦人あり、「戒を持つとを好まず」と言ふ者なし、今何を

以てか「好んで戒を持つ」と言ふや。答へて曰く、**婆羅門の如きは、世界の法に著する者あり。言く、「家を捨て、好んで戒を持つるは、是を種を斷するの」と爲す。また神力を以て財を得、廣く功德を作す。是の如きは福あり。**出家は食を乞ひ自身に給せず、何ぞ能く諸の功德を作さん」と、**是の如く好んで戒を持つるを呵することを爲す。亦世界の治道に著するの人、好んで自ら守ることを呵せる者あり。言く、「人は當**

【九】 第五三問、持戒と不離衆生とは同義異名のみ、何ぞ此の二を擧ぐるや。  
【一〇】 第五四問、好んで戒を持つと云ふ理由如何。

に法を以て世を治め善を賞し惡を罰すべし。法を犯すべからず、尊親を捨つべからず、法を立て世を濟はば益する所の者大なり。何ぞ獨り其の身を善くして、自ら守り無事にして、世の亂るるをも理めず、人急なれども、救はざることを用ひんや」と。**是の如きを名けて、好んで自ら守るを呵すと爲す。亦人の好んで衆生を嫉さざるを呵する者あり。言く、「怨あれども報すること能はず、賊あれども撃**

つこと能はず、悪人を治むること能はず、罪あれども、以て肅むること無く、患を却け難を救ふこと能はざるは、默然として益なし。何ぞ此を用ゐることを爲んと。是の如きを「好んで衆生を燒さざるを呵す」と爲す、偏に説くが如し。

『人として勇健なること無くんば、何ぞ世間に生るることを用ゐん、難を親て救はざれば、木人の地に在るが如し。』

是の如き等の種種の不善語を名けて、「衆生を燒さざるを呵す」と爲す。是の諸の天人は皆好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を燒さざるなり、是の善法を行すれば身心安隱にして畏れ難る所なく、熱なく惱なく、好名善譽あつて、人に愛敬せらる、是を涅槃門に向ふと爲す。命終らんと欲する時福を見、心喜んで、憂なく悔なし。若し未だ涅槃を得ざれば諸佛の世界に乘じ、若くは天上に生ず。是を以ての故に「好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を燒さず」と言ふ。

# 卷の第九

初品の中の、「普ねく身を現じたまふ」を釋す。

【釋】 爾の時に世尊、轉子座の上に在して坐したまふに、三千大千世界の中に於いて、其の德は特に尊く、光明・色像・威徳は巍巍

として、遍ねく十方の恒河の沙等の如き、諸佛の世界に至る。譬へば須彌山王の光色の殊特にして、衆山の能く及ぶ者なきが如し。

【論】 問うて曰く、佛は何の力を以ての故に、一切の衆生の中に於て其徳

特に尊く、光明・威徳巍巍たること、乃ち是の如くなるや。轉輪聖王・諸

天・聖人の如きも亦大力・光明・威徳あり。何を以てか獨り佛の徳のみ特に

尊しと言ふや。答へて曰く、此の諸の賢聖は、光明威徳ありと雖も、量あり限あり。譬へば衆星は日

光既に出づれば則ち没して現せざるが如し。佛は無量阿僧祇劫より、大功德を集め、一切を具足した

まふ。因縁大なるが故に果報も亦大なり。餘人には此なし。復次に、佛は世世に諸の苦行を修したま

ふこと無量無數なり。頭目髓腦、常に衆生に施したまふ。豈に唯だ國・財・妻子のみならんや。一切の

種種の戒、種種の忍、種種の精進、種種の禪定、及び無比清淨にして、壞す可らず盡す可らざるの智

慧を世世に修行して已に具足し満たしたまふ。此の果力の故に稱量す可らざるの殊特の威神を得、是

【一】 第一問、佛の光明威徳は何故に恒河沙の如き諸佛の世界に至るか。

を以ての故に「因縁大なるが故に果報も亦大なり」と言ふ。

問うて曰く、三もし佛の神力無量にして、威徳の巍巍たるを稱説すべからずんば、何を以ての故に九の罪報を受くるや。一には梵志女、孫陀利に誘われ、五百の阿羅漢にも亦誘はる。二には旃遮婆羅門の女、木盃を繋けて腹を作り佛を誘ふ。三には提婆達多、山を推して佛を壓し、足の五指を傷く。四には逆木脚を刺す。五には毘樓璃王、兵を興し、諸の釋子を殺す、佛は時に頭痛したまふ。六には阿耨達多婆羅門の請を受けて馬を食したまふ。七には冷風動するが故に脊痛みたまふ。八には六年苦行したまふ。九には婆羅門の聚落に入り、食を乞ふて得ず、空鉢にして還りたまふ。復た冬至の前後、八夜寒風竹を破り三衣を索めて寒を禦ぎたまひしこと有り。又復熱を患ひ、阿難は後に在つて佛を扇ぎたてまつれり。是の如き等の世界の小事、佛は皆之を受けたまへり。佛の若きは神力無量にして、三千大千世界乃至東方恒河の沙等の如き諸の世界の南西北四方維上下に、光明色像威徳巍巍たり。何を以ての故に諸の罪報を受くるや。答へて曰く、佛は人中に在りて生れ、父母あり、人身の力を受け、一指節の力は、千萬億那由他の白象の力に勝る。神通力は無量無數にして不可思議なり。是の淨飯王の子、老病死の苦を厭ひ、出家して佛道を得。是の人豈に罪報を受け、寒熱等の爲に困しめられんや。佛の如きは神力不

- 【二】 第二問、若し佛の神力無量にして威徳巍巍たらば何故に九種の罪報を受け給ふや。
- 【三】 孫陀利(Sundarī)
- 【四】 旃遮(Chanda)
- 【五】 毘樓璃王(Periśāka)
- 【六】 阿耨達多(Anudatta)

可思議なり。不可思議の法の中に何ぞ寒熱の諸の患ひあらんや。

復次に、佛には二種の身あり。一に法性身と、二に父母性身となり。是の法性身は十方虚空に満ち、無量無邊の色像、端正の相好、莊嚴無量の光明、無量の音聲あり。法を聴くの衆も亦虚空に満ち、常に種種の身、種種の名號、種種の生處、種種の方便を出して、衆生を度し、常に一切を度して、須臾も息む時なし。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受くる者を度するは生身佛なり。生身佛は次第に説法して、人の法の如くす。二種の佛あるを以ての故に諸の罪を受くるに咎なし。復次に、佛は即ち道を得たまふ時、一切の不善法を盡く斷じ、一切の善法を皆成就したまふ。云何ぞ今實に不善法の報の受く可きあらんや。但だ未來世の衆生を憐愍したまふが故に方便を現じて此の諸の罪を受けたまふのみ。

復次に、阿泥盧豆の如きは、一の辟支佛に食を與へしが故に、無量の世樂を受け、心に飲食を念すれば意に應じて即ち得し。何に況んや佛は世世に肉を割き髓を出して、以て衆生に施したまふに、而も食を乞ふて得ず、空鉢にして還りたまはんや。是の事を以ての故に佛は方便して、衆生を度せんが爲の故に、此の諸の罪を受けたまふことを知る。云何が方便なる。未來世の五衆の佛弟子の福を施すこと薄きを憐愍したまふが故に、種種の自活の具を乞うて得ること能はず。諸の白衣の衣、汝衣食

【七】 二種の佛身を釋す。

【八】 佛は未來の衆生の爲に方便して九種の不善報を受け給ふ。

を得ること能はず、病あれども除くこと能はず、何ぞ能く道を得、以て人を益せんや」と。是の五衆は當に答ふべし、「我等は活身の小事なしと雖も、道を行じて福德あり、我等の今日の衆苦は是れ先身の罪報なり、今の功德の利は將來に在り、我等が大師なる佛すら、婆羅門の聚落に入つて食を乞ふて尚又得ず空針にして還りたまへり。佛も亦諸の病あり、釋子畢罪の時、佛も亦頭痛したまふ。何に況んや我等薄福の下人をや」と。諸の白衣は、聞き已つて瞋心則ち息み、便ち四種の供養を以て、佛の如くに比丘に供給するに身安隱なるを得、坐禪して道を得たり、是を方便と爲す。故に實に罪を受くるに非ず。毗摩羅詰經の中に説くが如きは、佛毗耶離國に在せり。

是時佛、阿難に語りたまはく、「(10) 我、身中に熱風の氣發れり、當に牛乳を用ゆべし。汝我が鉢を持して牛乳を乞ひ來れ」と。阿難は佛鉢を持し、晨朝に毗耶離に入り、一の居士の門の下に至りて立てり。是の時に毗摩羅詰は是の中に在りて行き、阿難の佛鉢を持して立つを見て、阿難に問ふ、「汝何を以てか晨朝鉢を持して立つや」と。阿難答へて曰く、「佛の身に小疾あり、當に牛乳を用ゆべきが故に我此に到る」と。毗摩羅詰の言く、「止みね、止みね、阿難よ、如來を誘ふこと勿れ。佛は世尊なり、已に一切諸の不善法を過ぐ、當に何の病かあるべき。外道をして此の麤語を聞かしむること勿れ。彼當に佛を輕んじて、便ち佛は自ら疾んで救ふと能はず、安んぞ能く人を救はんと言はん」と。阿難言はく、「此は我が

【九】 毗摩羅詰經 (Pimolokita Sutta) は普通には維摩經と稱す。

【一〇】 佛に少疾あり、阿難牛乳を求めし因縁。

意に非ず、而たり佛勅を受けたり、「當に牛乳を須ゆべし」と。毗羅詰言く、「此は佛勅なりと雖も、是れ方便の爲にして、今五惡の世なるを以ての故に是の像を以て一切を度脱したまふ。若し未來世に諸の病比丘あるに當に白衣より諸の湯藥を求むべし。白衣の言く、「汝自ら疾あつて救ふと能はず、安んぞ能く餘人を救はん」と。諸の比丘の言く、「我等が大師すら猶尙病あり、況んや我等が身は草芥の如し能く病ざらんや」と。是事を以ての故に諸の白衣等は諸の湯藥を以て比丘に供給し、安隱に坐禪し道を行ずるとを得せしむ。外道の仙人すら能く藥草咒術を以て他人の病を除くと有り、何に況んや如來は一切の智徳あり、自身の病るを而も除くと能はざらんや。汝且く默然として鉢を持して乳を取り、餘人の異學をして聞き知るとを得せしむると勿れ」と。是を以ての故に佛は方便の爲にして實に病に非ざるとを知る。諸罪の因縁も皆亦是の如し。是を以ての故に「佛は其徳特に尊くして、光明色像威徳巍巍たり」と言ふ。

【二】 第三問、佛が常身を以て大千世界の衆生に示し給ふ理由如何。

■

爾の時に佛は常身を以て、此の三千大千世界の一切の衆生に示したまふ。是の時に、首陀會天、天衆天、他化自在天、化自在天、色界天、廣天、三十三天、四天王天、及三千大千世界の人は、衆人と俱に、諸の天衆、天の理窟、天の澤者天の末書、天の青蓮華、赤蓮華、白蓮華、紅蓮華、天の樹葉華を以て持して佛の所に圍れり。

■

問うて曰く、「(二) 佛は何を以ての故に、常身を以て此三千大千世界の中の、一切の衆生に示した

ふや。答へて曰く、佛は摩訶般若波羅蜜(多)を説かんと欲し、三昧王三昧に入り、足下の相輪の光明より、上肉髻の光炎に至るまで、大に明かなること、譬へば劫盡きて焼くる時、諸の須彌山王の隨つて次いで燃え盡くるが如し。是の光明は遍ねく三千大千世界に満ち、乃至十方の恒河の沙等の如き、諸佛の世界も皆悉く大に明かなり。衆生の見る者は、畢に阿耨多羅三藐三菩提に至る。時に佛は般若波羅蜜(多)を説きたまはんと欲し、初には神力、第二には一切の毛孔、皆悉く微突し、第三には常光明を放ち、而各一丈なり。第四には舌相遍ねく三千大千世界を覆うて笑ひ、第五には師子遊戯三昧に入り、三千大千世界は六反震動す。第六には佛師子座に坐したまひ、最勝の身光明の色像を現じ、威徳巍巍たり。此神力を以て衆生を感動す。其の信ある者は皆阿耨多羅三藐三菩提に至る。其の中の疑ふ者には常の身を示したまふに、便ち信じ解することを得て、各各説いて言く、「今見る所の者は、是れ佛の眞身にして、佛力を以ての故に、此の三千大千世界の中の人は佛の常身を見て、遠きも近きも礙ると無し」と。是時三千大千世界の衆生は、皆大に歡喜して言く、「此は眞に是れ佛身なり、佛初めて生れたまふの時、初めて佛と成りたまふの時、初めて法輪を轉じたまふの時、皆此の身を以て是の如く思惟したまふ。此は眞に是れ佛身なり」と。

問うて曰く、「二三何を以ての故に名けて、淨居天、梵世天と爲すや。答へて曰く、四禪に八種あり、

【三】 佛、般若を説き給ふ時、六瑞を現はされたり。

【四】 第四問、淨居天、梵世天と名くる理由如何。

五種は是れ阿那含の住處、是を淨居と名く。三種は凡人聖人共に正す。是八處を過ぐれば十住の菩薩の住處あり。亦淨居と名け、大自在天王と號す。梵世天は生處に三種あり。一は梵衆天にして諸の小梵の生ずる處、二は梵輔天にして貴梵の生ずる處、三は大梵天にして之を中間禪定の處と名く。

問うて曰く、<sup>二四</sup> 欲を離るゝことは是れ同じ、何を以ての故に貴賤の異處あるや。答へて曰く、初禪に三種あり、下中上なり。若し下禪を修せば梵衆に生じ、若し中禪を修せば梵輔に生じ、若し上禪を修せば大梵に生ず。慈行も亦是の如し。<sup>二五</sup> 妙眼師の如きは念言すらく、「我衆人の爲に法を説いて、皆梵天の中に生ず、我今弟子と同處なるべからず、當に上慈を修すべし」と。上慈を修するが故に大梵天の中に生ず。

問うて曰く、<sup>二六</sup> 何を以ての故に四禪の中に於て、但だ初と後とを説いて中間を説かざるや。答へて曰く、初門は欲を離るゝと難きが故に、最後は微妙にして得難きが故に、中間は入り易きが故に説かざるなり。復次に、梵世を言へば已に色界に攝す。第四禪は第一に妙なるを以ての故に別に説くなり。復次に、人は多く梵天を誡りて餘天を誡らず、是の故に但だ梵天のみを説く。淨居天は常に衆生を憐愍して、常に佛を勸請するを以ての故なり。復次に、佛の法を説きたまふ聲は梵天に至り、佛の道を得たまふ時、諸天は展轉して唱へ告げて、乃ち淨居天に至る。是を以て

【二四】 第五問、欲を離るるとは諸天みな同じ、然も貴賤の異處あるは何故なるか。  
 【二五】 妙眼師は上慈を修して梵天に生ぜり。  
 【二六】 第六問、四禪天のうち初と後とを説いて中間を説かざる理由如何。

の故に初と後とを説いて中を説かざるなり。復次に、梵天は欲界に近きが故に聞くべく、淨居天は是れ色界の主なり、是の故に應に聞くべし。譬へば門を守るの人は客を識り、客其の主に至れば主は則ち之を識るが如く、中間は無事なるが故に説かざるなり。復次に、二禪は大喜、三禪は大樂にして喜樂放逸なり、是の故に説かず。

問うて曰く、何を以てか他化自在と名くるや。答へて曰く、此の天は他の化する所を奪つて自ら娛樂するが故に他化自在と言ふ。化自樂とは、自ら五塵を化して、自ら娛樂するが故に化自樂と言ふ。兜率を知足天と名け、夜摩を善分天と名け、第二を三十三天と名く。

最下の天は是れ四天王の諸天なり。須彌山の高さは八萬四千由旬にして、上に三十三天の城あり。須彌山の邊に山あり、(二)由健陀羅と名く。高さ四萬二千由旬なり。此の山に四頭あり。頭に各城あり。四天王各一城に居す。

夜摩等の諸天は七寶の地にして虚空の中に在り。風あり之を持して住せしむ。乃至淨居も亦復是の如し。是の如きの諸天は佛身の清淨なる大光明を見て、諸の供具・水陸の諸の華を淨持せり。陸地に生ずる華は、須曼提を第一と爲し、水中に生ずる華は、青蓮華を第一と爲す。若くは樹生の華、若くは蔓生の華、是の諸の名華は種種の異色種種の香熏あり、各天華を持して佛の所に來詣す。此の諸の華は色好く、香多く、柔軟細滑なり。是の故に此を以て供養の具と爲す。云何が天華と爲す

【七】 第七問、他化自在天と名くる理由如何。  
【八】 由健陀羅 (Yusandhara)  
【九】 須曼提は須摩那 (Sumanā) の誤?

や。天華は芬熏香氣あり、風に逆ひ諸天の瓔珞懸つて佛の上に在り、天の澤香以て佛地を塗り、天の末香以て佛の上に散ず。二、天の蓮華は青赤紅白なり。何を以て黄なきや。黄は火に屬す。火は水華の宜しき所に非るが故なり。天の寶蓮華は瑠璃を莖と爲し、金剛を臺と爲し、三、閻浮那陀金を葉と爲し、柔軟にして且つ香し。並に天の樹葉の香を持して佛の所に詣る。

問うて曰く、三、若し諸天の供養は天華を持つべくんば、人及び非人は云何か天華を得るや、答へて曰く、佛は神足を以て天光明を放ちたまひ、地は六種に震動し、諸天は種種の妙華を雨して三千大千世界に滿ち、以て佛に供養したてまつる。是の人・非人は、或は此の華を取つて以て供養す。復次に、天竺國の法に諸の好き物を名けて皆天物と名く。是の人華・非人華は天上の華に非すと雖も、其の妙好なるを以ての故に、名けて天華と爲す。是の故に「人も非人も諸の天華を持す」と言ふ。是れ則ち答なし。

是の諸の天華、乃至天樹の葉香を以て佛の上に散す。

問うて曰く、三、何を以てか華を以て佛の身の上に散するや。答へて曰く、恭敬し供養するが故なり。又佛の光、照したまへば、皆遙に佛を見たてまつり、心大に歡喜し、佛を供養したてまつる

【一】 天の蓮華には黄色なし。  
 【二】 閻浮那陀金 (amalinada) (amalu)。  
 【三】 第八問、人及び非人が天華を持して、供養するは何故なるか。  
 【四】 第九問、佛身の上に華を散する理由如何。

が故に皆諸の華を以て佛の上に散す。復次に、佛は三界に於て第一の福田なり、是を以ての故に華を佛の上に散す。

**經**

散する所の寶華は、此の三千大千世界の上に於て、虚空の中に在りて、化して大なる臺と成る。

**論**

問うて曰く、(一)何を以てか化して此の臺と作りて、虚空の中に在る

や。答へて曰く、散する所の華は少なけれども、而も化して大なる臺となり、以て衆生に因は少くして果は多きことを示す。

問うて曰く、(二)何を以ての故に臺は虚空の中に在り住して而も墮落せざ

るや。答へて曰く、佛は神力を以て衆生に示し、佛は福田と爲りたまひ、報を得て失はず、乃至成佛するまで其の福の減せざることを知らしめんと欲したまへばなり。

**釋**

是の華臺の四邊には、吠瑠の瓔珞、雑色の花鬘を垂れ、五色に繡綺たり。是の所の華臺者ば、遍はく三千大千世界に滿つ。

**論**

問うて曰く、(三)若し佛自ら神力あらば、何を以てか散する所の華に因つて變じて臺と爲すや。

答へて曰く、人をして信心に清淨ならしめんと欲するが故なり。是の人は供養する所の、變じて此

【一〇】 第一〇問、散する所の寶華が化して華臺と作り、虚空の中に在る理由如何。  
【一〇】 第一〇問、散する所の寶華が化して華臺と作り、虚空の中に在る理由如何。  
【一一】 第一一問、虚空の中に在る華臺が、墮落せざるは何故なるか。  
【一二】 第一二問、若し佛に神力あらば、所散の華を變じて臺と爲す必要なきにあらずや。

臺と成るを見て、大に歡喜す。歡喜に因つての故に、大に福德を得るなり。

是の樂處を以て樂するが故に、此の三千大千世界は皆金色と作り、及び十方の恒河沙等の如き諸佛の世界も、皆亦是の如し。

有人の言く、「轉輪聖王は四世界の主、梵天王は千世界の主、佛は三千大千世界の主なり」と。

是の語は實に非ず。是を以ての故に佛の變化したまふ所は、乃ち十方の恒河沙等の諸佛の世界に至る。

爾の時に、三千大千世界及び十方の衆生は、各自自ら念すらく、「佛は獨り我が爲に法を説きたまふ、餘人の爲にはよらずし」と。

問うて曰く、佛は一身を以て、三千大千世界及び十方に示したまふ。今諸の衆生は何を以てか各各佛の彼等の前に在して法を説きたまふと見るや。答へて曰く、佛に二種の神力あり。一には一處に坐して法を説きたまふども、諸の衆生をして遠きに處して皆見、遠きに處して皆聞かしたまふ。二には佛は一處に在つて法を説きたまふも、能く一一の衆生をして、各自に佛の彼等の前に在して法を説きたまふと見せしめたまふ。譬へば日出でて衆衆水に現するが如し。復次に、衆生は同じか

【毛】第三問、佛は一身もて三千大千世界に示現し給ふに、諸の衆生は各各彼等の前に示現し給ふと見る理由如何。

らず。有人は佛身の三千大千世界に遍するを見て淨き信を得、有人は各各佛〔彼等の〕前に在して法を説きたまふを見て、心清淨なることを得て信樂し歡喜す。是を以ての故に佛は今各各〔彼等の〕前に在して爲に法を説きたまふ。

釋

爾の時に世尊は獅子座に在して、無怖して笑ひたまふに、光口より出て過ねく三千大千世界を照す。此の光を以ての故に、此の間の三千大千世界中の衆生は、皆東方の恒河沙等の如き、諸佛及び僧を見たてまつるなり。彼の間の恒河沙の如き等の世界中の衆生は、皆此の間の三千大千世界中の釋迦牟尼佛及び諸大家を見たてまつるなり。南西北方、四維上下も亦復是の如し。

論

問うて曰く、佛は上に已に多く光明を放ちたまへり。今何を以ての故に復た斯の光を放ちたまふや。答へて曰く、先に光明を放つは各各事あり。先に説くが如し。今は彼此の衆會、兩ながら未だ相見ざるを以ての故に、光明神力を以て、彼此の世界の一切の大會をして、兩ながら相見ることを得せしめたまふなり。

問うて曰く、三元の中の、天眼第一の大阿羅漢なる、長老阿泥盧豆の如きは、暫く小千世界を觀

【元】第一四問、佛は已に多くの光明を放ち給へり、然るを今また此の光明を放ち給ふは何故なるか。  
【元】第一五問、神力ある阿羅漢若くは辟支佛にして二千乃至三千世界を觀るは當然なるが、今凡夫の人にして十方諸佛の世界を見たてまつるは如何なる理由なるか。

見し、諦かに二千世界を觀見す。大辟支佛は暫く二千世界を觀見し、諦かに三千大千世界を觀見す。

今一切の人は、云何が能く東方の恒河沙等の諸佛の世界を見るや。答へて曰く、是れ佛の神力の彼を

して見るとを得せしむ、衆生の力には非ざるなり。設ひ阿羅漢及び餘處の辟支佛等も、亦佛の力を以

ての故に見る所限なきと、譬へば轉輪聖王の飛行するに、一切の營從及び諸の象馬衆畜の皆隨ひ去る

が如し。今佛の神力の故に、衆生は遠處に在りと雖も、亦相見るとを得。又般舟三昧の力に如ふが故

に、天眼を得ずと雖も、而も十方を見るなり。佛の眼耳は無礙なり。亦

劫盡き燒くる時、一切衆生は自然に皆禪定を得、天眼天耳を得るが如し。

佛の神力を以ての故に、一切衆生をして皆遠く見ることを得せしめたまふ

も、亦復是の如し。爾の時に世尊師子座に在して笑ひたまふ。笑ふことは

先に説くが如し、餘の未だ説かざる者を今當に説くべし。

問うて曰く、(三) 此の間の衆生の遠く彼の方を見るは、是れ佛の神力なりとせば、彼の間の衆生も亦此

の方を見る、是れ誰の力なりや。答へて曰く、是れ釋迦牟尼佛の力なり。彼をして此の間の三千大千

世界を見、及び釋迦牟尼佛並に一切の衆會を見せしめたまふ。南西北方四維上下も亦復是の如し。

初品の中の、十方の諸の菩薩來りたまふしを釋す。

【三〇】 劫火の時、衆皆通を得。  
【三一】 第一六問、此方の衆生の遠く彼方を見るは佛の神力なりとせば、彼方の衆生の蓋に此方を見るは誰の力なるか。

【三】

是の時、東方の恒河沙の如き等の諸佛の世界を過ぎ、其の世界の最も邊に在る世界を多寶と名け、佛を寶積と號したてまつる。今現に在して諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜(多)を説きたまふ。

【四】

問うて曰く、佛の説きたまふが如くんば、一切の世界は無量無邊なり。云何が其世界の最も邊に在りと言ふや。最も邊に在りとは是れ有邊の相に墮す。若し世界有邊ならば、衆生は盡くべし。

何となれば無量の諸佛の一一の佛、無量阿僧祇の衆生を度し、無餘涅槃に入らしめば、更に新しき衆生なく故き者盡くべきを以てなり。答へて曰く、佛經に世界は無量なりと言ふと雖も、此れ方便の説にして、是れ實の教に非ず。如實には神なけれども、方便の故に説いて神ありと言ふ。是れ十四の難なり。【三】世界の有邊無邊は俱に邪見と爲す。若し無邊ならば、佛は一切智あるべからず。何となれば智慧普く知つて、物として盡さざる無き、是を一切智と名く。若し世界無邊ならば、是れ盡さざる所あらん。若し有邊ならば先に説く答の如し。此の二は俱に邪見なり。何となれば無邊に依つて、以て有邊を破るを以てなり。是の多寶世界は一切世界の邊に非ず。是れ釋迦牟尼佛の因縁ありて、衆生の應に度す可き者の最も邊に在り。譬へば一國の中に最も邊に在るが如きは、一閻浮提の最も邊に在りとは言はず、若し無邊ならば、佛は一切智なるべからず。上の佛の義の中に答ふるが如し。佛の智は無量なるが故に知るべし。譬へば南大なるが故に、蓋亦大なるが

【三】 第一七問、佛説の如くんば、世界は無量無邊なり、然るを如何ぞ世界の最も邊にありと言ふや。

【三】 世界の有邊無邊は俱に邪見なり。

【三】 第一七問、佛説の如くんば、世界は無量無邊なり、然るを如何ぞ世界の最も邊にありと言ふや。

如し。

問うて曰く、**三**世界を多寶と名く。實に二種あり、財寶と法寶となり。何等の寶多ければ、名けて多寶世界と爲すや。答へて曰く、二種皆有り。又多くの菩薩、法性等の諸寶を照すこと多きか故に名けて多寶と爲す。是の中に佛あり、寶積と名く。無漏の根・力・覺道等の法寶を集むるを以ての故に名けて寶積と爲す。

問うて曰く、**三**若し爾れば一切の佛は皆應に寶積と號すべし。何を以てか獨り彼の佛を稱して寶積と爲すや。答へて曰く、一切の佛は皆此の寶を有すと雖も、但彼の佛は即ち此の寶を以て名と爲す。彌勒を名けて慈氏と爲すが如し。諸佛は皆慈ありと雖も但だ彌勒のみ、即ち慈を以て名と爲すなり。**三**復次に 寶華佛の如きは生じたまふ時、一切の身邊に、種種の華色の光明ありしが故に、寶華太子と名く。然燈佛の如きは生れたまふ時、一切の身邊、燈の如くなりしが故に、然燈太子と名け、佛と作つても亦**三**然燈と名けたてまつる。寶積佛も亦是の如く、應に初生の時に當つて、亦諸の寶物生じ、或は地より生じ、或は天より種種の寶を雨ふらして集むるが故に、名けて寶積と爲す。

問うて曰く、**三**唯た釋迦牟尼一佛のみ有り、十方の佛なし。何となれば是の釋迦牟尼佛は、無量の

【一】 第一八問、多寶世界とは如何なる寶の多き世界を意味するか。  
【二】 第一九問、佛は皆寶積と號すべきにあらずや。  
【三】 寶華佛の名義。  
【四】 燃燈佛(Maitreya)を舊譯には定光佛、或は鏡光佛と譯せり。  
【五】 第二〇問、世には唯釋迦牟尼佛のみ在して、餘佛はいまざるべきか。

威力無量の神通あつて、能く一切衆生を度したまふ。更に餘佛なし。説くが如くんは、阿難は一心に思惟すらく、「過去の諸佛の寶華、然燈等は、皆好世に生れたまひ、壽命は極めて長く、能く一切衆生を度したまふ。今釋迦牟尼佛は惡世に生れたまひ、壽命は短し、將に一切の弟子を度すと能はざる無からんとするや」と。是の如く心に疑へり。佛時に阿難の念する所を知りたまひ、即ち日の出づる時を以て、日出三昧に入りたまふ。爾の時に佛身の一切の毛孔より諸の光明を出すこと、亦日の邊より諸の光明を出すが如く、其の光は遍なく閻浮提の内を照し、其の明滿ち已つて四天下を照し、四天下を照し滿ち已つて、三千大千世界を照し、三千大千世界に滿ち已つて十方無量の世界を照す。爾の時に、世尊は臍の邊より諸の寶蓮華を出したまふ。偈に説くが如し。

『青光の琉璃の莖あり、千葉の黄金色にして、金剛を華臺と爲し、琥珀を華飾と爲す。莖は軟かにして塵曲ならず、其の高さ十餘丈なり。眞青なる琉璃の莖は、佛の臍の中に在りて立

てり。

其の葉は廣くして長く、白光の間に妙色あり、無量の寶もて莊嚴せり、其の華に千葉あり。妙華の色は是の如く、佛の臍中より出づ、是の四の華臺の上の寶座は天日に耀き、一一の諸の寶座の座に、各坐したまふ佛あり。金山の四首の如く、光耀は等しくして一なるが

【元】釋尊日出三昧に入りて頓に十方の衆生を度し給ひし因縁。

如し。

四佛の臍の中より、各妙寶の華を出し、華の上に寶座あり、其の座に各佛あり。

是の佛の臍中より展轉して寶華を出し、華華に皆座あり、座座に各佛あり。

是の如く展轉し、化して乃ち淨居天に至る。若し近遠を知らんと欲せば、當に譬喩を以て説く

べし。

一の大方石あり、縦の廣さは大山の如く、上より放つて下らしむれば、直に過ぎて礙る所なく、

萬八千三百八十有三歳。

是の如きの年歳を數へて、爾して即ち地に到ることを得。是の兩の中

間に於ては、化佛其の中に滿つ。

其の光の大にして、盛に明かなることは、火と日月とに踰えたり。

有は佛身より水を出し、亦有は身より火を出し、或は復た現に經行し、有時は靜かに默坐す。

有は佛乞食を行じて、此を以て衆生を福とし、或は復た經法を説き、有時は光明を放つ。

或は三惡趣・氷・闇・火の地獄に到り、和氣を以て寒氷を濟ひ、光明は闇獄を照す。

熱處には涼風を施し、事に隨つて其の苦を救ひ、之を安んじて以て患なからしめ、之を度するに

法樂を以てす。

【四】淨居天より一の方石を下すに、一萬八千三百八十三歳にして地に到る。

是の如く種種に方便して、一時に頓に能く十方無量の衆生を度し、衆生を度し已つて、還つて本處に入り、佛の躋の中に住したまふ。爾の時に、世尊は日出三昧より起つて、阿難に問ひ言はく「汝此の三昧の神通力を見るや不や」と。阿難、佛に白さく「唯然なり、已に見たてまつる」と。重ねて佛に白して言さく「若し佛、世に住さば、一日の中に度したまふ所の弟子は虚空に滿つべし、何に況んや在世八十年をや」と。是を以ての故に、「一佛の功德神力は、無量に現じて十方を化し、佛と異なること無し」と言ふ。復次に、佛の言ふ所の如くんば「女人は轉輪聖王と作ることを得ず、天帝釋・魔王・梵天王と作ることを得ず、佛と作ることを得ず、轉輪聖王は一處にありて並に十方を治むることを得ず。世尊も亦一世に二佛なし」と。又佛説いて言はく、「佛の言は虚しからず、世に二佛なきの法なれば、値ひ難きは、是れ佛世尊なり。無量億劫に時に一たび有します。是の九十一劫の中、三劫に佛あり、賢劫の前の九十一劫の初に佛あり、〔四〕 韓婆尸と名く。第三十一劫の中に二佛あり、一を尸棄と名け、二を韓怒婆附と名く。是の賢劫の中に四佛あり。一を迦羅鳩唼陀と名け、二を迦那伽牟尼と名け、三を迦葉と名け、四を釋迦牟尼と名く。此を除いて餘の劫は皆空にして佛なし、若し憐愍すべし」と。若

- 〔四一〕 女人の三障。
- 〔四二〕 一世に二佛なく、一國に二主なし。
- 〔四三〕 七佛出世の時節。
- 〔四四〕 韓婆尸 (Vasishtha)。譯して種種見といふ。
- 〔四五〕 尸棄 (Sikhin)。譯して火といふ。
- 〔四六〕 韓怒婆附 (Issaluhuk)。譯して一切勝といふ。
- 〔四七〕 迦羅鳩唼陀 (Kakucodha-nidhi)。
- 〔四八〕 迦那伽牟尼 (Kanakamuni)。
- 〔四九〕 譯して金仙人といふ。

十方の佛あらば何を以ての故に餘劫には佛なし、甚だ憐む可しと言ふや。答へて曰く、釋迦文尼

佛は無量の神力ありて、能く變化して佛と作り、十方に在して法を説き、光明を放ちて衆生を度した

まふと雖も、亦盡く一切衆生を度すると能はず、有邊に墮するが故に、則ち未來世には佛なきが故

に、然も衆生は盡きず、是を以ての故に應に更に餘佛あるべし。

復次に、汝は言ふ、「佛自ら説きたまはく、女人は五事を作すことを得ず、二の轉輪聖王は同時に

世に出ることを得ず、佛も亦是の如く、同時に一世に亦二佛なし」と。汝

は此の義を解せず、佛經に二義あり、易了の義あり、深遠にして難解の

義あり。佛涅槃に入りたまはんと欲する時、諸の比丘に語りたまふらく、

「今日より應に法に依るべく人に依らざるべし、應に義に依るべく語に依

らざるべし。應に智に依るべく、識に依らざるべし。應に義經に依るべく未了義に依らざるべし」

と。法に依るとは法に十二部あり。應に此の法に隨ふべく人に隨ふべからず。義に依るとは、義の中

には好惡罪福虚實を誣ふこと無し、故に語は以て義を得、義は語に非るなり。人の指を以て月を

指し、以て惑へる者に示すに、惑へる者は、指を視て月を視ざるが如し。人之に語つて言く、「我指

を以て月を指すは、汝をして之を知らしむるなり。汝何ぞ指を看て月を視ざる」と。此も亦是の如く、

語は義を指さんが爲にして、語は義には非るなり。是を以ての故に、語に依るべからず。智に依ると

【四九】 一佛の外に餘佛ある理由を辨す。

【五〇】 佛經の二義。

【五一】 指と月との喩。

は、智は能く籌量して善惡を分別し、識は常に樂を求めて正要に入らず、是の故に「識に依るべからず」と言ふ。了義經に依るとは、一切智を有する人のうち佛は第一なり。一切の諸の經書の中には佛法第一なり。一切衆の中にては比丘僧第一なり。布施は大富を得、持戒は天に生ずるとを得。是の如き等は是れ了義經なり。説法の師の如きは、吾説法に五種の利あり、一には大富、二には人に愛せられ、三には端正なり、四には名聲あり、五には後に涅槃を得。是を未了義と爲す。云何が未了なる。施は大富を得、是を了了にして解可しと爲す。説法は財施なけれども、富を得と言ふ。富を得とは、説法の人、種種に施を讃して人の憍心を破り、亦自ら憍を除く。是因縁を以て富を得、是の故に未了と言ふ。是れ多持經の方便の説にして實義に非ざるなり。是の經の中に佛は、「世に二佛俱に出づること無し」と言ふと雖も、一切十方の世界と言はず、世に二の轉輪聖王無し」と言ふと雖も、亦一切の三千大千世界に無しと言はず、但だ「四天下の世界の中に、二の轉輪聖王なし」と言ふ。福を作すこと清淨なるが故に、獨り一世に王として諸の怨敵なし。若し二王あらば清淨と名けず。佛に嫉妬心なしと雖も、然も行業世世清淨なるを以ての故に、亦一世界に二佛出づること有らず。白徳の須彌山、白徳の日月を名けて、三千大千世界と爲す。是の如きの十方恒河沙の三千大千世界、是を名けて一佛世界と爲す。是中に更に餘佛なし。實に一の釋迦牟尼佛のみなり。是一佛世界の中に常に諸佛の種種の法門、種種

【五二】 了義經の例。  
 【五三】 未了義經の例。  
 【五四】 説法の五利。

の身、種種の因縁、種種の方便を化作し、以て衆生を度したまふ。是を以ての故に多持經の中に「一  
 時に一世界に二佛なし、十方に佛なし」と言はず。復次に、汝が言ふが如きは、「佛の言はく、一事に  
 是の佛世尊に値ふこと難し」と、又言はく、九十一劫の三劫のみ佛あり、餘劫は皆空にして佛なく、  
 甚だ憐愍す可し。垂此の重罪にして、佛を見たてまつるの善根を種えざる人の爲に説いて言く、「佛  
 世に値ひ難きことは、優曇波羅樹の華の、時時に一たび有るが如し」と。是の如きの罪人は三惡道に  
 輪轉し、或は人天の中に在りて、佛世に出でたまふ時も、其の人は見ず。説  
 くが如くんば、舍衛城の中に九億の家あり、三億の家は眼に佛を見、三億  
 の家は耳に佛ありと聞くも眼に見ず。三億の家は聞かず見ずと。佛、舍衛  
 に在ること二十五年、而も此の衆生は聞かず見ず、何に況んや遠きものを  
 や。復次に、爰佛、阿難とともに舍衛城に入りて乞食したまひき。是の時に一の貧しき老母あり、立つ  
 て道の頭に在り。阿難、佛に白さく、「此の人は惑むべし、佛應に度したまふべし」と。佛、阿難に語  
 りたまはく、「是は因縁なし」と。阿難言さく、「佛往いて之に近づきたまはば、此人は佛の相好光明  
 を見て歡喜の心を發し、爲に因縁を作さん」と。佛往いて之に近づきたまふに、身を廻して佛を背に  
 す。佛、四邊より往けば便ち四もに向つて佛に背き、而を仰げば上に向ひ、佛上より來りたまへば頭  
 を低くして下に向ひ、佛地より出でたまへば兩手を以て眼を覆ひ、背て佛を視ず。佛、阿難に語りた

【五五】 無善根の人の爲に、佛の  
 値ひ難きこと優曇華の如くと  
 説く。  
 【五六】 舍衛城の一老母、佛に背  
 いて見えざりと因縁。

まはく、「復た何の因縁をか作さんと欲するや」と。是の如きの人あり、度するの因縁なく、佛を見たてまつることを得ず。是を以ての故に、佛、阿難に「告げ」言はく、「佛には値ふことを得ると難きこと、優曇波羅樹の華の如し。譬へば水雨は多くして、處處に得易しと雖も、餓鬼は常に渴して飲むことを得ること能はざるが如し。汝が言へる、九十一劫の三劫にのみ佛ありて、一佛世界の爲の故にして、一切の餘の諸の世界の爲にあらず。是の處の劫は空にして、佛の出でたまふこと有ること無く、甚だ憐愍す可しとは、亦是れ此の間の一佛世界にして、一切の餘の諸の世界の爲には非ず。是を以ての故に十方に佛あることを知る。

復次に、**【五】** 聲聞法の中に十方の佛あり、汝自ら解せず。雜阿含經の中に説くが如きは**【五八】** 譬へば大雨連り過ぎ、滔滔無間にして數を知るべからざるが如く、諸の世界も亦是の如し。我東方の無量の世界を見るに、成あり、住あり、壞あり、其の數甚だ多くして分別す可らず。是の如くして乃ち十方に至る。是の十方世界の中の無量の衆生に三種の身苦、老・病・死あり、三種の心苦、姪・瞋・癡あり、三種の後世の苦、地獄・餓鬼・畜生あり。一切世界に皆三種の人あり、下と中と上となり。下人は現世の樂に著し、中人は後世の樂を求め、上人は道を求め、慈悲心ありて衆生を憐愍す。因縁あり、云何を果報なからん」と。佛の言はく、**【五九】** 若し老病死なくんば、佛は世に出

**【七】** 小乘經に於ける十方に佛有るの説。

**【六】** 佛の値ひ難き事は、恰も雨水の得易けれども、佛鬼は常に渴して、飲を得ること難きが如し。

**【五】** 衆生に老病死の身の三苦なく、貪瞋癡の心の三苦なくんば、佛は世に出で給はず。

てたまはず、是人は老病死の苦惱の衆生を見て、心中に願を作さく、「我當に佛と作り、以て之を度脱し、其の心病を抜き、後世の苦を濟ふべし」と。是の如く、十方の世界に、皆佛の出でたまふ因縁あり。何を以ての故に獨り此間に佛あつて、餘所には無しと言ふや。譬へば人あり、「木あつて火なし、湿地あつて水なし」と言ふが如し。是れ信す可らず、佛も亦是の如し。衆生は身に老病死の苦あり、心に姪・瞋・癡の病あり。此の三苦を斷じて、三乗を得せしめんが爲の故に出世し給ふ。一切世界の中に皆此の苦あり、云何が佛なからんや。

復次に、盲人は無量なり、唯だ一醫のみを須つと言ふも、此れ亦然らず。是を以ての故に應に更に十方の佛あるべし。復次に、長阿含の中の有經に言はく、「鬼神の王あり、北方を守る。衆多の百千萬の鬼神と、後夜に佛所に到り、頭面に佛足を禮し、一面に住し、清淨の光を放つて普ねく祇洹を照し、皆大に明かならしめ、合掌して佛を讚し、此の二偈を説けり。

『大精進の人よ、我、汝に歸命したてまつる。佛は二足の中にて尊きと最上なり、智慧の眼の人にして能く知見したまふ、諸天も此の慧事を解せず。

過去未來今の諸佛、一切我皆稽首し禮したてまつる、是の如く我今佛に歸命したてまつること、亦三世の尊を恭敬したてまつるが如し。』

と。是の如く、偈の中に十方の佛あり、鬼神王は三世の佛に稽首し、然る後に別して釋迦文尼佛に歸

命す。若し十方に現在したまふ佛なくんば、當に但だ釋迦文尼佛のみに歸命すべく、過去未來現在の諸佛と言ふべからず。是故に十方に佛あるを知らず。復次に、過去世に無量の佛あり、未來世にも亦無量の佛あり、是の故に現在にも亦應に無量の佛あるべし。復次に、若し佛、聲聞法の中に於て、「十方に無數無量の佛あり」と言はば、衆生は當に「佛には遇ふ可きこと易し」と言つて、勤めて「解」脱を求めざるべく、若し此の佛に値はずんば彼の佛に遇ふべしと、是の如く慳怠して、勤めて度を求めざらん。譬へば鹿の未だ箭を被らざる時は怖畏することを知らず、既に箭を被り已れば、圍を蹕えて出づるが如し。人も亦是の如く、老病死の苦あり。唯だ一佛のみありて甚だ遇ふ可きこと難きを聞き、心便ち怖畏し勤行し精進して、疾かに苦を度することを得ん。是を以ての故に佛は聲聞法の中に於ては、「十方に佛あり」と言はず、亦「無し」と言はず。若し十方に佛あるを、汝「無し」と言はば、無限の罪を得ん。若し十方に佛なきを、我「有り」と言はば、無量の佛想を生じ、恭敬の福を得ん。何となれば善心の因縁には、福德の力大なるを以てなり。譬へば慈心三昧力の如きは、一切衆生を觀じて、皆樂を受くることを見る。實益なしと雖も、慈觀を以ての故に、是の人は無量の福を得ん。十方佛の想も亦復是の如し。若し實に十方に佛あるを「無し」と言はば、十方の佛を破り、無量の重罪を得ん。何となれば實事を破るを以てなり。肉眼の人は俱に知らずと雖も、但だ心に信じて「有り」と言はば、其の福は無量な

【六〇】鹿の箭を被れば圍を出づるが如く、衆生の慳怠を恐るゝが故に唯一佛ありといふ。

り。若し實に佛あるを、竟に「無し」と謂はば、其罪甚だ重し。人は自ら用心して、尚ほ有るを信すべし、何に況んや、佛自ら摩訶衍の中に説いて、「實に十方の佛あり、信せざらんや」と言ふをや。

問うて曰く、若し十方無量の諸佛及び諸の菩薩あらば、今此衆生は多く三惡道の中に墮す、何を以てか來りたまはざるや。答へて曰く、衆生は罪重きが故に、諸佛菩薩來りたまふと雖も見ず。又

法身の佛は、常に光明を放ち、常に法を説きたまふも、而も罪を以ての故に見ず聞かず。譬へば日出づれども盲者は見ず、雷霆地に振へども聾者は聞かざるが如し。是の如く、法身は常に光明を放ち、常に法を説きたまへ

ども、衆生は無量劫の罪垢、厚く重きものあれば、見ず聞かざるなり。明鏡淨水に面を照して則ち見るに、垢翳不淨なれば則ち見る所なきが如し。是の如く、衆生の心清淨なれば則ち佛を見、若し心不淨なれば則ち佛を見ず。今實に十方の佛及び諸の菩薩あり、來りて衆生を度したまふと雖も、而も見たてまつる

ことを得ざるなり。

復次に、釋迦牟尼佛の如きは、閻浮提の中に在りて生れたまひ、迦毗羅國に在し、多く東天竺の大城に遊行し、有時は飛んで南天竺の憍耳居士の舍に到りて供養を受け、有時は更らく北天竺の月氏國に來りて

阿波羅羅龍王を降し、又月氏國の西に至つて、女羅刹を降したまへり。佛、彼の石

【六二】第二二問、若し十方に無量の佛菩薩あらば、今この惡世に來り給はざるは何故なるか。  
【六三】阿波羅羅龍王 (アバラローニ) (六三三三三)  
【六四】羅刹女を降し給ふ窟中に今尚ほ佛影あり。

窟の中に在し、一宿したまふに今に佛影猶在り。人あり中に就いて之を看れば則ち見えず、孔を出づれば、遂に光明の相を見る。佛有す時の如きは覺らく飛んで闍賓の窟跋陀仙人の山上に至り、虚空の中に住して此の仙人を降したまふ。仙人の言く、「我は此の中に住するを樂しむ、願くは佛、我に佛の髮と佛の爪とを與へたまへ。塔を起して供養せん」と。塔は今に現存せり。人の佛と國を同うして生ずるすら、猶遍なく見たてまつらず、何に況んや異處をや。是の故に十方の佛を見ざるを以て無しと言ふ可らず。復次に、彌勒菩薩は大慈悲あるも、天宮に在りて此の間に來らず、來らざるを以ての故に、便ち彌勒なしと謂ふ可けんや。彌勒の近くして來らざるすら怪しと爲さず、十方の佛は遠し、何ぞ怪しむに足らん。復次に、十方の佛來りたまはざるは、衆生は罪垢深重にして、佛を見たてまつるの功德を種えず、是の故に來りたまはざるなり。復次に、佛は一切衆生の善根熟し、結使薄きを知つて、然る後に度したまふ。「偈」に説くが如し。

【六高】 跋跋陀仙人、佛の爪髮を受けて塔を起して因縁。

『諸佛は、先づ人あり、一切の方便もて度す可らず、或は度し難きあり、或は化し易く、或は復遅きあり、或は疾きあるを觀知したまふ。』

或は光明を以てし、或は神足(を以てし)、種種の因縁を以て衆生を度したまふ。逆を作さんことを欲する有れば、佛は愍んで除きたまふ。或は逆を作さんと欲するも、佛は遮りたまはず。

剛強にして化し難きには、麤言を用ゐ、心柔かくして度し易きには、軟言を用ゐるたまふ。慈悲平等の心ありと雖も、時に智慧もて方便を用ゐることを知りたまふ。』

是を以ての故に、十方の佛は來りたまはずと雖も、無しとは言ふべからず。

復次に、佛の智慧力方便神通は舍利弗等の大阿羅漢、大菩薩の彌勒等すら尙ほ知ること能はず、何に況んや凡人をや。

復次に、諸佛、大菩薩は時ありてか衆生の急難を恐懼して一心に念すれば、或時は來つて之を度したまふ。

大月氏の西、佛の肉髻の住する處の國の一佛圖の如きは、中に人の癩風を病ある有り、遍吉菩薩の像の邊に來

至して、一心に自ら歸し、遍吉菩薩の功德を念じ、「願くは此病を除きたまへし」と。是の時、遍吉菩薩の像、即ち右手の寶梁の光明を以て、其の身

を摩すれば、病即ち除愈す。復た一國の中に一の阿蘭若あり、比丘大に摩訶衍を讀む。其の國王は

常に髮を布き上を踏んで過さしむ。比丘あり王に語つて言く、「此人は摩訶羅にして多く經を讀

ます、何を以てか大に供養すること、是の如くなる」と。王言く、「我、一日夜半に此の比丘を見んと

欲し、即ち往いて其の住處に到り此の比丘を見るに、窟中に在つて法華經を讀む。一の金色の光明の

人白象に騎つて、合掌し供養するを見る。我轉た近づけば便ち滅す。我即ち問ふ、大德よ、我來るを

病を癒除せし因縁。

【六六】一僧法華經を讀み善賢の來るを感じ、國王常に髮を布いて上を踏んで過さしむるの因縁。

【六七】摩訶羅(一三三三三三)譯して無知またば老といふ。

以ての故に金色の光明の人滅すと。比丘言く、此は則ち、遍吉菩薩なり。遍吉菩薩自ら言く、若し人あり法華經を讀誦せば、我當に白象に乗り來つて之を教導すべしと。我法華經を誦するが故に遍吉自ら來れりしと。復た一國に、突ひとり、一の比丘あり。阿彌陀佛は彼大衆と俱に來れりしと。即時に身を動かして自ら歸んと欲する時、弟子に語つて言く、「阿彌陀佛は彼大衆と俱に來れりしと。明日灰の中を見るに、舌焼けず、阿彌陀し、須臾にして命終る。命終の後弟子薪を積んで之を燒き、明日灰の中を見るに、舌焼けず、阿彌陀佛經を誦するが故に佛自ら來りたまふことを見、般若波羅蜜多を誦するが故に舌焼く可らず、此は皆今世の現事なり。經中に説くが如くんば、諸佛菩薩の來りたまふ者甚だ多し。是の如く處處に人あり、罪垢の結薄くして、一心に佛を念じ、信淨くして疑はざれば、必ず佛を見たてまつることを得て、終に虚しからず。是の諸の因縁を以ての故に、實に十方に佛あることを知る。

篇の時に、彼の世界に菩薩あり、名けて普明と曰ふ。

菩薩の義は、讀菩薩品の中に已に説くが如し。

問うて曰く、云何が普明と名くるや。答へて曰く、其の明常に一切世界を照す。是の故に普明と

【六八】 一偈あり、阿彌陀經を讀んで、佛自ら來り給ふを感見し般若經を誦せしか爲に死後火葬して舌焼けざりし因縁。

【六九】 第二二問、普明と名くる理由如何。

名く。

【七〇】

此の大光を見、地大に動くを見、また佛身を見たてまつりて、寶積佛の所に到り、佛に白して言さく、世尊、今何の因縁ありてか、此の光明あり世間を照し、地大に震動し、また佛身を見たてまつるや」と。

【七一】

地の動く、佛身の光明は先に説くが如し。

問うて曰く、是の普明菩薩は諸の菩薩の中に於て、最も尊くして第一なり、應に自ら因縁を知

るべし。何を以てか佛に問ひたてまつるや。答へて曰く、是の普明菩薩は

大なりと雖も、諸佛の智慧神力を知ること能はず。譬へば月の光は火なり

と雖も、日出づれば、則ち滅するが如し。是を以ての故に佛に問ひたてま

つるなり。

復次に、菩薩は常に佛を見たてまつらんと欲し、心に厭足すること無し、因縁なきすら、尙ほ佛を

見たてまつらんと欲す、何に泥んや大因縁あるをや。復次に、是の事は疑ふべからず。譬へば犢子の

母に隨ふに未だ惟しむに足らざるが如し。又小王の大王に朝宗するは、法の應に爾るべきが如し。故

に諸の大菩薩も亦是の如く、利を得ること大なるが故に、常に佛に隨はんと欲す。是の菩薩は是の事

を見て、心即ち是れ大事なりと覺知し、無數無量の世界を見て、みな相見ることを得、是を以ての故

【七〇】 第二三問、普明菩薩は自ら因縁を知り給ふ、何ぞ佛に問ふの要あらんや。

に問ふなり。復次に、有人の言く、是の菩薩は、自ら神力ありて能く知り、亦是の釋迦牟尼佛の力を以て知らしめたまふ。但だ諸の小菩薩の知らざるが爲の故に、佛に問ひたてまつるなり。諸の小菩薩は怖れ難すること未だ除かず、佛に問ひたてまつること能はず、是の故に之が爲に問を發す。是の普明菩薩の發するは、其の世界の諸の小男子小女人と俱なり。是を以ての故に「小菩薩は」佛に問ひたてまつること能はざることを知る。譬へば大象の能く大樹を躡めて、諸の小象をして枝葉を食ふことを得せしむるが如し。是故に佛に、「大德よ、何の因、何の緣ありてか、此の大光明あり、大地震動し、また佛身を見たてまつるや」と問ひたてまつるなり。

# 卷の第十

初品の中の「十方の諸の菩薩來る」の餘を釋す。

## 釋

寶積佛は普明に報て言く、「善男子よ、西方の恒河の沙の如き等の世界を度りて、世界あり娑婆と名く、是の中に佛あり、釋迦牟尼と號す。今現在して諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜(多)を説かんと欲す、是れ其の神力なり」と。

## 論

問うて曰く、佛は譬へば須彌山の、大海水の波の爲に、動せられざるが如し。今何を以てか普明に答へたまふや。是れ則ち動相なり。攝心なれば則ち語なし、散心なれば則ち説あり。説法は 覺觀より生ず、覺觀は麤事なり。佛は此の麤事あるべからず。 答へて曰く、佛は深く禪定に入つて、世事の爲に動せられずと雖も、今大慈悲心を以て、衆生を憐愍し、之が爲に法を説いて疑を斷じたまふ。須彌山王は小風の則ち動するこ

と能はず、若し隨藍の風至るときは則ち大に動散するが如し。佛も亦是の如く、大慈悲の風來れども、憐愍の心動き、散身無數にして五道に入り、衆生を教化し、或は天身乃至畜生と作りたまふ。復次に、佛は實に動せず、常に禪定に入りたまふ。先世の福德の因縁の故に、身遍く聲を出し、物に應

【一】 第一問、佛は何ものにも動じ給はずといふ、然るにいま此の普明の問に答へ給ひしは何故なるか。

【二】 覺觀・麤思を覺と名け、細思を觀と名く。新譯には覺を尋、觀を伺と譯す。

【三】 佛は不動なりと雖も、慈悲を以ての故に説法し給ふ。

【四】 佛は先世の福德の因縁の故に、天鼓の自然に聲を出すが如く、遍く聲を出し給ふ。

ずると響の如く、天の伎樂の自然に聲を發するが如く、又摩尼珠の人の欲する所に隨つて、之に種種  
 「のもの」を與ふ。「即ち」若し衣被・飲食・醫藥を欲すれば、自ら須ゆる所を恣にし、自然に皆得るが  
 如し。佛も亦是の如く、其の身邊の諸の毛孔の中より、自然に聲あり、心に隨つて說法す。是の中、  
 佛は憶想なく、亦分別なし。密迹金剛經の中に説くが如くんば、佛に三密あり、身密と語密と意密  
 となり。一切の諸の天人は、皆解せず、知らず。一會の衆生あり、或は佛身を、黄金色・白銀色・諸  
 の雜寶色と見る。人あり、佛身を一丈六尺と見、或は一里・十里・百千萬億・乃至無邊無量にして、虛  
 空の中に遍しと見る。是の如き等を身密と名く。語密とは、有人は佛の聲  
 を一里と聞き、有は十里・百千萬億・無數無量にして、虛空の中に遍しと聞  
 く。一會の中にありて、或は布施を説きたまふと聞き、或は持戒を説きた  
 まふと聞き、或は忍辱・精進・禪定・智慧を説きたまふと聞く。是の如く乃至十二部經、八萬の法聚は  
 各各心の聞く所に隨ふ。是を語密と名く。是の時、目連は心に念すらく、「佛の聲の近遠を知らん  
 と欲す」と。即時に己が神足の力を以て、無量千萬億佛の世界に至つて息み、佛の音聲を聞くに、近  
 きが如くして異ならず。息む所の世界の其の佛は大衆と方に食したまふ。彼の土の人は大にして、目  
 連は其の鉢の縁に立てり。彼の佛の弟子、其の佛に問うて言く、「此の人の頭の蟲は何の所より來り、  
 沙門の被服に著して而も行くや」と。其の佛報へて言はく、「此人を輕んずること勿れ。此は是れ東方

【五】佛の三密を釋す。

【六】目連・佛の音聲を奉ぬるの因縁、

の無量の佛界を過ぎて佛あり、釋迦牟尼と名く。此は是れ彼の佛の神足の弟子なり」と。彼の佛、目  
 度伽略子に問ひたまはく、「汝何を以て、此に来るや」と。目連答へて言く、「我は佛の音聲を尋ぬ  
 が故に來りて此に至る」と。彼の佛、目連に告げたまはく、「汝佛の聲を尋ねて、無量億劫を過ぐと  
 も、其の邊際を得ること能はず」と。

復次に、佛は世に出で、衆生の疑を斷せんが爲の故に、説法爲したま  
 ふ。此れ難すべからず。汝は日は何を以てか闇を除くやと問ふべからず。

佛も亦是の如く、佛は何を以ての故に答へたまふやと問ふべからず。

問うて曰く、諸佛は等しきが故に等覺と爲す。今何を以てか稱して、

「是れ彼の神力なり」と言ふや。答へて曰く、吾・我・彼・此なく嫉慢を滅す  
 るを示すが故なり。復次に、世界に天あり、常に尊勝憍慢の法を求むるが  
 故に自ら「天地人物は、是れ我が化作なり」と言ふ。梵天王の如きは諸の

梵に謂つて言く、「我汝等を作る」と。毗紐天の言く、「世間に大富貴、名聞の人あり。皆是れ我が身の

威徳力の分なり。我は能く世間を成就し、亦能く世間を破壊す。世間の威徳は、皆是れ我が作なり」と。

是の如く、天は因縁の法相を破すること有り、諸佛の實語は因縁の法相を破せざるが故に、「是れ彼

の佛の神力なり」と言ふ。

【七】 目度伽略子 (Maudgalyāyana) は、普通には目連と音譯す。

【八】 第二問、諸佛は等覺と名く、今それ「彼の神力なり」と言ふは何故なるか。

【九】 梵天王は一切萬有を造ると言ひ、毘紐天は一切世間を成就し且つ破壊す。

是の時、普明菩薩は寶微佛に白して言さく、「世尊よ、我いま當に往いて、釋迦牟尼佛を見たてまつりて、禮拜し供養し、及び彼の諸の菩薩摩訶薩の尊位を紹ぐ者、皆陀羅尼及び諸の三昧を得て、諸の三昧の中に於て自在を得るを見るべし」と。

問うて曰く、「二〇」若し諸佛は持戒禪定智慧「及び」度人みな等しくんば、是の普明菩薩は何を以て

か來つて釋迦牟尼佛を見たてまつらんと欲するや。答へて曰く。諸の菩薩は、常に佛を見て厭き足るなく、法を聽いて厭き足るなく、諸の菩薩僧を見て厭き足ること無からん

ことを欲す。諸の菩薩は世間の法に於て、皆以て厭患し、上の三事に於て、心に厭き足ること無し。二「手居士の如きは淨居天より來つて、佛を見んと欲し、其の身微細にして没失すること、譬へば消蘇の地に立つことを

得ざるが如くす。佛、手居士に語りたまはく、「汝塵身を化作して、此の地相を觀よ」と。居士は即ち佛の言ふが如く、塵身を化作して、地相を觀念し、頭面に佛足を禮して

一面に立つ。佛、居士に問ひたまはく、「汝は幾事をか厭ふこと無くして、淨居天に生ぜしむ」と。答へて言く、「我は三事を厭ふこと無くして淨居天に生ぜり。一には佛を見たてまつり供養して厭ふこ

と無く、二には法を聽いて厭ふこと無く、三には僧に供給して厭ふこと無し。佛、闍浮提に在すと

き、四部の衆常に佛に隨ひ返うて法を聽き、法を問ふが如く、是の我が淨居の諸天も亦常に我に従つ

【二〇】 第三問、諸佛も持戒禪定等の力皆等しくんば、普明菩薩が釋尊を見たてまつらんと欲するは何故なるか。  
【二一】 手居士、三事を以て淨居天に生ぜし因縁。

て法を聽き法を問ふと。聲聞すは猶尚法を聽いて厭き足ること無し。何に況んや法性身の菩薩をや。是を以ての故に普明菩薩は來つて釋迦牟尼佛を見、及び此の間の諸の菩薩摩訶薩の尊位を紹ぐ者、皆陀羅尼及び諸の三昧を見る。先の讚菩薩品の中に説くが如し。

諸の三昧に於て自在を得とは、問うて曰く、(三)佛一人の如きは、一切の三昧の中に自在を得たまふ。何を以てか「菩薩も亦一切の三昧の中に自在を得」と言ふや。答へて曰く、(三)二種の三昧あり、一には佛三昧、二には菩薩三昧なり、是の諸の菩薩は、菩薩三昧の中に於て自在を得るも、佛三昧の中には非ず。(四)諸佛要

集經の中に説くが如きは、文殊尸利、佛の集りたまへるを見たてまつらんと欲して、到ることを得ること能はず、諸佛は各各本處に還りたまひ、文殊尸利は諸佛の集まりたまひし處に到るに、一の女人あり、彼の佛座に近づいて、三昧に入れり。文殊尸利入りて佛足を禮し已りて、佛に白して言

さく、「云何が此の女人よ佛座に近づくことを得て、而も我は得ざるや」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝、此の女人を覺して三昧より起たしめ、汝自ら之に問へ」と。文殊尸利即ち彈指して、之を覺せども而も覺す可らず、大聲を以て喚べども亦覺す可らず。手を捉つて牽けども亦覺す可らず。又神足を以て三千大千世界を動かせども猶亦覺めず、文殊尸利、佛に白して言さく、「世尊よ、我は覺

【三】 第四問、菩薩にして諸の三昧の中に自在を得といふ理由如何。

【三】 二種の三昧——佛の三昧と菩薩の三昧。

【四】 文殊、女人の入定を覺す能はず、諸の蓋を棄てし之を覺し、文殊は女に依つて發心し、女人の諸の蓋を棄てし發心せし因縁。

さく、「云何が此の女人よ佛座に近づくことを得て、而も我は得ざるや」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝、此の女人を覺して三昧より起たしめ、汝自ら之に問へ」と。文殊尸利即ち彈指して、之を覺せども而も覺す可らず、大聲を以て喚べども亦覺す可らず。手を捉つて牽けども亦覺す可らず。又神足を以て三千大千世界を動かせども猶亦覺めず、文殊尸利、佛に白して言さく、「世尊よ、我は覺

めしむるべし能はず。是の時に、佛、大光明を放ちて、下方の世界を照したまふ。是の中に一菩薩あり、(一)棄諸蓋と名く。即時に下方より出で來りて、佛の所に到り、頭面に佛の足を禮して一面に立つ。佛、棄諸蓋菩薩に告げたまはく、「汝、此の女人を覺ませ」と。即時に彈指するに、此の女は三昧より起りて、文殊尸利、佛に白さく、「何の因縁を以てか、我、三千大千世界を動かせども、此の女をして起たしむること能はざるに、棄諸蓋菩薩の一彈指にして、便ち三昧より起つや」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝は此の女人に因つて、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、是女人は棄諸蓋菩薩に因つて、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發せり。此を以ての故に汝は覺めしむると能はず。汝は諸佛の三昧の中に於て、功德未だ満たす。是の棄諸蓋菩薩は三昧の中に自在を得、佛の三昧の中の少多に入るも、而も未だ自在を得ざるが故のみ。

佛、光明に告げたまはく、「往かんと欲せば、意に隨つて宜しく、是時を知るべし」と。爾の時に、寶積菩薩は千葉の金色の蓮華を以て、寶明菩薩に與へて之に告げ曰く、「善男子、汝此の華を以て寶積菩薩の座に散ぜ。彼の娑婆世界に生ずる所の諸天子轉り歸くをば覺し。汝當に一心に汝の佛に對して禮すべし」と。

問うて曰く、佛は何を以てか「往かんと欲せば、意に隨つて宜しく、是の時を知るべし」と言

【二五】棄諸蓋菩薩 五ナルワニアラ  
 ナヤシカンベ  
 pavikamhiya  
 【二六】第五問、標は何故に往かんと欲せば願草に往けと無愛想の言をなし給ひしや。

ふや。答へて曰く、佛は弟子に於ける愛を斷じ、「又」弟子の中に於て、心著せざるが故なり。

復次に、是菩薩は未だ一切智を得ず。未だ佛眼を得ざるが故に、心中少多の疑ひありて謂へらく、

「釋迦牟尼佛は功德大にして、益する所或は勝らん」と。是の故に語つて、「往かんと欲せば意に隨へ」と言へり。

復次に、是の菩薩は遙に釋迦牟尼佛の身の小なるを見たてまつりて、心に小しく慢を生じて言はん、「彼の佛は是に如かず」と。故に佛語りたまはく、「汝往いて佛身を觀ること莫れ、世界を

念すること勿れ、但だ佛の説法を聽け」と。復次に、是の世界を離るること極めて遠く、最も東邊に

在り、是の菩薩は釋迦牟尼佛の説きたまふ所の諸法の相と、寶積佛の説きたまふ諸法の相と、正に同じきことを聞いて、便ち「世界は遠し」と雖も、

法相は異ならず」と言つて、大信を増益し、心轉た堅固なり。復次に、先

世の因縁の故に遠き處に生ると雖も、應に來つて法を聽べし。譬へば、繩を雀の脚に繋けて、復た

遠く飛ぶと雖も、之を攝すれば則ち還るが如し。復次に、是の娑婆世界の中の菩薩は、普明の遠く來

つて法を聽くを見て、便ち是の念を作さく、「彼は遠くより來れり、況んや我は此の世界の中に生じ

て、而も法を聽かざらんや」と。是の如きの種種の因縁あり、是の故に佛は、「往かんと欲せば、意に

隨つて宜しく、是の時を知るべし」と言へり。

問うて曰く、(三七) 諸佛の力は等しく、更に福を求めず、何故に華を以て信と爲すや。答へて曰く、世

【三七】第六問、諸佛は求むる所なし、而も華を以て信と爲すは何故なるか。

【三七】第六問、諸佛は求むる所なし、而も華を以て信と爲すは何故なるか。

問の法に随つて行ふが故なり。二國の王の力勢同じと雖も、亦相贈遺するが如し。復次に、善觀の心を示すが故に華を以て信と爲す。世間の法の中に、使の遠くより來るに、必ず應に信あるべし。佛は世法に隨ひたまふ、是の故に信を致す。復次に、諸佛に法を恭敬するが故に、法を供養し、法を以て師と爲したまふ。何となれば三世の諸佛は、皆諸法の實相を以て師と爲したまふを以てなり。

問うて曰く、何を以てか自ら身中の法を供養せずして他法を供養するや。答へて曰く、世間の法に隨へばなり。比丘の法實を供養せんと欲して、自ら身中の法を供養せずして、餘の法を持ち、法を知り、法を解する者を供養するが如し、佛も亦是の如く、身中に法ありと雖も、餘佛の法を供養したまふ。

問うて曰く、佛の如きは福德を求めず、何を以ての故に供養したまふや。答へて曰く、佛は無量阿僧祇劫の中より諸の功德を修し、常に諸善を行じたまふ。但だ報を求めず、功德を敬ふが故に供養を作す。佛在す時の如き、一の盲比丘あり、見る所なし。而して手を以て衣を縫ふ時、針の袞脱せり。便ち言はく、

「誰か福德を愛し、我が爲に針に袞せん」と。是の時に佛は其の所に到り、比丘に語りたまはく、「我は是れ福德を愛するの人なり、汝が爲に袞を來さん」と。是の比丘は佛の聲を識り、疾く起ちて衣を著け、佛の足を禮して、佛に白して言さく、「佛は、功德已に滿ちたまふ、云何が福德を愛すと云ふ

- 【一〇】第七問、自ら身中の法を供養せずして、他法を供養する理由如何。
- 【一一】第八問、佛は福德を求め給はず、而も供養するは何の爲なるか。
- 【一二】佛、盲比丘の爲に針を袞し給へる因縁。

や。佛、報へて言はく、「我は功德已に滿つと雖も、我は深く功德の因、功德の果報、功德の力を知る。今我れ、一切衆生の中に於て、最も第一なることを得るは、此の功德に由る。是の故に我は愛す」と。佛は、此の比丘の爲に功德を讃じ已つて、次に爲に意に隨つて法を説きたまふに、是の比丘

は法眼の淨きことを得て、肉眼は更に明なりき。復次に、佛は功德已に滿ち、更に須る所なしと雖も、弟子を教化する爲の故に之に語げて、「我尙功德を作す、汝云何が作さざる」と言ふ。技家の百

輩の老翁にして舞ふが如きは、有る人之を呵して言く、「老翁年已に百歳なり、何ぞ是の舞を用ふるや」と。翁答へて、「我は舞を須るす、但だ子孫

に教へんと欲するが故のみ」と。佛の言も是の如く、功德滿つと雖も、弟子に功德を作すことを教へんが爲の故に供養を作したまふなり。

問うて曰く、若し爾れば佛は何を以てか自ら遙に釋迦牟尼佛の上に散せずして、人を遣はして供養したまふや。答へて曰く、此の間の諸の菩薩は、普明を信するが爲の故なり。復次に、佛の遣はしたまふ所の使は、水火兵毒百千種の害も終に

傷ふこと能はず。道里懸に遠し、安隱ならしめんと欲するが故なり。

問うて曰く、何故に好寶深經、若くは佛菩薩の寶を以て信と爲さずして、蓮華を以てするや。蓮華は小物なり、何ぞ信と爲すに足らん。答へて曰く、佛は物を須るたまはず。佛寶天寶すら尙亦須る

【一】 佛は化他の爲に福を修し給ふ。

【二】 第九問、佛は何故に自ら散華せずして、人を遣はして散華せしめ給ひしか。

【三】 第一〇問、蓮華を以て信となす理由如何。

【四】 蓮華を以てするや。蓮華は小物なり、何ぞ信と爲すに足らん。答へて曰く、佛は物を須るたまはず。

佛は物を須るたまはず。佛寶天寶すら尙亦須る

蓮華を以てするや。蓮華は小物なり、何ぞ信と爲すに足らん。答へて曰く、佛は物を須るたまはず。

佛は物を須るたまはず。佛寶天寶すら尙亦須る

蓮華を以てするや。蓮華は小物なり、何ぞ信と爲すに足らん。答へて曰く、佛は物を須るたまはず。

ず、何に況んや人寶をや。須るざるを以ての故に遣はさず、亦佛は自ら等しく、有したまふを以ての故に遣はさず、深經も亦爾なり。復次に、諸經は佛に於ては、則ち甚深なると無し。甚深の稱は凡人より出づ、凡人の疑ふ所は佛に於て礙ふること無く、凡人の難しとする所、佛は皆之を易しとしたまふなり。復次に、華香の清妙なるを宜しく爲に供養すべし。人の獻贈には、必ず異なる物を以てするが如し。

問うて曰く、(四) 何の故に止じ蓮華を以てして、餘物を以てせざるや。答へて曰く、供養するに、唯だ華香旛蓋を以てす。華に二事あり、色と香となり。

問うて曰く、(五) 餘の華も亦香あり色あり、何を以てか唯だ蓮華を以て供養するや。答へて曰く、華手經の中に説くが如きは、「十方の佛は皆華を以て、釋迦文佛を供養したまふ」と。復次に、(六) 蓮華に三種あり、一には八華、二には天華、三には菩薩華なり。八華は、大蓮華にして、十餘葉なり。天華は百葉、菩薩華は千葉なり。彼の世界の中に、多く金色の光明の千葉の蓮華あり。娑婆世界の中にも、化華は千葉ありと雖も、水に生ずる者なし。是を以ての故に是の蓮華の千葉にして、金色なるを遣はすこと、上の舌相の中に説くが如し。

【四】 第一問、但だ蓮華を以てして、餘物を以てせざる理由如何。

【五】 第一二問、餘の華も亦た色香なり、然るに唯蓮華を以てする理由如何。

【六】 三種の蓮華。

問うて曰く、佛は何を以てか普明をして、華を以て佛の上に散せしめたまふや。答へて曰く、法として、華香旛蓋を供養するに、旛蓋は上ぐべく、乾香は焼くべく、濕香は地に塗るべく、末香及び華は散すべし。

問うて曰く、何を以てか供へ奉つるのみならずして、而も自ら上に散するや。答へて曰く、自ら手づから供養するは是れ身業なり。輕言問訊は是れ口業なり。能く身口の業を起すは是れ意業なり。是の三業は功德を得ること牢固なり。佛道の與に因縁と作る。

問うて曰く、何を以てか汝當に一心に敬慎すべし、娑婆世界の中の諸の菩薩は及び難く勝り難しと言ふや。答へて曰く、佛・辟支佛・阿羅漢・一切の諸の賢聖は、皆一心に敬慎すべし。魔若くは魔民、及び内身の結使、種種の先世の罪報は皆是れ賊なり。此の諸の賊に近づくが故に、應に一心に敬慎すべし。譬へば賊の中に入り行くに、自ら慎み護らざれば、賊の爲に得らるゝが如し。是を以ての故に、「一心に敬慎し、以て彼の界に遊べ」と言ふ。復次に、人心は多く散するを以て、狂へる如く、醉えるが如し。一心に敬慎するは、則ち是れ諸の功德の初門なり。心を攝すれば禪を得て便ち實智慧を得。實智慧を得れば便ち解脱を得、解脱を得れば便ち苦を盡すことを得。是の如き事は

【三】 第二三問、佛は何故に普明をして佛の上に散華せしめ給ひしか。

【二六】 第一四問、華を供奉するのみならず、而も自ら上に散するや。

【一九】 第一五問、諸の菩薩は、及び難く、勝り難しといふ理由如何。

皆一心より得、言の般涅槃の後一百歳にして一比丘あり、憂波迦と名く。六神通を得たる阿羅漢にして、爾の時世に當つて閻浮提の大導師と爲るが如し。彼の時に一比丘尼あり、年百二十歳なり。此の比丘尼は年少の時、佛を見たてまつれり。憂波迦來つて其舎に入り、佛の容儀を問はんと欲し、先づ弟子を遣はす。弟子、比丘尼に語るらく、「我が大師、憂波迦來つて汝に見え、佛の容儀を問はんと欲す」と。是の時比丘尼は鉢を以て麻油を盛り滿て、戸扇の下に著け之を試み、其の威儀の詳密なるや不やを知らんとす。憂波迦入りて徐ろに戸扇を排するに麻油少しく棄はる。坐し已つて比丘尼に問ふ、「汝は佛を見たてまつるや不や。容貌は何に似たまひしや。我が爲に之を説け」と。比丘尼答ふらく、「我は爾の時年少にして、佛の來つて聚落に入りたまふを見る。衆人言く、佛來たまふと。我も亦た衆人に隨つて、出でて光明を見、便ち禮するところ、頭上の金釵地に墮ちて、大間林の下に在り、佛の光明之を照して、幽隱皆見え、即時に釵を得、我是より後、乃ち比丘尼と作れり」と。憂波迦は更に、「佛の世に在したまふ時の比丘の威儀禮法は如何」と問ふ。答へて曰く、佛の在せし時、六群の比丘は、無羞無耻にして最も繁惡なれども、威儀法則は汝に勝れたり。今日何を以てか之を知る。

【一】 優波迦、佛世に値へる比丘尼に、佛の容儀を問へる因縁。  
 【二】 六群の比丘とは、佛在世の時、六人の惡比丘ありて、黨を結び、多く非威儀の事を作せるものをいふ。其の名左の如し。

- (一) Kāṇḍia 喜
  - (二) Uppannda 近喜
  - (三) Punnappu 滿宿
  - (四) Channa 樂欲
  - (五) Mahākeṭika 馬師
  - (六) Ceyya 出現
- 佛し此の六人の名は、律本により同じからず。

六群の比丘は、丘に入るに油をして棄てしめず、此れ弊惡なりと雖も、比丘の儀法を知り、行住坐臥法則を失はず。汝は是れ六神通の阿羅漢なりと雖も、彼に如かず」と。憂波龜は是の語を聞いて、大に自ら慚愧す。是を以ての故に、「一心に敬愼せよ」と言ふ。一心に敬愼するは善人の相なり。

復次に、何を以ての故に、「一心に敬愼せよ、是の菩薩は、勝ち難く、及び難く、及び難く、及び難く」と言ふや。譬へば大師子王の勝ち難く、破り難きが如く、亦白象王、及び龍王の如く、大火炎の如く、皆近づき可きこと難し。是の菩薩は大福德智慧力の故に、若し人勝たんと欲し、破らんと欲するも、是れ正しく自ら破る可きことを得べからず。是の故に「近づき難し」と言ふなり。

問うて曰く、一切の大菩薩は皆大功德智慧利根にして、一切近づき難し、何を以てか獨り、「娑婆世界の中の菩薩は近づき難し」と言ふや。答へ

て曰く、實に言ふ所の如し。但だ多寶世界の中の菩薩の遠く來つて、此の世界を見るに、石沙の穢惡に如かず、菩薩の身は小に、一切の衆事皆亦如かざるを以て、必ず輕慢を生せん。是の故に佛は、「一心に敬愼せよ、彼の諸の菩薩は近づき難し」と言ふ。

復次に、樂處に生ずる人は、多く勇猛ならず、聰明ならず、智慧少なし。鬱怛羅衛の人は、大樂なるを以ての故に、出家する無く戒を受くるなきが如し。諸の天中も亦爾なり。是の娑婆世界の

【三】 第一六問、娑婆世界の菩薩にのみ獨り近づき難しといふ理由如何。

【三二】 樂國は鈍根、苦國は利根。

【三一】 鬱怛羅衛(Uttarakuru)。

中は、是れ樂の因縁少なく、三惡道老病死あり、土地は自活の法難し。是を以ての故に厭心を得ること易く、老病死を見ては至心に大に厭患し、貧窮の人を見ては先世の因縁の致す所を知り、心に大厭を生ず。是の故に智慧利根なり。彼の間の菩薩の七寶の世界には種種の寶樹あり。心に飲食を念ずれば、意に應じて即ち得。是の如きは厭心を生ずること難し。是故に智慧は大利なること能はずし。蓋障は利月を好き飲食の中に著げんに、刀は便ち垢を生ず。飲食は好しと雖も、而も刀の興めに相宜しからず。若し石を以て之を磨き、脂灰を以て瑩治すれば、垢は除いて、刀は利となるが如し。是の菩薩も亦是の如く、雜世界の中に生ずれば、利智にして近づき難し。人は少小にして勤苦すれば、多く能する所あり、亦多く堪ふる所ある如く、又馬を養うて乘らざれば、則ち任ふる所なきが如し。復次に、是の娑婆世界の中の菩薩は、方便多きが故に近づき難し、餘處は爾らず。佛説きたまはく、「我自ら宿世を憶念するに、一日に人に千の命を施し、衆生を度するが故に、諸の功德、六波羅蜜、一切の佛事、具足すと雖も、而も佛と作らず、恒に方便を以て衆生を度脱す」と。是の事を以ての故に、是の娑婆世界の中の菩薩には近づき難し。

【三三】 利刀を食中に著くれば垢を生ず。

【三三】 人は幼少にして勤苦すれば則ち能あり。

【三三】 馬を養うて乘らざれば任ふる所なし。



彌の時に善明菩薩は、寶相佛より、千華の金色の蓮華を受け、無量の出家、在家の菩薩及び諸の童男童女と俱共に發引す。

問うて曰く、天は是の普明菩薩は大力神通の故に、應に能く來るべし。是の出家、在家の菩薩、及び諸の童男童女は、云何が自ら致すや。多寶世界は最も東邊に在りて、道里は悠遠なり。是れ自ら力を用ゐて行くや、これ寶積佛の力となすや。是れ普明菩薩の力なりや。これ釋迦牟尼佛の力なりや。答へて曰く、盡く是れ四種の人の力なり。是の出家屠家の菩薩は、或は是れ不逮にして、五通を成就せる菩薩なり、四如意足あつて、好く先世に釋迦牟尼佛に因縁を修め、亦た自ら己が力を用ひ、亦是れ普明菩薩の力なり。何となれば是の中の力勢薄き者は、是の普明菩薩の力の故に、來るを得るを以てなり。轉輪聖王の飛んで上天する時、四種の兵及び諸の宮觀畜獸一切皆飛ぶが如し。轉輪聖王の功德大なるが故に、能く一切をして隨つて飛び從はしむ。此も亦是の如く、力勢薄き者は普明菩薩の力を以ての故に、皆亦來るとを得、亦是れ寶積佛の力、及び釋迦牟尼の光明、之を照す〔に依る。若し自ら力なきも、但だ釋迦牟尼佛の光明、之を召せば亦應に能く來るべし。何に況んや三あるをや。

問うて曰く、(三五) 是の普明菩薩は何ぞ獨り來らずして、多く衆人を將ゆるや。答へて曰く、翼從するところ宜しきが故なり。譬へば國王の出づる時は、必ず營從あるが如し。復次に、是の普明菩薩及び釋迦牟尼佛は、因縁ある人なるが故なり。何となれば彼の大衆の中の、二衆共に來るを以てなり。是

【八】 第一七問、多寶世界は最も東邊にありて、道里悠遠なり、然らば出家在家の菩薩及び童男童女等は、如何にして其處に到るべきか。  
 【九】 第一八問、普明菩薩は、何故に衆人を將ゐて、來り給ふや。

の故に因縁ある者は來り、因縁なき者は住ることを知る。

問うて曰く、是菩薩は何を以ての故に諸の在家、出家、童男、童女と俱に來るや、答へて曰く、佛弟子の七衆は、比丘と比丘尼と學戒尼と沙彌と沙彌尼と優婆塞と優婆夷となり。〔而して〕優婆塞と優婆夷とは是れ居家、餘の五衆は是れ出家なり。出家在家の中に、更に二種あり。若くは大、若くは小なり。小は童男童女にして、餘は大となす。

問うて曰く、大は應に行くてし、小は何を以てか能く來るや。答へて曰く、功德に在つて大小に在らず。若し功德の利を失して、不善の法を行はば、老たりと雖も而も小なり。若し功德の利ありて、善法を行はば小なりと雖も而も大なり。復次に、此の小なる者速く果れば、人見て則ち歎すらく、「小にして能く剛法の爲に遠く來ると云ふ佛法は小大皆、奉行することを得ることを顯はす。外道の法の中には、波羅門は其の法を行することを得るも、波羅門に非ざれば行することを得ず。佛法には大なり小なく、内なく外なく、一切皆修行することを得。譬へば薬を服するは、病を除くを以て主と爲し、貴賤大小を擇ばざるが如し。



皆東方の諸佛を供養し、恭敬し、守護し、讚歎す。

- 【一】 第一九問、善明菩薩は何處に在家出家童男童女等と共に來るか。
- 【二】 佛弟子の七衆
- 【三】 第二〇問、大の行くは當然なるも小は何故に來るや。
- 【四】 佛教と婆羅門教との行法の相違。

問うて曰く、(四三) 若し皆東方の諸佛を供養せば、諸佛は甚だ多し。何の時か當に訖つて、此の間に來ることを得べきや。答へて曰く、(四四) 是の諸の菩薩は、人天の法の供養を作りに非ず、自ら菩薩の供養の法を行ひ、菩薩の供養の法は、身禪定に入つて、其の身を直進にし、其の身邊より無量の身を出し、種種の供養の身を化作して、諸佛の世界に満たす。譬へば龍王の行く時は、身より水を出し、普ねく天下に雨らすが如し。

問うて曰く、(四五) 此の諸の菩薩は釋迦牟尼佛に詣らんと欲す、何を以てか中道にして諸佛を供養するや。答へて曰く、諸佛は第一の福田なり。若し供養すれば大なる累報を得。譬へば人の廣く田業を修すれば、爲に多く穀を得るが如し。故に諸の菩薩は、諸佛を見て供養すれば、佛の果報を得、是の故に供養す。復次に、(四六) 菩薩は常に佛を敬ひ重んずると、人の父母を敬ひ重んずるが如し。諸の菩薩は佛の説法を蒙り、種種の三昧、種種の陀羅尼、種種の神力を得、恩を知るが故に廣く供養す。(四七) 法華經の中の藥王菩薩の如きは、佛に従つて一切の變現色身三昧を得て、是の思惟を作さく、「我、當に云何が佛及び法華三昧を供養すべき」と。即時に飛んで天上に到り、三昧の力を以て、七寶の華香靡蓋を雨らし、佛を供養したてまつる。三昧より出で已つて、意に猶足らず、千二百歲に於いて衆香を服食し、諸の香

【四三】 第二二問、菩薩は東方無数の諸佛を如何にして供養するか。

【四四】 人天と菩薩との供養の法に異あり。

【四五】 第二二問、此の菩薩は何故に中道にして供養するか。

【四六】 菩薩は恩を知つて恩に報ゆるが故に常に佛を敬す。

【四七】 藥王菩薩身を以て供養せし因縁。

油を飲み、然る後に天の白氈を以て、身に纏ひ而して焼き、自ら垢を作して言く、「我が身の光明をして、八十恒河沙等の佛の世界を照さしめよ」と。是の八十恒河沙等の世界の中の諸佛讚して言く、「善い哉、善い哉、善男子よ、身を以て供養す。是を第一の勝と爲す。國財妻子を以て、供養するに百千萬倍すること譬喩を以て比と爲す可らず、千二百歳に於て身を然すとも減せず」と。

復次に、是の佛を供養したてまつれば、無量の名聞・福德・利益を得、諸の不善の事は、皆悉く滅除し、諸の善根は増長することを得、今世、後世、常に供養の報を得、久しくして後佛と作ることを得。是の如く佛を供養したてまつれば、種種の無量の利を得、是を以ての故に諸の菩薩は佛を供養したてまつる。

【四九】 第二三問、頭面に足を禮する理由如何。

【五〇】 上中下三種の禮、即ち禮と跪と拵となり。

釋

諸の華香・瓔珞・天香・澤香・深香・燒香・塗香・衣服・履蓋を拵して、釋迦牟尼佛の所に向ひ、到り已つて、頭面に佛の足を禮し、一面に立てり。

問うて曰く、兜に禮すと云ふべし。何を以てか「頭面に足を禮す」と名くるや。答へて曰く、人身の中、第一に貴き者は頭なり。五情の著く所にして最も上に在り。「然るに」足は第一に賤しくして不淨の處を履み、最も下に在り。是の故に貴き所を以て、賤しき所を禮するは、貴び重んじ供養するなり。復次に、舌、上中下の禮あり。下は拵し、中は跪き、上は稽首す。頭面に足を禮するは、是れ上

の供養なり。是を以ての故に佛は毗尼の中に、「下座の比丘は、兩手を以て、上座の兩足を捉へ、頭面に禮せよ」と。

問うて曰く、**三** 四種の身儀は若くは坐し、若くは立ち、若くは行き、若くは臥す。何を以ての故に

一面に立つや。答へて曰く、來る爲の故に行くべからず、恭敬供養の爲の

故に臥すべからず、此の事は明め易し、何を問ふに足らんや。應問のとき

は或は坐し、或は立つ、坐することは供養に於ては重んぜず、立つは恭敬

供養の法重し。復次に、佛法の中には諸の外道の出家、及び一切の白衣も

來つて佛の所に到るときは皆坐す。外道は他法、佛を輕んずるが故に坐

す。白衣は客の如し、是の故に坐す。一切の**三** 五衆の身心は佛に屬す、

是の故に立つ。若し道を得たる諸の阿羅漢、舍利弗、目連、須菩提等の如き

は所作已に辦せり、是の故に坐することを聽す。餘は、三道を得と雖も、

亦坐することを聽さず。大事未だ辦せず、**三** 結賊未だ破せざるが故なり。

譬へば王臣の大に功勳あるが故に、坐することを得るが如し。是の諸の菩薩の中に白衣ありと雖も、遠くより來つて、佛を供養したてまつるを以ての故に立つ。

【三】 第二四問、一面に立つ理由如何。

【四】 五衆とは、比丘と比丘尼と沙彌と沙彌尼と、式叉摩那(Śikhanḍikā)とをいふ。

式叉摩那とは大尼となるに先五十根本六法・沙彌尼戒を行する預備をいふ。

【五】 結賊とは、煩惱を賊に喩ふ。蓋し煩惱は實に賊の如く我等の身心を害傷するを以てなり。

【釋】

佛に由して言さく、「寶積如來、問を以て、世尊、少惱少患與居輕利にして氣力あり安樂なりや不や。又、此の千葉の金色の蓮華を以て、世尊に供養したへり」と。

【釋】

問うて曰く、吾寶積佛は一切智なり、何を以てか方に釋迦牟尼佛に、少惱少患與居輕利に氣

力あり、安樂なるや不や」と問訊するや。答へて曰く、靈諸佛の法は爾なり、知つて故らに問ひたま

ふ。毗尼の中に達貳迦比丘、赤色の瓦窟を作る。佛見已つて、知つて故らに阿難に問ひたまはく、「此

の作れるは何物ぞや」と。阿難佛に白さく、「是は陶家の子なり、出家して達貳迦と字く、小なる草舎

を作つて、常に放牛の人の爲に壞らる。三たび作つて三たび破る。是故に

此の瓦窟を作る」と。佛阿難に語けたまはく、「此の瓦窟を破れ。何となれ

ば、外道の輩當に佛大師在す時、漏處の法を出すと云ふべきを以てなり」と。

とあるが如し。是等の如く、「佛は處處に知つて故らに問ひたまへり。復次に、佛は一切智なり」と雖

も世界の法に隨ひたまひ、世人問訊すれば佛も亦問訊したまふ。佛は人中に生れては人の法を受け、

寒熱生死は人と等し、問訊の法も亦隨に等しかるべし。

復次に、世界の中の大貴と、大賤に應に相問ひすべからず、(而も)佛方は等しきが故に、應に相問

訊すべし。復次に、是の多寶世界の清淨莊嚴せる、佛身の色像光明も亦大なり。若し問訊せずん

ば、人は輕慢なりと謂はん。又復佛の世界の身色光明は種種勝れたりと雖も、智慧神力は俱に等し

【釋】 第二五問、一切智者たる寶積如來が、釋尊に安否を問ふは何故なるか。

くして異なること無きことを示さんと欲す、是の故に問訊したまふ。

問うて曰く、**「毛を以てか、少惱少患なりや不や。」**と問ひたまふや。答へて曰く、**「二種の病あり。」**一には外の因縁の病、二には内の因縁の病なり。外とは、寒熱・飢渴・兵刃・刀杖・墜落・推壓〔等〕なり。是の如き等の種種の外患を名けて惱と爲す、内とは飲食を節せず、臥し、起ること常なきの四病なり。是の如き等の種種を名けて内病と爲す。此の如きの二病は、身に有りて皆苦なり。是の故に「少惱少患なりや、不や。」と問ひたまふ。

問うて曰く、**「何を以てか「惱なく、病なきや」と問はずして、惱少なく、患少なきや」と問ふや。**答へて曰く、**「聖人は實に、身は苦の本にして、病まざる時なきを知りたまふ。何となれば是は四大合して身と爲る、地水火風の性は相宜しからず、各各相害すること、譬へば痘瘡の痛まざる時なく、若し薬を以て塗れば、少しく差やすとを得べきも、而も愈やすことを得べからざるが如し。人身も亦是の如く、常に病み、常に治す。治するが故に活きることを得、治せざれば則ち死す。是を以ての故に「惱なく、病なきや」と問ふことを得ず、外患には常に風雨寒熱あつて惱を爲し、復身の四儀なり、半臥・行・住あり。久しく坐すれば極めて惱む、久しく臥し、久しく住し、久しく行くも皆惱なり。是を以ての故に「惱少なく、患少なきや」と問**

【五】 律の中に於て、赤色の五  
畜を作ることを難し給はざり  
と問ふ理由如何し  
【六】 第二六問、少惱少患なり  
と問ふ理由如何し  
【七】 二種の病——外的病氣と  
内的病氣——を辯ず。  
【八】 第二七問、無惱無患なり  
と不やと問はずして、少惱少  
患なりや不やと問ふは何故な  
るか。

ふなり。

問うて曰く、禿少惱少患なりやを問へば則ち是れり、何を以てか復興居輕利なりや」と言ふや。答へて曰く、病は差ゆと雖も、未だ平復することを得ず。是を以ての故に「興居輕利なりや」と問ふ。

問うて曰く、忒何を以ての故に、「氣力あり安樂なるや不や」と言ふや。答へて曰く、人の病差ゆる有つて、能く行歩し、坐し、起つと雖も、氣力未だ足らざれば、造事し、施爲し、輕きを携へ、重きを擧ぐることは能はざるが故に、氣力あり安樂なるや不やを問ふなり。人あり、病は差ゆることを得て、能く重きを擧げ輕きを携ふと雖も、而も未だ安樂を感ぜず。是の故に「安樂なりや」不やを問ふなり。

問うて曰く、三病なく力あり、何を以てか未だ安樂を受けざるや。答へて曰く、人あり、貧窮にして恐怖し、憂愁にして安樂を得ず。是を以ての故に「安樂なりや」不やを問ふ。

復次に、三二種の問訊の法あり。身を問訊すると、心を問訊するとなり。若し「少惱少患興居輕利にして氣力ありや」と言はば、是れ身を問訊し、若し「安樂なりや不や」と言はば、是れ心を問訊するなり。種種内外の諸病を名けて身病と爲し、淫欲瞋恚妬嫉貪憂愁怖畏等の種種の煩惱九十八結。

【五】 第二八問、少惱少患なりやを問へば則ち是る、興居輕利なりや不やを問ふの必要なきにあらざるや。

【六】 第二九問、氣力安樂なりや不やを問ふ理由如何。

【七】 第三〇問、已に無病有力なり、何故に未だ安樂を受けざるや。

【八】 二種の問訊法。即ち身の問訊と心の問訊となり。

五百羅薩種の欲願等を名けて心病と爲す。是の一一の病を問訊するが故に、「少橋少病典居輕利にして氣力あり安樂なりや不や」と言ふなり。

問うて曰く、(三) 人の問訊するは則ち爾るべし、諸天すら尙此の如く問訊すべからず、何に況んや佛に於てをや。答へて曰く、(三) 佛身に二種あり。一には神通變化身、二には父母生身なり。父母生身は人の法を受くるが故に天に如かず、是の故に應に人の法の如く問訊すべし。

問うて曰く、(三) 一切の賢聖は心に著する所なく、身を貪らず、壽を惜まず、死を惡まず、生を悦ばず。若し是の如くならば何を以てか問訊せん。答へて曰く、世界の法に隨ふが故に、人の法の問訊を受く、遣はして問訊するにも、亦人の法を以てす。千葉の金色の蓮華は上に説くが如し。



爾の時に釋尊于尼佛は是の千葉の金色の蓮華を受け已つて、東方の恒河の沙の如き等の諸の世界の中の佛に散じたまふ。



問うて曰く、(三) 佛には厭るもの無し。今何を以ての故に、東方の諸佛に向つて、華を散して供養するや。佛初めて道を得たまふ時の如きは、自ら念じたまはく、「人々尊ぶ所なければ則ち事業な

【六三】 第三一問、人間の問訊するは則ち可なり、而も諸天すら問訊せず、然るを佛にして問訊するは何故なるか。  
【六四】 二種の佛身。  
【六五】 第三二問、凡そ學賢は身心に貪著せず、生死を厭厭せざるを法とす、然るを今佛に安否を問ふは何故なるか。  
【六六】 第三三問、佛は勝者なり、即ち能く勝つものなし。然るに釋尊が自ら東方諸佛に散華し供養し給ふは何故なるか。

らず。今十方の天地に、誰か尊び事ふ可き者ぞ。我、師として之に事へんと欲す。此の時に梵天  
 王等の諸天、佛に白く、「佛は無上なり。佛に過ぐる者なし」と。佛も亦自ら天眼を以て、三世十方  
 の天地の中を觀じたまふに、佛に勝つ者なし。心に自ら念して言はく、「我は摩訶般若波羅蜜多を行  
 行じ、今自ら作佛を致す。是れ我が尊ぶ所にして、即ち是れ我が師なり。我當に是の法を恭敬し供養  
 し尊び事ふべし」と。譬へば樹あり、名けて好堅と爲すが如し。是の樹は地中に在ること百歳にして、  
 枝葉具足し、一日に出生し、高さ百丈なり。是の樹出で已つて、大樹を求めて、以て其の身を蔭さ  
 んと欲す。是の時林中に神あり、好堅樹に語つて言はく、「世の中に汝より大なる者なし。諸樹は皆  
 常に汝が蔭の中に在るべし」と。佛も亦是の如く、無量阿僧祇劫、菩薩地  
 の中に在り、生ずること一日、菩提樹の下に金剛坐處に於て坐し、實に一切諸法の相を知り、佛道を成ずることを得たまふ。是の時に自ら念じたまはく、「誰か尊び事へ、以  
 て師と爲す可き者ぞ。我れ當に承掌し恭敬し供養すべし」と。時に梵天王等の諸天は、佛に白して言  
 さく、「佛は無上なり、佛に過ぐる者なし」と。今何を以ての故に、復た東方の諸佛を供養したまふ  
 や。答へて曰く、佛は無上にして、三世十方天地の中に、佛に過ぐる者なし。雖も、而も供養を行ひ  
 たまふ。供養に上中下あり。己より下の者にして、而も之に供養するは、是れ下の供養なり。己に  
 勝れたるを供養するは、是れ上の供養なり。己と等しき者を供養するは、是れ中の供養なり。諸佛の

【七】 上中下三種の供養

供養は是れ中の供養なり。六 大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼と眞に、一日の中に、一時に涅槃に入れり。是の時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の床を擧げ、四天王は佛の乳母大愛道の床を擧げ、佛自らは前に在つて香鑪を擎げ、香を焼いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、「汝等は我を助けて乳母の身を供養せよ」と。爾の時に諸の阿羅漢の比丘は各各神足力を以て、摩梨山の上に到り、牛頭栴檀香の薪を取り、佛を助けて積と作す、是を下の供養と爲す。是を以ての故に果を求めずと雖も、而も等しき供養を行ひたまふ。

復次に、唯佛のみ應に佛を供養すべし、餘人は佛の徳を知らず、偏に説くが如し。

「智人は能く智を敬す、智論すれば則ち智喜ぶ、智人は能く智を知る、勉の勉足を知るが如し。」

是を以ての故に諸佛一切智は、能く一切智を供養したまふ。復次に、是の十方の佛は、世世に、釋迦牟尼佛を助助したまへり。七住の菩薩の如きは、諸法は空にして、所有無し、不生不滅なりと觀す。是の如く觀じ已つて、一切世界の中に於いて、心著とす、六度萬行を放捨して、涅槃に入らんと欲す。譬へば人の夢中に機を作つて、大河の水を汲り、手足疲勞して患患

【六六】 大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼と眞に、一日の中に、一時に涅槃に入れり。是の時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の床を擧げ、四天王は佛の乳母大愛道の床を擧げ、佛自らは前に在つて香鑪を擎げ、香を焼いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、

【六六】 大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼と眞に、一日の中に、一時に涅槃に入れり。是の時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の床を擧げ、四天王は佛の乳母大愛道の床を擧げ、佛自らは前に在つて香鑪を擎げ、香を焼いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、

【六六】 大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼と眞に、一日の中に、一時に涅槃に入れり。是の時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の床を擧げ、四天王は佛の乳母大愛道の床を擧げ、佛自らは前に在つて香鑪を擎げ、香を焼いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、

【六六】 大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼と眞に、一日の中に、一時に涅槃に入れり。是の時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の床を擧げ、四天王は佛の乳母大愛道の床を擧げ、佛自らは前に在つて香鑪を擎げ、香を焼いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、

の想を生じ、中流の中に在りて夢覺め、自ら念じて言はく、「何許の河ありてか渡る可き者ある」と。是時に勤心都て放つが如し、菩薩も亦是の如く、七住の中に立ちて、無生法忍を得、心行皆止みて、涅槃に入らんと欲す。爾時に十方の諸佛は皆光明を放ちて菩薩の身を照し、右手を以て其の頭を摩で語りて言く、「善男子よ、此の心を生ずること勿れ、汝、當に汝が本願を念じ、衆生を度せんと欲すべし。汝は空を知ると雖も、衆生は解せず。汝當に諸の功德を集めて衆生を教化し、涅槃に入ること莫るべし。汝、未だ金色の身三十二相八十種の隨形好・無量の光明三十二業を得ず。汝今始めて一無生の法門を得て、便ち大に喜ぶこと莫れ」と。是の時に菩薩は、諸佛の教誨を聞いて、還つて本心を生じ、六波羅蜜を行じ、以て衆生を度す。是の如き等は初めて佛道を得る時、是の佐助を得。又佛初めて道を得たまふ時、心に自ら思惟したまはく、「是の法は甚深なり、衆生は愚蒙にして福薄し、我も亦五惡世に生ず、今當に云何かすべき」と。念じ已つて、「我當に一法の中に於て、三分と作し、分つて三乘と作し、以て衆生を度せん」と、是の思惟を作す。時に十方の諸佛は皆光明を現はして、讚じて言く、「善い哉、善い哉、我等も亦五惡世の中に在りて、一法を分つて三分と作し、以て衆生を度せり」と。是の時、佛は十方の諸佛の語聲を聞き、即ち大に歡喜し稱へて、「南無佛」と言へり。是の如く、十方の佛は處處に勸助し、爲に大利を作したまふ。恩の重きことを知りたまふが故に、華を以て十方の佛を供養したまへり。最上の福德は、此の徳に過ぎたるは無し。何となれば是の

華は、寶積佛の功德力の生ずる所に於て、是れ水に生ずる華に非ず、普明は是れ十住法身の菩薩にして、此の華を送り奉つて、釋迦牟尼佛に上つる。釋迦牟尼佛は、十方の佛は是れ第一の福田なることを知りたまふが故に、以て供養したまふ。是の福は倍倍多し。何となれば佛自ら佛に供養したまふを以てなり。佛法の中に、若し四種の布施あり。一に施す者は清淨にして、受くる者は不淨なるもの、二に施す者は不淨にして、受くる者は清淨なるもの、三に施す者は清淨にして、受くる者も亦清淨なるもの、四に施す者も不淨、受くる者も不淨なるものなり。今東方の諸佛に施したまふは。是れ二つ俱に清淨たり。是の福は最も大なり、是を以ての故に佛は自ら十方の佛を供養したまふ。

【七〇】 四種の布施。

【七一】 第三四問、聖人は果報も後有も受けざるを法とす、然るを是の施は福最も大なりといふは何故なるか。

問うて曰く、一切の聖人は、報果を受けたまはず、後更に生せず。

云何が「是の施は福最も大なり」と言ふや。答へて曰く、是の福は人の受くる無しと雖も、其相は自ら大なり。若し人の受くる者あらば、其報は無量ならん。諸の聖人は、有爲の法は皆無常にして空なることを知りたまふが故に、拵て涅槃に入り、是福も亦捨てたまふ。譬へば金丸を焼くが如し。眼に其の好きを見んと雖も、手を以て觸る可らず、人の手を焼けばなり。復次に、人の病あれば則ち藥を須して治り、若し病なければ藥は施す所なきが如く、人に身あるも亦是の如し。常に飢渴寒熱の爲に逼まらるること、亦瘡の發するが如く、衣被飲食温煖を以て適はしむる

は、藥を瘡に塗るが如し。愚癡の人の如きは、藥を負るが爲の故に、瘡に塗ることを用ゐず。若し其の瘡なければ藥は亦用ない。諸佛は身を以て瘡と爲し、身瘡を放捨したまふが故に、亦藥を受けたまはず、是を以ての故に大福ありと雖も、亦報を受けざるなり。

【釋】 散ずる所の蓮華は、東方の恒河沙等の如き諸佛の世界に満てり。

【圖】 問うて曰く、華は少くして、世界は多し、云何が満つや。答へて曰く、佛は神通力の故に、上の八種の如きは、自ら恣まゝに變化したまふ。法の大なるを能く小ならしめ、小なるを能く大ならしめ、輕きを能く重からしめ、重きを能く輕からしめ、自在にして礙なく、意の到る所に隨つて、能く大地を動かさし、願ふ所能く辨ず。諸の大聖人は、皆是八種の自在を得たまふ。是故に佛は能く小なる華を以て、東方の恒河沙等の如きの世界に満て、又復以て衆生に未來の福報を示し、此の如きの少華もて、東方世界に満てたまふ。又東方の菩薩に勸めて言はく、「福を佛田の中に植ゑて、得る所の果報も亦此の如し。華の彌滿すること無量なり、汝遠く來ると雖も、應當に歡喜すべし。此の大福田に遇うて果報無量なり」と。

【一】 佛陀には身瘡なし、故に藥を受け給はず。

【二】 第三五阿、少許の華を以て如何が多數の世界に満つることを得んや。

一一の華の上に、皆菩薩あつて結跏趺坐し、六波羅蜜を盡きたまふ。此法を聞く者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。

問うて曰く、**【論】** 上に佛は舌相の光明を以て、化して千葉の寶華と作り、一一の華の上に皆坐佛有り、今何を以ての故に、一一の華の上に皆坐せる菩薩有るや。答へて曰く、上は是れ佛の化したる

ふ所の華なるが故に、佛の坐したまふ有り、此は是れ普明菩薩の供養する所の華なり、是故に菩薩の坐する有り。復次に、上の諸の衆生は、應に坐佛を見たてまつりて度を得べく、今此の衆生は應に

坐菩薩を見て度を得べし。結跏趺坐して六波羅蜜を説き、此の法を聞く者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ること、先に説くが如し。

**【七】** 第三六問、已に一一の華上に坐佛ありといふ、今また一一の華上に坐菩薩ありといふは何故なるか。

**【七】** 多陀阿伽度(Shuddhakar)は、如去または如来と稱す

**【論】** 佛の出家在家の菩薩及び諸の童男童女は、頭面を結跏趺坐し、各供養の具を以て、釋迦牟尼佛を供養し、恭敬し尊重し讃嘆したてまつるも、是の諸の出家在家の菩薩及び童男童女は、各各菩提心徳力を以ての故に、釋迦牟尼佛多陀阿伽度・阿耨多羅三藐三菩提を供養したてまつることを得たり。

**論** 偈に説くが如し。

「諸聖の來りたまふ所の道をば、佛も亦 是の如く來りたまふ 實相及び去る所は、佛も亦爾り 異なること無し。」

諸の來りたまふ所の道をば、佛も亦 是の如く來りたまふ 實相及び去る所は、佛も亦爾り 異なること無し。

諸聖は實の如くに語り、佛も亦實の如くに説きたまふ。是を以ての故に、佛を多陀阿伽度と名けてたてまつる。

忍(耐)の鐵の心堅固に、精進の弓の力強く、智慧の箭は動利にして、憍慢と諸の垢とを破し、應に天世人一切諸の供養を受くべし。是故に佛と名け、以て阿羅訶と爲す。

正に苦の實相を知り、亦實に苦の集を知り、苦滅の實相を知り、亦苦滅の道を知り、眞正に四諦を解し、定實にして變ずべからず、是の故に十方の中に、三藐三佛と號したまふ。

微妙の三明を得、清淨の行も亦具はれり。是の故に世尊 鞞闍維那と號したてまつる。

一切の法を解知し、自ら妙道を得去り、或時は方便して説いて、一切を愍念したまふが故に、

老病死を滅除し、安隱の處に到らしめたまふ。是を以ての故に佛と名けまつりて、以て 修伽陀と爲す。

世の從來する所を知り、亦世の滅する道を知りたまふ。是を以ての故に佛と名けてたてまつりて、

天路迦鞞陀と爲す。

【七〇】 君履其難(君履其難) オツドヤリチカラ  
【七一】 譯して明行といふ。  
【七二】 鞞闍維那(Śakra) 譯して善逝といふ。  
【七三】 修伽陀(Śramaṇa) 譯して世間道といふ。

禪戒・智等の眼、及ぶもの無し、況んや上に出でんをや。是を以ての故に佛と名けたてまつりて、阿耨多羅と爲す。

大悲にして衆生を度し、輕善にして教へ調御したまふ、是を以ての故に佛を  
【七】阿耨多羅(Aśuṭṭara) 譯して無上師といふ。

けたてまつる。  
智慧あつて煩惱なく、最上の解脱を説きたまふ。是を以ての故に佛を  
【八】富樓沙曇觀(Fuṣṭhānti) 譯して調御丈夫と  
提婆摩菟舍と名けたてまつる。

三世の動不動盡及び不盡の法は、道樹の下にて悉く知りたまふ。是  
の故に名けて佛と爲す。  
【九】提婆摩菟舍(Devamānasya) 譯して天人師といふ。

經

南方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度りて、其の世界の最も邊に在るの世界を離一切憂  
と名け、佛心無憂徳と號し、菩薩を離憂と名けたてまつる。西方の恒河沙等の如き諸佛  
の世界を度り、其の世界の最も邊に在る世界を滅惡と名け、佛を寶山と號し、菩薩を義

意と名けたてまつる。北方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其の世界の最も邊に在る世界を善と名け、佛心  
し、菩薩を得勝と名けたてまつる。下方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其世界の最も邊に在る世界を善と名け、佛心

善徳と號し、菩薩を華王と名けたてまつる。上方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其の世界の最も邊に在る世界を聖と

- 【七】阿耨多羅(Aśuṭṭara) 譯して無上師といふ。
- 【八】富樓沙曇觀(Fuṣṭhānti) 譯して調御丈夫と云ふ。
- 【九】提婆摩菟舍(Devamānasya) 譯して天人師といふ。
- 【一〇】道樹とは菩提樹のこと。
- 【一一】第三七問、佛法の中には方を説くことなし、然るを今何故に十方の諸佛菩薩來り給ふと説くや。

名け、佛を尊徳と稱し、菩薩を尊徳と名けたり。是の如く一切は皆東方の如し。

【三】

問うて曰く、佛法の中の如きは、實に諸方の名なし。何となれば諸の五衆十二入十八界の中に攝せざる所、四法藏の中に亦方を説くこと無し。是の實法の因縁は求むるに亦得べからず。今何を以ての故に此の中に、「十方の諸佛十方の菩薩衆りたまふ」と説くや。答へて曰く、世俗の法の傳ふる所に隨ふが故に方を説く、方を求むるに實に得べからず。

問うて曰く、何を以てか方なしと言ふや。汝は四法藏の中に説かず、

我は六法藏の中に説く。汝は衆人界の中に攝せず、我は陀羅驃の中に攝す。是の法の法は常の相なるが故に、有の相なるが故に、亦有亦常なり。

經の中に説くが如くんば、日の出づる處は是れ東方、日の没する處は是れ西方、日の行く處は是れ南方、日の行かざる處は是れ北方なり。日に三分の合あり。若くは前合、若くは今合、若くは後合なり。方に隨つて

日を分てり、初合は是れ東方なり、南方西方も亦是の如し、日の行かざる處は是れを分つこと無し。彼は此を問て、此は彼を問つ、是れ方の相なり。若し方なくんば、彼此なし、彼此は是方相にして方に非ず。答へて曰く、然らず。須彌山は四域の中に在り、日は須彌を繞つて四天下を照す。鬱怛羅越の日は是れ 弗婆提の日出にして、弗婆提の人に於ては是れ東方なり。弗婆提の日は是れ

【三】 第三八問、方なしといふ理如何。

【八五】 陀羅驃(Dravya)は梵語、譯して實云ふ。

【八六】 四洲は日輪の行道によりて東西南北を分つ。

【八七】 鬱怛羅(Umakuru)佛檀無憂(Tramkuru)弗婆提(Dravanakuru)チャムブドギー、

【八八】 關浮提(ambudvipa)

閻浮提の日出にして、閻浮提の人に於ては是れ東方なり。是れ實には初なし。何となれば一切の方は皆東方、皆南方、皆西方、皆北方なればなり。汝は「日の出づる處は是れ東方、日の行く處は是れ南方、日の没する處は是れ西方、日の行かざる處は是れ北方なり」と言ふも、是の事は然らず。復次に、處ありて日の合せざる、是を方に非ずと爲す、方の相なきが故なり。

問うて曰く、我は一國の中の方相を説けるに、汝は四國を以て難を爲す。是を以ての故に東方は初なきに非ず。答へて曰く、若し一國の中の日東方と合せば是を有邊と爲す、有邊の故に無常なり、無常の故に是れ遍ならず。是を以ての故に方は但名のみ有つて實なし。

【釋】 爾の時に、是の三千大千世界は、皆變成して寶華を爲り、遍れく地を覆ひ、繪旛蓋を懸け香鬘・華鬘・青悉く莊嚴す。

問うて曰く、此れ誰が神力にして、地をして寶と爲らしむるや。

答へて曰く、是れ佛の無量の神力變化の所爲なり。有人の咒術・幻法・及び諸の鬼神・龍王・諸天等に能く少物を變化すれども、三千大千世界をして皆珍寶と爲らしむることは、餘人及び梵天王の皆能はざる所なり。佛は四禪

【九】 第三九問、予は一國の中の方相を説けるに、汝は四國を以て答ふ。故に方なしと言ふ可らざるにあらずや。

【九二】 第四〇問、三千大千世界を寶華となすは、何人の神力によるか。

【九三】 十四變化心。(一)初禪天に二種の變化あり、一は初禪初禪化、能く自他を變化するなり。二に「禪欲界化、能く下の欲界地を變化するなり。(二)二禪天に三種變化あり、一は二禪二禪化、能く自他を變化するなり、二に二禪初禪化、能く下の初禪地を變化するなり。三に二禪欲界化、能く下の欲界地を變化するなり。

中の、悉く莊嚴ならしめたまひ、一切衆生は、皆悉く相同し、心轉じて善を爲す。何を以ての故に、此の世界を莊嚴するや。般若波羅蜜(多)を説かんと爲の故に、亦た十方の諸の菩薩の客來り、及び諸天、世人の爲の故に莊嚴す。人の貴客を請するに、若し一家を請するには則ち一家を莊嚴し、一國の主には則ち一國を莊嚴するが如く、薄伽梵王は則ち四天下を莊嚴し、梵天王は三千大千世界を莊嚴し、佛は十方無量恒河沙等の諸の世界中の主、是の諸の他方の菩薩及び諸天、世人の客來るが爲の故に、亦此彼の衆人は此の變化の莊嚴を見るが爲に、則ち大心を生じ、清淨なる歡喜心を生じ、大心より大業を發し、大業より大報を得、大報を受くる時、更に大心を生じ、是の如く展轉増益して、阿耨多羅三藐三菩提を生ずることを得、是を以ての故に此の世界を轉じて皆悉く寶となす。云何が寶と名くる。(九三) 寶

に四種あり。金と銀と、砒琉瑠と、頗梨となり。更に七種の寶あり、金銀砒琉瑠頗梨、車渠馬瑙赤真珠なり。更に復た寶あり、摩羅伽陀因陀尼羅、摩訶尼羅、鉢摩羅伽、越闍、靑珠、如意珠、玉具、

り。(三) 三摩入に四種變化あり、一に三轉三變化、二に三轉二變化、三に三轉初變化、四に三轉盡言化なり。(四) 四轉六に五變化あり、一は四轉四變化、二は四轉三變化、三、四轉二變化、四は四轉初變化、五は四轉欲界化なり。

- 【九三】 四種の寶を擧ぐ。
- 【九四】 靑珠(Verdigris)。
- 【九五】 頗梨(パール)。
- 【九六】 七種の寶を擧ぐ。
- 【九七】 車渠(Mint, Salsol)。
- 【九八】 摩羅伽陀(Marudhatu)。
- 【九九】 珠は、金翅鳥の口邊より出づ。綠色にして、能く一切の毒を避くと云ふ。
- 【一〇〇】 因陀尼羅(Indra-nira)。
- 【一〇一】 摩訶尼羅(Mahā-nira)。
- 【一〇二】 鉢摩羅伽(Brahmarudhatu)。
- 【一〇三】 越闍(Chakra)。
- 【一〇四】 靑珠(Verdigris)。
- 【一〇五】 如意珠(Mani)。
- 【一〇六】 玉具(Mani)。

珊瑚、琥珀等の種種を名けて寶と爲す。是の寶に三種あり、人寶と天

寶と菩薩寶となり。人寶は力少なく、唯清淨の光色ありて、毒を除き鬼

を除き暗を除き、亦飢渴寒熱種種の苦事を除く。天寶は亦大亦勝にして、

常に天身に隨逐し、使令すべく、共に語る可く、軽くして重からず。菩薩

寶は天寶よりも勝れ、能く人寶天寶の事を兼有す。又能く一切衆生をして、

此に死し彼に生ずるの因縁本末を知る。譬へば明鏡にむかひ、其面像を見

るが如し。復次に、菩薩寶は能く種種の法音を出す。若し首飾寶冠と爲れば、

界の諸佛の上に、幢幡華蓋種種の供養の具を雨ふらして以て佛に供養し、

又衣被臥具生活の物を雨ふらして衆生に給施す。是の如き等の種種

の衆寶は以て衆生の貧窮苦厄を除く。

問うて曰く、(二〇四) 是の諸の珍寶は何處より出るや。答へて曰く、金は山の石沙、

赤銅の中より出で、

眞珠は魚の腹中、竹の中、蛇の腦の中より出で、龍珠は龍の腦中より出で、

珊瑚は海中の石樹より出で、玉貝は蟲甲の中より出で、

銀は燒石より出で、餘の琉璃・頗梨等は皆山窟の中より出で、如意珠は

佛の舍利より出づ。若し法没し盡くるの時は、諸の舍利は皆變じて如意珠と爲る。

【一〇三】 琉璃(二〇三) 命剛と譯す。

【一〇四】 寶の三種——人寶・天寶・菩薩寶。

【一〇五】 第四一問、是等の珍寶は何處より出づるか。

【一〇六】 千歳の氷は、化して頗梨珠となる。

【一〇七】 縮穀には氷に作る。

【一〇八】 縮穀には氷に作る。

【一〇九】 縮穀には氷に作る。

【一一〇】 縮穀には氷に作る。

【一一一】 縮穀には氷に作る。

【一一二】 縮穀には氷に作る。

【一一三】 縮穀には氷に作る。

【一一四】 縮穀には氷に作る。

【一一五】 縮穀には氷に作る。

【一一六】 縮穀には氷に作る。

【一一七】 縮穀には氷に作る。

【一一八】 縮穀には氷に作る。

佛の莊嚴したまふ所の一切の世界は、是れ最も殊勝にして、諸天の得る能はざる所なり。何となれば是は大功德より生ずる所なればなり。種種の華旛は先に説くが如し。香樹は (一〇七) 阿伽樓、多伽樓、檀と名く。是の如き等の種種の香樹あり。華樹は (一〇九) 瞻蔔、阿輸迦 (一一三) は娑呵迦羅と名く。是の如き等の種種の華樹あり。

釋

譬へば (一三三) 華積世界、(一三三) 普華世界の如し、(一四) 妙徳菩薩 (二五) 善住意菩薩及び餘の大威神の諸菩薩、若彼に在つて住す。

問うて曰く、何を以てか、譬へば華積世界の如しと言ふや。答へて曰く、彼の世界には常に淨き華あり。此の世界は一時に變化するが故に、以て喻ふるなり。譬喩の法は小を以て大に喩ふ。人の面の好きを、一脣へば満月の如し」と言ふが如し。

問うて曰く、更に十方の諸の清淨世界あり、阿彌陀佛の、安樂世界等の如し。何が故に但普華世界を以て喩と爲すや。答へて曰く、阿彌陀佛の世界は華、積世界に如かず。何となれば法積比

- 【一〇七】阿伽樓 (Agala)。譯して 沈香といふ。
- 【一〇八】多伽樓 (Tanjana)。譯して 格香といふ。
- 【一〇九】瞻蔔 (Janpu)。黃白の華を咲く樹なり。
- 【一一〇】阿輸迦 (Asoka)。無憂樹と譯す。
- 【一一一】娑呵迦羅は、赤華樹と譯す。
- 【一一二】華積 (Pulakula)。
- 【一一三】普華 (Puravandana)。
- 【一一四】妙徳 (Manjusaka)。
- 【一一五】善住 (Sankhavanahina)。
- 【一一六】第四三間、阿彌陀佛の安樂世界の如き清淨の世界あり、何故に普華世界を以て喩と爲すか。
- 【一一七】阿彌陀佛 (Amithaba-buddha)。
- 【一一八】安樂世界 (Sukhavativyuha)。
- 【一一九】法積 (Dharma-samgraha)。

丘、佛は將に十方に至つて清淨の世界を觀んとすと雖も、功德力薄くして、ことを得る能はず、是を以ての故に世界は如かず。

復次に、當佛の此の世界を變化したまふ時、正しく華積世界と相似たり。

華積世界の如しと言ふ。

問うて曰く、二三、史に餘の大菩薩あり。毗摩羅詰觀世音、遍吉菩薩

等の如し。何を以てか、此の諸の菩薩の彼に在つて住することを言はずし

て、但、文殊師利善住意菩薩を言ふや。答へて曰く、是の遍吉菩薩は一

一の毛孔より、常に諸佛の世界及び諸佛菩薩を出して、遍ねく十方に満

て、以て衆生を化し、道き住する處なし。文殊師利の分身は變化して五道

の中に入り、或は聲聞と作り、或は緣覺と作り、或は佛身と作る。首楞嚴

三昧羅の中に説くが如きは、文殊師利菩薩は、過去世に龍種尊佛と作り、

七十二億世に閻支迦佛と作る。是れ言ふ可く説く可し。遍吉菩薩は量る

可らず、説く可らず、住處を知る可らず。若し住せば、應に一切世界の中に在つて住すべし。是の故

に説かず。復次に、及び諸の大威神の菩薩とは、亦應に總じて遍吉等の諸の大菩薩を説くべし。

上妙の清淨世界を見る

是を以ての故に「譬へば

【一】第四問、龍摩羅詰觀世音

等の諸大菩薩の彼處に住し給ふと言はざるは何故なるか。

【二】遍吉菩薩(Samantabhadra)普通には略して維摩といふ。

【三】遍吉(Samantabhadra)一般には、普賢菩薩と稱せらる。

【四】文殊師利は妙徳菩薩の原名なり。

【五】遍吉菩薩には一毫の塵土なし。



爾の時に、佛、一切の世界の、若くは天の世界、若くは魔の世界、若くは梵の世界、若くは沙門・婆羅門、若くは天、若くは毘闍婆人・阿術羅等、及び諸の菩薩摩訶薩、尊位を紹ぐ者、皆集まれるを知りたまふ。



問うて曰く、三三三佛の神力は無量なり、一切の十方の衆生、若し盡く來つて會に在らば、一切の世界は應に空なるべし。若し來らずんば、佛の無量の神力には能はざる所あらん。答へて曰く、盡く來るべからず。何となれば諸佛の世界は無邊無量なり。若し盡く來らば、便ち有邊と爲らん。又復十方に各各佛あつて、亦般若波羅蜜〔多〕を説きたまふ。彼の般若波羅蜜〔多〕四十三品の中の如きは、十の方面に各千佛現じて、皆般若波羅蜜〔多〕を説きたまふ」と。是を以ての故に盡く來るべからず。

問うて曰く、(三三三)若し十方の諸佛皆般若波羅蜜〔多〕を説きたまふあらば、十方の諸の菩薩は何を以ての故に來るや。答へて曰く、三三七善明菩薩本章の中に、已に説くが如く、釋迦牟尼佛と因縁あるが故に來るなり。復次に、是の諸の菩薩の本願の故に、「若し般若波羅蜜〔多〕を説く處あらば、我當に聽受し、供養すべし」と。是を以て遠く來る。「そは」身力を以て、功德を積まんと欲するが故なり。亦以て諸の衆生に示すらく、「我、遠くより來つて法を供養するに、云何ぞ汝は此の世界に在つて供養せざるや」と。

【三三三】第四五問、佛の神力は無量なるが故に、若し十方の衆生盡く來會せば、世界は空となるにあらずや。若し又來會せずんば佛の神力に不可能の點あるにあらずや。

【三三七】第四六問、若し十方の諸佛皆般若を説かば、十方の諸菩薩は例數に來會す。

【三七七】善明菩薩(Śāṃkhya) (三三七)

問うて曰く、(二六)佛は法に於て著したまはず、何を以ての故に七たび神力を現じて、衆生をして大に集まらしめしや。答へて曰く、是の般若波羅蜜(多)は、甚深にして知り難く、解し難く、不可思議なり。是の故に諸の大菩薩を集め、新發意のものをして、心に信樂を得せしむ。譬へば小人の語る所は人の信と爲らず、貴重(大人)は、人必ず信受するが如し。

問うて曰く、(二五)何を以ての故に、「若くは天の世界、若くは魔の世界、若くは梵の世界」と言ふや。但應に天の世界、人の世界と言はば、則ち足るべし。何となれば十號の中に天人師と言ふ、是の故に應に天人と言ふべきのみ。答へて曰く、諸天には天眼天耳あり、利根にして智慧多く自ら知つて來る。是を以ての故に天の世界と言ふ。

問うて曰く、(二〇)若し天の世界は已に魔と梵とを攝す。何を以てか別して、「若くは魔、若くは梵」と説くや。答へて曰く、天の中に三大主あり、釋提婆那民は二處の天主、魔王は六欲天の主、梵世界の中には大梵天王を主と爲す。

問うて曰く、(二三)夜摩天・兜率陀天・化樂天の如きは、皆主あり、何を以てか但三主あるや。答へて曰

【二六】第四七問、佛は法に著し給はず、然るに七たび神力を現じて、衆生を集め給ひしは何故なるか。  
 【二五】第四八問、十號の中に天人師とあり。されば天・魔・梵界と言はずして、單に天人の二世界を言へば足るにあらずや。  
 【二〇】第四九問、天界には魔も梵も共に攝す、今これを別説する理由如何。  
 【二三】第五〇問、夜摩、兜率陀、化樂の諸天には各主あり、今たゞ三主を擧ぐる理由如何。

く、釋提婆那民は地に依つて住す、佛も亦地に依つて住したまふ。常に佛の所に來り、大に  
つて、人多く識るが故なり。魔王は常に來つて佛を嬖す、又是れ一切欲界の主なり。夜摩天、兜率陀  
天、化樂天は皆魔王に屬す。

復次に、天の世界には、則ち三界の天、皆是の天の中に攝し、一切の欲界は魔を主と爲す。是の故  
に別に説く。復次に、魔は常に佛を嬖す、今來つて般若波羅蜜多を聽く、餘人の信を増益するが故  
なり。

問うて曰く、(二三)色界の中に大に天あり、何を以てか、但梵の世界に集  
まること多しや。答へて曰く、上の諸天は覺觀なく、散心を爲さず、又聞  
くこと難きが故なり。梵の世界には四攝あつて聞き易きが故に、又梵の世  
界は近きが故なり。復次に、梵を離欲清淨と名く、今梵の世界を言へば、已に總じて色界の諸天を説  
くなり。

復次に、餘の天には未だ人民あらず、劫初に生ずる時、梵天王、獨り梵宮に在り、寂寞として人な  
く其の心悅ばず。而も自ら念を生ずらく、此間に何を以てか人民を生せざる」と。是の時、光音天の  
命盡く者、念に應じて來り生ず。梵土便ち念を生ずらく、「此諸天は先に無し、我が念に隨ふが故  
に生ず。我は能く此諸天を生ぜり」と。諸天は此の時、亦各自に念ずらく、「我は梵土に従つて生ず。

【二三】第五一河、色界中にも天あり、今たゞ梵の世界に集まるといふ理由如何。

梵王は是れ我が父なりしと。是を以ての故に但梵の世界のみを説く。復次に、二禪三禪四禪の天は、欲界に於て佛を見、法を聴き、若くは菩薩を勸助し、眼識耳識身識を皆梵の世界の中に在りて取る。是を以ての故に別して梵の世界を説く。

問うて曰く、(一三三)何を以ての故に獨り諸の沙門婆羅門を説いて、國王及

び長者・諸餘の人衆を説かざるや。答へて曰く、智慧の人に二分あり、沙

門と婆羅門となり。出家を沙門と名け、在家を婆羅門と名く。餘人は心に

世樂を存す、是の故に説かず。婆羅門は多學にして智慧あり福を求め、出

家人はすべて道を求む。是の故に但だ沙門婆羅門を説く。在家の中、七世

清淨にして、生れて六歳に滿ち、皆戒を受くるを婆羅門と名く。是の沙

門と婆羅門の中には道德智慧あり、是を以ての故に説く。

問うて曰く、(一三四)先に己に天の世界を説く、今何を以てか復た天を説くや。答へて曰く、天の世界

は是れ四天王・忉利天、魔は是れ他化自在天、梵は是れ色界なり。今説く天は是れ欲界の中の、夜摩と

兜率陀と化樂と愛身天等なり。愛身は六天の上在りて、形色絶妙なるが故に愛身と言ふ。

問うて曰く、(一三五)何を以てか但難閻婆を説いて、諸餘の鬼神及び龍王を説かざるや。答へて曰く、是

の難閻婆は是れ諸天の奴人なり。諸天に隨逐して、其の心は柔軟に、福德力は小にして、諸天諸鬼神

【一三三】第五二問、諸の沙門、婆羅門を説き、他の國王大臣、及び餘の人衆に言及せざる理由如何。

【一三四】第五三問、重ねて天の世界を説く理由如何。

【一三五】第五四問、たゞ難閻婆のみを説いて、他の龍王等を説かざるや。

に滅れり。鬼神道の中に龍王を攝し、畜生道の中に 甄陀羅を攝す。亦是れ天の妓にして、皆天に屬し、天と同じく住し、共に坐して飲食し、妓樂は皆天と同じし。是の毘闍婆王を 童龍磨と名く。是の毘闍婆、甄陀羅は恒に二處に在つて住す。常に居止する所は十寶山の間に在り。有時は天上の諸天の爲に樂を作す。此の二種は、常に番して上下に休し、人は四天下に在つて生ず。生に四種あり。極めて長壽なるは乃ち無量歲に至り、極めて短壽なるは乃ち十歳に至る。阿脩羅は惡心にして闘闘すれども、而も戒を破らず。大に施福を積し、生じて大海の邊に在つて住し、亦城郭宮殿にあり。是の阿脩羅王を 毗摩質多 婆梨羅毘羅と名け、是の如き等を阿脩羅王と名く。説くが如くんば、一時、羅睺羅阿脩羅王は、月を嗽はんと欲す、月の天子は怖れて、疾かに佛の所に到つて、偈を説けり。

『大智 精進の佛世尊、我今歸命し精進し禮したてまつる。是の羅睺羅は我を惱亂す、願くは佛憐愍し救護したまへ。』

佛、羅睺羅の輿めに佛を説いて言はく、  
 『月は闇を照して清淨なり、是れ虚空の中の天の燈明なり。其の色は白く淨くして千光あり。汝、月を呑むこと莫くして疾かに放ち去れ。』

- 【一】甄陀羅 (Asurika) は、八
- 【二】童龍磨 (Draoni) は樹と
- 【三】毗摩質多 (Vemacitra)
- 【四】婆梨羅毘羅 (Balarisira)

是の時、羅睺羅は怖慄し、汗を流して、即ち疾かに月を放てり、婆梨阿脩羅王は、羅睺羅の惶慄して月を放つを見て、偈を説いて問うて曰く、

「羅睺羅よ、汝は何を以ての故に惶怖戰慄して、疾かに月を放ち、汝が身より汗を流すこと病人の如く、心怖れて安んぜざること、乃ち是の如くなるや。」

爾の時に羅睺羅、偈を説いて答へて曰く、

「世尊は偈を以て我に勅したまへり、「我月を放たずんば、頭七分ならん、設ひ生活することを得とも安穩ならず」と。故を以て我は今此の月を放てり。」

婆梨阿脩羅王は、此の偈を説いて言く、

「諸佛は甚だ値ひ難く、久遠にして出世し、此清淨の偈を説きたまへば、羅睺即ち月を放てり。」  
問うて曰く、「何を以てか地獄・畜生・餓鬼を説かざるや。答へて曰く、地獄は大苦にして心亂れ、

法を受くること能はず。畜生は愚癡心を覆ひ、化を受くること能はず。餓鬼は飢渴の火の爲に身を燒くが故に、法を受くることを得ず。

復次に、畜生・餓鬼の中より少多來つて法を聽く者あれども、福德の心を生ずるのみにして、道を受くるに堪へず、是の故に説かず。

【釋】第五五問、地獄、餓鬼、畜生を説かざる理由如何。

問うて曰く、<sup>一四</sup>若し爾らば難聞婆阿脩羅も亦説くべからず。何となれば鬼神道の中に已に攝するを以てはり。答へて曰く、佛は攝すと説きたまはず、今何を以てか攝すと云ふや。此れ迦旃延子等の説なり。阿脩羅の如きは力天と等しく、或時は戦闘して天に勝つ。難聞婆は是れ諸天の妓にして、天と同じく福樂を受け、智慧あつて能く好醜を別つ。何を以てか道法を受くるとを得ざらんや。雜阿含天品の中に説くが如くんは、<sup>一五</sup>富那婆藪は鬼神の母なり。佛遊行して、其處に宿す、爾の時、世尊は上妙の法甘露を説きたまひしに男女二人啼泣せり。母爲に偈を説いて之を止めし。

『汝、難聞婆よ、聲を作すこと勿れ、富那婆藪も亦啼くこと莫らん、我は今法を聞いて道證を得たり、汝も亦當に得て、必ず我が如くなるべし。』

是の事を以ての故に鬼神の中に、道を得る者あることを知る。

復次に、摩訶衍の中の <sup>一六</sup>密迹金剛力士は諸の菩薩の中に於て勝れたり、

何に況んや餘人をや。 <sup>一七</sup>屯耑摩甄陀羅十難聞婆上の如きは、佛の所に至り、琴を弾じて佛を讚じ、三千世界皆震動を爲し、乃至摩訶迦葉は其座に安せざりき。此の如きの人等は、云何が道を得ること能はざる。諸の阿脩羅王と龍王の如きは、皆佛の所に到り、佛の深法を問ひたてまつるに、佛は其の問

【一四】第五六問、難聞婆等は鬼神道の中に攝するが故に説く必要なきにあらずや。  
 【一五】富那婆藪(Funaparva)【一六】密迹金剛力士(Kinnarajita)【一七】手に金剛の武器を持ち、佛を護衛する夜叉神の總名なり。蓋し密迹とは、彼常に佛に親近して、佛の秘密の事達を聞かんとする事態に名けたるものなり。  
 【一八】屯耑摩甄陀羅王(Druma-Kinnarajita)

に隨つて深義を答へたまへり。何を以てか道を得ること能はずと言ふや。

問うて曰く、(一) 五道の衆生の中に於て、佛は是れ人天の師なり、三惡道を説きたまはざりき。其福

なく、道を受くる分なきを以ての故に、是の龍鬼は皆惡道の中に墮せり。答

へて曰く、佛も亦分明に五道を説きたまはず、五道を説くは是れ一切有部

の僧の所説なり。(二) 婆蹉弗・妬路部僧の説に六道あり。復次に、應に

六道あるべし。何となれば三惡道は一向に是れ罪處にして、若し福多く罪

少なきは、是を阿脩羅、閻婆等と名く、生處別なるべければなり。是を以ての故に應に六趣と言ふべ

し。復次に、三惡道も亦道を受くるあれども、福少なきが故に無しと言ふ。諸の菩薩、尊位を智く者

に及んで先説くが如し。

【西女】第五七問、龍鬼等の所屬

の道は何處なるか。

【一四】婆蹉弗 (Vasiputra)

【一七】妬路部 (Drona)

巻の第十一

初品の中の舍利弗の因縁を釋す、

佛舍利弗に告げたまふ

問うて曰く 般若波羅蜜多は、是れ菩薩摩訶薩の法なり。佛は何を以ての故に舍利弗に告げ

て、而も菩薩に告げたまはざるや。答へて曰く 舍利弗は一切の弟子の中に於て、智慧最も第一なり。佛の偈に説きたまへるの如し。

【一切衆生の智は唯佛世尊を除いて、舍利弗の智慧及び多聞に比せん

と欲するに、十六分の中に於て、猶尚一にも及ばざらん】

復次に、舍利弗は智慧あり、多聞にして大功徳あり。年始めて八歳に

して、十八部の經を誦し、一切の經書の義理を通解す。是の時、摩伽陀國に龍王兄弟あり、一を姑利と名け、二を阿伽和羅と名く。雨を降らすに時を以てし、國に荒平なし。人民之を感じ、常に仲春の月を以て、一切大に集まり、龍の住處に至つて、爲に大會を設け、樂を作し、義を談じて、此の一日を終ふ。古より今に及んで、斯の集未だ替らず、遂に龍の名を以て此の會に名く。此の日常法として四の高座を敷く。一は國王の爲め、二は太子の爲め、三は大匠の爲め、四は論士の爲めなり。爾の時に

【一】 第一問、佛が菩薩の法なる般若を舍利弗長老に告げ給ひし理由如何。  
【二】 舍利弗は諸の佛弟子中、智慧第一なり。  
【三】 舍利弗と目健連との學道の因縁

舍利弗は八歳の身を以て、衆人に問うて言く、「此の四の高座は誰が爲に之を敷くや」と。衆人答へて曰く、「國王太子大臣論士の爲なり」と。是の時、舍利弗は時の人婆羅門等を觀察し、神情を瞻向するに、己に勝る者なし。便ち論床に昇つて結跏趺坐す。衆人疑ひ怪んで或は謂ふ、「愚小にして無知なりし。或は謂ふ、「知量人に過ぐ」と。復た其の神異を嘉すと雖も、而も猶各自濟を懷き、其の年少を恥ぢて、自ら與に語らず。皆年少の弟子を遣はし、傳言して之に問ふに、其の空閑の旨趣、辭理超絶せり。時の諸論師は未曾有なりと歎ず、愚智大小一切皆伏す。王大に歡喜し、即ち有司に命じて一聚落を封じ、常に以て之に給す。王は象轡に乗せ鈴を振り、吉を告げ、一切の十六大國六大城の中に宣示するに慶悅せずといふこと無し。是時の

古占師子を拘律陀と名く、姓は大目犍連、舍利弗は友として之に親しむ。舍利弗は才明かにして、見るに貴く、目犍連は豪爽にして最も貴し。此二人の者は才智相比び、德行互に同じく、行けば即ち俱に遊び、住すれば即ち同じく止まる。少長總纏として、結要終始なり。後俱に世を厭ひ出家して道を學び、梵志の弟子と作り、道門を精求すること久うして徴なし。以て師に問ふ。師を 刪闍耶と名く。而して之に答へて言く、「我道を求めて自ら彌年歳を歴たり、知らず道果有りと爲んや無なしと爲んや。我は其人に非ずや、而も亦得ず」と。他日、其師疾に寝ねたり。舍利弗は頭の邊に在つて立ち、大目犍連は足の邊に在つて立てり。喘喘然として、其の命將に終らんとす。乃ち慇懃んで而して笑

【四】刪闍耶 (Sāṃśreya) 刪闍耶 (Sāṃśreya) 刪闍耶 (Sāṃśreya) 刪闍耶 (Sāṃśreya) 刪闍耶 (Sāṃśreya)

ふ。二人心を同うして俱に笑意を問ふ。師之に答へて曰く、「世俗は眼なくして恩愛の爲に侵さる。我は金地國王の死して、其大夫人の、自ら火横に投じて、同一の處を求むるを見る。而も此の二人の行報は各各異なり、生るる處は殊絶せり」と。是の時、二人は師の意を筆受し、以て其の虚實を驗さんと欲す。後、金地の商人あり、遠く摩伽陀國に來る。二人は跡を以て之を驗するに、果して師の語の如し。乃ち無然として歎じて曰く、「我等其の人に非ざるか、是れ師の我に隠せりと爲すか」と。二人は相與に誓つて曰く、「若し先づ甘露を得ば、要必ず味を同うせん」と。是の時に佛は迦葉の兄弟千人を度し、次いで諸國に遊び、王舍城に到り、頓に竹園に止りたまふ。二梵志師は佛の出世を聞いて俱に王舍城に入り、消息を知らんと欲す。儼の時に、一比丘あり。阿説示と名く。衣を著け鉢を持し城に入つて乞食す。舍利弗は其の儀服の異容にして、諸根の靜默なるを見て、就いて問うて言はく、「汝は誰の弟子にして師は是れ何人そや」と。答へて言く、「釋種の太子は老・病・死の苦を厭ひ、出家して道を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得たり、是れ我が師なり」と。舍利弗言く、「汝が師の教授を我が爲に之を説け」と。即ち答の偈に曰く、

「我年既に幼稚にして、受戒の日初めて遇し、貴に説く至眞を演べ、廣く如來の義を説かんや。」  
 舍利弗言く、「略して其要を説け」と。爾の時に阿説示比丘は此の偈を説いて言く、

「諸法は因縁より生ず、是の法の因縁と、是の法の因縁盡くるとを説く、大師は是の如く説きたま

【五】 阿説示 (Asvini) 譯して、其師または爲勝ともいふ。

へり。』

舍利弗は此偈を聞き已つて、即ち初めて道を得、還つて日、韃一連に報す。日、韃一連は、其顔色の和悦せるを見て、之に謂つて言く、「汝甘露味を得たるや、我が爲に之を説け」と、舍利弗は即ち其爲に向に聞く所の偈を説く。目連言く、「更に爲に重ねて説け」と、即ち復た爲に説くに、亦初道を得たり。二師は二百五十の弟子と俱に佛の所に到る。佛は遙に二人の弟子と俱に來るを見たまひ、諸の比丘告たまはく、「汝等は此二人、諸の梵志の前に在る者を見るや、不や」と。諸の比丘言く、「已に見る」と。佛の言はく、「是二人は是れ我が弟子の中にて智慧第一、神足第一の弟子なり」と。大衆と俱に來り、以て漸やく佛に近づき、既に到つて稽首して、一面に在つて立ち、俱に佛に白して言さく、「世尊よ、我等は佛法の中に於て出家し、受戒せんと欲す」と。佛の言はく、「善く來り、比丘よ」と、即時に鬚髮自ら落ち、法服身に著き、衣鉢具足して、成就戒を受く、半月を過ぎて後、佛、長爪梵志の爲に法を説きたまふ時、舍利弗は阿羅漢道を得たり。半月の後、道を得る所以のものは、是人は當に佛を逐うて、轉法輪の師と作るべく、應に學地に在つて、現前に自ら諸法に入り、種種に具に知るべければなり。是故に半月の後に阿羅漢道を得たり。是の如き等の種種の功德甚だ多し。是故に舍利弗は是れ阿羅漢なりと雖も、佛は是の般若波羅蜜多の甚深の法を以て、舍利弗の爲に説きたまへり。

問うて曰く、若し爾らば何を以てか、初め少しく舍利弗の爲に説き、後多く須菩提の爲に説くや。若し智慧第一を以ての故ならば、應に爲に多く説くべし。復た何を以てか、須菩提の爲に説くや。答へて曰く、舍利弗は佛弟子の中にて、智慧第一にして、須菩提は弟子の中に於て、無誑三昧を得る最も第一なり。無誑三昧の相は常に衆生を觀じて心を惱まさしめず、多く憍愍を行す、諸の菩薩は弘大誓願、以て衆生を度す。憍愍の相同じ、是故に説かんと命ず。復次に、是の須菩提は好んで空三昧を行す。佛、忉利天に在して、夏安居し、愛護し已つて、還つて閻浮提に下りたまふが如きは、爾の時、須菩提は石窟の中に於て住し、自ら思惟すらく、「佛は忉利天より來り下りたまふ。我當に佛の所に到るべきや、佛の所に到らざらんや」と。又念じて言く、「佛は常に若し人智慧の眼を以て佛の法身を觀ば、即ち佛を見だてまつる中の最なるものなりと説きたまふし。是の時、佛は忉利天より下りたまふを以ての故に、閻浮提の中の四部の衆集り、諸天は人を見、人は亦天を見る。坐中に佛及び轉輪聖王と諸天と大眾とあり、衆會は莊嚴にして、先に未だ會つて有らず。須菩提は心に念すらく、「今此大眾は復た殊特なりと雖も、勢久しく停らず、磨滅の法にして皆無常に歸す」と、此の無常觀の初門に因つて、悉く諸法の空にして、實あること無きことを知る。是の觀を作す時、即ち道證を得たり。爾の

- 【六】 第二回、若し智慧第一の爲めならば、須菩提の爲に多く説くよりも、舍利弗の爲に説くべきにあらずや。
- 【七】 須菩提は諸の佛弟子中第一なり。
- 【八】 無誑三昧とは、衆生に安住して、他と誹はざる禪定なり。
- 【九】 解會は見佛中の最たり。

時に、一切の衆人は皆先づ佛を見たてまつらんことを求めて禮敬し、供養せんことを欲す。華色比丘尼あり、女名の惡しきを除かんと欲して、便ち化して轉輪聖王及び七寶の千子と爲る。衆人之を見て皆坐を避けて起ち去る。化王は佛の所に到り已つて、還つて本身に復して比丘尼と爲り、最初に佛を禮す。是の時、佛、比丘尼に告げたまはく、「汝初めて禮するに非ず、須菩提は最初に我を禮せり、何となれば須菩提は諸法の空を觀せり、是れ佛の法身を見たてまつるが爲にして、眞の供養を得、供養の中の最なるものなり。生身を敬するとを致すを以て供養と爲すに非ざるなり。是を以ての故に「須菩提は常に空三昧を行す」と言ふ。般若波羅蜜(多)の空の相と相應す。是の故に佛は命じて般若波羅蜜(多)を説かしめたまふ。復次に(二)衆生は阿羅漢の諸漏已に盡きたるを信じ敬ふを以て、之に命じて爲に説かしめたまふ。衆、淨信を得るが故なり。諸の菩薩は漏未だ盡きず、若し以て爲に説くも、諸人信せず、是を以ての故に舍利弗と須菩提と共に、般若波羅蜜(多)を説きたまふ。

問うて曰く、(三)何を以てか舍利弗と名くる。是れ父母の字を作る所とせんや、是れ功德を行ふに依つて、名を立つるとせんや。答へて曰く、是れ父母の作る所の名字なり。閻浮提の中に於て、第一安樂なる摩伽陀國あり。是の中に大城あり、王舎と名け、王を頻婆娑羅と名く。婆羅門の論議師あり、

- 【一】 華色比丘尼は、或は蓮華色比丘尼、又は蓮華女ともいふ。
- 【二】 須菩提と舍利弗に般若を説かしむる理由。
- 【三】 第三問、舍利弗と名くる理由如何。

三摩陀羅、名く。王は其の人の善く論を能くするを以ての故に、封じて一邑を賜ふ。城を去ること遠  
 からず。是の摩陀羅、遂に居家にあり、婦、一女を生めり。眼、舍利鳥の眼に似たり。即ち此の女を  
 名けて舍利と爲す。次に一男を生じ、膝の骨長大なり、二拘絺羅と名く。是の婆羅門は既に居家に有  
 つて男女を畜養す。學ぶ所の經書は、皆已に廢忘して、復た業新たならず。是の時、南天竺に一の婆  
 羅門の大論議師あり、提舍と名く、十八種の大眼に於て、皆悉く通利せり。是の人王舍城に入り、  
 頭上に火を戴き、鼓篋を以て敷に據す、人其故を問へば、便に言く、「我が學ぶ所の經書甚だ多く、  
 腹の破裂せんことを恐り、是の故に之に據す」と。又問ふ、「何を以てか頭  
 上に火を戴くや」と。答へて言く、「大眼を以ての故に」と。衆人言く、「日  
 出で、照明なり、何を以てか闇しと言ふや」と。答へて曰く、「闇に二種あり、一には日く日光照さず、二には愚癡の間蔽ふ。今、日已明ありと雖も而  
 も愚癡にして猶闇し」と。衆人言く、「汝は但末だ婆羅門摩陀羅を見ず、汝若し見ば腹當に縮まるべく、  
 明當に闇なるべし」と。是の婆羅門は遂に鼓の邊に至つて、論議の鼓を打てり。國王之を聞いて問ふ、  
 「是れ何人ぞ」と。衆臣答へて言く、「南天竺に一の婆羅門あり、提舍と名くる大論議師なり。論處を求めん  
 と欲するが故に、論鼓を打つ」と。王大に歡喜し、即ち衆人を集めて之に告げ曰く、「能く難する者  
 あらば之と論議せよ」と。摩陀羅之を聞いて自ら疑ふらく、「我は廢忘するを以て、又業新たならず。

- 【一三】 摩陀羅 (Madhara)
- 【一四】 摩訶拘絺羅 (Mahakusthira)
- 【一五】 (Tila) は譯して大膝といふ。
- 【一六】 提舍 (Tishya)

知らず、我今能く與に論せんや不やしと、僂僂として來る。道中に於て、二の犢牛の方に相觸觸するを得るかを知らんしと。此の牛如かず。便ち大に愁憂し、自ら念じて言く、「此相の如くんば、我將に如かず」と。衆に入らんと欲する時、見るに一の母人あつて、一瓶水を挾んで正しく其の前に在り、地に躡いて瓶を破る。復た是念を作さく、「是れ亦不吉なり」と、甚だ大に樂します。既に衆中に入り彼の論師を見るに、顏貌意色勝相具足せり。自ら如かざることを知れども、事已むを獲ず、與共に論議す。論議既に交はり便ち負處に墮せり。王大に歡喜すらく、「大智明の人、遠く我が國に入る、復た之が爲に一聚落を封せんと欲す」と。諸臣議して言く、「一聰明の人來れば便ち一邑を封じ、功臣を賞せず、但語論のみを寵す。恐らくは國を安んじ、家を全うするの道に非ず。今摩陀羅は論議如かず、應に其の封を奪つて、以て勝者に與ふべし。若し更に勝つ人あらば、復た以て之に與へたまへ」と。王、其の言を用る、即ち奪つて後の人に與ふ。是の時、摩陀羅、提舍に語つて言く、「汝は是れ聰明の人なり、我女を以て汝が妻とせん。男兒を相累ひ、今遠く他國に出で、以て本志を求めんと欲す」と。提舍其の女を納れて婦と爲す。其の婦懷妊し、夢に、一人の身に甲冑を被、手に金剛を執つて、諸山を摧破し、大山の邊に在つて立つを見る。覺め已つて其夫に白して言く、「我夢ることは是の如し」と。提舍言く、「汝當に男を生むべし、一切諸の論師を摧伏し、唯一人に勝たす。當に與に弟

子を作るべし」と、舍利は懐妊して、其子を以ての故に、母も亦聰明にして、大に能く論議す。其の弟の拘絺羅は、姉と談論する毎に屈して如かず、姉の懐む所の子は必ず大智慧ならんことを知る。未だ生せずして是の如し、何に況んや出生せんをやと。即ち家を捨てて南天竺に至り、爪を剪るに暇あらず、十八種の經書を讀みて皆通利ならしむ。是の故に時人名けて長爪梵志と爲す。姉の子既に生れて七日の後、裏むに白氈を以てし、以て其の父に示す。其父思惟すらく、「我を提舎と名く、我が名字を逐ひ字けて（二）憂波提舎と爲ん」と。是れ父母の爲に字を作るなり。衆人は、其の舍利の生む所なるを以て、皆共に之に名けて（三）舍利弗と爲す。復次に、舍利弗の世世の本願は、釋迦牟尼佛の所に於て、智慧第一の弟子と作り、舍利弗と字く、是を本願の因縁の名字と爲す。是を以ての故に舍利弗と名く。

問うて曰く、「（一）若し爾らば何を以てか、憂波提舎と言はずして、但舍利弗と言ふや。答へて曰く、時人其の母を貴重す、衆の女人の中に於て、聰明なること第一なり、是の因縁を以ての故に、舍利弗と稱す。

**經** 菩薩摩訶薩、一切種智を以て、一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし。

- 【二六】 憂波提舎（ウパデーシャ）
- 【二七】 舍利、ハ三母の名、弗（フ）
- 【二八】 第四問、憂波提舎と言はずして舍利弗といふ理由如何。

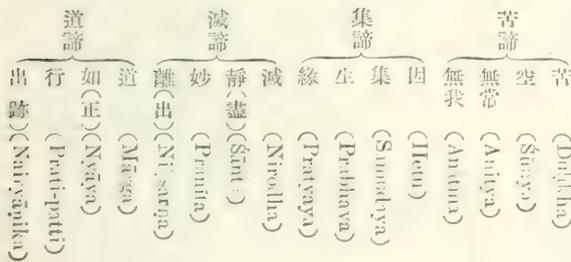
菩薩摩訶薩の義は、先の讚菩薩品の中に

説くが如し。

問うて曰く、云何が一切種と名け、云何が一切法と名くるや、答へて曰く、智慧門を名けて種と爲す。有人は、一智慧門を以て觀じ、有人は、二二十百千萬乃至恒河沙等の阿僧祇の智慧門を以て諸法を觀す。今一切智慧門を以て、一切種に入り、一切法を觀す、是を一切種と名く。凡夫人の如きは、三種の觀にして、欲を離れ、色を離れんと欲するが故に、欲色界の麤惡誑惑濁重を觀す。佛弟子には、八種の觀あり。無常・苦・空・無我・病の如く、癩の如く、箭の體に入るが如く惱患す。是の八種の聖觀は、四聖諦の中に入つて、十六行の四を爲る。十六と云は苦を觀じて四種とす。「謂く」、無常と苦と空と

【五】第五問、一切種智とは何ぞや。一切法とは何ぞや。

【六】十六行相とは、四諦の境を觀するに、十六種の行相あるをいふ。之を圖示すれば左の如し。



此の十六行相は、又十六行相觀、十六聖行、十六諦ともいふ。これ大小兩乘に通ずる名目にして、聲聞位中の四善根位に於て修習する所なり。今一一に闡て之を釋せば、苦諦に於ける四行相は、一切の諸法は逼迫の性なるが故に苦なり、我のための所須に非ざれば空なり。因緣所生にして念念に生滅あるが故に無常なり、常一主宰にあらざるが故に無我なりと觀す。次に集諦に於ける四行相は、一切の惡業は苦果を生ずるの因なり、苦果を招集して現せしむるが故に集なり、苦果を相續して絶えざらしむるが故に生なり、苦果を集成して成辦せしむるが故に緣なりと觀す。次に滅諦に於ける四行相は、

無我となり。苦の因を觀すること四種、「即ち」

集・因・緣・生、苦の盡きるを觀すること四種、「即ち」

盡・滅・妙・出、道を觀すること四種、「即ち」道・

正・行・跡なり。出入の息の中に復た十六行あり。

一には入息を觀じ、二には出息を觀じ、三

には息の長きと、息の短きとを觀じ、四には息

の身に逼ねきを觀じ、五には諸の身行を除き、六には喜を受け、七には樂を受け、八には諸の心行を

受け、九には喜を作し、十には心攝を作し、十一には心解脱を作し、十二には無常を觀じ、十三には

散壞を觀じ、十四には離欲を觀じ、十五には滅を觀じ、十六には棄捨を觀す。復た六種の念あり。念

佛とは、佛は是れ多阿伽度阿羅訶三藐三佛隨、是の如き等の十號なり。五の念は、後に説くが如

し。世智出世智阿羅漢辟支佛菩薩佛智、是の如き等の智慧もて、諸法を知るを言けて、一切種と爲

す。三一切法とは、識の緣する所の法は是れ一切法なり。所謂眼識は色を緣じ、耳識は聲を緣じ、鼻

識は香を緣じ、舌識は味を緣じ、身識は觸を緣じ、意識は法を緣じ、法眼は色を緣じ、眼識を緣じ、

乃至意を緣じ、法を緣じ、意識を緣す、是を一切法と名け、是を識の緣する所の法と爲す。

復次に、三智の緣する所の法は是れ一切法なり。

諸論は五蘊體の盡きたる實  
現されて滅なり、眞體の憂亂  
なきが故に觀たり、三界を離  
出して一切の諸患なきが故に  
妙なり、諸の災厄を離する  
が故に觀たりと觀す。  
次に諸論に於ける四行相は、  
諸論は學者の五體圓行とて涅  
槃に入るの道なるが故に道な  
り、正理に契ふが故に如なり、  
涅槃の果に行進せしむるが故  
に行なり、生死を越出するも  
のなるが故に出なりと觀す。  
【三】 識所緣の法。  
【二】 智の緣する所の法。

を知り、道智は道を知り、世智は苦集盡道及び非數縁の滅を知る。是を智の縁する所の法と爲す。

復次に、二法に一切法を攝す。色法と無色法、可見法と不可見法、有對法と無對法、有漏と無漏、有爲と無爲、心相應と心不相應、業相應と業不相應、近法と遠法等、是の如き種種の二法に一切法を攝す。

復次に、三種の法に一切法を攝す。善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦斷と思惟斷と、不斷となり。復三種の法あり。

五衆、十二入、十八界なり。是の如き等の種種の三法を持つて一切の法を攝す。復た四種の法あり、過去・未來・現在の法と過去・未來・現在に非ざるの法と、欲界繫法と色界繫法と無色界繫

【三】非數縁滅とは、非智緣盡ともいふ。無爲法の一なり。

新譯には非擇滅無爲といふ。數とは、新譯の所謂心所法なり。善惡の心所法、其數評多なれば數法といふ。今は智慧の數法なり。智慧の數法に於りて煩惱を斷じて得る所の盡滅を數縁滅といふ。即ち涅槃なり。智慧の數法の縁によるのみにあらず、只能生の縁を見るによりて諸法の盡滅に歸するを非數縁滅といふ。

【四】色法と無色法。心法に對して物質を色法といひ、物質にあらざるもの即ち精神現象を無色法といふ。

【五】可見法とは眼に見えるもの、義、即ち有形のものといひ、不可見法とは眼に見えざるもの、即ち無形のものといふ。

【六】有對法とは、觸覺を有するもの、義にして、無對法とは其の反對なるものといふ。

此の有對に障礙有對と、境界有對と、所緣有對とあり。障礙有對とは、手手を觸へ、石を觸へ、手、石を觸ふるが如く、二物同時に同じ空間を占むる能はざるをいふ。極所成の五根、五塵の十の色法は即ち障礙有對なり。境界有對とは、新取の對象のために拘束せられて、他に於て起ること能はざるをいふ。六根と六識と心所とは即ち之れなり。所緣有對とは、六識と心所とが各の所緣の法に由りて拘束せらるるをいふ。

【七】有漏とは、漏即ち煩惱を有するの義、煩惱は有情の六根門より生ず、漏盡し、有情を生樂に留住法轉して、

法と不整法、善の因より「生ずる」法と不善の因より「生ずる」法と無記の因より「生ずる」法と非善非不善の無記の因より「生ずる」法と縁不縁法と縁縁不縁法と非縁縁非縁不縁法。是の如き等の四種の法に一切の法を攝す。五種の法あり。色・心・心相應・心不相應・無爲法なり。是の如き等の種種の五法に一切法を攝す。六種の法あり、見苦斷法、見集盡道斷法、思惟斷法、不斷法なり。是の如き等の種種の六法、乃至無量の法に一切の法を攝す。是を一切法と爲す。

問うて曰く、諸法は甚深微妙不可思議なり、一切衆生すら尙知ることを得ること能はず、何に況んや一人にして盡く一切法を知らんと欲するをや。譬へば人あり大地を量り、及び大海の

【一】此の反對なりと知るべし。

【二】有爲法は四縁の組合によつて作爲せられたるもの、業にして、生滅變化の性を有するものなり。無爲は其の反對なること推して知るべし。

【三】心相應法とは、同時に起る心王と心所とに五種の平等の義あり、故に心相應法と名く。一に依平等、心王聖根に依れば心所も聖根に依が如きをいふ。二に所緣平等、心王青地を緣すれば、心所も亦青地を緣するが如きをいふ。三に行相平等、心王青色を了解すれば、心所も亦青色を了解するをいふ。四に時平等、心王此時に起れば、心所も亦此時に起るをいふ。五に平等、心王其體一箇なれば、心所の體亦各一箇なるをいふ。之に反して心王と心所との相

類なきを心不相應と名く。

【四】業相應法とは、善惡の業因に相應して生ずる結果の義にして、業不相應法とは、業因に相應せず、無記の果を生ずるもの、義なり。

【五】近法とは主觀的のもの、遠法とは客觀的のものと思せば大體なし。

【六】見諦斷とは見所斷ともいふ。見道に於て斷ずるもの、小乘教に所謂八十八使の見惑これなり。若し修行の位より云へば、聲聞は預流前、菩薩は初地の入心にて見惑を斷ずるなり。

【七】思惟斷とは修所斷ともいふ。修道に於て斷ずるもの、義、八十一品の修惑即ち思惑、及諸色等の有漏法これなり。若し修行の位よりいへば、前の見道より更に進んで諦理を觀じ、一切の思惑を斷ずる位

水滯を數へんと欲し、須彌山を稱らんと欲し、虚空の邊際を知らんと欲するが如し。是の如き等は皆知るべからず、云何が一切種を以て、一切法を知らんと欲するや。答へて曰く、愚癡闇蔽にして甚だ大に苦なり、智慧の光明を最も樂と爲す。一切衆生は皆苦を用ゐず、但樂を求めんと欲す。是故に菩薩は、一切第一の大智慧を求め、一切種を觀じ、一切法を知らんと欲す。是の菩薩は大心を發して、普ねく一切衆生の爲に大智慧を求む。是故に一切を觀じ、種一切法を知らんと欲す。譬の一人二人の爲には、一種二種の藥を用ゐれば則ち足れども、若し一切衆生の病を治せんと欲せば、當に一切種の藥を須むべきが如し。菩薩も亦是の如く、一切衆生を度せんと欲するが故に、一切もて種一切法を知らんと欲す。諸法の如きは甚深微妙無量なれば、菩薩の智慧も亦甚深微妙無量なり。先の答に一切智人を破する中に已に廣く説けり。兩大なれば、蓋も亦大なるが如し。

復た次に、理を以て一切法を求めずんば則ち得べからず。若し理を以て之を求むれば、則ち得ざる

にて、聲聞乘の預流・一來・不還の三果、菩薩乘の初地以上乃至第十地なり。

【二】不斷とは、非所斷ともいふ。一切の無漏法なり。

【三】欲界に繫屬するものを欲界繫法といひ、色界に繫屬するものを色界繫法、無色界に屬するを無色界繫法、三界に繫屬せざるを不繫といふ。

【四】見苦斷法とは、四諦の中の菩薩の理を見、斷するものを得んや。

義なり。

【七】見集盡道斷法とは、四諦の中の集諦と滅諦と道諦の理を見て斷するもの、義なり。即ち以上の二は、前に見斷に當り、思惟斷法と不斷法とは前の解釋に同じ。

【八】第六問、諸法は甚深微妙にして思議し難し、一切衆生すら知ること能はず、況んや一人にして一切法を知ることを得んや。

こと無し、譬へば火を鑽るに木を以てすれば則ち火を得べく、薪を耕いて火を求むるも火は得べからざるが如く、大地は邊際あれども、一切智人に非ずんば、「又」大神力なくんば、則ち知ると能はざるが如し。若し神通力大なれば則ち三千大千世界の地の邊際を知る。今此の大地は金剛の上に在り、三千大千世界の四邊は則ち虚空なり。是を地の邊際を知ると名く。須彌山を稱らんと欲するも亦是の如し。虚空を量らんと欲するも、虚空を量ると能はざるに非ず、無法の故に量るべからざるなり。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は、云何が一切種智を以て、一切法を知らん」と欲せば、當に般若波羅蜜(多)を修行すべきや」と。

問うて曰く 佛は般若波羅蜜(多)を説かんと欲するが故に、種種に神變を現じ、現じ已つて應に即ち説くべし。何を以ての故に舍利弗をして問はしめて、而して後に説きたまふや。答へて曰く、問うて而して後に

説くことは、佛の法として應に耐るべし。復次に、舍利弗は般若波羅蜜(多)の甚深微妙無相の法にして、解し難く、知り難きとを知り、自ら智力を以て種種に思惟すらく、「若し諸法の無常を觀するは、是れ般若波羅蜜多なりや、是ならざるや」と。自ら了すると能はず、是を以ての故に問へり。復次に、舍利弗は一切智に非ず、佛の智慧の中に於ては、譬へば小兒の如し。阿婆檀那經の中に説くが如き

【九】第七問、世尊は般若波羅蜜多を説くに當り、舍利弗をして問はしめて後、説き給ひし理由如何。  
【一〇】佛の影、鶴を覆ふに怖れず、舍利弗の影、之を覆ふに驚怖せし因縁。

は、佛、祇桓に在つて住し、晡時に經行したまひしに、舍利弗も佛に従つて經行せり。是時に鷹あり、  
 鵠を逐ふ。鵠は飛び來つて佛の邊に住す、佛經行したまふて之を過ぎ、影鵠の上を覆ふに、鵠の身は  
 安隱にして、怖畏即ち除き、復た聲を作さず、後舍利弗の影、鵠に到れば便ち聲を作し戰き怖るると  
 初の如し。舍利弗、佛に白して言さく、「佛及び我身は三毒なし、何の因縁を以て、佛の影鵠を覆ふへ  
 ば、鵠便ち聲なく、復た恐怖せず、我が影上を覆ふへば、鵠便ち聲を作し、戰慄すること初の如くなる  
 や」と。佛の言はく、「汝は三毒の習氣未だ盡きず、是を以ての故に汝が影覆ふ時は恐怖除かず。汝は  
 此の鵠の宿世の因縁を観るや、幾世、鵠と作るや」と。舍利弗は即時に宿命智三昧に入りて、此の鵠  
 は、鵠の中より來り、是の如く、一二三世、八萬大劫、常に鵠の身と作ることを觀見し、是を過ぎて  
 已往は復た見ること能はず。舍利弗は三昧より起つて佛に白して言さく、「是鵠は八萬大劫の中に、  
 常に鵠の身と作る。是を過ぎて已前は、復た知ると能はず」と。佛の言はく、「汝若し盡く過去世を  
 知ること能はずんば、試に未來世を觀よ。此の鵠は何の時か當に脱すべき」と。舍利弗は即ち願智三  
 昧に入つて、此の鵠を觀見するに、一二三世、乃至八萬大劫、未だ鵠の身を脱せず、是を過ぎて已往  
 は、亦知ること能はず。三昧より起つて佛に白して言さく、「我、此の鵠を見るに、一世二世より、乃  
 至八萬大劫、未だ鵠の身を脱せず、此を過ぎて已往は復た知ると能はず。我は過去未來の齊限を知ら  
 ず、不審し、此の鵠は何の時か當に脱すべき」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「此の鵠も諸の聲聞、

辟支佛の知る所の齊限を除いて、復二恒河沙等の大劫の中に於いて、常に鷓の身と作り、罪訖り出づるを得て、五道の中に輪轉し、後、人と爲るを得、五百世の中を経て乃ち利根を得。是の時に佛あり、無量阿僧祇の衆生を度し、然る後に無餘涅槃に入りたまふ。遺法世に在り。是の人は五戒の優婆塞と作り、比丘に従つて佛を講ずるの功德を聞き、是に於て初めて發心し、願つて佛と作らんと欲し、然る後、三阿僧祇劫に於て、六波羅蜜を行じ、十地を具足して佛と作ることを得、無量の衆生を度し已つて、涅槃に入らんと。是時舍利弗は、佛に向つて懺悔し、佛に白して言さく、「我は一鳥に於て、尙其の本末を知ること能はず、何に泥んや諸法をや。我若し佛の智慧の是の如きを知らば、佛の智慧の爲の故に、寧ろ阿鼻地獄に入つて、無量劫の苦を受くるとも、以て難しと爲さず」と。是の如き等を、諸法の中に於いて了せざるが故に、

【四二】第八問、般若波羅蜜多とは何ぞや。

初品の中の檀波羅蜜の義を釋す、

佛、舍利弗に告げたまはく、菩薩摩訶薩は不住法を以て、般若波羅蜜(摩訶)の中に在りし、捨つる所なきの法を以て、應に檀波羅蜜を具足すべし、施者受者及び財物は得べからざるが故なり」と。

問うて曰く、般若波羅蜜「多」は是れ何等の法なりや。答へて曰く、有人の言く、「無漏の慧根

は是れ般若波羅蜜(多)の相なり。何となれば一切の慧の中、第一の慧は是を般若波羅蜜(多)と名く、無漏の慧根は是れ第一なり、是を以ての故に、無漏の慧根を般若波羅蜜(多)と名く」と。

問うて曰く、若し菩薩は未だ結を斷せずんば、云何が無漏の慧を行することを得ん。答へて曰く、

菩薩は未だ結を斷せずと雖も、行相は無漏の般若波羅蜜(多)に似たり、是の故に「無漏の般若波羅蜜

「多」を行ず」と名くることを得。譬へば聲聞の人の暖法、頂法、忍法、世

間第一法を行ずるに、先づ相似の無漏法を行すれば、後に易く苦法智忍を

生ずることを得るが如し。有人の言く、「菩薩に二種あり。結使を斷じて清

清淨なるあり、未だ結使を斷せずして清淨ならざる有り。結を斷じて清

淨なる菩薩は、能く無漏の般若波羅蜜(多)を行す。

問うて曰く、若し菩薩は結を斷じて清淨ならば、復た何を以てか、般若

波羅蜜(多)を行するや。答へて曰く、結使を斷ずと雖も、十地未だ満たず、未だ佛土を莊嚴せず、

未だ衆生を教化せず、是の故に般若波羅蜜(多)を行す。復次に、結を斷するに二種あり。一には三

毒を斷じて、心人天の中の五欲に著せず、二には人天の中の五欲に著せずと雖も、菩薩の功德果報の

五欲に於ては、未だ捨離すること能はず、是の如きの菩薩は、應に般若波羅蜜(多)を行すべし。

へは長老阿泥盧豆の如きは、林中に在つて坐禪する時、淨愛天女等、淨妙の身を以て、來つて阿泥盧

【四二】 第九問、菩薩に未だ煩惱を斷ぜず、如何ぞ無漏慧を行することを得んや。

【四三】 第一〇問、菩薩は煩惱を斷ぜば、復た何を般若波羅蜜多を行するの要あらんや。

【四四】 二種の斷結。

【四五】 天女、阿泥盧豆を試む。

豆を試む。阿泥盧豆の言く、「諸姉よ、青色を作し來れ、雜色を用ゐず」と。不淨を觀んと欲して、觀ることを得ること能はず、黃赤白色も亦復是の如し。時に阿泥盧豆は目を閉ぢて視ず、語つて言く、「諸姉よ、遠く去れ」と。是の時、天女は即ち激して現せず、天の輻輳の形すら猶尙是の如し、何に泥んや、菩薩の無量の功德果報の五欲をや。又、甄陀羅王の如きは、八萬四千の甄陀羅と與に來つて佛の所に到り、琴を彈じ、頭を歌ひ、以て佛を供養したてまつれり。佛の時に、須彌山王及び諸山、樹木・人民・禽獸一切皆舞ひ、佛邊の大衆、乃至大迦葉も、皆塵土に於て自ら安んずること能はざりき。是時天鼓菩薩は、長老大迦葉に問ふ、「昔年舊宿は十二頭陀法の第一を行せり、何を以てか座に在つて、自ら安んずること能はざりしや」と。大迦葉の言く、「三界の五欲は我を動ずること能はず、是れ菩薩の神通の功德、果報の力の故に我をして是の如くならしむ。我、心あつて自ら安んずると能はざりしには非るなり。譬へば須彌山の四邊より風起れども、動せしむること能はず、大劫盡る時に至つて、毘藍風起れば、彈草を吹くが如し」と。是の事を以ての故に、一種の結の中、一種を未だ斷せざるも、是の如きの菩薩等は應に般若波羅蜜多を行すべきことを知る、是れ阿毗曇の中の説なり。復た有人の言く、般若波羅蜜多は是れ有漏の慧なり、何となれば菩薩は道樹の下に至つて、乃ち結を斷ず。先に大智慧あり無量の功德

【四六】 大迦葉、彈琴歌頌の聲を聞いて自ら安んずる能はざりし因縁。  
 【四七】 毘藍(Varanahasi)、暴風の名なり。  
 【四八】 般若を有漏と言ひ、又は無漏と言ひ、種種の慧をなす。

ありと雖も、而も諸の煩惱は未だ斷せざればなり」と。是の故に言く、菩薩の般若波羅蜜多は是れ有漏の智慧なり。」

復有人の言く、「初發意より乃ち道樹の下に至る其中間に於て、所有する智慧は是を般若波羅蜜と名く。成佛の時は是の般若波羅蜜を轉じて薩婆若と名く」と。復た有人の言く、「菩薩の有漏無漏

の智慧は總じて般若波羅蜜多」と名く。何となれば菩薩は涅槃を觀じ、佛道を行すればなり」と。是事を以ての故に菩薩の智慧は、應には無漏なるべし。未だ結使を斷せず、

事未だ成辦せざるを以ての故に應に有漏と名く」と。復た有人の言く、「菩薩の般若波羅蜜は、無漏・無爲・不可見・無對なり」と。復た有人の言く、「是

般若波羅蜜多は不可得の相なり。若くは有、若くは無、若くは常、若くは無常、若くは空、若くは實、是れ般若波羅蜜多にして、陰界入の攝する所に非ず、有爲に非ず、

無爲に非ず、法に非ず、非法に非ず、取る無く、捨つる無く、生ぜず、滅せず、有無の四句を出でて適に著する所なし。譬へば火燄の四邊に、手を觸る可らざるが如し、そは手を燒くを以てなり。般若

波羅蜜多の相も亦是の如く、觸る可らず、「そは」邪見の火、燒くを以ての故なり。

問うて曰く、吾上に種種の人、般若波羅蜜多を説く、何をか實と爲すや。答へて曰く、有人の言く、「各各理あり、皆是れ實なり」と。經に説くが如し。五百の比丘各各二邊及び中道の義を説くに、

【四九】 薩婆若(三三三) 譯して一切智といふ。

【五〇】 第一一問、上に擧げたる諸説は、何れを實となすべきか。

佛の言はく、「皆道理あり」と。有人の言く、「末後に答ふる者を實と爲す。何となれば破す可らず、壞すべからざるを以てなり」と。若し法あり、高聲許り有ならば、皆過失あり破す可し、若し無と言ふも破す可し。此般若の中には有も亦なく、無も亦なく、非有非無も亦なく、是の如きの言説も亦なし、是を寂滅無量無戲論の法と名く。是故に破すべからず、壞す可らず、是を眞實の般若波羅蜜(多)と名く、最勝にして過る者なし。轉輪聖王の諸の敵を降伏して、而も自ら高からざるが如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、能く一切の諸言戲論を破し、亦所破あらず、眞實に、此より已後の品品の中に、種種の義門を以て般若波羅蜜(多)を説く、皆是れ實相なり。是の如く不住の法を以て、般若波羅蜜(多)の中に住すれば、能く六波羅蜜を具足す。

問うて曰く、「五、云何が不住の法を以て、般若波羅蜜(多)の中に住すれば、能く六波羅蜜を具足すと名くるや。答へて曰く、是の如きの菩薩は、一切の法は常に非ず無常に非ず、苦に非ず樂に非ず、空に非ず實に非ず、我に非ず無我に非ず、生滅に非ず不生滅に非ずと觀す。是の如く甚深なる般若波羅蜜の中に住し、般若波羅蜜の相に於ても亦取らざる、是を不住法にして住すと名く。若し般若波羅蜜の相を取らば、是を住法にして住すと爲す。問うて曰く、若し般若波羅蜜の相を取らず、心に著する所なくんば、佛の言ふ所の如くんば、一

【一】 第一二問、如何にしてか不住の法を以て般若波羅蜜の中に住すれば、能く六波羅蜜を具足すと名くるや。  
 【三】 第一三問、佛は一切の諸法は空を以て爲すと教へ給へり、然るを無取無著にして如何ぞ六波羅蜜を具足することを得ん。

切の諸法は欲を其本と爲す。若し取らざれば、云何が六波羅蜜を具足するを得ん。答へて曰く、菩薩は衆生を憐愍するが故に先づ誓を立つ、「我、必ず當に一切衆生を度脱すべし」と。精進波羅蜜「多」の力を以て、故に、諸法は生ぜず滅せず、涅槃の相の如しと知ると雖も、復た諸の功德を行じて六波羅蜜を具足す。何となれば法に住せずして、般若波羅蜜「多」の中に住するを以てなり。是を「法に住せずして、般若波羅蜜」に住す」と名す。

初品の中の 檀波羅蜜「多」を讀するを釋す。

問うて曰く、檀に何等の利益あるが故に、菩薩は般若波羅蜜「多」の中に住して、檀波羅蜜「多」を具足し滿つるや。答へて曰く、檀に種種の利益あり。檀を寶藏と爲す、常に人に隨逐す。檀を善を破ると爲す、能く人に

【五】 檀とは梵語檀那 (Dāna) の略、譯して布施といふ。  
 【六】 第一四問、菩薩は布施に何の功德あれば、般若波羅蜜多の中に住して、布施波羅蜜多を具足するか。

樂を與ふ。檀を善御と爲す、天道を開示す。檀を善符と爲す、諸の善人を攝す。檀を安隱と爲す、命終の時に臨んで心に怖畏せず。檀を慈相と爲す、能く一切を濟ふ。檀を樂を集むと爲す、能く苦の賊を破る。檀を大將と爲す、能く懼の敵を伏す。檀を妙果と爲す、天人の愛する所なり。檀を淨道と爲す、賢聖の遊ぶ所なり。檀を積善と爲す、福德の門なり。檀を立事と爲す、衆の縁を聚む。檀を善行と爲す、果を受くるの種なり。檀を福業と爲す、善人の相なり。檀は貧窮を破し、三惡道を斷す。檀

は能く全く福樂の果を獲。檀は涅槃の初縁と爲り、善人の衆中に入るの要法、稱譽讃歎の淵府、衆に入つて難なきの功徳心、悔恨せざるの窟宅、善法道行の根本、種種の歡樂の林藪、富貴安隱の福田、得道涅槃の津梁、聖人大士智者の行する所、餘人益徳寡識の效ふ所なり。

復次に、蠶譬へば失火の家の如し、慧慧の人は明かに形勢を識り、火未だ至らざるに及んで急に財物を出し、舎は焼け盡すと雖も、財物は悉く在つて更に室宅を修す。好く施す人も亦復是の如く、身の危く脆く、財物の無常なることを知つて福を修す。時に及んで火中より物を出せば、後世に樂を愛くるが如く、亦彼の人更に室宅を修し、福慶にして自ら慰むるが如し。愚にして惑える人は、但屋を惜むことを知つて、忽忽として救はんとを惜み、狂慧にして智を失ひ、

火勢を量らざれば、猛風絶焰にして、土石も爲に塵かれ、翁髻の間に萬葉

【七】 能施の人は失火に財を出さず知し。

として灰き滅し、屍既に救はず、財物も亦盡き、眞寒凍厥し、憂ひ苦んで世を畢ふ。惺惺の人も亦復是の如く、身命の無常にして、須臾も保ち直きことを知らず、更に聚斂して、守護し愛惜し、死の至るに期なく、忽焉として逝没し、形は土木と同じく流れ、財は委物、俱に棄つるも、亦、愚人の憂ひ苦んで計を失するが如し。復次に、大慧の人、心あるの士は、乃能く覺悟して、身に幻の如く、財は保つ可らず、萬物は無常にして、唯福のみ恃む可く、人を將て苦津より出し、大道に通ずることを知る。復次に、大人大心は能く大に布施し、能く自ら己を利す。小人小心は他を益すること能はず、

亦自ら厚くせず。復次に、譬へば勇士の敵を見て、必ず吞滅せんとを期するが如く、智人の慧心は深く理を悟るとを得て、慳の賊は強なりと雖も、亦能く之を挫き、必ず意の如くならしめ、良き福田に遇ひ、好き時節に値へば、事を覺り、心に應じて能く大に布施す。復次に、好く施す人は、人の爲に敬せらるると、月の初めて出るとき、愛せざる者なきが如し。好名、善譽は周ねく聞え、天下の人に歸仰せられ、一切皆信す。好く施す人は、貴人に念せられ、賤人に敬せられ、命終らんとする時、其の心は怖れず。是の如きの果報は今世に得る所なり。譬へば樹の華の大果無量なるは、後世の福なるが如し。生死に輪轉し、五道を往來するに、親として恃む可き無く、唯布施のみ有り。若し天上、人中に生じ、清淨の果を得るは皆布施に由る。象馬、畜生の好き御養を得るも亦是れ布施の所得なり。布施の徳は富貴歡樂なり。持戒の人は、天上に生ずるとを得、禪智は心淨ふして樂著する所なく、涅槃の道を得、布施の福は是れ涅槃の道の資糧なり。施を念ずる故に歡喜す。歡喜するが故に一心に生滅無常を觀ず。生滅無常を觀ずるが故に道を得。人の蔭を求むるが故に樹を種ふ、或は果を求むるが故に樹を種うるが如く、布施の報を求むるも亦復定の如し。今世後世の樂は、蔭を求むるが如く、聲聞辟支佛の道は、華の如く、佛と成るは果の如し、是を檀の種種の功德と爲す。

初品の中の檀相の義を釋す。

問うて曰く、「美何が檀〔那〕と名くるや。答へて曰く、檀〔那〕を布施と名く、心相應の善思なり、是を名けて檀〔那〕と爲す。有人の言く、「善思より起る身口の業を亦名けて檀〔那〕と爲す」と。有人の言く、「信あり、福田あり、財物あり、三事相合する時、心に捨法を生じ、能く悭貪を破す、是を名けて檀と爲す。譬へば慈法の如し、衆生を觀じ、樂んで心に慈を生ず。布施の心數法も亦復是の如く、三事相合して、心に捨法を生じ、能く悭貪を破す」と。檀〔那〕に三種あり。或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫なり。心相應法は心行に隨つて心と共に生ず、色法の能く縁と作るに非ず、業に非ず。業相應は業行に隨つて業と共に生ず、先世の業報の生に非ず。二種の修の應に修すべき行修、得修、二種の證なる身證、慧證、若くは思惟斷、若くは不斷の二見斷、有覺、有觀法は凡夫聖人共に行ず、是の如き等は阿羅漢の中に廣く分別して説けり。

復次に、施に二種あり、淨あり不淨あり。不淨の施とは、愚癡の施にして分別する所なし。或は有爲の財を求むるが故に施し、或は人に愧づるが故に施し、或は憍責の爲の故に施し、或は畏懼するが故に施し、或は他意を求めんと欲するが故に施し、或は死を畏るるが故に施し、或は人を誑はして喜ばしめんが故に施し、或は自ら富貴を以ての故に施に應じ、或は罪よて勝つが故に施し、或は妬嫉の故に施し、或は憍慢にして、自ら高くするが故に施し、或は名譽の爲の

- 【六】 第一五問、布施の意義は如何。
- 【七】 檀那は布施、心相應の善思なり。
- 【八】 心數法とは、經師家の所説心所法のことなり。
- 【九】 三種の布施。

故に施し、或は咒願の爲の故に施し、或は哀を解除し、吉を求むるが故に施し、或は衆を聚めんが爲の故に施し、或は賤しきを輕んじ、敬せずして施す。是の如き等の種種を名けて、不淨施と爲す。淨施とは、上と相違せるを名けて淨施と爲す。復次に、道の爲の故に施し、清淨の心生じ、諸の結使なく、今世後世の報を求めず、恭敬し、憍恣するが故に「施す」、是を淨施と名く。淨施は是れ涅槃の道に趣くの資粮なり。是の故に、「道の爲の故に施す」と言ふ。若し未だ涅槃を得ざる時の施は、是れ人天の報樂の因なり。華の瓔珞の初て成り、未だ壞せざれば、香潔く、鮮明なるが如く、涅槃の爲に淨施し、果報の香を得るも亦復是の如し。佛の説きたまふが如くんば、世に二人あり、得難しと爲す。一は出家の中、非時解脱の比丘、二は在家の白衣の能く清淨に布施するものなり。是の淨施の相は、乃ち無量世に至るも世世に失せず。譬へば券の如く、要らず終に失ふ時なし。是の布施の果は、因縁和合する時は便ち有り。譬へば樹の時節に會ふことを得れば、便ち華葉果實あり、若し時節未だ至らざれば、因あるも果なきが如し。是布施の法も、若し以て道を求むれば、能く人に道を與ふ。何となれば結使滅するを涅槃と名くればなり。當に布施すべき時には、諸の煩惱は薄きが故に能く涅槃を助く。施す所の物の中に於て、惜まざるが故に慳を除き、受くる者を敬念するが故に嫉妬を除き、直心に布施するが故に諂曲を除き、一心に施すが故に掉を除き、深く思惟して施すが故に悔を除き、受くる者の功德を觀するが故に不恭敬を除き、

【六二】施は能く諸の煩惱を除く。

自ら心を攝するが故に不斷を除き、人の好き功徳を知るが故に不愧を除き、財物に著せざるが故に愛を除き、受くる者を慈愍するが故に瞋を除き、受くる者を恭敬するが故に憍慢を除き、善法を行することを知るが故に無明を除き、果報あることを信するが故に邪見を除き、決定して報あることを知るが故に疑を除く、是の如き等の種種の不善、諸の煩惱は、布施する時悉く皆薄く、種種の善法は悉く皆得。布施する時、六根は清淨に、善欲の心生ず。善欲の心生するが故に内心は清淨なり。果報の功徳を觀するが故に信心生じ、身心柔軟の故に喜樂生じ、喜樂生ずるが故に心を一にすることを得。心を一にすることを得るが故に實智慧生ず。是の如き等の諸の善法を悉く皆得るなり。

【三】 復次に、布施する時は心中に相似の八正道を生ず。布施の果を信するが故に正見を得、正見の中に思惟して亂れざるが故に正思惟を得、清淨に説くが故に正語を得、淨身に行するが故に正業を得、報を求めざるが故に正命を得、勤心にして施すが故に正方便を得、施を念じて廢せざるが故に正念を得、心住して散ぜざるが故に正定を得。是の如き等の相似の三十七品の善法心中に生ず。

【六】 復次に、有人は「言ふ、布施は是れ三十二相の因縁なり、何となれば施す時心堅固なるが故に、足下安立の相を得。布施する時は、五事受くる者を圍造す、是眷屬の業因縁の故に足下輪相を得。大

【三】 布施は能く相似の八正道を生ず。  
 【六】 布施は三十二相の因縁なり。

勇猛力にして施すが故に足跟廣平の相を得。施は人を攝するが故に手足纏網の相を得。美味の欲食を施すが故に手足柔軟七處滿の相を得。施は命を益するを以ての故に長指身不前大直の相を得。施す時我當に相與ふべしと言つて、施心轉た増すが故に足趺高毛上向の相を得。施す時は受くる者之を求め、一心に好く聽き、懇懃に約勅して、必ず疾く得せしむるが故に(西)伊泥延膊の相を得。求むる者を瞋らず、輕んぜざるが故に臂長過膝の相を得。求むる者の意の如く施し、言を待たざるが故に陰藏の相を得。好き衣服臥具金銀珍寶を施すが故に金色身の相と薄皮の相とを得。布施する時は適前人の意に、自在の業因縁を起す可きが故に、一一孔一毛生と眉間白毫の相とを得。乞ふ者之を求むれば即ち言く、「當に與ふべし」と。是業を以ての故に上身如師子肩圓の相を得。病者に藥を施し、飢渴の者に飲食を與へ、少病の業因縁を起すが故に、兩腋下滿の相と最上味の相とを得。施す時は人に勸めて施を行じ、之を安慰し、布施の道を聞くが故に肉髻の相と身圓如尼拘盧の相とを得。乞ひ求むる者あれば、意に與へんと欲する時柔軟實語にして、必ず與へて虚しからざるが故に、廣長舌の相と梵音聲の相と如迦陵毗伽鳥聲の相とを得。施す時は如實の語、利益の語なるが故に師子頰の相を得。施す時受くる者を供養し、心清淨なるが故に牙白齒齋の相を得。施す時、實語和合語なるが故に齒密の相と四十齒の相とを得。施す時瞋らず、著せず、等心に彼を視るが故に青眼の相と眼瞳如半玉の相とを得。是を三十二相

【西】伊泥延(Ameya)。佛の三十二相の一、其の膝が鹿王の膝に似たるをいふ。

の因縁を種うと爲す。復次に、七寶人民車乘金銀燈燭房舍香華を布施するを以ての故に、轉輪王と作つて七寶具足することを得。

復次に、施すに時を得るが故に、報も亦増多し。佛の説きたまふ如きは、遠く行くの人、遠くよ

り來る人、病人、看病人、風塞、衆難の時に施す施は是を時施と爲す。復次に、布施の時、土地の須

ふる所に随つて施すが故に、報を得ること増多し。復次に、曠路の中にして施すが故に、福を得る

こと増多し。常に施して廢せざるが故に、報を得ること増多し。物の

重きを施すが故に、福を得ること増多し。精舍園林浴地等を以て、若

くは善人に施すが如きは、故らに報を得ること増多し。若くは僧に施す

が故に、報を得ること増多し。若くは施す者受くる者、俱に徳あるが故

に、報を得ること増多し。種種に將迎して、受くる者を恭敬するが故に、

福を得ること増多し。得難き物を施すが故に、福を得ること増多し。

所有する物に随つて、盡く能く布施するが故に、福を得ること増多し。譬へば 大月氏の 弗

迦羅城中に、一畫帥あるが如きは、干那と名け、東方の多利隨羅國に到り、客として盡くこと十二年

にして、三十兩の金を得、持て本國に還る。弗迦羅城の中に於て、鼓を打ちて大會を作す聲を聞き、

往つて衆僧を見、信心清淨にして即ち維那に問ふ、「此の衆中、幾許の物を一日の食と作すとを得る

【六五】 布施の功德大なる所以。

【六六】 大月氏(一三三三) 印度の

西にある國名)の一畫帥、三十

兩の金を以て、衆僧に施せし

因縁。

【六七】 弗迦羅(一三三三)。

や」と。大官は答へて曰く、「三十兩金にして、一日の食を得るに足れり」と。即ち有する所の三十

兩の金を以て京都に付し、「我が爲に一日の食を伸れ、我は明日當に來るべし」と空手にして歸る。其

婦聞きて曰く、「十二年の俸は何等の物を得るや」と。答へて曰く、「我、三十兩の金を得たり」と。即

ち問ふ、「三十兩の金は今何の所に在る」と。答へて曰く、「已に福田の中に在つて種をたり」と。婦

の言く、「何等の福田ぞ」と。答へて曰く、「樂僧に施し與ゆ」と。婦は便ち

夫を執して官に還る。罪を治め、事を断ずるの大官問ふ、「何事を以ての

故ぞ」と。婦の言く、「我が夫、狂癡し、十二年にして作り得たる三十兩金

を、婦兒を憐愍せしめて、盡く以て他人に與へたり。依つて官司の如く、

報を轉して還り來る」と。大官其夫に問ふ、「汝は何を以てか婦兒に供給せ

ずして、乃ち物を他に與ふるや」と。答へて曰く、「我、先世に功德を行せ

ずして、今世、貧窮にして諸の辛苦を受く、今世福田に遭遇す。若し福を種をすんば、後世復た貧窮

をん。貧窮相續して斃するを得る時なし。我今願に貧窮を捨てんと欲す、是を以ての故に、盡く金

を以て樂僧に施せり」と。大官は是の優婆塞の佛を信するよ清淨にして、是語あるを聞き已つて、盡

くはて言く、「是は甚だ難しと爲す、勤苦して此少物を得、盡く以て僧に施す、汝は是れ善人なり」と。即ち身の瑠璃を脱し、及び乘る所の馬並に一聚落を以て貧人に施し、之に語つて曰く、「汝始めて

【八】 樂僧。福壽院(フクシウイン) 寺中の事務を司る役名にして、寺中三綱の一なり。漢字にて樂僧の義、當は樂師陀那の那の字を取りたるなり。

衆僧に施すに、衆僧未だ食せず、是を穀子未だ種えずと爲す。芽已に生ふことを得て、大果方に後に在るのみし。是の故に「得難き物を盡く用つて布施すれば、其の福最も多し」と言ふ。

復次に、宝世間の檀あり、出世間の檀あり、聖人の稱譽する所の檀あり、聖人の稱譽せざる檀あり。

佛菩薩の檀あり、聲聞の檀あり。何等か世間の檀なる、凡夫人の布施、亦聖人の有漏心もて作せる布施、是を世間の檀と名く。復次に、有人の言く、「凡夫人の布施は、是を世間の檀と爲す、聖人は有漏心もて布施すと雖も、結使斷するを以ての故に、出世間の檀と名く。何となれば是の聖人は無咎

三昧を得るを以てなり」と。復次に、世間の檀は不淨にして、出世間の檀は清淨なり。二種の結使

は、一種は愛に屬し、一種は見に屬す。二種の結使の爲に使はる、是を世

間の檀と爲し、此の二種の結使なき、是を出世間の檀と爲す。若し三礙繫

の心は、是を世間の檀と爲す。何となれば因縁の諸法は實に吾我なし。而も、「我與へ、彼取る」と言

ふ、是の故に世間の檀と名く。復次に、我には定まる處なし、我は以て彼の爲とせば、彼は以て非と

爲し、彼は以て我の爲とせば、我は以て非と爲す。是く不定なるを以ての故に、實我なし。施す所の

財は因縁の和合に従つて有なり、一法として獨り得べき者あること無し。絹の如く布の如く、衆縁合

するが故に成す。絲を除き、縷を除けば則ち絹布なし。諸法も亦是の如く、一相として相なく、相は

常に自ら空なり。人は想念を作し、計して以て有と爲し、顛倒にして實ならず、是を世間の檀と爲す。

【六九】 世間的の布施と出世間的の布施。

心に三礙なく、實に法相を知り、心顛倒せざる、是を出世間の檀と爲す。出世間の檀は聖人の爲に稱譽せられ、世間の檀は聖人の稱譽せざる所なり。復次に、清淨の檀は諸垢を離へず、諸法の實相の如きは、是聖人に稱譽せらるし。不清淨は結使、顛倒、心の著を離ふ、是聖人の稱譽せざる所なり。復次に、實相の智慧和合して布施す、是れ聖人の稱譽する所、若し爾らざれば聖人は稱譽せざる所なり。

七〇

復次に、衆生の爲にせず、亦諸法の實相を知らんが爲の故に施すにあらす、但生老病死を脱せんことを求むる、是を聲聞の檀と爲し、一切衆生の爲の故に施し、亦諸法の實相を知らんが爲の故に施す、是を諸佛菩薩の檀と爲す。諸の功德に於て具足すること能はず、但少許の分を得んと欲す、是を聲聞の檀と爲し、一切の諸の功德を具足し滿さんと欲す、是を諸佛菩薩の檀と爲す。老病死を畏るるが故に施す、是を聲聞の檀と爲し、佛道を助けんが爲に、衆生を化さんが爲に、老病死を畏れず、是を諸佛菩薩の檀と爲す。是中に應に菩薩本生經を説くべし。阿婆陀那經の中に説くが如くんば、昔閻浮提の中に王あり、

婆薩婆と名く、爾の時に、韋羅摩の菩薩あり、

七三

韋羅摩と名く。是は國王の師として、王に轉輪聖王の法を作さんよを教ふ。韋羅摩は財富、

無量の珍寶具足し、是の思惟を作す、「人は我を謂つて、貴く財富無量にして、衆生を饒益すと爲す。今

正に是れ時なり、應當に大に施すべし。富貴は樂しと雖も一切無常なり。五家の共にする所は、人を

- 【七〇】 小乘の布施は大乘の布施との相異。
- 【七一】 婆薩婆(Vibhava) 毘舍門の菩薩、韋羅摩(Vesamā) 布施して感應ありと因縁。

して心散じ、輕躁にして不定ならしむ。譬へば獨依の暫くも住せざるが如し。人命の逝くことは、電の滅するよりも速疾なり。人身は無常にして、衆苦の藪なり、是を以ての故に應に布施を行すべし」と。是の如く思惟し已つて自ら手跡を作し、普ねく閻浮提の諸の婆羅門、及び一切の出家人に告ぐ、願くは各徳を屈して、來つて我が舍に集りたまへ、大施を設けて十二歳に滿たさんと欲す」と。飯汁に船を行り、酪を以て池と爲し、米麴を山と爲し、酥油を渠と爲し、衣服、飲食、臥具、湯藥は皆妙を極めしめ、十二歳を過ぎて以て布施せんと欲す。八萬四千の白象には犀甲・金飾の珞・名寶を以てし大金輪を建つるには四寶を以てし、八萬四千の馬を莊嚴するにも、赤犀甲・金飾・四寶を以てし、八萬四千の車を校絡するに、皆金銀・琉璃・頗瓊の寶を以てし、飾を覆ふに獅子虎豹の皮を以てし、若くは白劍、婆羅の寶篋、雜飾を以て莊嚴を爲す。八萬四千の四室の牀は、雜色にして綺綺たり。種種の茵蓐は柔軟細滑にして以て絨飾をなし、丹枕錦被を牀の兩頭に置き、妙衣盛服は皆亦備に有り、八萬四千の金鉢には、銀の粟を盛り滿て、銀鉢には金の粟を盛り、琉璃の鉢には玻璃の粟を盛り、玻璃の鉢には琉璃の粟を盛り、八萬四千の乳牛の牛は、乳一斛を出し、金を以て其の甲角を飾り、衣するに白鬘を以てす。八萬四千の美女は、端正福徳にして、皆白珠の若寶を以て其の身の瓔珞とす。略して其の要を擧ぐることは、種種勝びて記す可らず。爾の時、婆羅婆王、及び八萬四千の小國の王、并に諸の臣民豪傑、長者は、各十萬の舊金錢を以て贈還して勸助す、此の法嗣を設けて具足して

施し已れり。釋提婆那民は來つて韋羅摩菩薩に語り、此の偈を説いて言く、

『天地に得難き物は、能く一切を喜悅す、汝今皆已に得て、佛道の爲に布施せり。』

爾の時に、淨居の諸天は身を現じて、讃じて此の偈を説いて言く、

『門を開いて大に布施す、汝が爲す所は、是衆生を憐愍するが故なり、之を佛道を求むと爲す。』

是時に諸天は、是思惟を作さく、「我當に其金瓶を閉ぢて、水をして下らざらしむべし。何となれば、

皆出家し、戒を持し、清淨にして道に入る。何を以てか乃ち福田あること無しと言ふや」と。淨居天

の言く、「是菩薩は佛道の爲の故に布施す。今此の諸人は皆是れ邪見なり。是故に我には福田あること

と無しと言ふ」と。魔王、天に語つて言く、「云何が是人は佛道の爲の故に布施するを知るや」と。是

の時に、淨居天は化して婆羅門の身となり、金瓶を持し、金杖を執つて、韋羅摩菩薩の所に至り語つ

て言く、「汝は大に布施し、捨て難きを能く捨つ、何等をか求めんと欲する。轉輪聖王、七寶の千子と

作り、四天下に王たらんと欲するや」と。菩薩は答へて言く、「此事を求めず」と。「汝は釋提婆那民を

求め、八十那由他の天女の主と爲るや」と。答へて言く、「不なり」と。「汝は六欲天主を求むるや」と。答

へて言く、「不なり」と。「汝は梵天王の二千大千世界に主として、衆生の祖父たることを求むるや」と。

答へて言く、「不なり」と。「汝は何の求むる所をか欲するや」と。是の時に菩薩は、此の偈を説いて言は

答へて言く、「不なり」と。「汝は何の求むる所をか欲するや」と。是の時に菩薩は、此の偈を説いて言は

「我は無欲の處を求め、生老病死を離れ、能く諸の衆生を度し、是の如くして佛道を求む。」

化の婆羅門は問うて言く、「布施主よ、佛道は得難し、當に大に辛苦すべし、汝は心轉にして串樂なり、必ず此の道を成辦せんことを求むること能はず。我、先に語るが如く、轉輪聖王釋提婆那民六欲天王、梵天王は是れ得べきこと易し、此を求むるに如かず」と。菩薩答へて言く、「汝、我が一心の誓を聽け」と。

「假令熱鐵輪、我が頭上に在つて轉ずとも、一心に佛道を求めて、終に悔恨を懷かず。若し使ひ三惡道〔及び〕人中の無量の苦ありとも、一心に佛道を求めて、終に此が爲に轉せざらん。」

化の婆羅門の言く、「布施主、善い哉、善い哉、佛を求むること是の如し」と。便ち偈もて讚して言はく、

「汝は精進の力大にして、一切を慈愍し、智慧菩薩なく、佛と成ること久しからざるに在り。」

是の時、天は衆華を雨らして、菩薩を供養す、諸の淨居天の瓶水を閉づる者は、即ち隠れて現はれず。菩薩は是の時、婆羅門上座の前に至り、金瓶を以て水を行れども、水は閉ぢて下らず、衆人疑ひ怪むらく、「此種種の大施は一切具足せり、布施主の人の功德亦大なり。今何を以ての故に瓶水下らざるや」と。菩薩自ら念ずらく、「此れ他事に非ず、將に我が心、清淨なること無からんとするや、

施物具足せざることを無きことを得るや、何を以てか此を致す」と。自ら阿羅漢十六種の書を觀するに、清淨にして瑕なし、是時に諸天は、菩薩に語つて言く、「汝、疑ひ悔ゆること莫れ、汝は辦せざることを無し。是の諸の婆羅門は、惡邪にして不淨なるが故なり。」「即ち偈を説いて言はく、

『是の人の邪見の網・煩惱は正智を破し、諸の清淨戒を離れて、唐しく苦んで惡道に墮す。』

「是を以ての故に水閉ちて下らず」と。是の如く語り已つて、忽然として現せず。爾の時に六欲天は、種種の光明を放ちて諸の衆會を照し、菩薩に語り、偈を説いて言はく、

『惡邪海中の行は、汝が正道に順せず、諸の施を受くる人の中に、汝が如き者あること無し。』

是語を説き已つて、忽然として現せず。此の時に菩薩は、此の偈を説くを聞いて、自ら念ずらく、

「會中實に自ら我と等しき者あること無し、水閉ちて下らざるは、其れ將た此が爲ならん」と。即ち偈を説いて言はく、

『若し十方天地の中に、諸の好人、清淨なる者あらば、我今歸命し、稽首し禮したてまつる。』

右の手に瓶を執り左に手を灌いで、自ら願を立つ、我一人應に是の如きの大布施を受くべし。是時に瓶水は、涌いて虚空に在り、上より來下して、其の左の手に灌ぐ。是時に婆羅婆王は、是處

應を見て、心に恭敬を生じ、偈を説いて言はく、

『大婆羅門主よ、清き琉璃色の水、上より流注し下り、來つて汝が手中に墮つ』

是の時に大婆羅門衆は、恭敬の心を生じ、手を合せ禮を作し、菩薩に歸命す。菩薩は是の時、此の偈を説いて言はく、

『今我が布施する所は、三界の福を求めず、諸の衆生の爲の故に、以用て佛道を求む。』

此の偈を説き已れば、一切の大地山川樹木は皆六返震動せり。韋羅摩は本謂へり、「此の衆は應に供養を受くべし、故に與ふ」と。既に受くるに堪ゆる者なきことを知り、今は憐愍を以ての故に、所受の物を以て之に施す。是の如く、種種の檀は、本、因縁より生ず。是中に應に廣く説くべし。是を外の布施と爲す。云何が内の布施と名くるや。身命を惜まず、諸の衆生に施す。本生因縁の説の如し。釋迦文佛、本、菩薩と爲り、大國の王と爲りたまひし時、世に佛なく、法なく、比丘僧なかりき、是王は四もに出でて、佛法を求索し、了に得ると能はず。時に一の婆羅門あり、言はく、「我は佛の偈を知れり。我を供養せば、當に以て汝に與ふべし」と、王即ち問うて言く、「何等の供養を求むるや」と。答へて曰く、「汝、能く汝が身上に就いて、肉を破つて燈炷となし、我を供養せば、當に以て汝に與ふべし」と。王心に念じて言く、「今我が此の身は、危く、脆く、不淨なり。世世苦を受くること復た數ふ可らず、未だ曾つて法の爲にせず、今始めて用ゆることを得、甚だ惜まざるなり」と。是の如く念じ已つて、旃陀羅を喚び、遍ねく身上を割いて以て燈炷を作り、白氈を以て肉に纏ひ、酥油を之に灌いで、一時

【七三】釋尊因地に大國の王となり、身を燒いて一偈を求め給ひし因縁。

に遍あまなく燒やき、舉こ身の火しん燃ひゆる、乃すなはち一いち偈げを與あたふ。又また復たに七しち箇げん迦か文もん佛ぶつは、本もと、一いつの鶴つとと作なつて雪山せつぜんの中うちに在あしたまへり。時ときに大雨だいう雪せつあり、一ひとの人ひとありて道みちを失うしな、窮くわう厄やくに辛しん苦くし、飢け寒かん并びやうに至いたり、命いのち須しゆ臈らふに在あり、鶴つとは此この人ひとを見て、即たち飛とんで火ひを求もとめ、其そが爲ために薪たきぎを聚あつめて之これを燃もやし、又また復またた身みを以もつて火ひに投なげて、此この飢け人にんに施せす。是いの如ごとき等とく、頭あたま目め髓ずい腦のうを衆しゆ生じやうに給たま施せすること種種しんしんあり。本ほん生じやう因いん緣えん經きやうは此こ中ちゆうに應おに廣ひろく説せつくべし。是いの如ごとき等とくの種しゆ種じゆ、是これを内ないの布ふ施せと名なく。是いの如ごとき、内ない外がいの布ふ施せは無む量りやうなり。是これを檀だん相じやうと名なく。

初しよ品ぽんの中ちゆうの攝しやう「那な」波は羅ら蜜みつ「多た」の法ほふ施せを釋しやくす。

問とうて曰いはく、五ご云い何が法ほふの布ふ施せとを白はくくるや。答こたへて曰いはく、有ある人ひとの言いく、  
 「常つねに好こ語ごを以もつて、利り益いする所ところあり、是これを法ほふ施せと爲なす」と。

復また次に、有ある人ひとの言いく、「諸もろの佛ぶつ語ご、妙めう善ぜんの法ほふを以もつて、人ひとの爲ために演えん説せつする、是これを法ほふ施せと爲なす」と。  
 復また次に、有ある人ひとは言いふ、「一いつ三種さんしゆの法ほふを以もつて人ひとに教おしふ。一いつには修しゆ妬だ路ろ、二にには毗び尼に「耶や」、三さんには阿あ毗び

曇たん是じを法ほふ施せと爲なす」と。  
 復また次に、有ある人ひとは言いふ、「四し種しゆの法ほふ藏ざうを以もつて人ひとに教おしふ。一いつには修しゆ妬だ路ろ藏ざう、二にには毗び尼に「耶や」藏ざう、三さんに

は阿あ毗び曇たん磨ま藏ざう、四しには雜ざつ藏ざう、是これを法ほふ施せと爲なす」と。

- 【七四】 釋尊因地に於て一羽の鶴となつて、飢寒の人を救ひ給ひし因縁。
- 【七五】 第一六問、法施とは何を言ふか。
- 【七六】 三種の法藏。
- 【七七】 四種の法藏。

復次に、有人は言ふ、「略して説くに二種の法を以て人に教ふ。一には聲聞法、二には摩訶衍那法、是を法施と爲す」と。

問うて曰く、(合)提婆達多呵多等の如きも、亦三藏、四藏、聲聞法、及び

摩訶衍法を以て人に教ふ、而も身は地獄に入れり、是の事云何。答へて曰

く、提婆達多是邪見の罪多く、呵多は妄語の罪多し、是れ道の爲に清淨の

法施に非ず、但名利と恭敬と供養とを求む。惡心の罪の故に、提婆達多是生

きながら地獄に入り、呵多は死して惡道に墮ちたるなり。復次に、但言説

のみを名けて、法施と爲すに非ず、常に淨心善心を以て一切に教ふ、是を

法施と名くし、譬へば財施の如きは、善心を以てせざれば、福德と名けず、

法施も亦爾なり、淨心善思を以てせざれば、則ち法施に非ず、復次に、

説法者は能く淨心善思を以て三寶を讚歎し、罪福の門を聞き、四眞諦を

示し、衆生を教化して佛道に入らしむ、是を眞淨の法施と爲す。

復次に、略して法を説くに二種あり。一には衆生を惱まさず、善心にし

て慈愍す、是を佛道の因縁爲す。二には諸法の眞空を觀知す、是を涅槃

道の因縁と爲す。大衆の中に在つて慈哀の心を興し、此の二法を説き、

【六】聲聞法とは、小乘法のこと。

【七】摩訶衍法とは、大乘法のこと。

【八】第一七問、提婆達多が種の佛を教へて、而も地獄に墮ちし理由如何。

【九】呵多(二)の妄語。

【一〇】淨心善思を以て法を説かざれば法施にあらず。

【一一】四眞諦とは、苦と集と滅と道となり。前の二は迷界の果と因にして、後の二は悟界の果と因なり。

【一二】眞空とは、物理學に謂ふ所の眞空にあらず、眞空妙有とて、有に即して空、空に即して有なりといふ意味の眞空なり。蓋し眞理の極致は、幽玄微妙にして言語の及ぶところにあらず、之を有なりといふは、有に著する有所得の迷

名聞利養の恭敬の爲にせず、是を清淨の佛道の法施と爲す。説くが如くんば阿輸伽王は、一日に八萬の佛圖を作り、未だ道を見ずと雖も、佛法の中に於て少しく信樂あり。日に諸の比丘を請し、宮〔中〕に入れて供養し、日下次第に法師を留めて法を説かしむ。一の三藏あり、年少の法師にして聰明端正なり。次に應に説法すべく、王の邊の坐にあり。口に異香あり、王甚だ疑怪ふ謂へらく、爲れ端しからず、香氣を以て王宮の人を動かさんと欲すと。〔乃至〕比丘に語つて言く、「口中に何等のものかある、口を開き、之を看せしめよ」と。即ち爲に口を開くに、了に所有なし。水を與へて漱がしむるに、香氣故の如し。王問ふ、「大徳、新に此の香あるや、舊より之あるや」と、比丘答へて言く、「此の如きは久しくあり、適今あるに非ず」と。又問ふ、此あること久しきや」と。偈を以て答へて言く、

『迦葉佛の時に、此の香法を集む、此の如きは久くして久しく、常に新に出だすが如し。』

王の言く、「大徳よ、略説にては未だ解せず、我が爲に廣く演べたまへ」と。答へて曰く、「王よ、當に一心に、善く我が説を聴くべし。我昔し迦葉佛の法中に於て、説法の比丘と作り、常に大衆の中に在りて、歡喜して演説し、迦葉世尊の無量の功徳、諸法の實相、無量の法門を懇懇に讃歎して、一

見なり。されど又これを無なりといふは、氣を執する者所得の淺見なり。是故に有といふべからず。無といふべからず、さればとて非有非無もいふべからず。言語の能く説はす所にもあらず、鬼魔の能く述す所にもあらず、濕々として、水の底なきが如く、窈々として、空の露非なきに似たり。古人が「八不妙理之風、持安聖觀論之標、無得正觀之月、淨一實中道之象」といへるもの即ち之れなり。

【八五】 香口比丘の因縁。

切を教誨せり。是より以來、常に妙香あつて口中より出で、世世に絶へず、恒に今日の如し」と。此の偈を説く、

『此の香氣は、草木の諸の華香に超絶して、能く一切の心を悦ばしめ、世世に常に滅せず。』

時に國王は、愧喜交集り、比丘に白して言く、「未曾有なり、説法の功德、大果乃ち爾なり」と。

比丘言く、「此を名けて華と爲す、未だ是れ果にあらず」と。王言く、「其の果は云何、願くは爲に演

説したまへ」と。答へて言く、「果は略して説くに十あり、王よ、諦に之を聽きたまへ」と。即ち爲に

偈を説く、

大名聞と、端正と、得樂と、及び恭敬と、威光は日の明かなるが

如くなるると、一切〔衆生〕の爲に愛せらるると、辯才あると、大智ある

と、能く一切の結を盡すと、苦滅して涅槃を得ると、是の如きを名けて十と爲す。』

王言く、「大徳よ、佛の功德を讃じて、云何が是の如きの果報を得るや」と。爾の時に、比丘は偈を

以て答へて曰く、

『佛の諸の功德を讃じて、一切をして普ねく聞かしむ、此の果報を以ての故に、而も大名譽を得

るのみり。

佛の實の功德を讃じて、一切をして歡喜せしむ、此の功德を以ての故に、世世常に端正なり。

人の爲に罪福を説いて、安樂の所を得せしむ、此の功德を以て、樂を受け、常に歡豫す。

佛の功德力を讃じて、一切の心をして伏せしむ、此の功德を以ての故に、常に恭敬の報を獲るなり。

説法の聲を顯現して、諸の衆生を照悟す、此の功德を以ての故に、威光は日之暉くが如し。

種種に佛の徳を讃じて、能く一切を悦ばしむ、此の功德を以ての故に、常に人の爲に愛せらる。

巧言もて、佛徳の無量にして、窮り已ること無きを讃す、此の功德を以ての故に、辯才は盡く

可らず。

佛の諸の妙法には、一切過ぐる者あることなしと讃す、此の功德を以ての故に、大智慧にして清

淨なり。

佛の功德を讃する時、人の煩惱をして薄からしむ、此の功德を以ての故に、結盡きて、諸の垢

滅す。

二種の結の盡くるが故に、涅槃の身を已に證すること、譬へば大雨を澎げば、火盡きて餘熱なき

が如し。』

重ねて王に告げて言く、「若し未だ悟らざるあらば、今は是れ問ふべき時なり。當に智箭を以て、

汝が疑軍を破るべし」と。王白さく、「法師よ、我は心に悦び、悟つて疑ふ所なし。大徳福の人は、善

く能く佛を讚すこと、是の如き等の種種の因縁もて、法を説いて人を度す、「爲を」法施と名し。

問うて曰く、財施と法施とは、何等をか勝たりと爲すや。答へて曰く、佛の言ふ所によれば、二に在り、或は三界を出づるを以てなり。六。

復次に、財施は量あれども、法施は盡ることあれども、法施は盡ることなし。譬へば、薪を以て火に益せば、其の明轉た多きが如し。復次に、財施の報は、淨少くして垢多く、法施の報は、垢少くして淨多し。

復次に、若し大施を作すには、必ず衆力を待つ、法施は心より出でて、他心を待たず。

復次に、財施は能く四大・諸根をして増長せしめ、法施は能く無漏の根・力・覺・道をして具足せしむ。

復次に、財施の法は佛あるも、佛なきも、世間に常にあり。法施の如きは、唯佛あるの世にのみ、乃ち當に有るべし。是の故に、當に知るべし、法施の難た難きことを。云何が難しと爲す。乃ち有相の辟支佛に至るも、説法すること能はず、直行・乞食・飛騰・變化して、以て人を度す。復次に、法施

【六七】 第一八問、財施と法施との優劣如何。

【六八】 論議には此に「復次日説清淨深得理中心亦得之故出三界」の十八字あり。

【六九】 根とは信・進・念・定・慧の五根、力とは信・進・念・定・慧の五力、覺とは念・擇・進・喜・禪・安・定・捨の七覺支、道とは正見・正思惟・正語・正業・正精進・正定・正念・正命の八正道なり。

の中より能く財施を出生し、諸の聲聞・辟支佛・菩薩に及び、又佛に及ぶ。復次に、法施は能く諸法の有漏なるか、無漏法なるか、色法なるか、無色法なるか、有爲法なるか、無爲法なるか、善法なるか、不善法なるか、無記法なるか、常法なるか、無常法なるか、有法なるか、無法なるか、〔及び一切諸法の實相は清淨にして、破す可らざるか、壞す可らざるかを分別す。是の如き等の法は略すれば則ち八萬四千の法藏にして、廣説すれば則ち無量なり、是の如き等の種種〔の法〕は、皆法施に従つて分別し了知す。是の故に法施を勝れたりと爲す。是の二施の和合を名けて檀〔那〕と爲す。是の二施を行じて、佛と作らんことを願求すれば、則ち能く人をして佛道に至らしむ。何に況んや其の餘をや。

問うて曰く、四種の捨を名けて檀となす。所謂、財捨と、法捨と、無畏捨と、煩惱捨となり。何を以てか此の中に二種の捨を説かざるや。答へて曰く、無畏捨は尸羅と別なきが故に説かず、般若あるが故に煩惱捨を説かず、若し六波羅蜜を説かざれば、則ち應に具に四捨を説くべし。

【九〇】 第一九問、財捨と法捨とを説いて、無畏捨と煩惱捨とを説かざる理由如何。

【九一】 尸羅（五戒）は、戒・戒徳・戒行などと説す。

【九二】 般若（三三三）は智慧の義なり。

# 巻の第十二

初品の中の檀〔那〕波羅蜜〔多〕の法施の餘を釋す。

問うて曰く、云何が檀〔那〕波羅蜜〔多〕の滿と名くるや。答へて曰く、檀〔那〕の義は上に説くが如し。波羅蜜〔多〕は、是れは布施の河を渡つて、彼岸に到ることを得るに名く。

問うて曰く、云何が「彼岸に到らず」と名くるや。答へて曰く、譬へば河を渡るに、未だ到らずして還るを名けて、「彼岸に到らず」と爲すが如し。舍利弗の如きは、六十劫の中に於て、菩薩の道を行じ、布施の河を渡らんと欲す、時に乞人あり來つて其の眼を乞ふ。舍利弗言く、「眼は住する所なし、何を以てか之を索むるや。若し我が身及び財物を須ひなば、當に以て相與ふべし」と。答へて曰く、「汝が身及び財物を須ひず、唯眼を得んと欲す。若し汝實に檀〔那〕を行せば、眼を以て與へられよ」と。爾の時に舍利弗は、一眼を出して之を與ふ。乞者は眼を得て、舍利弗の前に於て之を嗅ぎ、鼻を嫌つて唾して地に棄て、又脚を以て踏む。舍利弗思惟して言く、「此の如きの弊人等は、度す可きこと難し、眼は實に用無きに、強いて之を索め、既に得れば而

【一】 第一問、檀那波羅蜜多の滿とは何をいふか。

【二】 波羅(Parā)は彼岸の義にして、蜜多(Mitā)は到を意味す。故に波羅蜜多を秦に到彼岸と譯せり。

【三】 第二問、彼岸に到らずといふ意義如何。

【四】 乞眼婆羅門と舍利弗。

も棄て、又脚を以て踏む、何ぞ弊なるの甚しき乎。此の如き人輩は度す可らず、自ら調へて、早く生死を脱せんには如かず」と、思惟是に已つて、菩薩の道に於て退き、小乘に廻向す。是を「彼岸に到らず」と名く。若し能く面に進んで退かず、佛道を成辦せば、「彼岸に到る」と名く。

復次に、事に於て成辦するを亦「彼岸に到る」と名く。復次に、此岸を饑餓と名け、檀〔那〕を河中と名け、彼岸を佛道と名く。

復次に、有無の見を此岸と名け、有無の見を彼する智慧を彼岸と名け、勤めて布施を修する、是を河中と名く。復次に、檀〔那〕に二種あり、一には魔の檀〔那〕、二には佛

【五】二種の布施。  
【六】 漢中四蛇の因縁。

の檀〔那〕なり。若し結使の賊の爲に奪はれ、憂惱し怖畏するは、是を魔の檀〔那〕と爲し、名けて此岸と曰ふ。若し清淨の布施あつて、結使の賊なく、怖畏する所なく、佛道に至ることを得る、是を佛の檀〔那〕と爲し、名けて彼岸に到ると曰ふ。是を波羅蜜〔多〕と爲す。佛、毒蛇蟻羅の中に説きたまはく、「人あり、罪を王に得、王は一の篋を掌護せしむ。篋の中に四つの毒蛇あり、王は罪人に勅して看視し養育せしむ。此の人思惟すらく、「四の蛇は近き難し、近けば則ち人を害す、一すら猶養ひ匠し、況んや四をや」と。便ち篋を棄てて走れば、王五人をして、刀を抜いて之を追はしむ。復た一人あり、口には附順すと云ひつゝ、心には中傷を欲せり。而も之に語つて言はく、「之を養ふに理を以てせば、此亦苦なし」と、其の人は之を覺り、馳走して命を逃れ、一空聚

に至る。一の善人あり、方便して之に語る。「此の聚は空なりと雖も、是れ賊の所止する處なり。汝今此に住せば、必ず賊の爲に害せられん、慎んで往すること勿れしと。是に於て復た去つて一大河に至る。河の彼岸は即ち是れ異國なり。其の國は安樂坦然清淨にして、諸の患難なし。是に於て衆の草木を集め、縛して以て楫と爲して進み、手足を以て力を竭し、渡らんことを求む。既に彼の岸に到れば安樂にして患なし。王とは魔王、魔とは人身、四の毒蛇とは四大、五の抜刀の賊とは五陰、一人の口善にして、心悪なるは是れ染著、空聚は是れ六情なり。賊は是れ六塵、一人惑んで之に語るは是を善師と爲し、大河は是れ愛、楫は是れ八正道、手足もて懇めて渡るは是れ精進、此岸は是れ世間、彼の岸は是れ涅槃、度るは漏の盡きたる阿羅漢なり。菩薩の法の中も亦是の如し。若し施に三の礙あり、我と彼の施す所を受くる者と財となり。是を魔の境界に墮し、未だ衆難を離れずと爲す。菩薩の如きは、布施するに三種、清淨にして礙なく、諸佛の爲に讀せらる。是を「彼岸に到る」と名く。此の六波羅蜜「多」は、能く人をして饒貧等の煩惱、染著の大海を度り、彼の岸に到らしむ。是の故に波羅蜜「多」と名く。

問うて曰く、阿羅漢辟支佛も亦能く彼岸に到る、何を以てか波羅蜜「多」と名けざるや。答へて曰く、阿羅漢辟支佛の彼岸に度ると、佛の彼岸に度るとは、名は同じくして實は異なれり。彼は生死を以て此の岸と爲し、涅槃を彼の岸と爲す。而も檀「那」の彼の岸に度ること能はず。何となれば一切の

【七】 第三問、二乘は何故に波羅蜜多と名けざるや。

物、一切の時、一切の種を以て布施すること能はず。設ひ能く布施するも亦大心なく、或は無記心を以てし、或は有漏の善心、或は無漏心の施なるも大悲心なく能く一切衆生の爲に施すこと能はざるなり。菩薩の施は、布施の不生、不滅、無漏、無爲を知ること涅槃の相の如く、一切衆生の爲の故に施す、是を檀那波羅蜜多と名く。復次に、有人の言く、「一切の物、一切の種、内外の物、盡く以て布施して果報を求めず、是の如きの布施を檀那波羅蜜多と名く」と。

復次に、盡す可らざるが故に、檀那波羅蜜多と名く。何となれば施す所の物は、畢竟空にして涅槃の相の如しと知り、是の心を以て衆生に施せばなり。是の故に施の報盡す可らざるを檀那波羅蜜多と名く。へ、五通仙人の如きは、好き寶物を以て藏して石中に著け、此の寶を護らんと欲して、金剛を磨いて之に塗り、破る可らざらしむ。菩薩の布施も亦復是の如く、涅槃實相の智慧を以て布施を磨き塗り、盡す可らざらしむ。復次に、菩薩は一切衆生の爲の故に布施す、衆生の數は盡す可らざるが故に、布施も亦盡く可らず。

復次に、菩薩は佛法の爲の故に布施す、佛法は無量無邊なれば、布施も亦無量無邊なり。是を以ての故に阿羅漢阿支佛は、俱に彼岸に到ると雖も、波羅蜜多と名けず。

問うて曰く、云何が「具足し満つ」と名くるや。答へて曰く、先に説くが如く、菩薩は能く一切に

【八】 五通仙人石中に寶を藏するの因縁。

【九】 第四問、「具足し満つ」といふ意義如何。

布施し、内外、大小、多少、麤細、著不著、用不用、是の如き等の種種の物を、一切能く捨て、心に惜む所なく、等しく一切衆生に與へて、是觀を作さず。「所謂」大人には與ふべく、小人には與ふべからず、出家人には與ふべく、出家せざる人には與ふべからず、人には與ふべく、禽獸には與ふべからずと。一切衆生に於て、平等の心もて施し、施して報を求めず、又實相を施すことを得。是を「具足して滿つ」と名く。亦時を觀せず、晝となく、夜となく、夏となく、吉となく、衰となく、一切時に常に等しく施して、心に悔い惜むこと無く、乃至頭日髓腦を施して憍むと無し。是を「具足して滿つ」と爲す。

復次に、有人の言く、「菩薩は初發心より、乃ち菩提樹下の三十四心に至るまで、是中間に於て名けて布施を具足して滿つと爲す」と。復次に、七住の菩薩は、一切諸法の實相の智慧を得、是時佛土を莊嚴し、衆生を教化し、諸佛を供養し、大神通を得、能く一身を分つて無數の身と作し、一一の身より皆七寶の華香旛蓋を雨らし、大燈を化作すると須彌山の如く、十方の佛及び菩薩僧を供養す。復た妙音を以て佛徳を讚頌し、禮拜し、供養し、恭敬して將に迎へんとす。復次に、是の菩薩は、一切十方無量の餓鬼國の中に於て、種種の飲食、衣被を雨らし、其をして充滿せしめ、満足を得已つて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。復た畜生道の中に至り、其をして自ら善く相害するの意なからしめ、其の畏怖を除き、其の須ふる所に隨つて各充足せしめ、満足を得已つて、皆阿耨多羅三藐三菩提

提の心を發す。地獄の無量の苦の中に於ては、能く地獄の火を滅し、湯を冷かならしめ、罪息み、心善にして、其飢渴を除き、天上人中に生ずることを得せしむ。此因縁を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し十方の人の貧窮の者には、之に給するに財を以てし、富貴の者には、施すに異味異色を以てし、其をして歡喜せしむ。此因縁を以ての故に皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し欲天の中に至つては、其をして天上の欲樂を除却せしめ、魔すに妙寶法樂を以てし、其をして歡喜せしむ。此の因縁を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し色天の中に至つては、其の樂に著するを除き、菩薩の禪法を以て之を娛樂せしむ、此の因縁を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の如くにして乃ち十住に至る。是を「檀〔那〕波羅蜜多を具足し滿つ」と名く。復次に、三菩薩に二種の身あり、一には「結業生身」と名く。二には法身なり。是の二種の身中に檀〔那〕波羅蜜多を滿す是を「檀波羅蜜を具足す」と名づく。

問うて曰く、二四云何が「結業生身」もて檀〔那〕波羅蜜多を滿すと名くるや。答へて曰く、未だ法身を得ず、結使未だ盡さず、能く一切の寶物、頭目、髓腦、國財、妻子、内外の所有を以て、盡く以て布施

- 【一】 欲天とは、欲界の六天のことなり。
- 【二】 色天とは、色界の二十八天をいふ。
- 【三】 菩薩の二種の身り。結業生身。惡を結といひ、惡に由て起す善惡の所作を業といふ。故に結業生身とは、惡業に由て生ずる身といふ義なり。
- 【四】 第五問、如何にして結業生身もて布施波羅蜜多を滿すや。

し、心に動轉せず。須提黎拏太子の如きは、其二子を以て婆羅門に布施し、次に妻を以て施して、其心轉せざりき。又薩婆達王の如きは、敵國の爲に滅され、身を窮林に竄す、遠國の婆羅門あり、來つて、己に従つて乞はんと欲す。自ら國破れ、家亡び、一身藏竄し、其の幸書を慙れむを以ての故に、遠くより來れども、而も所得なきを見て。婆羅門に語げて言く、「我は是れ薩婆達王なり、新王、人を募つて我を求むること甚だ重し」と。即時に自ら縛して、身を以て之に施し、新王に送つて、大いに財物を得。亦た月光太子の如きは、出で行きて遊觀す。癡人を見て、車を要して白して言さく、「我が身は重く病んで辛苦し懊惱す、太子は嬉遊して獨り自ら歡ぶや。大慈愍念して、願くは救ひ療せられよ」と。太子は之を聞き、以て諸醫に問ふ。醫の言はく、「當に須らく生れてより長大にして、瞋ること無きの人の血髓を須めて塗り、而して之を飲ましむべし、是の如くせば愈ゆ可し」と。太子念じて言はく、「設ひ此の人ありとも、生を貪り壽を惜まん、何ぞ得べけんや。我が身を除くより得べき處なし」と。即ち旃陀羅に命じて、身の肉を除き、骨を破つて髓を出し、以て病人に塗り、血を以て之に飲ましむ。是の如き等の種種に、身及び妻子を施して、而も惜むとなく、草木を棄つるが如し、施す所の物を觀て、緣に従つて有ることを知る。其の實を推求するに、都て得る所なく、一切清淨にして

【一】須提黎拏(は須達拏太子)の訛、譯して好愛太子と云ふ)妻子を施せし因縁。  
 【二】薩婆達王(サハバダ)譯して一切施王と云ふ)即時に自ら縛して、身を以て人に施せし因縁。  
 【三】月光太子血髓を以て癡人に施せし因縁。

涅槃の相の如くし、乃ち無生法忍を得るに至る。是を結業生身に檀(那)波羅蜜(多)を行すと爲す。二八云何か法身の菩薩は檀(那)波羅蜜(多)を行するや。菩薩は末後の肉身に無生法忍を得、肉身を捨てて法身を得。十方の六道の中に於て身に變じ、適應して以て衆生を化し、種種の珍寶衣服飲食を一切に給施し、又た頭目齒鬚鬪財妻子内外の所有を以て盡く以つて布施す。

譬へば 二九 釋迦文佛の如きは、曾て六牙の白象と爲る。獵者便を伺ひ、毒箭を以て之を射る。諸象競ひ至り、來つて獵者を踏み殺さんと欲す。白象は身を以て之を捍り、其の人を擁護し、之を慰むこと子の如し。論して群象を遣り、徐ろに獵人に問ふ、「何故に我を射るや」と。答へて曰く、「我汝が牙を須む」と。即時に六牙を以て、石孔の中に内るるに、血肉俱に出ず、鼻を以て牙を擧げ、獵者に授與す。白象の身なりと雖も、心を用ゆる」と是の如し。當に此の象は畜生の行報に非ることを知るべし。阿羅漢の法

の中には都て此心なし、當に此を法身の菩薩と爲すことを知るべし。三〇 ある時間淨提の人は、昔舊有徳を禮敬するを知らず、言を以て之を化するに未だ得度すべからず。是時、菩薩は自ら其身を變じて、三 迦賴闍羅鳥と作る。是鳥に二の親友あり。一は大象、二は羆にして、共に 必鉢羅樹の下に在つて住せり。自ら相問うて言く、「我等は知らず、誰をか大と爲すべきや」と。象の言く、「我れ

- 【二八】 法身の菩薩は、如何にして布施波羅蜜多を行するや。
- 【二九】 釋迦曾て白象となりて、其の牙を獵人に施し給ひし因縁。
- 【三〇】 象・羆・鳥、禮を教ゆるの因縁。
- 【三一】 迦賴闍羅(カライヤラ)又は迦賴闍羅(カライヤラ)は、迦賴闍羅(カライヤラ)なり。
- 【三二】 必鉢羅(ヒツピラ)は今の菩提樹のこと。

に在つて住せり。自ら相問うて言く、「我等は知らず、誰をか大と爲すべきや」と。象の言く、「我れ

昔、此の樹の我が腹の下に在るを見る、今大なること是の如し。此を以て之を推すに、我應に長たるべし」と。猴言はく、「我曾て地に蹲まり手を以て樹頭を挽く、此を以て之を推すに、我應に長たるべし」と。鳥言はく、「我必鉢羅樹の中に於て、此の樹の果を食するに、子は糞に隨つて出で、此の樹生ずることを得、是を以て之を推すに、我應に最も大なるべし」と。象復た説いて言く、「先生、宿舊を禮して、應に供養すべし」と。即時に、大象は背に獼猴を負ひ、鳥は猴の上に在つて周遊して行く、一切の禽獸は見て之に問ふ、「何を以て此の如くなるか」と。答へて曰く、「此を以て長老を恭敬し、供養す」と。禽獸は化を受け、皆禮敬を行じて民田を侵さず、物の命を害せず。衆人は疑怪らく、「一切の禽獸復た害を爲さず」と。獵師林に入つて見るに、象は獼猴を負ひ、復た鳥を戴き敬を行じ、物を化し、物は皆善を修す。傳へて國人に告ぐ、人各慶して曰く、「時將に太平ならんとす」と。鳥獸にして而も仁あり。人も亦之に郊うて、皆禮敬を行せん。古より今に及で化を萬世に流す。當に知るべし、是を法身の菩薩と爲す。復次に、法身の菩薩は一時の頃に、化して無數の身と作り、十方の諸佛を供養し、一時に能く無量の財寶を化して衆生に給足し、能く一切の上中下の聲に隨つて、一時の頃に善ねく爲に法を説き、乃至佛樹下に坐す。是の如き等の種種を名けて、法身の菩薩の、檀(那)波羅蜜(多)の滿を行すと爲す。復次に、三(檀(那))三種あり、一には物施、二には供養恭敬の施、三には法施なり。云何が物施なる、珍寶・衣食・頭目、

【三】 三種の布施。

髓臍（しゆじ）、是（こ）の如（ごと）き等の内外（ないがい）の所有（しゆりう）、盡（ことごと）く以（もつ）て布施（ふせ）する、是（こ）を物施（もつせ）と名（な）く。恭敬（くきやうせ）施（せ）とは、信心（しんじん）清淨（じやうじやう）にして恭敬（くきやうせ）禮拜（らいはい）將（しやう）送（そう）、迎（ぎやう）逆（ぎやく）讀（よ）誦（じゆ）供養（くきやう）する、是（こ）の如（ごと）き等の種種（しゆじゆ）を名（な）けて恭敬（くきやうせ）施（せ）と爲（な）す。法施（ほふせ）とは、道徳（だうとく）の爲（ため）の故（ゆゑ）に語言（ごごんご）論議（ろんぎ）し、誦讀（じゆどく）講說（かうせつ）して疑（ぎ）を除（のぞ）き、問（とひ）に答（こた）へ、人（ひと）に五戒（ごがい）を授（ま）く。是（こ）の如（ごと）き等の種種（しゆじゆ）を佛道（ぶつだう）の爲（ため）の故（ゆゑ）に施（せ）す、是（こ）を法施（ほふせ）と名（な）く。是（こ）の三種（しゆしゆ）の施（せ）満（まん）つ、是（こ）を檀（だん）〔那（な）〕波羅蜜（はらみ）〔多（た）〕の満（まん）と名（な）く。復次（またつぎ）に、**〔三〕**三事（さんじ）の因縁（いんねん）は檀（だん）〔那（な）〕を生（しやう）ず。一（いち）には信心（しんじん）清淨（じやうじやう）、二（に）には財物（さいぶつ）、三（さん）には福田（ふつた）なり。**〔三〕**心に

三種（しゆしゆ）あり、若（もし）くは憐愍（れんみん）、若（もし）くは恭敬（くきやう）、若（もし）くば憐愍（れんみん）恭敬（くきやう）なり。貧窮（びんきやう）下賤（げせん）及び諸（しよ）の畜生（ちよくしやう）に施（せ）す、是（こ）を憐愍（れんみん）施（せ）と爲（な）し、佛（ぶつ）及び諸（しよ）の法身（ほふしん）の菩薩（ぼさつ）等に施（せ）す、是（こ）を恭敬（くきやう）施（せ）と爲（な）し、諸（しよ）の老病（らうびやう）貧乏（びんぱふ）なる阿羅漢（あらかん）と辟支佛（びやくしふつ）とに施（せ）す、是（こ）を恭敬（くきやう）憐愍（れんみん）施（せ）と爲（な）す。爲（な）す。施物（せぶつ）清淨（じやうじやう）にして、盜（たう）に非（あ）ず、劫（こつ）に非（あ）ず、時（とき）を以（もつ）て施（せ）して、名譽（なごう）を求（もと）めず、利養（りやう）を求（もと）めず、或（ある）時は心（こころ）に従（したが）つて大（たい）に福徳（ふくとく）を得（え）、或（ある）は福田（ふつた）に従（したが）つて大（たい）に功徳（くんとく）を得（え）。第一（だいいち）は心（こころ）に従（したが）ふ、**〔三〕**四等心（しゆとうしん）、念佛（ねんぶつ）三昧（さんまい）の如（ごと）く、身（み）を以（もつ）て虎（こ）に施（せ）す、是（こ）の如（ごと）きを、心（こころ）に従（したが）つて大（たい）に功徳（くんとく）

**〔四〕** 布施を生ずる三事の因縁を説く。  
**〔五〕** 三種の布施心。  
**〔六〕** 劫とは劫掠の義なり。  
**〔七〕** 四等心とは、慈・悲・喜・捨の四無量心のことなり。所縁の境に従へて無量といひ。能起の心に従へて等といふ。蓋し平等に前の四心を起すを以てなり。  
**〔八〕** 念佛三昧とは、一心に佛の相好を觀じ、或は一心に法身の實相を觀じ、或は一心に佛名を稱ふる行法を修するをいふ。是れ因行の念佛三昧なり。また心深く禪定に入りて、或は佛身を現前し、或は法身の實相に如六をも念佛三昧といふ。是れ果成の念佛三昧なり。而して因行の念佛三昧は之を「修す」といひ、果成の念佛三昧は、之を「發得す」といふ。

第一（だいいち）は心（こころ）に従（したが）ふ、**〔三〕**四等心（しゆとうしん）、念佛（ねんぶつ）三昧（さんまい）の如（ごと）く、身（み）を以（もつ）て虎（こ）に施（せ）す、是（こ）の如（ごと）きを、心（こころ）に従（したが）つて大（たい）に功徳（くんとく）

を得しと名く。(二)元二種の福田。福田に二種あり。一には憐愍福田、二には恭敬福田なり。憐愍福田は能く憐愍の心を生じ、恭敬福田は能く恭敬の心を生ず。阿輸伽王の土を以て佛に上るが如し。復次に、物施の中に一の女人の如きは、酒に酔ひ没心して、七寶の瓔珞を以て、迦葉佛の塔に布施し、福德を以ての故に三十三天に生る。是の如きの種種を名けて物施と爲す。

問うて曰く、檀(那)を捨財と名く。何を以てか一捨つる所なきの法を具足すと言ふや。答へて曰く、檀(那)に二種あり、一には出世間、二には不出世間なり。今は出世間の檀(那)の無相なることを説く。無相の故に捨つる所なし、是の故に「捨つる所なきの法を具足す」と言ふ。

復次に、財物は得べからざるが故に、名けて「捨つる所なし」と爲す。是の物の未來と過去とは空なり、現在、分別には一定の法なし。是を以ての故に「捨つる所なし」と言ふ。復次に、行者財を捨つる時、心に念すらく

「此の施は大に功德あり」と。是に倚つて、憍慢、愛結等を生ず。是を以ての故に「捨つる所なし」と言ふ。捨つる所なきを以ての故に憍慢なし、憍慢なきが故に愛結等生ぜず。復次に、施者に二種あり、一には世間の人、二には出世間の人なり。世間の人には能く財を捨て、(又)能く施を捨つ。何となれば財物も施心も俱に得べからざるを以てなり。是故に「捨つる所なきの法を具足す」と言ふ。

- 【二】 二種の福田。
- 【三】 醉女七寶の瓔珞を迦葉佛に布施して、三十三天に生ぜし因縁。
- 【四】 第六問、檀那とは捨財の義なり。然るに捨る所なきの法を具足すといふは何故なるか。
- 【五】 愛結とは、欲愛の煩惱の義なり。

復次に、檀〔那〕波羅蜜〔多〕の中に、「財と施と受者との三事は得べからず」と言ふ。

問うて曰く、(三) 三事和合するが故に名けて檀〔那〕と爲す。今三事得べからずと言ふ、云何ぞ「檀〔那〕波羅蜜〔多〕を具足し滿つ」と名くるや。今は財あり、施あり、受者あり、云何ぞ三事得べからざるや。施す所の鬘の實有なるが如し。何となれば鬘に名あれば則ち鬘の法あり、鬘の法なくんば亦鬘の名なし。名あるを以ての故に應に實に鬘あるべし。

復次に、鬘に長あり、短あり、麤細白黒黃赤あり。因あり、緣あり、作あり、破あり、果報あり、法に隨つて心を生ず。十尺を長と爲し、

五尺を短と爲し、縷の大なるを麤となし、縷の小なるを細と爲す。染むるに隨つて色あり、縷あるを因を爲し、織る具を緣と爲す。是の因緣、和合

の故に鬘と爲る。人功を作と爲し、人の毀すを破と爲し。寒暑を繋ぎ、身體を蔽ふを果報と名く。人之を得れば大に喜び、之を失へば大に憂ふ。之を以て施す、故に福を得て

道を助く。若くは盜し、若くは劫し、之を都市に繋せば、死して地獄に入る。是の如き等の種種の因緣あるが故に、此の鬘あることを知る、是を鬘法と名く。云何が「施物は得べからず」と言ふや。答へ

て曰く、汝は名あるが故に是の事あり」と言ふも、然らず。何を以てか之を知るや。(三) 名に二種あり。

不實の名は、一草あり、朱利と名くるが如し。(三) 朱利草は亦盜せず、劫せず、實に賊に非ず、而

【三】 第七問、財と施と受者との三事不可得ならば、如何ぞ布施波羅蜜多を具足し滿すといふや。  
【四】 名に實と不實との二種あり。  
【五】 朱利(チヤウリ)は、譯して賊と云ふ。

も名けて賊と爲す。又兎角龜毛の如きも、亦但名のみあつて實なし。髣は兎角龜毛の如く無ならずと雖も、然も因縁の會するが故に有り、因縁散ずるが故に無し。林の如き、軍の如きは是れ皆名あつて實なし。譬へば木人は人の名ありと雖も、其人法は求むべからざるが如し。髣の中に名ありと雖も、亦髣の眞實を求むべからず。髣は能く人の心念の因縁を生じ、之を得れば便ち喜び、之を失へば便ち憂ふ。是を念の因縁と爲す。心の生ずるには二の因縁あり、實より生ずる有り、不實より生ずる有り。夢中に見る所の如き、水中の月の如き、夜桜樹を見て、謂つて人と爲すが如き、是の如きは不實の中より能く心をして生ぜしむと名く。是の縁は不定なり、心生じて有るが故に、便ち是ありと言ふべからず。若し心の生ずるは因縁の故に有り、更に實有を求むべからず。眼に水中の月を見て、心生じて是を月と謂ふが如し。若し心に從つて便ち是月を生ぜば、則ち復眞の月なし。復次に 三二 有に三種あり、一には相待有、二には假名有、三には法有なり。相待とは、長短彼此等の如し。實には長短なく、亦彼此なし。相待を以ての故に名のみ有り。長は短に因つて有り、短は亦長に因る。彼は亦此に因り、此は亦彼に因る。若し物東に在れば、則ち以て西と爲し、西に在れば則ち以て東と爲す。一物未だ異ならず、而も東西の別あり。此れ皆名あつて實なきなり。是の如き等を名けて相待有と爲す。是の中に實法なく、色・香・味・觸等の如くならず。假名有とは、酪の如きは色・香味・觸の四事なり、因縁合するが故に、假に名けて酪と爲す。有な

【三六】 有に三種あり。

りと雖も同じからず。因縁の法は、有にして無なりと雖も、亦た兎角龜毛の無なるが如くならず。但

因縁合するを以ての故に假に有と名く、酪麩も亦是の如し。  
復次に、毛 極微の色香味觸あり、故に毛分あり、毛分の因縁の故に毛あり、毛の因縁の故に毘

り、毘の因縁の故に糞あり、糞の因縁の故に麩

あり、麩の因縁の故に衣あり。若し極微の色香味

味觸の因縁なくんば亦毛分なし、毛分なきが故

に亦毛なく、毛なきが故に亦毘なく、毘なきが

故に亦糞なく、糞なきが故に亦麩なく、麩なき

が故に亦衣なきなり。

問うて曰く、云亦必ずしも一切の物は、皆因

縁の和合によるが故に有なるにあらず。微塵の

如きは至つて細なるが故に分なし、分なきが故

に和合なし。麩は麩なるが故に破すべきも、微塵の中

に至つて微なるも實なく、疆ひて之が名と爲す。何となれば麩細は相待なり、麩に因るが故に細あり、

是の細にも亦應に細あるべければなり。復次に、若し極微の色あれば則ち十方の分あり。若し十方の

【一】極微とは、有爲法の邊に  
よれば極微に三微あり。一、色  
微の微、二、色聲の微、三、聲微  
これより、一は色聲香味觸の  
五境と、眼耳鼻舌身の五根と  
の十色の最極微分、即ち舊譯  
家の所謂離塵なり。二は前の  
色等の極微の集合して、一の  
物質を形成せし上の最極微分  
なり。凡そ色等の十色は實の  
色にぞも、決して單獨に生ず  
るものにあらず、生ずる時は  
必ず彼此相依して俱生するを

【二】第八問、一切の物の中に  
は因縁和合によるざるものあ  
り、微塵の如きは極めて細微  
なり、如何ぞ之を破すること  
を得んや。

常とす。光能に假色といへ  
るは即ちこれなり。一は眼に  
見ざる所の最極微をいふ。前  
の色等の極微が上下四方の六  
方と、中心と、七微集聚せるを  
三微といひ、之を眼見上  
の最極微と爲す。

分あれば、是を名けて極微と爲さず。若し十方に分なければ、則ち名けて色と爲さず。復次に、若し極微あれば、則ち應に虚空の分齊あるべく、若し分あれば則ち極微と名けず。復次に、若し極微あれば是中に色香味觸ありて分を作す。色香味觸分を作さば、是を極微と名づけず。是を以て微塵を推求するに則ち得べからず。經に言へるが如し、「色の若くは麤、若くは細、若くは内、若くは外を、總じて之を觀するに、無常・無我なり。微塵ありと言はず」と。是を分破の空と名づく。復た空を觀すること有り、是麤は心に隨ふ。坐禪人の如きは、麤を觀するに或は地と作し、或は水と作し、或は火と作し、或は風と作し、或は青とし、或は黃とし、或は白とし、或は赤とし、或は都て空とす。十一切人の觀の如し。佛・普闍闍山の中に在せしが、比丘僧と俱に王舍城に入り、道中に大水を見る。佛、水上に於て 尼師壇を敷いて坐し、諸の比丘に告げたまはく、「若し比丘、禪に入れば心自在を得て、能く大水をして地と作らしめ、即ち實の地と成す。何となれば是水の中には、地の分あるを以てなり。是の如く、水火・金・銀、種種の寶物も即ち皆實と成す。何となれば是の水中に皆其の分あればなり」と。

復次に、四二 一の美色の如き、姪人は之を見て以て淨妙と爲し、心に染著を生ず。不淨觀の人之を視

【元】 佛、水中に坐具を敷いて坐し給ひし因縁。

【四〇】 元本明本ともに、水は本となり居れども、予の實地に王舍城と普闍闍山の間を踏査せし經驗によれば、水となす方妥當なるが如し。

【四二】 尼師壇(Nisidana)は坐具と譯す。但し坐臥の時、地に敷て以て身を護り、又臥具の上に布きて臥具を護る具なり。故に總稱の時に見ゆる「具」と思ふは誤なり。

【四三】 好戀は心に在つて存す。

れば、種種の惡露れ、一の淨處なし。等しく婦なるも、之を見て妬み、瞋つて憎惡し、目に見んと欲せず、以て不淨と爲す。姪人は之を觀て樂と爲し、妬人は之を觀て苦と爲し、淨行の人は之を觀て得道し、無像の人は之は觀て適莫する所なく、土木を見るが如くす。若し此美色實に淨ならば、四種の人の觀は皆應に淨を見るべく、若し實に不淨ならば、四種の人の觀は皆應に不淨なるべし。是を以ての故に好醜は心に在つて、外に定まれると無きを知る。空を觀するも亦是の如し。(三) 復次に、是觀の中に十八空の相あり、故に之を觀すれば便ち空なり。空なるが故に不可得なり。是の如く、種種の因縁により、財物は空にして決定して不可得なり。云何が施人は不可得なりや。觀の如きは、因縁和合の故に有り、分分に之を推すに觀は不可得なり。施者も亦是の如く、四大、虚空を圍むを名けて身と爲し、是の身識の動作し、來往し、坐起するを、假に名けて人と爲す、分分に之を求むるに亦不可得なり。

復次に、一切の衆界入の中に、我は不可得なり。我、不可得なるが故に、施人も不可得なり。何となれば我に種種の名字あり、人天男女・施人・受人・苦を受くる人・樂を受くる人・畜生等なり。而も是は但名の有つて實法は不可得なり。

問うて曰く、若し施者不可得ならば、云何が菩薩ありて、檀那・波羅蜜多を行するや。答へて

【四三】 觀中に十八空相あり。  
 【四四】 衆界入とは、五蘊と十八界と十二處のこと、此の衆界入不可得の故に、我も不可得なり。  
 【四五】 第九問、若し施者不可得ならば、菩薩の布施波羅蜜多を行するは何故なるか。

曰く、因縁和合の故に名字あり、屋の如く、車の如く實法は不可得なり。

問うて曰く、奥いかん云何が不可得なるや。答へて曰く、上に「我聞けり、一時」の中に、已に説くが如し。今當に更に説くべし。佛は六識を説きたまふ。眼識及び眼識相應の法は、共に色を縁じて、屋舎城廓種種の諸名を縁せず、耳鼻舌身識も亦是の如し。意識及び意識相應の法は、眼を知り、色を知り、眼識を知り、乃至意を知り、法を知り、意識を知る。是識の縁する所の法は、皆空にして無我なり。そは生滅するを以てなり、自在ならざるを以てなり、無爲法の中に亦我を計せず、苦樂を受けざるを以てなり。是中に若し強いて我法あらば、應當に第七識ありて我を識るべし。今は爾らず、是を以ての故に無我なることを知る。

問うて曰く、何を以てか無我なることを識るや、一切の人は、各自身の中に我を生計し、他身の中に我を生せず。若し自身の中に我なく、而も妄に見て我と爲さば、他身の中の無我も、亦應に他身に於いて、妄に見て我と爲すべし。復次に、若し内に我なくして、色と識と念念に生滅せば、云何が分別して、是の色の青黄赤白を知らん。復次に、若し我なくんば、今現在の人の識は、漸漸に生滅し、身命の斷する時は亦盡く。諸行の罪福は誰にか隨ひ、誰か受け、誰か苦樂を受け、誰か解脱する者ぞ。是の如き種種の因縁の故に、有我なることを知る。答へて曰く、此は俱に難あり。若し他身に於て我を生計せば、復當に言ふべし、「何

【四〇】 第一〇問、我の不可得なる理由如何。  
【四一】 第一一問、云何にして無我を識ることを得るや。

を以てか自身の中に我を生計せざるべしと。復次に、五衆の因縁より生ずるが故に、空にして我なし。無明の因縁より 二十の身見を生ず、是の我見は、自ら五陰に於て、相續して生ず。此の五衆より縁生ずるを以ての故に、即ち此の五衆を計して我と爲す、他身上に在らず、其の計を以ての故なり。復次に、若し神あらば彼は我ある可し。汝は未だ神の有無を了せずして、彼の我を問ふ。其は猶ほ人の兎角を問ふに、馬の角に似たりと答ふるが如し。馬の角、若し實に有らば、以て兎角を證すべし、馬の角すら猶尙未だ了せずして、以て兎角を證せんと欲す。復次に、自ら身に於て、我を生ずるが故に、便ち自ら神ありと謂ふ。汝神は遍しと言はば、應に他身を計して我と爲すべし。是を以

【四八】二十身見の名目左の如し。

(一) 我なり。  
五 anāya-vā-tūna 我は知

(一) *Ekānam-ātmānam-ātmīnat*

(二) 覺を有す。  
*anāya-sarvāna* 知覺は

色は我なり、上の如し。

(三) 是れ我が所有なり。  
*anāya-ātmāna* 我は知

(二) *Ekavān-ātmāna-ātmāna-  
ravad* 我に色あり、莊嚴の

(三) 覺の中にあり。  
*anāstāna-ātma* 意志性

如し。

(四) 向は是れ我なり。  
*anāstāra-vā-ātma* 我は

(三) *Anāya-vā-mūlā-hūm-  
pūritā*

(五) 意志性向を有す。  
*anāya-vā-samskāra*

(二) *Ekavān-ātmāna-  
ravad* 色は是れ我が所有、僅

(六) 性向は是れ我が所有なり。  
*anāya-kāleśi-vā-ātma*

僕の如し。

(七) 意志性向の中にあり。  
*anāstāra-vā-ātma* 我は

(四) *Ekavān-ātmāna-  
ravad* 我は色の中にあり、器の如

(八) 識を有す。  
*anāya-vijñāna* 我は認

し。

(九) 覺の中にあり。  
*anāya-ātma* 知覺は是れ

(五) *Anāya-ātma* 我は是れ感

(一〇) 覺を有す。  
*anāya-ātma* 我は認

(六) *Anāya-vā-ātma* 我に感

(一一) 是れ我なり。  
*anāya-ātma* 我は認

覺あり。

(一二) 識を有す。  
*anāya-vijñāna* 我は認

(七) *Anāya-vedāna* 感覺は

(一三) 是れ我が所有なり。  
*anāya-ātma* 我は認

是れ我が所有なり。

(一四) 我は認

(八) *Anāya-ātma* 我は感

(一五) 我は認

覺の中にあり。

(一六) 我は認

(九) *Anāya-ātma* 知覺は是れ

(一七) 我は認

ての故に、「自身の中には、我的心を生じ計し、  
他身に於ては生ぜざるが故に、神あることを知  
る」と言ふべからず。

識の中にあり。

【四九】 習は煩悩の餘氣にして  
普通には胃氣と熟字す。

【五】 前鬼後鬼、他身に於いて  
我身を生じ、死人を誣ひし因  
縁。

復次に、有人は、他物の中に於いて我心を生ず。外道の坐禪人の如きは、地一切入観を用ふる時、  
地を見れば則ち是れ我、我は則ち是れ地なり。水火風空も亦是の如し。顛倒の故に他身に於て亦我を  
計す。復次に、吾有時は、他身に於て我を生ず。一人あり、使を受けて遠く行き、獨り空舎に宿する  
に、夜中に鬼あり、一の死人を擔ぎ來つて、其の前に著く。復た一鬼あり、逐ひ來つて前の鬼を瞋り  
罵る、「是れ死人は是れ我が物なり、汝何を以てか擔ぎ來る」と。先の鬼の言く、「是は我が物なり、我  
自ら持ち來れり」と。後の鬼の言く、「是れ死人は實に我れ擔ぎ來れり」と。二鬼各一手を捉へて是を  
爭ふ。前の鬼の言く、「此中に人あり、問ふべし」と。後の鬼は即ち問ふ、「是れ死人は誰か擔ぎ來れる  
や」と。是人思惟すらく、「此二鬼は力大なり、若し實語するも、亦當に死すべく、若し妄語するも。  
亦當に死すべし、俱に死を免れず、何ぞ妄語を爲さんや」と。言く、「前鬼擔ぎ來れり」と。後の鬼は  
大に瞋り、人の手を捉へて、拔出して地に著き、前の鬼は死人の一臂を取り、之を拵て即ち著く。  
是の如く、兩臂・兩脚・頭脊・身を舉げて皆易ゆ。是に於て、二鬼は共に易ゆる所の人身を食し、口を  
拭いて去る。其人思惟すらく、「我が父母の生ずる身は、眼のあたり二鬼食ひ盡くせり。今我が此の

身は、盡く是れ他の肉なり。我は今定んで身ありと爲んや、身なしと爲んや。若し以て有りて爲ば、

盡く是れ他の身なり。若し以て無しと爲ば、今現に身あり」と。是の如く思惟し、其の心迷悶する

こと、譬へば狂人の如し。明朝路を尋ねて去り、前の園土に到る。佛塔あり、衆僧に見えて、餘事を

論せず、但己の身ありと爲んや、無しと爲んや」と問ふ。諸の比丘は問ふ、「汝は是れ何人ぞや」と。

答へて言く、「我も亦自ら是れ人なるか、人に非るかを知らず」と。衆僧の爲に廣く上の事を説く。諸

の比丘の言く、「此の人は自ら無我なることを知る、得度すべきこと易し」と。

之に語つて言く、「汝が身は、本より已來、恒に自ら無我なり、適今

あるに非ざるなり。但四大和合するを以ての故に、計して我が身と爲す、

汝が本身の如きは今と異なること無し」と。諸の比丘は之を度し、道の爲に

諸の煩惱を斷じ、即ち阿羅漢を得たり。是を有と爲す時は、他身も亦計

して我と爲す。彼此あるを以ての故に神ありと謂ふ可らず。復次に、是神の實性は決定して不

可得なり。若くは常相・非常相・自在相・不自在相・作相・不作相・色相・非色相・是の如き等の種種は皆不

可得なり。若し有相なれば則ち有法、無相なれば則ち無法なり。神は今無相なれば則ち神なきことを

知る。若し神は是れ常ならば、殺罪あるべからず。何となれば身は殺す可くんば常に非らず、神は殺

すべからずんば、常なるを以てなり。

【五】 神我の實性の不可得なる所以。

【五】 此に所謂神とは、常住不變の靈魂を指せるにて、心理上に謂ふ所の精神にもあらず神にもあらざるなり。

問うて曰く、垂しん神じんは常じょうなるが故ゆゑに殺ころす可べからずと雖いへども、但ただ身を殺ころせば則すなはち殺罪せつざいあり。答こたへて曰く、若もし身を殺ころして殺罪せつざいあらば、毗尼びにの中に言いはく、「自殺じせつには殺罪せつざいなし、罪福ざいふくは他たを惱なやまし、他たを益やくするより生しやうす」と。自みづから身を供養くわうやうし、自みづから身を殺ころすが故ゆゑに、罪つみあり福ふくあるには非あらず。是これを以もつての故ゆゑに毗尼びにの中に、「自みづから身を殺ころすは殺罪せつざいなく、愚癡ぐぢ・貪欲こんよく・瞋恚しんくいの咎とがあり」と。若もし神常しんじょうならば死しすべからず、生しやうすべからず。何なんとなれば汝等なんたらが法ほふによれば神しんは常じょうなり、一切いっさい五道ごだうの中に遍満へんまんす、云何いかにんが死し生しやうあらん、死しを「此この處ところに失しうす」と名なげ、生しやうを「彼かの處ところに出いづ」と名なく。是これを以もつての故ゆゑに「神しんは常じょうなり」と言いふことを得えず。若もし神常しんじょうならば、亦また應まに苦樂くらくを受うくべし。何なんとなれば苦來くきたれば則すなはち憂うれひ、樂らく至いたれば則すなはち喜よろこぶ。若もし憂喜うれきの爲ために變へんせらるれば則すなはち常じょうに非あらず、若もし常じょうならば應まに虚空こくうの如ごとくして、雨あめも濕うるほすこと能かはず、熱あつも乾かかすこと能かはず。亦また今世こんぜ後世ごぜなく、後世ごぜの生しやう、今世こんぜの死しあるべからず。若もし神常しんじょうならば、則すなはち常じょうに我見がけんあつて涅槃ねはんを得えべからず。若もし神常しんじょうならば、則すなはち起おこること無なく、滅めつすること無なく、忘失まうしつすること有あるべからず。其それ神しんなく、識しきは無常むじやうなるを以もつての故ゆゑに、忘まうあり失しうあり。是この故ゆゑに神しんは常じょうに非あらず。是かの如ごとき等の種種しんしゆの因縁いんげんにより、神しんは常相じやうじやうに非あることを知しるべし。若もし神しんは無常むじやうの相さうならば、亦また罪つみなく福ふくなし。若もし身無常みむじやうならば神しんも亦また無常むじやうなり、二事にじ俱くに滅めつすれば則すなはち斷滅だんめつの邊へんに墮だす。斷滅だんめつに墮だすれば、則すなはち後世ごぜに到いたつて罪福ざいふくを受うくる者ものなし。若もし斷滅だんめつして則すなはち涅槃ねはんを得えば、結けつ

【五】 第二二問、神は常住なり、殺す可らされども、身を殺せば殺罪あらん。  
 【六】 これ斷見外道の見解にして、中道の見にあらず。

を斷するを須むず、亦後世の罪福の因縁を用ゐざるなり。是の如き等の種種の因縁により、神は無常に非ることを知るべし。若し神、自在の相、作の相ならば、則ち應に得んと欲する所に隨つて皆得べし。今欲する所更に得ず、欲する所に非ずして更に得。若し神自在ならば、亦惡行を作して、畜生惡道の中に墮すること有るべからず。

復次に、一切衆生は皆苦を離はず、誰か當に樂を好んで更に苦を得べけんや。是を以ての故に神は自在ならず、亦自作ならざることを知る。又人の罪を畏るるが故に、自ら強いて善を行するが如し。若し自在ならば何を以てか罪を畏れて、自ら強いて福を修せんや、又諸の衆生は意の如くすることを得ず、常に煩惱、愛縛の爲に牽かる。是の如き等の種種の因縁により、神は自在ならず、自作ならざることを知る。若し神自在ならず自作ならずんば、是れ神の相なしと爲す。汝が言ふ我は即ち是れ六識にして、更に異事なし。

復次に、若し不作ならば、云何ぞ闍羅王は罪人にむかひ、「誰か汝をして此の罪を作さしむる者ぞ」と問へるに、罪人答へて、「是れ我が自ら作せるなり」と言はんや。是を以ての故に自作にあらざるに非ることを知る。若し神は色相ならば是の事は然らず、何となれば一切の色は無常なるを以てなり。

問うて曰く、靈人は云何ぞ、「色は是れ我の相」と言ふや。答へて曰く、異人有の言く、神は心中に

【釋】 第一三問、人の色を以て我相といふ理由如何。  
【英】 神は心中にありて、芥子の如く豆の如し等と主証する學說。

在つて、微細なること芥子の如く、清淨なるを名けて淨色身と爲す」と。更に有人の言く、「麥の如し」と。有が言く、「豆の如し」と。有が言く、「半寸」と、有が言く、「一寸にして、初めて身を受くる時、最も前に在つて受く。譬へば像の骨の如く、其身と成るに及んでは、像は已に莊なるが如し」と。有が言く、「大小は人身に隨ふ、死し壞する時、此も亦前に出づ」と。此の如き事は皆爾らざるなり。何となれば一切の色は、四大の所造にして、因縁より生じ、無常なるを以てなり。若し神は是れ色ならば、色は無常なるを以て、神も亦無常なり。若し無常ならば上に説く所の如し。

問うて曰く、身に二種あり、麤身と及び細身なり。麤身は無常なれども、細身は是れ神にして、世世常に去つて五道の中に入る。答へて曰く、此の細身は不可得なり、若し細身あらば、應に處の得べき所あるべし。五藏四體の如き、一一の處中に求むれども皆不可得なり。

問うて曰く、此の細身は微細にして、初め死する時は已に去り、若し活する時は則ち求むるを得可からず、汝云何が能く見ん。又此の細身は、五情の能く見、能く知るところに非ず、唯、神通の聖人あつて、乃ち能く見るとを得。答へて曰く、若し爾らば無と異なると無し。人の死する時の如きは、此の生陰を捨てて中陰の中に入る。是の時今世の身滅し、中陰の身

【五七】 第一四問、身に麤身と細身とあり、神なるは細身にして、生生世世、五道の中に入る、云何ぞ神は不可得なりといふ可けんや。

【五八】 第一五問、此の細身は極めて微細なるが故に、凡人の五情もて見ること能はざる所なれども、神通力ある聖人は則ち能く之を見るなり、云何ぞ無しといふ可けんや。

【五九】 此の生陰を捨てて中陰の中に入るに前後なし。

を受く。此に前後なく、滅する時は即ち生ず。譬へば黠印を泥に印するに、泥中に印を受くるや、印は即時に壞するが如し。成と壞とは一時にして亦前後なし。是時中陰中有を受け、此中陰を捨てて生陰の有を受く。汝が言ふ細身は即ち此の中陰なり、中陰の身は出なく入なし。譬へば燈を然すに、生滅相續して、常ならず、斷ならざるが如し。佛の言はく、「一切の色衆は、若くは過去・未來・現在、若くは内、若くは外、若くは塵、若くは細、皆悉く無常なり。汝が神の微細の色も、亦應に無常にして斷滅すべし」と。是の如き等の種種の因縁により、神は色相にも非ず、無色相にも非ることを知るべし。無色とは、四衆及び無爲なり。四衆は無常なるが故に、自在ならざるが故に、因縁に屬するが故に、是れ神なるべからず。三無爲の中に神あることを計せず、受くる所なきが故なり。是の如き等の種種の因縁により、神は無色相に非ることを知る。是の如く天地の間、若くは内、若くは外、三世十方に神を求むるに不可得なり。但十二入和合して六識を生じ、三事<sup>(一)</sup>和合するを觸と名く。觸は受思想等の心數

【六二】 中陰の身には出入なし、燃燈相續の如し。  
 【六一】 四衆とは、受(感覺)と、想(知覺)と、行(意志性向)と、識(認識)の四蘊をいふ。  
 【六三】 三無爲とは、擇滅と、非擇滅と、虚空となり。(一)擇滅無爲とは、智慧の簡擇の力に依て煩惱を斷する處に顯ばるる一種の滅體なり。此の滅を稱して涅槃をいふ。(二)非擇滅無爲とは、智慧の簡擇力によるにあらず、但生法の因縁を缺く處に顯ばるる一種の滅體をいふ。要するに所斷の煩惱に就て寂滅不生の無爲法の顯ばるるが擇滅にして、縁を缺きし爲め寂滅不生の無爲法の顯ばるるが非擇滅なり。(三)虚空無爲とは、其の相恰も世間の方に向つても礙ふるともなく、礙へらるゝこともなきものなり。  
 【六四】 三事とは、根(感覺)と、境(對象)と、識(認識)との三

法を生ず。是の法の中に、無明の力の故に身見を生じ、身見生ずるが故に神ありと謂ふ。是の身見は苦諦の苦法智、及び苦比智を見れば則ち断ず、断する時は則ち神あることを見ず。汝は先に若し内に神色なくんば、識よ念念に生滅す、云何が分別して色の青黄赤白を知らん」と言へり。汝、若し神あるも獨り知ること能はず、要す眼識に依るが故に能く知る。若し爾らば神は無用なり。眼識よ色を知り、色の生滅は生に相似し滅に相似す。然る後に心中に有法の生ずるを名けて念と爲す。是の念の相は有爲法にして、滅し過ぎ去ると雖も而も能く知る。聖人の智慧力の如きは、能く未來世の事を知る。念念も亦是の如く、能く過去の法を知る。若し前の眼識滅し、後の眼識生せば、後の眼識は轉た利にして力あり。色は覺有にして住せずと雖も、念力利なるを以ての故に能く知る。是事を以ての故に、念念生滅して無常なりと雖も、能く分別して色を知る。又汝は「今現在の人の識は新新に生滅し、身命断する時は亦盡く。諸行の罪福は誰にか隨ひ、誰か受け、誰か苦樂を受け、誰か解脱する者ぞ」と言ふ。今當に答ふべし。汝は今未だ實道を得ず。是れ人は諸の煩惱、心を覆ひ、生ずる因縁の業を作す。畜死する時、五陰の相續より、五陰を生ずること、譬へば一燈を以て更に一燈を然すが如し。又穀子の生ずるが如きは、

なり。此の三事を和合せしむる心の作用を觸といふ。故に此の觸は感覺認識の對象としての、所觸の物質にあらずして、能觸の心的作用なりと知るべし。

【六五】 死する時は、次第に相續する五陰を、一燈を以て他燈を燃やすに譬ふ。  
【六五】 後身の出生を穀子の生ずる因縁に譬ふ。

なり。此の三事を和合せしむる心の作用を觸といふ。故に此の觸は感覺認識の對象としての、所觸の物質にあらずして、能觸の心的作用なりと知るべし。

三因縁あり、地と水と種子となり。後世の身の生ずるも亦復是の如し。身あり、有漏業あり、結使あり、三事の故に後身生ず。是の中、身業の因縁は、斷す可らず、破すべからず、但諸の結使のみ斷すべし。結使斷する時は殘身殘業ありと雖も、解脫するを得べし。穀子あり地あれども、水なきが故に生ぜざるが如し。是の如く、身あり業ありと雖も、愛結の水潤にまじ無ければ則ち生ぜず、是を名けて、「神なしと雖も亦解脫を得」と名く。無明の故に縛し、智慧の故に解く、則ち神は用なきなり。復次に、是の名色の和合を假に名けて人と爲す、是の人は諸の結の爲に繋がるれども、無漏の智慧の爪を得て、此の諸の結を解く。是の時、「人は解脫を得」と名く。繩を結び、繩を解くが如し。繩は即ち是れ結なり。結に異法なく、世界の中に繩を結び、繩を解くことを説く。名色も亦是の如し。突、名色の二法和合するを假に名けて人と爲す。是の結使は名色と異ならず、但名けて、「名色結び」と爲す。罪福を受くるも亦是の如し。一法の人の爲に實となるものなしと雖も、名色の故に罪福の果を受け、而も人の名を得。譬へば車に載する物の如きは、一一之を推すに竟に車の實なし。然も車は物を載するの名を受く。人の罪福を受くるも亦是の如く、名色、罪福を受けて、而も人其名を受く、苦樂を受くるも亦是の如し。是の如き種種の因縁により、神は不可得なり。神は即ち是れ施者、受者も亦是の如し。汝は神を以て人と爲す、是故に施人も不可得なり、受人も不可得なり。是の如きの種種の因縁

【突】名色二五蘊の總稱にして、名とは人類構成の精神的成分、色とは物質的要素なり。

より、是を「財物・施人・受人の不可得」と名く。

問うて曰く、若し諸佛は、但如實に法相を説き、諸法に於て所破なく、所滅なく、所生なく、所作なくんば、何を以ての故に三事破折して、不可得なりと言ふや。答へて曰く、凡夫人の如きは施者を見、受者を見、財物を見る、是を顛倒の妄見と爲す。世間に生じて樂を受け、福盡くれば轉じて還る。是の故に佛は菩薩をして實道を行じ、實の果報を得せしめんと欲したまふ。實の果報とは則ち是れ佛道なり。佛は妄見を破らんが爲の故に、三事は不可得にして、實に所破なしと言ふ。何となれば諸法は本より已來、畢竟空なるを以てなり。是の如き等の種種の無量の因縁は不可得なり。故に名けて、「檀」「那」「波羅蜜」多」を行じ、能く六波羅蜜「多」を生せば、是時を名けて、「檀」「那」「波羅蜜」多」を具足し満す」と名く。

云何が布施は檀、那、波羅蜜、多」を生するや。檀、那」に上中下あり、下より中を生じ、中より上を生ず。若し飲食、蠶物を以て、軟心にして布施せば、是を名けて下と爲す。施を習ひ轉た増して、能く衣服寶物を以て布施せば、是を下より中を生ずと爲す。施心轉た増して、愛惜する所なく、能く頭目血肉國財妻子を以て、盡く用ゐて布施する、是を中より上を生ずと爲す。釋迦牟尼佛の如きは、初め發心の時大國王と作り、名けて光明と曰ふ。佛道を

復次に、若し菩薩の檀、那、波羅蜜、多」を行

檀、那」波羅蜜、多」を具

檀、那」

檀、那」

檀、那」

檀、那」

檀、那」

檀、那」

檀、那」

檀、那」

檀、那」

求索して少多布施し、轉じて後身を受けて陶師と作り、能く澡浴の具及び石蜜の漿を以て、異なる

釋迦牟尼佛及び比丘僧に供養す。其の後、轉じて大長者の女と作り、燈を以て、橋陳若佛に供養す。

是の如き等の種種を名けて、菩薩の下の布施と爲す。釋迦牟尼佛の如きは、本身は長者の子と作りた

まみ、衣を以て布施し、大音聲佛に布施す。佛滅度の後、九十の塔を起

て、後更に身を轉じて大國王と爲り、七の寶蓋を以て、師子佛に供養す。

後復た身を受けて大長者と作り、妙因佛に上好の房舎、及び七寶の妙華を

供養す。是の如き等の種種を名けて菩薩の中の布施と爲す。釋迦牟尼佛の

本身の如きは、仙人と作り、橋陳若佛の端正殊妙なるを見て、便高山の

上より自ら佛前に投じ、其の身安隱にして一面に在つて立つ。又衆生

喜見菩薩の如きは、身を以て燈と爲す。日月光德佛を供養す。是の如

き等の種種の身命を惜まらずして諸佛を供養する、是を菩薩の上の布施と爲

す。是を菩薩の三種の布施と名く。若し初めて佛心を發してより、衆生に布施する有るも亦復是の如

く、初めに飲食を以て布施し、施心轉た増して能く身の肉を以て之に與へ、先づ種種の好漿を以て布

施し、後、心轉た増して能く身の血を以て之に與へ、先づ紙墨經書を以て布施し、及び衣服飲食

(七四) 四種の供養を以て法師を供養し、後、法身を得て、無量の衆生の爲に種種の法を説いて法施を爲

橋陳若佛に供養す。  
七〇 橋陳若佛に供養す。

【六〇】 橋陳若佛 (Kauṅṅya-buddha)

【七〇】 師子佛 (Sinhā-buddha)

【七二】 衆生喜見菩薩 (Arasattī-vapriyatāraṣṭrī)

【七三】 日月光德佛 (Candrasūryaprabhākarī)

【七四】 四種とは、僧侶の生活に必要ななる飲食と衣服と醫藥と臥具とをいふ。今は後の二種を略したるなり。

す。是の如き等の種種は、檀(那)波羅蜜(多)の中より檀(那)波羅蜜(多)を生ず。

(毛)云何が菩薩の布施は 尸羅波羅蜜(多)を生ずるや。菩薩思惟すらく、「衆生は布施せざるが故

に、後世貧窮なり。貧窮を以ての故に劫盜の心生ず。劫盜を以ての故に殺害あり、貧窮を以ての故に

色に於て足らず。色足らざるが故に邪淫を行す。又貧を以ての故に人に下賤せられ、下賤なれば怖畏

して妄語を生ず。是の如き等の貧窮の因縁の故に十の不善道を行す。若し布施を行すれば、生れて財

物あり、財物あるが故に非法を爲さず。何となれば五欲充足して、乏短す

る所なければなり。(毛)提婆達(多)の如きは、本生曾つて一の蛇と爲り、一

の蝦蟇、一の龜と與に一の池中に在りて、共に觀交を結べり。其後、池水

渴盡して、飢ゑ窮まり、困乏すれども控告する所なし。時に蛇は龜を遣は

し以て蝦蟇を呼ぶ、蝦蟇は爾を説き、以て龜に遣はして言く、

「若し貧窮に遣へば本心を失し、本義を惟はず食を先と爲す。

汝、我が聲を持して以て蛇に語れ、蝦蟇は終に汝が邊に到らず」と。

若し布施を修すれば、後の生に福あり、短乏する所なければ、則ち能く戒を持つて此の衆惡なし。

是を「布施は能く尸羅波羅蜜(多)を生ず」と爲す。

復次に、布施する時は、能く破戒(及び)諸の結使をして薄からしめ、益持戒の心をして堅固ならし

【七六】 布施の能く持戒波羅蜜多を生ずる所以。

【七七】 尸羅波羅蜜多(空)ニシテ

【七八】 尸羅は譯して持戒とい

なるを説く。

む。是を布施の因縁は戒を増益すと爲す。

復次に、菩薩の布施は、常に受者に於て慈悲心を生じ、財に著せず、自物を惜まず、何に況んや劫盜せんや。受者に慈悲なり、何を殺意あらんや。是の如く等は積戒を遺す。是を布施は戒を生ずと爲す。若し能く布施すれば、以て慍心を破り、然る後持戒忍辱等を行することを得べきこと易し。

殊師利の如きは、在昔過去久遠劫の時、曾て比丘と爲り、城に入つて乞食し、鉢に百味の歡喜丸を満たすことを得たり。城中の一の小兒、追從して乞ひしも即ち之を與へず、乃ち佛圖に至り手づから二丸を捉へて、之を要して言く、汝若し能く自ら一丸を食し、一丸を以て衆僧に施さば、當に以て汝に施すべし」と。即ち相然可し、一の歡喜丸を以て衆僧に施し、然る後に文殊師利の許に於て戒を受け、發心して、佛と作れり。是の如く、布施は能く戒を受け、發心して佛と作らしむ。是を、「布施の〔能く〕戸羅波羅蜜〔多〕を生ず」と爲す。

復次に、布施の報は四事の供養を得て、好國の善師は、乏少する所なし、故に能く戒を持す。又布施の報は其の心調柔なり。心調柔なるが故に能く持戒を生じ、能く持戒を生ずるが故に、不善法の中より能く自ら心を制す。是の如き種種の因縁により、布施より戸羅波羅蜜〔多〕を生ず。

云何が、布施は、願提波羅蜜〔多〕を生ずるや。菩薩の布施する時、受くる者共に罵り、若くは

【六】 一小兒歡喜丸を得て僧に施し戒を持し、因縁なり。  
【七】 布施の能く忍辱波羅蜜多を生ずる所以。  
【八】 願提波羅蜜多 (Kṣantika, Prāpti) の願提は譯して慈辱といふ。

云何が、布施は、願提波羅蜜〔多〕を生ずるや。菩薩の布施する時、受くる者共に罵り、若くは

大に求索し、若くは不時に索め、或は索むべからずして索む。是の時、菩薩は自ら思惟して言く、  
 「我今布施して、佛道を求めんと欲すれども、亦人あり、我をして布施せしむること無し。我自らの  
 爲めの故に、云何か瞋を生すべき」と。是の如く思惟し已つて忍辱を行す。是を「布施の〔能く〕」、  
 波羅蜜〔多〕を生ず」と爲す。復次に、菩薩は布施する時、若し受者瞋り惱めば便ち自ら思惟すらく、  
 「我は今、内外の財物を布施し、捨て難きを能く捨つ、何に況んや空聲にして、而も忍ぶこと能はざ  
 らんや。我忍ばずんば、布施す可き所は、則ち不淨と爲らん。譬へば白象  
 の池に入つて澡浴し、出で已つて還つて復た土を以て身に塗するが如く、  
 布施して忍ばざるも亦復是の如し」と。是の如く思惟し已つて忍辱を行す。  
 是の如き等の種種の布施の因縁により、屢提波羅蜜〔多〕を生ず。

【一】云何が布施して 毗梨耶波羅蜜〔多〕を生ずるや。菩薩の布施する時  
 は常に精進を行す。何となれば菩薩の初めて發心する時は、功德未だ大な  
 らず。爾の時に、二施を行じて一切衆生の願を充滿せんと欲し、物足らざるを以て、勤めて財法を求  
 めて以て之を給足すればなり。【三】釋迦牟尼佛の本身の如きは、大醫王と作り、一切の病を療じて名利  
 を求めず、衆生を憐愍するが爲の故なり。病者、甚だ多くして力周く救はず、一切を憂念するも而も  
 心に從はず、懊惱して、死して即ち、忉利天上に生ぜり。〔而して〕自ら思惟して言く、「我今天に生じ

【八】布施の能く精進波羅蜜多を生ずる所以。  
 【九】毗梨耶波羅蜜多 (Yīra-  
 jānamīd)。毗梨耶は譯して精  
 進といふ。  
 【三】釋迦牟尼佛の一の前生譚  
 を擧げて、布施の能く精進波  
 羅蜜多を生ずる實例となす。

但福報のみを食するも、長く益する所なしと。即ち自ら方便して、自ら滅身を取り、此の天壽を捨てて、娑伽陀龍王の宮中に生じて、龍の太子と爲る。其の身長大にして、父母愛重す。自ら死を取らんと欲して金翅鳥王に就く。鳥は即ち此の龍の子を取り、舍摩利樹の上に於て之を吞む。父母は號咷啼哭して懊惱す。龍子は既に死して閻浮提の中に生じ、大國王の太子と爲り、名けて能施と曰ふ。生れて能く言ひ、諸の左右に問ふ。「今、此の國中、何等の物かある、盡く皆持ち來つて以て布施に用ゐよ」と。衆人は怖畏して皆之を捨てて走る。其の母、憐愍して獨り自ら之を守る、其の母に語つて言く、「我は羅刹に非ず、衆人は何を以ての故に走るや。我が本の宿命は常に布施を好む、我は一切の人の檀越と爲らん」と。母は其の言を聞いて以て衆人に告ぐれば、衆人即ち還る。母は好く養育すれば、年長大なるに及んで、自身の所有、盡く以て施し盡し、父王の所に至つて物を索めて布施す。父、其の分を與ふれば、復以て施し盡す。閻浮提の人の貧窮にして、辛苦するを見て、給施せんとを思惟するに、財物足らず、便ち自ら啼泣し、諸人に問うて言く、「何の方便を作してか、當に一切をして財に満足せしむべき」と。諸の宿人の言く、「我等曾て聞く、如意寶珠あり、若し此の珠を得ば、則ち能く心の索むる所に隨つて、必ず得すといふこと無し」と。菩薩は是の語を聞き已つて、其の父母に白す、「大海に入つて

【八四】 舍摩利(シヤリバリ)

【八五】 龍王太子龍宮に入つて寶珠を取るの因縁

【八六】 羅刹(ラクシャス)の事

【八七】 檀越(ダンゲツ)の事

施主といふべし。般若行施の功德を行つて、己が貧窮の海を越ゆる義なりといふ。

龍王の頭上の如意寶珠を求めんと欲す」と。父母報へて言く、「我は唯汝一兒あるのみ、若し大海に入らば衆難度り難し。一旦汝を失はば、我等も亦當に何を用てか活くべき、爲に去ることを須めず。我今、藏の中に、猶亦た物あり、當に以て汝に給すべし」と。兒言く、「藏中は限あり、我が意は無量なり。我は財を以て、一切に充滿し、乏短なること無からしめんと欲す、願くは聽許せられよ。本心を遂ぐることを得て、閻浮提の人をして、一切充足ならしめんと。父母は其の志の大なることを知つて、敢へて之を制せず、遂に放つて去らしむ。是の時に五百の賈客は、其の福德の大なるを以て、人皆隨從せんことを樂ひ、其の行く日を知つて、海道の口に集る。菩薩は先づ婆伽陀龍王の頭上に、如意寶珠ありと聞いて、衆人に問うて言く、「誰か水道を知つて、彼の龍宮に至らん」と。一の盲人あり、陀舎と名く、曾て七反大海の中に入つて具に海道を知れり。菩薩は即ち共に行かんことを命ず。答へて言く、「我は年既に老い、兩目明を失し、曾て數數入ると雖も、今は去ること能はず」と。菩薩語つて言く、「我今此に行くことは、自らの身の爲にあらず、善ねく一切の爲に如意寶珠を求め、衆生に給足して、身をして乏しきと無からしめ、次に道法の因縁を以て、之を教化せんと欲するなり。汝は是れ智人、何ぞ辭することを得んや。我が願を成ずることを得るは、豈に汝が力に非ずや」と。陀舎は其の要言を聞き、欣然として懷を同うし、菩薩に語つて言く、「我今汝と共に、俱に大海に入らん。我必ず全からずんば、汝當に我が屍骸を安んじて、大海の中の金沙の洲の上に著くべし」と。

行事都て集り、第七繩を斷すれば、船は去ること馳するが如く、衆の寶渚に到る。衆賈、競うて七寶  
 を取り、各各已に足りぬ。菩薩に語つて言く、「何を以て取らざるや」と。菩薩報へて言く、「我が求  
 むる所は如意寶珠なり。此は盡くすること有る物なれば、我は須るざるなり」と。汝等は各各當に足ること  
 を知り、量を知るべし。船をして重からしむること無くんば、自ら免れざるなり」と。是の時に衆賈  
 は、菩薩に白して言さく、「大徳、我が爲に咒願し、安隱なることを得せしめたまへ」と。是に於て辭  
 し去る。陀舎は是の時、菩薩に語つて言く、「別に艇舟を留めて、當に是の別道に隨つて去るべし。  
 風を待つこと七日、海の南岸に搏いて一の險處に至り、當に絶崖に棗林あるべし、枝は皆水を覆ひ、  
 大風は船を吹いて、船は當に摧け覆るべし。汝は當に仰いで棗枝を攀ち、以て自ら濟ふべし。我が身  
 は無日なり、此に於て當に死すべし。此の險崖を過ぎて、當に金沙洲あるべく、我が身を以て此の沙  
 中に置くべし。金沙は清淨なり、是れ我が願なり」と。即ち其の言の如く、風至つて去り、既に絶岸  
 に至るに、陀舎の語の如し。菩薩は仰いで棗枝に攀ち、以て自ら免るることを得、陀舎の屍を置いて  
 金地に安厝す。是に於て獨り去るに、其の先の教の如し。深水中に浮くこと七日、咽に齊しき水中  
 を行くこと七日、腰に齊しき水中を行くこと七日、膝に齊しき水中を行くこと七日、泥中に行くこと  
 七日、好蓮華の鮮潔柔軟なるを見て、自ら思惟して言く、「此の華は軟かにして跪し。當に虚空三昧  
 に入るべし」と。自ら其の身を軽くして、蓮華の上を行くこと七日、諸の毒蛇を見て念じて言く、「毒

を含むの蟲は甚だ畏る可し」と。即ち慈心三昧に入つて、毒蛇の頭上を行くと七日、蛇は皆頭を擧げて菩薩に授與し、上を踏んで過ぎしむ。此の難を過ぎ已つて、七重の寶城あるを見る。七重の暫あり、暫の中に皆毒蛇滿ち、二大龍あつて門を守る。龍は、菩薩の形容端正に、相好嚴儀にして、能く衆の難を度つて、此に來り至ることを得たるを見て、念じて言く、「此れ凡夫に非ず、必ず是れ菩薩大功徳の人ならん」と。即ち聽して逕を前んで宮に入ることを得せしむ。龍王夫婦は兒を喪つて未だ久しからず、猶故に哀泣せり。菩薩の來るを見て、龍王の婦は神通あり、是れ其の子なるを知り、兩乳を流出し、之に命じて坐せしめ、之に問うて言く、「汝は是れ我が子なり、我を捨てて命終す、生れて何の處に在るや」と。菩薩も亦自ら宿命を識り、是の父母を知り、母に答へて言く、「我は閻浮提の上に生れ、大國王の太子と爲れり。貧人の飢寒勤苦して自在を得ざるを憐愍するが故に。此に來至して如意寶珠を求めんと欲す」と。母の言く、「汝が父の頭上に此寶珠あり、以て首飾と爲す、得べきこと難し、必ず當に汝を將るて珠寶の藏に入るべく、汝が欲する所に隨つて、必ず汝に與へんと欲す。汝當に報じて言ふべし、其餘の寶實は我須るす、唯大王の頭上の寶珠を欲す。若し憐愍せば願くは以て我に與へたまへ」と。此の如くせば得べし」と。即ち往いて父に見ゆ。父大に悲喜欣慶すること無量、其の子をして遠く涉つて艱難し、乃ち此に來至するを愍み、妙寶を指示して、「汝が須ゆる者を與ふ、隨意に之を取れ」と。菩薩言く、「我は遠くより來り、大王に見えて、王の頭上の如

寶珠を求めんことを願ふ。若し憐愍せば、當に以て我に與ふべし、若し與へられずんば、餘の物を須ゐず」と。龍王報へて言く、「我は唯この一珠のみ有り、常に首の飾と爲す。閻浮提の人は、薄福下賤にして見るべからず」と。菩薩白して言さく、「我は此を以て遠く艱難を涉り、死を冒して遠く來れり。閻浮提の人は薄福貧賤なるが爲に、如意寶珠を以て其の願ふ所を濟し、然る後に、佛道の因縁を以て之を教化せんと欲す」と。龍王は珠を與へて之に要して言く、「今、此珠を以て汝に與へん、汝既に世を去らば、當に以て我に還すべし」と。答へて言く、「敬んで、王の言の如くせん」と。菩薩は珠を得て虚空に飛騰し、臂を屈申するが如き頃にして、閻浮提に至る。人王の父母は、兒の吉く還るを見て、歡悅踊躍し、抱いて問うて言く、「汝何物を得るや」と。答へて言く、「如意寶珠を得」と。問うて言く、「今、何許に在るや」と。白して言さく、「此衣の角裏の中に在り」と。父母の言く、「何ぞ其れ太だ小なる」と。白して言く、「其神徳あるは大なるに在らず」と。父母に白して言さく、「當に城中の内外に勅して掃き灑ぎ、香を焼き、繪の旛蓋を懸け、持齋受戒すべし」と。明日清旦長木を以て表と爲し、珠を以て上に著く、菩薩は是時、自ら誓願を立つ。「若し我れ當に佛道を成じ、一切を度脱すべくんば、當に我が意の願の如く、一切の寶物を出し、人の須ふる所に隨つて盡く皆備ふると有るべし」と。是の時陰に普遍し、種種の寶物、衣服、飲食、臥具、湯藥を雨ふらし、人の須ゐる所、一切具足し、其命の盡くるに至るまで、常に絶えざりき。是の如き等を名けて、菩薩の布施は精進波羅蜜

「多」を生ずと爲す。

云何が菩薩の布施は、(八九)禪「那」波羅蜜「多」を生ずるや。菩薩布施する時は、能く慳貪を除く。  
慳貪を除き已り、此の布施に因りて、行すること一心なれば、漸く(九〇)五蓋を除き、能く五蓋を除く、  
是を名けて禪「那」と爲す。

復次に、心は布施に依つて、初禪乃至滅定禪に入る。云何が「布施に」依ると爲す。若し禪を行する人に施す時は、心に自ら念じて言く、「我は此の人の禪定を行するを以ての故に、淨心にして供養す、我今何ぞ自ら禪を替へることを爲さん」と。即ち自ら心を斂めて、思惟し禪を行す。若し貧人に施しては此の宿命を念す、「諸の不善を作し、一心に求めず、福業を修せずして今世貧窮なり」と。是を以て自ら勉めて善を修し、一心に以て禪定に入る。説くが如くんば、(九二)喜見轉輪聖王には八萬四千の小王來朝し、皆七寶の妙物を持ち來つて獻す。王言く、「我は須ゐざるなり、汝等各自ら以て福を修す可し」と。諸王自ら念すらく、「大王は背へて取らずと雖も、我等も亦復自

【八八】 布施の能く靜慮波羅蜜多を生ずる所以。

【八九】 禪那波羅蜜多(一)ニゴロト 禪那は譯して靜慮、又ば定といふ。故に禪定とば梵漢兼舉の語なり。

【九〇】 五蓋、蓋は蓋覆の義、五法ありて能く心性を蓋覆して善法を生ぜざらむ。(一)貪欲蓋、五欲の對象に著着し以て心性を覆ふもの、(二)瞋恚蓋、自己の好まざる對象に於て忿怒を懷き、以て心性を蓋ふもの、(三)睡眠蓋、心昏く身重くして其用を爲さず、以て心性を蓋ふもの、(四)掉悔蓋、心の躁動するを掉といひ、所作用に於て心に憂惱するを悔といひ、以て心性を蓋ふもの、(五)疑蓋、法に於て猶豫して決せず、以て心性を蓋ふもの、之を五蓋といふ。

【九二】 喜見轉輪聖王(Triyambaka) 喜見轉輪聖王は佛傳に於いて禪定を生ぜし譯。

ら用ふべからず」と。即ち共に造工して七寶の殿を立て、七寶の行樹を植ゑ、七寶の浴池を作り、大殿の中に於て八萬四千の七寶の樓を造り、樓中に皆七寶の牀座あり、雜色の被枕を牀の兩頭に置き、繪の旛蓋を懸げ、香薫を地に塗り、衆事備はり已つて、大王に白して言さく、「願はくは法殿寶樹浴池を受けたまへ」と。王は默然として之を受け、自ら念じて言く、「我は今先づ新殿に處して、以て自ら娛樂すべからず、當に善人の諸の沙門婆羅門等を求めて、先づ入れて供養し、然る後に我之に處べし」と。即ち善人を集めて先づ寶殿に入れ、種種に供養し、微妙に具足せり。諸人出で已れば、王は寶殿に入り、金樓に登り、銀床に坐し、布施を念じて五蓋を除き、五情を攝し、六塵を却け、喜樂を受け、初禪に入る。次に銀樓に登り、金牀に坐して、二禪に入る。次に【五】毗瑠璃樓に登り、【六】願梨の寶牀に坐して三禪に入る。次に願梨寶樓に登り、毗瑠璃床に坐して四禪に入る。獨坐思惟、終に三月を竟り、玉女・寶后は八萬四千の諸の侍女と俱に、皆白珠・名寶・瓔珞を以て、其身來つて大王に白す、「久しく親觀に違ふ、敢へて來つて問訊したてまつる」と。王諸妹に告ぐ、「汝等各當に端心なるべし、當に我が爲に智識となり、我が怨と爲ると勿るべし」と。王女寶后涙を垂れて言く、「大王、何爲ぞ我を謂つて妹と爲す、必ず異心あらん、願はくは其意を聞かん。云何が當に智識と爲り、我が怨と爲ると勿るべしと勅せらるるや」と。王之に告げて言く、「汝若し我を以て世の因縁の

【五二】 六塵。六境の異名にして、色聲香味觸法をいふ。

【九三】 毗瑠璃（パールヤ）。

【九四】 願梨（のり）。

爲に共に欲事を行じ、以て歡樂を作さば、是を我が怨と爲す。若し能く非常を覺悟し、身の幻の如くなるを知り、福を修し善を行じ、欲情を絶去せば是を知識と爲す」と。諸の玉女言さく、「敬んで王の勅の如くせん」と。此語を説き已つて、各遣はして還らしむ。諸女出で

已れば、王は金殿に登り、銀牀に坐して、【五】 慈三昧を行じ、銀樓に登り、金牀に坐して、【六】 悲三昧を行じ、毗瑠璃樓に登り、頗梨牀に坐して、【七】 喜三昧

を行じ、頗梨の寶樓に登り、毗瑠璃床に坐して、【八】 捨三昧を行す。是を菩薩の布施は禪「那」波羅蜜「多」を生ずと爲す。

云何が 【九】 菩薩の布施は、般若波羅蜜「多」を生ずるや。菩薩布施する時は、此布施は必ず果報ありと知つて、疑惑せず、能く邪見無明を破る。是を布施は般若を生ずと爲す。

復次に、菩薩布施する時は、能く分別して知る。戒を持たざる人の、若し鞭打拷掠閉繫し、法を枉げ財を得て、布施を作せば、象馬牛の中に生れ、畜生の形を受けて、重を負ひ、鞭策羈絆乗騎せらると雖も、而も常

に好屋好食を得、人の爲に重んぜられ、以て人「彼に」供給す。又知る、悪人の多く愼志を懐き、心曲つて端しからざるも、而も布施を行せば、當に龍の中に墮して、七寶の宮殿・妙食・好色を得べきこと

【九五】 慈三昧とは、我欲執著を離して、同情を無限に擴充すること。

【六】 悲三昧とは、同情のあまり、一切衆生が煩惱に陥れるを憐みて、悲即ち憐愍の心を一切に擴充すること。

【七】 喜三昧とは、前の慈悲心を起こし、一切衆生を抱念して、心自ら満足喜悅し、之を無限に擴充すること。

【八】 捨三昧とは、心の平靜を修得相續して、之を十方一切に擴充すること。

【九】 布施の能く智慧波羅蜜多を生ずる所以。

を。又知る、嬌人の多慢・瞋心にして布施すれば、金翅鳥の中に墮して、常に自在を得、如意寶珠あり、以て瓔珞と爲し、種種の須ゆる所、皆自ら恣なるをと得て、意の如くならざる無く、變化・萬端・事として辨せざるなきとを。又知る、宰官の人の、枉げて人民を濫り、治法に順せず、財物を取つて以て布施に用ふれば、鬼神の中に墮して、二〇〇クマハーンと作り、能く種種に五塵を變化して自ら娛しむとを。又知る、多瞋狼戾にして、酒肉を嗜好するの人の、而も布施を行へば、地行の夜叉鬼の中に墮ち、常に種種の歡樂・音樂・飲食を得ることとを。又知る、人あり、剛愎強梁にして、而も能く驛馬を布施し、代つて歩せしめば、虚空の夜叉の中に墮ち、大力あつて至る所風の如くなることを。又知る、人あり、妬心にして諍を好めども、而も能く好き房舎・臥具・衣服・飲食を以て布施するが故に、宮觀・飛行の夜叉の中に生じ、種種の娛樂・便身の物あるとを。是の如く種種に布施する時、能く分別して知るべし。是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。

復次に、飲食を布施すれば、力色命樂の贖を得。若し衣服を布施せば、生れて慚愧を知ることを得、威徳端正にして、身心安樂なり。若し房舎を施せば、則ち種種の七寶宮觀を得、自然にして五欲を自ら娛むことあり。若し井池・泉水・種種の好樂を施せば、生ずる所則ち飢なく、渴なきことを得、五欲備さに有り。若し橋船及び諸の履屐を施せば、生れて種種の車馬を有し具足す。若し園林を施せば、則ち豪華なることを得、一切の依止と爲り、身を受くること端正に、心樂んで憂なし。是の如き

【三】鳩槃荼(Kumbhanda)は、人の精氣を喰ふ鬼なり。

等の種種の、人中の因縁は布施の得る所なり。若し人布施して福德を修作し、有爲の作業、生活を好まざれば、則ち四天王の處に生ずることを得。若し人布施し、加ふるに父母及び諸の伯叔兄弟の供養を以てし、無瞋無恨にして誣訟を好まず、又喜んで誣訟を見ざるの人は、忉利天上炎摩兜率化自在。他化自在に生ずることを得、是の如く種種に分別して布施する、是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。爲し人布施して心に染著せず、世間を厭患して、涅槃の樂を求めば、是を阿羅漢・辟支佛の布施と爲す。若し人布施して佛道の爲にし、衆生の爲の故ならば、是を菩薩の布施と爲す。是の如き等の種種の布施の中に分別して知る、是を布施は般若波羅蜜「多」を生ずと爲す。

復次に、菩薩の布施する時は、三事の實相を思惟すること上に説くが如し。是の如く能く知る、是を布施は般若波羅蜜「多」を生ずと爲す。

復次に、一切の智慧、功德の因縁は皆布施に由る。下佛の始めて意を發したまふ時の如きは、種種の財物を諸佛に布施したまふ。或は華香を以て、或は衣服を以て、或は楊枝を以て布施し、以て意を發す。是の如き等の種種の布施、是を菩薩の布施は般若波羅蜜「多」を生ずと爲す。

# 卷の第十三

初品の中の尸羅波羅蜜〔多〕の上を釋す、

罪と不罪とは不可得の故に、應に尸羅波羅蜜〔多〕を具足すべし、

尸羅とは、好んで善道を行じ、自ら放逸ならざる、是を尸羅と名

く、或は戒を受けて善を行じ、或は戒を受けずして善を行するも皆尸羅と

名く。尸羅とは、畧説すれば身口の律儀に八種あり。惱害せざること、

劫盜せざること、邪淫せざること、妄語せざること、兩舌せざること、惡

口せざること、綺語せざること、飲酒せざること、及び淨命なること、

是を戒と名け、若し護らずして放捨するは、是を破戒と名く。此の戒を破

る者は三惡道の中に墮ち、若し下の戒を持てば人中に生じ、中の戒を持

てば六欲天の中に生じ、上の戒を持ち、又四禪四空定を行すれば、色・無色界の清淨天の中に生ず。

上の戒を持つに三種あり。下の清淨戒を持てば、阿羅漢を得、中の清淨戒を持てば、辟支佛を得、

上の清淨戒を持てば、佛道を得。著せず、倚らず、破らず、缺かざるは、聖の讚し愛する所なり。

是の如きを名けて、上の清淨戒を持つと爲す。若し衆生を惹愍するが故に、衆生を度するが爲の故

〔一〕尸羅〔公二〕は、譯して性善、正義等といふ。

〔二〕八種の身口律儀。

〔三〕淨命とは、生活即ち處世の清淨無垢なるをいふ。

〔四〕戒に上中下の區別あることを説く。

〔五〕上の戒にも亦上中下の三種の別あることを説く。

に、亦戒の實相を知るが故に、心に猶著せず、此の如く戒を持てば、將來人をして佛道に至らしむ。是の如きを名けて、無上の佛道の戒を得と爲す。若し人、大善利を求めば、當に堅く戒を持つことと、重寶を惜むが如く、身命を護るが如くすべし。何となれば、譬へば大地の一切の萬物、有形の類の如きは、皆地に依つて住す。戒も亦是の如く、戒を一切善法の住處と爲せばなり。復次に、譬へば足なくして行かんと欲し、翅なくして飛ばんと欲し、船なくして度らんと欲するが如きは、是れ不可得なり。若し戒なくして好果を求めんと欲するも、亦復是の如し。若し人の此戒を棄捨せば、山居して苦行し、果を食し藥を服すと雖も、禽獸と異なると無し。或は人あり、但水を服するを戒と爲し、或は乳を服し、或は氣を服し、或は剃髮し、或は長髮し、或は頂上に少許の髮を留め、或は袈裟を著け、或は白衣を著け、或は草衣、或は木皮衣を著け、或は冬水に入り、或は夏火に炙り、若くは自ら高巖より墜ち、若くは恒河の中に於て洗ひ、若くは日に三たび浴し、再び火を供養し、種種の祠祀、種種の呪願、行を受けて苦行するも、此戒なきを以て空うして得る所なし。若し人あり、高堂大殿に處し、好衣美食すと雖も、而も能く此の戒を行すれば、好處に生ずることを得、及び道果を得ん。若くは貴きも、若くは賤しきも、若くは小なるも、若くは大なるも、能く此淨戒を行せば、皆大利を得ん。若し

【六】元本明本俱に「將來令人」の四字なし。

【七】戒は一切善法の住處たること恰も草木等の大地に於けるが如し。

【八】破戒の人は山居苦行すと雖も禽獸と異らず。

【九】種種の呪願、種種の苦行、種種の祠祀も、戒と名く可らず。

此戒を破らば、貴と無く、賤と無く、大と無く、小と無く、皆意に随つて、善處に生ずるを得ず。復次に、二〇はかいひと、譬へば清涼の池に、而も毒蛇あり、中に澡浴すべからざるが如く、亦好花果樹の、而も逆刺多きが如し。若し人貴家に在つて生れ、身體端正に、廣學多聞なりと雖も、持戒を樂まず、慈悲心なきも亦復是の如し。偈に説くが如し。

『貴くして智なきは、則ち衰と爲し、智にして憍慢なるも亦衰と爲す。』

持戒の人にして而も戒を毀たば、今世後世一切衰へん。』

人は貧賤なりと雖も、(二)而も能く戒を持つては富貴に勝る。而して破戒

の者の華香木香は、遠く聞ゆること能はざれども、持戒の香は周ねく十方に遍す。持戒の人は、安樂を具足し、名聲遠く聞え、天人敬愛し、現世に常に種種の快樂を得、若し天上人中にして、富貴長壽を欲せば、之を取ると難からず。持戒して清淨なれば、願ふ所皆得らる。復次に、持戒の人は、破戒の人の刑獄に拷掠され、種種に苦惱するを見て、自ら永く離るゝことを知り、此の事を以て欣慶と爲す。若し持戒の人は、善人の譽を得て、名聞え、快樂なるを見て、自ら念じて言く、「彼の譽を得るが如く、我も亦分あり」と。

(三)持戒の人は、壽終の時、刀風身を解き、筋脉斷絶すれども、自ら戒を持つて清淨なることを知り、心に怖畏せざるなり。偈に説くが如し、

【一】破戒の人は涼池に蛇あり、又は好花果樹の逆刺多きが如し。  
 【二】貧人の持戒は富貴に勝り、破戒の香は遠く聞えず、持戒の香は周遍す。  
 【三】持戒の人は命終の時、心に怖畏なし。

『大悪病の中には戒を良薬と爲し、大怖畏の中には戒を守護と爲し、死の暗冥の中には戒を明燈

と爲し、悪道の中に於ては戒を橋梁と爲し、死海の水中にては戒を大船と爲す。』

復次に、持戒の人は、常に今世の人に敬養せらるゝを得、心に樂しんで悔いす、衣食乏しきと

無く、死して天に生ずるとを得て、後、佛道を得るなり。持戒の人は事として得ざる無く、破戒の人

は一切皆失す。譬へば人あり、常に天を供養するが如きは、其の人貧窮

なるも、一心に供養して十二歳に満ち、富貴を求索するに、天は此の人を

懲んで、自ら其の身を現じ、之に問うて曰く、「汝、何等を求むるや」と。

答へて言く、「我富貴を求めて心の願ふ所をして、一切皆得せしめんと欲

す」と。天一器を興ふ、名けて徳瓶と曰ふ。而して之に語りて言く、「須る

所の物は、此の瓶より出づ」と。其の人は得已つて、意の欲する所に應

じて得ざる所なく、意の如くなることを得已つて、具に好舎・象馬・車乗を作り、七寶具足し、賓客に

供給するに、事事、乏しきこと無し。客之に問うて曰く、「汝は先に貧窮なりき、今日、何に由つて

か是の如きの富を得るや」と。答へて言く、「我天瓶を得、瓶は能く此の種種の衆物を出すが故に、富

むこと是の如し」と。客言く、「瓶を出し、并に出す所の物を見せよ」と。即ち爲に瓶を出し、瓶中よ

り種種の衆物を引き出す。其の人橋汰し、瓶の上に立つて舞ふに、瓶は即ち破壊し、一切の衆物も亦

- 【一】 持戒の人は二世の益を得、破戒の人は一切皆失ふ。
- 【二】 破戒橋汰は徳瓶を破つて衆寶を失ふが如し。
- 【三】 諸本皆「所由」に作れども意味通じ惡きが故に、「何に由つてか」とせり。

一時に滅す。持戒の人も亦復是の如く、種種の妙薬は顯つて得ざること無し。若し人戒を破り、橋決にして自ら恣なるも、亦破つて利を失するが如し。

復次に、持戒の人の名稱の香は、今世、後世周ねく天下に満ち、及び人中に在り。復次に、持戒の人は、人の樂しむ所を施して財物を惜まず、世利を修せず、乏しき所なく、天上に生ずるを得、十方の佛前にて三乘道に入り、而して解脱を得、唯種種の邪見は、持戒の後には得る所なし。復次に、若し人出家せずと雖も、但能く戒法を修行せば、亦天に生ずることを得。若し人戒を持つこと清淨に、禪定の智慧あつて、老病死の苦を度脱せんことを求めんと欲せば、此の願は必ず得らる。持戒の人は、兵仗なしと雖も、象惡加はらず、持戒の財は、能く奪ふ者なし。持戒の親は、親死すと雖も、離れず。持戒の莊嚴は、七寶に勝れたり。是を以ての故に當に戒を護るとは、身命を護るが如く、寶物を愛するが如くすべし。破戒の人は苦を受くること萬端なり、向に貧人の瓶を破つて物を失ふが如し。復次に、持戒の人は、破戒の人の罪を觀て、應に自ら勉勵して一心に戒を持つ。

【二六】 持戒の人は兵仗なしと雖も象惡加はらず、能く奪ふ者なし。  
【二七】 種種の譬を擧げて破戒の罪を説く。

云何が名けて、破戒の人の罪と爲す、破戒の人は人の敬せざる所にして、其の家は塚の如く、人の到らざる所なり。破戒の人は諸の功德を失す。譬へば枯樹の如く、人彼を愛樂せず。破戒の人は霜の蓮華の如く、人見ることを喜ばず。破戒の人の惡心畏るべきは、譬へば羅刹の如し。破戒の人に

は人の歸向せざることを、譬へば渴人の枯井に向はざるが如し。破戒の人は心常に疑悔すること、譬へば事を犯すの人の、常に罪の至らんことを畏るゝが如し。破戒の人は、田の雹を被つて依仰す可らざるが如し。破戒の人は、譬へば苦瓜の形は甘種に似たりと雖も、食す可らざるが如し。破戒の人は、賊の聚落に依止す可らざるが如し。破戒の人は、譬へば大病人の如く、近づくことを欲せず。破戒の人は苦を免るることを得ず、譬へば惡道の過ぐることを得べきこと難きが如し。破戒の人は、共に止る可らざることを、譬へば惡賊の親近す可きこと難きが如し。破戒の人は、譬へば火坑の如く、行者之を避く。破戒の人は共住す可からざることを、譬へば毒蛇の如し。破戒の人は、近づき觸る可らざることを、譬へば大火の如し。破戒の人は、譬へば破れたる船の、乗つて度る可らざるが如し。破戒の人は、譬へば吐きたる食の、更に噉ふ可らざるが如し。破戒の人は好衆の中に在りて、譬へば惡馬の善馬の群の中に在るが如し。破戒の人は、善人と異なること、驢の牛の群に在るが如し。破戒の人は精進衆に在れば、譬へば嬰兒の健人の中に在るが如し。破戒の人は、比丘に似たりと雖も、譬へば死屍の、眠れる人の中に在るが如し。破戒の人は、譬へば僞珠の眞珠の中に在るが如し。破戒の人は、譬へば戒の人は、形は善人に似たりと雖も、内に善法なく、復た剃頭染衣して、次第に籌を捉き、名けて比

【八】伊蘭(Indian)は、大戟科中タウマ屬の一種、阿弗利加原産にして、全印度に分布す。野生又は觀賞のために栽培せらる。莖の高さ六尺乃至八尺、葉は綠色なるも、時に赤味を帯び、掌狀に深裂して裂片七あり。

丘と爲すと雖も、實には比丘に非ず。破戒の人の法衣を著くるは、則ち是れ熱銅鐵鏢、以て其の身に纏ふ。鉢盂を持するは、則ち是れ洋銅の器に盛るが若く、噉食する所は、則ち是れ燒けたる鐵丸を呑むが若し。熱せる洋銅を飲むが若く、人の供養供給を受ければ、則ち是れ地獄の獄卒の人を守るが若く、精舎に入るは、則ち是れ大地獄に入るが若く。衆僧の牀楡に坐すれば、是れを熱鐵の牀上に坐すと爲すが若し。

復次に、破戒の人は、常に怖懼を懐くこと、重病の人の常に死に至らんを畏るるが如く、亦五逆の罪人の心に常に自ら、我は佛の賊たり、藏覆し、避隈すと念ふが如く、賊の人を畏れて、歲月日過ぐれども、常に安隱ならざるが如し。破戒の人は、供養利樂を得と雖も、是の樂は不淨なり。譬へば愚人の死屍を供養し、莊嚴するが如く、智者は之を聞き、惡んで見んことを欲せず。是の如く、破戒の罪は種種無量なり、稱説すべからず。行者は應當に一心に戒を持つべし。

初品の中の戒相の義を釋す。

問うて曰く、(一九) 已に是の如きの種種の功德果報を知る、云何が名けて戒相と爲すや。答へて曰く、惡を止めて更に作さず、是を名けて戒と爲す。若くは心に生じ、若くは口に言ひ、若くは他より受け

【二〇】 第一問、戒相とは何ぞや。以下十善十惡を説く。

て、身口の悪を息めば、是を戒相と爲す。云何が名けて悪と爲す。若し實に是の衆生をば、是れ衆生なりと知り、殺さんと欲するの心を發し、其の命を奪ふて、身業有作の色を生ず、是を殺生の罪と名く。其餘の繫閉・鞭打等は、是れ殺を助くるの法なり。復次に、他を殺せば殺罪を得。自ら身を殺すに非ざるも、心に衆生なりと知つて殺すは是れ殺罪なり。夜中に人を見て、謂つて柅樹と爲して殺す者の如くならず、故らに生を殺せば殺罪を得、故意にあらざるに非ざればなり。快心にして生を殺せば殺罪を得。狂癡に非ずして命根を斷ずるは、是れ殺罪、作瘡に非ざるの身業は是れ殺罪、但口に教勅し、口に教ゆるのみに非ざるは是れ殺罪。但心に惡を生ずるのみに非ざる、是の如き等を殺罪の相と名く。是の罪を作さざるを名けて戒と爲す。若し人戒を受けて心に生じ、口に、「我れ今日より復た殺生せずと言ひ、若くは身を動かさず、口に言はず、而も獨り心に生じて、自ら我れ今日より復た殺生せずと誓はば、是を不殺生戒と名く。有人の言く、「是の不殺生戒は、或は善、或は無記なり」と。

問うて曰く、(三)阿毗曇の中に説くが如くんば、「一切の戒律儀は、皆善なり」と、今何を以てか無記なりと言ふや。答へて曰く、迦旃延子の阿毗曇の中に言ふが如きは、「一切善なり」。餘の阿毗曇の中に言ふが如きは、「不殺生戒は、或は善、或は無記なり」。何となれば若し不殺生戒、常に善な

【三】 第一、殺生の罪を論ず。  
 【三】 第二問、一切の戒律儀は善ならざる可らず、而も今無記なりといふ理由如何。

らば、此の戒を持てる人は、應に得道の人の如く、常に惡道に墮せざるべければなり。是の故に或時は應に無記なるべし。無記・無報の故に、天上・人中に生ぜざるなり。

問うて曰く、戒の無記なるを以ての故に地獄に墮せず、更に惡心あつて生ずるが故に地獄に墮す。答へて曰く、不殺生は無量の善法を得、作・無作の福、常に日夜に生ずるが故なり。若し少罪を作さば、限あり量あり、何となれば有量に隨つて無量に隨はざるを以てなり。是の故に不殺生戒の中に、或は無記あるを知る。復次に、有人は師に從つて戒を受けず、而も但心に自ら誓を生ず、「我今日より殺生せず」と。是の如く、不殺は或時は無記なり。

問うて曰く、三三の不殺戒は何界の繫なりや。答へて曰く、迦旃延子の阿毗曇の中に言ふが如くんば、一切の受戒律儀は皆欲界繫なり。餘の阿毗曇の中には言く、或は欲界繫、或は不繫なりと。實を以て之を言へば應に三種あるべし、或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫なり。殺生の法は欲界なりと雖も、不殺戒は應に殺に隨はば欲界に在るべし。但色界の不殺と、無漏の不殺とは、遠遮の故に是れ眞の不殺戒なり。復次に、有人は、戒を受けずして、生れてより已來、殺生を好まず、或は善、或は無記なる、是を無記と名く。是の不殺生の法は、二四心に非ず、心數法に非ず、亦心相應に非ず、或は心と共に生じ、

- 【三】 第三問、戒の無記なるがために地獄に墮せざるにあらす、惡心生ずるが故に地獄するにあらすや。
- 【四】 第四問、不殺生戒は、三界中の何界の繫なりや。
- 【五】 心王の所作にもあらす、心所の所作にもあらすとの意味なり。

或は心と共に生ぜず。迦旃延子は阿毗曇の中に言く、不殺生は是身口の業なり。或は三業、或は無作色、或は隨心行、或は不隨心行にして、先世の業報に非ず。二種の修は應に修すべく、二種の證は應に證すべし。思惟斷は、一切欲界の最後に、見を斷する時斷するを得。凡夫聖人の得るところは是れ色法なり。或は可見、或は不可見法、或は有對法、或は無對法、有報法、有果法、有漏法、有爲法、(三毛)有上法にして、相應因に非ず。是の如き等の分別は、是を不殺戒と名く。問うて曰く、(三毛)八直道の中の戒も亦不殺生なり。何を以てか獨り不殺生戒は有報、有漏と言ふや。答へて曰く、此中には、但受戒律儀を説いて、無漏律儀を説かず。

復次に、餘の阿毗曇の中に言く、不殺の法は、常に心を逐うて行せず、身口業に非ず、心業行に隨はず、或は報あり、或は報なし。或は有漏、或は無漏、是を異法と爲す、餘は皆同じ。復有は言く、諸佛賢聖は諸法を戲論せず、現前の衆生は各各命を惜む。是の故に佛の言はく「他の命を奪ふこと莫

【三五】 作色、無作色は新羅家の所謂表色、無表色のことなり。受戒の時、受者の身口を以て受戒の相を外に表示するが如きを作色、又ば表色といひ、此の表業を縁として、滿身の四大が製造する一種の色體を無表色、又ば無作色と名く。蓋し此の色體には防非止惡の功能ありて、恆に身口の過非を防止すれば之を戒體となし、其の物體は外相に顯はるるものにあらざれば無表と名

【三六】 第五問、不殺生戒のみを有報有漏といふ理由如何。

【三七】 有上法とは、至極にあらざるをいふ。

【三八】 隨心行。聲聞乘の見道位の中に利鈍の二根あり、利根を隨法行と名け、鈍根を隨心行と名く。他の言教を信ずるに由つて隨つて修行するを以てなり。

【三九】 而も身内の地水火風の四大より生ずるものなれば色と名くるなり。

【四〇】 隨心行。聲聞乘の見道位の中に利鈍の二根あり、利根を隨法行と名け、鈍根を隨心行と名く。他の言教を信ずるに由つて隨つて修行するを以てなり。

れ、他の命を奪はば、世世に諸の苦痛を受けん」と。衆生の有無は後に當に説くべし。

問うて曰く、三元は能く力勝るを以て、人並に國の怨を殺し、或は田獵の皮肉は、所濟の處大なり、今不殺生は何等の利を得るや。答へて曰く、畏るる所なきとを得、安樂にして怖無きなり。我、

彼を害する無きを以ての故に、彼も亦我を害すること無し。是の故に怖無く、畏無し。殺を好める人は、復た位、人王を極むと雖も、亦自ら安んぜず。持戒の人の如きは、單獨にして遊行すとも、畏れ難る所なし。

復次に、殺を好める人は、命あるの屬、皆見ることを喜ばず。若し殺を好まざれば、一切衆生皆樂んで依附す。復次に、持戒の人は、命終らんと欲する時、其心安樂にして、疑なく悔なく、若くは天上に生じ、若くは人中に在つて常に長壽を得、是を得道の因縁と爲す。乃至佛を得て、住して壽無量ならん。復次に、殺生の人は、今世後世、種種の身心の苦痛を受く、不殺の人に、此の衆難なし、是を大利と爲す。復次に、行者思惟すらく、

「我は自ら命を惜み、身を愛す、彼も亦是の如し、我と何ぞ異ならん」と。是を以ての故に、殺生すべからず。復次に、若し殺生せば、善人の爲に訶せられ、怨家に嫉まれ、他の命を負ふが故に、常に怖畏あり。彼が爲に惜まれ、死する時は、心悔いて當に地獄、若くは畜生の中に墮すべし。若し出でて人と爲つては、常に當に短命なるべし。復次に、假令、後世に罪なく、善人の爲に訶せられ、怨家に

【七】第六問、不殺生の利益如何。

嫉ねたまれずとも、尚なほ故ことらに他たの命いのちを奪うばふべからず。何なにを以もつての故ゆゑに、善ぜん相さうの人の行いすべからざる所ところ。  
 何いかに況いはんや兩りやう世ぜ罪つみあり、弊へい惡あくの果くわい報はうあるをや。復また次つぎに殺ころを罪つみ中の重おもと爲なす。何なにを以もつての故ゆゑに、人ひとは死し  
 の急きふなるあれば、重おも寶たからを惜おしまず、但ただ活いのち命のみつを以もつて先まきと爲なす。譬たとへば賈こ客かの海うみに入いつて寶たからを採とるが如ごとし。  
 大海たいかいを出いづるに垂たなんとして、其そのの船ふね卒つひに壞やぶれ珍ちん寶ほう失しなひ盡つして、而しかも自みづか喜き慶けいし、手てを擧あげて幾いくの夫おと寶たから  
 をか失しつすと言いふ。衆しゆん人にん惟ただんで言いく、「汝なは財ざい物ぶつを失しつし、裸はだか形ぎやうにして脱だつするを得え、云い何が喜よろこんで幾いくの大だい  
 寶ほうをか失しつすと言いふや」と。答こたへて言いく、「一切いっさいの寶たからの中うちにて人命にんみやうは第一だいいつなり、人ひとは命いのちの爲ための故ゆゑに財ざいを求もと  
 む、財ざいの爲ための故ゆゑに命いのちを求もとめず」と。是この故ゆゑに佛ぼつは説しきたまはく、「十じふ不善ぜん道だうの  
 中うちに、殺せつは最もつとも初はじめに有あり、五ご戒かいの中うちにも亦また最もつとも初はじめに在あり。若もし人ひと種しゆ種しゆに諸しよの  
 福ふく徳とくを修しゆし、而しかも不ふ殺せつ生しやう戒かいなければ則すなはち益やくする所ところなし。何なんとなれば富ふう貴きの處ところに在あつて生しやうじ、勢せい力りき豪ごう強きやう  
 なりと雖いど、而しかも壽じゆ命めいなくんば、誰たれか此この樂らくを受うけん。是この故ゆゑに諸しよ餘よの罪つみの中うち、殺せつ罪つみは最もつとも重おもく、諸しよの  
 功く徳とくの中うちにて、不ふ殺せつは第一だいいつなることを知しる、世せ間けんの中うちにて、命いのちを惜おしむを第一だいいつとなす。何なにを以もつてか之これを知し  
 る、一切いっさいの世せ人にんの、甘あまんじて刑けい罰ばつ・刑けい殘ざん・拷ごう掠りやくを受うけても、壽じゆ命めいを護ごるを以もつてなり。  
 復また次つぎに、若もし人ひとあり、受う戒かいし、心こゝろに生おじ、口くちに言いく、「今日こんにちより、一切いっさいの衆しゆ生しやうを殺ころさす」と。是これ無む  
 量りやうの衆しゆ生しやうの中うちに於おて、愛あいし重おもんずる所ところの物ものを以もつて施しし與よふれば、得える所ところの功く徳とくも亦また復また無む量りやうなり。  
 佛ほとけの説ときたまふが如ごとくんば 三〇 「世よに五大ごだい施せあり。何なん等たうらか五ごなる。一いっには不ふ殺せつ生しやう、是これを最大さいだい施せと爲なす。

【三〇】 五大施の名義。

不盜、不邪淫、不妄語、不飲酒も亦復是の如し。復次に、慈三味を行すれば、其福無量にして、水火も害せず、刀兵も傷らず、一切の惡毒も中る能はざる所なり。五大施を以ての故に得る所是の如し。

復次に、三世十方の中に、佛を尊ぶを第一と爲す。佛、三摩提迦優婆塞に語りたまふが如く、んば、殺生に十罪あり。何等をか十と爲す。一には心に常に毒を懷いて、世世に絶えず。二には衆生憎

【二】 難提迦(ナンテカ)

【三】 殺生の十罪を擧ぐ。

惡して、眼に見ることを喜ばず。三には常に惡念を懷いて惡事を思惟す。四には衆生之を畏ること蛇虎を見るが如し。五には睡るとき、心怖れ覺めて亦安んぜず、六には常に惡夢あり。七には命終の時、狂ひ怖れて死を惡む。八には短命の業因縁を種う。九には身壞れ、命終つて、泥犁の中に墮す。十には若し出でて人と爲つては、常に當に短命なるべし。復次に、行者、心に念せよ。一切の命あるもの乃至昆蟲は、皆身を惜しむ、云何ぞ衣服飲食を以て自ら身の爲の故に衆生を殺さん。復次に、行者は常に大人の法を學すべし。一切の大人の中には、佛を最大と爲す。何となれば一切の智慧成就して、十力具足し、能く衆生を度し、常に慈愍を行じ、不殺戒を持つて、自ら佛を致得し、亦弟子に此の慈愍を行することを教ゆ。行者は大人の法を學せんと欲するが故に、亦當に殺さざるべし。

るか如何。

問うて曰く、我を侵さざる者には、殺す心を思ひ可し。若し侵害、強奪、逼迫を爲さば、是れ當

問うて曰く、我を侵さざる者には、殺す心を思ひ可し。若し侵害、強奪、逼迫を爲さば、是れ當

に云何がすべきや。答へて曰く應當に其の輕重を量るべし。若し人已を殺さば、先づ自ら「戒を全うするの利重きか、身を全うするを重しとなすか、戒を破るを失と爲んや、身を喪ふを失と爲んや」を思惟せよ。是の如く思惟して、已に持戒を重しと爲し、身を全うするを輕しと爲すことを知る。若し苟も免れて身を全うすとも、身に何の得る所かある。是の身を名けて、老病死の藪と爲す。必ず當に壞敗すべし。若し持戒の爲に身を失はば、其の利は甚だ重し。又復た思惟せよ、「我、前後に身を失すること、世世無數なり、或は惡賊禽獸の身と爲り、但財利諸の不善事を爲す、今乃ち淨戒をもつことを爲すことを得るが故に、此の身を惜まず、命を捨てて戒を持つことは、禁を毀つて身を全うするに勝れたると、百千萬倍にして喩と爲す可らず」と。是の如く定心し、應當に身を捨て、以て淨戒を護るべし。 一の

【四】 一須陀洹の人、殺家に生れ、羊に代つて自らを殺し、持戒せし因縁。

須陀洹の人の如きは、屠殺の家に生れ、年尙しうして人と成り、應當に其家業を修すべくして、而も殺生を肯んせず、父母は刀と并に一口の羊を興へて、屋中に閉著し、之に語つて言く、「若し羊を殺さずんば、汝をして出でて日月を見、生活の飲食を得せしめざらん」と。兒は自ら思惟して言く、「我、若し此の一羊を殺さば、便ち終に此業を爲せりとすべし、豈に身を以ての故に此の大罪を爲さん」と。便ち刀を以て自殺す。父母は戸を開いて見るに、羊のみ一面に在つて立ち、兒は已に命絶え、自殺の時に當つて即ち天上に生ぜり。若し是の如きは是れ壽命を惜まず、全く淨戒を護るが爲めなり。是の

如き等の義は、是を不養生戒と名く。

【一】 與へざるを取るとは、他の物と知り、盗心を生じて物を取り、去つて本處を離れ、物を我に屬す、是を盜と名く。若し作さざれば是を不盜と名く。其餘の方便、校計、乃至手に捉り、未だ地を離れざる者は、是を助盜の法と名く。財物に二種あり、他に屬するあり、他に屬せざる有り。他に屬する物を取るは、是れ盜罪なり。他に屬する物にも亦二種あり。一は衆落の中、二は空地なり。此の二種の物を盜心を以て取れば、盜罪を得。若し空地に有らば、常に檢校すべし。是の物の誰の圖に近きかと、是物の應當に「所」屬あるべきを知らば取るべからず。賊尼の中に種種の不盜を説くが如し、是を不盜の相と名く。

問うて曰く、不盜には何等の利あるや。答へて曰く、命に二種あり、一には内、二には外。若し財物を奪はば、是を外の命を奪ふと爲す。何とせば命は飲食・衣被等に依つての故に活くるを以てなり。若くは劫、若くは奪、是を外の命を奪ふと名く、偏に説くが如し。

【一】 一切の衆生は、衣食を以て自活す。若くは奪ひ、若くは劫取せば、是を命を助奪すと名く。【二】 是の事を以ての故に、智あるの人は劫奪すべからず。復次に、當に自ら思惟すべし、劫奪して物を得、以て自ら供養せば、身は充足すと雖も、會す亦た

【一】 盜の京戒を説く。

【二】 二種の財物。

【三】 第八問、不盜の利益如何。

當に死すべく、死して地獄に入り、家室親屬は共に樂を受くと雖も、獨り自ら罪を受け、亦救ふこと能はずしと。已に此の觀を得ば應當に盜せざるべし。復次に、是の與へざるを取るに二種あり。一

には偷、二には劫なり。此二は共に不與取と名く。與へざるを取る中に於て、盜を最も重しと爲す。何となれば一切の人は、財を以て自活するを以てなり、而るを或は穿窬して盜み取らば、是れ最も不淨なり。何となれば力の勝れたる人は、死を畏るること無くして、盜み取るを以てなり。故に劫奪の

中にて盜を重罪と爲す。偶に説くが如し。

『飢餓して身羸瘦し、罪を大苦の處に受くとも、他物に觸る可らざること、譬へば大火聚の如し。若し他物を盜取せば、其の主泣き、懊惱す。假使天王等も、猶亦以て苦と爲す。』

殺生の人の罪は重しと雖も、然も殺さるゝ者に於ては是れ賊なり。偷盜の人は一切の有物人中に於ける賊なり、若し餘の戒を犯すも、異國の中に於ては、以て罪と爲さざる者あり。〔而も〕偷盜の人は、一切の諸國に於て罪を治めざる無し。

問うて曰く、劫奪の人は、今世に人あり、其の健なるを讚美す。此の劫奪に於て、何を以てか作さざらんや。答へて曰く、與へざるを而も偷盜するは、是れ不善の相なり。劫盜の中に差降ありと雖も、俱に不善と爲す。譬へば美食に毒を雜へ、惡食に毒を雜ふるに、美惡は殊なりと雖も、毒を雜

【三〇】二種の盜、偷と劫との輕重。  
【三一】第九問、人あり劫奪の人の強健を讚美す。如何ぞ劫奪を作さざらんや。

ふることは異ならざるが如し。亦明と闇とに火を踏まんに、晝と夜とは異なりと雖も、足を焼くことは一なるが如し。今世の愚人は、罪福二世の果報を識らず、仁慈の心なくして、人の能く力を以て相侵し、他の財を強奪するを見て、讃じて以て強と爲す。諸佛賢聖は、一切を慈愍し、三世の殃禍の朽もざるを了達して、稱譽したまはざる所なり、是故に劫盜の罪は、俱に不善となし、善人行者の爲さざる所なるを知る。佛の説きたまふが如くんば、**四** 與へざるを取るに十罪あり。何等をか十と爲す。一には物の主、常に瞋る。二には重く疑ふ。三には非時に行じて籌量せず。四には惡人に朋黨して賢善を遠離す。五には善相を破る。六には罪を官に得。七には財物没入す。八には貧窮の業因縁を得。九には死して地獄に入る。十には若し出でて人と爲つては勤苦して財を求め、五家の共にする所、若くは王、若くは賊、若くは火、若くは水、若くは不受の子の用、乃至、藏理して亦失す。

**【一】** 劫盜の十罪。  
**【二】** 邪姪を論ず。

**四二二** 邪姪とは、若し女人の父母・兄弟・姉妹・夫主・兒子・世間の法・正法に守護せらるるを、若し犯す者あれば是を邪姪と名く。若し守護せずと雖も、法を以て守と爲す有り。何をか法守と云ふ。一切の出家の女人と、在家の一日戒を受くると、是を法守と名く、若くは力を以てし、若くは財を以てし、若くは誦誑し、若くは自ら妻の受戒するあり、或は乳兒〔を懐めるを姪する〕は道に非ず。乃至輩黨を以て姪女に與へて要を爲し、是の如くして犯す者を名けて邪姪となし、是の如きの種種を作さざるを名け

て不邪姪と爲す。

問うて曰く、（四）人守・人瞋・法守・破法よ、應に邪姪と名くべし。人自ら妻ありて「姪する」、何を以て邪と爲すや。答へて曰く、既に一日戒を聽受して、法の中に墮つ、本是れ「己が」婦なりと雖も、今は自在ならず、受戒の時過ぐれば則ち法守に非ず、有娠の婦人は、其身重きを以て、本習ふ所を厭ひ、又姪を傷むと爲す。兒乳する時其母を姪すれば、乳則ち竭く。又心姪欲に著するを以て復た兒を護らす。非道の處は則ち女根に非ず、女は心に樂はざるに強ひて非理を以てするが故に邪姪と名く。是の事を作さざるを名けて不邪姪と爲す。

問うて曰く、（五）若し夫主知らず、見ず、他を惱さざれば、何の罪あらんや。答へて曰く、其の邪なるを以ての故に、既に名けて邪と爲し、是を不正と爲す、是の故に罪あり。

復次に、此に種種の罪過あり。夫妻の情は異身同體なり、他の愛する所を奪つて、其の本心を破る、是を名けて賊と爲す。復た重罪あり。惡名醜聲にして、人の爲に憎まれ、樂は少くして畏ること多く、或は刑戮を畏れ、又夫主傍人に知られんことを畏れ、多く妄語を懷く。「これ」聖人の詞する所にして、罪中の罪なり。

復次に、姪の人は當に自ら思惟すべし、我が婦も他の妻と同じく女人たり、骨肉情態は彼此異なる

【二】第一〇問、自らの妻を姪して、何故に邪姪となるや。  
【三】第一一問、若し良人知らず、見ず、他を惱ますして姪せば、邪姪とならざるべきや如何。

ること無し。而も我何ぞ横まに惑心を生じ、邪意に隨逐することを爲さんや。邪淫の人は、爾今世後世の樂を破失すし。復次に、己の易る處を廻して、以て自ら心を制せよ。若し彼、我が妻を侵さば、我、則ち忿怒せん。若し我、彼を侵さば、彼も亦何ぞ異らん。己を恕して自ら制するが故に、慳に「邪淫を」作さざるべし。

復次に、佛の説きたまふが如くんば、邪淫の人は、後、罽罽地獄に墮して、衆苦備に受け、出でて人と爲ることを得ては、家道穆じからず、常に姪婦に値ひ、邪僻殘賊邪淫患を爲す。譬へば蝮蛇の如く、亦大火の如く、急に之を避けずんば、禍害將に及ばんとす。佛の説きたまふが如くんば、邪淫に十罪あり。一には常に姪せらるる所の夫主は之を危害せんと欲す。二には夫婦穆じからず、常に共に鬪爭す。三には諸の不善法日に增長し、諸諸の善法に於て日に損減す。四には身を守護せず、妻子孤寡なり。五には財産日に耗し、六には諸の惡事あつて常に人の爲に疑はる。七には親屬知識の愛喜せざる所なり。八には怨家の業因縁を種う。九には身壞れ、命終り、死して地獄に入る。十には若し出でて女人と爲つては、多人共に夫と爲り、若し男子と爲つては、婦貞潔ならず。是の如き等の種種の因縁を作らざる、是を不邪姪と名く。

【一〇】 今世後世の樂、名譽を擧げ、世人に愛好恭敬せられ、身心安樂なるは今世に得る所の樂なり。天に生じ、涅槃の利を得るは後世の樂なり。

【一一】 罽地獄、アサパトリヤ。

【一二】 邪淫の十罪を論ず。

〔四七〕 妄語とは、不淨心を以て、他を誑かさんと欲し、實を覆ひ隠して異語を出し、口業を生ず。是を妄語と名く。妄語の罪は言聲に従つて相解するより生ず。若し相解せざれば、實語ならずと雖も妄語の罪なし。是の妄語は、知るを知らずと言ひ、知らざるを知ると言ひ、見るを見ずと言ひ、見ざるを見ると言ひ、聞くを聞かずと言ひ、聞かざるを聞くと言ふ、是を妄語と名く。若し作さざれば是を妄語と名く。

問うて曰く、妄語に何等の罪ありや。答へて曰く、妄語の人は先づ自ら身を誑かし、然して後人を誑かす。實を以て虚と爲し、虚を以て實と爲し、虚實顛倒して善法を受けず。譬へば瓶を覆せば水を入るるとを得ざるが如し。妄語の人は心に慚愧なく、天道涅槃の門を閉塞す。此罪を觀知す、是故に作さざるなり。復次に、實語を觀知すれば、其の利甚だ廣し、實語の利は自ら己より出でて、甚だ得易しと爲す、是を一切出家の人の力と爲す。是の如きの功德は、居家出家の人、共に此の利あり、善人の相なり。復次に、實語の人は、其の心端直にして、苦を免ることを得易し、譬へば稠林の木を曳くに、直き者は出し易きが如し。

問うて曰く、若し妄語に是の如きの罪あらば、人は何を以ての故に妄語するや。答へて曰く、有る人は愚癡少智にして、事の苦厄に遭へば、妄語して脱せんことを求め、事の發するを知らず、今

〔四七〕 妄語の意義。

〔四八〕 第一二問、妄語に如何なる罪ありや。

〔四九〕 第一三問、若し妄語に是の如き罪あらば、人の妄語するは何故なるか。

世に罪を得て、後世に大罪報あることを知らざるなり。復た有る人は、妄語の罪を知ると雖も、慳貪・瞋恚・愚癡多きが故に、而も妄語を作すなり。復た有る人は、貪恚ならずと雖も、而も妄りに人の罪を證し、心に實に爾なりと謂ひ、死して地獄に墮つ。提婆達多の弟子 俱伽離の如きは、常に舍利弗、目犍連の過失を求む、是の時二人は、夏安居竟つて諸國に遊行し、天の大雨に値つて陶作の家に到り陶器を盛るの舍に宿す。此舍の中に先より一女人あり、闇中に在つて宿せしが、二人は「之を」知らざりき。此の女は、其の夜、夢に不淨を失し、晨朝、水に趣いて澡浴す。是の時、俱伽離は、偶行つて之を見る。俱伽離は能く人の交會の情狀を相知りしも、而も夢みると夢みざるとを知らず。是の時に俱伽離は、顧みて弟子に語るらく、「此の女人は昨夜人と情を通す」と。即ち女人に問ふ、「汝、何の處に在つて臥すや」と。答へて言く、「我、陶師の屋中に在つて寄宿す」と。又問ふ、「誰と共にせしや」と。答へて言く、「二比丘ありき」と。是の時、二人は屋中より出づ。俱伽離は見已つて、又以て之を相驗し、意に謂へらく、「二人は必ず不淨をなせり」と。先づ嫉妬を懷き、既に此の事を見て、遍なく諸の城邑聚落到に之を告げ、次に 祇桓に到つて此の聲を唱ふ。此の中間に於いて、梵天王來つて、佛に見えたとまつらんことを欲す。佛は靜室に寂念として三昧に入りたまへり。諸の比丘衆も亦各房を閉ちて三昧し、皆覺る可らず。即ち自ら思

【四】 俱伽離 (Kūśāliya) 又瞿伽離、仇伽離、俱迦離、俱迦利、瞿迦離に作る、譯して惡時者、牛守と云ふ、提婆達多の弟子なり。

【五】 祇桓とは祇園精舎のことなり。

惟すらく、「我、故らに來つて佛に見ゆるに、佛は三昧に入りたまふ、且つ還り去らんと欲す」と。即ち復た念じて言く、「佛の定より起ちたまはんこと、亦將に久しからじ」と。是に於て小らく住り、俱伽離の房の前に到り、其の戸を扣き、俱伽離に言く、「俱伽離よ、舍利弗目犍連は、心淨くして柔軟なり、汝之を誘つて、長夜に苦を受くること莫れ」と。俱伽離問うて言く、「汝は是れ何人ぞ」と。答へて言く、「我は是れ梵天王なり」と。問うて言く、「佛は汝が阿那含道を得たりと説きたまへり、汝何を以ての故に來るや」と。梵王は心に念じて、偈を説いて言く、

『無量の法を量らんと欲するも、應に相を以て取るべからず。無量の法を量らんと欲するも、是の野人は覆没す。』

是の偈を説き已つて、佛の所に到り、具に其の意を説く。佛の言はく、「善い哉、善い哉、快く此の偈を説けり」と。爾の時に、世尊は復た此の偈を説たまふ。

『無量の法を量らんと欲するも、應に相を以て取るべからず。無量の法を量らんと欲するも、是れ野人は覆没す。』

梵天王は、佛説を聽き已つて、忽然として現せず、即ち天上に還る。爾の時に俱伽離は、佛の所に到つて頭面に佛の足を禮し、却いて一面に住す。佛、俱伽離に告げたまはく、「舍利弗と目犍連とは、心淨くして柔軟なり、汝之を誘つて、長夜に苦を受くると莫れ」と。俱伽離、佛に白して言さく、「我



の瀧波羅地獄の中の壽を、一の分陀梨迦地獄の中の壽と爲し、二十の分陀梨迦地獄の中の壽を、一の摩呵波頭摩地獄の中の壽と爲す。俱伽離は是の摩呵波頭摩地獄の中に墮し、其の大舌を出して、五百の釘を以て之に釘ち、五百の具犁もて之を耕す。爾の時に、世尊は此の偈を説き言はく、  
 『夫れ士の生るるや、斧口の中に在り、身を斬る所以は、其の惡言に由る。呵すべきを讀じ、讚すべきを呵し、口に諸惡を集めて、終に樂を見ず。』

心口の業、惡を生せば、尼羅浮獄に墮して、具に百千世に滿ちて、諸毒の苦痛を受く。若くは阿浮陀に生じては、具に三十六(世)を滿たし別に更に五世あつて、皆諸の苦毒を受く。  
 心、邪見に依つて、賢聖の語を破るは、竹の實を生じて、自ら其の形を毀つが如し。』

是の如き等の心に疑謗を生じ、遂に決定するに至るも、亦是れ妄語なり。妄語の人は、乃ち佛語すら信受せざるに至る。罪を受くること是の如し、是を以ての故に妄語すべからず。  
 復次に、佛子羅睺羅の如きは、其の年幼稚にして未だ口を慎むことを知らず、人來つて之に「世尊、在すや不や」と問へば、詭つて「在さず」と言ふ。若し在さざる時、人、羅睺羅に、「世尊、在すや不や」と問へば、詭つて「佛、在す」と言ふ。有人「之を」佛に語ぐ、佛、羅睺羅に語げたまはく、深盤に

【光】分陀梨迦 (Pundarikā) は譯して紅蓮華といふ。  
 【六】摩呵波頭摩 (Mahāvastu) は譯して大蓮華といふ。  
 【六】羅睺羅の口を慎まざりし因縁。

水を取つて、吾がために足を洗へしと。足を洗ひ已るや、羅睺羅に語げたまはく、「此の澡盤を覆せし」と。

「羅睺羅即ち」勅の如く即ち覆す。佛の言はく、「水を以て之に注げし」と。注ぎければ、問うて言く、「

水は中に入るや不や」と。答へて言く、「入らず」と。佛、羅睺羅に告げたまはく、「無慚愧の人、妄語

して心を覆へば、道法の入らざること、亦復た是の如し」と。佛の説きたまふが如くんば、妄語に十

罪あり。何等をか十と爲す。【三二】一には口氣臭し。二には善神之を遠かり、非人便を得。三には實語あ

りと雖も、人信受せず。四には智人謀議して常に參預せず。五には常に誹

謗せられ、醜惡の聲周ねく天下に聞ゆ。六には人の敬せざる所にして、教

勅ありと雖も人「これを」承用せず。七には常に憂愁多し。八には誹謗の業

因縁を種う。九には身壞し、命終つて、當に地獄に墮すべし。十には若し

出でて人と爲つては、常に誹謗せらる。是の如きの種種を作さざる、是を不妄語と爲し、口の善律儀

と名く。

【三三】不飲酒とは、【三四】酒に三種あり。一には穀酒、二には果酒、三には藥草酒なり。果酒とは、蒲萄

阿梨訶樹果、是の如き等の種種を名けて果酒と爲す。藥草酒とは、種種の藥草を、米麴甘蔗の汁の

中に合和すれば、能く變じて酒と成ると。蹄畜乳酒に同じ、一切の乳熟すれば、中よ酒と作るべし。

略説すれば若くは乾、若くは濕、若くは清、若くは濁なり、是の如き等は能く人をして、心動き放逸な

ら

- 【三三】 妄語の十罪を擧ぐ。
- 【三四】 不飲酒の意義。
- 【三五】 三種の酒。
- 【三六】 葡萄(ドライキヤ)
- 【三七】 阿梨訶(アリスチ)

らしむ。是を名けて酒と爲す。一切應に飲まざる、是を不飲酒と名く。

問うて曰く、(七) 酒は能く冷を破り、身を益し、心をして歡喜せしむ。何を以ての故に飲まざるや。

答へて曰く、身を益すること甚だ少くして、損する所甚だ多し。是の故に飲むべからず。譬へば美飲

の、其中に毒を難ふるが如し。是れ何等の毒なるか。佛の難提迦優婆塞に語りたまふが如くんば、酒

に三十五の失あり。(六) 何等か三十五なる。一には現在世に財物虚しく竭く。何となれば人酒を飲んで

酔へば、心に節限なく、用を費すこと度なきを以てなり。二には衆病の門

なり。三には鬪諍の本なり。四には裸露にして恥なし。五には醜名惡聲に

して、人の敬はざる所なり。六には智慧を覆ひ没す。七には應に得らるべ

き物を得ず、已に得る所の物は散失す。八には伏匿の事を、盡く人に向つ

て説く。九には種種の事業廢して成辦せず。十には酔は愁の本と爲る。何となれば酔の中には失する

こと多く、醒め已つて慚愧憂愁すればなり。十一には身力轉た少なし。十二には身色壞る。十三には

父を敬ふことを知らず。十四には母を敬ふことを知らず。十五には沙門を敬はず。十六には婆羅門を

敬はず。十七には伯叔及び尊長を敬はず。何となれば醉悶恍惚として別つ所なきを以てなり。十八に

は佛を尊敬せず。十九には法を敬はず。二十には僧を敬はず。二十一には惡人と朋黨す。二十二には

賢善を疎遠す。二十三には破戒の人と作る。二十四には無慚無愧なり。二十五には六情を守らず。二

【七】 第一四問、酒は能く身を  
暖め、心を樂ましむ。何故に  
飲むべからざるや。  
【六】 酒の三十五失を列舉して  
飲酒の害を説く。

十六には色を縱ままして放逸なり。二十七には人の憎惡する所にして、之を見ることを喜ばず。二十八には貴重親屬及び諸の智識の共に摺棄する所なり。二十九には不善の法を行す。三十には善法を棄捨す。三十一には明人智士の信用せざる所なり。何となれば酒は放逸なるを以てなり。三十二には淫弊を遠離す。三十三には狂癡の因縁を種う。三十四には身壞れ、命終つて、惡道泥犁の中に墮つ。三十五には若し人と爲ることを得ては、所生の處常に當に狂駭なるべし。是の如き等の種種の過失あり、是の故に飲まず。偏に説くが如し。

『酒は覺知の相を失ふ、身色濁つて惡しく、智心動じて亂る、慚愧已に劫かされ、念を失して瞋心を増し、觀を失して宗族を毀る。』

是の如きを飲と名くと雖も、實に飲は死毒たり。瞋るべからずして瞋り、笑ふべからずして笑ひ、哭すべからずして哭し、打つべからずして打ち、語るべからずして語り、狂人と異なる無く、諸の善功德を奪ふ、愧を知る者は飲まず。』

是の如きの四罪を作さざるは、是れ身の善律儀にして、妄語を作さざるは、是れ口の善律儀なり、名けて優婆塞の五戒律儀と爲す。

問うて曰く、若し八種の律儀及び淨命は、是を名けて戒と爲さば、何を以ての故に、優婆塞は口律儀の中に於て、三律儀及び淨命なきや。答へて曰く、白衣の居家は、世間の樂を受け、兼ねて福

【一九】 第一五問、優婆塞は、口律儀の中に於て、三律儀及び淨命なきは何故なるか。  
 【二〇】 三律儀とは、四種の口業中の不惡口と不兩舌と不綺語とをいふ。

徳を修し、盡く戒法を行すること能はず、是の故に佛は五戒を持たしめたまふ。

復次に、四種の口業の中に、妄語は最も重し。復次に、妄語は心に 故作を生ず。餘は或は故作、或は不故作なり。

復次に、但妄語を説けば、已に 三事を攝す。復次に、諸の善法の中に、實を最大と爲す。若し

實語を説けば、四種の正語は皆已に攝するを得。復次に、白衣は世に處して常に官理し、家業を務め

使を作すべし、是の故に惡口ならざるの法を持ち難し。妄語は故らに重事

と作すが故に作に難せず。是の五戒に五種の受あり 五種の優婆塞と名

く。一には一分を行ふ優婆塞、二には少分を行ふ優婆塞、三には多分を行

ふ優婆塞、四には滿行の優婆塞、五には姪を斷する優婆塞なり。一分を行

ふとは、五戒の中に於て、一戒を受けて四戒を受持すること能はず。少分

を行ふとは、若くは二戒を受け、若くは三戒を受く。多分を行ふとは、四戒を受く。滿行とは、盡く

五戒を持つ。姪を斷すとは、五戒を受け已つて、師の前にて更に自ら誓言を作す。我は自らの婦に於

て、復た姪を行せず」と。是を五戒と名く。佛の偈もて説きたまへるが如し。

『不殺亦不盜、亦邪淫すること有らざる、實語不飲酒、正命は、淨心を以てす。

若し能く此を行せば 二世の憂畏を除き、戒福恒に身に隨ひ、常に天人と俱ならん。

- 【七二】 故作とは、故意に作すの義、又は故に作する意なり。
- 【七三】 三事とは、惡口と兩舌と妄語となり。
- 【七四】 五種の優婆塞。

世間の六時の華は、榮耀の色相發す、此の一歳の華を以て、天上には一日に具はる。

天樹自然に生じ、華蓋及び瓔珞あり、丹葩は燈の照すが如く、衆色相間錯す。

天衣は無央數にして、其の色若干種なり、鮮白にして、天日に映じ、軽く密にして間蔽なし。

金色は文飾を照し、斐亶として雲氣の如し、是の如きの上妙の服は、悉く天樹より出づ。

明珠天耳の瑤、寶釧は手足を曜し、心の好愛する所に隨つて、亦天樹より出づ。

金の華、瓊璃の莖、金剛を花鬚と爲し、柔軟の香は芬熏として悉く寶池より出づ。

琴瑟箏篋は、七寶を校飾と爲し、器妙なるが故に、音清し、〔七〕

れ一皆亦樹より出づ。

【七】 波難質妬(パーリアヤッタ)

一五 波難質妬樹は天上の樹中の王なり、彼の歡喜園に在つて、一切比すること有ること無し。

持戒を耕田と爲し、天樹は中より出づ、天厨の甘露味は、飲食すれば飢渴を除き、天女には監礙

無く、亦姪身の難無し。

熙怡して纏ままに逸樂し、食すれども便利の患なく、戒を持つて常に心を攝し、生を自恣の地に

得て、無事にして亦無難なり、常に樂志を肆ままにすることを得。

諸天は自在を得て、憂苦復た生せず、欲する所念に應じて至り、身光は幽冥を照す。是の如きの

種種の樂は、皆施と戒とに由る。若し此の報を得んと欲せば、當に勤めて自ら勉勵すべし、』

問うて曰く、美い今戸羅波羅蜜を説けば、當に以て成佛すべし、何を以てか乃ち天福を讚するや。答へて曰く、佛の言はく「三事は必ず報果を得ること虚しからず、布施は大福を得、持戒は好處に生じ、修定は解脱を得。若し單に戸羅を行せば、好處に生ずることを得、若し定を修し、智慧、慈悲、和合すれば三乗道を得」と。今は但持戒を讚す。現世の功德は、名聞安樂にして、後世の得報は、偈に讚する所の如し。三譬へば小兒は蜜を苦藥に塗りて、然る後に能く服するが如し。今先づ戒の福を讚じ、然る後に人能く戒を持つ。戒を持ち已つて大誓願を立て、佛道に至ることを得。是を戸羅は戸羅波羅蜜を生ずと爲す。又一切の人は皆樂に著するを以て、世間の樂は天上を最と爲す。若し天上の種種の快樂を聞いては、便能く戸羅を受行し、後天上の無常を聞いて、厭患の心を生じ、能く解脱を求む。更に佛の無量の功德を聞いて、若し慈悲心生すれば、戸羅波羅蜜に依つて、佛道に至ることを得。是を以ての故に戸羅の報を説くと雖も咎なし。

問うて曰く、天白衣の居家は、唯此の五戒のみなりや、更に餘の法ありや。答へて曰く七九有り。一日戒と六齋日戒を持てば功德無量なり。若し十二月一日より十五日に至るまで、此の戒を受持すれば、其の福最も多し。

【七〇】 第一六問、持戒波羅蜜多を説けば、當に成佛すべき筈なるに、今茲に天福を讚するは何故なるか。

【七一】 蜜を苦藥に塗るに譬ふ。  
 【七二】 第一七問、在家の持つべき戒法は、唯この五戒のみなりや、更に他の戒法ありや如何。

【七三】 一日戒と六齋戒。

問うて曰く、合云何が一日戒を受くるや。答へて曰く、一日戒の法を受くるには、長跪し合掌して是の如く言ふべし、「我某甲、今一日一夜佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す」と。是の如く二たびし、是の如く三たび歸依す。我某甲、佛に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟る」と。是の如く二たびし、是の如く三たび歸依し竟る。「我某甲、若くは身業不善、若くは口業不善、若くは意業不善にして、貪欲・瞋・患・癡の故に、若くは今世に、若くは先世に、是の如きの罪あり。今日誠心に懺悔す、身清淨に、口清淨に、心清淨ならん。八戒を受行するは是れ則ち

〔八一〕 布薩なり。諸佛の壽を盡くすまで殺生したまはざりしが如く。我某甲、

〔八一〕 第一八問、一日戒と八戒戒の作法如何。  
 〔八二〕 布薩は譯して善宿といふ。

一日一夜、生を殺さざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで盜したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、盜せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで姪したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜姪せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで妄語したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜妄語せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで飲酒したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜飲酒せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで高大なる牀の上に坐したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜高大なる牀の上に坐せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで、花の璪珞を著けたまはず、香を身に塗らざりしが如く、我某甲、一日一夜花の璪珞を著けず、香を身に塗らず、香熏の衣を著げざるも亦是の如し。諸



中に壽を盡くすまで盜すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと云ふべし。壽を盡くすまで邪淫せす、是れ優婆塞の戒なり。是の中に壽を盡くすまで邪淫すべからず、是事を若し能くせば當に諾すと云ふべし。壽を盡くすまで妄語せず、是れ優婆塞の戒なり。是の中に壽を盡くすまで妄語すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと云ふべし。壽を盡くすまで飲酒せず、是れ優婆塞の戒なり。是の中に壽を盡くすまで飲酒すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと云ふべし。是の優婆塞の五戒は、壽を盡くすまで受持して、當に三寶たる、佛寶法寶比丘僧寶に供養し、福德を勤修して、以て佛道を求むべし。

問うて曰く、何を以ての故に 六齋日に八戒を受け、福德を修するや。答へて曰く、是日は、惡鬼、人を逐うて人命を奪はんと欲し、疾病凶衰は人をして不吉ならしむ。是の故に 劫初の聖人は、人をして持齋し、善を修し福を作し、以て凶衰を避けしむ。是の時の齋法は八戒を受けず、直に一日食せざるを以て齋と爲す。後に佛出世して、之に教へ語つて言はく「汝當に一日一夜、諸佛の如く八戒を持し、日中を過ぎて食せざるべし」と。是の功德は人を將ひて涅槃に至らしむ。四天王釋の如く佛の説きたまふが如くんば、月の六齋日には、使者、太子及び四天王は、自ら下つて、

【六】 第二の問、六齋日に八戒を受くる理由如何。  
 【六六】 六齋日とは、毎月の八日と十四日と十五日と廿三日と卅日となり。齋とは「ニヤム」の謂。此の六箇日は四天王が人の善惡を伺ふ日、又は惡鬼の人を伺ふ日なり。して諸事を懷念、殊に正午を過ぎて一切の食物を絶つが故に齋日といふ。  
 【六七】 劫初とは、天地の初といふ程の義なり。

生の布施し、持戒し、父母に孝順することを觀察し、少ければ便ち忉利に上つて、以て帝釋に啓す。帝釋諸天は、心に皆悦ばず、説いて言く、「阿脩羅種は多く、諸天種は少し」と。若し布施し、持戒し、父母に孝順なること多ければ、諸天帝釋は心に皆歡喜し、説いて言く、「諸天の衆を増益し、阿脩羅を滅損す」と。是の時に釋提婆那民は諸天の歡喜するを見て、此の偈を説いて言く、

『六日神足、月に清淨戒を受持す、是の人は壽終つて後、功德必らず我が如くならん。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、「釋提桓因は是の如きの偈を説くべからず、何となれば釋提桓因は五衰三毒未だ除かず、云何が妄りに一日の戒を持てば、功德福報必らず我が如くなることを得んと言はん」と。若し此の戒を受持すれば、必ず應

に佛の如くなるべし、是れ則ち實説なり。諸天尊天は歡喜の因縁の故に、

福増多きことを得るなり。復次に、此の六齋日には惡鬼人を害し、一切を惱亂す。若し所在の丘聚郡縣國邑に齋を持ち、戒を受くるの善人あれば、此の因縁を以て、惡鬼遠く去つて、住處安隱ならん。是を以ての故に六日齋を持ち、戒を受くれば、福を得ること増多し。

問うて曰く、何を以ての故に諸の惡鬼の輩は此六日を以て、人を惱し害するや。答へて曰く、天地本起經に説く、劫の初めて成するの時、異なる梵天王の子あり、諸の鬼神の父たり。梵志の苦行を修して、天上の十二歳に滿つ、此六日に於て肉を割き、血を出し以て火中に著く。此故に諸の惡

【六】第二一問、諸の鬼神の輩が、特に此の六日に於いて人を惱害する理由如何。

鬼神きじんは、此この六日ろくにちに於てお、輒すなはち勢力せいりきあり。

問とうて曰いはく、(空くうもろもろ) 諸しよの鬼神きじんの父ちちは、何なにを以てもつか、此この六日ろくにちに於おいて身みの肉血にくけつを割さいて以てもつ、火中くわちゆうに

著つくるや。答こたへて曰いはく、諸しよ神しんの中うち、摩醯マヘーシユワラ首羅しよら神しんは、最大さいだいにして第一だいいつなり。諸神しよじんは皆みな日分にちぶんあり、摩醯マヘーシユワラ

首羅しよらは一月いちげつに四日しつかの分ぶんあり、八日はちにちと二十三日にじふさんにちと十四日じふしにちと二十九日にじふくにちとなり。餘まの神かみは一月いちげつに二日にちの分ぶん

り。月つきの一日いちにちと十六日じふろくにちと、月つきの二日にちと十七日じふしちにちとなり。其その十五日じふごにちと三十日さんじふにち

とは一切いっさいの神かみに屬ぞくす。摩醯マヘーシユワラ首羅しよらは諸神しよじんの主しゆたり。又また、日多ひおほきことを得うるが

故ゆゑに、其その四日しにちを數かへて齋さいと爲なす。二日にちは是れ一切いっさい諸神しよじんの日ひにして、亦また數かず

へて以て齋さいと爲なす。是故このゆゑに諸しよの鬼神きじんは、此この六日ろくにちに於てお、輒すなはち力勢りきせいあり。復また

次に、諸しよの鬼神きじんの父ちちは、此この六日ろくにちに於てお、輒すなはち力勢りきせいあり。復また

著つげ、十二歳じふにさいを過すぎ已まつて、天王てんわう來きたり下くだつて、其子そのこに語かたつて言いはく、「汝なんぢ、何なん

の願ねがひをか求もとむ」と。答こたへて言いはく、「我われ、子こあらんとを求もとむ」と。天王てんわう言いはく、「仙人せんじんの供養くやうの法ほふは、燒香せうかう甘かん

果くわの諸しよの清淨じやうじやうの事ことを以てもつ。汝なんぢ云何なんぢいかにんが血肉けつにくを以てもつ火中くわちゆうに著つげ、罪惡ざいあくの法ほふの如ごとくし、汝なんぢ善法ぜんぽふを破やぶつて

樂たのんで惡事あくじを爲なすや。汝なんぢをして惡子あくしを生うみ、肉にくを噉くひ血ちを飲のましめんと。是これを説とく時ときに當あたり、火中くわちゆうよ

り八大鬼はちだいきあつて出いづ。身みの黒くろきと墨すみの如ごとく、髮かみは黃わうに眼まなこは赤あかくして、大だいなる光明くわうめいあり、一切いっさいの鬼神きじんは

皆みな此この八鬼はちきより生うず。是故このゆゑに此六日ここのろくにちに於てお、身みの肉血にくけつを割さいて、以て火ひの中うちに著つげて勢力せいりきを得う。佛ぶつ

【九】 第二二問、諸の鬼神の父が、此の六日に於て肉血を割いて火中に投ぜし理由如何  
【一〇】 摩醯首羅(Mahेश्वरा) 譯して大白在神といふ  
【一一】 佛法によれば日に好惡なし。

法ほふの中うちの如ごときは、日ひに好かう悪あくなし。世よの惡あく日にちの因いん縁ねんに隨したがふが故ゆゑに、齋さいを持もち、戒かいを受うくることを教おしゆるのみ。

問とうて曰いはく、五三五戒ごかいと一いち日にち戒かいとは何いづれをか勝すぐれたりと爲せんや。答こたへて曰いはく、因いん縁ねんあるが故ゆゑに、二戒にかい俱ともに等ひとし。但ただ五戒ごかいは身みを終おそるまで持もち、八戒はつかいは一いち日にち持もつのみ。又また、五戒ごかいは常つねに持もつても、時ときは多おほくして戒かいは少すくなし、一いち日にち戒かいは時ときは少すくなくして戒かいは多おほし。

復また次に五三若もしし大心だいしんなければ、復またた身みを終おそるまで戒かいを持もつと雖いへども、大心だいしんある人ひとの、一いち日にち戒かいを持もつには如ごとかず。譬たとへば輓なん夫ふを將しょうと爲なせば、復またた兵へいを持もつこと終身しゅうしんなりと雖いへども、智勇ちゆう足たらず、卒つひに功名こうめいなきが如ごとく、英雄えいゆう奮發ふんぱつすれば、禍亂くわらん立ちどころに定さだまり、一いち日にちの勳功くんこう天下てんげを蓋おほふが如ごとし。是これに二種しゆの戒かいを居家こけの優婆塞うはさくの法ほふと名なく。居家こけの持戒ぢかいに凡およそ四種ししゆあり。下げ・中ちゆう・上じやうあり。下げ人にんの持戒ぢかいは今世こんぜの樂らくの爲ための故ゆゑなり。或あるは稱譽しょうよ名聞めいもんを怖おそり、上じやうあり。下げ人にんの持戒ぢかいは今世こんぜの樂らくの爲ための故ゆゑなり。或あるは苦役くやくを避さけて厄難やくなんを離はなれんことを求もとむるが故ゆゑなり。是かくの如ごときの種しゆ種じゆは是これれ下人げにんの持戒ぢかいなり。中人ちゆうにんの持戒ぢかいは、人中にんちゆうの富貴ふうき・歡娛くわんご・適意てきぎの爲ための故ゆゑなり、或あるは後世あひこの福樂ふくらくを期おのれ、己おのれに克かち自らみづかつと勉つとめて苦くるしむが爲ために、日ひは少すくなくとも得とる所ところは甚はなだ多おほし。是かくの如ごとく思惟いゆいん堅固けんこにして戒かいを持もつてば、譬たとへば商人しやうにんの遠とほく出いで深かく入いれば、利りを得うること必かならず

【九三】 第二三問、五戒と一日戒の勝劣如何。

【九四】 若し大心なければ終身持戒すと雖も、大心ある人の一日戒を持つに如かず。

【九五】 在家の四種の持戒を説く。

多きが如く、持戒の福の人をして後世の福樂を受けしむるも亦復是の如し。上人の持戒は涅槃の爲の故なり。諸法は一切無常なりと知るが故なり。苦を離れ常に樂にして、無爲ならんことを求めんと欲するが故なり。

復次に、持戒の人は其の心悔いず、心に悔いざるが故に喜樂を得。喜樂を得るが故に一心を得。一心を得るが故に實智を得。實智を得るが故に厭心を得。厭心を得るが故に離欲を得。離欲を得るが故に解脱を得。解脱を得るが故に涅槃を得。是の如きの持戒を諸の善法の根本と爲す。

復次に、持戒は八正道の初門たり、入道の初門は必ず涅槃に至る。

初品の中の、尸羅波羅蜜を讚するの義を釋す。

問うて曰く、八正道によれば、正語正業は中に在り、正見正行は初に在り、今何を以てか戒を八正道の初門と爲すと言ふや。答へて曰く、數を以て之を言へば、大なる者を始と爲す、正見は最大なり、是の故に初に在り。復次に、行道の故に見を以て先と爲す。諸法の次第の故に、戒は前に在り。譬へば屋を作るに棟梁は大なりと雖も、地を以て先と爲すが如し。上上人の持戒は、衆生を憐愍し、佛道の爲の故なり。諸法を知り實相を求むるを以ての故なり。惡道を畏れず、樂を求めざるが

【九五】 持戒は八正道の初門なり。  
【九六】 第二四問、正語正業は八正道の最初にあらずして、其中邊にあり。然るを今は戒を以て八正道の初門なりと説けり。そは事實に反するにあらずや。

故なり。是の如きの種種は、是れ上上人の持戒なり。是四は總じて優婆塞の戒と名く。出家の戒にも亦四種あり。一には沙彌及び沙彌尼戒、二には式叉摩那戒、三には比丘尼戒、四には比丘僧戒なり。

問うて曰く、若し居家の戒は天上に生ずることを得、菩薩の道を得、亦涅槃に至るとを得ば、復た何ぞ出家の戒を用ゐん。答へて曰く、俱に得度すと雖も、然も難易あり。居家は生業の種種の事務あり。若し心に道法を専らにせんと欲せば、家業則ち廢れ、若し専ら家業を修めんと欲せば、道事則ち廢る。取らず捨てざれば乃ち法を行すべし、是を名けて難と爲す。若し出家は俗を離れ忿亂を絶す、一向専心なれば、道を行すること易しと爲す。復次に、居家は慣閑にして多事多務、結使の根、衆惡の府なり。是を甚だ難しと爲す。出家は譬へば人あり、出でて空野に在るが如し、無人の處にして其の心を一にし、思なく慮なく、内想既に除き、外事亦去る。偏に説くが如し、

『林樹の間に閑坐し、寂然として衆惡を滅し、恬澹にして一心なるを得、斯の樂は天の樂に非ず。人は富貴利名衣好牀蓐を求む、斯の樂は安隱にあらず、利を求めて厭足すること無ければなり。』

【九七】 出家の四種の戒。  
【九八】 式叉摩那戒 (シクシャマナーナ) 正學女・學法尼と譯す。

【九九】 第二五問、若し在家の戒もて涅槃に至るとを得ば、何ぞ更に出家の戒を要せんや。  
【一〇〇】 得度とは、茲にては涅槃界に至ることを得るの義と解すべし。

納衣にして乞食を行ずるものは、動止に〔於て〕心常に一なり、自ら智慧の眼を以て諸法の實を觀

知し、種種の法門の中に皆以て等しく觀入し、解慧の心寂然たり、三界に能く及ぶもの無し。』

是を以ての故に出家の戒を修し、道を行ずることは易しと爲すことを知る。復次に、出家は戒を修

して無量の善律儀に得、一切を具足し滿たす。是の故に白衣は、等しく應に出家して具足戒を受くべ

し。復次に、佛法の中に於て、出家の法は第一にして、修し難し。 二〇二 闍音

毘提梵志、舍利弗に問ふ、「佛法の中に於て、何者か最も難きや。」舍利弗

答へて曰く、「出家を難しと爲す。」又問ふ、「出家は何等か難きや。」答へて

曰く、「出家の樂法を難しと爲す。」 既に樂法を得れば復何者か難しと爲

す。』諸の善法を修すること難し。』是を以ての故に應に出家すべし。復

次に 若し人出家する時は、魔王は驚き疑つて言く、「此人は諸の結使薄

からんとを欲す、必ず涅槃を得て、僧寶の數の中に墮せん」と。

復次に、佛法の中に於て出家の人は戒を破つて罪に墮すと雖も、罪畢つて解脱するを得。 優鉢

羅華比丘尼本生經の中に説くが如くんば、佛の世に在す時、此の比丘尼は六神通の阿羅漢を得、貴人

の舍に入り常に出家の法を讚す。諸の貴人、婦女に語つて言く、「姉妹よ出家すべし。』諸の貴婦女言

く「我等は少壯にして容色盛美なり。戒を持つと難しと爲す、或は當に戒を破るべし。」比丘尼言く、

【一〇】闍音毘提梵志と舍利弗との佛法中最も難きものに就ての問答。  
【一一】若し人出家すれば魔王も驚怖す。  
【一二】優鉢羅華比丘尼(一三三)三(三三三)と貴婦人との出家に關する問答。

一〇一 優鉢

「但出家せよ、戒を破らば便ち破れ。」問うて言く、「破戒は當に地獄に墮すべし、云何か破る可き」。  
答へて言く、「地獄に墮せば便ち墮せよ。」諸の貴婦女は皆之を笑つて言く、「地獄は罪を受く、云何  
か墮す可き。」比丘尼言く、「我、自ら本の宿命を憶念するに、時に戯女と作り、種種の衣服を着て舊  
語を説く。或る時は比丘尼の衣を着て、以て戯笑を爲す。是の因縁を以ての故に、迦葉佛の時、比丘  
尼と作り、自ら貴姓端正なるを恃んで心に傲慢を生じ、禁戒を破す。戒を破するの罪の故に、地獄に  
墮して種種の罪を受く。罪を受け畢竟りて、釋迦牟尼佛に値ひたてまつり、出家して、六神通の阿羅  
漢道を得たり。是の故に出家して戒を受くれば、復た戒を破ると雖も、戒の因縁を以ての故に阿羅漢  
道を得ることを知る。若し但惡を作つて戒の因縁なければ道を得ず。我乃  
ち昔時世世に地獄に墮し、地獄より出でて惡人と爲り、惡人死して還つて  
地獄に入り、都て所得なし。今此を以て證知するに、出家して戒を受くれば、復た戒を破ると雖も、  
是の因縁を以て道果を得べし」と。

復次に 佛、祇桓に在せしとき、一の醉へる婆羅門あり。佛の所に來到し、比丘と作らんことを

求む。佛、阿難に勅して、與めに剃頭して法衣を着せしむ。醉酒既に醒め、己の身の忽ちに比丘と爲  
れることを驚き恠しみ、即便ち走り去る。諸の比丘、佛に問ふ、「何を以てか、此の醉へる婆羅門に  
比丘と作ることを聽したまひしや」と。佛の言はく、「此婆羅門は無量劫の中に、初より出家の心な

【二四】佛醉へる婆羅門を出家せしめ給ひし因縁。

し。今醉へるに因るが故に、暫らく微心を發す、是の因縁を以ての故に當に出家得道すべし。是の如き種種の因縁により、出家の利及び功德は無量なり。是の故に白衣は五戒ありと雖も、出家に如かず。是の出家の律儀に四種あり。沙彌と沙彌尼と式叉摩尼と比丘尼と比丘となり。云何か沙彌と沙彌尼の受戒の法なるや。二〇五(ヤクマタ) 白衣來つて出家せんことを求めんと欲せば、應に二師を求むべし。一には 和尙、二には 阿闍梨なり。和尙は父の如く、阿闍梨は母の如し。本生の父母を棄つるを以て、當に出家の父母を求むべし。袈裟衣を著し、鬚髮を剃除し、兩手を以て急に和尙の兩足を捉ふべし。何を以てか足を捉ふるや。天竺の法は足を捉ふるを以て。第一の恭敬供養と爲す。阿闍梨は應に十戒を教ふること、受戒の法の如くなるべし。沙彌尼も亦是の如し。唯比丘尼を以て和尙と爲す。式叉摩那は 二〇六(ウツ) 法を受くること二歳なり。

問うて曰く、沙彌は十戒にして便ち具足戒を受くるなり。比丘尼の法の中に、何を以てか式叉摩那あつて、然る後に具足戒を受くることを得るや。答へて曰く、佛、世に在す時、一の長者の婦あり。懷妊を覺ちずして出家し、具足戒を受け、其の後身大に轉現す。諸の長者、比丘を讚り嬉へり。此に因つて二歳戒を學び六法を受くると有つてけて、然る後に具足戒を受くることを制す。

- 【二〇五】出家する時の作法。
- 【二〇六】和尙は梵語「Śramaṇa」の音譯にあらず、于闐語なりといふ。
- 【二〇七】阿闍梨(Ācārya) は譯して教師、又ば戒師といふ。
- 【二〇八】六法とは、不摩觸、不蓋、四錢以下、不殺畜生、不小妄語、不飲酒、不非時食をいふ。
- 【二〇九】第二五問、比丘尼は何故に式叉摩那の後、具足戒を受くるや。

問うて曰く、(二〇)若し讖嫌の爲に式又摩那あらば、豈に讖を致さざらんや。答へて曰く、式又摩那は未だ具足を受けず、譬へば小兒の如く、亦給使の如し。罪穢ありと雖も、人讖嫌せず。是の式又摩那に二種あり、一に十八歳の童女は六法を受け、二に夫家は十歳にして六法を受くることを得。若し具足戒を受くれば、二部の僧の中に應じて (二二) 五衣 (二三) 鉢盂を用ひ、比丘尼を和尚及び教師と爲し。比丘を戒師と爲す。餘は受戒の法の如し。略説すれば則ち五百戒、廣説すれば則ち八萬の戒あり。第三 (二四) 羯磨訖つて、即ち無量の律儀を得て比丘尼を成就す。比丘は則ち三衣、鉢盂、三師、十僧あり。受戒の法の如し。略説すれば二百五十、廣説すれば則ち八萬なり。第三羯磨訖つて、即ち無量の律儀の法を得、是を總じて名けて戒と爲し、是を尸羅と爲す。

答へて曰く、式又摩那は

【二〇】第二六問、式又摩那の讖嫌せられざる理由如何。

【二一】五衣は比丘尼の三衣即ち衆衆時衣・上衣・中著衣の外に祇支と覆肩となり。

【二二】鉢盂は梵漢兼舉の語、僧侶の食器即ち應量器のことなり。

【二三】羯磨(Karma)とは、授戒等の事業をなす一種の宣告式をいふ。而して第三羯磨とは、其の宣告式中の一部なり。

# 卷の第十四

初品の中の尸羅波羅蜜(多)の下を釋す。

問うて曰く、(二)に尸羅の相を知る、云何が尸羅波羅蜜(多)と爲すや。答へて曰く、有人は言ふ、「菩薩は戒を持ち、寧ろ自ら身を失ふとも小戒をも毀らす、是を尸羅波羅蜜(多)と爲す」と。上の蘇陀蘇

摩王經の中に説くが如くんば、身命を惜まず以て禁戒を全うす。菩薩の本身、曾つて大力の毒龍と

作るが如し。若し衆生前に在り、身力弱き者は、眼に視て便ち死し、身力

強き者は、氣往いて死す。是の龍は一日戒を受け、出家して静を求め、林

樹の間に入つて思惟し、坐すること久うして、疲懈して睡る。龍の法は、

睡る時形狀蛇の如し、身に文章あり七寶の色を雜ゆ。獵者之を見て驚喜

し言つて曰く、「此の希有にして得難きの皮を以て、國王に獻上し、以て服飾と爲さば、亦宜しから

ずや」と。便ち杖を以て其の頭を按じ、刀を以て其の皮を剥ぐ。龍は自ら念言すらく、「我が力は如

意なり、此の國を傾覆すること其れ掌を反すが如し。此の人は小物なり、豈能く我を困めんや。我

今戒を持つを以ての故に、此の身を計らず、當に佛語に従ふべし」と。是に於て自ら忍び、目を獸つ

て視す、氣を閉ちて息せず、此の人を憐愍す。持戒の爲の故に一心にして、剥ぐとを受くれども、悔

て視す、氣を閉ちて息せず、此の人を憐愍す。持戒の爲の故に一心にして、剥ぐとを受くれども、悔

【一】 第一問、持戒波羅蜜多とは何ぞや。

【二】 昔蘇陀蘇摩王經と作りて一日戒を受け、身皮を剥がるれども戒を譲りし因縁。

意を生せず。既にして皮を失ひ、赤肉地に在り。時に日大に熱し、土中を宛轉して大水に趣かんと欲す。諸の小蟲の來つて其身を食するを見れども、持戒の爲の故に、復收へて動かす。自ら思惟して言く、「今我が此身を以て諸の蟲に施すは、佛道の爲の故なり。今肉を以て施し、以て其身に充てば、後成佛の時、當に法施を以て、以て其の心を益すべし」と。是の如く誓ひ已つて、身乾れ命絶え、即ち第二の忉利天上に生ぜり。爾の時の毒龍は釋迦文佛是なり。時の獵師は提婆達等の六師是なり。諸の小蟲の輩は釋迦文佛の初めて法輪を轉じたまへるとき、八萬の諸天の道を得し者はなり。菩薩は戒を護つて身命を惜まず、決定して悔いず、其の事是の如し。是を尸羅波羅蜜「多」と名く。

復次に、菩薩は戒を持ち、佛道の爲の故に大要誓を作さく、必ず衆生を度し、今世後世の樂を求めず、名聞稱譽の法の爲にせざるが故に、亦自ら早く涅槃を求むることを爲さず、但衆生の長流に没在し、恩愛に欺かれ、愚惑に誤らるるが爲に、我當に之を渡して彼岸に到らしむべし」と。一心に持戒するが爲に善處に生じ、善處に生ずるが故に善人を見る。善人を見るが故に善智を生じ、善智を生ずるが故に六波羅蜜を行することを得、六波羅蜜を行するが故に佛道を得。是の如きの持戒を名けて、尸羅波羅蜜「多」と爲す。復次に、菩薩は戒を持つて、心樂しくして善く清淨なり。惡道を畏るゝが爲にせず、亦天に生ずるが爲にせず、但善を求めて清淨なり。戒を以

【三】菩薩の持戒は佛道の爲にして自身の爲にあらず。  
【四】長流とは、生死の大海を形容したる語なり。

て心に熏じ、心をして樂善ならしむ、是を尸羅波羅蜜〔多〕と爲す。復次に、菩薩は大悲心を以て戒を  
 持ち、佛道に至ることを得、是を尸羅波羅蜜〔多〕と名く。復次に、菩薩は戒を持ちて、能く六波羅蜜  
 〔多〕を生ず、是を則ち名けて尸羅波羅蜜〔多〕と爲す。云何が持戒は能く戒を生ずるの因となるや。  
 五戒は沙彌戒を得、沙彌戒に因つて律儀戒を得、律儀戒に因つて禪定戒を得、禪定戒に因つて無漏戒  
 を得。是を戒は戒を生ずと爲す。云何が持戒は能く檀〔那〕を生ずるや。檀〔那〕に三種あり、一に  
 は財施、二には法施、三には無畏施なり。戒を持ち、自ら檢めて、一切衆生の財物を侵さざる、是れ  
 則ち財施なり。衆生の見る者、其の所行を慕ひ、又爲に法を説いて、其を  
 して開悟せしむ。又自ら思惟すらく、「我、當に堅く淨戒を持ちて、一切  
 衆生の與に供養の福田と作り、諸の衆生をして無量の福を得せしむべし」と。  
 是の如きの種種を名けて法施と爲す。一切衆生は皆死を畏れ、戒を持つて害せず、是れ則ち無畏  
 施なり。

復次に、菩薩は自ら念すらく、「我、當に戒を持ち、此の戒の報を以て、諸の衆生の爲に轉輪聖王  
 と作り、或は閻浮提王と作り、若くは天王と作り、諸の衆生をして財に満足し、乏短する所なからし  
 むべし」と。然して後、佛は樹下に坐して魔王を降伏し、諸の魔軍を破り、無上道を成じ、諸の衆生  
 の爲に清淨の法を説き、無量の衆生をして老病生死の海を度らしむ。是を持戒の因縁は檀〔那〕波羅

- 【五】 持戒は能く戒を生ず。
- 【六】 持戒は能く布施を生ず。
- 【七】 三種の布施を説く。

蜜〔多〕を生ずと爲す。

云何が持戒は忍辱を生ずるや。持戒の人は心に自ら念じて言く、「我、今戒を持つは心を治めんが爲の故なり。若し戒を持つて忍ぶこと無くんば、當に地獄に墮すべし。戒を破らすと雖も、忍ぶこと無きを以ての故に、惡道を免れず、何ぞ縱まゝに忿つて自ら心を制せざる可んや。但心を以ての故に三惡趣に入る。是故に應當に好んで自ら勉め、強いて勤めて忍辱を修すべし」と。復次に、行者は戒徳を堅強ならしめんと欲せば、當に忍辱を修すべし。何となれば忍は大力なり、能く戒を牢固にし、動搖せざらしむを以てなり。復た自ら思惟すらく、「我が今の出家の形は俗と別なり、豈心を縱まゝにして世人の法の如くなる可んや。宜しく自ら勉勵して、忍を以て心を調へ、身口に忍ぶを以て、心にも亦忍を得べし。若し心に忍ばざれば、身口も亦爾なり、是の故に行者は當に身口心をして、諸の忿根を忍び絶たしむべし。復次に、是の戒は略して説けば則ち八萬あり、廣く説けば則ち無量なり。我當に云何ぞ能く具に、は無量の戒法を持たん。唯當に忍辱ならば衆戒自ら得べし。譬へば人あり、罪を主に得んに、王は罪人を以て之を刀車に載せ、六邊の利刃は間を容れず、奔逸し、馳走し、行くに路を擇ばざるが如し。若し能く身を持たば、刀の爲に傷けられず、是れ則ち殺せども死せざるなり。持戒の人も亦復た是の如く、戒を利刀と爲し、忍を持身と爲す。若し忍心固からざれば、戒も亦人を傷つく。又復た譬へば老人の夜行くに、

【八】持戒は能く忍辱を生ず。

杖なければ則ち蹶くが如し。忍を戒の杖と爲せば、人を扶けて道に至り、福樂の因縁も動搖すること能はず。是の如きの種種を名けて、持戒は屬提波羅蜜「多」を生ずと爲す。

云何が 戒を持つて精進を生ずるや。持戒の人は放逸を除去し、自ら力めて勤修し、無上の法を習ひ、世間の樂を捨てて善道に入り、涅槃を志求して以て一切を度し、大心にして懈らず、佛を求むるを以て本と爲す。是を持戒は能く精進を生ずと爲す。復次に、持戒の人は世の苦と老病死の患とを疲厭して、心に精進を生じ、必ず自ら脱せんことを求め、亦以て人を度す。譬へば野干の林樹の間に在りて、師子及び諸の虎豹に依隨して、其の殘肉を求め、以て自ら存らへ活るが如し。「然るに」有時空乏して、夜半に城を蹶え、深く人舎に入り、肉を求むれども得ず、避處に睡り息ひ、覺めざるに夜竟り、惶怖すること計り無し。走れば則ち自ら免

【九】持戒は能く精進を生ず。

れざるを慮り、住まれば則ち死し痛まんとを懼畏す。便ち自ら心を定めて、詐り死して地に在り、衆人來り見る。有る一人は、「我は野干の耳を須るん」と言ひて、即便ち截り取る。野干は自ら念すらく、「耳を截らるるは痛しと雖も、但身をして在らしめん」と。次に有一人は、「我は野干の尾を須るん」と言ひて、便ち復截り去る。野干復念すらく、「尾を截らるるは痛しと雖も、猶是れ小事なり」と。次に有一人は、「我は野干の牙を須るん」と言ふ。野干は心に念すらく、「取る者は轉多し、儻し我が頭を取らば則ち活路なけん」と。即ち地より起つて、其の智力を奮ひ、問關の徑を絶踊し、自ら濟ふ

ことを得たり。行者の心に苦難を脱せんとを求むるも、亦復た是の如し。若し老至る時は、猶故らに自ら寛にして、懇懃に決斷し精進すること能はず、病も亦是の如く瘳ゆる期あるを以て、未だ計を決すること能はず、死の至らんと欲する時、自ら冀なきことを知り、便に能く自ら勉めて果敢にして、懇懃に大に精進を修し、死地の中より涅槃に至ることを得るなり。

復次に、持戒の法は、譬へば人の射るに、先づ平地を得、地平にして然る後に心安し、心安くして然る後に挽き満ちて、然る後に陥いるること深きが如し。戒を平地と爲し、定意を弓と爲し、挽き満ちるを精進と爲し、箭を智慧と爲す。賊は是れ無明なり。若し能く是の如く力を展べて精進すれば、必ず大道に至り、以て衆生を度せん。復次に、持戒の人は能く精進を以て自ら五情を制し、五欲を受けず。若し心已に去れば、能く攝して還らしむ。是を戒に於て能く諸根を護ると爲す。諸根を守れば則ち禪定を生じ、禪定を生ずれば則ち智慧を生じ、智慧を生ずれば佛道に至ることを得。是を持戒は毗梨耶波羅蜜多を生ずと爲す。云何が持戒は禪を生ずるや。人に三業あり、諸善を作す。若し身口の業善なれば、意業も自然に善に入る。譬へば曲草の麻中に生ずるに、扶けざれども自ら直きが如し。持戒の力は能く諸の結使を羸らす。云何が能く羸らすや。若し戒を持たざれば、瞋恚の事來れば殺心即ち生じ、若し欲事至れば姪心即ち成す。若し戒を持つ者は、微瞋ありと

- 【一〇】 持戒精進を人の弓を射るに譬ふ。
- 【一一】 持戒は能く禪定を生ず。
- 【一二】 曲草も麻中に生ずれば自ら直し。

雖も殺心を生ぜず、婬念ありと雖も婬事を成せず、是を持戒は能く諸の結使をして羸らしむと爲す。諸の結使羸るるが故に、禪定を得易し。譬へば老病力を失へば、死事得易きが如く、結使羸るるが故に禪定得易し。復次に、人心は未だ息まず、常に實樂を求む。行者は戒を持ちて世の福を棄捨し、心放逸ならず、是の故に禪定を得ること易し。復次に、持戒の人は人中に生ずることを得。次に六欲天の上に生じ、次に界色に至り、色相を破つて無色界に生ず。持戒清淨なれば諸の結使を斷じて阿羅漢道を得、大心を以て戒を持ち衆生を愍念す、是を菩薩と爲す。復次に、戒を檢齋と爲し、禪を攝細と爲す。復次に、戒は身口を攝し、禪は亂心を止む。人の屋に上るに、梯に非ざれば昇らざるが如く、戒の梯を得ざれば禪も亦立たず。復次に、戒を破るの人は、結使の風強くして、其の心を散亂す。其の心散亂すれば則ち禪は得べからず。戒を持つ人は煩惱の風軟にして、心に散せず、禪定を得ること易し。是の如き等の種種の因縁、是を持戒は禪〔那〕波羅蜜〔多〕を生ずと爲す。

【三】 持戒は能く智慧を生ず。

云何が持戒は能く智慧を生ずるや。持戒の人は、此の戒相は何に従つて有るやを觀じ、衆罪に従つて生ずることを知る。若し衆罪なければ則ち亦戒なし。戒相は是の如く因縁に従つて有り、何が故ぞ著を生ぜん。譬へば蓮華は淤泥より出で、色鮮好なりと雖も、出處不淨なるが如し。是を以て心を悟り、著を生ぜしめざる、是を持戒は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に、持戒の人は心に自ら思惟す

らく、「若し我れ持戒の貴きを以て取る可く、破戒の賤きを捨つ可く、若し此の心あらば、般若に應せす。智を以て籌量するに心戒に著せず、取る無く捨つる無き、是を持戒は般若波羅蜜(多)を生ずと爲すし」と。復次に 戒を持たざる人は、利智ありと雖も、世務を營むを以て、種種に生業の事を求めんと欲し、慧根漸く鈍し。譬へば利刀を以て泥土を割けば、遂に鈍器と成るが如し。若し出家して戒を持ち、世業を營まず、常に諸の實相の無相なることを觀せば、先には鈍根なりと雖も、以て漸く轉た利ならん。是の如き等の種種の因縁を名けて、持戒は般若波羅蜜を生ずと爲し、是の如き等を名けて、尸羅波羅蜜は六波羅蜜を生ずと爲す。復次に、菩薩は戒を持ちて、以て畏れざるが故に亦愚癡に非ず、疑に非ず、惑に非ず、亦自ら涅槃の爲にせず。故に持戒は但一切衆生の爲の故なり、佛道を得んが爲の故なり、一切の佛法を得んが爲の故なり、是の如き相を名けて、尸羅波羅蜜と爲す。復次に、若し菩薩は、罪と不罪とに於て不可得なれば、是時を名けて尸羅波羅蜜(多)と爲す。

問うて曰く、若し人惡を捨てて、善を行するは是を持戒と爲す。云何が罪と不罪とは不可得なりと言ふや。答へて曰く、邪見瞋心の爲に不可得なりと言ふに非ず。若し人深く諸の法相に入つて空三昧を行せば、慧眼を以て觀するが故に罪は不可得なり。罪無なるが故に不罪も亦不可得なり。復次

【一四】 利刀も泥土を割けば鈍刀となるが如く、不持戒の人は利智ありと雖も世務のために終に鈍となる。

【一五】 第二問、菩薩の罪と不罪とに於いて不可得なる理由如何。

に、衆生は不可得なるが故に、殺罪も亦不可得なり。罪は不可得なるが故に、戒も亦不可得なり。何となれば殺罪あるを以ての故に則ち戒あり。若し殺罪なければ、則ち亦戒なければなり。

問うて曰く、今、衆生は現に有り、云何が衆生は不可得なりと云ふや。答へて曰く、肉眼の見る所は是を非見と爲す。若し慧眼を以て觀れば則ち衆生を得ず。上の檀波羅蜜多の中に、施者なければ受者なく、財物なしと説くが如く、此も亦是の如し。復次に、若し衆生あらば、是れ五衆なりとなすや、五衆を離るとなすや。若し是れ五衆ならば、五衆は五あり、衆生は一たり。是の如くんば五を一となす可らず、一を五と爲す可らず。譬へば市に物を易ふるに、直五疋なるを一疋を以て之を取るとは、則ち得可らざるが如し。何となれば一は五と作すと得べからざるを以てなり。是を以ての故に五衆は一衆生と作ると得可らざるを知る。復次に、五衆は生滅して常相なし。衆生の法は先世より後世に來至し、罪福を三界に受く。若し五衆は是れ衆生ならば、譬へば草木の自ら生じ、自ら滅するが如く、是の如きは則ち罪縛なく亦解脫なし。是を以ての故に、五衆は是れ衆生に非ることを知る。若し五衆を離れて衆生あらば、先に、神は常にして遍すと説けるが中に已に破するが如し。

【一六】 第三問、衆生の不可得なる所以を問ふ。

【一七】 常とは常住と熟字し、永久常恒の義なり。

復次に、五衆を離るれば則ち我見の心生せず、若し五衆を離れて衆生あらば、是れ常に墮すと

爲す。若し常に墮せば、是れ則ち生なく死なし。何となれば生は先に無くして今あるに名け、死は已に生じて便ち滅するに名くればなり。若し衆生常ならば、應に五道の中に遍すべし。先に已に常は有なり、云何ぞ今復來り生せん、若し生あらずんば則ち死あること無し。

問うて曰く、(二八)定んで衆生あり、何を以ての故に無しと言ふや。五衆の因縁によりて (二九)衆生法あることは、譬へば五指の因縁によりて (三〇)拳法生ずるが如し。答へて曰く、

此の言は非なり。若し五衆の因縁によりて衆生法あらば、五衆を除きて則ち別に衆生の法あるとは、然も得べからざるなり。眼に自ら色を見、耳に

自ら聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を知り、身に觸を知り、意に法を知る、空にして無我の法なり。此の六事を離れて更に衆生なし。諸の外道の

輩は、倒見の故に言く、一眼に能く色を見る。是を衆生と爲し、乃至、意に能く法を知る、是を衆生と爲す。又能く憶念して能く苦樂を知る、是を衆生と爲す」と。但是の見

を作して衆生の實を知らず。譬へば一の長老大徳の比丘の如きは、人、是を阿羅漢と謂つて、多く供養を致す。其の後病死す、諸の弟子は供養を失はんことを懼るるが故に、夜之を盗み出し、其の臥處

に於て被枕を安施し、師在すが如く、其の狀臥するが如くならしむ。人、來つて疾を問ふ、「師は何許に在りや」と。諸の弟子の言く、「汝牀上の被枕を見ずや」と。愚者は之を審察せずして、「師は病

【二八】 第四問、衆生の存在は現實なり、然るを何故に無しといふや。

【二九】 衆生法とは 衆生なるものと云ふほどの意味なり。

【三〇】 拳法とは、拳なるものと云ふほどの義なり。

に臥す」と謂つて、大に供養を送つて去り、是の如くする一に非ず。復た智人あり、來つて之を問へるに、諸の弟子亦是の如く答ふ。智人言く、「我は被牒牒擲を問はず、我は自ら人を求む」と。彼を發いて之を求むるに竟に人の得べき無し。三 六事の相を除いて更に我人なく、知者、見者も、亦復た是の如し。復次に、若し衆生は五衆の因縁に於て有らば、五衆無常なれば、衆生も亦無常なり。何となれば因果は相似するを以てなり。若し衆生無常なれば、則ち後世に至らず。

復次に、若し汝の言ふが如くんば、衆生は本より已來常に有ならん。若し爾らば衆生は應に五衆を生すべく、五衆は衆生を生すべからず。今五衆の因縁は衆生の名字を生ず、無智の人は名を遂うて實を求む。是故に衆生は實に無なり。若し衆

【二】六事の相一は、眼耳鼻舌身意の六根をいふ。

生なくんば亦殺罪なし、殺罪なきが故に亦持戒なし。復次に、是の五衆は深く入つて之を觀じ、分別して空を知れば、夢の所見の如く、鏡中の像の如げん。若し殺は夢中の所見、及び鏡中の像ならば、殺罪あることなり、五陰の空相を殺す。衆生も亦復是の如し。

復次に、若し人、殺罪を樂はず無罪に貪著すれば、是の人は被戒の罪人を見れば則ち輕慢し、持戒の善人を見れば則ち愛敬す。是の如き持戒は則ち是れ罪を起すの因縁なり。是を以ての故に罪不罪は不可得なりと言ふ、故に應に尸羅波羅蜜「多」を具足すべし。

初品の中の 屬提波羅蜜の上を釋す。

心、動ぜざるが故に、應に屬提波羅蜜(多)を具足すべし。

問うて曰く、云何が屬提と名くるや。答へて曰く、忍辱に二種あり、生忍と法忍とな

り。菩薩は生忍を行じて無量の福德を得、法忍を行じて無量の智慧を得、

福德と智慧の二事を具足するが故に、願ふ所の如くなることを得。譬へ

ば人の目あり足あれば、意に随つて能く到るが如し。菩薩は、若くは惡口

罵詈に遇ひ、若くは刀杖を加へらるれども、思惟して罪福の業の因縁を知

る。諸法は内外畢竟空にして、我なく我所なし。三法印を以て諸法を印

するが故に、力能く報うと雖も、惡心を生せず、惡口の業を起さざるな

り。爾の時に 心數法生ずるを名けて忍を爲す。是の忍法を得るが故に、

忍智牢固なり。譬へば畫彩は膠を得れば、則ち堅著するが如し。有人の言

く、「善心に二種あり、麤あり細あり、麤を忍辱と名け、細を禪定と名く。

未だ禪定を得ずして、心に樂んで能く衆惡を遮る、是を忍辱と名け、心に禪定を得、樂んで衆惡を爲

さざる、是を禪定と名く。是忍は是れ心數法にして心と相應し、心行に隨ひ、業に非ず業報に非ず、

業行に隨ふ」と。有人の言く、「二界繫なり」と。有人の言く、「但欲界繫なり、或は不繫なり」と。色界

【一】 屬提波羅蜜多 (Kṣantipāramitā) 屬提は譯して忍辱といふ。

【二】 第五問、忍辱とは何ぞや。

【三】 二種の忍辱を擧ぐ。

【四】 三法印とは、佛教の三大原理の印章といふ義にして、諸行無常と諸法無我と涅槃寂靜となり。

【五】 心數法とは、心の有するもの義にして新譯家の所謂心所法なり。

には外惡の忍ぶ可き無きが故に、亦は有漏亦は無漏なり。凡夫聖人俱に得るが故に、己心他心の不善法を障ふるが故に、名けて善と爲す。善の故に或は思惟斷、或は不斷なり。是の如き等の種種は阿毗曇に廣く分別せり。

問うて曰く、三云何ぞ名けて生忍と爲すや。答へて曰く、二種の衆生あり、來つて菩薩に向ひ、一は恭敬供養し、二は瞋り罵り打ち害す。爾の時に菩薩は、其の心能く忍び、敬養の衆生を愛せず、加惡の衆生を瞋らず、是を生忍と名く。

問うて曰く、三云何が恭敬供養は之を名けて忍と爲すや。答へて曰く、二種の結使あり。一は愛に屬する結使、二は恚に屬する結使なり。恭敬供養して恚を生せずと雖も、心をして愛著せしむるは、是を軟賊と名く。是の故に此に於て應當に自ら忍んで著せず、愛せざるべし。云何が能く忍ぶや。其の無常を觀するに、是れ結使の生處なり。佛の所説の如くんば、「利養の窟深きこと、譬へば皮を斷じて肉に至り、肉を斷じて骨に至り、骨を斷じて髓に至るが如し。人利養に著すれば則ち持戒の皮を破り、禪定の肉を斷じ、智慧の骨を破り、微妙の善心の髓を失ふ」と。佛初めて

迦毗羅婆國に遊びたまふときのこときは、千二百五十の比丘と俱たりき。悉く是れ梵志の身にして、火を供養するが故に形容憔悴し、食を絶して苦行するが故に膚體瘦せて黒し。

【一七】 第六問、生忍と名くる理由如何。以下第十四卷の終まで、生忍の何たるかを説く。  
【一八】 第七問、恭敬供養を忍と名くる理由如何。  
【一九】 結使とは、煩惱の異名なり。  
【二〇】 迦毗羅婆(Kapilavastu)

三 淨飯王は心に念じて言く、「我が子の侍従は、復た心清く淨潔なりと雖も並に容貌なし、我當に累重く子孫多き者を選び取つて、家より一人を出して佛弟子と爲すべし」と。是の如く思惟し已つて、勅を國中に下し、諸釋の貴族の子弟を揀擇し、應に之を身に書して、皆出家せしむ。是の時に解飯王の子、提婆達多是、出家學道して六萬の法聚を誦し、精進修行して十二年に滿つ。其の後供養の利の爲の故に、佛の所に來至し、神通を學せんことを求む。佛、憍曇に告げたまはく、「汝五陰の無常を觀じ、以て通を得、亦神通を得べし」と。而も爲に通を取るの法を説かず。出でて舍利弗、目犍連、乃至五百の阿羅漢に求むれども、皆爲に説かずして言く、「汝當に五陰の無常を觀じて以て得道すべく、以て通を得べし」と。求むる所を得ざれば、涕泣して樂しまず。阿難の所に到つて神通を學せんことを求む。是の時に阿難は未だ他心智を得ず、其の兄なるを以ての故に、佛の言ふ所の如く、以て提婆達多に授く。通法を受學し、山に入つて久しからずして便ち五神通を得、五神通を得已つて、自ら念すらく、「誰か當に我が輿めに、檀越を作るべき者あるや」と。王子阿闍世の如きは大王の相あり、輿に觀厚を爲さんと欲し。天上に到つて天の食を取り、還つて饕但羅越に到つて自然の硬米を取り、閻浮林の中に至つて閻浮果を取り、王子阿闍世に與ふ。或時は自ら其の身を變じて象寶馬寶と作り、以て其の心を惑はし、或は嬰孩

【二】淨飯王、釋氏をして出家せしめし因縁。

【三】諸釋とは、諸の釋迦族をいふ。

【三】提婆達多是出家學道すれども、忍心なく、三逆罪を造り、生きながら地獄に墮らし因縁。

【三】通法を受學し、山に入つて久しからずして便ち五神通を得、五神通を得已つて、自ら念すらく、「誰か當に我が輿めに、檀越を作るべき者あるや」と。

【三】王子阿闍世の如きは大王の相あり、輿に觀厚を爲さんと欲し。

【三】天上に到つて天の食を取り、還つて饕但羅越に到つて自然の硬米を取り、閻浮林の中に至つて閻浮果を取り、王子阿闍世に與ふ。

【三】或時は自ら其の身を變じて象寶馬寶と作り、以て其の心を惑はし、或は嬰孩

と作つて其の膝の上に坐す。王子之を抱いて啼嗽して唾を與ふれば、時時自ら己が名を説いて太子をして之を知らしめ、種種の變態を以て其の心を動かす。王子は意に惑ひ、**【三】** 秦園の中に於て大精舍を立て、四種の供養、並に種種の雜供、物として備らすと云ふこと無く、以て提婆達多に給し、日に諸大臣を奉りて、自ら爲に五百釜の羹飯を造れり。提婆達多は大に供養を得たりしも、而も徒衆尠少なり、自ら念すらく、「我は三十相あり、佛に滅すること未だ幾ばくならず、直弟子未だ集まらざるを以てす、若し大衆圍遶せば、佛と何ぞ異ならん」と。是の如く思惟し已つて、**【四】** 僧を破り、五百の弟子を得んとの心を生ず。舍利弗・目犍連の説法教化するに、僧は還つて和合す。爾の時に提婆達多は便ち惡心を生じ、山を推して佛を壓す、金剛力士、金剛杵を以て遙に之に擲つに、碎石逆り來つて佛の足の指を傷く。華色比丘尼之を呵すれば、復拳を以て尼を打ち、尼は即時に眼出でて死せり。三逆罪を作り、惡邪の歸 **【五】** 富蘭那外道等と親厚を爲し、諸の善根を斷じて心に愧悔なし。復惡毒を以て、指爪の中に著け、佛を禮するに因り、以て佛を中傷せんと欲す。去らんと欲して未だ到らざるに、王舍城の中に於て、地自然に破裂し、火車來り迎へて生きながら地獄に入る。提婆達多の身に三十相あつて、而も其の心を忍伏すること能はず、供養の利の爲の故に、而も大罪を爲し、生きながら地獄に入る。是を以ての故に、「利養

**【三】** 秦園は、梵語菴羅 (Aśoka) 樹園の訛略

**【四】** 破僧、僧は和合の集團なり、其の和合を破るを破僧といふ

**【五】** 富蘭那 (Pulastya) 六師外道の一、佛界外道なり。

の瘡は深く皮を破つて髓に至る」と言ふ。當應に供養の人を愛するの心を除却すべし。是を菩薩の忍心して、供養恭敬の人に愛著せずと爲す。

復次に 供養に三種あり。一には先世の因縁福徳の故に、二には今世の功徳、戒禪定・智慧を修するが故に、三には虚妄欺惑にして、内に實徳なく、外清・白の如くにして、以て時人を誑して供養を得。此の三種の供養の中に於て、心に自ら思惟すらく、「若し先世の因縁にして、福徳を勤修し、今供養を得ば、是れ勤身の爲に、之を作して自ら得るのみ、何爲ぞ此に於て貢高を生せん。譬へば春に種を、秋に穫るが如し、自ら力を以て得るのみ、何ぞ自ら憍るに足らんや」と。是の如く思惟し已つて、其の心を忍伏すれば、著せず憍らざるなり。若し今世の功徳の故に供養を得ば、當に自ら思惟すべし、「我は智慧を以て、若くは諸法の實相を知り、若くは能く結を斷ず。此の功徳を以ての故に、是の人供養す、我に於て事なし」と。是の如く思惟し已つて、自ら其の心を伏すれば、自ら憍り高らず、此れ實に愛樂の功徳にして、我を愛せざるなり。三蔵比丘の如きは、阿蘭若の法を行じて一の王寺に至るに、寺に大會を設く。門を守るの人、其衣服の塵穢なるを見て、門を遮つて前ましめず、是の如きこと數數なり。衣服の弊なるを以ての故に、毎に前むことを得ず。便ち方便を作して假りに好衣を借つて來る。門家は之を見て前むことを聽して禁

【七】 三種の供養  
一 貢高を拒まれ、好衣を著て供養に預りしかば、彼は其の衣を抜いて美食をそれに與へたり。

せず。既に會に至つて坐し、種種の好き食を得て先づ以て衣に與ふ。衆人問うて言く、「何を以てか  
 斷るや」と。答へて言く、「我、比、數來る。而も母に入るとを得ず。今、衣を以ての故に此座に  
 在るとを得て、種種の好食を得。實に是れ衣の故に之を得るなり、故に以て衣に與ふ」と。行者は修  
 行の功德持戒・智慧を以ての故に、而も供養を得。自ら念せよ、此れ功德の爲にして我が爲に非ざるな  
 り」と。是の如く思惟して能く自ら心を伏す、是を名けて忍と爲す。若し虛妄欺僞にして供養を得ば、  
 是れ自らを害すと爲す、近づく可らざるなり。當に自ら思惟すべし、「若し我、此の虚妄を以て供養  
 を得ば、惡賊劫盜の食を得ると異なること無し、是を欺妄の罪に墮すと爲  
 す」と。是の如く三種の供養の人の中に於て、愛著せず亦自ら高らざる、  
 是を生忍と名く。

問うて曰く、人未だ道を得ずして、衣食を急と爲さば、云何が方便し

て能く忍を得、心著せず、給施の人を愛せざらんや。答へて曰く、智慧力を以て、無常相苦相無我  
 相を觀じ、心に常に願患す。譬へば罪人の頸を受くべきに臨んで、復た美味前に在り、家室勸諭すと  
 雖も、死を憂ふるを以ての故に、餽饌を飲食することを欲すと雖も、滋味を覺えざるが如し。行者も  
 亦爾なり。常に無常相と苦相を觀じ、供養を得と雖も、心亦著せず、又、麤麁の虎の爲に拵たれ、之  
 を逐追すれども捨てず、好草美水を得て飲食すと雖も、心に染著なきが如し。行者も亦爾なり、一常

【元】第八問、人未だ道を得ずして衣食を得るに急ならば、  
 項でか能く、給施の人に愛著  
 せず、心に自ら忍ぶことを得  
 らんや。

に無常の虎の爲に逐はれて、須臾も捨てず」と思惟し、厭惡して美味を得と雖も亦染著せず、是の故に行者は供養人の中に於て、心自ら忍ぶことを得。

復次に、若し女人あり來つて娛樂せんと欲して、菩薩を誑惑す。菩薩は是の時、當に自ら心を伏し、忍んで「慾情を」起らしめざるべし。釋迦牟尼佛の如きは、菩提樹下に在せしとき、魔王憂愁して

三王女を遣はす。一を樂見と名け、二を悦彼と名け、三を渴愛と名く。來つて其の身を現じ、種種の姿態を作して菩薩を壞らんと欲す。菩薩は是の時、心傾動せず、目に暫らくも視たまはざりき。三女念じて言く、「人心は同じからず、好愛は各異

なる、或は少きを好むあり、或は中年を愛し、或は長を好み、短を好み、白を好み、黒を好む、是の如く衆好は、各愛する所あり」と。是の時三

女は各各化して五百の美女と作り、一の化女は、無量の變態を作して林中より出づ。譬へば黒字電

光の暫らく現るるが如く、或は揚眉、頓睫、凝睇、細視、衆の妓樂、種種の姿媚を作して、來つて菩薩を迎へ、態身を以て菩薩に觸れ逼らんと欲す。爾の時密迹金剛力士、目を瞋らして之を叱す、「此

は此れ何人ぞ、汝、妖媚、敢へて來り觸れ嬖すや」と。爾の時、密迹は偈を説いて之を呵す、

『汝知らすや、天帝は好を失して黃髮に、大海の水は清美にして、今日盡く苦鹹なり。汝知らすや、月減じて 婆藪の諸天墮つ、火は本より天口となり、今一切を噉ふことを。』

【四〇】 成道の時、魔王三女を遣はしたるに、佛能く之を忍びし因縁。  
【四一】 婆藪(ラス)

汝此の事を知らずして、取へて此の聖人を輕んず」と。是の時衆女は遑遑して小しく退き、菩薩に語つて言く、「今此の衆女は、端嚴無比なり、自ら意を娛しましむ可し、端坐して何をか爲さん」と。菩薩言く、「汝等是不淨臭穢なり、惡を去り、妄に談すること勿るべし」と。菩薩は是の時、即ち偈を説いて言はく、

〔三〕「是の身は穢敷と爲す、不淨物にして腐積せり。是は實に行剛と爲す、何ぞ以て意を娛ましむるに足らんや。』

女は此の偈を聞いて自ら念すらく、「此の人は、我等の清淨の天身を知らずして、而も此の偈を説くし」。即ち自ら身を變じて、還つて本形に復し、光耀焜鑠として林樹の間を照し、天の伎樂を作し、菩薩に語つて曰く、「我が身是の如し、何の呵す可きか有るし」と。菩薩答へて言はく、「時至れば自ら知る」と。問うて曰く、「此の言は何の謂ぞし」と。偈を以て答へ言はく、

〔四〕「身は是れ穢敷何ぞ樂むに足らんや。」

『諸天の園林の中、七寶の蓮華の池に、天人相娛樂するも、失ふ時あり、汝自らはの時無常を見、て、天上の樂は皆苦なりと知らん。汝當に欲樂を厭ひ、正眞の道を愛樂すべし』と。

女は偈を聞き已つて心に念すらく、「此の人は大智無量なり、天の樂しく清淨なるすら、猶ほ其の惡を知る、當る可らざるなり」と。即時に滅し去る。菩薩は是の如く、淫欲の樂を觀じて、能く自ら



復次に、女人の相は、若し敬待を得れば、則ち夫の心をして高からしむ。若し敬待の情を捨つれば、則ち夫の心をして怖れしむ。女人は是の如く、恒に煩惱憂怖を以て人に興ふ、云何ぞ近づくべらんや。聖・親好を乖離するは女人の罪なり、巧に人の惡を察するは女人の智なり。大火の人を燒くは是れ猶近づく可く、清風の形なきは、是れ亦捉ふ可く、虺蛇の毒を含むは猶亦觸る可く、女人の心は實を得べからず。何となれば女人の相は、富貴端・正名・聞智徳・族・姓・技藝・辯言・親厚・愛重を觀ず、都て心に在らず、唯欲にのみ是を親む。譬へば蚊・龍の好醜を擇ばずして、唯人を殺さんと欲するが如し。又復た女人は憂苦・憔悴を瞻視せず。給養・敬待すれば、憍奢制し回し。復次に、善人の中には之を視ると怨のつては、則ち自ら畜まゝに心高ぶり、無智の人の中には之を視ると怨の如く、富貴の人の中には、之を追ふて敬愛し、貧賤の人の中には、之を視ると狗の如く、常に欲心に隨つて功德に隨はざるなり。説くが如きは、國王に女あり、名けて 拘牟頭と曰ふ。捕魚師あり、(曇) 連婆伽と名く。道に隨つて行き、遙に王女の高樓の上在るを見る。意の中に面を見、想像して染著し、心暫らくも捨てず、彌日月を歷るも飲食すること能はず。母其の故を問へば、情を以て母に答ふ、「我、王女を見て、心に忘るること能はず」と。母兒を諭して言く、「汝は是れ小人、王女の尊貴なるを得べからず」と。兒曰く、「我、心に顯樂

【四三】 女の心は危險にして、其の誠實を望み難きを説く。

【四四】 拘牟頭(Kumuda) 譯して地喜花、赤蓮華、白蓮華、青蓮華、黄色花等といふ。又蓮華の未だ開かざるものをも云ふ。

【四五】 連婆伽が王女を觀慕せし因縁。

して、暫らくも忘ること能はず、若し意の如くならずんば、活ること能はざるなり」と。母は子の爲の故に、王の宮中に入り、常に肥へたる魚鳥の肉を送り、以て王女に遺つて價を取らず。王女惟んで之に問ふ、「何の願をか求めんと欲する」と。母、王女に白さく、「願はくは左右を却けたまへ、當に情を以て告ぐべし。我に唯一子あり、王女を敬慕し、情結んで病と成り、命云に遠からず、願はくは慈念を垂れて、其の生命を賜へ」と。王女言く、「汝去れ、月の十五日に、某甲の天祠の中に於て、天像の後に住せん」と。母遺つて子に語るらく、「汝が願已に得たり」と。之に告ぐるに上の如くす、沐浴、新衣にして天像の後に在つて住す。王女は時至つて其の父王に向さく、「我に不吉あり、須らく天祠に至つて以て吉福を求むべし」と。王言く「大に善し」と。即ち車五百乘を駸り、出でて天祠に至る。既にして到り、諸の從者に勅して、門を齊つて止め、獨り天祠に入る。天神愚惟すらく「此は爾るべからず、王は施主たり、此の小人に王女を毀辱せしむ可らず」と。即ち此の人を厭つて睡つて覺めざらしむ。王女は既に入つて其の睡れるを見て、重く之を推せども悟らず、即ち瓔珞の直十萬兩金なるを以て之に遺して去る。去つて後、此人覺むることを得て、見るに瓔珞あり、又衆人に問うて、王女の來れることを知り、情願を遂げずして、憂恨懊惱し、煙火内より發し、自ら焼けて死す。是を以て證とするが故に、女人の心は貴賤を擇ばず、唯欲に是れ從ふことを知る。

復次に昔國王の女あり、旃陀羅に逐はれて共に不淨を爲す。又仙人の女あり、師子に隨逐す。是の

如き等の種種の女人の心は、選擇する所なし。是の種種の因縁を以て、女人の中に於て情欲を除去し、忍んで愛著せざれ。云何が瞋惱の人の中にて忍辱を得ん。當に自ら思惟すべし、「一切衆生は罪の因縁ありて、更に相侵害す、我今惱を受くるも亦本行の因縁なり、今世の所作に非ずと雖も、是れ我が先世の惡報なり。我今之を償つて、應當に甘受すべし、何ぞ逆ふべけんや。譬へば負債の如し、

債主之を索むれば、應當に歡喜して債を償ふべし、瞋る可らず」と。  
【四六】 瞋提(クワンヤンテイ) 瞋へば 瞋提仙

復次に、行者は常に慈心を行じ、惱亂身に迴るありと雖も、必ず能く忍受す。  
【四七】 瞋提(クワンヤンテイ) 仙人の因縁

人の如きは、大林の中に在つて忍を修し慈を行す。時に 迦利王は諸の

姦女を將ゐて林に入つて遊戯す、飲食既に訖つて、王は小しく睡息す。諸

の姦女の輩は、華を林間に採つて、此の仙人を見、敬つて禮拜を加へて一

面に在つて立つ。仙人は爾の時、諸の姦女の爲に慈忍を讚説す。其の言葉美妙にして、聽く者厭くこ

と無く、久うして去らず。迦利王は覺めて姦女を見ず、劍を抜いて躑を追ひ、仙人の前に在つて立て

るを見。嬌妬隆盛にして、目を瞋らし劍を奮つて、仙人に問ふ、「汝は何物をか作す」と。仙人答へ

て言く、「我今此に在つて、忍を修し慈を行す」と。王言く、「我今汝を試みん、當に利劍を以て汝が耳

鼻を截り、汝が手足た截たんに、若し瞋らずんば、汝が忍を修するとを知るべし」と。仙人言く、「意

に任す」と。王即す劍を抜いて、其耳鼻を截り、其の手足を截つて之に問ふ、「汝が心動するや不やし

【四六】 瞋提(クワンヤンテイ) 瞋へば 瞋提仙  
 【四七】 迦利王(カリンワ) 仙人の因縁

と。答へて言く、「我は慈忍を修す、心動せざるなり」と。王言く、「汝が一身は此に在つて、勢力あると無し。口に動せずと言ふと雖も、誰か當に信すべき者あらん」と。是時に仙人は、即ち誓を作して言く、「若し我實に慈忍を修せば、血は當に乳と爲るべし」と。即時に血は變じて乳と爲る。王大に驚喜し、諸の姪女を將るて去る。是の時林中の龍神、此の仙人の爲に雷電霹靂し、王は毒害を被つて没して宮に還らざりき。是を以ての故に「惱亂の中に於て能く忍辱を行す」と言ふ。

復次に、菩薩は慈心を修行す。一切衆生は常に衆苦あり、胎に處しては逼隘して諸の苦痛を受け、生るる時は迫近して骨肉破るるが如く、冷風身に觸れて劍戟よりも甚し。是の故に佛の言はく、「一切の苦の中に於て生苦は最も重し」と。是の如く老病死の苦、種種の困厄あり、云何ぞ行人は復其苦を加へん。是を瘡中、復た刀を以て破ると爲す。復次に「菩薩は白ら念すらく、「我應に諸餘の人の常に生死の水の流に隨ふが如くなるべからず、我は當に逆流して以て求めて源を盡し、吾泥洹道に入るべし。一切の凡人は、侵至れば則ち瞋り、益至れば則ち喜び、怖處には則ち畏る。我は菩薩たり、彼が如くなる可らず、未だ結を斷せずと雖も、當に自ら抑制して忍辱を修行し、惱害をも瞋らず、敬養をも喜ばず、衆苦艱難を怖畏すべからず、當に衆生の爲に大悲心を興すべし」と。復次に、五二菩薩は若し衆生の來つて惱亂を爲すことを見

【四八】 諸苦の中に於て生苦最も重し。

【四九】 菩薩は生死の流に逆つて忍を行す。

【五〇】 泥洹は涅槃(Nirvāṇa)の異字。

【五一】 惱亂の人を見ては還つて親師と思ふべし。

れば、當に自ら念じて言く、「是れ我が親厚たり、亦是れ我が師なり、益親愛敬心を加へて之を待たんとし。何となれば彼もし衆惱を加へずんば、我則ち忍辱を成さざればなり。是故に、「是れ我が親厚なり、亦是れ我が師なり」と言ふ。復次に、**【五二】**菩薩は心に、佛の説きたまふ所の如くに知る。衆生は始なく、世界は際なし、五道に往來して輪轉無量なり。我亦曾つて衆生の爲に、父母兄弟たり、衆生も亦皆曾つて我が父母兄弟たり、當來も亦爾らん。是を以て之を推すに、惡心にして瞋害を懷くべからず」と。

**【五三】** 一切衆生は皆同體なるが故に忍ぶべし。  
**【五四】** 衆生を瞋れば佛を瞋る所以。  
**【五五】** 諸の煩惱中、瞋最重なりと雖も輕す可らざるなり」と。  
 復次に、**【五六】** 諸の煩惱の中に瞋を最も重しと爲す、不善の報の中、瞋の報は最も大なり。餘の結には此の重罪なし。釋提婆那民の佛に問へる偈に言ふが如し、

「何物が殺して安隱なるや、何物が殺して悔いざるや、何物が毒の根なるや、何者か一切の善を吞滅するや、何物が殺して讚するや、何物が殺して憂ふる無きや。」

佛答へ言はく、

「瞋心を殺せば安隱なり、瞋心を殺せば悔いず、瞋は毒の根たり、瞋は一切の善を滅す、瞋を殺せば諸佛讚じ、瞋を殺せば則ち憂なし」と。

菩薩思惟すらく、「我今悲を行じて、衆生をして樂を得せしめんと欲す。瞋は諸善を吞滅して、一切を毒害することを爲す、我當に云何が此の重罪を行すべき。若し瞋恚あれば、自ら樂利を失す、云何が能く衆生をして樂を得せしめんと。復次に、諸佛菩薩は大悲を以て本と爲す。悲より瞋を出さば、悲を滅するの毒たり、特に相宜しからず。若し悲の本を壞せば、何ぞ菩薩と名けん、菩薩は何に従つてか出でん。是の故に應に忍辱を修すべし。若し衆生諸の瞋情を加へば、當に其の功德を念すべし。「今此の衆生は一罪ありと雖も、更に自ら別に諸の妙功德あり、其の功德を以ての故に之を瞋るべからず」と。

復次に、此の人、若くは罵り、若くは打つとも、是れ我を治むと爲す。譬へば金師の金を鍊つて、垢は火に随つて去り、眞金獨り在るが如く、此も亦是の如し。若し我罪あらば、是れ先世よりの因縁なり、今當に之を償ふべし。瞋るべからず、當に忍辱を修すべし。復次に、菩薩は衆生を慈念すること、猶ほ赤子の如くす。閻浮提の人は諸の憂愁多く、歡日あること少し。若くは來つて罵詈し、或は讒賊を加ふるも心に歡樂を得。此の樂は得難し、恚ままに汝は之を罵れ。何となれば我本發心して、衆生をして歡喜を得せしめんと欲すればなり。復次に、世間の衆生は常に衆病の爲に惱され、又死賊

の爲に常に隨つて之を伺ふ。譬へば怨家の恒に人の便を伺ふが如し。云何が善人にして而も慈愍せざらんや。復た苦を加へんと欲するも、苦未だ彼に及ばざるに、先づ自ら害を受く」と。是の如く思惟して、彼を瞋るべからず、當に忍辱を修すべし。復次に、當に瞋志は其の咎最も深く、三毒の中に此より重き者無きことを觀すべし。九十八使の中、此を最も堅しと爲す。諸の心病の中に第一にして治し難し。瞋志の人は善を知らず、非善を知らず、罪福を觀せず、利害を知らず、自ら憶念せず、當に惡道に墮して善言を忘失し、名稱を惜まらず、他の惱を知らず、亦自ら身心の疲惱を計らざるべし。瞋れば慧眼を覆ひ、専ら他を惱ますことを行す。一の五通の仙人の如きは、瞋志を以ての故に淨行を修すと雖も、一國を殺害すると旃陀羅の如し。復次に、瞋志の人は、譬へば虎狼の共止す可きと難きが如く、又惡瘡の發し易く、壞し易きが如し。瞋志の人は、譬へば人の毒蛇を見るとを喜ばざるが如し。瞋を積むの人は、惡心漸やく大にして、至る可らざるに至り、父を殺し、君を殺し、惡意もて佛に向ふ。拘睺彌國の比丘の如きは、小因縁を以て瞋心轉た大にして、分れて二部と爲る。若し斷んと欲し、終に三月を竟るも猶了る可らざるべし。佛、來つて衆(中)に在し相輪の手を舉げて遮つて告げて言はく、

「汝、諸の比丘、調靜を起すこと勿れ、惡心相續すれば、苦報甚だ重し。

汝は涅槃を求めて世を棄捨し、善法の中に在り、云何が瞋り誦はん。

【五】拘睺彌(カウサミデー)の比丘 瞋心甚だ大にして佛語を受けざりし因縁。

世人の忿誚は是れ猶ほ恕す可し、出家の人は何ぞ諍鬪す可けん。  
出家の心中に毒を懷いて自ら害すること、冷雲の中より火出でて身を焼くが如し。』

諸の比丘、佛に白して言さく、「佛は法王たり、願はくは小らく默然したまへ。是の輩、我を侵す、答へざる可らず」と。佛念じたまはく、「是の人は度す可らざるなり」と。衆僧の中に於て、虚を凌いで

去り、林樹の間に寂然として三昧に入りたまへり。瞋の罪は是の如く、乃ち佛語をも受けざるに至る。是の故に應當に瞋を除いて、忍辱を修行すべし。復次に、能く忍辱を

修すれば慈悲得易し、慈悲を得れば則ち佛道に至る。  
問うて曰く、**【五七】** 忍辱の法は皆好むも、而も一事の不可なるあり。小人は

輕慢して、謂つて怖畏すと爲す、是を以ての故に皆忍ぶべからず。答へて曰く、若し小人の輕慢して、謂つて怖畏と爲すを以て、忍ばざらんと欲せば、忍ばざるの罪は此よりも甚だし。何となれば忍ばざるの人は、賢聖

善人の輕賤する所にして、忍辱の人は小人の爲に慢らるるを以てなり。二輕の中、寧ろ無智の爲に慢らるるも、賢聖の爲に賤められざれ。何となれば無智の人は、輕んずべからざる所を輕じ、賢聖の人は賤しむ可き所を賤しむを以てなり。是の故に當に忍辱を修すべし。復次に、忍辱の人は、布施禪定

せずとも、常に微妙の功德を得て、天上人中に生じ、後には佛道を得。何となれば心柔軟なるを以

【五七】 第九問、忍辱は人皆これを好めども、小人は忍辱の人を怖畏せりと謂ひ、之を輕慢するを如何せんや。  
【五七】 不忍の人は賢聖の爲に輕賤せられ、忍辱の人は小人の爲に慢らる。

てなり。

復次に、菩薩は思惟すらく、「若し人今世に我を憐まし、毀辱し、利を奪ひ、輕んじ、罵り、繫縛すとも、且く當に忍を含むべし。若し我忍ばずんば、當に地獄に墮し、鐵炬熱地に無量の苦を受くべし、燒炙燔煮具に説くべからず」と。是を以ての故に知んぬ、小人は無智にして輕んずと雖も而も貴く、忍ばずして威を用ゆれば快なりと雖も而も賤し。是故に菩薩は應當に忍辱すべし。復次に、菩薩は思惟すらく、「我は初發心より、誓つて衆生の爲に其心病を治す。今此の衆生は、瞋恚結使の爲に病せらる。我當に之を治すべく、云何ぞ復之を以て自ら病まん、應當に忍辱すべし。譬へば藥師の衆病を療治するが如し、若し鬼狂病〔者〕の刀を抜き、罵詈して好醜を識らず、醫は鬼病なるを知れば、但之を治せんが爲、瞋恚せざるなり。菩薩若し衆生の爲に瞋恚罵詈せられんに、其は瞋恚の煩惱の爲に病せられ、狂心に使はるるとを知る。方便もて之を治して、嫌責する所なきも、亦復是の如し。復次に、菩薩は一切を育養し、之を愛すると子の如し。若し衆生、菩薩を瞋恚するも、菩薩は之を愍んで、瞋らず責めず。譬へば慈父の子孫を撫育するが如し。子孫は幼稚にして未だ識る所あらず、或時は罵詈し打擲し、敬せず畏れざれども、其父は其愚小を愍んで、之を愛すること愈至り、過罪ありと雖も瞋らず恚らざるなり。菩薩の忍辱も亦復是の如し。復次に、菩薩は思惟すらく、「若し衆生の瞋恚を我に加ふとも、我は當に忍辱すべし。若し我忍ばずんば、今世は心に悔い、後には地獄に入つて

苦を受くると無量ならん。若し畜生に在つては毒龍、惡蛇、獅子、虎、狼と作り、若し餓鬼と爲つては、火、口より出でん。譬へば人の火に焼かるるに、焼くる時は痛輕うして、後痛むと轉た重きが如しと。復次に、菩薩は思惟すらく、「我、菩薩と爲つて、衆生の爲に益利せんと欲す。若し我忍辱すると能はずんば、菩薩と名けず、名けて惡人と爲す」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「世に二種あり、一は衆生數、二は非衆生數なり。我は初發心より、誓つて一切衆生の爲にす。若し非衆生數あり、山石、樹木、風寒、冷熱、水雨の侵害すとも、但之を禦ぐことを求めて、初より瞋恚せず。今此の衆生は、是れ我が爲る所にして、惡を我に加ふ、我は當に之を受くべし、云何ぞ瞋らん」と。復次に、菩薩は、久遠より已來、因縁和合して假に名けて人と爲し、實の人法なきことを知る、誰か瞋る可き者あらん。是の中に但骨肉皮肉のみ有り、譬へば鼻、唇の如く、又、木人機關の動作して、去あり來あるが如し。其れ此の如しと知らば、瞋ること有るべからず。若し我瞋らば、是れ則ち惡業にして、自ら罪苦を受く。是故に應に忍辱を修すべし。復次に、菩薩は思惟すらく、「過去の無量恒河沙等の諸佛は、本菩薩の道を行する時、皆先づ生忍を行じ、然る後法忍を修行す。我今求めて佛道を學ぶことは、當に諸佛の法の如くなるべし。瞋恚を起して、魔の境界の法の如くなるべからず」と。是の故に應に忍辱すべし。是の如き等の種種無量の因縁の故に能く忍ぶ、是を生忍と名く。

【五】衆生數とは痛痒を知れる有情の謂ひにして、非衆生數とは其を知らざる非情物の謂ひなり。

# 卷の第十五

初品の中の屬提波羅蜜の下を釋す。

云何が法忍と名くるや。諸の恭敬供養の衆生、及び諸の瞋惱・婬欲の人に忍ぶ、是を生忍と名け、其の供養恭敬の法、及び瞋惱、婬欲の法を忍ぶ、是を法忍と爲す。復次に、法忍とは、内の六情に於て著せず、外の六塵に於て受けず、能く此の二に於いて分別を作さず。

何となれば内相は外の如く、外相は内の如くなるを以てなり。二相は俱に得べからざるが故に、一相なるが故に、因縁合するが故に、其の實は空なるが故に、一切の法相は常に清淨なるが故に、眞如法相の如きの相なるが故に、不二入なるが故に、二なしと雖も亦一ならざるなり。是の如く諸法

を觀じて、心信轉せざる、是を法忍と名く。毗摩羅詰經の中に、法住菩薩の説の如くんば、「生滅を二と爲す、不生、不滅は是れ不二入法門なり」と。乃至文殊尸利の説には、「聞くなく、見るなく、一切の心滅して、説かず語らざる、是れ不二入法門なり」と。(然るに)毗摩羅詰は默然として言ふこと無し。「此に於て」諸の菩薩は讚じて言く、「善い哉、善い哉、是れ眞の不二入法門なり」と。復次に、一切の法に二種あり、一には衆生、二には諸法なり。菩薩の衆生の中に於いて忍ぶことは、先に説く

【一】法忍とは何ぞや。  
 【二】六情とは、眼耳鼻舌身意即ち主觀的の諸感覺をいひ、六塵とは色聲香味觸法、即ち客觀的の對象をいふ。

が如し、今は法中に忍ぶとを説く。法に二種あり、心法と非心法となり。非心法の中に内あり、外あり、外には寒熱風雨等あり、内には飢渴老病死等あり。是の如き等の種種を名けて非心法と爲す。心法の中に二種あり、一には瞋恚憂愁疑等にして、二には婬欲憍慢等なり。是の二を名けて心法と爲す。菩薩は此の二法に於て、忍んで動ぜざる、是を法忍と名く。

問うて曰く、衆生の中に於て、若し瞋惱して命を害すれば罪を得、憐愍

すれば福を得れども、寒熱風雨には増損あること無し、云何が而も忍ばんや。答へて曰く、増損なしと雖も、自ら惱亂憂苦を生じ、菩薩の道を害す、是の故に應當に忍ぶべし。復次に、但衆生を殺惱するが故に罪を得るに非ず、惡心の爲に因縁と作るが故に罪あり。何となれば衆生を殺すと雖も、無記心なれば是れ便ち罪なし。衆生を慈念すれば、與ふる所なしと雖

も大に福を得。寒熱風雨は増損する無しと雖も、然も能く惡意を生ずるを以ての故に罪を得。是の故に應當に忍ぶべし。復次に、菩薩は自ら宿罪の因縁によりて此の苦處に生ずるとを知る。「此は我れ自ら作る、我、應に自ら受くべし」と。是の如く思惟す、是の故に能く忍ぶ。復次に、菩薩は思惟すらく、「國土に二種あり、淨あり、不淨あり。菩薩は若し不淨の國の中に生ずれば、此の辛苦飢寒衆

惱を受け自ら淨願を發す、我が成佛する時、國中に此の衆苦なげん、此れ不淨なりと雖も、乃ち是

- 【三】 二種の法忍。
- 【四】 第一問、有情の衆生に對して忍ぶは可なり、非情の寒熱風雨に對して忍ぶは、其の理なきにあらずや。
- 【五】 法に増損なしと雖も、之に依つて惡を生ずるが故に忍ぶべし。

れ我が利なり」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「世間の八法は、賢聖の免るゝ能はざる所なり、何に況んや我に於てをや」と。是故に應當に忍ぶべし。復次に、菩薩は思惟すらく、「此人身は、半なく強なく、老病死の爲に逐はるるを知る。復た天身は清淨にして、老なく病なしと雖も、天の樂に耽著す。譬へば醉人の如きは道福を修行し、出家して欲を離るるを得ず。是の故に此の人身に於て、自ら忍んで福を修し、衆生を利益せん」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「我は此四大五衆の身を受けて、應に種種の苦分あるべし。身を受けて而も苦ならざる者あること無く、富貴・貧賤・出家・在家・愚智・明暗の免るることを得る者なし。何となれば富貴の人は常に怖畏あつて財物を守護す。譬へば肥へたる羊の早く屠札に就くが如く、鳥の肉を銜めば、衆鳥の之を逐ふが如し。貧賤の人は飢寒の苦あり、出家の人は今世に苦なりと雖も、後世に福を受けて道を得、在家の人は今世に樂むと雖も、後世に苦を受く。愚人は先づ今世の樂を求め、無常對至すれば、後則も苦を受く。智人は先づ無常の苦を思惟し、後則も樂を受く。是の如き等を身に受くるの人は、苦あらざる無し。是故に菩薩は應當に忍を行すべし。復次に、菩薩は思惟すらく、「一切世間は皆苦なり、我當に云何が中に於いて、而も樂を求むるを欲せん」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「我は無量劫の中に於いて、常に樂苦を受けて利益する所なく、未だ曾つて法の爲にせず、今日衆生の爲に、佛道を求む。此の苦を受く。雖も、當に大利を得べし。是の故に内外の諸の苦は、悉く當に忍んで受くべし」と。復次に、菩薩は大心に誓願す、

「若くは阿鼻泥犁の苦をも、我當に之を忍ぶべし。何に況んや小苦なるを、而も忍ぶと能はざらんや。若し小苦にして忍ばずんば、何ぞ能く大を忍ばん」と。是の如く、種種の外法の中に、忍ぶを名けて法忍と曰ふ。

問うて曰く、云何が内、心法の中に能く忍ぶや。答へて曰く、菩薩は思惟すらく、「我未だ道を得ず、諸結未だ斷せずと雖も、若し當に忍ばずんば、凡人と異ならず、菩薩と爲るに非ず」と。復次に、思惟すらく、「若し我道を得て、諸の結使を斷せば、則ち法として忍ぶ可き無し」と。復次に、飢渴寒熱は是れ外の魔軍なり、結使煩惱は是れ内の魔賊なり。當に此の二軍を破つて、以て佛道を成すべし。若し爾らずんば佛道は成せず。説くが如くんば、佛苦行すると六年、魔王來つて言く、「利利の貴人よ、汝は千分生の中に正しく一分の活あるのみ。速に起つて國に還り、布施し福を修して、今世後世、人中天上の樂道を得べし。汝唐しく勤苦することを得べからず。汝若し軟言を受けず、迷を守つて起たずんば、我當に大軍衆を將る來つて、汝を擊破すべし」と。菩薩言く、「我今當に汝が大力の内軍を破るべし、何に況んや外軍をや」と。魔言はく、「何等か是れ我が内軍なる」と。答へて曰く、

「欲は是れ汝が初軍にして、憂愁を第二と爲し、飢渴は第三軍、渴愛を第四軍」と爲す。

【六】 第二問、内、心法の中に忍ぶとは、如何なることなりや。

【七】 佛陀が苦行六年、能く魔軍の來襲を忍び給ひし因縁。

睡眠は第五軍にして、怖畏を第六軍と爲し、疑悔は第七軍、瞋恚を第八軍と爲す。  
利養虚稱を第九とし、自ら高ぶり、橋慢なるを第十となす。

是の如き等の軍衆は、出家の人を厭没す。

我は神の智力を以て、汝が此の諸軍を破り、佛道を成ずることを得已つて、

能く一切の人を度脱せん。

菩薩は此に於て、諸軍未だ破ること能はずと雖も、忍辱の體を著て、智慧の劍を提り、禪定の盾を執つて、諸の煩惱の箭を遮る。是を内忍と名く。復次に、菩薩は諸の煩惱の中に於て、應當に忍を修すべく、應に結を斷すがらず。何となれば若し結を斷すれば、失ふ所甚だ多く、阿羅漢道の中に墮し、根敗せると異なること無ければなり。是の故に遮して斷せず、以て忍辱を修し、結使に隨はずざるなり。

【八】 第三同、未だ煩惱を斷せずして、尚も強く煩惱に隨はざるを得る理由顯例。  
【九】 主觀なき使車を牽かざるに譬喩これを用いたる體也。

問うて曰く、云何が結使未だ斷せずして、而も能く隨はざるや。答へて曰く、正思惟の故に、煩惱ありと雖も、而も能く隨はざるなり。復次に、思惟して、空と無常との相を觀するが故に、妙好の五欲ありと雖も諸結を生ぜず。譬へば國王に一人の大員あり、自ら罪を覆藏して、人の知らざる所なるが如し。王言く、「賄なく肥えたる羊を取り來れ、汝若し得ずんば當に汝に罪を與ふべし」と。大臣

は智ありて、一の大なる羊を繋ぎ、草穀を以て好く養ひ、日に三度、狼を以て之を畏怖す。羊は養を得て肥ゆと雖も、而も脂なし、羊を牽いて王に與ふ。王は人を遣はして之を殺すに、肥えて而も脂なし。王問ふ、「云何が爾ることを得るや」と。答ふるに上の事を以てす。菩薩も亦是の無く、無常・苦空の狼を見て、諸の結使の脂を消し、諸の功德の肉を肥えしむ。復次に、菩薩は功德福報無量なるが故に、其の心柔軟にして、諸の結使薄く、忍辱を修し易し。譬へば師子王の林中に在つて吼ゆるとき、人あり、之を見て、頭を叩いて哀を求むるに、則ち放ち去らしむるも、虎豹の小物は爾ること能はざるが如し。何となれば師子王は貴獸にして、智あり分別すれども、虎豺は賤蟲にして、分別を知らざればなり。又壞軍は、大將に値ふとを得れば則ち活き、小兵に遇へば則ち死するが如し。復次に、菩薩の智慧力は、瞋恚に種種の諸惡あることを觀じ、忍辱に種種の功德あることを觀ず、是の故に能く結使を忍ぶ。復次に、菩薩は心に智力あつて能く結使を斷じ、衆生の爲の故に久しく世間に住して、結使は是れ賊なりと知る、是の故に忍んで隨はず。菩薩は此の結使を繋いで、縱逸ならしめずして功德を行す。譬へば賊あり、因縁を以ての故に殺さず、堅く一處に閉ちて、自ら事業を修するが如し。復次に、菩薩は實に諸の法相を知るが故に、諸の結使を以て惡と爲さず、功德を以て妙と爲さざるなり。是の故に結に於て瞋らず、功德を愛せず、此の智力を以ての故に、能く忍辱を修す。偶に説くが如し。

【三】菩薩は煩惱に於いて瞋らず、功德を愛せず、

『菩薩は諸の不善を斷じ、乃至極微をも滅して餘すこと無く、大功徳の福は量あること無く、所造の事業は、辨せざることを無し。』

菩薩は大智慧力の故に、諸の結使に於て憍

むと能はず、是故に能く諸の法相を知り、

生死、涅槃は一にして二なし〔と知る。〕』

是の如きの種種の因縁により、未だ道を得ず

と雖も、諸の煩惱法の中に於て能く忍ぶ、是を

法忍と名く。

復次に、二菩薩は一切の法に於て、一相に

して無二なるを知る。一切の法は、相を識る

可し。故に言ふ、一の眼識は色を識り乃至、意

識は法を識る。是れ相を識る可きの法なり、故

に一と言ふし。

復次に、一切の法は相を知る可きが故に一と

言ふ 〔三〕 苦法智 〔四〕 苦比智は苦諦を知り 〔五〕 集法智

〔二〕 一切法は一相にして無二なり

〔三〕 苦法智は、三界の見惑を斷ずるとき、欲界の苦諦を觀じて、それに對する見惑を斷ず、其斷じ已りたる解脫道の智を云ふ。苦法を緣するが故に苦法智と名く

〔四〕 苦比智とは、一に苦類智と云ふ。色無色兩界の苦諦を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて、正しく理を證するの智を云ふ。先きの苦法智の流類なれば、類若くは比の名を付す。

〔五〕 集法智とは、欲界の集諦を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて、正しく理を證するの智なり。集法を觀するが故に其名あり

〔六〕 滅法智は、欲界の滅諦を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて正しく理を證するの智なり、滅法を觀するが故に其名あり

〔七〕 滅比智とは一に滅類智と云ふ、色無色兩界の滅法を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて、正しく理を證するの智なり。滅法智の流類なるが故に此名あり。

が故に此の名あり。

〔五〕 集比智は、一に集類智と云ふ。色無色兩界の集諦を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて、正しく理を證するの智を云ふ。集法智の流類なれば類若くは比の名を付す。

〔六〕 滅法智は、欲界の滅諦を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて正しく理を證するの智なり、滅法を觀するが故に其名あり

〔七〕 滅比智とは一に滅類智と云ふ、色無色兩界の滅法を觀じて、それに對する見惑を斷じ已つて、正しく理を證するの智なり。滅法智の流類なるが故に此名あり。

〔五〕 集比智は集諦を知り 〔六〕 滅法智 〔七〕 滅比智は滅諦を

知り 二心は道法智 道比智は道諦、及び善世智を知り、亦苦集滅道は虚空にして、智の緣滅に非るを知る。是れ相を知る可きの法なり、故に一と言ふ。

復次に、一切の法は、緣す可きの相なるが故に一と言ふ。眼識及び眼識相應の法は色を緣じ、耳識鼻識舌識身識も亦是の如し。意識及び意識相應の法も亦眼を緣じ、亦色を緣じ、亦眼識を緣じ、乃至意を緣じ、法を緣じ、意識を緣す。一切の法は緣す可きの相の故に一と言ふ。

復次に、一切の法は、各皆一なり。一にして復た一あるを名けて二と爲し、三の一を名けて三と爲す。是の如く乃至千萬にして皆是れ一なり、而も假に名けて千萬と爲す。

復次に、一切の法中に相あるが故に一と言ひ、一相の故に名けて一と爲し、一切の物を名けて法と爲し、法相の故に名けて一と爲す。是の如き等の無量の一門にして、異相を破し、一に著せざる、是を法忍と名く。復次に、三菩薩は一切法を觀じて二と爲す。何等か二なる。二は内外の相に名く、内外相の故に、内は外相に非ず、外は内外に非ず、復次に、一切の法

【一八】 道法智は、欲界の道諦を觀じて之に對する見惑を斷じ

已り、正く理を證するの智也。道法を觀する故に此名あり。

【一九】 道比智は、一に道類智と

云ふ。色無色兩界の道法を觀じて之に對する見惑を斷じ已り、正く理を證するの智也。前智の流類なれば此名あり。

以上を稱して八智と云ふ。八

智に對して八忍あり、八智の下に各忍を付して八忍とす、忍は信の義、理を信じて惑を

起さざる位なれば之を斷道とし、智は決定の義、惑を離

れ已つて正しく理を決定する位なれば之を證道となす。忍は因にして智は果なり。

【二〇】 一切の法を觀じて一法となす。

【二一】 一切の法を觀じて二法となす。

は有無の相なるが故に二と爲す。空と不空、常と非常、我と非我、色と非色、可見と不可見、有對と非有對、有漏と無漏、有爲と無爲、心法と非心法、心數法と非心數法、心相應法と非心相應法なり。是の如きの無量の二門にして一を破し、二に著せざる、是を名けて法忍と爲す。

復次に、菩薩は一切法を觀じて三と爲す。何等をか三と爲す。下中上と、善と不善と無記と、有と無と悲有非無と、見諦斷と思惟斷と無斷と、學と無學と非學非無學と、報と有報と非報非有報となり。是の如きの無量の三門にして、一を破し異に著せざる、是を名けて法忍と爲す。復次に、菩薩は未だ無漏道を得ず、結使未だ斷せずと雖も、能く無漏の聖法、及び三種の法印を信ず。一には一切有爲の生法は無常等の印、二には一切の法は無我の印、三には涅槃實法の印なり。得道の賢聖の人は、自ら得、自ら知る。菩薩は未だ道を得ずと雖も、能く信じ能く受く、是を法忍と名く。

復次に、十四難の不容の法中に於て、有常無常等の礙なく、中道を失せざるを觀察し、是の法を能く忍ず、是を法忍と爲す。一比丘の如きは、此の十四難に於て、思惟觀察すれども通達する能はず、心に忍ずると能はず、衣鉢を持して佛の所に至り、佛に白して言さく、「佛よ、能く我が爲に十四の難を解いて、我が意をして了せしめば、當に弟子と作るべし。若し解くこと能はずんば、我は當に更に餘道を求むべし」と。佛、癡人に告げたまはく、「汝は本我と共に要誓せり。若し十四の難に答

- 【三】 一切の法を觀じて三法となす。
- 【四】 菩薩は無漏の聖法及び三種の法印を信ず。
- 【四】 十四難不容法。

へば、汝我が弟子と爲らんや」。比丘の言く、「不なり」。佛の言く「汝は癡人なり、今何を以てか、若し答へずんば、我が弟子と作らずと言ふや。我は老病死の人の爲に法を説いて濟度す。此十四難の法は、是れ鬪諍の法なり。法に於て益なく、但是れ戲論なり。何ぞ問を爲すとを用ゐん、若し汝が爲に答ふとも、汝が心に了せず、死に至るまで解せずんば、生老病死を脱することを得ること能はず。譬へば 三人あり、身に毒の箭を披るが如し。親屬は醫を呼んで爲に箭を出し、藥を塗らんと欲するに、便ち言く、未だ箭を出す可らず、我先づ當に汝が姓字・親里・父母の年歳を知り、次に箭は何の山に在つて出るか、何の木、何の羽を以て箭を作り、鏃は是れ何人が爲り、是れ何等の鐵なるかを知らんと欲す。復た弓は何の山の木、何の蟲角なるかを知らんと欲す。復た藥は是れ何の處に生じ、是れ何の種名なるかを知らんと欲す。是の如き等の事を、盡く了了に之を知つて、然る後に汝が箭を出し、藥を塗るとを聽さん」と。佛、比丘に問ひたまはく、「此の人は此の衆事を知るよを得て、然る後に箭を出す可きや不や」と。比丘の言く、「知ることを得べからず。若し盡く知ることを待たば、此は則ち已に死せんと」。佛の言はく「汝も亦是の如し、邪見の箭に愛の毒を塗ることを爲し、已に汝が心に入れり、此の箭を抜いて我が弟子と作らんとを欲して、而も箭を出すことを欲せず、方に世間の常・無常、邊・無邊等を求めんと欲す。之を求め未だ得ざれば、則ち慧命を失して畜生と同じく、死して自ら黑暗に投せん」と。比丘は慚愧して深

【一】不信をば毒箭を抜くに譬ふ。

く佛語を識り、即ち阿羅漢道を得たり。

復次に、菩薩は一切智人と作らんと欲せば、應に一切の法を推求して、其の實相を知るべし。十四

難の中に於て滯らず、礙へず。其れ是の心の重病を知つて、能く出で能く忍ぶ、是を法忍と名く、復

次に、佛法は甚深にして清淨微妙なり。種種無量の法門を演暢し、能く一心に信受して、疑はず

悔いざる、是を法忍と名く。佛の言ふ所の如くんば、諸法は空なりと雖も、亦斷せず、亦滅せず。諸

法は因縁相續して生ず、亦常に非ず。諸法は神なしと雖も、亦罪福を失せず。心一念の頃に、身の諸法諸根諸慧轉滅して停まらず、後念に至らず、

新新に生滅して、亦無量世の中の因縁業を失せず。諸の衆界入の中、皆

空にして神なし。而も衆生は五道の中に輪轉して生死を受く。是の如き等

の種種の甚深微妙の法は、未だ佛道を得ずと雖も、能く信受して疑はず悔

いざる、是を法忍と爲す。復次に、阿羅漢辟支佛は生死を畏れ惡んで、早く涅槃に入らんことを求

む。菩薩は未だ佛と成ることを得ざれども、而も一切智を求めんことを欲し、衆生を憐愍し、了了に

分別して、諸法の實相を知らんと欲し、是の中に能く忍ぶ、是を法忍と名く。

問うて曰く、云何が諸法を觀じて實相を得るや。答へて曰く、諸法を觀知すれば、取障あること

無し、破す可らず、壞すべからず、是を實相と爲す。

【六】 一心に信受して疑悔せざるを法忍と名く。

【七】 衆生の爲に一切智を求めんと欲するを法忍と名く。

【八】 第四問、諸法を觀じて、實相を得る理由如何。

問うて曰く、一切の語は皆答ふべく、破すべく、壞すべし。云何が破壊す可らざる、是を實法と爲すと云ふや。答へて曰く、諸法は破す可らざるを以ての故に、佛法の中には一切の言語の道を過ぎ心行の處滅し、常に不生不滅にして、涅槃の相の如し。何となれば若し諸法の相は實有なれば、後無なるべからず。若し諸法は先に有にして、今無ならば、即ち是れ斷滅なり。復次に、諸法は是れ常なるべからず、何となれば、若し常ならば、即ち罪なく、福なく、傷殺せらるる無し、亦施命なく、亦修行の利益なく、亦縛なく、解なく、世間は則ち是れ涅槃なり。是の如き等の因縁の故に、諸法は常なるべからず。若し諸法は無常ならば、則ち是れ斷滅して、亦罪なく、福なく、亦増損なく、功業の因縁、果報も亦失せん。是の如き等の因縁の故に諸法は無常なるべからず。

問うて曰く、佛法の中には、常も亦實ならず、無常も亦實ならずと言ふも、是事は然らず。何となれば佛法の中には常も亦實、無常も亦實なり。常とは數縁盡き、非數縁盡くるなり。虚空は生せず、住せず、滅せざるが故に、是れ常相なり。無常相とは、五衆の生住滅の故に無常相なり。汝は何を以てか、常、無常は皆實ならずと言ふや。答へて曰く、聖人に 三 二種の語あり。一は方便語、二は直語なり。方便語とは人の爲に因縁と爲るが故なり。人の爲とは、衆生の爲に説く、是れ常、是れ無常なり。對治悉檀の中に説くが如きは、若し無常と説くは、衆生の三界の

【一】 第五問、諸法の破壞すべからざる理由如何。

【二】 第六問、常も無常も共に實ならずと言ふ理由如何。

【三】 聖人に二種の語あり。

樂らに著ちやくするを抜はかんと欲ほす。佛ほとけ思し惟ひしたまはく、「何なにを以もちてか衆しゆじやう生じやうをして、欲よくを離はなるゝとを得えせしめん」と。是この故ゆゑに無む常じやう法ぽうを説とくこと偏へんの如ごとし。

『若もし無む生じやう法ぽうを觀くわんすれば、生じやう法ぽうに於おて離はなるゝとを得う得う、若もし無む爲む法ぽうを觀くわんすれば、有う爲むに於おて離はなるゝことを得う得う。』

云い何なにが生じやう生じやうを因いん緣ねん和わ合ごうと名なくるや。無む常じやうにして自じ在ざいならざれば、因いん緣ねんに屬ぞくす。有うとは老らう病びやう死じの相さう、欺き誑じやうの相さう、破は壞わいの相さうなり。是こを生じやう生じやうと名なく。則すなはち是これ有う爲む法ぽうあり。對たい治ち悉しつ檀たんに説とくが如ごときは、常じやう無む常じやうは實じつ相さうに非あらず、二に俱くわに過くわなるが故ゆゑなり。若もし諸しよ法ぽうは有う常じやうに非あらず、無む常じやうに非あらずとは、是こを愚ぐ癡ちの論ろんとなす。何いかとなれば若もし有うに非あざれば、則すなはち無むを破はし、若もし無むに非あざれば、則すなはち有うを破はす、若もし此この二に事じを破はすれば、更さらに何なんの法ぽうの説とく可かきか有うらん。

【二】第七問、非有非無を愚癡の論と言ふ理由如何。

問とうて曰いはく、佛ぶつ法ぽうの常じやう空くうの相さうの中ちゆうは、有うに非あらず無むに非あらず、空くうは有うを除のぞくを以もちて空くうなり、空くうをも無むしと遮あする、是こを有うに非あらず無むに非あらずと爲なす、何なにを以もちて愚ぐ癡ちの論ろんと言いふや。答こたへて曰いはく、佛ぶつ法ぽうは實じつ相さうにして、受うけず著ちやくせず、汝なんは非あ有う非あ無むを受け著ちやくするが故ゆゑに、是これ癡ち論ろんなり。若もし有うに非あらず、無むに非あらずと言いはば、則すなはち説とく可べく、破はす可べく、是これ心こころの生じやう處しよ、是これ調てう語ごの處しよなり。佛ぶつ法ぽうは則すなはち然ぜんらず、因いん緣ねんの故ゆゑに有うに非あらず無むに非あらずと説とくと雖いんも、著ちやくを生じやうせず、著ちやくを生じやうせざれば、則すなはち壞わいす可べからず、破はす可べからず。諸しよ

法は若くは有邊、若くは無邊、若くは有無邊、若くは非有無邊、若くは死後有去、若くは死後無去、若くは死後非有去非無去なり。是の身は是れ神、身の異なり、神の異なるも亦是の如く、皆實ならず。六十二見の中に於て諸法を觀るに、亦皆實ならず。是の如きの一切を除却して、佛法の清淨不壞相を信じ、心に悔いず轉せざる、是を法忍と名く。

復次に、有無の二邊を以て諸法の生ずる時と住する時とを觀ずれば、則ち有見の相と爲り、諸法の老ゆる時と壞する時とを觀ずれば、則ち無見の相と爲る。三界の衆生は多く此の二見の相に著す。是の二種の法は虚誑にして實ならず、有相なれば則ち無なるべからず、何となれば今無にして先有ならば、則ち斷の中に墮するを以てなり。若し斷は是れ則ち然らず。

復次に、一切の諸法は、名字和合の故に、之を謂つて有と爲す。是の故に名字和合して、生ずる所の法は不可得なり。

問うて曰く、名字の生ずる所の法は不可得なりと雖も、則ち名字の和合あり。答へて曰く、若し無法ならば、名字は誰が爲にか和合せん、是れ則ち名字なきなり。

復次に、若し諸法は實有ならば、應に心識を以ての故に有なりと知るべからず。若し心識を以ての故に有ならば、是れ則ち有に非ず。地の堅相の如きは、身根を以て身に識知するが故に有なり。若し

【三三】 第八問、名字所生の法は不可得なりと雖も、則ち名字の和合あるにあらずや。

身根なくして身に識知すれば則ち堅相なし。

問うて曰く、言身根身識の、若くは知り、若くは知らざるも、而も地は常に是れ堅相なり。答へて

曰く、若くは先より自ら堅相あるを知り、若くは他より聞いて、則ち堅相あることを知る、若し先に

知らず聞かざれば、則ち堅相なし。

復次に、地、若し常に是れ堅相ならば、其の相を捨つべからず。凝酥、蠶室、膏膠の如きは、融くれば

ば則ち其の堅相を捨てて濕相の中に墮す。金銀銅鐵等も亦爾なり。水の如きは濕相と爲り、寒ければ則ち轉じて堅相と爲る。是の如き等の種種は、

悉く皆相を捨つ。

復次に、諸の論議の輩は、有を能く無ならしめ、無を能く有ならしむ。

諸の賢聖の人、坐禪の人は、能く地を水と作し、水を地と作らしむ。是

の如き等の諸法は皆轉すべし、十一切入の中に説くが如し。

復次に、是の有見は貪欲瞋恚愚癡結縛、聞評の爲の故に生ず。若し此の欲恚等を生ずる處あらば、

是れ佛法に非ず。何となれば佛法の相は善淨なるを以てなり。是を以ての故に實に非ず。

復次に、一切の 蓋 有法に二種あり、色法と無色法となり、色法は分析して乃ち微塵に至れば、散

滅して餘るところ無し。檀那波羅蜜多品の破施物の中に説くが如し。無色法は五情の知らざる所

【三】第九問、身根身識の知る  
と否とに關らず、地は常に堅  
相なるにあらずや。

【五】有法とは、無法に對する  
語にして、毫毛・塵角の如き體  
性ともに無きものを無法とい  
ひ、他の事物の如き體用ともに  
あるものを有法といふ。

なるが故に、意情の生住滅の時観するが故に、心に分あることを知る。分あるが故に無常なり、無常なるが故に空なり、空の故に有に非ず。彈指の頃に六十時あり、一一の時の中に、心に生滅あり。相續して生ずるが故に、是れ貪心瞋心、是れ癡心、是れ信心、清淨の智慧禪定心なりと知る。行者は心の生滅を觀じて流水「の如く」燈燄の如しとなす、此を空智門に入ると名く。何となれば若し一時に生じ餘時の中に滅せば、此の心に應に常なるべければなり。何となれば此の極少時の中には滅なきを以てなり。若し一時の中に滅なければ、應に終始に滅なかるべし。

復次に、佛説きたまはく、「有爲法は皆三相あり」と。若し極少時の中に生じて滅なくんば、是れ有爲法に非ずと爲す。若し極少時の中に心生じ、住し、滅するあらば、何を以てか但先に生じて後に滅し、先に滅せずして後に生ぜざる。

復次に、若し先に心あつて、後に生ずる有らば、則ち心生ずるを待たず。何となれば先に已に心あるが故なり。若し先に生有らば、則ち生に所生なし。又生滅の性と相違す。生ずれば則ち滅すると有るべからず。滅する時は生ずると有るべからず。是の故に一時も不可得なり、異も亦不可得なり、是れ則ち無生なり。若し無生なれば、則ち住滅なく、若し生住滅なれば、則ち心數法なく、心數法なければ、則ち心不相應なし。諸行色なければ、色法なきが故に、無爲法も亦無なり。何となれば有爲に因るが故に無爲あり、若し有爲なければ、則ち亦無爲も無が故なり。

復次に、作法の無常を見るが故に、作法の常ならざることを知る。若し然れば今作法は是れ有法なりと見れども、不作法は應に是れ無法なるべし、是を以ての故に常法は得べからず。

復次に、外道及び佛弟子は、「常法に、同あり異あり」と説く。同とは虚空と涅槃となり。外道の

「神・三・時・方・微塵・冥初あり」と言へる、是の如き等を名けて異と爲す。又

佛弟子は、「數縁の滅は常に非ず」と説き、又言く、「因縁法は常なり、因縁

生の法は無常なり」と。摩訶衍の中には常法の法性は實際の如しと言ふ。

是の如きの種種を名けて、常法虚空涅槃と爲す。先の讚菩薩品の中に説く

が如し。神及び時・方・微塵も亦上に説くが如し。是の故に諸法は有なりと

言ふべからず。若し諸法の無なるには二種あり、一には常無と、二には斷

滅の故に無なるとなり。若くは先有にして今無、若くは今有にして後無な

らば、是れ則ち斷滅なり。若し然れば、則ち因縁なし。因縁なければ、應

に一物の中より一切の物を出すべく、亦應に一切の物中に、都て出す所な

かるべし。後世の中も亦是の如し。若し罪福の因縁を斷ずれば、則ち貧富貴賤の異、及び惡道畜生

の中に墮すること有るべからず。若し常無なりと言はば、則ち苦集滅道なし。若し四諦なければ、則ち法實なく、則ち八賢聖道なし。若し法實僧寶なければ、則ち佛實なし。若し是の如くんば則ち三寶

【云】時・方・微塵等、時とは印度の外道中に時論師といふものあり、時を以て宇宙萬有の本源なりと主張するをいひ、方とは、方處を以て一切萬有の本源なりと主張する方論師の説をいひ、微塵とは、微塵を以て萬物の本源なりと主張するをいひ、冥初とは、數論學派にて二十五諦を立て第一諦を冥諦と名け、それを以て諸法の元初となせるをいふ。

を破る。

復次に、若し一切の法は實に空ならば、則ち罪福なく、亦父母なく、亦世間の禮法なく、亦善なく悪なけん。然れば則ち善悪は同門、是非は一貫にして、一切の物は盡く無なると、夢中に見る所の如くならん。若し實に無なりと言はば、是の如きの失あり。此の言、誰か當に信すべき者ぞ。若し顛倒の故に有と見ると言はば、一人を見るべき時に當り、何を以ても二三を見ざるや。其は實に無なるを、而も顛倒して見るを以てなり。若し此の有無の見到に墮せずんば、中道實相を得ん。云何が實を知るか。過去恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、説きたまふ所、未來恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、説きたまふ所、現在の恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、説きたまふ所、疑はず、悔いず、信力大なるが故に、能く持ち、能く受く、是を法忍と名く。

復次に、禪定力の故に、心柔軟清淨なれば、諸法の實相を聞いて、心に應じて與に會し、信著深く入つて、疑なく悔なし。所以は何となれば疑悔は是れ欲界繫の法にして麤惡なるが故に、柔軟の心の中に入らざるを以てなり。是を法忍と名く。

復次に、智慧力の故に、一切諸法の中に於て種種に觀するに、一法として得べき者あること無く、是の法を能く忍じ、能く受けて、疑はず悔いざる、是を法忍と名く。

復次に、菩薩は思惟すらく、一凡夫の人は、無明の毒を以ての故に、一切諸法の中に於て轉相を作

し、非常には常想を作し、苦には樂想を作し、無我に我想あり、空に實ありと謂つて、非有を有と爲し、有を非有と爲す。是の如き等の種種の法の中に轉相を作して、聖實の智慧を得、無明の毒を破り、諸法の實相を知り、無常と苦と空と無我との智慧を得、棄捨して著せず、是の法を能く忍ぶ、是を法忍と名く。

復次に、一切諸法を觀するに、本より已來、常に空なり。今世も亦空なり。是の法を能く信じ、能く受くる、是を法忍と爲す。

問うて曰く、(三三) 若し本より已來、常に空にして、今世も亦空なる、是を惡邪と爲す。云何が法忍と言ふや。答へて曰く、若し諸法の畢竟空を觀じて、相を取り心に著する、是を惡邪見と爲す。若し空を觀じて著せず、邪見を生ぜざれば、是を法忍と爲す。偈に説くが如し、

「諸法の性は常に空なり、心亦空に著せず、是の如く法を能く忍す、是れ佛道の初相なり。」

是の如き等の種種の智慧門に入り、諸法の實相を觀じ、心退かず、悔いせず、諸觀に墮せず、亦憂ふる所なく、能く自利利他を得。是を法忍と名く。是の法忍に三種あり、行、清淨にして、忍辱の法を見ず、己身を見ず、罵辱の人を見ず、諸法に載れず、是の時を清淨の法忍と名く。是事を以ての故に、菩薩は般若波羅蜜「多」の中に住して、能く風提波羅蜜「多」を具足すと説く。「そは」不動不退なる

【三三】 第一の問、惡邪と法忍との異同如何。

を以てなり。云何が不動不退と名くるや。瞋恚を生ぜず、悪言を出さず、身に悪を加へず、心に疑ふ所なし。菩薩は般若波羅蜜(多)の實相を知つて、諸法を見ずの心に著する所なきが故に、若くは人來つて罵り、若くは梵毒殺害を加ふるも、一切能く忍ぶ。是故に般若波羅蜜(多)の中に住して、能く辱提波羅蜜(多)を具足すと説く。

初品の中の 毗梨耶波羅蜜(多)の上を釋す、

身心精進にして、

懈怠せざるが故に、應に毗梨耶波羅蜜(多)を具足すべし。

問うて曰く、

精進の如きは、是れ一切善法の本にして、應に最も

初に在るべし、今何を以ての故に第四なるや。答へて曰く、布施持戒忍辱は世間に常に有り。客主の義の如きは、法として應に供給すべし、乃至

畜生も亦布施を知る。或は人あり、種種の因縁の故に能く布施す。若くは今世の爲め、若くは後世の爲め、若くは道の爲の故に布施するも、精進を須むず。戒を持つ者は、惡を爲す人を、王法の罪を治

むるを見て、便ち自ら畏懼し、敢へて非を爲さざるが如し。或は性の善にして諸惡を作さざるあり。

有人は、今世に惡を作せば、後世に罪を受くと聞いて、而も怖畏するを以ての故に、能く戒を持つ。

有人は、持戒の因縁の故に、生老病死を離るるとを得と聞いて、此中に心生じ、口に言く、我、今日よ

【天】 毗梨耶波羅蜜多 (Vīrya-paramita)。  
【五】 第一一問、精進を六度の第四位に置く理由如何。

り復た殺生せず」と。是の如き等は即ち是れ戒なれども、毘に精進波羅蜜「多」を須めて、而も能く行せんや。忍辱の中の如きは、若くは罵り、若くは打ち、若くは殺し、或は畏るるが故に報せず、或は力少なく、或は罪を畏れ、或は善人の法を修し、或は道を求むるが爲の故に默然として報せず、皆必ずしも精進波羅蜜を須きして、乃ち能く忍ぶ。今諸法の實相を知ることを得て、般若波羅蜜を行せんと欲するが故に禪定を修行す。禪定は是れ智慧の門なり。是の中に應に勤修精進して一心に禪を行すべし。

復次に、布施持戒忍辱は是れ大福德、安隱快樂なり、好き名譽あり、

欲する所の者を得。既に此の福利の味を知ることを得て、今増進して更に

【四〇】 佛道を成就するについて  
二門を建つ。

妙勝禪定の智慧を得んと欲す。譬へば井を穿つに、已に濕泥を見れば轉た増進を加へ、必ず望んで水を得るが如し。又火を鑽つて已に煙を見ることを得れば、倍、復た力を勵まし、必ず望んで火を得るが如し。佛道を成せんと欲するに、凡そ二門あり。一はは福德、二には智慧なり。施と戒と忍とを行する是を福德門と爲し、一切諸法の實相、摩訶般若波羅蜜「多」を知る、是を智慧門と爲す。菩薩は福德門に入つて一切の罪を除き、願ふ所皆得たまふ。願を得ざるは罪垢の遮るを以てなり。智慧門に入れば、則ち生死を厭はず、涅槃を樂はず、二事は一なるが故なり。今摩訶般若波羅蜜「多」を出生せんと欲す。般若波羅蜜「多」は、要らず禪定門に圍り、禪定門は必ず大精進力を須む。何となれば欲

界は亂心にして、諸法の實相を見るところを得る能はざればなり。譬へば風中の然燈は物を照すと能はず、燈密室に在れば、明にして必ず能く照すが如し。是の禪定智慧は、福を以て願求すべからず、亦塵觀にして能く得るに非ず。要らず須らく身心精勤にして、急に著して懈らず、爾れば乃ち成辦すべし。佛の説きたまふ所の如し。○血肉脂髓は皆竭盡せしむとも、但皮骨筋あらしめば、精進を捨てざらしめよ。是の如くんば乃ち能く禪定の智慧を得んしと。是二事を得れば、則ち衆事皆辦す。是故に精進は第四なり、名けて禪定は實智慧の根と爲す。上の三の中に精進ありと雖も、少きが故に説かず。

問うて曰く、有人の言く、「但布施・持戒・忍辱を行するが故に大福德を得、福德力の故に願ふ所皆得、禪定智慧は自然にして至る、復た何を精進波羅蜜(多)を用ゐん」と。答へて曰く、佛道は甚深にして得難し。布施・持戒・忍辱の力ありと雖も、要らず精進を須るて、甚深の禪定・實智慧及び無量の諸佛の法を得。若し精進を行ぜずんば則ち禪定を生せず、禪定生ぜざれば、則ち梵天王の處にすら生ずることを得ず、何に況んや佛道を求めんことを欲せんや。

復次に、人あり、民大居士等の如きは、無量の寶物を得んと欲すれば、則ち意に應じて皆得。  
頂生王の如きは、四天下に王たりしに、天は七寶及び、所須の物を雨らし、釋提婆那民は座を分かち

【四一】 第一二問、布施・持戒・忍辱・禪定・智慧の外に精進を要する理由如何。  
【四二】 頂生王とは、釋迦牟尼佛の宿世の一身にて、布殺陀王の頂上より生じ、成長して金輪王となれるものをいふ。これ本生譚の一なり。

て與に坐せり。是福ありと雖も、然も道を得ること能はず。羅彌珠比丘の如きは、阿羅漢道を得と雖も、乞食すること七日にして得ず、空鉢にして還り、後禪定の火を以て、自ら其の身を焼いて般涅槃せり。是の故に知りぬ、但福德力の故に道を得るに非ず、佛道を成せんと欲せば、要らず須らく勤めて大に精進すべきことを。

問うて曰く、(四)菩薩は精進を觀じて、何の利益あれば、而も勤修して懈らざるや。答へて曰く、一切の今世後世の道德利益は皆精進に由つて得らる。

復次に、若し人自ら身を度せんと欲せば、尙當に勤めて急に精進すべし。何に泥んや、菩薩は誓願して一切を度せんと欲するをや。讚精進の偈

【四】第一三問、精進に何の利益ありや。

の中に説くが如し。

『人あり身を惜まず、智慧の心決定し、如法に精進を行せば、求むる所の事、難きこと無し。

農夫の勤めて修すれば、收むる所、必ず豊實なるが如く、

亦遠路を渉るに勤めて行けば、必ず能く達するが如し。

若し天上に生ずることを得ると、及び涅槃の樂を得ると、是の如きの因縁は皆精進力に由る。

天に非ず、無因に非ず、自ら作すが故に自ら得。

誰か智慧ある人にして、而も自ら勉勵せざらんや。

三界の火の熾然なること、譬へば大火焰の如し、有智決斷の人は、乃ち能く免離するを得。是を以ての故に、佛告げたまはく、

阿難よ、正しく精進して、是の如く懈怠せざれば、直に佛道に至る、勉強し懃修して地を穿てば能く泉に通ず、精進も亦是の如く、求るものとして得ざることを無し。

能く道を行くが如く、「如」法に精進して懈らずんば、

無量の果必ず得て、此の報は終に失せざらむ。』

復次に、精進の法は、是れ一切諸善の根本にして、能く一切諸の道

法乃至阿耨多羅三藐三菩提を生ず、何に況んや小利をや。毗尼の中に

説くが如くんば、一切諸の善法乃至阿耨多羅三藐三菩提は、皆精進不

放逸より生ず。

復次に、精進は能く先世の福德を動發す。雨の種を潤して能く必ず生ぜしむるが如く、此も亦是の

如し。先世の福德の因縁ありと雖も、若し精進なければ則ち生ずること能はず、乃至今世の利すら尙

ほ得ること能はず、何に況んや佛道をや。

復次に、諸の大菩薩は、衆生を荷負して一切の苦乃至、阿鼻泥犁の中の苦を受け、心亦懈らず、

是を精進と爲す。

【釋】阿鼻泥犁とは、阿鼻地獄 (Avīci-Narak) のこと。

復次に、一切の衆事は、若し精進なければ、則ち成すること能はず。譬へば下藥は巴豆を以て主と爲すが如し。若し巴豆を除いては、則ち下力なし。是の如く、意止・神足・根力・覺道は、必ず精進を待つ。若し精進なければ則ち衆事辦せず。戒の如きは、唯八道に在つて餘處に在らず。信は根と力とに在つて、餘處には則ち無く、精進の如きは、處として有らざるなし。既に衆法を總べて、別に自ら門あり。譬へば無明使は遍ねく一切諸使の中に在るも、而も別して不共無明あるが如し。

問うて曰く、菩薩は一切の佛法を得んと欲し、一切の衆生を度せんと欲し、一切の煩惱を滅せんと欲するに、皆意の如くなることを得。云何が精進を増益して、而して能く佛を得るや。譬へば、小火は大林を焼くこと能はず、火勢増益すれば能く一切を焼くが如し。答へて曰く、菩薩は初發心より「當に一切衆生をして歡樂を得せしむべし」との誓願を作し、常に一切の爲に身を惜まず。若し身を惜まば、諸の善法に於て成辦すること能はず、是の故に精進を増益す。

復次に、菩薩は種種の因縁を以て憍怠の心を呵し、精進に樂著せしむ。憍怠の黒雲は、諸の明慧を覆ふて功德を吞滅し、不善を増長す。憍怠の人は、初は小しく樂むと雖も、後は則ち大いに苦む。譬

【四四】 意止とは人の亂心を止むるといふ義にして、四念處のことなり。次の神足は、四如意足、根は五根、力は五力、覺は七覺支、道は八聖道なること推して知るべし。

【四五】 第一四問、菩薩は一切の佛法を得、一切の衆生を度し、一切の煩惱を滅せんと欲するに、皆意の如くならざるなし。然るを尙ほ精進の増益を要するは何故なるか。

へば毒食は初め香美なりと雖も、久しければ則ち人を殺すが如し。懈怠の心は諸の功徳を焼く。譬へば大火の諸の林野を焼くが如し。懈怠の人は諸の功徳を失ふ。譬へば賊を被つて復た遺餘なきが如し。偶に説くが如し。

『應に得べくして而も得ず、已に得て復た失ふ。』

既に自ら其の身を輕んずれば、衆人も亦敬せず。

常に大闇の中に處して、諸の威徳あること無く、尊貴の智慧の法は、此の事永く以て失す。

諸の妙道の法を聞くも、以て身を益すること能はず、是の如きの過失は皆懈怠の心に由る。

増益の法を聞くと雖も、上に及ぶことを得ること能はず、

是の如きの過罪は、皆懈怠の心に由る。

業を生じて理を修めず、道法に入らず、是の如きの過罪は皆懈怠の心に由る。

上智の棄て遠ざかる所、中人は時として復た近づき、

下愚は之が爲に没すること、猪の樂んで湖に在るが如し。

若し世中の人と爲つては、三事皆廢失し、欲樂及び財利、福德も亦復た没す。

若し出家の人と爲つては、則ち二事を得ず、生天及び涅槃、名譽の二俱に失す。

是の如き諸の廢失の、其の所由を知らんと欲せば、

一切の諸の賊中に〔於て〕、懈怠の賊に過ぎたるは無し。

是の衆罪を以ての故に、慚心を作すべからず。馬井二比丘の如きは、懈怠にして惡道に墜ち、佛を見、法を聞くと雖も、猶亦自ら勉めず。』

是の如き等の種種の懈怠の罪を觀じて、精進し增長すべし。

復次に、精進の益を觀するに、今世後世佛道の涅槃の利は、皆精進に由る。

復次に、菩薩は、一切の諸法は、皆空にして、所有なきことを知り、而も涅槃を證せず、衆生を憐愍して諸の善法を集む、是れ精進波羅蜜〔多〕の力なり。

復次に、菩薩は一人にして、獨り等侶なし。精進福德力を以ての故に、

能く魔軍及び結使の賊を破り、佛道を成ずることを得。既に佛道を得れば一切諸法に於て、一相無相にして、其は實に皆空なり。而も衆生の爲に、

諸法の種種の名字、種種の方便を説いて、衆生の生老病死の苦を度脱し、將に滅度せんとする時は法身を以てし、彌勒菩薩・摩訶迦葉・阿難と等し。然る後に 金剛三昧に入つて、自ら身骨を碎いて芥子の如くならしめ、以て衆生を度して精進力を捨てず。

【四七】馬井・馬比丘とは、六群惡比丘中の馬師即ち阿說迦 (Asvaka) のことならんも、井比丘とは、何人のことなるか檢出し能はず。

【四八】金剛三昧とは、金剛の能く一切に無碍なるが如く、能く一切諸法に通達するをいふ。本論第四十七卷「金剛三昧」とは、譬へば金剛の物を陥れざるなきが如く云々を參照せよ。

復次に、阿難が諸の比丘の爲に、【四九】七覺意を説いて、精進覺意に至れるが如し。佛、阿難に問ひたまはく、「汝、精進覺意を説くや」と。阿難言さく、「精進覺意を説くと是の如し」と。三たび問ひたまふに、三たび答ふ。佛、即ち坐より起つて、阿難に告げたまはく、「人能く愛樂して精進を修行すれば、事として得ざる無く、佛道に至るとを得て、終に虚しからざるなり」と。是の如きの種種の因縁によりて、精進の利を觀じて、増益することを得。是の如きの精進を、佛、有時は説いて欲と爲し、或時は精進と説き、有時は不放逸と説きたまへり。譬へば人の遠く行かんと欲するが如し。初めて去らんと欲する時は、是を名けて欲と爲し、發行して住せざる、是を精進と爲し、能く自ら勤勵して、行事をして稽留せしめざる、是を不放逸と爲す。是を以ての故に知りぬ、精進を生ぜんと欲して、精進生ずるが故に不放逸なり。不放逸の故に能く諸法を生じ、乃至佛道を成ずることを得るを。

復次に、菩薩は生老病死を脱せんと欲し、衆生を度脱せんと欲して、常に應に精進して、一心に不放逸なるべし。人の油鉢を擎げて、大衆の中を行くが如く、現前一心に、不放逸なるが故に、大に名利を得。又、偏闇嶮道若くは懸繩、若くは山崖の此の諸の惡道に乗るに、一心不放逸なるを以ての故に、身安隱なるを得るが如し。今世に大に名利を得。道を求めて精進なるも、亦復是の如し。若し一心に不放逸なれば、願ふ所皆得らる。

【四九】七覺意とは、普通に所謂七覺支のことならん。

復次に、譬へば水の流れて能く大石を決するが如し。不放逸の心も亦復是の如く、専ら方便を修して常に行じて廢せざれば、能く煩惱諸結使の山を破す。

復次に、菩薩は三種の思惟あり、若し我、作さずんば果報を得ず。若し我自ら作さずんば他より來らず。若し我作さば終に失はずしと。是の如く思惟して、當に必ず精進すべし。佛道の爲の故に勤修專精して、不放逸なり。一の小なる 阿蘭若の如きは、獨り林中に在つて坐禪して懈怠を生ず、林中に神あり、是れ佛弟子なり、一死屍骨の中に入つて、歌舞し來りて、此偈を説いて言く、

『林中の小比丘、何を以てか懈廢を生ずるや。晝來るに若し畏れずんば、夜も復た是の如くにして來らん。』

【五〇】 阿蘭若 (Aranyaka)

是の比丘は驚き怖れ、坐を起ちて内に自ら思惟し、中夜に復睡る。是の神は復た十頭を現じ、口中より火を出し、牙爪は劍の如く、眼は赤くして炎の如く、顧みて語り、將た從つて此懈怠の比丘を捉へ「此處にして懈怠すべからず、何を以ての故に爾るや」と。時に比丘は大に怖れ、即ち起つて思惟し、專精に法を念じて、阿羅漢道を得たればなり。是を自強精進、不放逸の力、能く道果を得と名く。

復次に、是の精進は自ら身を惜まらずして果報を惜み、身の四儀の坐臥行住に於て常に精進を勉め、寧ろ自ら身を失ふとも道業を廢せず。譬へば失火に瓶水を以て之を救ふに、唯「意」火を滅するに存して、瓶を惜まざるが如し。仙人の師、弟子に教へて偈を説いて言へるが如し。

『決定して心悦豫し、大果報を獲たるが如く、

願ふ事を得る時の如く、乃至此を最妙なりと知れ。』

是の如き種種の因縁も精進の利を觀すれば、能く精進をして増益せしむ。

復次に、菩薩は諸の苦行を修す。若し人あり、來つて頭目髓腦を求索すばれ、盡く能く之を與へ、而も自ら念じて言く「我は忍辱・精進・智慧・方便の力あるも、之を受くると尙苦し、何に況んや、愚騃三塗の衆生をや。我當に此衆生の爲の故に、勤修精進して早く佛道を成じて、之を度脱すべし」と。

# 卷の第十六

初品の中の毗梨耶波羅蜜(多)の下を釋す。

問うて曰く、「云何が精進の相と名くるや、答へて曰く、事に於て必ず能く起發して難きこと無く、

志意堅強にして、心に疲倦なく、所作究竟す、是の如き等を精進の相と名く。

復次に、佛の所説の如くんば、精進の相とは身心息まざるが故なり。譬へば釋迦文尼佛の如きは、

先世曾つて賈客の主と作り、諸の賈人を將ゐて、嶮難の處に入る。是の中

に羅刹鬼あり、手を以て之を遮つて言く、「汝住して動くと莫れ、汝が去る

ことを聽さず」と。賈客の主は即ち右の拳を以て之を撃つに、拳は即ち

鬼に著いて、挽くに離す可らず。復次に、左の拳を以て之を撃つに、亦離

す可らず。右の足を以て之を蹴るに足復粘著す。復た左の足を以て之を蹴るに亦復た是の如し。頭を

以て之を衝くに、頭は即ち復た著く。鬼問うて言く、「汝今是の如くして、何等をか作さんと欲する

や、心休息すること未だしや」と。答へて曰く、「復た五事繫げらると雖も、我が心は終に汝が爲に伏

せざるなり。當に精進力を以て、汝が與に相擊たるととも、要らず懈退せざるべし」と。鬼は時に歡

喜して心に念すらく、「此人は膂力極めて大なり」と。即ち人に語りて言く、「汝は精進の力大なり、必

【一】 第一問、精進の特性は何ぞや。

【二】 釋迦文尼佛、宿世に於て鬼のため五處を繫せられたる因縁。

す休息せずんば、汝を放つて去らしめん」と。行者も是の如く、善法の中に於て、初夜・中夜・後夜に誦經坐禪して、諸法の實相を求め、諸の結使の爲に覆はれず、身心懈らざる、是を精進の相と名く。是の精進を心數法勤行不住の相と名く。心行に隨つて心と共に生じ、或は有覺有觀、或は無覺無觀なり。阿毗曇の法に廣く説くが如くんば、一切の善法の中に於て、懃修して懈らざる、是を精進の相と名け、五根の中に於て精進根と名け、根の増長するを精進力と名け、心、能く開悟するを精進覺と名け、能く佛道涅槃の域に到る、是を正精進と名く。四念處の中に能く懃めて心に繋る、是れ精進分にして、四正懃は是れ精進門なり。四如意足の中の欲精進は即ち是れ精進にして、六波羅蜜の中にては、精進波羅蜜(多)と名く。

問うて曰く、**【三】**汝は先に精進を讃じ、今は精進の相を説く。是は何の精進と名くるや。答へて曰く、是れ一切善法の中の精進の相なり。

問うて曰く、**【四】**今摩訶般若波羅蜜(多)を説く論議の中に、應に精進波羅蜜(多)を説くべし。何を以てか一切善法の中の精進を説くや。答へて曰く、初發心の菩薩は、一切善法の中の精進に於て、漸漸次第して精進波羅蜜(多)を得ればなり。

問うて曰く、一切善法の中に精進多し、今精進波羅蜜(多)を説けば、已に一切善法の精進の中に

**【三】** 第二問、汝が今説けるは、何の精進なるか。  
**【四】** 第三問、いま摩訶般若波羅蜜多の精進を説かずして、一切善法の中の精進を説くは何故なるか。  
**【五】** 第四問、精進波羅蜜多と精進との異同如何。

入るや。答へて曰く、佛道の爲に精進するを名けて波羅蜜「多」と爲す。諸餘の善法の中に精進するは、但精進と名けて、波羅蜜「多」と名けざるなり。

問うて曰く、一切善法の中の數は何を以て精進波羅蜜「多」と名けず、而も獨り菩薩の精進を名けて波羅蜜「多」と爲すや。答へて曰く、波羅蜜「多」を到彼岸と名く、世間の人及び聲聞辟支佛は、具足して精進を行すること能はず、是の故に名けて波羅蜜「多」と爲さず。

復次に、是の人は大造大悲なく、衆生を棄捨し、十力・四無所畏・十八不共法・一切智及び無礙解脫・無量の身・無量の光明・無量の音聲・無量の持戒・禪定・智慧等の諸の善法を求めず。是故に是人の精進を波羅蜜「多」と名けざるなり。復次に、菩薩の精進は、不体不息にして、一心に佛道を求む、是の如く行するを、名けて精進波羅蜜「多」と爲す。

好施菩薩の如きは、如意珠を求めて大海の水を攄み、正に筋骨をして枯れ盡くさしむるも、終に憊廢せず。如意珠を得、以て衆生に給し、其の身苦を濟へり。菩薩は是の如く、爲し難きを能く爲す、是を菩薩の精進波羅蜜「多」と爲す。復次に、菩薩は精進力を以て首となして五波羅蜜「多」を行す、是の時を名けて、菩薩の

精進波羅蜜「多」と爲す。譬へば衆藥和合して、能く重病を治するが如し。菩薩の精進も亦是の如く、但精進のみを行じて、五波羅蜜「多」を行すること能はずんば、是を菩薩の精進波羅蜜「多」と名けず。

【六】第五問、二乘の精進を波羅蜜と名けず、菩薩の精進のみを波羅蜜と名くる理由如何。  
【七】好施菩薩(クニシキ)は、釋尊の同地の修行時代の一名。

復次に、菩薩の精進は、財利富貴力勢の爲にあらす、亦身の爲にあらす、生天・轉輪聖王・梵釋天王の爲にあらす、亦自の爲に以て涅槃を求めず、但佛道の爲に衆生を利益す。是の如き相を名けて、菩薩の精進波羅蜜(多)と爲す。復次に、菩薩の精進は、一切の善法を修行し、大悲を首と爲す。慈父母の唯一子のみ有らんに、而も〔若し〕重病を得ば、一心に藥を求めて、其の疾を救療するが如し。菩薩の精進は、慈を以て首と爲すことも亦復是の如く、一切を救療して心に暫らくも捨つること無し。復次に、菩薩の精進は、實相の智慧を以て首と爲して、六波羅蜜(多)を行す。是を菩薩の精進波羅蜜(多)と名く。

問うて曰く、諸法の實相は無爲無作なり。精進は有爲有作の相なり。云何が實相を以て首と爲すや。答へて曰く、諸法の實相は無爲無作なりと知ると雖も、本願の大悲を以て衆生を度せんと思ふが故に、無作の中に於て、精進力を以て一切を度脱するなり。

復次に、諸法の實相は、無爲無作なること涅槃の相の如く、一も無く二も無し。汝云何ぞ、實相と精進の相と異なると言ふや。汝は即ち諸法の相を解せざるなり。復次に、菩薩は神通力を得、天眼を以て三界五道の衆生を見るに、樂を失するを以て苦と爲す。無色界天に、樂んで定心に著し、命の盡くるを覺えず、欲界の中に墮在して禽獸の形を受く、色界の諸天も亦復是の如く、清淨の處より墮

【八】第六問、有爲有作の精進を修するに、無爲無作の實相を首となす理由如何。

【九】菩薩は天眼を以て五道輪轉の衆生を見て、みな苦なりと觀す。

して、還つて姪欲を受けて不淨の中に在り。欲界六天の樂は、五欲に著して還つて地獄に墮し、諸の苦痛を受く。人道の中に見るに、十善の福を以て、人身を賢得す。人身は多苦少樂にして、高ききて多く惡趣の中に墮す。諸の畜生を見るに、諸の苦惱を受け、鞭杖に驅馳し、重を負ひ遠きを涉り、項領を穿壞し、熱鐵に燒烙す。此人は宿行の因縁に衆生を繫縛するを以て、鞭杖に苦惱す。是の如き等の種種の因縁の故に、象馬・牛・羊・麀鹿の畜獸の形を受く。姪欲の情重く、無明偏に多きは、鵝鴨・孔雀・鴛鴦・鳩鵲・鷄鶩・鸚鵡・百舌の屬を受く。此を受くる衆鳥の種類は百千なり。姪行の罪の故に、身に毛羽を生じ、諸の細滑を隔て、背距麤硬にして觸味を別たす。曠患偏に多きは、毒蛇・蝮蛇・蚊・蜂・百足の毒を含むの蟲を受く。愚癡多きが故に、刺・蠍・蟻・蜂・蝨・蝨・角鳩の屬、諸蝨蟲鳥を受く。恬慢と瞋と多きが故に師子・虎豹の諸の猛獸の身を受く。邪慢の縁の故に、生を驢・猪・駱駝の中を受く。饑貪・癡・妬・輕躁・鈍慢の故に、鬪勝・獲重羅の形を受く。邪貪・憎嫉の業因縁の故に、猪・狸・土虎の諸獸の身を受く。無愧・無慚・忿怒の因縁の故に、鳥・鵝・鷄・鷓鴣の諸鳥の形を受く。善人を輕慢するが故に、鷄・狗・野干等の身を受く。大に布施を作すも、曠患して曲心なれば、此因縁を以ての故に、諸龍の身を受く。大に布施を修するも、心高きり、陵虐して衆生を苦惱すれば、金翅鳥の形を受く。是の如き等の種種の結使の業因縁の故に、諸の畜生畜獸の苦を受く。菩薩は天眼を得て、衆生の五道に輪轉するを觀じて、其の中に廻施し、天中に死して人中に

〔二〕畜生道に於ける鳥獸等の果を觀す。

生じ、人中に死して天中に生じ、天中に死して地獄の中に生じ、地獄の中に死して天上に生じ、天上に死して餓鬼の中に生じ、餓鬼の中に死して、還た天上に生じ、天上に死して畜生の中に生じ、畜生の中に死して天上に生じ、天上に死して還た天上に生ず。地獄・餓鬼・畜生も亦是の如し。欲界の中に死して色界の中に生じ、色界の中に死して欲界の中に生じ、欲界の中に死して無色界の中に生じ、無色界の中に死して欲界の中に生じ、欲界の中に死して欲界の中に生ず、色界・無色界も亦是の如し。(一)〔等〕活地獄の中に死して〔等〕活地獄の中に生じ、黑繩地獄の中に死して〔等〕活地獄の中に生じ、黑繩地獄の中に死して〔等〕活地獄の中に生ず。(二)〔等〕活地獄の中に死して〔等〕活地獄の中に生じ、阿鼻地獄も亦是の如し。(三)炭坑地獄の中に死して、(六)沸尿地獄、乃至 阿鼻地獄も亦是の如し。(四)炭坑地獄の中に死して、(六)沸尿地獄の中に生じ、沸尿地獄の中に死して炭坑地獄の中に生じ、炭坑地獄の中に死して、還た炭坑地獄の中に生ず。(七)燒林地獄、乃至 摩訶波頭摩地獄も亦是の如く、展轉して其の中に生ず。卵生の中に死して胎生の中に生じ、胎生の中に死して、卵生の中に生じ、卵生の中に死して、還た卵生の中に生ず。胎生・濕生・化生も亦是の如し。閻浮提の中に死して、還た閻浮提の中に生ず。瞿陀尼、鬱怛羅越も亦是の如し。四天處に死して、(二)忉利天中に生じ、忉利天中

- 〔一〕等活地獄 (Sāṃvīra)
- 〔二〕黑繩地獄 (Kāṣṭhīra)
- 〔三〕合會地獄 (Sāṃghāta)
- 〔四〕阿鼻地獄 (Avīci)
- 〔五〕炭坑地獄 (Kāṅkīra)
- 〔六〕沸尿地獄 (Kinnapa)
- 〔七〕燒林地獄 (Svaredhara)
- 〔八〕摩訶波頭摩地獄 (Mahā-pādma)
- 〔九〕忉利天 (Tāvastīpina) 譯して三十三天といふ。

に死して四天處に生じ、四天處に死して、還た四天處に生ず。忉利天乃至、他化自在天も、亦た

是の如し。三 梵衆天の中に死して、三 梵輔天の中に生じ、梵輔天の中に死して、梵衆天の中に生じ、

梵衆天の中に死して、還た梵衆天の中に生ず。梵輔天 少光天 無量

光 二重 光音 少淨 無量淨 遍淨 阿那跋羅伽に生ずること

を得。大果虚空處・識處・無所有處・非有想・非無想處も亦是の如し。非有想・

非無想天の中に死して、阿鼻地獄の中に生じ、是の如く展轉して、五道の

中に生ず。菩薩は是を見已つて、大悲心を生ず、「我は衆生に於て、爲に

益する所なし、世と與に樂むと雖も、樂極まれば則ち苦なり、當に佛道の

涅槃の常樂を以て、一切を益すべし」と。云何が而かも益せん。當に大精

進を勤めて、乃ち實智慧を得べし。實智慧を得れば、諸法の實相を知り、

餘の波羅蜜〔多〕を以て助成して、以て衆生を益す、是を菩薩の精進波羅蜜

〔多〕と爲す。

〔三〕 餓鬼の中を見るに、飢渴の故に兩眼陷り、毛髮長く、東西に馳走す。

若し水に趣かんと欲すれば、水を護るの諸鬼、鐵杖を以て逆ひ打つ、設ひ守る鬼なきも、水自然に

竭く、或る時は天より雨を雨すに化して炭と爲る。或は餓鬼あり、常に火に焼かる。劫盡くる時、諸

- 【一〇】 他化自在天 (Paranirmita-svapāna)
- 【一一】 梵衆天 (Brahmaparāśakti)
- 【一二】 梵輔天 (Brahmapurohita)
- 【一三】 少光天 (Parhāṅga)
- 【一四】 無量天 (Apramāṇya)
- 【一五】 光音天 (Ābhāsvārā)
- 【一六】 少淨天 (Parīśuddha)
- 【一七】 無量淨天 (Apramāṇya)
- 【一八】 遍淨天 (Vibhava)
- 【一九】 阿那跋羅伽 (Anābhara-kā)
- 【二〇】 餓鬼道の業果。

山より火の出づるが如し。或は餓鬼あり、羸瘦狂走し、毛髮は摩亂して、以て其の身を覆ふ。或は餓鬼あり、常に屎尿涕唾嘔吐糞滌の餘汁を食し、或る時は爛洞の邊に至りて、立つて不淨を伺ひ求む。或は餓鬼あり、常に産婦の産血を求め、之を飲んで形は焼けたる樹の如く、咽は針の孔の如し。若し其れに水を與ふれば、千歳なるも足らず。或は餓鬼あり、自ら其の頭を破り、手を以て腦を取つて舂む。或は餓鬼あり、形は黒山の鐵錘の頸を鎖すが如く、頭を叩き哀を求め、獄卒に歸命す。或は餓鬼あり、先世に惡口し、好んで讒語を以て衆生に加被す、衆生は憎惡して之を見ると鱗の如し。此の罪を以ての故に、餓鬼の中に墮す。是の如き等の種種の罪の故に、餓鬼趣の中に墮して無量の苦痛を受くるなり。

三

八大地獄を見るに、苦毒萬端なり。活大地獄の中の諸の罪を受くるの人は、各各共に闘ひ、惡心にして斷り争ひ、手に利刀を捉つて互に相割刺し、稍を以て相刺し、鐵又相又へ、鐵棒相棒す、鐵杖相撞き、鐵釜相貫き、而も利刀を以て互に相切脛し、又鐵の爪を以て相鬪ひ裂き、各身血を把つて相塗り、漫りに痛毒過切し、悶えて覺る所なし、宿業の因縁にして、冷風來り吹き、獄卒之を喚んで咄すれば、諸の罪人は還つて活す。是故に活地獄と名く。即時に平復して復た苦毒を受く、此中の衆生は、宿行の因縁を以て、好んで物の命を殺す。〔即ち〕田業舍宅奴婢妻子園土資財の爲の故に、牛羊魚獸を相殺害す。是の如き等の殺業の報

【三】 以下八大地獄の業果を説く。尙ほ地獄の狀態に關しては、現代印度歌の一種の經典たる "The Puranas" 第二編第六章の記述などと比較するを要す。

の故に、此の劇罪を受く。黒繩大地獄の中の罪人を見るに、惡羅利獄卒・鬼匠の爲に、常に黒熱の鐵繩を以て、罪人を拚度し、獄中の鐵斧を以て人をして之を斫らしめ、長き者を短からしめ、短き者を長からしめ、方なる者を圓ならしめ、圓なる者を方ならしめ、四支を斬截し、其の耳鼻を却り、其の手足を落し、大鐵鋸を以て解析割截して、其の肉分を破り、襍糲之を稱す。此人は宿業の因縁に、讒賊を忠良とし、妄語・惡口・兩舌・綺語を以て、枉げて無辜を殺し、或は奸吏と作つて、酷く暴く侵害す。是の如き等の種種の惡口讒賊の故に、故らに此の罪を受く。合會大地獄の中を見るに、惡羅利獄卒は種種の形と作り、牛馬・猪羊・麀鹿・狐狗・虎狼・師子・六駁の大象・鸚鵡・鴉鳥、此種種諸の鳥獸の頭と作り、來つて罪人を呑み噉ひ、齧齧し、齧掣す。兩山は相合し、大熱鐵輪は諸の罪人を轆つて、身をして破碎せしめ、熱鐵の臼の中に、之を搗いて碎けしめ、蒲萄を笮するが如く、亦油を壓するが如し。譬へば蹂場の如く、肉を聚めて積を成し、頭を積むと山の如く、血は流れて池と成り、雕鷲虎狼は各來り争つて掣く。此の人は宿業の因縁に、多く牛馬・猪羊・麀鹿・狐兔・虎狼・師子・六駁の大象、衆鳥を殺し、多く是の如き等の、種種の鳥獸を殘賊するが故に、還つて此の衆の鳥獸の頭、來つて罪人を害することを受く。又力勢を以て相陵ぎ、羸弱を枉げ押せば、兩山相合するの罪を受く。慳貪瞋恚・患癡怖畏の故に、事の輕重を斷するに、正理を以てせず、或は正道を破り、正法を轉易して、熱鐵輪に轆かれ、熱鐵臼に搗かるることを受く。第四と第五とを叫喚・大叫喚と名く。此の大地獄は、

其の中の罪人、羅刹・餓卒の頭は黄にして金の如く、眼中より火を出し、赭色の衣を著け、身肉は堅  
 勁に、走疾すること風の如く、手足は長大に、口よりは惡聲を出し、三股の叉を捉り、箭の墮つこ  
 と雨の如くして、罪人を刺し射る。罪人は狂ひ怖れ、叩頭して哀を求む。大將軍は小らく見て放捨  
 し、小らく見て憐愍す、即時に將ゐて熱鐵地獄に入る。纒の廣さ百由旬なり、驅打馳走して足は皆焦  
 然し、脂は纒より流れ出でて、麻油を拵するが如く、鐵棒を以て頭を棒てば、頭は破れて腦の出づ  
 と、酪瓶を破るが如く、斫割刺し、身體糜爛す。復將ゐて鐵圍に入れ、屋の間より黑煙來り熏じて  
 互に相推壓し、更に相怨毒して、皆言く、何を以てか我を壓するや」と。纒  
 に出でんことを求めんと欲するに、其の門は已に閉ぢ、大聲號呼の音は常  
 に絶えず。此の人の宿業の因縁は、皆斗秤を以て欺誑し、非法を以て事を斷じ、寄を受けて還さず、  
 下劣を倣し、諸の窮貧を惱まし、其をして號哭せしめ、他の城郭を破り、人の聚落を壞し、傷害劫  
 剝し、室家は怨毒し、城を擧げて叫喚し、有時は誑詐欺誑し、之を誘つて出でしめ、復之を害するに  
 由る。是の如き等の種種の因縁の故に、此の如き等の罪を受く。大叫喚地獄の中の人、皆坐に穴居  
 の窟を重殺し、周圍を幽閉し、或は間橋窟中に之を重殺し、或は井中に投じ、他の財を劫奪す、是の  
 如き等の種種の因縁によりて、大叫喚地獄の罪を受く。第六第七は熱大熱地獄なり。中に二一の大銅  
 鍬あり。一を 毘陀と名け、二を 跋難陀と名く。鹹沸水を中に滿て、羅刹鬼賊卒は、罪人を以て

【三】 羅刹(ラキヤ)

【二】 羅刹(ラキヤ) (Rakshasa)

中に投じ、厨士の肉を煮るが如くす。人は鏝中に在つて、脚を上にし頭を下にす。譬へば豆を煮て熟爛するが如く、骨節は解け散じ、皮肉は相離る。其已に爛るるを知つて、又又を以て出す。行業の因縁を以て、冷風吹いて活し、復た炭坑に投じ、或は沸灰の中に著く。譬へば魚の水より出でて、熱沙の中に著くが如し。又膿血を以て自ら煎じ熬られ、炭坑の中より出して之を灸牀に投げ、強いて驅つて坐せしめ、眼耳鼻口及び諸の毛孔より一切の火出づ。此の人は宿世に、父母師長沙門婆羅門を惱亂し、諸の好人の福田の中に於て、惱まして心を熱せしむ。此の罪を以ての故に、熱地獄の罪を受く。或は宿世に生蠶を煮るあり。或は生ける猪羊を炙り。或は木を以て人を貫いて、生きたがら之を炙り、或は山野及び諸の聚落佛圖精舍等を焚燒し、或は衆生を推して火坑の中に著く、是の如き等の種種の因縁を以て、此の地獄の中に生ず。阿鼻地獄を見るに、縦の廣さ四千里にして、鐵壁を周らし廻す、七地獄のうちにて於て、其の處最も深し、獄卒羅刹は大鐵槌を以て諸の罪人を槌つと、鍛師の鐵を打つが如く、頭より皮を剥ぎ、乃至其の足に五百の釘を以て、其身を釘磔すること、牛皮を磔るが如く、互に相掣挽して應に手を以て破裂すべく、熱鐵の火車は以て其の身を轆り、火坑に駆け入り、炭を抱いて熱沸の尿河を出さしめ、駈けて中に入らしむ。中に鐵背の毒蟲あり、鼻の中より入つて脚底に出で、足下より入つて口中に出づ。劍を道中に墜てて駈つて馳走せしめ、足下の破碎すること、厨の膾肉の如く、利刀劍稍の身中に飛び入ること、譬へば霜樹の落葉、風に隨つて亂墜するが如し。

罪人の手足耳鼻支節は、皆斫割截せられ、地には流血ありて池を成す。二の大惡狗あり、一を除摩と名け、二を除婆羅と名く。鐵口猛獸にして人の筋骨を破碎し、力は虎豹に踰え、猛きこと師子の如し。大刺林あり、罪人を驅逼して強いて樹に上らしめ、罪人の上る時は、刺し便ち下に向ひ、くだ時は、刺は便ち上に向ふ。毒蛇蝮蠍惡蟲は、覘ひ來つて之を齧み、大鳥長喙は頭を破つて腦を噉ひ、鹹河の中に入つて、流に隨つて上下す。出れば即ち熱鐵の地を踏み、鐵刺の上を行き、或は鐵弋に坐し、弋は下より入る。鉗を以て口を開き、灌ぐに洋銅を以てし、熱鐵の丸を呑んで口に入るれば、口燵けて咽に入り咽爛れて腹に入り、腹然へ、五臟皆焦げて直に過ぎて地に墮ち、但惡色のみを見、恒に臭氣を開き、常に塵澀に觸れ、諸の苦痛に遭ひ、迷悶萎頓し、或は狂逸搗撲し、或は藏竄投擲し、或は顛仆墮落す。此の人の宿行は、多く大惡五逆の重罪を造り、諸の善根を斷じ、法を非法と言ひ、非法を法と言ひ、實を非實と言ひ、非實を實と言ひ、因を破り、果を破り、善人を憎嫉す、是の罪を以ての故に、此の地獄に入り、罪を受くること最も劇し、是の如き等の種種の八大地獄に、復た（番）十六の小地獄あつて眷屬と爲る。八寒氷と、八炎火となり。其の中の罪毒は見聞す可らず。八炎火地獄とは、一を（三）炭坑と名け、二を（三）沸尿と名け、三を（三）燒林と名け、四を（三）劍林と名け、五を（三）刀道と名け、六を（三）鐵刺林と名け、七

- 【一】十六の小地獄の相。
- 【二】炭坑(スウクワ)
- 【三】燒星(クンギ)
- 【四】燒林(Kamudhara)
- 【五】劍林(Avilium)
- 【六】刀道(不詳)
- 【七】鐵刺林(Ayalsalimava)

を(四)鹹河(かんが)と名なけ、八(八)を(三)銅櫬(どうくつ)と名なく、是これを八はちと爲なす。八(八)寒冰地獄(かんびょうじやく)とは一(一)を(四)須浮陀(すぶつた)と名なけ、二(二)を

尼羅浮陀(ニラフタ)と名なけ、三(三)を(三)阿羅羅(アラク)と名なけ、四(四)を(四)阿婆婆(アハハ)と名なけ、五(五)を(四)瞋瞋(しんしん)と名なけ、六(六)を(四)濕(ウ)

波羅(バラ)と名なけ、七(七)を(三)波頭摩(ハトマ)と名なけ、八(八)を(三)摩訶波頭摩(マハハトマ)と名なく、是これを八はちと爲なす。若もし清淨戒(しやうじやうかい)、出家(しゆつ)

の法ほふを破やぶり、白衣(びやく)をして佛道(ぶつどう)を輕賤(きやうせん)せしめ、或あるは衆生(しゆじやう)を推おして、火坑(くわかう)の中なかに著つけ、或あるは衆生(しゆじやう)の命いのち、未

だ盡つきざる頃あひだに火くわ上じやうに於おいて之こを灸ある。是かくの如ごとき等とうの種種(しゆじゆいんねん)の因緣いんねんを以もつて、炭たん

坑地獄(かちやく)の中なかに墮だし、大火炎(たいくわえん)の炭すすは膝(かま)に至いたつて罪人(ざいにん)の身みを燒やく。若もし沙門婆

羅門(らもん)の福田(ふくでん)の食(じき)に、不淨(ふじやう)の手てを以もつて觸ふれ、或あるは先(まき)に噉(くら)ひ、或あるは不淨物(ふじやうぶつ)を以もつて中なかに著つけ、或あるは熱沸(ねつわい)の尿(し)を以もつて他たの身みに灌そぎ、淨命(じやうめい)を破やぶり、邪命(じやめい)を以もつて

自活(じくわつ)す。是かくの如ごとき等とうの種種(いんねん)の因緣いんねんを以もつて、沸屎(ぶつし)地獄(ちやく)の中なかに墮だす。沸屎(ぶつし)の深(ふか)

く廣ひろきこと大海(たいかい)の水(みづ)の如ごとく、中なかに細蟲(さいちゆう)あり、鐵(てつ)を以もつて斃(ころ)し、罪人(ざいにん)の頭(かうべ)

を破やぶつて腦(なう)を噉(くら)ひ、骨(ほね)を破やぶつて髓(ずい)を食(くら)ふ。若もしは草木(さうもく)を焚燒(ほんせう)し、諸蟲(しよちゆう)を傷(いた)

害(がい)し、或あるは林(はやし)を燒やき、大(おほ)に獵(らぶ)して害(がい)を爲なすと彌(いよいよ)廣ひろし。是かくの如ごとき等とうの種種(しゆじゆ)

の因緣(いんねん)を以もつて、燒林地獄(せうりんぢやく)の中なかに墮だす。草木(さうもく)の火(ひ)然ほへて、以もつて罪人(ざいにん)を燒やく。若もし刀劍(たうけん)を執持(しやくぢ)して闘(とう)争(じやう)

傷殺(しやうころ)し、若もしくは樹(き)を斫(き)り人(ひと)を壓(あつ)して、以もつて宿怨(しゆくわん)を報(はう)じ、若もしくは人(ひと)の忠信(ちゆうしん)を以もつて誠(まこと)を告(つ)ぐるに、而(しか)も密(みつ)

相(さう)の中(なか)に陷(おち)る。是かくの如ごとき等とうの種種(いんねん)の因緣いんねんを以もつて、劔林地獄(けんりんぢやく)の中なかに墮だす。此(こ)の地獄(ぢやく)の罪人(ざいにん)は中(なか)に入(い)れ

相(さう)の中(なか)に陷(おち)る。是かくの如ごとき等とうの種種(いんねん)の因緣いんねんを以もつて、劔林地獄(けんりんぢやく)の中なかに墮だす。此(こ)の地獄(ぢやく)の罪人(ざいにん)は中(なか)に入(い)れ

【一】鹹河 (Aspitavana)

【二】銅櫬 (Atreka)

【三】須浮陀 (Ayudha ?)

【四】阿羅羅 (Arbuda) (水泡又 (はた)

【五】尼羅浮陀 (Niravata) (水泡裂又 (はた)

【六】阿婆婆 (Atata)

【七】阿婆婆 (Atata)

【八】瞋瞋 (Hirana)

【九】濕 (Ugrata)

【十】波頭摩 (Padma)

【十一】摩訶波頭摩 (Mahapadma)

ば、風、劍葉を吹いて、手足耳鼻を割截して、皆墮落せしむ。是の時林中に烏菴惡狗あつて、來つて其の肉を食ふ。若くは利刀を以て人を刺し、若くは楯、若くは鏑を以て人を傷じ、若くは道路を斷截し、橋梁を撥撤し、正法の道を破り、示すに非法の道を以てす。是の如き等の種種の因縁を以て、刀道地獄の中に墮す。刀道地獄の中の絶壁の狭道の中に於て利刀を豎て、罪人をして、上を行いて過さしむ。若くは邪淫を犯し、他の婦女を侵し、樂鬪を貪り受く。是の如き等の種種の因縁を以て、鐵刺林地獄の中に墮す。刺樹の高さ一由旬にして、上に大毒蛇あり、化して美女の身と作り、此の罪人を喚び「上り來れ、汝と共に樂を作さん」と。獄卒は之を騙つて上らしむるに、刺は皆下に向つて罪人を貫刺し、身は刺害を被つて骨に入り髓に徹す。既に樹上に至れば、化女は還た蛇身に復り、頭を破り腹に入つて、處處に穴を穿ち、皆悉く破爛し、忽ちにして復還た活き、身體平復す。化女は復た樹下に在つて之を喚び、獄卒は箭を以て仰ぎ射て、之を呼んで下らしむれば、刺復た仰いで刺し、既に地に到るを得れば、化女の身は復た毒蛇と作り、罪人の身を破る。是の如く久久にして、熱鐵刺林より出で、遂に河水の清涼快樂なるを見、走り往いて之に趣き、中に入れば變じて、熱沸の鹹水と成り、罪人は中に在つて、須臾の頃に皮肉離散し、骨のみ水中に立つ。獄卒器刺は、鉞鉤を以て出で、持して岸上に著く。此の人の宿業の因縁は、水性の魚鱉の屬を傷殺し、或時は人及び諸の衆生を推して、水中に没せしめ、或は之を沸湯に投じ、或は之を氷水に投ず。是の如き等の種種の惡業の因縁の

故に、此の罪を受く。若し銅槓地獄に在れば、獄卒羅刹は諸の罪人に問ふ、「汝は何の處より來るや」と。答へて言く、「我は苦に悶え、來る處を知らず、但飢渴のみを患ふ」と。若し渴すと云へば、是の時獄卒は即ち罪人を驅逐し、熱せる銅槓の上に坐せしめ、鐵の鉗を以て口を開き、灌ぐに洋銅を以てす。若し飢ゆと言へば、之を銅槓の上に坐せしめ、吞ましむるに鐵丸を以てす。「それを」口に入れば、口焦げて咽に入り、咽爛れて、腹に入り、腹燃えて五藏爛壞し、直に過ぎて地に墮つ。此人の宿行の因縁は、他の財を劫盜して以て自ら口に供す。諸の出家の人の、或る時は病と詐り、多く蘇油石蜜を求め、或は戒なく禪なく、智慧あること無く、而も多く人の施を受け、或は惡口して人を傷く、是の如きの種種の宿業の因縁を以て、銅槓地獄に墮す。若し人類浮陀地獄の中に墮つれば、其處は氷を積み、毒風來り吹いて、諸の罪人をして、皮毛裂け落ち、筋肉斷絶し、骨破れ、髓出て、即ち復完堅にして罪を受けしむると初の如し。此の人の宿業の因縁は、寒月に人を剝ぎ、或は凍人の薪火を劫盜し、或は惡龍と作つて瞋毒忿恚し、大雹雨水凍を放つて人を害し、或は佛及び佛弟子、持戒の人を輕賤謗毀し、或は口の四業に衆の重罪を作る。是の如きの種種の因縁を以て、類浮陀地獄の中に墮つ。尼羅浮陀も亦是の如し、類浮陀には、少時間あつて暫らく休息を得れども、尼羅浮陀には間なく休息の時なし。呵婆婆呵羅羅羅、睽睽、此の三地獄は、寒風に嘖嘖して、口を開くこと能はず、其の呼聲に因つて以て獄に名く。漚波羅獄の中には、凍冰涎滌し、有は青蓮華に似たり。波頭摩の狀は此

の間の赤蓮華の如し。摩訶波頭摩は、是中には拘伽羅の住する處なり。有智の人は是を聞いて、驚いて言く、「唯、此の無明悲愛の法を以ての故に、乃ち此苦を受け、出でて復た入り、あななく已むと無し」と。菩薩は此を見て、是の如く思惟す、「此の苦業の因縁は、皆これ無明、諸の煩惱の作す所なり。我當に精進して六度を勤修し、諸の功德を集めて、衆生の五道の中の苦を斷除すべし」と。大哀を興發し精進を増益す。父母の囹圄に幽閉せられ、拷掠榜笞し、憂毒萬端なるを見て、方便して救心を求め、暫らくも捨てざるが如く、菩薩は諸の衆生の五道の苦を受くるを見て、之を念ふこと父の如きことも亦復た是の如し。

復次に、菩薩は精進して世世に勤修し、諸の財寶を求めて衆生に給施し、心に憍慢なし、自ら財物あつて能く盡く施與して、心に亦懈らず。

復次に、精進して戒を持つに、若くは大、若くは小、一切能く受け、一切能く持つて、毀らす犯さず、大さ毛髮の如く、設ひ違失あるも、即時に發露して初より覆藏せず。

復次に、忍辱を勤修するに、若し人、刀杖を以て打も害し、罵詈し、毀辱し、及び恭敬し供養するにも、一切を能く忍んで、受けず、著せず、其の心没せず、亦疑悔せざるなり。

復次に、專精一心に諸の禪定を修して能く住し、能く學すれば、五神通、及び四無量心、八勝處

【一】 二六二頁は譯して當時者といふ此の人に關しては、本論第一卷二九頁、及び第三卷四九二頁を見よ。  
 【五二】 八勝處・八背捨・十一切處の解釋は本書一八六頁以下に詳なり。

八背捨、十一切處を得、諸の功德、四念處、及び諸の菩薩の見佛三昧を具す。復次に、菩薩は精進して、法を求めて懈らず、身心勲力して法師を供養し、種種に恭敬・供給給使して、初より遺失せず、亦廢退せず、身命を惜まず、法の爲の故を以て誦讀問答し、初中後夜に思惟し、憶念し、籌量し、分別して、其の因縁を求め、實相、一切諸法の自相異相・總相・別相・一相・有相・無相・如實相・諸佛菩薩の無量の智慧心不退・不沒を知らんと欲す、是を菩薩の精進と名く。是の如き等の種種の因縁を以て、種種の善法を能く生じ能く辦す。是の故に名けて、精進波羅蜜「多」と爲す。波羅蜜「多」の義は先に説くが如し。復次に、菩薩の精進を名けて、精進波羅蜜「多」と爲し、餘人の精進を波羅蜜「多」と名けず。

問うて曰く、云何が精進を満足すと爲すや。答へて曰く、菩薩の生身法性身は、能く功德を具ふ、是を精進波羅蜜「多」を満足すと名く。満足の義は上に説くが如し、身心精進して廢息せざるが故なり。

問うて曰く、語精進は是れ心數法なり、經に何を以てか、身精進と名くるや。答へて曰く、精進は是れ心數法なりと雖も、身力より出づるを名けて身精進と爲す。受の如きは是れ心數法なれども、而も五識あつて相應する受は、是を身受と名け、意識相應の受は、是を心受と爲す。精進も亦是の如

【五九】 第七問、何をか精進を満足すといふや。

【六〇】 第八問、精進は心的作用即ち心所法なり。然るに之を身精進といふ理由如何。

【六一】 意識相應の受(感覺)を心受(心的感覺)と名け、眼・耳・鼻・舌・身の五識相應の受(感覺)を身受(身的感覺)と名く。

く、身力を以て勤修し、若くは手づから布施し、口に法言を誦し、若くは法を講説す。是の如き等々名けて、身口の精進と爲す。

復次に、布施持戒を行するは是を身精進と爲し、忍辱禪定智慧、是を心精進と名く。復次に、外に勤修を事とする、是を身精進と爲し、内に自ら專精する是を心精進と爲す。又、身精進を名けて身と爲し、細精進を名けて心と爲す。福徳の爲に精進するを名けて身と爲し、智慧の爲に精進する是を心と爲す。若し菩薩の初發心より、乃至無生忍を得るまで、是の中間を身精進と名け、生身未だ捨てざるが故に無生忍を得。肉身を捨てて法性身を得、乃ち成佛するに至るまで、是を心精進と名く。復次に、菩薩の初發心の時は、功徳未だ足らざるが故に、三福の因縁を種う、布施と持戒と善心となり。漸やく福報を得て、以て衆生に施すに、衆生未だ足らず、更に廣く福を修し大悲心を發し、「一切衆生は、財に於て足らず、多く衆惡を作す、我少財を以て、其の意を満足すること能はず、其の意滿たさんば、教誨を動受すること能はず、道教を受けさんば、生老病死を脱することを得る能はず、我當に大方便を作して、財を給施し、其をして充滿せしむべし」と。便ち大海に入つて諸の異寶を求め、山に登り危を履んで以て妙藥を求め、深き石窟に入つて、諸の異物・石汁・珍寶を求めて、以て衆生に給す。或は、薩陀婆と作つて險道を冒し渉るに、劫賊・師子・虎狼・惡獸あるも、衆生に布施せんが爲の故に財寶を動求して、以て難しと爲さず。

【英】  
The name is a translation of the original text.

藥草呪術を以て、能く銅をして變じて金と爲らしむ。是の如く種種に變化して諸の財物を致し、及び四方の主なき物を以て衆生に給す、是を身の精進と爲す。五神通を得て能く自ら變化して諸の美味を作り、或は天上に至つて自然の食を取る、是の如き等を名けて心の精進と爲す。能く財寶を集めて以て布施に用ゐる、是を身の精進と爲し、是の布施の徳を以て佛道に至ることを得る、是を心の精進と爲す。生身の菩薩の六波羅蜜「多」を行する、是を身の精進と爲し、法性身の菩薩の六波羅蜜「多」を行する、是を心の精進と爲す。復次に、一切法の中に皆よく成辦して身命を惜まざる、是を身の精進と爲し、一切の禪定の智慧を求むる時、心懈倦せざる、是を心の精進と爲す。復次に、身の精進は諸の艱苦を受くるも、終に懈廢せず、説くが如きは、波羅奈國の 毘摩達

梵摩達

【毘】鹿野苑に於ける梵摩達  
 (Brahmadatta) の因縁。

王は、林中に遊獵して二の鹿群を見る。群には各主あつて、一主に五百の群鹿あり、一主の身の七寶の色せるは是れ釋迦文菩薩にして、一主は是れ提婆達多なり。菩薩の鹿主は、人王の大衆、其の部黨を殺すを見て、大悲心を起して逕に王の前に到れば、王人競ひ射て、矢の飛ぶこと雨の如し。王は此の鹿の直に進み趣き已つて、忌憚する所なきを見て、諸の從人に勅したまはく、「汝が弓箭を攝めて、其來意を斷つことを得ること無れしと。鹿王は既に至つて、跪いて王に白して言さく、「君は、嬉遊逸樂の小事を以ての故に、群鹿一時に皆死苦を受く。若し以て善に供せば、當に自ら次を差して、日に一鹿を送つて以て王厨に供すべし」と。王は其の言を善しとし、聽し

て其の意の如くす。是に於て二の鹿群の主は、大に集めて、次を差して各一日に當つ。是時提婆達多の鹿群の中に、一鹿の子を懐み、次、至つて應に送らるべき者あり。來つて其主に白すらく、「我が身は今日、應當に送られて死すべし、而も我は子を懐めり、子は次に非ず。乞ふ、料理を垂れて、死者は次を得、生者は灌らざらしめたまへし」と、鹿王、之を怒つて言く、「誰か命を惜まざらん、次來らば、但去れ、何ぞ辭することを得ん」と。鹿母思惟すらく、「我が王は不仁なり、理を以て恕さず、我が辭を察せずして、横まゝに瞋怒せらる、告ぐるに足らざるなり」と。即ち菩薩の王の所に至つて、情を以て具に白す。王、此の鹿に問ふ、「汝が主は何と言ふや」と。鹿曰く

「我が主は不仁にして料理せられずして、而も瞋怒せらる。大王は仁にして一切に及ぶが故に來つて歸命す。我が今日の如きは、天地噴しと雖も控告する所なし」と。菩薩思

惟すらく、「此は甚だ堪む可し、若し我理ならずんば、枉げて其の子を殺さん。若し次に非るを更に差次す。未だ及ばざるを如何が遣はす可き、唯我のみ有つて當に之に代るべし」と。之を思ひ既に即ち自ら身を送らんと定め、鹿母をして還らしめ、「我今汝に代らん、汝憂ふること勿れ」と。鹿王は逕

に王門に到る。衆人は之を見て、其の自ら來れることを惟し、事を以て王に白す。王も亦之を惟んで、命じて前ましめ、問うて言く、「諸鹿盡くるや。汝、何を以て來るや」と。鹿王言く、「大王の

仁は群鹿に及んで、人の犯す者なし、但滋茂のみあり、何ぞ盡くる時あらん。我が異部の群中に一鹿

仁は群鹿に及んで、人の犯す者なし、但滋茂のみあり、何ぞ盡くる時あらん。我が異部の群中に一鹿

仁は群鹿に及んで、人の犯す者なし、但滋茂のみあり、何ぞ盡くる時あらん。我が異部の群中に一鹿

仁は群鹿に及んで、人の犯す者なし、但滋茂のみあり、何ぞ盡くる時あらん。我が異部の群中に一鹿

【次】次とは、順番の義なり。

の子を懷める有り。子の産に垂ぶを以て身を刳割せば、子も亦命を并すべきを以て我に歸告す。我よは以て之を慙む、分にあらざるを、更に差するは、是亦不可なり。若し歸して而も救はずんば、木石に異ふること無し。是の身は久しからず、必ず死を免れず、苦厄を慈しみ救はば、功德無量ならん。若し人にして慈なくんば、虎狼と亦何ぞ異ならん」と。王は是の言を聞いて即ち坐より起ち、偈を説いて言く、

『我は實に是れ畜生なり、名けて人頭の鹿と曰ふ。汝は是れ鹿身なりと雖も、名けて鹿頭の人と爲す。』

理を以て之を言はば、形を以て人と爲すに非ず、若し能く慈惠あらば、獸なりと雖も、實に是れ人なり。

我今日より始めて、一切の肉を食はず、我は無畏を以て施し、且つ汝

が意を安んず可し。』

諸の鹿は安んずることを得、王は仁信を得たり。復次に、愛法梵志の如きは、十二歳にして、遍なく閻浮提に聖法を知らんことを求むるに、而も得ること能はず、時に世に佛なく、佛法も亦盡きたり。一の婆羅門あり言く、「我に聖法の一偈あり、若し實に法を愛せば、當に以て汝に興ふべし」と。答へて言く、「實に法を愛す」。婆羅門言く、「若し實に法を愛せば、當に汝が皮を以て紙と爲し、身

【无】愛法梵志 (Dhammapiya) 皮を紙とし骨を筆とするの因縁。愛法は他書に法愛とも譯せり。

骨を以て筆と爲し、血を以て之を書かば、當に以て汝に與ふべし」と。即ち其言の如く、骨を破り、皮を剥ぎ、血を以て鬘を寫す、

【如法に應に修行すべし、非法は受くべからず、今世及び後世に、法を行する者は安隱なり。】

復次に 昔、野火林を燒く、林中に一の雉あつて、身自ら力を勉めて飛んで水中に入り、其の羽

毛を漬け來つて大火を滅す。火は大に水は少し、往來して疲乏するも、以て苦と爲さず。是の時、天帝釋、來つて之に問うて言く、「汝は何等をか作す」と。答へて言く、「我が此林を救ふとは、衆生を

惑むが故なり。此の林は蔭育の處にして廣く、清涼快樂なり。我が諸の種

類及び諸の宗親并に諸の衆生は、皆此に依り仰ぐ、我は身力あり、云何が憐念して之を救はざらん」と。天帝問うて言く、「汝は乃ち精勤して、當

に幾時にか至るべき」と。雉言く、「一死を以て期と爲す」と。天帝言く、「一汝

が心は爾なりと雖も、誰か證知する者ぞ」と。即ち自ら誓を立つらく、「我が心の至誠、信にして虚

しからずんば、火は即ち當に滅すべし」と。是の時、淨居天は菩薩の弘誓を知つて即ち爲に火を滅す、

古より今に及んで、唯此の林のみ有つて常に獨り蔚茂して火の爲に燒かれず。是の如き等の種種の

宿世の所行に、爲し難きを能く爲して、身命・國財・妻子・象馬・七珍・頭目・髓腦を惜まず、勉め施して

倦まず。説くが如くんば、菩薩は諸の衆生の爲に、一日の中に千たび死し、千たび生ず。

檀と

【六】 野火の林を燒くに當り、一雉あり毛羽を以て火を滅せんと試みたる因縁。  
【六二】 檀とは布施の梵語、檀那【三三】の略。

戸(三三)と忍にんと禪ぜんとの如ごとく、般若波羅蜜はんにはらみつた「多」の中の所行しよぎやうも是ことの如ごとし。菩薩本生經はさつほんしやうきやうの中の種種しゆじゆの因縁いんねんの相さうは、是これを身の精進しやうじんと名なづけ、諸もろもろの善法ぜんぽうに於おいて修行しゆぎやうし信樂しんらくして、疑悔ぎげせず、而も懈怠けたいせず、一切いつさいの賢聖けんしやうより、下凡夫しもはんぶに至いたるまで法ほふを求もとめて厭いとふと無なく、海うみの流ながれを吞のむが如ごとき、是これを菩薩はさつの心こころの精進しやうじんと爲なす。

問とうて曰いはく、(三三)心に厭をんそく足そくなしとは、是この事こと然しからず、何なんとなれば若もし求もとむる所の事辦ことべんじ、願ねがふ所ところ已すでに成なせば、是こと則すなはち足たるべし。若もし理求りもとむべからず、事辦ことべんす可べからずんば、亦また應おほに捨廢しやはいすべし。云何いかんが恒つねに厭をんそく足そくなきや。人ひとの井ゐを穿うがつて泉いづみを求もとむるが如ごとし。功こうを用もちふる事こと轉うたた多おほくして、轉うたた水相すゐさうなければ、則すなはち應まに止息しそくすべし。亦また道みちを行ゆくが如ごとし。已すでに所在しよざいに到いたれば、應まに復またた行ゆくべからず、云何いかんが恒つねに厭をんそく足そくなけん。答こたへて曰いはく、菩薩はさつの精進しやうじんは、世間せけんの譬喻ひゆを以もつて比たとへ爲なす可べからず。井ゐを穿うがつに力ちから少すくければ、則すなはち水みづを得うること能あたはず、水みづなきに非あらず。若もし此處ここのに水みづなくんば、餘處よしょに必かならず有あり、至いたる所ところあるが如ごときは、必かならず求もとめて佛ほとけに至いたらん。佛ほとけに至いたるも厭あくこと無なく、人ひとを誨をしへて倦うまざるが故ゆゑに、厭いとふこと無なしと言いふ。復次またつぎに、菩薩はさつは精進しやうじんの志願しやうわん、弘曠ぐくわうにして、誓ちかつて一切いつさい衆生しゆじやうを度とどめんと無なき盡つくなり。是ことの故ゆゑに精進しやうじんも亦また盡つくくべからず。汝なんぢは事辦ことべんせば止とどむべしと言いふも、是ことの事ことは然しからず。佛ほとけに至いたることを得うと雖いへども、衆生しゆじやう未まだ盡つくきずんば休息くそくすべからず。譬たとへば火相くわさうの若もし滅めつせざれば、終つひに燒やかざる

【六二】戸とは持戒の梵語、戸羅(五三)の略。

【六三】第九問、求むる所已に辦じ、願ふ所既に成せば、何ぞ厭足なきを得んや。

【六四】菩薩は佛に至るまで精進して厭ふことなし。譬へば井を穿つに力少なければ則ち水を得ざるも、大地には水なきにあらざるが故に水を得るまで處處に井を穿つが如し。

無きが如く、菩薩の精進も亦復是の如し。未だ滅度に入らざれば、終に休息せず、是の故に十八不共法の中に、欲及び精進の二事は常に修するなり。復次に、菩薩は、(室)法住に住せずして般若波羅蜜〔多〕の中に、精進を廢せず。是れ菩薩の精進にして、佛の精進に非ず。復次に、菩薩は未だ菩薩の道を得ず。生死の身にして、好き事を以て衆生に施すに、衆生は反つて更に、不善の事を以て之に加ふ。或は衆生あり、菩薩は讚美するに、反つて更に毀り辱しめ、菩薩は恭敬するに、而も反つて輕慢し、菩薩は慈念するに、反つて其の過を求めて、謀つて中傷せんと欲す。此の衆生等は、力勢あること無くして、來つて菩薩を惱ます。菩薩は此の衆生に於て弘誓の願を發し、「我佛道を得ば、要らず當に此の惡中の惡たる諸の衆生の輩を度すべし」と。此の惡中に於て其の心懈らず、大悲心を生ず。譬へば慈母の、其の子の病を憐み、憂念して捨てざるが如し。是の如きの相は、是を菩薩の精進と爲す。

復次に、布施波羅蜜「多」を行する時、十方の種種の乞兒來つて求索せんと欲し、索むべからざる者を、皆來つて之を索め、及び重んずる所、捨て難きの物を索め、菩薩に語つて言く、「我に兩眼を興へよ、我に頭腦骨髄、愛重の妻子及び諸の貴價の珍寶を興へよ」と。是の如き等の捨て難き物を、乞者の強いて索めんに、其心動せず、慳瞋起り見はれず、疑心を生せず、一心に佛道の爲の故に布施す。

【法住、眞如の妙理は必ず一切諸法の中に在て住するが故に法住といふ。その眞如にも住せざるを、法住に住せずといふ。】

譬は須彌山の四方より風吹くも、動かすと能はざる所なるが如し。是の如き種種の相は、是を精進波羅蜜「多」と名く。復次に、菩薩の精進は、遍ねく五波羅蜜「多」を行す、是を精進波羅蜜「多」と爲す。

問うて曰く、突戒波羅蜜「多」を行する時、若し人あり來つて三衣鉢盂を乞はんに、若し之に與へば

則ち戒を毀る。何となれば佛の聽したまはざる所なればなり。若し與へざれば則ち檀「那」波羅蜜「多」を破る。精進は云何が遍ねく、(三七) 五事を行せんや。答へて曰く、若し新行

の菩薩は、則ち一世一時に遍ねく五波羅蜜「多」を行すること能はず、菩薩

の檀「那」波羅蜜「多」を行する時の如きは、餓えたる虎の飢急にして其の子

を食はんと欲するを見て、菩薩は是の時、大悲心を興して、即ち身を以て

施す。菩薩の父母は、子を失ふを以ての故に、憂愁懊惱して兩日明を失

せり。虎は菩薩を殺して、亦應に罪を得べきに、而も籌量せず、父母は憂

苦し、虎は殺罪を得れども、但檀「那」を満して自ら福德を得んと欲す。又持戒の比丘の如きは、事の

輕重に隨つて諸犯を擯するは法なり。擯せらるるの人には、愁苦懊惱すれども、但戒を持たんと欲し

て、其の苦を慰まず、或る時は世俗の般若を行じて慈悲を息む。釋迦牟尼菩薩の如きは、宿世に大

國王の太子と爲る。父王に梵志の師あり、詐つて以て五穀を食はず、衆人は敬信して以て奇特と爲

す。太子思惟すらく、「人四體あれば、必ず五穀を資とす、而も此の人は食はず、必ず是れ曲にして

す。太子思惟すらく、「人四體あれば、必ず五穀を資とす、而も此の人は食はず、必ず是れ曲にして

【六〇】 第一〇問、持戒布施等と精進とは兩立せざるを如何せんや。  
【三七】 五事とは、布施と持戒と忍辱と智慧と禪定となり。  
【六六】 釋尊宿世に於て世智を以て、五穀を食はざる梵土を伏破し給へる因縁。

人の心を取る、眞法に非るなり」と。父母(その)子に告げて「言はく」、「此の人は精進にして食せず、是れ世に稀有なり、汝何ぞ愚甚しくして、之を敬せざるや」と。太子答へて言はく、「願はくは小らく留意したまへ。此の人は、久しからずして、證驗自ら出でん」と。是の時、太子は其の住處を求めて林樹の間に至り、林中の牧牛の人に問ふ、「此人は何の食糧ふ所がある」と。牧牛者答へて言はく、「此の人は夜中に少多の蘇を服して、以て自ら命を全うす」と。太子知り已つて宮に還り、其の證驗を出さんと欲し、即ち種種の諸の下藥草毒青蓮華を以てす。清旦に梵志は宮に入つて王の邊に坐す、太子は手づから此華を執り來つて之を供養し、拜し已つて授與す。梵志歡喜して自ら念ずらく、「王及び夫人、内外の大小、皆服して我に事ふ。唯太子のみに敬信せられず、今日好華を以て供養し、甚だ善くすること量なし」と。此の好華を得て、敬ふ所に來り處し、擧げて以て鼻に向けて之を嗅ぐに、花中の藥氣腹に入り、須臾にして腹内に藥作り、下す處を求めんと欲す。太子言く、「梵志食はずんば、何に縁つてか廁に向はん」と。急に之を捉ふれば、須臾にして便ち王の邊に吐くに、吐中は純蘇なり。證驗現はれ已れば、王と夫人とは乃ち其の詐なることを知れり。太子言く、「此の人は眞の賊なり、名を求むるが故に以て一國を誑かす」と。是の如く世俗の般若を行じて、但智を満さんことを求め、憍慧の心を寝め、人の瞋を畏れず。或る時、菩薩は出世間の般若を行じ、持戒布施に於て、心染著せず。何となれば施者も受者も、施す所の財物も、罪と不罪に於ても、瞋と不瞋に於ても、

進に於ても、怠に於ても、攝心も散心も不可得なるを以てなり。復次に、菩薩は精進波羅蜜「多」を行するに、一切諸法の不生・不滅・非常・非無常・非苦・非樂・非空・非實・非我・非無我・非一・非異・非有・非無に於て、盡く一切諸法は因縁和合し、但名字のみ有つて、實相は得べからざることを知る。菩薩は是の如き觀を作して、一切の有爲は皆これ虚誑なりと知り、心息して無爲なり。其の心を滅せんと欲し、唯寂滅を以て安隱なりと爲す。爾の時に、本願を念じ、衆生を憐愍するが故に、還つて菩薩の法を行じ、諸の功德を集む、菩薩自ら念すらく、「我は諸法の虚誑なることを知ると雖も、衆生は是の事を知らず、五道の中に於て諸の苦痛を受く。我今當に具足して、六波羅蜜「多」を行すべし」と。菩薩は生報神通を得、亦佛道の三十二相・八十種好・一切智慧・大慈・大悲・無礙・解脫・十力・四無所畏・十八不共法・三蓮等の無量の諸佛の法を得たまへり。是の法を得る時、一切衆生は、皆信淨を得て、皆能く受行し、佛法を愛樂して、能く是の事を辨す。皆これ精進波羅蜜「多」の力なり。是を精進波羅蜜「多」と爲す。佛の所説の如くんば、菩薩は精進して、身を見ず、心を見ず、身に作す所なく、心に念ずる所なく、身心は一等にして而も無分別なり。求むる所の佛道を以て衆生を度するに、衆生を此岸と爲し、佛道を彼岸と爲すことを見ず。一切の身心の所作を放捨すること、夢に爲す所は覺めて所作なきが如し。是を寂滅と名け、諸の精進の故に、名けて波羅蜜「多」と爲す。何となれば一切の精進は、皆是れ邪僞なりと知ればなり。一切の作法は、皆是れ虚妄にして實ならざるを以て、夢の如く、幻の如

く、諸法は平等なり、是を眞實と爲す。平等法の中には求索する所あるべからず。是の故に一切の精進は、皆これ虚妄なりと知る。精進は虚妄なりと知ると雖も、而も常に成就して退かず、是を菩薩の眞實の精進と名く。佛の言ふが如くんば、我は無量劫の中に於て、頭目髓腦を以て衆生に施し、其の願をして満てしむ。持戒忍辱禪定の時、山林の中に在つて、身體乾枯し、或は持齋節食し、或は諸の色味を絶し、或は鬻辱刀杖の患を忍ぶ。是の故に身體焦枯す。又常に坐禪し、曝露勤苦して、以て智慧を求め、誦讀・思惟・問難・講説す。一切の諸法は、智を以て、好悪麤細・虚實多少を分別し、無量の諸佛に供養し、懇勤に精進して、此の功德を求め、五波羅蜜多を具足せんと欲す。我是の時未だ所得あらず、檀〔那〕、尸〔羅〕、屢〔提〕、精進、禪〔定〕、智慧波羅蜜多を得ず。然燈佛に見えて、五華を以て佛に散じ、髮を 〔六九〕 泥中に布いて無生法忍を得、即時に六波羅蜜多を滿せり。空中に於て立つて、然燈佛を讚じ、十方の無量の諸佛を見たてまつれり。是の時實の精進身を得、精進平等の故に心平等を得、心平等の故に、一切諸法の平等を得たり。是の如きの種種の因縁の相を名けて、精進波羅蜜多と爲す。

【六九】 泥中は恐らくは泥上の誤ならん。

# 卷の第十七

初品の中の禪波羅蜜多を釋す。

不離不昧の故に、應に禪波羅蜜を具足すべし。

問うて曰く、菩薩の法は一切衆生を度するを以て事と爲す。何を以ての故に林澤に閑坐し、

山間に靜默し、獨り其身を善くして、衆生を棄捨するや。答へて曰く、菩

薩の身は衆生を遠離すと雖も、心は常に捨てず、靜處に定を求め、實智慧

を獲得して、以て一切を度す。譬へば藥を服すれば、身を將つて權りに衆

務を息め、氣力平健なれば、則ち藥を修すると故の如きが如く、菩薩の宴

寂も亦復是の如し。禪定力を以て智慧の藥を服し、神通力を得。還た衆生

に在つて、或は父母妻子と作り、或は師徒宗長、或は天、或は人、下つて

畜生に至り、種種の語言を以て方便し開導す。復次に、菩薩は布施持戒忍辱の三事を行す。名けて

福德門と爲す。無量世の中に於て、天王釋提桓因轉輪聖王閻浮提の王と爲り、常に衆生に七寶の

衣服を施し、五情の欲する所を、今世後世皆具足せしむ。經の中に説くが如くんば轉輪聖王は、十

善を以て民をして、後世皆天上に生せしめ、世世に衆生を利益して快樂を得せしむ。此樂は無常に

【一】第一問、一切衆生を度するはれ菩薩の法なり。然るを林澤山間に閑居默坐するは何故なるか。

【二】世俗の樂は還つて苦を招くの本なるが故に、菩薩は但常樂の涅槃を得せしめんと欲することを得ず。

して、還つて復苦を受く、菩薩は此に因つて大悲心を發し、常樂の涅槃を以て衆生を利益せんと欲す。 三 此の常樂の涅槃は實智慧より生じ、實智慧は一心禪定より生ず。譬へば燈を然すに、燈は能く照すと雖も、大風の中に在つては用を作すこと能はず、若し之を密室に置けば、其の用乃ち全きが如し。散心の中の智慧も亦是の如く、若し禪定の静室なくんば、智慧ありと雖も其の用全からず、禪定を得れば則ち實智慧生ず。是の故に菩薩は衆生を離れて、遠く静處に在つて禪定を求得すと雖も、禪定清淨なるを以ての故に、智慧も亦淨し。譬へば油炷淨きが故に、其の明も亦淨きが如し。是の故に淨智慧を得んと欲せば、此の禪定を行す。復次に、若し世間の近事を求むるすら、專心なること能はずんば、則ち事業成らず、何に況んや甚深の佛道にして、而も禪定を用ゐざらんや。禪定は諸の亂心を攝すと名く。 四 亂心は輕飄なること鴻毛よりも甚だしく、馳散して停らず、駛ること疾風に過ぎ、制止すべからざること彌猴よりも劇しく、墮らく現じ、轉た滅すること掣電よりも甚だし。心相も是の如く、禁止す可らず。若し之を制せんと欲するに、禪に非ずんば定まらず。 偶に説くが如し。

五 禪は智を守るの藏、功德の福田たり。禪は清淨の水たり、能く諸の欲塵を洗ふ。 禪は金剛の鐵たり、能く煩惱の箭を遮る。未だ無餘を得ずと雖も、涅槃の分已に得。

【三】 實智は禪定の中に在つて存すること能はず。

【四】 鴻毛疾風彌猴掣電の如き散亂の心も、禪定の能く之を鎮定することを辨ず。

【五】 諸禪定の場。

金剛三昧を得て、結使の山を摧碎し、六神通を得、能く無量の人を度す。

釋摩訶天目を蔽ふも、大雨は能く之を淹ひ、

覺觀の風は心を散すれども、禪定は能く之を滅す。」

復次に、禪定は得難し、行者は、一心に専ら求めて廢せずんば、乃ち當に之を得べし。諸天及び神

仙すら、尙得ると能はず。何に況んや、凡夫にして懈怠する者をや。佛

の尼拘盧樹の下に在つて坐禪したまふとき、魔王の三女、偈を説いて問う

て言へるが如し。

『獨り林樹の間に坐して、六根常に寂黙たり。有は重寶を失ひ、無援

にして苦毒を愁ふるが若し。

容貌世に比なく、而も常に目を閉ぢて坐す。我等は心に疑あり、何を

求めて此に在るや。

爾の時に、世尊は偈を以て答へて曰く、

『我は涅槃の味を得て、染愛に處ることを樂はず。内外の賊已に除き、汝が父も亦滅退せり。

我は甘露味を得て、安樂にして林間に坐す。恩愛の衆生は、之が爲に悲心を起す。』

是の時に三女は心に慚愧を生じ、自ら説いて言く、「此人は欲を離れて動かす可らず」と。即ち滅し

【六】覺觀とは、舊譯に尋伺といふ。塵思を覺即ち尋といひ、細思を觀即ち伺といふ。此の覺觀の有無に因て定心の深淺を判するなり。

【七】魔王の三女、佛の坐禪を妨害せんと欲するの因縁。

去つて現せず。

問うて曰く、何の方便を行じてか禪波羅蜜〔多〕を得るや。答へて曰く、五事を却け、五法を除き、五行を行す、云何が五事を却けん。當に五欲を呵責すべし。哀哉、衆生は常に五欲の爲に惱まされ、而も猶ほ之を求めて已まず。此の五欲は之を得るに、轉た劇しきこと火に疥を炙るが如く、五欲の益なきこと、狗の骨を齧むが如く、五欲の譚を増すこと、鳥の肉を競ふが如く、五欲の人を燒くこと、逆風に炬を執るが如く、五欲の人を害すること、惡虵を踐むが如く、五欲の實なきこと、夢の所得の如く、五欲の久しからざること、假借の須臾なるが如し。世人の愚惑なる、五欲に貪著して死に至るまで捨てず、之が爲に後世無量の苦を受く。譬へば愚人の好果に貪著し、樹に上つて之を食ひ、背へて時に下らず、人の其の樹を伐り、樹傾いて乃ち墮ち、身首毀壞し、痛み惱んで死するが如し。又此の五欲は得る時は須臾の樂にして、失する時は大苦たり。蜜を刀に塗つて舐る者の、甜を食つて舌を傷くるとを知らざるが如し。五欲の法は畜生と共にあり、有智の者は之を識つて能く自ら遠離す。説くが如くんば、一の優婆塞あり、衆の估客と遠く出でて治生す。是時、寒雪に夜行し、伴を失つて一の石窟の中に在つて住す。時に山神變じて一女と爲り、來つて之を試みると欲し、此の偈を説いて言く、

【八】 第二問、人は禪波羅蜜多を得るに何の方便を行すべきや。

【九】 得禪の方便は五塵五蓋等を除去するにあること。

【一〇】 五欲を呵責すべきこと。

【一一】 山神一女となり、估客の欲を試むるの因縁。

「白雪山頂を覆ふて、鳥獸は皆隱蔽す。我獨り恃む所なし、唯願はくは感傷せられよ。」

優婆塞は、車の手を以て耳を掩ひ、而して偈もて答へて言く、

「無羞慚の人は、此の不淨の言を説く、水に漂ひ、火に燒け去るとも、此の聲を聞くことを欲せず。婦ありとも心に欲せず、何に況んや、邪婬を造んや。」

諸の欲樂は甚だ淺く、大苦患は甚だ深し。

諸欲は得て厭くこと無く、之を失へば大苦と爲る。未だ得ざれば願つて、得んことを欲し、之を得れば爲に惱まざる。

諸の欲樂は甚だ少く、憂苦の毒は甚だ多し、之が爲に身命を失ふこと

【二】 色欲の火は人身を燒害すること。

と、蠟の燈火に赴くが如し。

山神は此の偈を聞き已つて、即ち此の人を擧げて、送つて伴の中に至る。是れ智者の爲に、欲の不可なることを呵するなり。五欲に著する者は、名けて妙なる色、聲、香、味、觸と爲す。禪定を求めんと欲せば、皆塵に之を棄つべし。云何が色を棄て、色の患を觀せん。三若し人色に著すれば、諸の結使の火、盡く皆熾然として人身を燒害すること、火の金銀を燒くが如し。煮沸せる熱蜜は色味ありと雖も、身を燒き口を爛らす、急に應に之を捨つべし。若し人妙色美味に染著すること、亦復た是の如し。復次に、好惡は人に在り、色は定なし。何を以てか之を知る。范に愛する人を見ては、即ち喜愛

の心を生じ、若し遙に怨家悪人を見ては、即ち怨害の心を生じ、若し中人を見れば、則ち怒ること無く、喜ぶこと無きが如し。若し此の喜怒を棄てんと欲せば、當に邪念及び色を除き、一時に俱に捨つべし。譬へば洋金の身を焼くが如し。若し之を除かんと欲せば、但火のみを棄てんことを欲するも、金を留むることを得ず、要す當に金火俱に棄つべし。頻婆娑羅王の如きは、色を以ての故に、身敵國に入り、獨り姪女阿曇婆羅が房中に在り。憂愼王は色染を以ての故に、五百の仙人の手足を截る。是の如き等の種種の因縁は、是を色欲を呵すと名く。云何が聲を呵するや、聲相は停まらず、響く聞けば即ち滅す。愚癡の人は聲相の無常變失を解せざるが故に、音聲の中に於て、妄に好樂を生じ、已に過ぐるの聲に於て、念じて著を生ず。(二三) 五百の仙人の山中に在つて住するが如きは、甄陀羅女の雪山の池の中に於て浴し、其の歌聲を聞いて即ち禪定を失ひ、心酔ひ、狂逸にして自ら持つこと能はず。譬へば大風の諸の林樹を吹くが如く、此の細妙の歌聲の柔軟清淨なるを聞いて、邪念の相を生ず。是の故に心の狂へるを覺らず、今世に諸の功德を失し、後世に當に惡道に墮すべし。有智の人は、聲の念念に生滅し、前後に俱ならず、相及ぶ者なきを觀ず。是の如く知れば則ち染著を生せず。斯の如きの智者は、諸天の音樂すら尙亂すこと能はず、何に況んや人聲をや。是の如き等の種種の因縁は、是を聲欲を呵すと名く。云何が香を呵するや。人謂へらく、「香に著するは少罪なり」と。香に染愛して結使の門を開

【二三】 五百の仙人、甄陀羅(女神)女の歌聲を聞いて、禪定を失するの因縁。

き、復た百歳戒を持つと雖も、能く一時に之を壞す。一の阿羅漢の、常に龍宮に入り、食し已つて鉢を以て、沙彌に授けて洗はしむるが如し。鉢の中に殘飯數粒あり、沙彌之を喫ぐに大に香しく、之を食するに甚だ美なり。便ち方便を作して、師の繩牀の下に入り、兩手を以て繩牀の脚を捉へ、其師去る時、繩牀と共に龍宮に入る。龍の言く、「此は未だ道を得ず、何を以てか將の來るや」と。師言く、「覺せず」と。沙彌は飯食を得、又龍女の身體端正、香妙にして無比なるを見、心大に染著して即ち要願を作さく、「我當に福を作して、此龍の處居、其宮殿を奪ふべし」と。龍の言く、「後此の沙彌を將の來ると莫れ」と。沙彌は還り已つて一心に布施し持戒し、専ら所願を求む、「願はくは早く龍と作らん」と。是の時寺を遶るに足下より水出で自ら「必ず龍と作ることを得」と知る。徑に師の本入る處の大池の邊に至り、袈裟を以て頭を覆ひ、入つて即ち死し、變じて大龍と爲る。福徳大なるが故に、即ち彼の龍を殺す、池を舉げて盡く赤し。未だ爾らざるの前、諸師及び僧は之を呵す。沙彌の言く、「我が心は已に定まり、心相已に出づ」と。時に師は諸の衆僧を將め、池に就て之を觀る。是の如きの因縁は、香に著するに由るが故なり。

復次に、一の比丘あり、林中の蓮華池の邊に在つて經行し、蓮華の香を聞き、鼻に受けて心に著す。池神語つて言く「汝何を以てか、彼の林中の禪淨の坐處を捨て、我が香を偷むや」と。香に著する

【四】一沙彌香に著して龍となるの因縁。

【五】一比丘の蓮華香を聞いて、池神のために呵せられたる因縁。

を以ての故に、諸の結使の臥せる者、今皆覺めて起れり。時に更に一人あり、來つて池中に入り、多く其華を取り、根莖を掘り挽き、狼藉して去るに、池神は黙して言ふ所なし。比丘の言く、「此人は汝が池を破り、汝が華を取るに、都て言ふと無し。我は但池の岸の邊に行くに、便ち見て呵し罵つて云く、我が香を偷むし」と。池神の言く、「世間の惡人は常に罪垢の糞中に在つて、不淨に頭を没す、我は共に語らざるなり。汝は是れ禪を行するの好人にして、而も此香に著して汝が好事を破る。是の故に汝を呵す。譬へば白氈の鮮淨なるに、而も黒物の點汚あれば、衆人皆見るが如し。彼の惡人は、譬へば黒衣に墨を點するに、人の見ざる所なるが如し。誰か之を問ふ者ぞ」と。是の如き等の種種の因縁は、是を香欲を呵すと名く。云何が味を呵するや。當に自ら覺悟すべし、「我は但美味に貪著するを以ての故に、當に衆苦を受くべし。洋銅もて口に灌ぎ、焼けたる鐵丸を噉ふ。若し食法を觀せず、嗜心堅著すれば、不淨の蟲の中に墮せん」と。一の沙彌の、心常に酪を愛し、諸の檀越、僧に酪を餉する時、沙彌は殘分を得る毎に、心中に愛著し、樂しみ喜んで離れず、命終の後、此の殘酪の瓶中に生せしが如し。沙彌の師は阿羅漢道を得て、僧の酪を分つ時、語つて言く、「徐徐とせよ、此の酪を愛するの沙彌を傷くると莫れ」と。諸人言く、「此は是れ蟲なり、何を以てか酪を愛するの沙彌と言ふや」と。答へて言く、「此蟲は、本是れ我が沙彌なり。但坐して殘酪を貪愛するが故に、此の瓶中に生す」と。師、酪の分を得るに、蟲は中に在つて來れり。師言く、「酪を愛するの人よ、汝は何を以てか

家るや」と。即ち酪を以て之に與ふ。復次に、一國土に王あり、月分王と名く。「其の太子美味に愛著し、王の園を守る者、日に好果を遂が如し。園中に一の大樹あり、樹上に鳥あつて子を養ひ、鳥母は常に飛んで香山の中に至り好香の果を取つて以て其子を養ふ。衆子之を争ひ一果地に墮つ。園を守るの人、晨朝に之を見るに、奇にして甚だ非常なり。即ち送つて王に與ふ。王は此の果の香色の殊異なるを珍とす。太子は之を見て便ち索む。王は其子を愛して、即ち以て之を與ふ。太子は果を食して其の氣味を得、染心深く著して日に得んと欲す。王即ち園人を召して、其の所由を問ふに、守園の人の言く、「此果は種なし、地より之を得、由來する所を知らざるなり」と。太子は啼泣して食せず、王は園人を催責して、「汝之を得よ」と仰す。園人は果を得し處に至り、鳥の巢あるを見、鳥の銜み來るを知り、身を樹上に懸し、伺つて之を取らんと欲し、鳥の母來る時、即ち奪つて果を得て送り、日に是の如くす。鳥の母は之を怒り、香山の中に於て毒の果を取る、其の香味色は、全く前者に似たり。園人は毎ひ得て王に輸り、王は太子に與ふるに、之を食して未だ久しからずして、身肉爛壞して死す。是の如き等の種種の因縁は、是を味欲に著するを呵すと名く。云何が觸を呵するや。此の觸は是れ諸の結使を生ずるの大因、心を繫縛するの根本なり。何となれば餘の四情は則ち各各其分に當るも、此は則ち身識に遍滿して生處廣きが故に、多く染著を生ずればなり。此の著は離れ難し。何を以てか之を知

【二六】 月分王の太子、好果に愛著し、選つて毒果を食つて死せし因縁。

るや。人の色に著するが如きは、身の不淨の三十六種を觀じて、則ち厭心を生ず。若し觸中に於いて著くを生ずば、不淨なりと知ると雖も、其の細軟なるを貪り、不淨を觀するも益する所なし、是の故に離れ難し。復次に、其の捨て難きを以ての故に、之が爲に常に重罪を作す。若し地獄に墮せば、地獄に二部あり、一を寒氷と名け、二を炎火と名く。此の二獄の中は、皆身觸を以て罪を受け、苦毒萬端なり。此觸を名けて大暗黒の處、危難の險道となすなり。復次に、(二七) 羅睺羅の母の本生經の中に説くが如くんば、釋迦文菩薩に二の夫人あり。一を 瞿毗耶と名け、二を耶輸陀羅と名く。耶輸陀羅は羅睺羅の母なり。瞿毗耶は是れ寶女の故に子を孕ます。耶輸陀羅は菩薩出家の夜を以て、自ら身に妊めりと覺ふ。菩薩は出家して六年苦行するに、耶輸陀羅は六年懷妊して産せず。諸釋之を詰る、一菩薩は出家せり、何に由つてか此あらん」と。耶輸陀羅言く、「我に他罪なし、我が懷む所の子は、實に是れ太子の體胤なり」と。諸釋の言く、「何を以てか久しく産せざる」と。答へて言く、「我が知る所に非ず」と。諸釋は集つて議し、王の法の如くに治罪せんと欲するを聞き、瞿毗耶は王に白す、「願はくは之を寛恕したまへ。我は常に耶輸陀羅と共に住す。我其の證たり、其の罪なきことを知る。其の子の生るるを待つて、父に似たるや不やを知つて、之を治むるも晚きと無けん」と。王は即ち寛置す。佛、六年の苦行既に滿ち、初めて成佛したまふ時、其の夜羅睺羅を生む。王は其の父に似たる

【七】 耶輸陀羅の懷妊惡名天下に滿ち、諸の釋迦族これを疑へるの因縁。  
 【八】 瞿毗耶(二七七)

を見て愛樂し、憂を忘れて群臣に語つて言く、「我が兒去ると雖も、今や其子を得たり。兒あると異なることなし」と。耶輸陀羅は罪惡を免ると雖も、惡聲國に滿つ、耶輸陀羅は惡名を除かんと欲す。

佛の成道し已つて迦毘羅婁に還り、諸の釋子を度したまふ時、淨飯王及び耶輸陀羅は、常に佛を請し宮に入つて食せしむ。是時耶輸陀羅は、一鉢の百味の歡喜丸を持つて羅睺羅に與へて、持つて佛に

上つらしむ。是時佛は神力を以て、五百の阿羅漢を變じ、佛身の如くにして、別異あると無らしむ。羅睺羅は七歳の身を以て、歡喜丸を持つて、徑に佛前に至つて世尊に奉進す。是の時佛は神力を攝め

たまふに、諸の比丘の身は復た故の如く、皆空鉢にして坐す。唯、佛鉢の中のみに歡喜丸を盛滿す。耶輸陀羅即ち王に白して言く、「此を以て我罪なきとを證驗したまへ」と。耶輸陀羅即ち佛に問うて言く、「我は何の因縁

あつてか懷妊すると六年なるや」と。佛の言はく、「汝が子羅睺羅は、過去久遠世の時、曾つて國王と作る。時に一の五通の仙人あり、來つて王國に入り、王に語つて言く、「王法は賊を治す、請ふ我が罪

を治したまへ」と。王言く、「汝何の罪がある」と。答へて言く、「我は王國に入つて不與取を犯す、輒ち王の水を飲み、王の楊枝を用ふ」と。王の言く、「我は相與ふるを以て、何の之を罪せん。我、初め

て王位に登ること有りて、背、水及び楊枝を以て一切に施せり」と。仙人の言く、「王は已に施すも、我が心の疑悔の罪を除かず、願はくは今治せられよ、後罪せしむること無し」と。王の言く、「若

【九】耶輸陀羅、世尊を惡罵し、羅睺羅をして、世尊に歡喜丸を上つらしむるの因縁。

し必ず爾せんと欲せば、小らく停つて我が入り遷らんを待て」と。王は宮中に入つて六日出でず。此の仙人は王の園中に在ること六日にして飢渴す。仙人思惟すらく、「此の王は、正しく此を以て我を治す」と。王は六日を過ぎて出でて仙人に辭謝すらく、「我は便ち相忘れたり、咎めらるる莫れ」と。是の因縁を以ての故に、五百世に三惡道の罪を受け、五百世に常に六年母の胎内に在り。是を以て證するが故に、耶輸陀羅は罪あること無きなり」と。是の時に世尊は食し已つて出で去りたまふ。耶輸陀羅は心に悔恨を生ずらく、「此の如きの好人は世の希有とする所、我、遭遇するを得て而も今永く失す」と。世尊坐したまふ時、諦かに視て胸かず、世尊、出でたまふに、後に尋いで之を觀、遠く没して乃ち止み、心大に懊恨す。一たび思ひ至る毎に、地に蹙して氣絶ゆ。傍人水を以て之に灑いで、乃に蘇息するを得、常に獨り思惟すらく、「天下に誰か能く善呪術を爲して、能く其の心を轉じ、本意に復らしめて、歡樂初の如くならん」と。即ち七寶の名珠を以て、金盤の上に著け、以て持して人を募る。一の梵志あり之に應じて言く、「我能く之を呪して、其の意を轉せしめん。當に百味の歡喜丸を作り、藥草を以て之に和し、呪語を以て之を禁せば、其の心便ち轉じて、必ず來らんと疑なかるべし」と。耶輸陀羅は其教法を受け、人を遣はして佛を請し、「願くは聖衆と俱に、威神を屈したまへ」と。佛、王宮に入りたまひし時、耶輸陀羅は即ち百味の歡喜丸を進めて佛鉢の中に著くれば、佛は既に之を食したまふ。耶輸陀羅は冀想す、「願の如く、歡娛すること初の如くならん」と。佛は食した

まふに、異なること無く、心自から澄静なり。耶輸陀羅の言く、「今動せざるは、藥力の未だ行かざるが故なるのみ、藥勢衰する時は、必ず我が願の如くならん」と。佛は臥食し訖り、呪願し已つて、座より起つて去りたまふ。耶輸陀羅は、「藥力は、晴時、日の入るに當に發して、必ず宮中に還りたまふべし」と覺ふ。佛は、食したまふこと常の如く、身心異なること無し。諸の比丘は明日食する時、著衣持鉢して城に入つて乞食し、具に此の事を聞き、増益恭敬してまつれり。「佛力は無量にして神心測り難く、不可思議なり、耶輸陀羅の藥、歡喜丸は、其の力甚だ大なり。而も世尊之を食したまふに身心異なること無し」と。諸の比丘は食し已つて城を出で、是の事を以て具に世尊に白す。佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝聞かんと欲するや不々、諦かに之を聴け、此の耶輸陀羅は、但今世にのみ、歡喜丸を以て我を惑はすに非ず、乃往過去世の時も、亦歡喜丸を以て我を惑はせり」と。爾の時に世尊、諸の比丘の爲に、本生の因縁を説きたまふ。過去久遠世の時、波羅奈國の山中に仙人あり。仲秋の月を以て、淨盤の中に於て小便するに、鹿の糞塵の合會するを見て、姪心即ち動き、精を盤中に洩す。鹿鹿之を飲んで、即時に身む有り。月満ちて、子を生むに、形類人の如く、唯、頭に一角あり、其の足は鹿に似たり。鹿は産する時、仙人の庵の邊に至つて産す。子を見るに是れ人なり、以て仙人に付して去る。仙人は出づる時、此の鹿の手を見、自ら本縁を念じ、是れ己が兒なりと知りて、取つて己に養育す。其の年大なるに長んで、學問を懃教し、

(二〇) 十八種の大經に通じ、又坐禪を學び、四無量心を行じ、五神通を得。一時、山に上つて大雨に値ひ、泥滑らかにして、其の足便ならず、地に躓きて其の鐺持を破り、又其の足を傷け、便ち大に瞋恚し、鐺持を以て水を盛り、呪して雨らざらしむ。仙人の福德にして、諸龍鬼神は皆爲に雨らさず、雨らざるが故に、五穀五果盡く皆生せず、人民は窮乏して復生路なし。波羅奈の下は憂愁懊惱し、諸の大臣に命じ集つて雨の事を議せしむ。明者議して言く、「我傳へ聞く、仙人の山中に

(三一) 一角仙人あり、足便ならざるを以ての故に、山に上るに地に躓き、足を傷めて瞋つて此雨を呪し、十二年墮ちざらしむ」と。王思惟して言く「若し十二年雨らずんば、我が國は了り、復人民なけん」と。王即ち募を開き、「其能く仙人をして五通を失はしむる有らば、我が民の爲にする者に屬して、當に國の半を分ち與へて治せしむべし」と。是の波羅奈國に姪女あり、名けて扇陀と曰ふ。端正無雙なり。來つて王の募に應ず。諸人に問うて言く、「此は是人か、非人か」と。衆人言く、「是人なり、仙人の生ずる所なり」と。姪女言く、「若し

【三〇】十八大經、百論以上の下には左の如き名目を出せり。

<p>四吠陀論</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(一) 梨俱吠陀 (Rig-veda)</li> <li>(二) 耶柔吠陀 (Yajur-veda)</li> <li>(三) 孫摩吠陀 (Sama-veda)</li> <li>(四) 阿闍婆吠陀 (Atharva-veda)</li> </ul>	<p>六論</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(一) 式叉論 (Śikṣā)</li> <li>(二) 毘伽論 (Vikāra)</li> <li>(三) 柯刺波論 (Kāpa)</li> <li>(四) 堅底沙論 (Jyotisā)</li> <li>(五) 闍陀論 (Śāntā)</li> <li>(六) 尼鹿多論 (Nirukta)</li> </ul>	<p>八論</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(一) 肩亡婆論 (Kāśhā?)</li> <li>(二) 那邪毘薩多論 (?)</li> <li>(三) 伊底迦沙論 (Iḍḍhā)</li> <li>(四) 僧伽論 (Saṅgha)</li> <li>(五) 毘伽論 (Vikāra?)</li> <li>(六) 陀菟論 (Dhātva)</li> <li>(七) 毘伽論 (Vikāra)</li> <li>(八) 阿輪論 (Ayu-veda)</li> </ul>
--	---	---

【三一】一角仙人 (Ekakṣapa) 又は獨角仙人ともいふ。彼は過去の釋尊にして、姪女は今日の耶輸陀羅夫人なりしこと。

是れ人ならば、我れ能く之を壊せん」と。是語を作し已つて金盤を取り、好き寶物を盛つて王に語つて

言く、「我當に仙人の項に騎つて來るべし」と。婬女は即時に五百乘の車を求め、五百の美女を載せ、

五百の塵車に種種の歡喜丸を載せ、皆衆の藥草を以て之に和し、彩畫を以て雜果に似せ、及び種種の

大力に持たしむ。美酒の色味を水の如くし、樹皮の衣、草の衣を服て林樹の間を行き、像を仙人に似

せ、仙人の庵の邊に於て草庵を作つて住す。一角仙人、遊行して之を見るに、諸女皆出で、迎逆し、

好華、妙香を以て仙人に供養するに仙人は大に喜ぶ。諸女は美言を以て敬辭問訊し、仙人を將ひて房

中に入り、好牀の褥を坐とし、好清の酒を興へて以て淨水と爲し、歡喜丸を興へて以て果藏と爲す。

食飲飽き已つて諸女に語つて言く、「我は生れてより已來、初より未だ此の如きの好果好水を得ずし

と。諸女言く、「我は一心に善を行するが故に、天我に興へ、願つて此好水好果を得」と。仙人、諸女

に問ふ、「汝は何を以ての故に、膚色肥盛なるや」と。答へて言く、「我曹は、此の好果を食し、此の

美水を飲むが故に、肥ゆこと此の如し」と。女、仙人に白して言く、「汝は何を以てか、此の間に在つ

て住せざるや」と。答へて曰く、「亦住す可きのみ」と。女言く、「共に潔洗す可し」と。即ち亦た之を

可す。女の手は柔軟にして之に觸れて心動す。便ち復諸女と更互に相洗ひ、欲心轉た生じ、遂に好華

を成して即ち神通を失ふ。天は大雨を爲すと七日七夜、歡樂して飲食を得せしむ。七日以後、酒食皆

盡き、繼ぐに山水木果を以てするに、其の味美ならず、更に前の者を索む。答へて言く、「已に盡き

たり、今當に共に行くべし。此を去ると遠からずして得べき處あり」と。仙人言く、「意に隨はんと。即便ち共にいで、城を去ると遠からずして、女は便ち道中に在つて臥して言く、「我極めり、復た行くど能はず」と。仙人言く、「汝行くこと能はずんば、我が項上に騎れ、當に汝を擔いで去るべし」と。女は先づ信を遣はして王に白す、「王よ、我が智能を觀る可し」と。王は勅して駕を嚴り、出で、之を觀、問うて言く、「何に由つてか爾るとを得るや」と。女は王に白して言さく、「我方便力を以ての故に、今已に是の如く、復能する所なし。城中に住せしめて、好く之を供養恭敬し、五欲を給足し、拜して大臣と爲したまへ」と。城に住すること少日、身轉た羸瘦し、禪定心を念じ、樂んで此の世欲を厭ふ。王、仙人に問ふ、「汝何ぞ樂ます、身は轉た羸瘦するや」と。仙人、王に答ふ、「我は五欲を得と雖も、常に自ら林間の閑靜なる諸仙の遊ぶ處を憶念して心を去ると能はず」と。王自ら思惟すらく「若し我強いて其の志に違はば、志に違ふを苦となし、苦極つて則ち死せん。本より以て早患を除かんことを求む、今已に之を得たり、當に復た何に縁つてか、強いて其の志を奪ふべき」と。即ち之を發遣す。既に山中に還り、精進すること久しからずして、還た五通を得たり。佛、諸の比丘に告げたまはく、「一角仙人は我が身是なり。姪女は耶輸陀羅是なり。爾の時に歡喜丸を以て我を惑はす、我は未だ結を斷せず、之が爲に惑はさる。今復藥の歡喜丸を以て我を惑はんと欲して得べからず」と。是の事を以ての故に、細軟の觸法は能く仙人をすら動かすことを知る。何に況んや、愚夫をや。

是の如きの種種の因縁、是を細滑の欲を呵すと名く。是の如くにして五欲を呵し五蓋を除く。

復次に、三、貪欲の人は道を去ること甚だ遠し。何となれば欲は種種の惱亂の住處たり、若し心貪欲に著せば、道に近づくに由なければなり。欲蓋を除くことは偏に説く所の如し。

『入道せる憍慢の人は、鉢を持って衆生を瞋す。云何ぞ貪欲を離るるまににして、五情に沈没せんや。

鐘を著て刀杖を持ち、敵を見て退き走らば、是の如き怯弱の人は、世を擧げて嘲笑せられん。

比丘は乞士たり、髪を除き袈裟を著く、五情の馬に制せらるれば、笑を取ることも亦是の如し。

又豪貴の人の、盛服して以て身を嚴り、而も行いて衣食を乞はば、笑

を衆人に取るが如し。

比丘の飾好を除き、形を毀ち、以て心を攝しつゝ、而も更に欲樂を求めば、笑を取ること亦是の如し。

の如し。

已に五欲の樂を捨て、之を棄て、願ひを、如何が還た得ることを欲して、愚(人)の自ら食つて吐

くが如くならん。

是の如き貪欲の人は、本願を觀ることを知らず、亦好醜を識らず、渴愛に狂醉す。

慚愧は尊重の法なり、一切皆已に棄てたる賢智の親まざる所は、愚昧の愛し近づく所なり。

諸欲は求むる時苦しみ、之を得て多く怖畏し、失ふ時は熱情を怯き、一切樂しむ時なし。

【三】 五蓋を除く事。一に貪欲蓋の除去。

諸欲しよよくの患うれひは是これの如ごとし、何を以もつてか當まさに之これを捨すつべき。諸もろもろの禪定ぜんぢやうの樂らくを得えば、則すなはち爲ために欺あざむかれず。樂らくを欲ほつし「これ」に著せやくして厭あくこと無なくんば、何を以もつてか能よく滅除めつじよせん。若もし不淨ふじやうくわん觀かんを得えば、此この心こころ自然じねんに無なげん。

欲よくに著ちやくして自覺じかくせずんば、何を以もつてか其その心こころを悟きとらん。當まさに老病死らうびやうしを觀くわんじて、爾しかして乃すなはち 四し淵えんを出いづべし。

諸欲しよよくは放捨ほうしやくすること難がたし、何を以もつてか能よく之これを遠とほざげん。若もし能よく善法ぜんぽうを樂たのしまば、此この欲よくは自然じねんに息やまん。

諸欲しよよくは解とく可べきこと難がたし、何を以もつてか能よく之これを釋とかん。身みを觀くわんじて實じつ相さうを得えば、則すなはち爲ために縛ばくせられず。

是これの如ごとき諸もろもろの觀法くわんぽうは、能よく諸欲しよよくの火ひを滅めつすること、譬たとへば大おほに澗せちげる雨あめの、野火やくわを滅めつせざること無なきが如ごとし。

是これの如ごとき等とうの種種しゆじゆの因緣いんねんは、欲蓋よくがいを滅除めつじよす。 瞋しん意い蓋がいとは、諸もろもろの善法ぜんぽうを失しつするの本もと、諸もろもろの惡道あくだうに墮だするの因いん、法樂ほつらくの怨家おんけ、善心ぜんしんの大賊たいせき、種種しゆじゆの惡口あくぐちの府藏ふざうなり。佛ほとけの曠くわうれる弟子でしを教くわいへたまひし偈げに言たまへるが如ごとし。

「汝當なんぢまさに、受身じゆしんと及び處胎しよたいと、穢惡みをの幽苦いうくと、既すでに生しやうするときは艱難かんなんとを知しり〔且かつつ〕思惟しゆいすべし。

【三】 四淵とは生・老・病・死のことならん。  
【四】 二に瞋蓋の蓋を除去すること。

既に此の意を思得して、而も復た瞋を滅せずんば、則ち當に此の輩は、則ち是れ無心の人なることを知るべし。

若し罪の果報なく、亦諸の呵責なくとも、猶尙應に慈忍すべし、何に況んや苦果の劇しきをや。當に老病死は、一切免るゝ者なきを觀すべし、當に慈悲心を起すべし、云何ぞ惡を物に加へん。衆生は相怨み賊ひ、斫刺して苦毒を受く、云何ぞ修善の人にして、而も復た惱害を加へん。常に當に慈悲を行じ、心を定めて諸善を修すべし、惡意を懷いて一切を侵害すべからず。

若し道法を勤修するに、惱害すれば則ち行せず、善惡の勢は並ばざる  
こと、水火の相背くが如し。

【五】 三に睡眠の蓋を除去すること。

瞋恚來つて心を覆へば、好醜を分つとを知らず、亦利害を識らず、惡道を畏るゝとを知らず。他の苦惱を計らず、身心の疲を覺らず、先づ自ら苦因を受け、然る後他人に及ぼす。

若し瞋恚を滅せんと欲せば、當に慈心を思惟し、獨り自ら清閑に處して、事を息め、因縁を滅すべし。

當に老病死を畏れ、九種の瞋惱を除くべし。是の如く慈を思惟せば、則ち瞋の毒を滅することを得ん。』

是の如き等の種種の因縁は、瞋恚の蓋を除く。

(二五)

睡眠の蓋とは、能く今世の三事なる欲樂・利樂・福

徳を破し、能く今世後世の究竟の樂を破し、死と異なること無く、唯氣息のみ有り、一菩薩の偈を以て、睡眠の弟子を呵して言へるが如し。

『汝起きよ、臭身を抱いて臥すこと勿れ。種種の不淨を假りに名けて人となす。重病を得、箭の體に入るが如し、諸の苦痛の集なり、安ぞ眠るべけん。』

一切の世間は死の火に燒かる、汝當に出でんことを求むべし、安ぞ眠る可き。人の縛せられ、將た去つて殺さるゝが如し、災害至るに垂とす、安ぞ眠る可けん。

結賊滅せざれば、害未だ除かず、毒蛇と共に同室に宿るが如し。亦陣に臨んで白刃の間にあるが如し、爾の時安ぞ而も睡眠す可けんや。

眠は大闇たり、見る所なし。日に欺誑して人の明を奪ふ、眠は心を覆ひ、識る所なきを以て、是の如きの大失あり、安ぞ眠る可けんや。

是の如き等の種種の因縁は、睡眠の蓋を呵す。掉悔の蓋とは、之を掉かすを法と爲し、出家の心を破る。人の心を攝するすら、猶住すると能はず、何に泥んや掉散をや。掉散の人は、鉤なく醉へる象の如く、又、鉄鼻の駱駝の如く、禁制すべからず。偈に説くが如し。

『汝は已に頭を剃り、染衣を著し、瓦鉢を執持して、乞食を行す。云何ぞ戲掉の法に樂著して、既に法利なく、世樂を失せん。』

【六】 四に掉悔の蓋を除去すること。

悔法とは、大罪を犯す人の、常に畏怖を懷くが如し。悔の箭心に入れば、堅くして抜く可らず、傷に説くが如し。

『作すべからざるを作し、作すべきを作さざれば、悔懼の火に燒かれ、後世惡道に墮す。』

若し人罪を能く悔い、已に悔いて則ち放捨す。是の如くなれば心安樂なり、應に常に念著すべからず。

若し二種の悔あり、不作と已作となり、是を以て心に悔著す、是れ則ち愚人の相なり。

心に悔いざるを以ての故に、作さずして而も能く作し、諸の惡事の已

に作せるは、不作ならしむること能はず。』

是の如き等の種種の因縁は、掉悔の蓋を呵す。疑蓋とは、疑覆ふを以ての故に、諸法の中に於て

定心を得ず。定心なきが故に、佛法の中に於て空にして所得なし。譬へば人の寶山に入るに、若し手

なければ、能く取る所なきが如し。疑の義を説くの偈に言ふが如し。

『人の岐道に在つて、疑惑して趣く所なきが如く、諸法實相の中の疑も亦復是の如し。』

疑の故に諸法の實相を勤求せず。是の疑は覆より生ず、惡中の弊惡なり。

善不善の法の中、生死及び涅槃は、定んて實に真有の法なり、中に於て疑を生ずる莫れ。

故、若し疑心を生せば、死王獄吏の縛すること、師子の鹿を搏つが如く、解脱を得ること能はず。

【七】 五に疑蓋を除去すべきこと。

ざらん。

在世よせに疑ぎありと雖いども、當まに妙善めうぜんの法ほふに隨したがふべし。譬たとへば岐道ぎだうを觀みては、應まに利好りかうの者ものを逐おふべきが如ごとし。

是この如ごとき等の種種しんしゆの因縁いんねんの故ゆゑに應まに疑ぎを捨すつべし。是この五蓋ごがいを棄すつるは、譬たとへば負債ふしやくを脱だつすることを得え、重病ぢゆうびやう癒いゆることを得え、飢餓けがの地ちより豐饒ぶじやくに至いたることを得えるが如ごとく、獄ごくより出いづることを得えるが如ごとく、惡賊あくそくの中に於おて、自みづから免あむ濟すふことを得えて、安隱あんいんにして患うれひなきが如ごとし。行者ぎやくざも亦是またの如ごとく、五蓋ごがいを除の却きやくすれば其そのの心こころ、安隱あんいんにして清淨快樂じやうじやうがくらくなり。譬たとへば五事ごじを以もつて日月にちげつを覆おほするが如ごとし。〔即すなはち〕煙えん・雲うん・塵ぢん・霧きり・羅睺らかう・阿修羅あしゆらの手てもて障さやゆれば、則すなはち明あかに照てらすこと能あたはず。人心にんしんも亦是またの如ごとく、五蓋ごがいの爲ために覆おほはれ、自みづから利りなること能あたはず、亦また人を益やくすること能あたはずなるなり。若もし能よく五欲ごよくを呵かし、五蓋ごがいを除のき、五法ごほふ即すなはち欲よく・精進じやうじん・念巧慧ねんくわい一心しんを行おうじ、此この五法ごほふを行おうせば、五支ごしを成就じやうじゆするを得えん。初禪しよぜんの欲よくを欲よくと名なけ、欲界よくがいの中なかに於おて欲よくを出いづ。初禪しよぜんの精進じやうじんを得えるを、家いへを離はなれて戒かいを持たつと名なけ、初夜しよやにも後夜ごやにも專精せんじやうにして懈おろさず、食じきを節せつし、心こころを攝せつし、念ねんを馳散ちさんせしめざるを、初禪しよぜんの樂らくを念ねんずと名なけ、欲界よくがいは不淨ふじやう、狂惑きやうわくにして難いむ可かく、初禪しよぜんは尊貴そんきにして貴たむ可かしと知るの巧慧くわいを、欲界よくがいの樂らくを觀察くわんさつし籌量ちゆうりやうすと名なけ、初禪しよぜんに輕重得失けいじゆうとくしつを樂らくんで一心しんなるを、常つねに心こころを繫かけて、緣中えんちゆうに分散ぶんさんせしめずと

〔三六〕 日月は五事、即ち煙と雲と塵と霧と阿修羅の爲に覆はれ、人は五蓋に覆はる。

〔三九〕 羅睺(三三)は星の名、日月を障蔽する障なりといふ。

名く。

復次に、専ら初禪を求めて欲樂を放捨することは、譬へば怨を患ひて常に滅除せんと欲すれば、

則ち怨の爲に害せられざるが如し。佛、欲に著するの婆羅門の爲に説きたまふが如くんば、我は本、

欲を觀て、欲を怖畏憂苦の因縁と爲し、欲を少樂多苦と爲す。欲を魔網の纏綿して出で難しと爲し、

欲を燒熱して、諸樂を乾竭すと爲す。譬へば、樹林の四邊より火起るが如し。欲を火坑に臨んで甚だ

怖畏すべきが如く、毒蛇に逼るが如く、怨賊の刀を抜くが如く、惡羅刹の

如く、惡蛇の口に入るが如く、洋銅を呑むが如く、三流の狂象の如く、大

深坑に臨むが如く、師子の道を斷ずるが如く、摩竭魚の口を開くが如し

と爲す。諸欲も亦た是くの如く、甚だ怖畏すべし。若し諸欲に著せば、

人をして惱苦せしむ。欲に著するの人は亦獄囚の如く、鹿の圍に在るが如く、鳥の網に入るが如く、

魚の鉤を呑むが如く、豹の狗を搏つが如く、鳥の鴟群に在るが如く、蛇の野猪に値ふが如く、鼠の猫

の中に在るが如く、群盲の坑に臨むが如く、蠅の熱油に著くが如く、溼人の陣に在るが如く、覺人の

火に遭ふが如く、沸鹹の河に入るが如く、蜜を塗れる刀を舐るが如く、四衢の鬻肉の如く、薄の刀林

を覆ふが如く、華の不淨を覆ふが如く、蜜を塗れる毒甕の如く、毒蛇の篋の如く、夢の虚誑の如く、

假借の當に歸すべきが如く、小兒を幻誑するが如く、焰の實なきが如く、大水に没するが如く、船の

【三〇】 専ら禪を求めて欲樂を放捨すること、種種の譬を擧げて五欲を呵す。

【三一】 摩竭(マカ)魚(イサナ)。譯して鱈魚、巨鱈といふ。

摩竭魚の口に入るが如く、雹の穀を害するが如く、霹靂の人に臨むが如し。諸欲も亦是の如く、虚誑無實無牢無強にして、樂少く苦多し。欲は魔軍たり、善功德を破り、常に衆生に劫害を爲すが故に、是の如き等の種種諸の喻を出す。五欲を呵し、五蓋を除き、五法を行すれば、初禪に至ることを得るなり。

問うて曰く、(三)八背捨・八勝處・十一切入四無量心・諸定三昧、是の如き等の種種の定を波羅蜜(多)と名けず、何を以てか但禪波羅蜜(多)と言ふや。答へて曰く、此の諸定の功德は、都て是れ思惟修なり、(三)禪波羅蜜(多)と言へば一切皆攝す。

復次に、(四)禪は最大なること王の如く、禪を説けば則ち一切を攝し、餘定を説けば則ち攝せず。何となれば是の四禪の中は、智と定と等しくして樂なるを以てなり。(五)未到地 (三)中間地は智多くして定少く、無色界は定多くして智少く、

(三) 第三間、八背捨・八勝處・十一切入等を波羅蜜多と言はず、但禪のみを波羅蜜多と稱する理由如何。

(三) 縮減には此の間に「禪染言思惟修」の六字あれども、恐らくは夾註の誤添ならん。

(四) 四禪は智と定と等しく、未到地と中間地とは智多くして定少なく、無色界は定多くして智少なきことを辨す。

(五) 未到地は、普通には未至定又は未到定と言ふ。八界の八地に各根本定と近分定とあり。其中初禪の近分定は、他の近分定に異なるか故に、別名を立てて未至定、即ち未だ

根本に至らざる定と名づくるなり。

(六) 中間地は、普通には中間定・中間三昧・中間禪と言ふ。大梵天王所得の禪定なり。色界と無色界とを過ぎて八地あり、一地毎に各近分定と根本定とあり。其中、初禪の近分定と根本定には、尋と伺との心所相應し、第二禪以上、七地の近分定と根本定には、尋も伺も相應せず、極めて寂靜なり。然るに此中間に於て唯伺の心所のみ相應して、尋の心所の相應せざるあり、之を中間定と名く。

是の處は樂に非ず。譬へば車の一輪は強く、一輪は弱ければ、則ち安穩ならざるが如く、智と定と等しからざるも亦是の如し。

復次に、是の四禪處には、**【一】** 四等心・五神通・有捨・勝處・一切處・眞淨・三昧。

**【二】** 願智・頂禪・自在・空・無願・十四變化心・微舟・放・諸の菩薩の三昧・首得・嚴等あり、略説すれば則ち百二十なり。諸佛の三昧の不動等は、略説すれば則ち百八なり、及び佛の得道・捨道、是の如き等の種種の功德・妙定は、皆禪の中に在り。是の故に禪を波羅蜜「多」と名け、餘定を波羅蜜「多」と名けず。

問うて曰く、**【三】** 汝は先に五欲を呵し、五蓋を捨き、五法を行じて、初禪を得と言へり。何事ぞ信し、何處に依つて、能く初禪を得るや。答へて曰く、**【四】** 不淨觀、**【五】** 安那般那等の諸定門に依る、**【六】** 緣起・緣義の偈の中に説くが如し。

**【一】** 欲及び惡法、有覺並に有觀を離れ、生を離れて喜樂を得、是の人は初禪に入る。

已に姪火を離るることを得て、則ち清涼定を得、人の大熱に對えて、冷池に入れば、則ち樂きが如し。

**【七】** 四等心は、慧・慧・喜・捨の四無量心のこと。

**【八】** 願智とは、願の如く生じ樂する智慧といふ。俱舍論二十七に「願を以て先と爲し、願智を以て起り、願の如く了す、故に願智といふ」とあり。

**【九】** 第四禪・初禪を得るには、何事ぞ信し、何處に依るべきか。

**【一〇】** 不淨觀とは、物質の結合より成る身體を觀じて、不淨なりとするをいふ。

**【一一】** 安那般那(Anāpāna)は、禪して氣息觀といふ。

貧〔者〕の寶藏を得れば、大喜覺の心を動すが如く、分別して則ち觀を爲す、初禪に入ること亦然なり。

二法は心を亂すことを知り、善と雖も而も離るべし、大水の澄靜なれば、波蕩も亦見ゆること無きが如し。

譬へば人の大に極めて安隱に睡臥する時、若し喚呼の聲あれば、其の心大に惱亂するが如し。心を攝して禪に入る時は、覺觀を以て惱と爲す。是の故に覺觀を除けば、一識處に入ることを得るなり。

内心、清淨なるが故に定生じて、喜樂を得。此の二禪に入ることを得れば、喜び勇んで心大に悦ぶ。

心を攝することは第一の定なり、寂然として念する所なく、患喜欲は之を棄つること、亦覺觀を捨つるが如し。

〔四三〕 受に由るが故に喜あり、喜を失へば則ち憂を生ず、喜樂の身受を離れ、念及び方便を捨つ。聖人は能く捨つることを得、餘人は捨つること難しと爲す。若し能く樂觀を知り、見、動かざれば大安なり。

憂喜先づ已に除き、苦樂今亦斷じ、念を捨て、清淨心にして、第四禪の中に入る。

〔四三〕 受とは感覺のことなり。

第三禪の中の樂は無常にして、動するが故に苦なり。欲界の中に憂を斷じ、初二禪に喜を除く。是の故に佛世尊は、第四禪の中に説きたまはく、「先に已に憂苦を斷じ、今苦樂を除くことを得し」と。

復次に、持戒清淨にして、獨處に閑居し、諸根を守り攝し、初夜にも後夜にも專精に思惟し、外樂を棄捨し、禪を以て自ら娛み、諸欲不善法を離れ、未到地に依つて初禪を得。初禪は阿毗曇に説くが如し。三禪に四種あり、一には味相應、二には淨、三には無漏、四には初禪に攝する所の報得

の五衆なり。是の中行者は淨、無漏に入る。二禪三禪四禪も亦是の如し。佛の所説の如くんば、比丘あり、諸欲及び惡不善の法・有覺有觀を離れ、生を離れ喜樂にして初禪に入るが如し。諸欲とは愛著する所の色等の五欲なり、思惟分別して欲を呵すると先に説くが如し。惡不善の法とは、貪欲等の

五蓋なり、此の内外の二事を離るるが故に初禪を得。初禪の相は有覺有觀・喜樂・一心なり。有覺有觀とは、初禪の中に未だ曾つて得られざる、善法の功德を得るが故に、心大に驚悟す、常に欲火の爲に焼れしが、初禪を得る時は清涼池に入るが如く、貧人の幸かに寶藏を得るが如く、行者は思惟分別して、欲界は過罪なり、初禪は利益功德甚だ多しと知り、心大に歡喜す。是を有覺有觀と名く。

問うて曰く、聖・有覺有觀は、一法と爲んか、是れ二法と爲んか。答へて曰く、二法なり。麤心の初

【四三】 初禪に四種の禪あることを辯ず。  
 【四四】 Ariyamānāya samāyamaṃ pāyukāṃti.  
 【四五】 第五問、有覺、有觀の異同を問ふ。

念は是を名けて覺と爲し、細心の分別は是を名けて觀と爲す。譬へば鐘を撞くに、初聲の大なる時を名けて覺と爲し、後聲の細微なるを名けて觀と爲すが如し。

問うて曰く、阿毗曇に説くが如くんば、欲界乃至初禪の一心の中には覺觀相應す。今云何が真心の初念を名けて覺と爲し、細心の分別を名けて觀と爲すと云ふや。答へて曰く、一法は一心に在りと雖も、二相は俱ならず。覺の時は、觀は明了ならず、觀の時は覺は明了ならず。譬へば日出づれば、衆星現せざるが如く、一切の心、心數法の、時に隨つて名を受くることも亦復是の如し。佛の説きたまふが如くんば、「若し一法を斷せば、我、汝は阿那含を得たるを證せん」と。一法とは所謂慳貪なり。實には應に五下分結を盡して、阿那含を得と説くべし、云何か但一法を斷すと云ん。是の人の慳貪は偏く多きを以て、諸餘の結使は皆從つて生ず。是故に慳盡くれば、餘の結も亦斷す。覺と觀との時に隨つて名を受くることも亦復是の如し。行者は是の覺觀は是れ善法なりと雖も、而も定心を燒亂すると知つて、心の欲を離るるが故に、是の覺觀を呵して是の念を作す、

「覺觀は禪心を燒動す。譬へば清水も波盪すれば則ち見る所なきが如く、又疲極の人の息むことを得

【四〇】第六問、阿毗曇によれば、欲界乃至初禪に於ける覺觀は相應なりとす。今何が故に真心と細心とに分つや。

【四一】五下分結とは、有情を欲界に繫縛する五種の煩惱なり。一に貪結、貪欲の煩惱。二に瞋結、瞋恚の煩惱。三に身見結、我見の煩惱。四に戒取見結、非理無道の邪戒を取執する煩惱。五に疑結、眞理を疑する煩惱。此五種の爲に欲界を超越するを能はざるが故に下分結といふ。

【四二】覺觀は善法なりと雖も、而も尙ほ定心の妨害たる旨を説く。

て、睡らんと欲するに、傍人嗔呼して種種に惱亂するが如く、心を攝する内定を覺觀の變動すること  
 も亦復是の如し」と。是の如きの種種の因縁によりて、覺觀を呵す。覺觀滅すれば、内、清淨にして、  
 心を一處に繫け、覺なく觀なく、定生じ喜樂して二禪に入る。既に二禪を得れば、二禪の中に未だ  
 曾て得られざる無比の喜樂を得。覺觀滅すとは、覺觀の過罪を知るが故に滅す。内、清淨とは、深  
 禪定に入つて信じ、初禪の覺觀を捨てて所得の利は重く、失ふ所は甚だ少く、變る所は大に多く、心  
 を一縁に繫ぐるが故に、内、清淨と名く。行者の喜の過を観ることも亦覺觀の如し。喜ま所に隨つて  
 多喜多憂なり。何となれば貧人の寶を得れば、歡喜すること量なく、一旦之を失すれば、其の憂も亦  
 深きが如く、喜は即ち轉じて憂と成る。是故に當に此の喜を捨離すべし。故に念智を捨つることを行  
 じて身樂を受く。聖人は是の樂を能く得、能く捨つ。一心樂に在れば、第三禪に入る。捨つとは、喜  
 心を捨てて復た悔いざるなり。念智とは、三禪の中の樂を得て、樂に於て患を生ぜしめざるなり。  
 身樂を受くとは、是れ三禪の樂にして、遍身皆受く。聖人は能く得、能く捨つとは、此の樂は世間第  
 一にして、能く心の著を生ずればなり。凡夫は能く捨つる者少し。是の故に佛説きたまはく、「慧を  
 行するの果報は、遍淨地の中の第一なり」と。行者の樂の失を觀することも亦歡喜の如く、心不動の  
 處を知るを、最も第一と爲す。若し動する處あれば是れ則ち苦あり。行者は第三禪の變動を以ての故  
 に不動の處を求め、以て苦樂を斷す。先づ憂喜を滅するが故に、不苦不樂・捨念・清淨にして第四禪に

入る。是の四禪の中には、苦なく、樂なく、樂たたく、但不動の智慧のみ有り。是の故に第四禪は捨念清淨なりと説き、第三禪は、樂動くが故に苦なりと説く。是の故に第四禪の中には、苦樂を斷すと説く。佛の説きたまふが如くんば、四一切の色相を過ぎ、別相を念せず、有對の相を滅して、無邊虛空に入ることを得。行者是の念を作し、若し色なければ則ち飢渴寒熱の苦なし。是の身色は麤重弊惡虛誑にして實に非ず。先世の因縁の和合せ報として此の身を得、種種の苦惱の所住の處なり。云何が當に此の身を免るることを得べき。當に此の身を、身中は虛空の如しと觀じ、常に身の空なること、籠の如く、甌の如しと觀すべし。常に念じて捨てざれば、則ち色を度することを得て、復た身を見ず。内身の空なるが如く、外色も亦爾なり。是の時能く無量無邊の空を觀す。此の觀を得れば、苦なく樂なく、其の心轉た増す。鳥の瓶中に閉著せらるるに、瓶破れて出づることを得るが如し。是を空處の定と名く。是の空は無量無邊なり。識を以て之を緣じ、緣多ければ則ち散じ、能く定を破る。行者は虛空を觀じ、受想行識は、病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如く、無常苦空無我なり、欺誑の和合は則ち有なるも、是れ實に非ざるなりと緣す。是の如く念じ已つて、虛空の緣を捨て、但識のみを緣す。云何にしてか現前の識を緣じ、過去未來の無量無邊の識を緣する。是の識は無量無邊なり、識を以て之を緣するに、識多ければ則ち散じて、能く定を破る。行者は是の緣識を觀じて、受想行識は病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の

【四色】 四空處の特性を辨す。

如く、無常・苦・空・無我なり、欺誑和合の有なり、實有に非すとす。是の如く觀じ已つて、則ち誠相を破る。是く誠處を呵し、無所有處を讀し、諸の誠相を破り、心を繋けて無所有の中に在く、是を無所有處定と名く。無處有處には受想行識を緣じて、病の如く、瘡の如く、刺の如く、無常・苦・空・無我なり、欺誑和合の有なり、實有に非ざるなりと、是の如く思惟す。無想處は瘡の如く、有想處は病の如く、瘡の如く、瘡の如く、刺の如く、第一の妙處は是れ非有想非無想處なり。

問うて曰く、吾非有想非無想處に受想行識あり、云何ぞ非有想、非無想と言ふや。答へて曰く、是の中の有想は微細にして覺し難きが故に、謂つて非有想と爲す。有想の故に非無想なり。凡夫は心に、諸法實相を得るを謂つて、是を涅槃と爲す。佛法の中には、有想を知ると雖も、其の本名に因つて、名けて非有想非無想處と爲す。

問うて曰く、(三)云何が是れ無想なる。答へて曰く、(三)無想到三種あり。一には無想定、二には滅受想定、三には無想天なり。凡夫人は心を滅して無想定に入らんと欲し、佛弟子は心を滅して滅受定に入らんと欲す。是の諸の(三)禪定に二種あり。若くは有漏、若くは無漏なり。有漏は即ち是れ凡夫の行する所にして上に説くが如く、無漏は十六聖行を行す。有漏道の若きは、上地の邊に依つて、下地

- 【五二】 第七問、受想行識あるものを、非有想非無想といふ理由如何。
- 【五二】 第八問、無想とは何ぞや。
- 【五三】 三種の無想を説く。
- 【五三】 二種の禪定、即ち有漏定と無漏定との不同を詳す。

の欲を離れ、無漏道の若きは、自地の欲及び上地を離る。是故に凡夫は有頂處に於て欲を離るるとを  
 得ず、更に上地の邊なきが故なり。佛弟子の若きは、欲界の欲、欲界の煩惱を離れんと欲し、思惟し  
 て九種の上中下なるの上の上、上の中、上の下、中の上、中の中、中の下、下の上、下の中、下の下を  
 斷す。此の九種を斷するが故に、佛弟子は若し有漏道に依つて初禪を得んと欲せば、是の時未到地に  
 於て、九無礙道、八解脱道の中、現在有漏道を修し、未來に有漏無漏道を修す。第九解脱道の中に、  
 未到地に到り、現在有漏道を修し、未來に未到地の有漏無漏道、及び初禪邊地の有漏を修す。若し無  
 漏道を初禪に得んと欲するも亦是の如し。若し有漏道に依つて初禪の欲を離れ、第二禪邊地に於て、  
 九無礙道、八解脱道の中に、現在二禪邊地の有漏を修し、未來に二禪邊地  
 の有漏道を修し、亦無漏初禪の無漏及び眷屬を修し、第九の解脱道の中に  
 第二禪邊地に於て、現在二禪邊地の有漏道を修し、未來に二禪邊地、初禪の無漏及び眷屬、二禪の淨  
 無漏を修す。若し無漏道に初禪の欲を離れ、九無礙道、八解脱道の中に、現在自地の無漏道を修し、  
 未來に初禪及び眷族の有漏無漏道を修し、第九解脱道の中に、現在自地の無漏道を修し、未來に初禪  
 及び眷族の有漏、無漏道を修す、及び二禪の淨無漏、乃至無所有處の離欲を修する時、亦是の如し。  
 非有想非無想處に欲を離るる時は、九無礙道、八解脱道の中に但一切無漏道を修し、第九解脱道の中  
 に三界の善根無漏道を修し、無心定を除く。修に 二種あり、一には得修、二には行修なり。得修

【五】二種の修、即ち得修と行  
 修との不同。

とは、本得ざる所を今得るに名け、未來世の自の事を修し、亦餘事を修す。行修とは、曾て得たるを現前に於て修すと名く。未來も亦爾なり、餘を修せず。是の如き等の種種を、諸の禪定の中に修す。

復次に、蓋禪定の相を畧説するに、二十三種あり。八味と八淨と七無漏となり。復た六因あり、相應因と共因と相似因と逼因と報因と名因となり。一々の無漏、七無漏の因は是れ相似因なり。自地の

中にて、相應因、共有因、初味定、初味定因、乃至、後味定、後味定因を増す。淨も亦是の如し。四

縁あり、因縁と次第縁と、縁縁と増上縁となり。因縁は上に説くが如し。初禪の無漏定は、次第に六

種の定を生ず、一に初禪の淨に二無漏あり、二禪三禪も亦是の如し。二禪

の無漏定は、次第に八種の定を生ず、自地淨無漏と初禪淨無漏となり、三

禪四禪も亦是の如し。三禪の無漏定は、次第に十種を生ず。自地の二と下地の四と上地の四となり。

第四禪の空處も亦是の如く、識處の無漏定は、次第に九種を生ず。自地の二と下地の四と上地の三と

なり。無所有處の無漏定は次第に七種を生ず、自地の二と下地の四と上地の一となり。非有想非無想

處は、次第に六心を生ず、自地の二と下地の四となり。諸の淨地も亦是の如く、又皆自地の味を益す、

初禪の味、次に第二種の味淨、乃至非想非非相處味も亦是の如し。淨氣漏禪は、一切處に味禪を緣

じ、自地の中の味を緣じ、亦淨愛を緣す。無漏縁なきが故に、無漏を緣せず。淨氣漏、根本無色定

は、下地の有漏を緣せず。名因と増上縁とは、一切の四無量心三背捨八勝處に通じ、八一切處は皆

は、下地の有漏を緣せず。名因と増上縁とは、一切の四無量心三背捨八勝處に通じ、八一切處は皆

【五九】 二十三種の禪定の特徴

欲界の五神通を縁じ、欲色(二)界を縁す、餘は各各所縁に隨ふ。滅受想定は所縁なし。四禪の中に練法あり、無漏を以て有漏を練るが故に、四禪に心自在なることを得。能く無漏の第四禪を以て、有漏の第四禪を練り、然る後第三第二第一禪は皆自地の無漏を以て、自地の有漏を練る。

問うて曰く、云を以てか練禪と名くるや。答へて曰く、諸の聖人は、無漏定を樂み、有漏を樂まざる。欲を離るる時、有漏を樂まずして自得し、今其の滓穢を除かんと欲するが故に、無漏を以て之を練る。譬へば金を練るが如く、無漏禪より起つて、淨禪に入り、是の如く數數す。是を名けて練ると爲す。

復次に、諸禪の中に、毛頂禪あり、何を以ての故に、頂と名くるや。二種あり、阿羅漢の壞法と不壞法となり。不壞法の阿羅漢は、一切の深き禪定に於て自在を得、能く頂禪を起つて是の頂禪を得、能く壽を轉じて富と爲し、富を轉じて壽と爲す。

復た、願智・四辯・無諍三昧あり。願智とは、願つて三世の事を知らんと欲し、所願に隨つて則ち知る。此の願智は二處の攝なり、欲界と第四禪となり。四辯のうち法辯と辭辯とは、二處の攝にて欲界と初禪となり。餘の二辯は九地の攝にして、欲界と、四禪と、四無色定となり。無諍三昧とは、他の心をして諍を起さざらしむ。五處の攝にして欲界及び四禪なり。

【六】 第九問、練禪と名くる理由如何。  
【五七】 頂禪と名くる理由。

問うて曰く、天諸禪を得て更に餘法ありや。答へて曰く、味定は生ずるも亦得、退くも亦得、淨禪は生ずる時得、欲を離るる時は無漏を得、欲を離るる時得、退く時は九地の無漏定を得、四禪三無色定、未到地禪、中間は能く結使を斷じ。未到地の禪、中間は捨根と相應す。若し人禪を成就すれば、下地の化心も亦成就す。初禪に成就するが如きは種種の變化心あり。一には初禪、二には欲界なり、二禪には三種、三禪には四種、四禪には五種あり。若し二禪三禪四禪の中に、聞見觸を欲する時は皆梵世の識を用ひ、識滅する時は則ち止む。四無量意、五神通、八背捨、八勝處、十一切入、九次第定、九想、十想、三三昧、三解脱門、三無漏根、三十七品、是の如き等の諸の功德は皆禪波羅蜜「多」の中より生ず。是の中に應に廣く説くべし。

問うて曰く、禪に禪波羅蜜「多」を説くべし、何を以てか但禪を説くや。答へて曰く、禪は是れ波羅蜜「多」の本なり。是の禪を得已つて衆生を憐愍し、内、心中に種種の禪定妙樂あれども、而も求むることを知らず、乃ち外法の不淨苦の中に在つて樂を求む。是の如く觀じ已つて、大悲心を生じ、弘誓願を立つ、我當に衆生をして、皆禪定の内樂を求め、不淨の樂を離れしむべし」と。此の禪樂に依つて、次いで佛道の樂を得せしむ、是の時の禪を波羅蜜「多」と名くることを得。

復次に、此の禪の中に、味を受げず、報を求めず、報生に隨はず、心を調へんが爲の故に禪に入

【次】第一〇問、諸禪を得るも更に餘法ありや如何  
 【无无】第一一問、禪波羅蜜多を説かずして單に禪を説く理由如何

り、智慧方便を以て還つて欲界に生じ、一切の衆生を度脱す、是の時の禪を名けて、波羅蜜〔多〕と爲す。

復次に、菩薩は深く禪定に入り、一切の天人は其の心を知ること能はず。所依・所縁・見聞・覺知の法の中に心動せず。毗摩羅詰經の中に、舍利弗の爲に宴坐の法を説きたまふが如し。「身に依らず、心に依らず、三界に依らず、三界の中に於て身心を得ざる是を宴坐と爲す」と。

復次に、若し人禪定の樂は人天の樂に勝れたりと聞いて、便ち欲樂を捨てて禪定を求めば、是れ自ら樂利を求むるが爲にして奇とするに足らず。

菩薩は則ち然らず。但衆生の爲の故に、慈悲心をして淨ならしむ、衆生を捨てざるは菩薩の禪なり。禪の中に皆大悲心を發す。禪に極妙の内樂あり。而も衆生は之を捨てて外樂を求む、譬へば大富の盲人は、多く伏藏ありども、知らず見ずして、乞を行じ求むるが如し。智者は其人の自ら妙物

あつて、知見すること能はずして他に從つて乞ふとを慙む。衆生も亦是の如く、心中に自ら種種の禪定の樂あつて、而も發することを知らず、反つて外樂を求む。

復次に、菩薩は諸法の實相を知るが故に、禪の中に入つて、心安隱にして味に著せず。諸餘の外道は禪定に入ると雖も、心安隱ならず、諸法の實を知らざるが故に禪味に著す。

【六〇】 衆生は禪の樂を知らざる  
こと、盲人の自らの伏藏を見  
ること能はずして、乞ひ求む  
るが如し。  
【六一】 菩薩は禪味に著せざれど  
も、外道は禪味に著する旨を  
説く。

問うて曰く、阿羅漢と辟支佛とは、俱に味に著せず、何を以てか禪波羅蜜多を得ざるや。答へて曰く、阿羅漢と辟支佛とは、味に著せずと雖も、大悲心なきが故に、禪波羅蜜多と名けず。又復盡く諸禪を行すること能はず。菩薩は盡く諸禪を行じ、麤細大小深淺内縁外縁一切を盡く行す。是を以ての故に、菩薩の心中は禪波羅蜜多と名け、餘人は但禪とのみ名く。

復次に、外道も聲聞も菩薩も皆禪定を得れども、而も外道禪の中には三種の患あり。「即ち」或は味著、或は邪見、或は憍慢なり。聲聞禪の中には、慈悲薄く、諸法の中に於いて利智を以て諸法の實相を貫達すること能はず、獨り其の身を善くし、諸の佛種を斷ず。菩薩禪の中には此の事なく、一切諸佛の法を集めんと欲するが故に、諸禪の中に於て、衆生乃至蠅蟲を忘せず、常に慈念を加ふ。釋迦文尼佛の如きは、本螺髻仙人となり、尚闍梨と名く。常に第四禪を行じ、出入の息斷え、一樹の下に在つて坐し、兀然として動せず、鳥は此の如くなるを見て、之を謂つて木と爲し、即ち影中に於て卵を生む。是の菩薩は禪より覺めて、頂上に鳥の卵あるとを知り、即ち自ら思惟すらく、「若し我起動せば、鳥母は必ず復た來らざらん、鳥母來らずんば、鳥の卵は必ず壞せん」と。即ち還た禪に入り、鳥の子を飛び去るに至つて、爾して乃ち起てり。

【六二】 第一二問、阿羅漢も辟支佛も俱に味に執著せず、而も禪波羅蜜多を得ざるは何故なるか。

【六三】 外道の禪には三種の失あり、二乗の禪は佛種を斷じ、菩薩の禪の中には衆生を忘れざることを説く。

【六四】 尚闍梨仙人の禪定

鳥母は必ず復た來らざらん、鳥母來らずんば、鳥の卵は必ず壞せん」と。即ち還た禪に入り、鳥の子を飛び去るに至つて、爾して乃ち起てり。

復次に、菩薩を除き、餘人は欲界の心より次第に禪に入ることを得ず。菩薩は禪波羅蜜「多」を行じ、欲界の心より次第に禪に入る。何となれば菩薩は世世に諸の功德を修し、結使の心薄く、心柔軟なるを以てなり。

復次に、餘人は、總相の智慧を得て能く欲を離るること、無常觀・苦觀・淨觀の如し。菩薩は一切法の中に於て、能く別相を分別して欲を離る。五百の仙人の如きは、飛行する時、緊那羅女が歌声を聞き、心に著し、狂醉して皆神足を失ひ、一時に地に墮つ。聲聞の如きは、緊那羅王・屯耑摩が琴を彈じて歌聲し、諸法實相を以て佛を讚するを聞く。是の時に、須彌山及び諸の樹木は皆動じ、大迦葉等の諸の大弟子は皆座上に於て自ら安んずると能はず。天須菩薩、大迦葉に問ふ、「汝は最も昔年にして、頭陀を行ふと第一なり。念ふに何故に心を制して自ら安んずると能はざるや」と。大迦葉答へて曰く、「我は人天の諸欲に於て心傾動せず、是は菩薩の無量の功德の報聲なり。又復た智慧を以て變化して、聲を作す、「是の故に」忍ぶ能はざる所なり」と。若し八方より風起るも、須彌山をして動せしむること能はず。「されど」劫盡くるの時、毗藍の風至れば、須彌山を吹いて腐草の如くならしむ。是の故に菩薩は一切法の中に於て、別相を觀じて諸欲を離るることを得、諸餘の人等は但禪の名のみを得て、波羅蜜「多」を得ざるこ

【六三】 五百の仙人、緊那羅女の歌聲を聞いて神通を失す。  
【六四】 漢譯原本に緊陀羅とあるし、陀を那に改む。  
【六五】 屯耑摩が琴を彈じて、佛を讚するの聲を聞き、迦葉等みな座上に安んずる能はざりし因縁。

とを知る。

復次に、六餘人は菩薩の入出の禪心を知るも、禪に住するの心の縁する所、到る所を知るに能はず、七「たと」諸法の深淺を知るのみ。阿羅漢、辟支佛すら尙知ること能はず、何に況んや餘人をや。譬へば象王の水を度るに、入る時も出る時も足跡を見る可く、水中に在る時は、知ることを得べからざるが如し。若し初禪を得んに、同じく初禪を得たる人は能く知れども、而も菩薩の初禪に入るを知ると能はず。人あり、二禪を得て、觀知して初禪の心を了了に知るとを得れども、菩薩の初禪に入る心を知ると能はず、乃至非有想非無想處も亦是の如し。

復次に、六超越三昧の中には、初禪より起つて第三禪に入り、三禪の中より起つて虚空處に入り、虚空處より起つて無所有處に入る。七二乗は唯能く一を超ゆるも、二を超ゆること能はず。菩薩は自在に超えて、初禪より起つて、或は三禪に入ること常の法の如く、或時は第四禪に入り、或

は空處、識處、無所有處に入り、或は非有想非無想處、或は滅受想定に入り、滅受想より起つて、或は無所有處、或は識處、空處、四禪乃至初禪に入り、或る時は一を超え、或る時は二を超え、乃至九

【六】餘人は菩薩の入出の禪心を知れども、住するの縁を知るに能はず。

【六】超越三昧、凡そ禪定は四禪、四無色及び滅盡定と淺深次第して出入共に此次第を重なる法とす。然るに佛及び深位の菩薩は、此次第を要せず、散心より直に滅盡定にも入り、滅盡定より直に散心に出づることを得、之を超越三昧といふ。本論第八十一卷を參照すべし。

【七】二乗は超越三昧中の二を超ゆる能はずれども、菩薩は超越自由なり。

を越ゆ。聲聞は二を越ゆること能はず、何となれば智慧・功德・禪定の力薄きを以てなり。譬へば二種の師子の如し。一は黄師子、二は白髮の師子なり。黄師子は亦能く超ゆと雖も、白髮の師子王に如かず。是の如き等の種種の因縁によりて禪波羅蜜〔多〕を分別す。

復次に、爾の時に菩薩は常に禪定に入り、心を攝して動せず、覺觀を生せず、亦能く十方一切の衆生の爲の故に、無量の音聲を以て、法を説いて之を度脱す、是を禪波羅蜜〔多〕と名く。

問うて曰く、經の中に説くが如くんば、先づ覺觀思惟あつて、然して

後能く説法す、禪定の中に入つて、語るに覺觀なければ、説法し得べからず。汝今云何が常に禪定の中に在つて、覺觀を生せずして、衆生の爲に説法すと言ふや。答へて曰く、生死の人の法は、禪定に入り、先づ語るに覺觀を以て、然して後に説法す。法身の菩薩は、生死の身を離れ、一切の諸法を知り、常住なると禪定の相の如く、亂あることを見ず。法身の菩薩は、無量の身を變化して衆生の爲に説法す、而も菩薩の心は分別する所なし。阿修羅の琴の、常に自ら聲を出し、意に隨つて作し、人の彈する者なきが如し。此れ亦散心なく、亦攝心なし。是福德の報生するが故に、人の意に隨つて聲を出すなり。法身の菩薩も亦是の如く、分別する所なく、亦散心なく、亦説法の相なし。是れ無量の福德・禪定・智慧の因縁の故に、是の法身の菩薩は、種種の法音を

【七二】 黄白二種の獅子の譬。

【七三】 第一三問、覺觀を生ぜずして衆生の爲に説法し得るといふ理由如何。

【七三】 凡夫は覺觀思惟して而して後説法すれども、法身の菩薩は定に入つて説法自在なること阿修羅の琴の如し。

驚するに隨つて出だす。鯨魚の心には多く布施の聲を説くを聞き、破戒・瞋恚・憍念・亂心・愚癡の人には、各各持戒・功徳・禪定・智慧の聲を説くを聞き、是の法を聞き已つて、各各思惟し、漸く三乘を以て度脫することを得るなり。

復次に、菩薩は一切の法を觀じて、若くは亂れ、若くは定まる、皆是れ不二の相なり。餘人は亂に於て定を求む。何となれば亂法の中に瞋想を起し、定法の中に於て著想を生ずるを以てなり。蓋陀

羅伽仙人の如きは、五通を得て日に王宮の中に棲び到つて食す。王の大

夫人は、其の國法の如く足に接して禮すれば、夫人の手に觸れて即ち神通を失ひ、王より車を求め、駕に乗つて出でて其の本處に還り、林樹の間に入つて更に五通を求め、一心に専ら至り、當に得んとするに垂んとする

時、鳥あり樹上に在つて、急に鳴いて以て其意を亂す。樹を捨てて水邊に至り定を求むるに、復た魚の躍つて水を動かすの聲を聞く。此の人は禪を求めて得ず、即ち瞋恚を生ず、我當に盡く魚鳥を殺すべしと。此人は久しうして後、思惟して定を得、非有想非無想處に生じ、彼に於て善觀きて下生

し、飛狸と作つて諸の魚鳥を殺し、無量の罪を作つて三惡道に墮せり。是を禪定の中に、亂りに心に著するの因縁と爲す。外道は此の如し。佛弟子の中にも一比丘あり、四禪を得て増上慢を生じて四

道を得たりと謂ひ、初禪を得る時は、是を須陀洹と謂ひ、第二禪の時は、是を斯陀含と謂ひ、第三禪

道を得たりと謂ひ、初禪を得る時は、是を須陀洹と謂ひ、第二禪の時は、是を斯陀含と謂ひ、第三禪

【七〇】 羅伽羅伽仙人、定中に亂著し、飛狸と爲つて魚鳥を殺すの因縁。  
【七一】 四禪の比丘、佛を誇つて阿鼻地獄に墮せし因縁。

の時は、是を阿那含と謂ひ、第四禪の時は、阿羅漢を得と謂ひ、是を特んで、止まつて復た進むとを  
 求めず、命盡きんと欲する時、四禪の中陰の相來るあるを見て、便ち邪見を生じ、涅槃なきは、佛と  
 われ、欺くが爲なりと謂つて、惡邪を生せしが故に、四禪の中陰を失なひ、便ち阿鼻泥犁の中陰の相を  
 見、命終つて即ち阿鼻地獄に生ず。諸の比丘、佛に問ひたてまつる、「某甲比丘、阿蘭若に命終す、  
 何の處に生ずるや」と。佛の言はく、「是人は阿鼻泥犁の中に生ず」と。諸の比丘、皆大に驚怖す。「此  
 人は坐禪持戒す、解る所由あらんや」と。佛の言はく、「此人は増上慢にして、四禪を得る時、四道を  
 得と謂ふが故に、命終の時に臨み、四禪の中陰の相を見て、便ち邪見を生じて謂へらく、涅槃なし、  
 我は是れ阿羅漢なり、今還復た生ず、佛、虚誑を爲すと。是の時即ち阿鼻  
 泥犁の中陰の相を見、命終つて即ち阿鼻地獄の中に生ず」と。是の時佛偈  
 を説いて言はく、

『多聞持戒禪は、未だ無漏法を得ず、此の功德ありと雖も、此の事は信す可らず。』

是の比丘は、是の惡道の苦を受く。此の故に亂相を取れば、能く瞋等の煩惱を生じ、定相を取れ  
 ば、能く著を生ずることを知る。菩薩は亂相を取らず、亦禪定の相を取らず、亂と定の相一なるが故  
 に、是を禪波羅蜜〔多〕と名く。初禪の相の如きは、欲を離れ、蓋を除き、心を一處に攝す。〔是菩薩  
 は利根にして智慧もて觀するが故に、五蓋に於て捨つる所なく、禪定の相に於て取る所なし。〔そは〕

【七六】 菩薩は五蓋に於て捨つる所なし。

諸法の相は空なるが故なり。云何が五蓋に於て捨つる所なきや。貪欲蓋は、内に非ず、外に非ず、亦兩の中間ならず、何となれば、若し内法に有らば、外の生ずるを待つべからず、若し外法に有らば、我に於て亦患なく。若し兩の中間に在らば、兩の間は則ち處する所なければなり。亦先世より來らず。何となれば一切の法は來ること無きを以てなり。童子の欲あること無きが如きは、若し先世に有らば、小なるも亦あるべし、是の故に先世より來らず。亦後世に至らず、諸方より來らず、亦常に自ら有らず、一分の中に非ず、遍身の中に非ず、亦五塵より來らず、亦五情より出でず、從つて生ずる所なく、從つて滅する所なきことを知る。此の貪欲は、若くは先に生じ、若くは後に生じ、若くは一時に生ずるとは、是の事は然らず。何となれば若し先づ生ずること有つて、後に貪欲あらば、是の中に貪欲生ずべからず、未だ貪欲あらざればなり。若し後に生ずること有つて、先に貪欲あらば、則ち生に所生なし。若し一時に生せば、則ち生者なく、生處なし。生者、生處は無分別なるを以てなり。

復次に、是の貪欲と貪欲する者とは、一にあらざる異にあらざる、何となれば貪欲を離れては貪欲する者は得べからず、貪欲する者を離れては貪欲は得べからざればなり。是は但和合の因縁より生ず。和合の因縁より生ずる法は、即ち是れ自性空なり。是の如く貪欲と貪欲する者とは、異にして得べからず。若し一ならば、貪欲と貪欲する者とは、則ち分別なし。是の如き等の種種の因縁を以て、貪欲の生ずるとは得べからず。若し法の生ずる無くんば、是の法も亦滅すること無し。生ぜず滅せざるが故

に、則ち定なく亂なきなり。是の如く貪欲蓋を觀すれば、則ち禪と一と爲る。餘の蓋も亦是の如し。若し諸法の實相を得て、五蓋を見れば、則ち所有なし。是の時、則ち五蓋の實相は、即ち是れ禪の實相、禪の實相は即ち是れ五蓋なることを知る。菩薩は是の如く能く五欲及び五蓋、禪定及び支は一相なることを知り、無所依にして禪定に入る、是を禪波羅蜜〔多〕と爲す。

復次に、若し菩薩の禪波羅蜜〔多〕を行する時は、五波羅蜜〔多〕は和合し助成す、是を禪波羅蜜〔多〕と名く。復次に、菩薩は禪波羅蜜〔多〕の力を以て神通を得、一念の頃に定を起たずして、能く十方の諸佛を供養し、華香珍寶の種種を供養す。復次に、菩薩は禪波羅蜜〔多〕の力を以て、身を變ずること無數にして、遍ねく五道に入り、三乗の法を以て衆生を教化す。

復次に、菩薩は禪波羅蜜〔多〕の中に入り、諸の惡不善の法を除き、初禪乃至非有想非無想定に入り、其の心調柔にして、一一の禪の中に大慈悲を行じ、慈悲の因縁を以て無量劫中の罪を抜き、諸法實相の智を得るが故に、十方の諸佛及び大菩薩の爲に念せらる。復次に、菩薩は禪波羅蜜〔多〕の中に入り、天眼を以て十方の五道の中の衆生を觀、色界の中に生ずる者、禪定の樂味を受けて、還つて禽獸の中に墮して種種の苦を受くるを見、復欲界の諸天の七寶の池の中の華香を自ら娛み、後、鹹沸屎地獄の中に墮するを見、又た人中の多聞、世智

【七】世智辯聰とは、世間の人  
の邪智聰利にして、外道の經  
書を耽讀するものをいふ。佛  
教にては之を八難の一に數  
ふ。蓋し出世の要道たる正法  
を信ぜず、成道の障礙となれ  
ばなり。

煩惱の道を得ざるが故に、退た猶羊畜獸の中に墮して、未知する所なきを見る。是の如き等の身は、種種の大樂を失して大苦を得、大利を失して大害を得、尊貴を失して卑賤を得。此の衆生に於て悲心を生じ、漸漸に増廣して大悲を成ずることを得、身命を惜まず、衆生の爲の故に、麤行精進して退て佛道を求む。

復次に、不亂不味の故に禪波羅蜜(多)と名く。佛、舍利弗に告げたまふが如し。菩薩は、般若波羅蜜(多)の中に住して禪波羅蜜(多)を具足す。

「不は」不亂不味なるが故なり」と。

問うて曰く、云何が亂と名くるや。答ふ、亂に二種あり、一は微、

二は盛。微に三種あり、一には愛多く、二には慢多く、三には見多し。

六何が愛多きや。禪定の樂を得て、其の心愛味に樂著するなり。云何が慢多きや。禪を得る時、自ら盛事已に得と謂つて、以て自ら高うするなり。

云何が見多きや。我見等を以て禪定に入り、分別して相を取り、是は實、是は妄語なりとなす。是の三を名けて微細の亂と爲す。

是の因縁によつて、禪定に於て退して三毒を起す、是を盛亂と爲す。

味とは初めて禪定を得て、一心に愛著す、是を味と爲す。

問うて曰く、一切の煩惱は皆能く樂著す、何を以てか但愛のみを名けて味と爲すや。答へて曰

- 【七】 禪中の不亂不味
- 【八】 第一四問、亂とは何ぞや。
- 【九】 二種の亂。
- 【一〇】 三種の微亂を説く。
- 【一一】 三種の微亂を説く。
- 【一二】 盛亂の意義を辯ず。
- 【一三】 味の意義を辯ず。
- 【一四】 第一五問、一切の煩惱の中、特に愛著のみを以て、味と名くる理由相何。

く、愛と禪とは相似たり。何となれば禪は則ち心を攝すること堅住なり。愛も亦専ら著して捨て難く、又初めて禪を求むる時は、心専ら得んことを欲して、之を愛するを性と爲し、欲樂して専ら求め、欲と禪定と相違せざればなり。既に禪定を得るも、染著して捨てざれば、則ち禪定を壞す。譬へば人に物を施すに、必ず現報を望めば、則ち福徳なきが如し。禪に於て身を愛し、禪に愛著するも、亦復是の如し。是の故に但愛を以て味と名け、餘の結を以て味と爲さず。

【八五】縮藏には「受味」に作る。

# 卷の第十八

初品の中の般若波羅蜜(多)を釋す。

一切法に於て著せざるが故に、應に般若波羅蜜(多)を見足すべし。

問うて曰く、「云何が般若波羅蜜(多)と名くるや。答へて曰く、諸の菩薩は初發心より一切種智を求め、其の中間に於て、諸法の實相を知

る、慧は是れ般若波羅蜜(多)なり。

問うて曰く、若し爾らば名けて波羅蜜(多)

と爲すべからず。何となれば未だ智慧の邊に到らざるを以てなり。答へて曰く、佛の得た

まふ所の智慧は、是れ實に波羅蜜(多)なり。

是の波羅蜜に因るが故に、菩薩の所行、亦波羅蜜(多)と名く。因中に果を説くが故なり。是の般若波羅蜜(多)は、佛心の中に在りては、名を襲じて一切種智と爲す。菩薩は智慧を行じ、彼岸

に度らんことを求むるが故に、波羅蜜(多)と名け、佛は已に彼岸に度りたまふが故に、一切種智と名く。

【一】 第一問、般若波羅蜜多

(Prāṇānamika)とは、何ぞ

や。

【二】 一切種智。聲聞緣覺の智

を一切智といへるに對し、佛智を一切種智といふ説あり。

本論第二十七卷に於ける二智の差別に關する意見を參照せ

よ。

【三】 第二問、未だ智慧の邊に到らざるを波羅蜜多と稱する

は不合理にあらざるか。

【四】 因中に果ありと説くが故

に、菩薩の智を波羅蜜多と名く。

問うて曰く、佛は一切の諸の煩惱及び習已に斷じて、智慧の眼淨く、應に實の如く諸法實相を得たまふべし。諸法實相は即ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり。菩薩は未だ諸の漏を盡さず、慧眼未だ淨からず、云何が能く諸法實相を得るや。答へて曰く、此の義は後の品中に當に廣く説くべく、今は但略説す。人の海に入るが如し。始めて入る者あり、其の源底を盡す者あり、深淺は異なりと雖も、俱に名けて入ると爲す。佛菩薩も亦是の如く、佛は則ち其の底を窮盡し、菩薩は未だ諸の煩惱の習を斷せず、勢力少きが故に、深く入ること能はず。後の品中に譬喩を説くが如し。人の闇室に於て燈を然して、諸の器物を照せば、皆悉く分了し、更に大燈あれば、益復た明審なるが如し。則ち後燈の破る所の暗は前燈と合住し、前燈は闇と共に住すと雖も、而も亦能く物を照す。若し前燈に暗なくんば、則ち後燈の増益する所なきとを知る。諸佛菩薩の智慧も亦是の如し、菩薩の智慧は煩惱の習と合すと雖も、而も亦能く諸法實相を得ること、前燈も亦能く物を照すが如し。佛の智慧は、諸の煩惱の習を盡して、亦諸法の實相を得ると、後燈の倍復た明了なるが如し。

問うて曰く、云何が是れ諸法實相なるや。答へて曰く、衆人は各各諸法實相を説いて、自ら以て是と爲す。此の中の實相は破壊す可らず、常住にして異ならず、能く作る者無し。後の品中に佛須菩

【五】 第三問、諸の煩惱未だ洗却し盡さざる菩薩にして、如何ぞ能く諸法實相を得んや。  
 【六】 佛と菩薩との智慧は、入海の深淺、又は燃燈の前後の如し。  
 【七】 第四問、諸法實相とは何ぞや。

提に請りたまへるが如し。「若し菩薩、一切法を觀せば、常に非ず、無常に非ず、苦に非ず、樂に非ず、我に非ず、無我に非ず、有に非らず、無に非ざる等、亦是の觀を作さざれ」と。是を「菩薩の般若波羅蜜」多を行す」と名く。是義は一切の觀を捨て、一切の言語を滅し、諸の心行を離れ、本より已來不生不滅なること、涅槃の相の如く、一切諸法の相も亦是の如し。是を諸法實相と名く。般若波羅蜜「多」を讚するの偈に説くが如し。

「般若波羅蜜」多は、實法にして顛倒せず、念想觀已に除き、言語の法も亦滅す。

無量の衆罪を除き、清淨にして心常に一なり、(八)の如き尊妙の人は、

則ち能く般若を見ん。

虚空の染なきが如く、戲なく、文字なし、若し能く是の如く觀ずれば、

是れ即ち佛を見たてまつると爲す。

若し如法に觀すれば、佛・般若及び涅槃、是の三は則ち一相なり、其は實に異有ること無し。

諸佛及び菩薩は能く一切を利益し、般若は之が母となり、能く出生し養育す。

佛は衆生の父たり、般若は能く佛を生ず、是れ則ち一切衆生の續母たるなり。

般若は是れ一法なり、佛は種種の名を説き、諸の衆生の力に随つて、之が爲に異字を立てたまへり。

【八】 能く般若を見る、是を見佛となす。

【九】 般若は衆生の母にして、佛は衆生の父なり。

若し人般若を得れば、議論の心皆滅す。譬へば日の出づる時、朝露の一時に失するが如し。

般若の威徳は、能く二種の人を動かす、無智の者は恐怖し、有智の者は歡喜す。

若し人般若を得て、則ち般若の主と爲らば、般若の中にすら著せず、何に況んや、餘法に於てを

や。

般若は來る所なく、亦復去る所なし、智者は一切の處に、之を求むれども得ること能はず。

若し般若を見ざれば、是れ則ち爲に縛せらる。若し人般若を見れば、是れ亦縛せらると名く。

若し人般若を見れば、是れ則ち解脱を得、若し般若を見ざる、是も亦解脱を得。

是の事は希有なりと爲す、甚深にして大名あり。譬へば幻化の物は、見れども、而も見る可ら

るが如し。

諸佛及び菩薩、聲聞、辟支佛の解脱涅槃の道は、皆般若に従つて得らる。

言説は世俗の爲なり、一切を憐愍するが故に、假に名けて諸法と説く、説くと雖も、而も説か

ざるなり。

般若波羅蜜(多)は、譬へば大火炎の四邊取る可らざるが如く、取も(なく)亦不取も無し。

一切取り已つて捨つ、是を取る可らずと名く。取る可らずして而も取る、是れ即ち名けて取ると

爲す。

般若はんにやは壞相くわいさうなく、一切いっさいの言語ごんごを過すぎて、適ゆくとして依止まする所ところなし、誰たれか能よく其そのの徳とくを識しんせん。  
 般若はんにやは識しんじ匠じやうしと雖いへども、我われは今いま能よく識しんすることを得え、未いまだ死地しちを脱だつせずと雖いへども、則すなはち已いに出いづる  
 ことを得えと爲なす。』

初品しよほんの中なかの般若はんにやの相さうの義ぎを釋しやくす。

問とうて曰いはく、一〇いちじゆを以もつてか獨ひとりり般若はんにや波羅蜜はらみつた「多た」を稱しやうして摩訶まかと爲なし、五波羅蜜はらみつた「多た」を「摩訶まかと」稱しやうせざるや。答こたへて曰いはく、摩訶まかを大だいと言いひ、般若はんにやを慧えと言いひ、波羅蜜はらみつた「多た」を到たう彼岸ひがんと言いふ。其そのの能よく智慧ちゐの大海だいかいの彼岸ひがんに到いたり、一切いっさい智慧ちゐの邊へりに到いたり、其そのの極きやくを窮きゆう盡じんするを以もつての故ゆゑに到彼岸たうひがんと名なづく。一切いっさい世間せけんの中うち、十方じつぱう三世ぜの諸しよ佛ぶつは第一だいいちに大だいなり。次に、菩薩ぼさつ辟支佛びやくしぶつ聲聞しやうもんあり。是このの四大人じにんは皆みな般若波羅蜜はらみつた「多た」より生うず、是このの故ゆゑに名なづけて大だいと爲なす。

復次またつぎに、能よく衆生しゆじやうに大果報だいぐわくわほうを與あふること、無量無盡むりやうむじんにして常つねに變異へんいせず、所謂いはずあね涅槃ねはんなり。餘よの五波羅蜜はらみつた「多た」は爾しかること能あはず。布施ふせ等は、般若波羅蜜はんにや「多た」を離はなるれば、但ただ能よく世間せけんの果報ぐわくわほうを與あふ。是このの故ゆゑに大だいと名なづくることを得えす。

問とうて曰いはく、三さん何者なにものか是このれ智慧ちゐなる。答こたへて曰いはく、般若波羅蜜はんにや「多た」は一切いっさいの智慧ちゐを攝しやくす。何なにとなれ

【一〇】 第五問、何故に般若波羅蜜のみを摩訶、即ち大と稱して、他の五波羅蜜多を大と稱せざるや。

【一一】 第六問、智慧とは何ぞや。

ば菩薩は佛道を求むるに、應當に一切法を學し、一切の智慧、所謂聲聞・辟支佛・佛の智慧を得べければなり。是の智慧に (二三) 三種あり。學と無學と非學非無學となり。非學非無學智とは、(二四) 乾慧地・不淨・安那般那・欲界繫・四念處・燼法頂・法忍法・世間第一法等の如し。學智とは、書法智忍の慧乃至向阿羅漢の第九無礙道の中の金剛三昧の慧なり。無學智とは、阿羅漢の第九の解脫智なり。是より已後、一切の無學智は、盡智と無生智等との如し。辟支佛道を求むるの智慧も亦是の如し。

問うて曰く、(二四) 若し辟支佛道も亦是の如くならば、云何が聲聞と辟支佛とを分別するや。答へて曰く、(二五) 道は一種なりと雖も、而も智を用ふるに異あり。若し諸佛出でたまはざれば、佛法は已に滅す。是人は先世の因縁の故に智慧あり、他より聞かずして自ら智慧を以て道を得。(二六) 一國王の出でて園中に在つて遊戯せしが如し。清朝に林樹花草の蔚茂して甚だ愛樂す可きを見、王は食し已つて臥す。王の諸の夫人姪女は皆共に華を取り、林樹を毀折す。王は覺めじつて、林の毀壞せるを見て、自ら覺悟すらく、「一切世間の無常變壞も皆亦是の如し」と。思惟是に已つて無漏道の心生じ、諸の結使を斷じて辟支佛道を得、六神通を具し、即ち飛んで閑靜の林間に到る。是の如き等の因縁は、先世の福德願行の果報にして、今世に少因縁

【三】 三種の智慧を説く。

【四】 乾慧地とは、菩薩の階級なる十地の第一にして、智慧乾燥して、純熟せざる位なり。

【五】 第七問、辟支佛の道も亦是の如くならば、聲聞と辟支佛とを分別する理由如何。

【六】 二乗の道は一なりと雖も、智を用ゆるに異あり。

【七】 某の國王、林樹の破毀せられたるを見て、自ら無常を覺れる因縁。

を見て辟支佛の道を成ず。是の如きを異と爲す。

復次に 辟支佛に二種あり、一を獨覺と名け、二を因緣覺と名く。因緣覺は上に説くが如し。獨

覺とは、是の人は今世に道を成じ、自ら覺して他より聞かず、是を獨覺の辟支迦佛と名く。二六、獨覺の

辟支迦佛に二種あり。一には本是學人にして、

人中に在つて生ず。是の時に佛なく、佛法滅せ

り。是の須陀洹は已に七生を滿し、第八生に自

ら道を成ずることを得べからず。是の人を佛と

名けず、阿羅漢と名けず、名けて小辟支迦佛と

爲す。阿羅漢と異なること無く、或は舍利弗等

の大阿羅漢に如かざる者なり。二には大辟支佛

にして、二百劫の中に於て功德を作し、智慧を

増長し、三十二相の分を得、或は三十一相あ

り、或は三十相、或は二十九相、乃至一相あ

り。(二六) 九種の阿羅漢の中に於て、智慧利勝にして、諸の深法の中の總相、別相に於て能く入り、久し

く定を修習し、常に獨處を樂む。是の如きの相を名けて大辟支迦佛と爲す、是を以て異と爲す。佛道

【七】 二種の辟支佛を説く。

【八】 二種の獨覺の辟支迦佛を説く。

【九】 九種の阿羅漢は左の如し。

(一) 退法の羅漢、少縁に遇うて

所得を退失するをいふ。

(二) 思法の羅漢、所得の法ん思

惟して退失せざらんことを

恐るるをいふ。

(三) 護法の羅漢、能く進んで不

動の位地に至るをいふ。

(四) 不退法の羅漢、讀んで字の

如し。

(五) 不動法の羅漢、煩惱の爲に

退動せられず、不動なるを

いふ。俱舍論には之を不壞

法といふ。

(六) 住法の羅漢、所得の果に住

し過まず退かざるをいふ。

(七) 護法の羅漢、自ら證する所

に於て變樂を生じ、能く守

護するをいふ。

(八) 慧法の羅漢、但慧力に依て

煩惱障を離れたるをいふ。

(九) 俱法の羅漢、煩惱障も定障

も俱に離れて、滅盡定を得

たるをいふ。

を求むる者は、初發心より願を作し、「願くは我、佛と作つて衆生を度脱し、一切の佛法を得、六波羅蜜〔多〕を行じ、魔軍衆、及び諸の煩惱を破つて一切智を得、佛道を成じ、無餘涅槃に入らん」と、本願に隨つて行ず。是の中間より有ゆる智慧は、總相別相一切を盡く知る。是を佛道の智慧と名く。是の三種の智慧を盡く能く知り盡くして其の邊に到る、是の故に智慧の邊に到ると言ふ。

問うて曰く、(二〇)若し所説の如くんば、一切の智慧は盡く應に、若くは世間、若くは出世間に入るべし。何を以てか但三乘の智慧は盡く其の邊に到ると言つて、餘の智を説かざるや。答へて曰く、(二一)三乘は是れ實智慧にして、餘は皆これ虚妄なればなり。菩薩は知ると雖も、而も専ら行せず。摩梨山を除いては、一切梅檀木を出すと無きが如し。若くは餘處、或は好語あり、皆佛法の中より得れども、自ら佛法に非ず。初て聞けば好きに似たれども、久しければ則ち妙ならず。(二二)譬へば牛乳と驢乳とは、其色は同じと雖も、牛乳を攪むれば則ち酥と成り、驢乳を攪むれば則ち糞と成るが如し。佛法の語及び外道の語も殺さず、盜まらず、衆生を慈愍し、心を攝し、欲を離れ、空を觀ずといふは同じと雖も、然も外道の語は、初は妙なるに似たりと雖も、窮め盡せば、歸する所は則ち虚誑と爲る。(二三)一切の外道は皆

【二〇】 第八問、三乘の智慧のみ、能く盡く其邊に到ると言つて、餘の智を説かざるは何故なるか。

【二一】 三乘の智は實にして、餘の智は虚妄なること、摩梨山(マハラヤ)を除けば、梅檀木なきが如し。

【二二】 佛語と外道の語との同じからざること、驢乳と牛乳とは、其色同じと雖も、攪むるときは、則ち同じからざるが如し。

【二三】 外道は我見に著するが故に三學みな虚妄なり。

我見がげんに著ちやくす。若もし實じつに我があらば、應まさに二種にしゆに墮だすべし。若もしくは壞相むさうと、若もしくは不壞相ふむさうとなり。若もしし壞相むさうならば、應まさに牛皮ごうひの如ごとくなるべく、若もしし不壞相ふむさうならば、應まさに虚空こくうの如ごとくなるべし。此この二處にには、殺罪せつざいなく、不殺ふせつの福ふくなし。若もしし虚空こくうの如ごとくならば、雨露うろも潤うるほすこと能あたはず、風熱ふうねつも乾かはかすこと能あたはず、是れ則すなはち常相じやうさうに墮だす。若もしし常じやうならば、苦くも惱なやますこと能あたはず、樂らくも悦よろこばすこと能あたはざらん。若もしし苦樂くらくを受けずんば、福ふくを避さげ福ふくに就つくべからず。若もしし牛皮ごうひの如ごとくなれば、風雨ふううの爲ために壞やぶられ、則すなはち無常むじやうに墮だす。若もしし無常むじやうなれば則すなはち罪福ざいふくなし。外道げだうの語ご、若もしし實じつに是かみの如ごとくならば、何ぞ不殺ふせつは福ふくと爲なす、殺生せつじやうも罪つみと爲なること有あらんや。

問とうて曰いはく、二言外道げだうの戒福けいふくの失しつする所ところは是かみの如ごとしとせば、其その禪定智慧ぜんぢやうぢゑは復またた云何いふん。答こたへて曰いはく、外道げだうは我心がしんを以もつて禪ぜんを遂おふが故ゆゑに、愛見慢多あいけんまんたきが故ゆゑに、一切いっさいの法ほふを捨すてざるが故ゆゑに、實智慧じつぢゑあること無し。

問とうて曰いはく、三言汝なんぢは外道げだうは空くうを觀くわんすと言いへり。空くうを觀くわんすれば則すなはち一切いっさいの法ほふを捨すつ。云何いふんが一切いっさいの法ほふを捨すてざるが故ゆゑに、實智慧じつぢゑあること無しと言いふや。答こたへて曰いはく、三言外道げだうは空くうを觀くわんすと雖いへも、而しかも自ら我がの空くうなることを知しらず、觀くわん空くうの智慧ぢゑに愛著あいぢやくするが故ゆゑなり。

【一】第九問、外道の禪定智慧の過失を問ふ。  
 【二】第一問、外道に觀空あり、當に一切法を捨つべし、何ぞ一切法を捨てざるが故に實智慧なしと言ふや。  
 【三】外道は空を觀すれども我空を知らず。

問うて曰く、(二五) 外道には無想定あれば、心・心數法は都て滅せん。都て滅するが故に、相を取り、智慧に愛著するの咎あると無し。答へて曰く、(二六) 無想定の方は、強いて心をして滅せしむれども、實智慧の力に非ず。亦此の中に於て涅槃の想を生じ、是れ和合の、法と作るを知らざるなり、是を以ての故に顛倒の中に墮す。是の中に心暫らく滅すると雖も、因縁を得て還つて生ず。譬へば人の夢なくして睡る時は、心想行せざれども、寤むれば則ち還つて有るが如し。

問うて曰く、(二五) 無想定は其の失是の如し。更に非有想非無想定あり、是中には一切の妄想なく、亦強いて無想定を作して、想を滅するが如くならず。是中には智慧の力を以ての故に無想なり。答へて曰く、(二六) 是中には想あり。細微なるが故に覺らざるなり。若し無想ならば、佛弟子は復た何に縁つてか更に實智慧を求めん。佛法の中には、是の非有想非無想の中の識は、(二七) 四衆に依つて住す。是の四衆は因縁に屬するが故に無常なり、無常なるが故に苦なり、苦なるが故に空なり、空なるが故に無我なり、空にして無我なるが故に捨つべし。(二八) 汝等は智慧に愛著するが故に、涅槃を得

【二七】 第一一問、外道にも無想定ありて、心王心所すべて滅するが故に、取相愛著の咎ある理由なきにあらずや。

【二六】 外道の無想定は心想事成して生ずること、人の睡るときは心活動せざれども、寤るときは還つて有るが如し。

【二五】 第一二問、縱令外道の無想定には是の如き失ありとするも、彼等には亦非有想非無想定あり、されば其の中には一切の妄想なく、智慧を以ての故に無想なるべき道理にあらずや。

【二六】 非有想非無想の中に細想あり。

【二七】 四衆とは、色・受・想・行の四蘊のことならん。異本には此の四衆を三衆とせり。

【二八】 外道の觀智は、譬へば尺蠖の如し。

ざるなり。譬へば尺蠖の屈して後足を安じ、然る後前足を進むるが如し。所緣過ぎて無なれば、復た進處より還る。外道は初縁に依止して下地の欲を捨て、乃至、非有想非無想處に依つて無所有處を捨て、上に復た依る所なければ、則ち非有想非無想を捨つること能はず、更に依處なきを以て我を失はんことを恐懼し、無所得の中に墮することを畏るるが故なり。

復次に、言外道の經の中に、殺盜姪・妄語・飲酒を聽すこと有り。言く、天祠の爲に呪して殺せば罪なし。行道の爲の故に若し急難に遭うて、自ら身を全ふせんと欲して小人を殺すは罪なし。又急難あらば行道の爲の故に、金を除いて餘は盜み取ることを得、以て自ら全く濟ひ、後まきに此の殊罪を除くべし。師の婦と國王の夫人と善智誼の妻と童女とを除き、餘は急難に墮道すれば邪經するを得。師及び父母の爲め、牛の爲め、身の爲め、媒介の爲の故には妄語を聽す。寒熱にては石蜜酒を飲むを聽し、天祠の中にては、或は一盃二盃の酒を嘗むるを聽す。佛法の中には則ち然らず。一切衆生に於て、慈心もて等觀し、乃至蟻子をも亦命を尊はす、何に況んや人を殺すをや。一針一縷をも取らず、何に況んや多物の主なきをや。婦女には指を以ても觸れず、何に況んや人の妻女をや。戲笑にも妄語することを得ず、何に況んや故らに妄語を作さんや。一切の酒は一切の時に常に飲むを得ず、何に況んや寒熱天祠をや。汝等外道は佛法と懸に殊なると、天地の若くなる有り。汝等外道の法は是れ諸の煩惱を生ず

【三】 外道の經典中には、殺生・盜・邪・姪・妄・飲酒を聽せども佛法は決して聞かず

る處、佛法は則ち是れ諸の煩惱を滅する處なり、是を大に異なれりと爲す。

大海の若くなる有り、衆生の意に隨ふが故に種種に法を説き、或は有と説き、

と説き、或は無常と説き、或は苦と説き、或は樂と説き、或は我と説き、

或は無我と説き、我は勤めて三業を行すれば諸の善法を攝すと説き、或は

一切の諸法は無作の相なりと説く。是の如き等の種種の異説を無智は之を

聞いて、謂つて乖錯せりと爲し、智者は三種の法門に入り、一切の佛語を

觀じ、皆これ實法にして相違背せずとなす。何等か是れ三門なる、一には

蠅勒門、二には阿毗曇門、三には空門なり。

問うて曰く、云何が蠅勒と名け、云何が阿毗曇と名け、云何が空門と

名くるや。答へて曰く、蠅勒に三百二十萬言あり、佛の在世の時、大迦

旃延の造る所なり。佛の滅度の後、人壽轉た減じ、憶識の力少なくして廣

く誦すると能はず。諸の得道の人は、撰んで三十八萬四千言と爲す。若し

人蠅勒門に入つて論議すれば、則ち無窮なり。其の中に隨相門、對治門等

の種種の諸門あり。隨相門とは、佛の偈に説きたまへるが如し。

『諸の惡を作すこと莫く、諸の善を奉行して、自ら其の意を淨ふする、是れ諸佛の教なり。』

【三】 諸佛の法は無量にして

或は無と説き、或は常

【四】 佛の説は種種あり、愚者

は之を錯り、智者は三種の法

門に入りて、能く佛語の義を

【五】 第一三問、蠅勒門、阿毗曇

門、空門とは何ぞや。

【六】 蠅勒門を釋す。

【七】 隨相門を釋す。

【八】 此の偈は七佛通誡の偈と

いひ、佛典の中にも特に有

名なるものなり。左に此の原

文を附記すべし。

Sarapphasyākaraṇam  
Kūśāsyopasmpredān  
Svacitṭṭāridūnasaṃ  
Eka bhaddhāntuṃ saṃpa

是の中に心數法は盡く應に説くべし。今は但自ら其の意を淨ふすることを説けば、則ち諸の心數法を已に説くことを知る。何となれば同相同縁なるを以てなり。佛の四念處を説きたまふ如きは、是の中に四正勤、四如意足、五根、五力を離れず。何となれば四念處の中の四種の精進は、則ち是れ四正勤にして、四種の定は是れを四如意足と爲し、五種の善法は是を五根、五力と爲せばなり。佛は餘門を説かず、但、四念處を説きたまふと雖も、當に已に餘門を説きたまふことを知るべし。【四】佛の四諦の中に於て、或は一諦、或は二、或は三を説きたまふが如し。馬星比丘が舍利弗の爲に偈を説くが如し。

『諸法は縁より生ず、是法の縁及び盡、我が師大聖主は、是の義是の如しく説きたまへり。』

此の偈は但三諦を説く。當に知るべし。道諦は已に中に在ることを【一】は相離れざるが故なり。譬へば一人事を犯せば、家を擧げて、罪を受けるが如し。是の如き等を名けて隨相門と爲す。【二】對治門とは、佛の但四顛倒を説きたまへるが如し、常顛倒と樂顛倒と我顛倒と淨顛倒となり、是の中に

四念處を説かずと雖も、當に已に四念處の義あることを知るべし。譬へば藥を説けば、已に其の病を

【一】四正勤五根等は、四念處を離れざることを顯す。

【二】佛は四諦の中に於て、或は一、或は二、或は三を説き給ふ。

【三】馬星比丘が舍利弗の爲に説ける此偈は、予が印度の佛陀伽耶より講求する、舍利佛像の座臺の裏面に刻しある梵文の偈と同調同義なり。

Yo dharmā hant-pudhāt  
T-jāpī kamaṇī mānākaṇī by  
Avadāt teṣuṇ ca yo nirodhāh  
Evaṃ vāhi mahā-samāyāh  
(諸法は因より生ず、如來は是の因、及び彼法の滅因を説きたまへり。是れ大西門の説なり。)

【四】對治門を説く。

知り、病を説けば則ち其の薬を知るが如し。若し四念處を説けば、則ち已に四倒を説くことを知る。四倒は則ち是れ邪相なり。若し四倒を説けば、則ち已に諸結を説く。何となれば其の根本を説けば、則ち枝條皆得ることを知ればなり。佛の「一切世間に三毒あり」と説きたまふが如し。三毒を説けば、當に知るべし、已に三分八正道を説くとを、若し三毒を説けば、當に知るべし、已に一切の諸の煩惱の毒を説くことを。十五種の愛は是れ貪欲の毒、十五種の瞋は是れ瞋恚の毒、十五種の無明は是れ愚癡の毒なり。諸の邪見憍慢疑は無明に屬す。是の如きの一切の諸の使は皆三毒に入る。何を以てか之を滅せん。三分八正道なり。若し三分八正道を説けば、當に知るべし已に一切三十七品を説くことを。是の如き等の種種の相を名けて對治門

【四三】阿毗曇門を釋す。

と爲し、是等の諸法を名けて毘勒門と爲す。云何が阿毗曇門と名くるや。或は佛、自ら諸法の義を説きたまひ、或は佛、自ら諸法の名を説きたまひ、諸の弟子、種種に集述して其の義を解す。佛の説きたまへるが如くんば、若し比丘あり、諸の有爲法に於て、正しく憶念すると能はずして、世間第一法を得んと欲せば、是の處あること無し。若し比丘あり、諸の有爲法に於て、正しく憶念して世間第一法を得ば、斯れ是の處あること無し。比丘あり、諸の有爲法に於て、正しく憶念して世間第一法を得ずして、正位の中に入らんと欲せば、是の處あること無し。比丘あり、諸の有爲法に於て、正しく憶念して世間第一法を得ば、斯れ是の處あり。若し世間第一法を得て正位に入り、正位に入りて、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得ば、必ず是

の處あり。佛の直説の如くんば、世間第一の法は相の義を説かず。何界の繫なるか、何の因なるか、何の縁なるか、何の果報なるか、世間第一法より、種種聲聞の所行の法、乃至無餘涅槃、一一に相の義を分別する、是を阿毗曇門と名く。

【四】空門とは、生空と法空となり、頻婆娑羅王迎經の中に、佛、大王に告げたまへるが如し。「色生

する時は但空のみ生じ、色滅する時は但空のみ滅す。諸行生する時は但空のみ生じ、滅する時は但空のみ滅す。是中に吾我なく、人なく、神なく、人の今世より後世に至るなし、因縁の和合せる名字等の衆生を除く。凡夫、愚人は名を逐ふて實を求む」と。是の如き等の經の中に、佛は生空を説きたまへり。法空とは、佛、大空經の中に説きたまふが如し。「十二因縁は無

【四】空門を釋し、併せて廣く大小二空の相貌を明す。

聞乃至老死なり。若し人あり、是れは老死なりと言ひ。若くは誰か老死す

と言はば、皆これ邪見なり。生有取・受・愛・觸・六入名色・識・行・無明も亦是の如し。若し人あり、身は即ち是れ神と言ひ、若しは身は神と異なると言はば、是の二は異なれりと雖も、同く邪見と爲す

と。佛の言はく、「身は即ち是れ神なり」と言はば、是の如きは邪見にして我が弟子に非ず、身は神と異なりと云ふも、亦是れ邪見にして我が弟子に非ず」と。是經の中に、佛、法空を説きたまふが

如し。若し誰か老死すと説かば、當に知るべし、是は虚妄なるを。是を生空と名く。若し是れ老死すと説かば、當に知るべし、是は虚妄なることを、是を法空と名く。乃至無明も亦是の如し。

復次に、佛は梵網經の中に、六十二見を説きたまふ。若し人あり、神は常なり、世間も亦常なりと言はば、是を邪見と爲す。若し神は無常なり、世間は無常なりと言はば、是も亦邪見なり。神及び世間は、常にして亦無常なり。神及び世間は常にも非ず、亦非常にも非ずといふも、皆是れ邪見なり。是を以ての故に諸法は皆空なり、是を實と爲すことを知る。

問うて曰く、(四三) 若し神は常なりと言はば、應に是れ邪見なるべし。何となれば世間に。若し世間は常なりと言はば、亦應に是れ邪見なるべし。何となれば世間は實に皆無常なり。顛倒の故に有常と言ふ。若し神は無常なりと言はば、亦應に是れ邪見なるべし。何となれば神性は無なるが故に、無常と言ふべからず。若し世間は無常なりと言はば、應に是れは邪見なるべからず。何となれば一切の有爲法の性は、實に皆無常なればなり。答へて曰く、若し一切の法は實に皆無常ならば、佛は云何が、世間の無常を説く、是を邪見と名けたまはん。是の故に實に是れ無常に非ざることを知る可し。

問うて曰く、(四四) 佛は處處に有爲法の無常苦空無我を觀するは、人をして道を得せしむと説きたまふ。云何が無常は邪見に墮すと言ふや。答へて曰く、佛は處處に無常と説き、處處に不滅と説きたまふ。(四五) 摩訶男釋王の如きは、佛の所に來至し、佛に白して言さく、「是迦毗羅の人衆は般多なり。

【四三】 第一四問、世間は無常なりとの説を邪見なりといふ理由如何。  
【四四】 第一五問、有爲法の無常を説くは何故に邪見なるか。  
【四五】 摩訶男 (Mahānāma)

我われは或あるは奔車ほんしゃ逸馬いつま・狂象きやうじやう・闍人しやくにんに値あふ時とき、便すなはち念佛ねんぶつの心こころを失うしなふ。是この時とき自ら念ねんずらく、「我われ今いま若しし死しせば、當まさに何いづれの處ところにか生しやうすべき」と。佛ぶつ、摩訶男まかなんに告つげたまはく、「汝なんぢ、怖おそるる勿なれ、畏おそるる勿なれ、汝なんぢは是この時とき、惡趣あくしゆに生しやうせず、必かならずず善趣ぜんしゆに至いたらん。譬たとへば樹きの常つねに東あがしに向むかつて曲まがるを、若もしし斫きる者もの有あれば、必かならずず當まさに東あがしに倒たふるべきが如ごとし。善人ぜんにんも亦是またかくの如ごとく、若もしし身壞みやぶれ死しする時ときは、善心ぜんしんの意識いしきは長夜ちやうやに戒かを信しんじ、施せを聞きくの慧へいを心こころに熏くするを以もつての故ゆゑに、必かならずず利益りやくを得えて、上あつて天上てんじやうに生しやうす」と。若もしし一切いっさいの法ほふ、念ねん念ねんに生滅しやうめつして無常むじやうならば、佛ぶつは云何いんかが諸しよの功德くどく、心こころに熏くするが故ゆゑに、必かならずず上生じやうじやうするを得えると言たまはんや。是これを以もつての故ゆゑに、無常むじやうの性じやうに非あざることを知しる。

問とうて曰いはく、「若もしし無常むじやうは不實ふじつならば、佛ぶつは何なにを以もつてか無常むじやうと説ときたまふや。答こたへて曰いはく、佛ぶつは衆生しゆじやうの應おつずる所ところに隨したがつて説法せつぽふしたまふ。佛ぶつは常じやう顛てん倒たうを破はせんが故ゆゑに、無常むじやうなりと説ときたまひ、人ひとの後世ごせを知らず、信しんせざるを以もつての故ゆゑに、心しん去さつて後ご世せに、上あつて天上てんじやうに生しやうす。罪福ざいふくの因縁いんねんは、百千萬劫まんごふしつに失しつせずと説とき給たまふ。是これ對治たいぢ悉檀しつたんにして第一だいいち義ぎ悉檀しつたんに非あらず。諸法しよほふの實相じやくじやうは常じやうに非あらず、無常むじやうに非あらず。佛ぶつも亦處處またしよしよに諸法しよほふは空くうなりと説ときたまふ。諸法しよほふの空くうの中には亦無常またむじやうなし。是これを以もつての故ゆゑに世間せけんは無常むじやうなりといふは、是これ邪見じやけんなりと説とく。是この故ゆゑに名なけて法空ほふくうと爲なす。

【四〇】 難なんに値あつて念ねんを失うしする時ときは、縱令じゆんじやう死しすとも應おつに善處ぜんじよに生しすべきこと、曲木まがきを斫きるに曲方まがたに倒たるゝが如ごとし。

【四一】 第一だいいち六問りくもん、果ぐして然しからば佛ぶつは何故なにゆゑに無常むじやうと説ときたまひしや。

復次に、吾毗耶離の梵志は論力と名く。諸の梨昌等、大に其に寶物を顧ふて佛と與に論せしむ。其の顧を取り已つて、即ち其の夜を以て、五百の難を思撰し、明旦諸の梨昌と佛の所に至り、佛に問うて言く、「一の究竟道とや爲ん、衆多の究竟道とや爲ん」と。佛の言はく、「一の究竟道にして衆多なし」と。梵志の言く、「佛は一道と説くも、諸の外道の師は各各に究竟の道あり、是れ衆多にして一に非ずと爲す」と。佛の言はく、「是れ名は衆多なりと雖も、皆實道に非ず、何となれば一切皆邪見を以て著するが故に、究竟道と名けず」と。

佛、梵志に問ひたまはく、**【五】**鹿頭梵志は、道を得るや不や」と。答へて言く、「一切の得道の中に、是を第一と爲す」と。是時、長老鹿頭梵志比丘は、佛の後に在つて佛を扇げり。佛、梵志に問ひたまはく、「汝、是の比丘を識るや不や」と。梵志は之を識りて、慚愧し低頭す。是の時、佛は義品の偈を説きたまはく、

『各各究竟と謂つて而も各自に愛著し、各自自らを是とし、彼を非とす、是れ皆究竟に非ず。』

是の人、論叢に入つて義理を辯明する時、各各相是非し、勝負して憂喜を懷く。  
勝者は、僞坑に墮し、負者は憂獄に墜つ。是の故に智ある者は、此の二法に墮せず。  
論力よ、汝當に知るべし、我が諸の弟子の法は、虚なく、亦實なし。  
汝は何の求むる所をか欲

【五】 論力梵志、佛に一究竟の道、多究竟の道とを問ふ。  
【五】 鹿頭梵志の事に關しては、增一阿含經二〇を参照せよ。  
【五】 僞坑とは僞慢を穴に喩へたるなり。

するや。

汝、我が論を壊せんと欲するも、終に已に此の處なし。一切智には勝ち難し、適自ら毀壞するに足る。』

是の如き等の處處の聲聞經の中に、諸法の空を説きたまふ。

摩訶衍の空門は、一切の諸法の性は、常に自ら空にして、智慧方便を以て、故らに空を觀せず。

佛、須菩提の爲に説きたまふが如し。「色は色自ら空なり、受想行識は識

自ら空なり、十二入十八界十二因縁二十七品十力四無所畏十八不共法。

大慈大悲薩婆若乃至阿耨多羅三藐三菩提は、皆自ら空なり」と。

問うて曰く、若し一切諸法の性は、常に自ら空にして所有なくんば、

云何が邪見に墮せざらん。邪見は無罪無福にして、今世後世なしと名く。

〔今汝は何ぞ〕此と異なるると無けん。答へて曰く、無罪無福の人は今世なしとは言ず、但後世のみ無

し、草木の類の自ら生じ、自ら滅するが如く、或は人の生れ、或は人の殺すは、現在に止まり、更に

後世の生なしと言ふ、而も身の内外に有する所の自相に、皆空なりと觀することを知らざるなり。是

を以て異れりと爲す。

復次に、邪見の人は、多く衆惡を行じ、諸の善事を斷ず。空を觀するの人は、善法すら尙作すこと

【五】 第一七問、一切諸法は空にして所有なしといはゞ、自ら反つて邪見に墮するにあらすや。  
【六】 佛法の正空と邪見の空との差異。

を欲せず、何に況んや惡を作すことをや。

問うて曰く、垂邪見に二種あり。有は因を破り果を破り、有は果を破り因を破らず。汝が説く所の如きは、果を破つて因を破らず。果を破り因を破るとは、因なく縁なく、罪なく福なしと言ふ。則ち是れ因を破するものにして、今世後世罪福の報なしと云ふ、是れ則ち果を破するものなり。空を觀するの人は皆空なりと言ふ、則ち罪福も因果も皆無なり。此と何等の異なること有りや。答へて曰く、邪見の人は諸法に於て斷滅して空ならしめ、摩訶衍の人は諸法は眞空にして破れず壞せざることを知る。

問うて曰く、美の邪見に三種あり。一には罪福の報を破して罪福を破せず、因縁の果報を破して因縁を破せず、後世を破して今世を破せず。二には罪福の報を破し亦罪福を破し、因縁の果報を破して亦因縁を破し、後世を破して、亦今世を破し、一切の法を破せず。三には一切の法を破して皆所有なからしむ。空を觀する人も、亦眞空にして所有なしと言ふ。第三の邪見人と何等の異なること有りや。答へて曰く、邪見は諸法を破して空ならしむ。空を觀するの人は、諸法の眞空にして、破れず壞せざることを知る。復次に、邪見の人は、諸法皆空にして所有なしと言つて、諸法の空相を取つて戲論すれども、空を觀するの人は諸法の空を知つて、相を取らず、戲論せざるなり。復次に、邪見の人は、口に一切は空なりと

【丑】 第一八問、破因破果の二邪見と觀空の人の見解と何の異なる所ありや。  
【美】 第一九問、三種の邪見と觀空の人の見解と何の異なる所ありや。

説くと雖も、然も愛處に於て愛を生じ、瞋處に瞋を生じ、慢處に慢を生じ、癡處に癡を生じ、自ら其身を誑はす。(五七)佛弟子の如きは、實に空を知つて心動せず、一切の結使の生ずる處に復た生ぜざるなり。譬へば虚空は煙火も染むること能はず、大雨も濕すこと能はざるが如し。是の如く空を觀すれば、種種の煩惱も復た其心に著せず。

復次に、邪見の人は所有なしと言ふも、愛の因縁より出でず。真空の名は愛の因縁より生ず。是を異れりと爲す。四無量心諸の清淨の法は所縁實ならざるを以ての故に、猶尙真空の智慧と等しからず、何に況んや邪見をや。

復次に、是の見を名けて邪見と爲し、真空の見を名けて正見と爲す。邪見を行する人は、今世には名けて弊惡の人と爲し、後世には當に地獄に入るべし。真空の智慧を行する人は、今世には譽を致し、後世には佛と作るを得。譬へば(五八)水火の異なるが如く、亦甘露毒藥天食(五九)須陀を以て

臭糞に比するが如し。復次に、真空の中には(六〇)空三昧あり。邪見の空は、空ありと雖も而も空三昧なし。復次に、真空を觀する人は、先づ無量の布施持戒禪定あり。其の心柔順にして諸の結使

癡處に癡を生じ、自ら其

【七〇】 觀空の人は其の心を種種の煩惱に著せざること、虚空は煙火も染むること能はず、大雨も濕はずこと不能はざるが如し。

【六一】 佛法の正空と邪見の空とは、水と火との異なるが如く、又甘露と毒藥と天食の須陀を以て臭糞に比するが如し。

【六二】 須陀(スリダ)は花蜜の類なり。

【六三】 空三昧、阿羅漢の先づ無漏智を以て、諸法の空無我を觀するを空三昧と名け、更に有漏を以て前の空智を觀じて空相をなし、之を厭捨するを空三昧といふ。

薄く、然して後眞空を得。邪見の中には此の事なく、唯憶想分別の邪心を以て空を取らんと欲す。(六一)

譬へば田舎人の如きは初め鹽を識らず、人の鹽を以て種種の肉菜の中に著けて食するを見て、問うて言く、「何を以ての故に爾るや」と。語つて言く、「此の鹽は能く諸物の味をして美ならしむるが故に」と。此の人便ち念すらく、「此の鹽は能く諸物をして美ならしめば、自味必ず多からん」と。便ち空しく鹽を抄つて、口に満てて之を食するに、鹹苦にして口を傷む。問うて言く、「汝は何を以てか、鹽は能く美を作すと云ふや」と。人の言く、「癡人なり。此は當に多少を籌量して、之に和すれば美ならしむ、云何が純ら鹽を食するや」と。無智の人は、空解脱門を聞いて、諸の功德を行せず。但空を得んと欲す。是れ邪見にして、諸の善根を斷すと爲す。是の如き等の義を名けて空門と爲す。(三三)

若し人此の三門に入れば、則ち佛法の義を知つて相違背せず。能く是の事を知るは、即ち是れ般若波羅蜜多の力なり。

一切の法に於て罣礙する所なし。若し般若波羅蜜多の法を得ずして、阿毗曇門に入れば則ち有の中に墮し、若し空門に入れば則ち無の中に墮し、若し毘勒門に入れば則ち有無の中に墮す。

復次に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を行じて、諸法の一相を知ると雖も、亦能く一切の法の種種の相を知る。諸法の種種の相を知ると雖も、亦能く一切の法の一相を知る。菩薩の是の如きの智慧

【六一】 空を聞いて善を修せざるは、鹽を食ふて口を傷くるが如し。

【六三】 阿毗曇門に入れば有の中に墮し、空門に入れば無の中に墮し、毘勒門に入れば有無の中に墮す。されど人若し此の三門に入れば矛盾に陥ることなし。

を名けて、般若波羅蜜(多)と爲す。

問うて曰く、(三)菩薩摩訶薩は、一切法の種種の相を知り、云何が一切法の一相を知るや。答へて曰く、菩薩は諸法の相を觀す、所謂有相なり、是の有に因つて諸法の中に有心生ず。是の如き等は一切有なり。

問うて曰く、(四)無法の中に、云何有心生ずるや。答へて曰く、若し是の事無しと言はゞ、即ち是れ有法なり。復次に、菩薩は一切法の一相を觀す、所謂無相なり。牛の中に羊相なく、羊の中に牛相なきが如し。是の如く諸法の中には、各各他相なし。先に有に因るが故に、有心生ずと言ふが如きは、是の法は有に異なる、異なるが故に應に無なるべし。若し有法是れ牛ならば、羊も亦應に是れ牛なるべし。何となれば、有法は異らざればなり。若し異れば則ち無なり、是の如き等の一切は皆無なり。

復次に、菩薩は一切の法は一なりと觀す。是一法に因つて、諸法の中に一心生ず。諸法は各各一相あり、一を合衆するが故に名けて二と爲し、三と爲す。一を實と爲し、二三を虚と爲す。復次に、菩薩は、諸法は因る所あるが故に有なりと觀す。人身の無常なるが如し、何となれば生滅の相なればなり。一切の法は皆是の如く、因る所あるが故に有なり。復次に、一切の法は因る所なきが故に有

【三】 第二〇問、菩薩摩訶薩は如何にして、一切の種種の相を知り、又、一切法の一相を知るや。

【四】 第二一問、無法の中に有心生ずる理由如何。

り。人身の無常なるが如し、生滅すればなり。生滅に因るが故に無常を知る。此の因には復た應に因あるべし。是の如くんば則ち無窮なり。若し無窮なれば則ち因なし。是の因に更に因なくして、是れ無常なれば、因も亦因に非ず。是の如き等は一切無因なり。

復次に、菩薩は一切法を有相なりと觀ず。法として無相なる者あることなし。地は堅重の相、水は冷濕の相、火は熱照の相、風は輕動の相、虚空は容受の相、分別覺知は是れ識相たり。此にあり、彼にある、是を方相と爲し、久しきあり、近きある、是を時相と爲す。濁惡の心は衆生を惱ます。是を罪相と爲し、淨善の心は衆生を慰む、是を福相と爲す。諸法に著するは是を縛相と爲し、諸法に著せざるは是を解脫相と爲す。現前に一切法の無礙なることを知るは是を佛相と爲す。是の如き等の一切に各各相あり。復次に、菩薩は一切の法は皆無相と觀ず。是の諸相は、因縁の和合より生じ、自性なきが故に無なり。地の色香味觸の如きは、四法和合するが故に地と名け、但色の故に地と名けず。亦但香、但味、但觸の故に名けて地と爲さず。何となれば若し但色是れ地ならば、餘の三は則ち是れ地なるべからず。地は即ち香味觸なし。香味觸も亦是の如し。復次に、是の四法を云何が一法と爲ん。一法を云何が四法と爲ん。是を以ての故に、四を以て地と爲すことを得ず、亦四を離れて地と爲すことを得ず。

問うて曰く、壹我は四を以て地と爲さず、但四法に因るが故に地法生ず、此の地は四法の中に在つ

【六五】 第二二問、色香味觸の四法に因るが故に地あらば、此の地は四法の中に住するや如何。

て住するや。答へて曰く、若し四法より地を生ぜば、地と四法と異なれり。父母の子を生じて、子は則ち父母と異なるが如し。若し爾れば、今眼に色を見、鼻に香を知り、舌に味を知り、身に觸を知る。地若し此の四法に異ならば、應に更に異根異識あつて知るべし。若し更に異根異識の知る無くんば、則ち地あることなげん。

問うて曰く、突り若し上説の地相に失あらば、應に阿毗曇の如く、地相を説くべし。地を四大所造の色と名け、但地の種は此れ堅相にして、地は是可見の色なりと。答へて曰く、若し地は但是れ色ならば、先に已に失を説けり。又地を堅相と爲さば、但眼に色を見るに、水中の月、鏡中の像、草木の影の如きは則ち堅相なし。堅相は身根に觸れて知るが故なり。

復次に、若し眼に見るの色ならば、是の地の堅相、是の地の種も、眼に見るの色なるべし。亦是の水火濕熱の相は、是れ水火の種なるべし。若し爾らば風と風の種とを、亦應に分別すべし、而も分別せず。説くが如きは、何等か是れ風と風の種、何等か風の種と風なる、若し是れ一物ならば、二種と作すべからず。答ふ、若し是れ異ならずんば、地及び地の種は異なるべからず。

問うて曰く、是の四大は各各相離れず。地中に四種あり、水火風の各にも四種あり、但地中には

【六六】 第二三問、若し上に説ける地の特徵に失あらば、阿毗曇門に於けるが如く説いて可なりや如何。

【六七】 第二四問、四大は各相分離すること能はず、即ち地中には、水火風の三要素をも含む、唯その多きに隨つて名を立つるにあらずや。

地多きが故に、地を以て名と爲す。水火風も亦た爾なり。答へて曰く、然らず。何となれば若し火中に四大あらば、應に都て是れ熱すべし、そは熱せざるの火なきを以てなり。若し三大、火中に在つて熱せざれば、則ち名けて火と爲さず。若し熱すれば則ち自性を捨て、皆名けて火と爲す。若し細の故に知る可らずと謂はば、則ち無と異なること無し。若し麤の得べき有らば、則ち細あることを知る。若し麤なければ亦細なし。是の如き種種の因縁によりて、地相は不可得なり。若し地相不可得ならば、一切の法相も亦不可得なり。是の故に一切の法は皆一相なり。

問うて曰く、(六) 無相と言ふべからず、何となれば諸法に於て無相ならば即ち是れ相なり。若し無相なければ、則ち一切の法相を破す可らず。何となれば無相なきを以てなり。若し是れ無相ならば、則ち一切法は無相なりと言ふべからず。答へて曰く、無相を以て諸法の相を破す。若し無相の相あらば、則ち諸法の相中に墮す。若し諸法の相中に入らずんば、則ち無相を難すべからず、皆諸法の相を破するも亦自ら相を滅す。譬へば火木を前むるに、諸の薪を然し已つて、亦復た自ら然るが如し。是の故に聖人は無相を行す。(六)

復次に、菩薩は、一切の法は不合不散・無色・無形・無對・無示・無説・一相なりと觀ず。「これ」所謂無相

【六】 第二五問、無相と言ふも亦た非なるにあらずや。  
【六九】 無相三昧。是れ四諦中の滅諦の「滅・淨・妙・離」の行相と相應する三昧なり。涅槃は色・聲・香・味・觸の五法と、男女の二相と、及び三の有爲相との十相を離るれば無相と名け、無相を緣するが故に無相三昧と名く。

なり。是の如く諸法は等しく一相ならば、云何が種種の相を觀じて、一切法を二法の中に攝入せん。所謂名と色、色と無色、可見と不可見、有對と無對、有漏と無漏、有爲と無爲等、二百二の法門は、千難品の中に説くが如し。

復次に、(一) 二法あり、忍辱と柔和となり。又二法あり、親敬と供養となり。二施あり、財施と法施となり。二力あり、慧分別力と修道力となり。二具足あり、戒具足と正見具足となり。二相あり、質直相と柔軟相となり。二法あり、定と智となり。二法あり、明と解脫となり。二法あり、世間法と第一義法となり。二法あり、念と巧慧となり。二諦あり、世諦と第一義諦となり。二解脫あり、(一) 待時解脫と不壞心解脫となり。二種の涅槃あり、有餘涅槃と無餘涅槃となり。二究竟あり、畢竟と願究竟となり。二見あり、知見と斷見となり。二具足あり、義具足と語具足となり。二法あり、少欲と知足となり。二法あり、易養と易滿となり。二法あり、法隨と法行となり。二智あり、(一) 盡智と(二) 無生智となり。是の如き等の無量の二法門あり。

復次に、(一) 三道を知る、見道と修道と無學道となり。三性あり、斷性と離性と滅性となり。三修あり

- 【七〇】 二法の名數、菩薩は二三四五等の無量の法門を觀知すを旨を明す。
- 【七一】 待時解脫とは鈍根の人の衣食住師友等の事緣具足するを待つて解脫するをいふ。
- 【七二】 盡智とは、煩惱を斷盡すること了りたる時に生ずる自信の智をいふ。
- 【七三】 無生智、是れ利根の阿羅漢のみに限り有する智なり。既に知斷證修の事畢れば、更に知斷證修の事なきを無生といふ。此の無生を徹底自覺して、我再び知斷證修するとなしと知るを無生智といふ。
- 【七四】 三法の名數。

り、戒修と定修と慧修となり。三菩提あり、佛菩提と辟支迦佛菩提と聲聞菩提となり。三乘あり、佛乘と辟支迦佛乘と聲聞乘となり。三歸依あり、佛と法と僧となり。三住あり、梵住と天住と聖住となり。三増上あり、自増上と他増上と法増上となり。諸佛の三不護あり、身業不護と口業不護と意業不護となり。三福處あり、施と戒と善心となり。三器械あり、開器械と離欲器械と慧器械となり。三輪あり、變化輪と示他心輪と教化輪となり。三解脫門あり、空解脫門と無相解脫門と無作解脫門となり、是の如き等の無量の三法門あり。

〔五〕 復た四法を知る、四念處、四正勤、四如意足、四聖諦、四聖種、四

沙門果、四知、四信、四道、四攝法、四依、四通達善根、四道、四天人輪、

四堅法、四無所畏、四無量心なり。是の如き等の無量の四法門あり。

〔六〕 復た五無學衆、五出性、五解脫處、五根、五力、五大施、五智、五

阿那含、五淨居天處、五治道、五智三昧、五聖分支三昧、五如法語道、是の如き等の無量の五法門あることを知る。

〔七〕 復た六捨法、六愛敬法、六神通、六種阿羅漢、六地見諦道、六隨順念、六三昧、六

定、六波羅蜜、是の如き等の無量の六法門あることを知る。

〔八〕 復た七覺意、七財、七依止、七想定、七妙法、七知、七善人去處、七淨、七財福、七非財福、七

助定法、是の如き等の無量の七法門あることを知る。

〔七五〕 四法の名數。

〔七六〕 五法の名數。

〔七七〕 六法の名數。

〔七八〕 七法の名數。

復た八聖道分、八背捨、八勝處、八大人念、八種精進、八丈夫、八阿羅漢力、是の如き等の無量の八法門あることを知る。

復た九次第定、九名色等滅、九無漏智、九無漏地、九地思惟道、是の如き等の無量の九法門あることを知る。

復た十無學法、十想、十智、十一切入、十善大地佛、十力、是の如き等の無量の十法門あることを知る。

復た十一助聖道の法を知り、復た十二因縁の法を知る。復た十三出法、十四變化心、十五心見諦道、十六安那般那行、十七聖行、十八不共法、

十九離地を知る。思惟道の中に、一百六十二道あり、思惟道は能く煩惱の賊を破る。百七十八の沙門果あり。八十九は有爲果にして、八十九は無

爲果なり。是の如き等の種種無量の異相の法の、生滅、増減、得失、垢淨、悉く能く之を知る。菩薩摩訶薩は、是の諸法を知り已つて、能く諸法をして自性空に入らしめ、而も諸法に於て著する所な

く、聲聞、辟支佛地を過ぎて菩薩位の中に入り、菩薩位の中に入り已つて、大悲憐愍を以ての故に、方便力を以て諸法の種種の名字を分別し、衆生を度して三乗を得せしむ。譬へば工巧の人の藥力を以

ての故に、能く銀を變じて金と爲し、金を變じて銀と爲らしむるが如し。

【七九】 八法の名數。  
 【八〇】 九法の名數。  
 【八一】 十法の名數。  
 【八二】 菩薩の方便力は、工巧の人の藥力を以て、銀を變じて金と爲すが如きものなる旨を明す。

問うて曰く、**〔三〕** 若し諸法の性真空ならば、云何ぞ諸法の種種の名字を分別するや。**〔又〕** 何を以てか但真空の性のみを説かざるや。答へて曰く、**〔四〕** 菩薩摩訶薩は、空は是れ可得、可著と説かず。若し可得、可著ならば、諸法の種種の異相を説くべからず。不可得の空なれば、聖礙する所なし。若し聖礙あらば、是を可得と爲す、不可得の空に非ず。若し菩薩摩訶薩は、不可得の空を知つて、還つて能く諸法を分別し、憐愍して衆生を度脱す、是を般若波羅蜜「多」の力と爲す。要を取つて之を言へば、諸法の實相は、是れ般若波羅蜜「多」なり。

問うて曰く、**〔五〕** 一切の世俗の經書、及び九十六種の出家の經の中に、皆諸法實相ありと説く。又、聲聞法の三藏の中にも亦諸法實相あり。何を以てか名けて般若波羅蜜「多」と爲さず、而も此の經の中の諸法實相のみを、獨り般若波羅蜜「多」と名くるや。答へて曰く、世俗の經書の中には、國を安んじ、家を全うし、身命の壽樂の爲の故なれば**〔六〕** 實に非ず。外道の出家は邪見の法の中に墮し、心愛著するが故に、是も亦實に非ず、聲聞法の中に四諦ありと雖も、無常、苦、空、無我を以て、諸法の實相を觀じ、智慧具足せず、利ならず、一切衆生の爲にすると能はず、佛法を得んが爲にせざるを以ての故に、實智慧ありと雖も、般若波羅蜜

**〔三〕** 第二六問、若し諸法真空ならば、諸法の種種の名字は如何にして之を分別するか。  
**〔四〕** 菩薩は不可得の空を知るが故に、能く諸法を説くことを明す。  
**〔五〕** 第二七問、世俗の經書、九十六種の外道の經、及び小乘經典中の諸法實相を般若波羅蜜多と名けずして、獨り此の經の諸法實相のみを般若波羅蜜多と名くる理由如何。  
**〔六〕** 黨義國家等の法は佛教にては、第二義門として取扱ひ、第一義門の要道にあらざるが故に實に非ずといふ。

【多】と名けず。説くが如くんば、佛は諸の三昧に入出したまへども、舍利弗等は乃ち其名だも聞かず、何に泥んや能く知るとをや。何となれば、諸の阿羅漢支佛は、初發心の時、大願なく、大慈大悲なく、一切の諸の功德を求めず、一切三世十方の佛を供養したてまつらず、審諦に諸法の實相を求め知らず、但老病の苦を脱せんを求めんと欲す。諸の菩薩は初發心より弘く大に誓願し、大慈悲あつて一切の諸の功德を求め、一切の三世十方の諸佛を供養し、大智智あつて諸法の實相を求め、種種の諸觀を除く。謂ゆる淨觀と不淨觀と、常觀と無常觀と、樂觀と苦觀と、空觀と實觀と、我觀と無我觀となり。是の如き等の妄見、心力の諸觀を捨て、但外縁の中の實相を觀ず。淨に非ず不淨に非ず、常に非ず非常に非ず、樂に非ず苦に非ず、空に非ず實に非ず、我に非ず無我に非ず、是の如き等の諸觀は不著不得なり。世俗の法の故に、第一實義・周遍・清淨・不破・不壞に非ず。諸の聖人の行處、是を般若波羅蜜【多】と名く。

問うて曰く、已に般若の體相は是れ無相無得の法なることを知れり。云何を能く是の法を得るや。

答へて曰く、佛、方便を以て法を説きたまふに、行者、所説の如く行すれば則ち得るなり。譬へば絶崖峻道は、假に梯して能く上るが如く、又深水は船に因つて度ることを得るが如く、初發心の菩薩は、若くは佛に従つて聞き、若くは弟子に従つて聞き、若くは經の中に於て聞けり。「一切の法は、

【七】 第二八問、如何にして無相無得の般若の體相を捕捉すべきか。

【八】 般若の法は無相無得なりと雖も佛敎の梯船に依つて之を得ることを明す。

畢竟空にして、決定せる性の、取る可く、著す可き有ること無し。第一の實法は諸の戲論を滅し、涅槃の相は是れ最も安隱なり、我は一切衆生を度脱せんと欲す。云何が獨り涅槃を取らんや。我は今福德智慧神通力を未だ具足せざるが故に、衆生を引導すると能はず、當に是の諸の因縁を具足すべし」と。布施等の五波羅蜜を行じ、財施の因縁の故に大富を得、法施の因縁の故に智慧を得。能く此二施を以て、貧窮の衆生を引導して、三乘道に入らしむ。持戒の因縁を以ての故に、人天の尊貴に生れ、自ら三惡道を脱し、亦衆生をして三惡道を免れしむ。忍辱の因縁を以ての故に、瞋恚の毒を障へ、身色端正威徳第一なることを得、見る者歡喜し敬信し心伏す。況んや復た說法するをや。精進の因縁を以ての故に、能く今世後世の福徳、道法の懈怠を破して、金剛身不動心を得。是身心を以て凡夫の憍慢を破り、涅槃を得せしむ。禪定の因縁を以ての故に散亂の心を破し、五欲の罪を離れ、樂んで能く衆生の爲に離欲の法を説く。禪は是れ般若波羅蜜〔多〕の依止處なり。是の禪は、般若波羅蜜〔多〕に依つて自然に生ず。經の中に「比丘は、一心に定を専らにして、能く諸法の實相を觀す」と説くが如し。

復次に、欲界の中には、多く慳貪の罪業、諸の善門を閉づることを知つて、檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行する時、是の二事を破して、諸の善門を開き、常に開かしめんと欲するが故に十善道を行す。尸羅波羅蜜〔多〕は、未だ禪定の智慧を得ず、未だ欲を離れざるが故に、尸羅波羅蜜〔多〕を破る。是を以て

【六七】 菩薩は具に六度を行じて衆生を度するの相を明す。

の故に忍辱を行じ、上の三事の能く福門を開くことを知り、又是の福德の果報は無常にして、天人の樂を受け、還た復た苦に墮することを知り、是の無常の福德を厭ふが故に、實相の般若波羅蜜〔多〕を求む。是れ云何が當に得べき。必ず一心を以て乃ち當に得べし。龍王の寶珠を貫くに、一心に觀察して能く龍に觸れざれば、則ち價直閣浮提なるが如し。一心に禪定すれば、五欲五蓋を却却す。心の樂を得んと欲せば、大に精進を用ゆ。是故に忍辱に次いで、精進波羅蜜〔多〕を説く。經の中に説くが如きは、行者は端身直坐して、念を繋けて前に在り、專精にして定を求め、正しく肌骨をして枯朽せしめて、終に懈退せず、是故に精進して禪を修す。若し財あつて施すは、難しと爲すに足らず。惡道に墮することを畏れ、好名を失することを恐れ、持戒忍辱も亦難しと爲さず。是を以ての故に上の三度の中に精進を説かず。今は般若波羅蜜〔多〕の實相の爲に、心より定を求む。是の事は難きが故に、應に須らく精進すべし。是の如く行すれば能く般若波羅蜜〔多〕を得るなり。

問うて曰く、要す五波羅蜜〔多〕を行じて、然る後に般若波羅蜜〔多〕を得るや、亦は一二の波羅蜜〔多〕を行ずると有つて般若を得るや。答へて曰く、諸の波羅蜜〔多〕に二種あり。一には一波羅蜜〔多〕の中に、相應し隨行して諸の波羅蜜〔多〕を具し、二には時に隨つて別に波羅蜜〔多〕を行じ、多

【九〇】 第二九問、智度を得るには要す他の五度を行するの必要ありや。又は一二を行すれば是れりとするや如何。

【九一】 諸の波羅蜜多を行するに二種あることを明す。

き者名を受く。譬へば四大共に合して相離れずし雖も、多き者を以て名と爲すが如し。相應し隨行する者は、一波羅蜜「多」の中に五波羅蜜「多」を具す。是は五波羅蜜「多」を離れずして、般若波羅蜜「多」を得。時に隨つて名を得る者は、或は一に因り、二に因つて、般若波羅蜜「多」を得。若し人阿耨多羅三藐三菩提の心を發して布施せんに、是の時布施の相を求めば、一ならず異ならず、常に非ず無常に非ず、有に非ず無に非ざる等なり、彼の布施の中に、布施に因つて實相の解を説くが如く、一切の法も亦是の如し。是を布施に因つて、般若波羅蜜「多」を得と名く。或は戒を持ち、衆生を惱まさず、心に悔あること無きあり。若し相を取り著を生ぜば、則ち誹競を起す。是の人は先に衆生を瞋らずと雖も、法に於て憎愛の心あるが故に而も衆生を瞋る。是の故に若し衆生を惱まさざらんと欲せば、當に諸法の平等を行すべし。若し是は罪あり、是は罪なしと分別するは、則ち尸羅波羅蜜「多」を行するに非ず。何となれば罪を憎み、不罪を愛すれば、心則ち自ら高うして、還つて衆生を惱ます道中に墮すればなり。是の故に菩薩は罪者と不罪者とを觀じて心に憎愛なし。是の如く觀する者は、是を但尸羅波羅蜜「多」を行じて、般若波羅蜜「多」を得と爲す。菩薩は是の念を作さく、「若し法忍を得ざれば、則ち常に忍ぶこと能はず」と。一切衆生は、未だ逼迫して能く忍ぶことあるにあらず。苦來つて己に切なれば、則ち忍ぶこと能はず。譬へば囚はれて杖楚を畏れ、而して死苦に就くが如し。是の因縁を以ての故に、當に法忍を生ずべし。打つ者、罵る者あること無く、亦受くる者もなし。但先世の

顛倒せる果報、因縁に從るが故に、名けて受くと爲す。是の時是の忍と事忍とを分別せず。法忍とは、深く畢竟空に入るが故に是を法忍と名く。是の法忍を得れば、常に復た衆生を愼惱せず。法忍に相應するの慧は、是れ般若波羅蜜(多)なり。精進して常に一切の善法の中に在つて、能く一切の善法を成就す。若し智慧もて諸法を籌量し分別し法性に通達すれば、是の時精進は智慧を助成す。又精進の實相は、身心を離れ、如實に不動なりと知る。是の如きの精進は能く般若波羅蜜(多)を生ず。餘の精進は幻の如く夢の如く、虚誑にして實に非ず、是の故に説かず。若し深く心に念を攝すれば、能く如實に諸法の實相を見る。諸法の實相とは、見聞念知を以て能く得べからず。何となれば六情六塵は、皆是れ虚誑の因縁果報にして、是の中に知る所見る所は、皆亦虚誑なればなり。是の虚誑の知は都て信ず可らず、信ず可き所の者は、唯諸佛の阿僧祇劫に於て得る所の實相の智慧のみあり。是の智慧を以て、禪定に依つて一心に諸法の實相を觀す。是を禪定の中より般若波羅蜜(多)を生ずと名く。或は五波羅蜜(多)を離れ、但聞いて讀誦し、思惟し籌量して諸法の實相に通達する有り。是の方便智の中より般若波羅蜜(多)を生ず。或は二より、或は三四波羅蜜(多)より般若波羅蜜(多)を生ず。

一誦を説くを聞いて道果を成じ、或は二三四誦を聞いて而して道果を得るが如く、人あり、苦諦に於て多く惑ふが故に、爲に苦諦を説くに道を得。餘の三誦も亦是の

【九二】 五度を行ぜず、たゞ聞讀思惟して、般若に通達するものあることを明す。

【九三】 一誦を説くを聞き、或は二三四誦を説くを聞いて、道果を得るものあることを明す。

如し。或は都て四諦に惑ふこと有るが故に、爲に四諦を説くに道を得。佛の比丘に語りたまふが如し。「汝若し能く貪欲を斷せば、我汝を保つて阿那含道を得せしめん。若し貪欲を斷せば、當に悲癡も亦斷することを知るべし」と。六波羅蜜〔多〕の中も亦是の如く、多く慳貪を破するが爲の故に、布施の法を説くも、當に餘惡も亦破することを知るべし。雜惡を破するが爲の故に、具に爲に六を説く。是の故に或は一に行じ、合して行じ、普ねく一切の人の爲の故に、六波羅蜜〔多〕を説く。一人の爲に非ず。

復次に、若し菩薩、一切法を行せざれば、一切法を得ざるが故に、般若波羅蜜〔多〕を得。何となれば諸行は皆虛妄にして實ならざるを以てなり。

或は近く過あり、或は遠く過あり、不善法の如きは近く過罪あり。善法は久しうして後變異ある時、著者は能く憂苦を生ず、是れ遠く過罪あるなり。譬へば美食惡食の俱に裸毒あるが如し。惡食を食すれば即時に悦ばず、美食を食すれば即時に甘悅なれども、久しうして後俱に命を奪ふ。故に二つながら食すべからず。善惡の諸行も亦是の如し。

問うて曰く、(五)若し爾れば佛は何を以てか、三行〔即ち〕梵行・天行・聖行を説きたまふや。答へて曰く、(六)無行を行するが故に名けて聖行と爲す。何となれば一切聖行の中に、三解脱門を離れざる

【五】 惡著の者は近く過あり、善著の者は遠く過あり、美食惡食の裸毒は、遲速ありと雖も、俱に命を失するが如き旨を明す。

【六】 第三〇問、佛の三行を説き給へる理由如何。

【九六】 梵行・天行・聖行ともに無著の心を以て行すべきを明す。

が故なり。梵行天行は中に衆生の相を取るに因るが故に生ず。行する時は過なしと雖も、後皆失あり。又、即今實を求むれども、皆是れ虚妄なり。若し賢聖は、無著の心を以て、此の二行を行すれば則ち咎なし。若し能く是の如く、無行の法を行すれば、皆所得なし。顛倒虚妄の煩惱の、畢竟して生ぜざることを、虚空の清淨なるが如し。故に諸法の實相を得、無所得を以て得と爲す。無所得とは、般若の中に説くが如し。色等の法は空なるを以ての故に空なるに非らず、本より已來、常に自ら空なり。色等の法は、智慧を以て及ばざるが故に無所得なるにあらず。本より已來常に自ら所得なし。是の故に幾の波羅蜜(多)を行じて、般若を得るか  
 と問ふべからず。諸佛は衆生を憐愍して、俗に隨ひたまふが故に、行を説きたまふも、第一義には非ず。

問うて曰く、若し所得なく、所行なくんば、行者は何を以てか之を求むるや。答へて曰く、無所得に二種あり。一には世間の欲を求むる所あれども意の如くならず、是れ無所得なり。二には諸法實相の中には、決定の相は得べからざるが故に無所得と名く。福德智慧あつて、善根を増益すること無きには非ず。凡夫の人の如きは、世間の法を分別するが故に所得あり。諸の善功德も亦是の如し。世間の心に隨ふが故に所得ありと説けども、諸佛の心中には所得なし。是れ略して、般若波羅蜜(多)の義を説けり。後に當に廣く説くべし。

【九七】 第三一問、若し所得なく所行なくんば、行者は何故に之を求むるや。  
 【九八】 無所得に世間的出世間的の二種あることを明す。

# 卷の第十九

初品の中の三十七品を釋す。

善薩摩訶薩は、不住の法を以て、般若波羅蜜(多)の中に住し、不生の故に應に四念處・四正勤・四如意見・五根・五力・七覺分・八聖道分を具足すべし。

論 問うて曰く、三十七品は是れ聲聞辟支佛の道なり。六波羅蜜(多)

は是れ菩薩摩訶薩の道なり。何を以ての故に菩薩道の中に於て、聲聞法を説くや。答へて曰く、菩薩摩訶薩は、應に一切の善法と、一切の道とを學すべし。佛、須菩提に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するに、悉く一切の善法と一切の道とを學す。謂ゆる乾慧地乃至佛地なり」と、告げたまへる如し。是九地は應に學にして證を取らざるべし。佛地は亦學し、亦證す。

復次に、何の處にか三十七品は、但是れ聲聞、辟支佛の法にして、菩薩の道に非ずと説くや。是の般若波羅蜜(多)摩訶衍品の中に、佛は四念處乃至八聖道分を説きたまひ、是の摩訶衍三藏の中にも亦三十七品は獨り是れ小乗の法なりと説きたまはず。佛は大慈を以ての故に三十七品を涅槃の道と説きたまふ。衆生の願に隨ひ、衆生の因縁に隨つて、各其の道を得し。聲聞を求めんと欲する人は聲聞の道

【一】 第一問、三十七の助道品は二乗の道にして、六度は菩薩の法なり。今それ菩薩道の中に於て聲聞法を説くは何故なるか。  
【二】 佛説には光なきも衆生に別あること、譬へば雨には光なきも草木に別あるが如き旨を明す。

を得、辟支佛の善根を種うる人は辟支佛道を得、佛道を求むる者は佛道を得。其の本願は、諸根の利鈍に随つて大悲あり、「或は」大悲なし。譬へば龍王の降雨は普ねく天下に雨らし、雨に差別なきも、大樹大草は根大なるが故に多く受け、小樹小草は根小なるが故に少しく受くるが如し。

問うて曰く 三十七品は處として、獨り是れ聲聞辟支佛道にして、菩薩の道に非すと説くと無しと雖も、義を以て之を推すに、菩薩は生死に久しく住して、五道に往來し、疾く涅槃を取らず。是の三十七品は、但涅槃の法のみを説き、波羅蜜「多」

を説かず、亦大悲を説かざることを知るべし。是を以ての故に「三十七品は」菩薩の道に非ざることを知る。答へて曰く 菩薩は久しく生死の中に住すと雖も、亦應に實道と非實道、是は世間是は涅槃なりと知るべし。是

を知り已つて大願を立て、「衆生は」惑むべし、我當に無爲處に著するを抜き出すべし」と。是の實法を以て、諸の波羅蜜「多」を行じ、能く佛道に到る。菩薩は學すと雖も、是の法を知ると雖も、未だ六波羅蜜「多」を具足せざるが故に、證を取らず。佛の説きたまふが如し。

「譬へば仰いで空中を射るに箭箭相柱へて、地に落ちしめざるが如し」と。菩薩摩訶薩も亦是の如く、殺若波羅蜜「多」の箭を以て、三解脱門の空中を射る。復た方便の箭を以て、方便の箭を射て、涅槃の

地に墮ちざらしむ。復次に、若し汝が説く所の如く、菩薩は久しく生死の中に住し應に種種の身心の

復次に、若し汝が説く所の如く、菩薩は久しく生死の中に住し應に種種の身心の

【三】 第二問、三十七品は獨り二乗の道なりとは説かざれども、義を以て之を推知すべきにあらずや。

【四】 菩薩の涅槃地に墮せざるは、猶ほ箭箭相柱へて地に落ちざるが如き旨を明す。

苦惱を受け、若し實智を得ずんば、云何が能く是の事を忍ばん。是を以ての故に菩薩摩訶薩は是の道の實智を求むる時、般若波羅蜜〔多〕の力を以ての故に、能く世間を轉じて道果の涅槃と爲す。何となれば三界の世間は皆和合より生ず。和合より生ずる者は自性あること無し。自性なきが故に是れ則ち空と爲す。空の故に取る可らず、取る可らざるの相は是れ涅槃なればなり。是を以ての故に菩薩摩訶薩は不住の法を以て般若波羅蜜〔多〕の中に住し、不生の故に應に四念處を具足すべしと説く。

復次に、聲聞辟支佛の法の中には、世間は即ち是れ涅槃なりと説かず。何となれば智慧深く諸法に入らざるを以てなり。菩薩の法の中には、世間は即ち是れ涅槃なりと説く。〔そは〕智慧深く諸法に入ればなり。佛、須菩提に、「色は即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識は即ち是れ空なり、空は即ち是れ受・想・行・識なり、空は即ち是れ涅槃なり。涅槃は即ち是れ空なり」と告げたまへるが如し。中論の中に亦説く。

『涅槃は世間と異ならず、世間は涅槃と異ならず、涅槃の際と世間の際とは、一際にして異なることと有ること無きが故なり。』

菩薩摩訶薩は是實智を得るが故に、世間を厭はず、涅槃を樂はず。三十七品は是れ實智の地なり。問うて曰く、四念處は則ち能く具足して道を得ば、何を以てか三十七を説くや。若し汝略説する

【五】二乗の教の中には、世間即涅槃と説かざる旨を明す。  
【六】第三問、若し四念處中に他の善法を攝すとせば、何故に三十七の道品を説くや。

を以ての故に四念處にして、廣説するが故に三十七なり」と云はば、此は則ち然らず。何となれば若し廣くせば應に無量なるべければなり。答へて曰く、四念處は具足して能く道を得と雖も、亦應に四正勤等の諸法を説くべし。何となれば衆生の心は種種同じからず、結使も亦種種にして、樂ふ所も解する所の法も、亦種種なればなり。佛法は一實一相なりと雖も、衆生の爲の故に十二部經に於て、八萬四千の法聚を分別して説くとを作す。若し爾らずんば初轉法輪に四諦を説けば則ち足る、餘法を須あす。有は衆生の苦を服ひ樂に著するを以て、是衆生の爲の故に四諦を説く。身心等の諸法は、皆これ苦にして、樂あること無し。是の苦の因縁は愛等の諸の煩惱に由る。是の苦の盡されたる處を涅槃と名け、方便して涅槃に至る、是を名けて道と爲す。衆生あり、多念亂心顛倒の故に、此の身と受と、心と法との中に著して邪行を作す。是人の爲の故に四念處を説く。是の如き等の諸の道法は、各各衆生の爲に説く。譬へば藥師は一藥を以て衆病を治することを得ず。衆病同じからざれば、藥も亦一ならざるが如し。佛も亦是の如く、衆生の心病に隨つて、種種の衆藥を以て之を治し、或は一法を説いて衆生を度したまふ。佛、一比丘に告たまふが如きは、「汝が物に非れば取ると莫れ」と。比丘言く、「知り已れり世尊よ」と。佛の言はく、「云何が知る」と。比丘言く、「諸法は我が物に非ず、取るべからず」と。或は二法を以て衆生を度す、定と及び慧となり。或は三法を以てす、戒と定と慧となり。或は四法を以てす、四念處なり。是の故に

【七】 佛は藥師なり、心病に隨つて種種の藥か與へたまふ。

四念處もて道を得べしと雖も、餘の法行異なり、分別多少異なれば、觀も亦異なる。是を以ての故に應に四正勤等の諸の餘法を説くべし。

復次に、諸の菩薩摩訶薩は、信力大なるが故に、一切衆生を度せんが爲の故に、是中に佛は一時

に三十七品の衆藥は和合して、一切衆生の病を療するに足れり。是の故に多く説くことを用ゐず。佛の

三十七品の衆藥は和合して、一切衆生の病を療するに足れり。是の故に多く説くことを用ゐず。佛の

如きは無量の力ありと雖も、但十力のみを説いて、衆生を度するに於て、

事足れり。是の三十七品は十法を根本と爲す。何等か十なる。信・戒・思惟・

精進・念・定・慧・除・喜・捨なり。信とは信根と信力となり。戒とは正語と正業

と正命となり。精進とは四正勤と精進根と精進力と精進覺と正精進と

なり。念とは念根と念力と念覺と正念となり。定とは四如意足と定根と定

力と定覺と正定となり。慧とは、四念處と慧根と慧力と擇法覺と正見となり。是の諸の法念智慧の

縁の中に隨順して正住する、是の時を念慮と名け、邪法を破り正道の中に行するが故に正勤と名け、

心を攝し安隱にして縁中に於てするが故に如意足と名け、輒智を心に得るが故に根利と名け、智を心

に得るが故に力と名け、修道の用の故に覺と名け、見道の用の故に道と名く。

問うて曰く、應に先づ道を説くべし。何となれば道を行じて、然る後に諸の善法を得ればなり。

【八】 三十七品は衆病を治するに足る旨を明す。

【九】 第四問、人は先づ道を行じて善法を得べし。今それ八正道を後にして、先づ四念處を説くは何故なるか。

謂、ば人の道を行くを先として、然る後に所至の處を得るが如し。今、何を以てか顛倒して先づ四  
 念處を説き、後に八正道を説くや。答へて曰く、顛倒せざるなり。三十七品は是れ初めて道に入ら  
 んと欲する時の名字なり。行者、師の所に到り、道法を聴く時の如し。先づ念を用ゐて是の法を持  
 す、是時を念處と名く。持し已つて、法中より果を求むるが故に、精進を行す、是時を正勤と名く。  
 多く精進するが故に、心散亂せず、心を攝して、調柔ならしむるが故に、如意足と名く。心調柔し已  
 つて五根を生ず。諸法の實相は甚深にして難解なり、信根の故に能く信する、是を信根と名く。身命  
 を惜まず、一心に道を求むる、是を精進根と名く。常に道を念じて餘事を一〔三〕三十七品生起の次第を釋  
 念せざる、是を念根と名く。常に心を攝して道に在る、是を定根と名く。

四諦の實相を觀する、是を慧根と名く。是五根增長して、能く煩惱を遮ると、大樹の力能く水を遮る  
 が如し。是五根增長する時は、能く轉た深法に入る、是を名けて力と爲す。力を得已つて道法を分別  
 するに三分あり、擇法覺と精進覺と喜覺となり。此の三法は道を行する時、若し心没すれば、能く除  
 覺定覺捨覺を起らしめ、此の三法は、若し道を行する時心動散すれば、能く攝して定念覺をして二  
 處に在らしめ、能く善法を集め、能く惡法を遮る。門を守るの人の、有利の者を入らしめ、無益の者  
 を除却するが如し。若し心没する時は、念の三法起り、若し心散する時は、念の三法は無覺・實覺に攝  
 す。此の七事能く到るが故に、名けて分と爲し、是の法を得、安隱に具足し已つて、涅槃無爲の域に

入らんと欲するが故に、是の諸法を行す、是の時を名けて道と爲す。

問うて曰く、(二)何等か是れ四念處なる。答へて曰く、身念處と、受と心と法の念處と、是を四念處

と爲し、四法四種を觀す。身は不淨なりと觀じ、受は是れ苦なりと觀じ、心は無常なりと觀じ、法は

無我なりと觀す。是の四法に各四種ありと雖も、身には多く不淨を觀じ、受には多く苦を觀じ、心に

は多く無常を觀じ、法には多く無我を觀すべし。何となれば凡夫人は、未だ道に入らざる時、是の四

法の中に邪行して、四顛倒を起す。諸の不淨法の中には淨顛倒を、苦の中

には樂顛倒を、無常の中には常顛倒を、無我の中には我顛倒なり。是の四

顛倒を破するが故に、是の四念處を説く。(三)淨倒を破するが故に身念處を

説き、樂倒を破するが故に受念處を説き、常倒を破するが故に心念處を説

き、我倒を破するが故に法念處を説く。是を以ての故に四を説くことは、

すくならず、多からざるなり。

問うて曰く、(三)云何が是の四念處を得るや。答へて曰く、行者は淨戒に依つて住し、一心に精進を

行じて身の五種の不淨相を觀す。(四)何等か五なる一には生處不淨、二には種子不淨、三には自性不

淨、四には自相不淨、五には究竟不淨なり。云何が生處不淨と名くる。頭足・腹脊・脇肌・諸の不淨

物の和合せるを、名けて女身と爲し、内に生藏・熟藏・尿管の不淨あり、外に煩惱業の因縁の風あつて、

- 【一】 第五問、四念處とは何ぞや。
- 【二】 淨にあらざるを淨なりと思惟す、之を淨倒といふ。以下これに準じて知れ。
- 【三】 第六問、四念處は如何にして得らるべきか。
- 【四】 身に五種の不淨あり。

識種しきしゆを吹ふいて、二蕪じごうの中間ちゆうけんに入いらしめ、若もしくは八月くわつ、若もしくは九月くわつ、屎坑しかうの中なかに在あるが如ごとし。説とくが如ごとくんば、

『是この身みを臭穢しゆうたと爲なす、花間くわけんより生しやうせず、亦また、瞻蔔せんぷくよりせず、又また、寶山ほうざんより出いでず』

是これを生處しやうじよ不淨ふじやうと名なづく。種子しゆじ不淨ふじやうとは、父母ふもは妄想まうざう、邪憶じやおくの念風ねんぷうを以もつて煙欲いんよくの火ひを吹ふくが故ゆゑに、血髓けつずんより膏流かうながれ、熱變ねつへんじて精せいと爲なり、業行ごふぎやうの因緣いんねんを宿やどし、識しきの種子しゆじは、赤白しやくびやくの精せいの中なかに在あつて住ぢやうす、是これを身種しんしゆと名なづく。偈げに説とくが如ごとし。

『是この身種しんしゆは不淨ふじやうにして、餘よの妙寶物めうほうぶつに非あらず、淨白じやうびやくより生しやうせず、但ただ、尿道ねうだうより出いづ』

是これを種子しゆじ不淨ふじやうと名なづく。自性じしやう不淨ふじやうとは、足あしより頂いただきに至いたるまで、四邊へんの薄皮はくひ、其その中なかに有ある所ところの不淨ふじやう充滿じゆまんす。飾かざるに衣服いふくを以もつてし、深浴さうよくするに華香けかうを以もつてし、食じきするに上饌じやうせんの衆味しゆみ、簡語けんごを以もつてするも、經宿きやうしゆくの間あひだ、皆みな不淨ふじやうたり。假令たとへ衣えるに天衣てんえを以もつてし、食じきするに天食てんじきを以もつてすとも、身性しんじやうを以もつての故ゆゑに、亦また不淨ふじやうたり。何いかに泥いひんや人ひとの衣食えじきをや、偈げに説とくが如ごとし。

『地水火風ちすゐくわふうの質しつは、能よく不淨ふじやうを變除へんじよすとして、海うみを傾かたむけて此この身みを淨きよむとも、香潔かうけつならしむること能あたはず。』

是これを自性じしやう不淨ふじやうと名なづく。自相じさう不淨ふじやうとは、是この身みは、九孔くくより常つねに不淨ふじやうを流ながす。眼まなこより眵淚しるるを流ながし、耳みみより結聾けつそうを出いだし、鼻はなの中なかより痰流はんながれ、口くちより涎吐えんとを出いだし、廁道水道しだうすゐだうより常つねに屎尿しにやうを出いだし、及び諸かみの

毛孔まうくより汗流あせながれて不淨ふじやうなり。偈げに説とくが如ごとし。

『種種しんじゆの不淨ふじやうの物もの、身内しんないに充滿じゆうまんし、常に流出りしゆつして止やまず。漏囊ろうのうに物ものを盛もるが如ごとし。』

是これを自相不淨じさうふじやうと名なく。究竟不淨くぎやうふじやうとは、是この身みは若もし火ひに投とうずれば則すなはち灰はいと爲なり、若もし蟲食ちゆうじきすれば則すなはち

尿ねうと爲なり、地ちに在あれば則すなはち腐くされ壞やぶれて土つちと爲なり、水みづに在あれば則すなはち脬かうちやう脹ふし、爛壞らんわいし、或あるは水蟲すいぢゆうの爲ために

食くらはる。一切いっさいの死屍ししの中なかにて人身にんじんは最もつとも不淨ふじやうなり。不淨ふじやうの法ほふは九想きうきやうの中なかに當あたり當あたり廣ひろく説とくべし。偈げに説と

くが如ごとし。

『審諦つみびらに此この身みを觀くわんするに、終まはりは必かならず死處しじよに歸きし、御ごし難がたくして反復はんがく

すること無なきは、恩おんに背そむける小人せうじんの如ごとし。』

是これを究竟不淨くぎやうふじやうと名なく。

復次またつぎに、是この身みの生しやうする時とき、死しする時とき、身みに近ちかづけらるる物もの、身みを安やす

かるる處ところは皆みな不淨ふじやうたり。香美かうみの淨水じやうすいも、百川せんの流ながれに隨したがつて、既すでに大海たいかい

に入いれば、變へんじて鹹苦かんくと成なるが如ごとし。身みの食噉じきたんする所ところ、種種しんじゆの美味みみ・好色かうじき・好香かうかう・細滑さいこつの上饌じやうせんも、腹海ふくかい

の中なかに入いれば、變へんじて不淨ふじやうと成なる。是この身みは是かくの如ごとく、生しやうより終まはりに至いたるまで、常つねに不淨ふじやうあり、甚なほは患厭げんおん

す可べし。行者ぎやうじやは是この身みを思惟しゆいするに、復た不淨ふじやうなり。若もし少すこらく常じやうなる者ものありと雖いへども、猶差なほたがひて復無常またむじやう

なり。復た不淨無常ふじやうむじやうにして、少すこらく樂たのしき者ものありと雖いへども、猶差なほたがひて復た大おほいに苦くなり。是この身みは是これ衆苦しゆく

【一五】 此の身は死時・生時・衣處  
みな不淨なり。

【一六】 百川の淨水も終には鹹味  
となり、食ふ所の種種の美味  
も悉く不淨となる。

【一七】 内外の諸苦は皆身より生  
するが故に身の苦を觀す。

の生ずる處なり。水の地より生じ、風の空より出で、火の木に因つて有るが如く、是身も是の如く、内外の諸苦は皆身より出づ。内苦を老病死等と名け、外苦を刀杖寒熱飢渴等と名く。此の身あるが故に、是の苦あり。

問うて曰く、一身は但是れ苦性なるのみに非ず、亦身に從つて樂あり。若し身なくして意に隨はしめば、五欲は誰か當に受くべき者ぞ。答へて曰く、四聖諦の苦は、聖人は實に是れ苦なりと知る。愚夫は之を謂つて樂と爲す。聖は實に依る可く、愚惑は宜しく棄つべし。是の身は實に苦なり、大苦を止むるを以ての故に、小苦を以て樂と爲す。譬へば死すべき人の、刑罰を得て命に代ふれば、甚だ大に歡喜するが如し。罰は實に苦と爲すも、死に代

【六】第七問、若し無身ならば五欲を享受する者は誰ぞ。

るを以ての故に、之を謂つて樂と爲す。復次に、新苦を樂と爲すが故に、苦を苦と爲す。初め坐する時は樂なれども、久しければ則ち苦を生じ。初め行・立臥するも亦樂にして、久しければ亦苦と爲るが如し。屈伸俯仰・視聽喘息の苦は、常に身に隨ふ。初め受胎・出生より、死に至るまで、樂時あると無し。若し汝淫欲を受くるを以て樂と爲さば、淫病重きが故に外の女色を求め、之を得ると愈をければ、患に至ること愈重し。疥癩を患つて火に向ふが如し。措て灸する當時は小しく樂なれども、大に痛むこと轉た深し。是の如く小樂も、亦是れ病の因縁なり。故に有は是れ實樂無病に非ず、之を觀じて爲めに慈愍を生ず。雜欲の人の淫欲の者を觀するも、亦復た是の如く、此の狂惑の欲火の爲に

焼かれ、多く受け多く苦むとを感む。是の如き等の種種の因縁により、身苦の相と苦の因とを知る。行者は、身は、但是れ不淨無常苦なりと知るも、物已むを得ずして之を養育す。譬へば父母の子を生むに、子は復弊暴なれども、己より生ずるを以ての故に、要らず常に養育し成就すべきが如し。身には實に我なし。何となれば自在ならざればなり。譬へば病風の人は、俯仰行來すること能はず。咽を病んで塞る者は、語言すること能はざるが如し。是を以ての故に身は自在ならざることを知る。人の物を有して意に随つて取り用ふるも、身は爾ることを得ざれば、自在ならざるが如し。故に審かに無我を知る。行者は是の身を思惟すること、是の如し、「不淨無常苦空無我なり」と。是の如き等の無量の過惡あり。是の如き等、種種に身を觀するは、是を身念處と名く。是の身念處の觀を得已つて、復た思惟すらく「衆生は何の因縁を以ての故に、此の身に貪著するや。」樂受を以ての故なり。何となれば、内の六情と外の六塵との和合によるが故に、六種の識を生じ、六種の識の中より三種の受を生ず。三苦と樂受と不苦不樂受となり。是の樂受は、一切衆生の欲する所、苦受は一切衆生の欲せざる所、不苦不樂受は、取らず棄てず」と。偈に説くが如し。

『若し惡を作す人及び出家、諸天・世人及び蠕動、一切十方五道の中は、樂を好んで、苦を惡まざ

【二九】 受念處即ち感覺の苦なる所以を説く。

【三〇】 樂受とは快感のことなり。

【三一】 苦受とは苦感のことなり。

る無し。狂惑顛倒無智なるが故に、涅槃常樂の處を知らず。

行者は是の樂受を觀じ、實を以て之を知るに、樂あること無く、但苦のみあり。何となれば樂は實樂に名けば、顛倒あること無ければなり。一切世間の樂受は皆顛倒に従ひ、此は實なる者あること無し。復次に、是の樂受は、樂を求めんと欲すと雖も、能く大苦を得。偈に説くが如し。

「若し人海に入つて惡風に遭へば、海浪崖く起つて黒山の如く、若し大陣鬪戰の中に入り、大嶮道、惡山の間を經れば、豪貴の長者も身を降し屈す。小人に親近するは色欲の爲なり。是の如き種種の大苦の事は、皆樂に著する貪心の爲の故なり。」

是を以ての故に樂受は能く種種の苦を生ずることを知る。復次に、佛は

三種の受に樂受ありと説きたまふと雖も、樂受は小なるが故に名けて苦と爲す。一斗の蜜は、之を大河に投すれば、則ち氣味を失ふが如し。

問うて曰く、三三 若し世間の樂は、顛倒の因縁の故に苦ならば、諸の聖人の禪定より生ずる無漏の樂

は、應に是れ實樂なるべし。何となれば此樂は、愚癡顛倒に従つて有らざればなり。此は云何ぞ是れ苦ならんや。答へて曰く、是は苦に非ざるなり。佛は、無常は即ち是れ苦なりと説きたまふと雖も、有漏法の爲の故に苦と説きたまふ。何となれば凡夫の人は有漏法の中に於て心著すればなり。有漏法

【三】 第八問、諸聖の禪定より生ずる無漏の樂は、眞實の樂なるべし。如何ぞ之を苦と云はんや。

は無常失壞なるを以ての故に苦を生ず。無漏法は心著せざるが故に、無常なりと雖も憂悲苦惱等を生ずること能はず、故に名けて苦と爲さず。亦 諸使に使はれざるが故なり。復次に、若し無漏の樂是れ苦ならば、佛は別に道諦を説きたまはざらん、苦諦に攝すればなり。

問うて曰く、(二四) 二種の樂あり、有漏の樂と無漏の樂なり。有漏の樂は下賤弊惡にして、無漏の樂は上妙なり。何を以ての故に下賤の樂の中に於て著を生じ、上妙の樂の中に於て、而も著を生ぜざるや。

上妙の樂の中には、著を生ずることは多かるべし。金銀寶物の如きは、貪著すること重かるべく、草草木と同じからんや。答へて曰く、無漏の樂は上妙にして智慧多し。智慧多きが故に能く此の著を離る。有漏の樂の中には、愛等の結使多し、愛を著の本と爲す。實智慧は能く離る。是を以ての故に著せざるなり。復次に、無漏の智慧は、常に一切の無常を觀す。無常を觀するが故に、愛等の諸の結使を生ぜず。(二五) 譬へば羊の虎に近づけば、好

草美水を得と雖も、肥ると能はざるが如し。是の如く諸の聖人は、無漏の樂を受くと雖も、無常空を觀するが故に、染著の脂を生ぜず。復次に、無漏の樂は三三昧十六聖行を離れず、常に衆生相なし。若し衆生相あれば、則ち著心を生ず。是を以ての故に無漏の樂は復た上妙なりと雖も、而も著を生ぜず。是の如き種種の因縁により、世間の樂受は是れ苦なりと觀す。苦受を觀することは箭の如く、不

【三】 諸使とは諸の煩惱の異名なり。  
【四】 第九問、人多く無漏の樂に執着せずして、有漏の樂に多く執着する理由如何。  
【五】 羊は虎の側に居れば好草を得るも肥ゆること能はず。

苦不樂受も、無常壞敗の相なりと觀ず。是の如くなれば則ち樂受の中に欲著を生ぜず、不苦不樂受の中に愚癡を生ぜず、是を受念處と名く。

行者は思惟すらく、三三樂を以ての故に身を負る、誰か是の樂を受くし。思惟し已つて、心に從つ

て受くることを知る。衆生の心は、狂顛倒の故に、而も此の樂を受く。當に是の心は無常、生滅の相

にして、一念も住せず、樂を受く可きなしと觀すべし。人は顛倒を以ての

故に、樂を受るを得と謂へり。何となれば初に樂を受けんと欲する時、

心に異を生ずると、樂生する時の心は異なりて、各各相及ばず、云何が

心、樂を受くと言はん。過去の心は已に滅するが故に樂を受けず。未來の

心は生ぜざるが故に樂を受けず。現在の心は一念にして住すること疾きが

故に樂を受くることを覺せず。

問うて曰く、三三過去未來は樂を受くべからず。現在の心一念住する時、應に樂を受くべし。云何が

受けずと云ふや。答へて曰く、我已に去ること疾きが故に、樂を受くることを覺せずと説けり。復次に

に三六諸法は無常の相なるが故に住する時なし。若し心一念も住せば、第二念の時も亦住すべし。是

は爲れ、常住にして、滅相あること無し。佛の説きたまふが如くんば、一切の有爲法には三相あり、

住の中に亦滅相あり。若し滅なければ、是れ有爲相なるべからず。復次に、若し法、後に滅あらば當

【三三】 心念處、即ち心の無常なる所以を説く。  
【三六】 第一〇問、過去未來は樂を享受せざるべきも、現在一刹那に於て之を享受すべきにあらずや。  
【三八】 法念處の無常なる所以を説く。

に初め已に滅あることを知るべし。譬へば人の新衣を著るに、初めて著る日に若し故からざれば、第二日も亦故かるべからず。是の如く乃至十歳なるも、應に常に新なるべく、故かるべからず。而も實には已に故し。當に新と俱に有れども、微に故ければ覺せず、故き事已に成れば、方に乃ち覺知することを知るべきが如し。是を以ての故に、諸法は正時あること無きを知る。云何ぞ心住する時、樂を受くることを得んや。若し住すること無くして、樂を受くとせば、是の事は然らず。是を以ての故に實に樂を受くる者あること無きを知る。但世俗の法は、諸心の相續するを以ての故に、謂つて一相にして樂を受くと爲すのみ。

問うて曰く、云何が一切の有爲法は無常なりと知るべきや。答へて曰く、我先に已に説けり。今當に更に答ふべし。是の有爲法は一切因縁に屬するが故に無常なり。先に無にして、今有なるが故に、後無なるが故に無常なり。復次に、無常の相は常に有爲法に隨逐するが故に、有爲法は増積有ると無きが故に、一切の有爲法は相侵剋するが故に無常なり。復次に、有爲法には二種の老ありて、常に隨逐するが故に「無常なり」。一に將老、二に壞老なり。二種の死ありて、常に逐ふが故に「無常なり」。一には自ら死し、二には他に殺

さる。是の故に一切の有爲法は皆無常なることを知る。有爲法の中に於て、心の無常は最も知り易し。佛の説きたまふが如くんば、凡夫人は或時は身の無常を知つて、心の無常を知ると能はず。若し凡夫

【无】第一問、如何にして一切の有爲法は無常なりと知るべきか。

は身は常ありと言ひ、猶差へば心を以て常となす、是れ大なる惑なり。何となれば身の住するとは十  
 歳二十歳にして、是の心は日月時頃、須臾にして過ぎ去り、生滅して各異なり、念念停らず、生ぜ  
 んと欲して異に生じ、滅せんと欲して異に滅す。幻事の如く、實相は得べからず。是の如き無量の因  
 縁の故に、心の無常なることを知る。是を心念處と名く。行者思惟すらく、「是の心は誰にか屬し、誰  
 か是の心を使ふし、觀じ已るに主あることを見ず。一切の法は因縁和合の故に自在ならず、自在な  
 らざるが故に自性なく、自性なきが故に我なし。若し我なくんば誰か常に是の心を使ふべけん」  
 問うて曰く、應に我あるべし。何となれば心は能く身を使ひ、亦、我

は能く心を使ふこと有るべし。譬へば國王は將を使ひ、將は兵を使ふが如  
 し。是の如く應に我あつて心を使ひ、心あつて身を使ふべし。そは五欲の

【一〇】 第一二問、我ありて初め  
 天能く欲の樂を享受すべきに  
 ならずや

樂を受けんが爲の故なり。復次に、各各我心あるが故に、實に我あることを知る。若し但身心顛倒  
 あるが故に我を計せば、何を以ての故に他の身中に我を起さざるや。是の相を以ての故に各各我あ  
 り。答へて曰く、若し心は身を使ひ、我は心を使ふこと有らば、應に更に我を使ふ者あるべし。若し  
 更に我を使ふ者あらば、是れ則ち無窮なり。又更に我を使ふ者あらば、則ち兩神あり。若し更に我な  
 くんば、我は能く心を使ひ、亦應に但心は能く身を使ふべし。若し汝心を以て神に屬せば、心を除け  
 ば則ち神は知る所なけん。若し知る所なくんば、云何が能く心を使はん。若し神に知るの相あらば、

復た心を用ゐて何かを爲ん。是を以ての故に但心は是れ識相の故に、自ら能く身を使ひ、神を待たざることを知る。火性の能く物を焼くに、人を假らざるが如し。

問うて曰く、三二火は焼く力を有すと雖も、人に非ずんば用ゐず。心は識相ありと雖も、神に非ずんば使はず。答へて曰く、諸法は相あるが故に有なり。是の神は相なきが故に無なり。汝は氣息の出入、苦樂等を以て神の相と爲さんと欲すと雖も、是の事は然らず。何となれば出入の息等は是れ身相にして、苦樂を受くる等は是れ心相なり、云何が身心を以て神相と爲ん。

復次に、或時は火は自ら能く焼いて人を待たず。世は但名を以ての故に名けて人焼くと爲す。汝が論は負處に墮す。何となれば神は則ち是れ人、人を以て人に喩ふべからざればなり。又復た汝は「各各我心あるが故に、實に我あるとを知る。若し但身心顛倒あるが故に我を計せば、何を以てか他の身中に我を起さざるや」と言ふ。汝は有我無我に於て未だ了せず。而も問ふ「何を以てか他の身中に我を起さざるや」と。自身他身に從つて有なるも、我も亦不可得なり。若くは色相、若くは無色相、若くは無常、有邊無邊、去者不去者、自在者不自在者あり。是の如き等の我相は、皆不可得なり。上の我聞品の中に説くが如し。是の如き等の種種の因縁により、諸法は和合因縁の生にして、實法あり我あると無しと觀ず。是を法念處と名く。三三是の四念處に三種

【三二】 三種の四念處。

【三三】 第一三問、火は燒力ありと雖も、人にあらざれば用ゐざるが如く、心は認識の特性ありと雖も、神あつて初めて其の特性を發揮すべきにあらすや。

あり。性念處と非念處と緣念處となり。云何が性念處と名くる。身を觀するの智慧は是れ身念處、諸受を觀するの智慧は是を受念處と名け、諸心を觀する智慧は是を心念處と名け、諸法を觀するの智慧に、是を法念處と名け、是を性念處と爲す。云何が非念處と名くるや。身を觀するを首と爲し、因緣生の道の、若くは有漏、若くは無漏なる、是は身念處なり。受を觀じ、心を觀じ、法を觀するを首と爲し、因緣生の道の、若くは有漏、若くは無漏なる、是を受心法念處と名け、是を非念處と爲す。云何が緣念處と爲すや。一切の色法、所謂十入及び法入の少分は是を身念處と名け、六種の受なる、眼觸の受を生じ、耳・鼻・舌・身・意識の受を生ずる、是を受念處と名け、六種の識なる、眼・耳・鼻・舌・身・意識、是を心念處と名け、惡業行業及び三無爲、是を法念處と名く。是を緣念處と名く。是の性念處は、智慧性の故に無色にして不可見、無對、或は有漏、或は無漏なり。有漏は有報、無漏は無報にして、皆有爲の因緣生なり、三世の攝、名の攝、外入の攝なり。慧を以て、有漏は是れ斷なることを知り、無漏は斷に非ざるとを知り、有漏は是れ斷す可く、無漏は斷す可きに非ざるとを知る。是の修法は無垢なり、是れ果にして亦有果なり。一切は受法に非ず、四大造に非ず。無上の法は有漏念處、是は無漏念處あり。是は有に非ず、皆是れ相應因なり。四念處は、六種善の中の一類なる行業善の分には攝し、行業善の分は四念處を攝す。不善、無記漏の中に相應せず。或は四念處あり有漏に非

- 【一】 性念處とは何ぞや。
- 【二】 非念處とは何ぞや。
- 【三】 緣念處とは何ぞや。
- 【四】 有上とは無上の反對にして、相對と云は人が如し。

す。或は有漏にして四念處に非ず。或は四念處あり亦有漏なり。或は四念處に非ず亦有漏に非ず。四念處あり、有漏に非ずとは、是れ無漏性の四念處なり。有漏にして四念處に非ずとは、有漏性の四念處を除き、餘殘の有漏分なり。四念處にして亦有漏法とは、有漏性の四念處なり。四念處に非ず、有漏法に非ずとは、無漏性の四念處を除き、餘殘の無漏法なり。無漏の四句も亦是の如し。共念處は、是の共念處の中の身業口業は是を色と爲す、餘殘は色に非ず。一切不可見にして皆無對なり。或は有漏、或は無漏は皆有爲なり。有漏の念處は有報、無漏の念處は無報なり。因縁生は三世の攝にして、身口の業は色に攝せられ、餘殘は名に攝せられ、心意識は内入に攝せられ、餘殘は外入に攝せらる。慧を以て有漏は是れ斷なることを知り、無漏は斷に非ざるとを知り、有漏は斷すべく無漏は斷す可きに非るとを知る。皆の修法は皆無垢なり。是れ果にして亦有果なり。一切は受法に非ず、身口業は是れ四大造にして、餘殘は四大造に非ず、皆有上法有漏の念處なり。是に無漏の念處あり、是れ身口業及び心不願の諸行あるに非ず、是れ相應因に非ず、餘殘は是れ相應因なり。五善分は四念處を攝し、四念處は亦五善分を攝し、餘殘は相攝せず。不善無記は漏法に攝せず。或は四念處あり有漏に非ず。或は有漏にして四念處に非ず、或は四念處あり亦有漏なり。或は四念處に非ず亦有漏に非ず。四念處あり有漏に非ずとは、無漏の四念處なり。有漏にして四念處に非ずとは、有漏の四念處を除いて、餘殘の有漏法なり。四念處あり亦有漏なりとは、有漏の四念處なり。四念處に非ず有漏に非ずとは、虛

空の數縁盡き、非數縁盡くるなり。或は四念處あり無漏に非ず。或は無漏あり四念處に非ず。或は四念處あり無漏あり。或は四念處に非ず、無漏に非ず。四念處あり無漏に非ずとは、有漏の四念處なり。無漏あり四念處に非ずとは、三無爲法なり。四念處あり亦無漏なりとは、無漏の四念處なり。四念處に非ず無漏に非ずとは、有漏の四念處を除き、餘殘の有漏法なり。是れ縁念處なり。縁念處の中の一念處は是れ色にして、三念處は色に非ず。三は不可見なり、一は當に分別すべし。身念處に可見あり、不可見あり。可見は一入、不可見は九入及び一入の少分なり。三は無對なり、一は當に分別すべし。身念處の有對は十入、無對は一入の少分なり。身念處の有漏は十入及び一入の少分にして、無漏は一入の少分なり。受念處は有漏、意相應にして是れ有漏、無漏の意相應は是れ無漏なり。心念處も亦是の如し。法念處は有漏、相衆・行衆は是れ有漏にして、無漏の相衆・行衆及び無爲法は是れ無漏なり。三は是れ有漏なり、一は當に分別すべし。法念處の相衆と行衆は是れ有爲にして、三無爲法は是れ無爲なり。不善の身念處、及び善有漏の身念處は是れ有報にして、無記の身念處及び無漏は是れ無報なり。受念處、心念處、法念處も亦是の如し。三は因縁より生ず、一は當に分別すべし。法念處の有爲は因縁より生じ、無爲は因縁より生ぜず。三は三世に攝せられ、一は當に分別すべし。法念處の有爲は是れ二世に攝せられ、無爲は三世の攝に非ず。一念處は色に攝し、三は名に攝す。一念處は内入に攝せられ、受念處、法念處は外入に攝せらる、一は當に分別すべし。身念處は、或は内入

に攝せられ、或は外入に攝せらる。五の内入は是れ内入の攝なり、五の外入、及び一入の少分は是れ外入の攝なり。慧を以て、有漏は是れ一の斷見にして、無漏は斷見に非ず、有漏は斷す可く、無漏は斷す可きに非ざることを知る。修は當に分別すべし。身念處は、善は應に修すべく、不善及び無記は修すべからず。受心念處も亦是の如し。法念處は有爲の善法は修すべく、不善及び無記、及び數緣盡は修すべからず。垢は當に分別すべし。身念處の隱沒は是垢にして、不隱沒は垢に非ず。受心念處も亦是の如し。三念處は是れ果にして亦有果なり。一は當に分別すべし。法念處は或は果にして、有果に非ず、或は果にして亦有果なり。或は果に非ず、有果に非ず。數緣盡は是れ果にして、有果に非ず。有爲の法念處は是れ果にして、亦有果なり。虚空の非數緣盡は是れ果に非ず、有果に非ず。三は不受なり、一は當に分別すべし。身念處の身數に墮するは是れ受にして、身數に墮せざるは受に非ず。三は四大造に非ず、一は當に分別すべし。身念處の九入、及び二入の少分は四大造にして、一入の少分は四大造に非ず。三念處の有上の一は當に分別すべし。法念處の有爲及び虚空非數緣盡は是れ有上にして、涅槃は是れ無上なり。四念處は若くは有漏にして是れ有、若くは無漏にして是れ有に非ず。二念處は相應因にして、一念處は不相應因、一は當に分別すべし。受念處と心念處とは相應因にして、身念處は不相應因なり。法念處の想衆及び相應行衆は是れ相應因にして、餘殘は是れ不相應因なり。四念處分を六善法に攝し、六善法を亦四念處分に攝す。不善分、無記分も亦是の如く、種に隨

つて相攝す。三漏を一念處分に攝し、一念處分を亦三漏に攝す。有漏を四念處分に攝し、四念處分を亦有漏に攝す。無漏を四念處分に攝し、四念處分を亦無漏に攝す。是の如き等の義は、千難の中に廣く説けり。

問うて曰く、我等をか内身と爲し、何等をか外身と爲すや。内外身の如きは皆已に攝し盡せり、何を以てか復内外身觀を説くや。答へて曰く、内を自身と名け、外を他身と名く。自身に二種あり、一には身内の不淨、二には身外の皮毛髮等なり。復次に、行者は死屍の膀胱爛壞を觀じ、是の相を取つて自ら身を觀す。亦此の如きの相、是の如きの事は、我未だ此の法を、  
【一】 第一四問、内身外身とは  
離れず。死屍は是れ外身、行者は是れ内身なり。行者或る時は端正の女人  
を見て、心著し、即時に其の身の不淨を觀するが如し、是を外と爲す。自ら我が身を知ること亦爾  
なり。是を内と爲す。復次に、眼等の五情を内身と爲し、色等の五塵を外身と爲す。四大を内身と爲  
し、四大造色を外身と爲す。苦樂の處を覺るを内身と爲し、苦樂の處を覺らざるを外身と爲す。自身  
及び眼等の諸根は、是を内身と爲し、妻子財寶田宅所有の物は是を外身と爲す。何となれば一切の色  
法は、盡く是れ身念處なればなり。行者は是の内身の淨にして常樂なる我あらんと求め、審かに悉く  
之を求むるも都て得べからず。先に觀法を説くが如く、内を觀するに得べからず。外は或は當に有な  
るべきや。何となれば外物は是れ一切衆生の著する處にして、外身觀の時亦不可得なればなり。復是

の念を作さく、「我は内觀して得ず、外に或は有らんか」と、外觀も亦復た得ず。自ら念すらく、「我は或は誤錯ならん。今當に總じて内外を觀すべし」と。内を觀じ、外を觀ず、是を別相と爲し、一時に俱に觀する、是を總相と爲す。總觀し、別觀するに、了に得べからず、所觀已に竟る。

問うて曰く、身念處は内外を得べく、諸受は是れ外入の攝なり。云何が内受外受あることを分別するや。答へて曰く、佛説きたまはく、「二種の受あり、身受と心受となり」と。身受は是れ外、心受は是れ内なり。復た有る五識相應の受は是れ外にして、意識相應の受は是れ内なり。十二入の因縁の故に諸受生ず。内の六入分に生ずる受は、是を内と爲し、外の六入分に生ずる受は、是を外と爲す。塵受は是を外と爲し、細受は是を内と爲す。二種の苦あり、内苦と外苦なり。内苦に二種あり、身苦と心苦となり。身苦

とは身痛頭痛等の四百四種の病、是を身苦と爲す。心苦とは憂愁、臆怖、嫉妬疑、是の如き等、是を心苦と爲す。二苦の和合せは是を内苦と爲す。外苦に二種あり、一には王者、己に勝れるもの、惡賊、師子、虎、狼、蛇等の逼害なり。二には風雨、寒熱、雷霆、霹靂等なり。是二種の苦を名けて外受と爲す。樂受、不苦、不樂受も亦是の如し。復次に内法を緣するは、是を内受と爲し、外法を緣するは是を外受と爲す。復次に、一百八受は是を内受と爲し、餘殘は是れ外受なり。

問うて曰く、心は是れ内入の攝なり。云何が外心を觀ずと言ふや。答へて曰く、心は内入に攝す

【三元】 第一五問、内受と外受とは如何にして分別するか。  
【三元】 第一六問、心は内的のものなり、然るを外心を觀ずと言ふは何故なるか。

と雖も、外法を緣するが故に、名けて外心と爲し、内心を緣するが故に、是を内心と爲す。意識は是れ内心にして、五識は是れ外心なり。心を攝して禪に入るは、是れ内心にして、散亂の心は、是れ外心なり。内の五蓋、内の七覺に相應する心は、是を内心と爲し、外の五蓋、外の七覺に相應する心は、是を外心と爲す。是の如き等の種種に内外を分別するは、是を内外心と爲す。

問うて曰く、(四) 法念處は是れ外入に攝す、云何が内法を觀すと言ふや。答へて曰く、受を除ける餘

の心數法の、能く内法を緣する心數法は、是れ内法にして、外法を緣する

の心數法、及び無爲と心不相應行は是を外法と爲す。復次に、意識所緣の法

は是を名けて内法と爲す。佛の説きたまふが如くんば、緣に依つて生ずる

意識、是の中受を除いて、餘の心數法は、是を内法と爲し、餘の心、不相

應行、及び無爲法は、是を外法と爲す」と。(四) 四正勤に二種あり。一には性正勤、二には共正勤なり。

性正勤とは、道の爲の故に四種の精進あり。「即ち二種の不善法を遮し、二種の善法を集む。四念處

觀の時、若し懈怠の心あれば、五蓋等の煩惱心を覆ひ、五種の信等の善根を離るる時、不善法若し已

に生ぜば、斷せんが爲の故に、未だ生ぜざれば、生ぜしめざらんがための故に、精進を勤む。信等の

善根、未だ生ぜざれば、生せんが爲の故に、已に生ぜば、増長せしめんが爲の故に、精進を勤む。精

進の法は四念處に於て多きが故に、正勤と名くることを得。

【四】 第一七問、法念處は外

のものなり、然るを内法を觀

すといふ理由如何

【四】 二種の正勤を辯す。

問うて曰く、(四) 何を以ての故に七種の法の中に於て、此の四を正勤と名け、後の八を正道と名け、餘は正と名けざるや。答へて曰く、四種の精進は、心、勇んで發動し、錯誤を畏るるが故に正勤と言ひ、道に趣くの法を行ずるが故に、邪法に墮することを畏るるが故に、正道と言ふ。性とは四種の精進の性なり。共とは四種の精進の性を首と爲す。因縁の生ずる道は、若くは有漏、若くは無漏、若くは色、若くは無色なり。上に説くが如し。(五) 四正勤を行ずる時、心小しく散ずるが故に、定を以て心を攝するが故に、如意足と名く。譬へば美食の少鹽なれば、則ち味なく、鹽を得れば則ち味足ること、意の如くなるが如し。又人の二足あつて、復た好馬好車を得れば、意の如く至る所あるが如し。行者も是の如く、四念處の實智慧、四正勤の中の正精進を得れば、精進の故に智慧増多けれども定力小弱なり。四種の定を得て心を攝するが故に、智と定の力等しく願ふ所皆得るが故に、如意足と名く。

問うて曰く、(四) 四念處、四正勤の中に已に定あり。何を以ての故に如意足と名けざるや。答へて曰く、彼に定ありと雖も、智慧精進力多くして、定力弱きが故に、行者は意の如く願を得ず。四種の定は欲を主と爲して定を得、精進を主と爲して定を得。定の因縁は道を生ず、若くは有漏、若くは無漏の心を主と爲して定を得、思惟を主と爲して定を得。定の因縁は道を生じ、若くは有漏、若くは無

【四二】 第一八問、七種の中、四種の精進と八道とをのみ正と名くる理由如何。

【四三】 四如意足の義解。

【四四】 第一九問、四念處の中にも、四正勤の中にも、已に定あり、何故に如意足と名けざるや。

漏の、善の五衆を共にするを、名けて共如意と爲し、欲の生ずる等の四種の定を、名けて性如意と爲す。四正勤四如意足は、性念處・共念處の中に、廣く分別して説くが如し。五根とは信・進・根・定・慧の五根は、是を信根と名け、是の道を行じ、道法を助くる時、勤求して息まざるは、是を精進根と名け、道及び助道の法を念じて、更に他念なきは、是を念根と名け、一心に念じて散ぜざるは、是を定根と名け、道及び助道法の爲に、無常等の十六行を觀するは、是を慧根と名け、是の五根増長して煩惱の爲に壞られざる、是を名けて力と爲す。五根の中に説くが如し。

是の五根五力は、行衆の中の攝にして、常に共に相應し、心行・心數法に隨ひ、心と共に生じ、心と共に住し、心と共に滅す。若し是の法あれば必ず正定に隨ひ、若し是の法なければ、必ず邪定に墮す。七覺は先に義を説くが如し。

問うて曰く、先に義を説くと雖も、阿毘曇の法を以て説けるに非ず。答へて曰く、今當に更に説くべし。四念處の如きは、義は是れ七覺分なり。無色、不可見、無對、無漏、有爲、因縁生、三世の攝、名の攝、外入の攝なり。慧を以て見を斷するに非ず、斷す可からずと知る。修法は無垢の法なり。是れ果にして、亦有果なり。受法に非ず、四大造に非ず、有上法、非有、相應因なり。二善分は七覺分に攝し、七覺分は二善分に攝す。不善、無記法、有漏法は相攝せず。無漏の二分は七覺分を攝す。

【四六】 五根の義解。  
 【四七】 五力の義解。  
 【四七】 第二〇問、義を説くに阿毘曇の法を以てせる理由如何。

し、七覺分は無漏の二分を攝す。是の如き等の種種は、千難の中に廣く説くが如し。八聖道分は先に説くが如し。正見は是れ智慧なり。四念處、慧根、慧力、擇法覺の中に説くが如し。正思惟は、四諦を觀する時、無漏心と相應し、思惟を動發して覺知し籌量す。正方便は、四正勤、精進根、精進力、精進覺の中に説くが如し。正念、念根、念力、念覺の中に説くが如し。正定は、如意足、定根、定力、定覺の中に説くが如し。正語、正業、正命は、今當に説くべし。四種の邪命を除いて、口業に攝す。無漏の智慧を以て除捨し、餘の口の邪業を離るゝは、是を正語正業と名く。亦是の如く、五種の邪命を無漏の智慧を以て除捨し、是を離るるを正命と爲す。

問うて曰く、何等か是れ五種の邪命なるや。答へて曰く、一には若し行者利養の爲の故に詐つて奇特を現す。二には利養の爲の故に自ら功德を説く。三には利養の爲の故に、吉凶を占相し、人の爲に説く。四には利養の爲の故に高聲に威を現じ、人をして畏敬せしむ。五には利養の爲の故に稱説し、得る所の供養を以て人心を動かす、邪因縁にして活命するが故に、是を邪命と爲す。是の八正道に三分あり。三種を戒分と爲し、三種を定分と爲し、二種を慧分と爲す。慧分と定分の分別は、先に説くが如し。戒分は今當に説くべし。戒分は是れ、色・性・不可見・無對・無漏・有爲・無報・因縁生三世の攝、色の攝なり。名の攝、外入の攝に非ず、慧を以て見を斷するに非ず、斷す可らざることを知る。修法は無垢法なり。

【四八】 八正道の義解。

【四九】 第二二問、五種の邪命とは何ぞや。

【五〇】 八正道の三分。

是れ果にして、亦有果なり。受法、四大造、有上法、有法に非ず。相應因に非ず。一善分を三正に攝し、三正を一善分に攝し、不善、無記法、有漏は相攝せず。無漏の一法は三正に攝し、三正も亦無漏の一法に攝す。是の如き等の種種の分別は、阿毗曇に廣く説くが如し。是の三十七品は初禪地には具し有り、未到地の中には三十六あり、喜覺を除く。第二禪の中にも亦三十六あり、正行を除く。禪の中間、第三第四禪には三十五あり、喜覺を除き、正行を除く。三無色定の中には三十二あり、喜覺・正行・正語・正業・正命を除く。有頂の中には二十二あり、七覺分、八聖道分を除く。欲界の中の二十二も亦是の如し。是を聲聞法の中に分別の義と爲す。

問うて曰く、三摩訶衍に説く所の三十七品の義は云何。答へて曰く、苦

【五】 第二二問、大乘に於ける三十七品の義如何。  
 【五三】 二世の因縁して身車を成じ、讒牛に牽かる。

薩摩訶薩は、四念處を行じて是の内身を觀するに、無常苦にして、病の如く癩の如く、肉聚は敗壞し、不淨は充滿して、九孔より流出し、是を行廁と爲す。是の如き身の惡露を觀するに、一として淨處なし。骨幹、肉塗、筋脈、皮裏は先世の有漏業の因縁より受け、今世には沫浴、花香、衣服、飲食、臥具、醫藥等の成する所なり。車の兩輪あつて、牛力の牽くが故に、能く至る所あるが如く、  
 二世の因縁を以て身車を成じ、讒牛に牽かれて周旋往反す。是の身は四大和合して造り、水沫聚の虚しくして堅固なること無きが如く、是の身は無常にして、久しくして必ず破壊し、是の身相は身

中に得べからず、亦外に在らず、亦中間に在らず。身は自ら覺せず、無知、無作なること、墻壁瓦石の如く、是の身中に定んで身相なく、是の身を作る者あること無く、亦空らしむる者なし。是の身は先際、後際、中際、皆得べからず。八萬の戸蟲無量の諸病、及び諸の飢渴、寒熱あり、刑殘等は常に此の身を惱ます。菩薩摩訶薩は身を觀ずること是の如く、我が身に非ず、亦他の有に非ず、自在を得ず、「能」作及び所「作」あつて是の身を作るにあらず。身相は空にして、虛妄の因縁より生じ、是の身は假に有つて、本業の因縁に屬すと知る。菩薩は自ら念ずらく、「我は身命を惜むべからず、何となれば是の身相は、合せず散せず、來らず去らず、生せず滅せず、依倚せざればなり。身を循つて觀するに、是の身は我なく、我所なきが故に空なり。空の故に男女等の諸相なし。相なきが故に願を作さず」と。是の如く觀すれば、無作智門に入ることを得て、身の無作なることを知る。無作とは、但諸法の因縁和合より生ずるなり。是の諸の因縁の是の身を作す者も、亦虛妄顛倒によるが故に有なり。是の因縁の中に亦因縁の相なく、是の因縁生にも亦生相なし。是の如く思惟すれば、是の身は本より以來、生相あること無きを知り、是の身は無相の故に取る可き無く、無生の故に相無く、無相の故に生無くして、但誑へる凡夫の故に、名けて身と爲すとを知る。菩薩は是の如く、身の實相を觀ずるとき、諸の染欲著心を離れ、常に念を擊けて身に在き、身を循つて觀ず。是の如きを名けて、菩薩の身念處と爲す。外身を觀じ、内外身を觀ずることも亦是の如し。

菩薩は 云何が諸受を 観するや。内受を觀するに、是の受に三種あり、若くは苦、若くは樂、若くは不苦不樂なり。是の諸受は從來する所なく、滅して至る所なく、但虚誑顛倒の妄想より生じ、是の根果は先世の業因縁に屬す。是の菩薩は、是の如く諸受を求むるに、過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず。是の諸の受は、空にして我なく、我所なく、無常破壊の法なりと知る。是の三世の諸受は、空無相無作なりと觀じて、解脱門に入り、亦諸の受の生滅を觀じ、亦諸受の不合一不散不生・不滅を知り、是の如くにして不生門に入る。諸受の不生を知るが故に無相なり、無相の故に不生なり。是の如く知り已つて、心を縁中に繫ぐれば、若し苦樂、不苦不樂來ること有るも、心は受けず著せず、依止を作さず、是の如き等の因縁

によりて諸受を觀する、是を受念處と名く。外受を觀じ、内外受を觀するも亦是の如し。菩薩は云何が念處を觀するや。菩薩は内心を觀するに、是の内心に三相あり。生住・滅なり。是の念を作さく、是の心は從來する所なく、滅して亦至る所なく、但内外の因縁の和合より生ず。是の心は、定んで實相あること無く、亦實の生住滅あること無く、亦過去未來現在世の中に在らず。是の心は内に在らず、外に在らず、中間に在らず。是の心は、亦性なく相なく、亦生ずる者なく、生せしむる者なし。外に種種の雜なる六塵の因縁あり、内に顛倒の心想あつて、生滅相續するが故に、強いて名けて心と爲す」と、是の如く心中には、實に心相は不可得なり。是の心性は不生不滅にして、常に是れ淨相な

【五】 大乘の四念處觀。

り。客塵煩惱の相著しきが故に、名けて不淨心と爲す。心は自ら知らず、何となれば是の心は、心相空なるが故なり。是心は本來實法あると無し。是心は諸法と合する無く、散する無く、亦前際後際、中際なく、無色無形無對なり。但顛倒虛誑にして生ず。是の心は空にして、我なく我所なく、無常無實なり。是を隨順心觀と名く。心相の無生を知れば無生法の中に入る。何となれば是の心は無生無性無相なるを以てなり。智者は能く知り、智者は是の心生滅の相を觀すと雖も、亦實の生滅の法を得ず、垢淨を分別せず、而も心の清淨を得。是の心、清淨なるを以ての故に、客塵煩惱の爲に染せられず。是の如くに内心を觀じ、外心を觀す。内外心を觀することも亦是の如し。

菩薩は、**吾**云何が法念處を觀するや。一切法を觀するに、内に在らず、外に在らず、中間に在らず、過去未來にあらず、現在世の中に但因縁和合

【吾】菩薩は云何が法念處を觀するや。

より妄に生ずと見ゆ、實に定まれること有ると無く、是の法は是れ誰が法といふこと有ると無く、諸法の中に法相は不可得なり。亦法は若くは合し、若くは散すること無く、一切の法は所有なきこと、虚空の如く、一切の法は虛誑なること、幻の如く、諸法の性は淨にして、相汗染せず、諸法は受くる所なし、諸受は所有なければなり。諸法は所知なし、心心數の法は虛誑なればなり。是の如く觀する時、法の若くは一相、若くは異相あることを見ず、一切の法は、空無我なりと觀す。是の時に是の念を作さく、「一切の諸法は、因縁生の故に自性あること無し、是を實空と爲す。實空の故に相ある

こと無し。相あること無きが故に無作なり。無作の故に、法の若くは生じ、若くは滅し、住することを見ず。是の智慧の中より、無生法忍の門に入る。爾の時に諸法の生滅を觀すと雖も、亦無相門に入る。何となれば一切の法の諸法を離るるは、智者の解する所なればなり。是の如く觀する時、心を縁中に繋げ、諸法の相に隨順す。身受心法を念せざれども、是の四法の處る所無きとを知る、是を内の法念處と爲す。外の法念處、内外の法念處も亦是の如し。四正勤、四如意足も亦是の如く分別し、空にして處る所なきを觀すべし。

云何が菩薩所行の五根と爲すや。菩薩摩訶薩は、五根を觀じ、五根を修す。信根とは一切の法は因縁より生じ、顛倒妄見の心の生ずること

旋火輪の如く、夢の如く、幻の如しと信じ、諸法は不淨・無常・苦・空・無我にして、病の如く、癩の如く、刺の如く、災變敗壞すと信じ、諸法は所有あること無く、空拳を以て小兒を誑すが如しと信じ、諸法は過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず、從來する所なく、滅して至る所なしと信じ、諸法は空無相無作・不生不滅なりと信じ、無作・無相にして、持戒・禪定・智慧・解脫・解脫知見を信じ、是の信根を得るが故に復た退轉せず、信根を以て首と爲して、善く持戒に住し、持戒に住し已つて、信心不動不轉にして、一心に業果報に依ることを信じ、諸の邪見を離れて、更に餘語を信せず、但佛法のみを受け、衆僧を信じて、實道の中に住し、直心柔軟にして能く忍び、通達・無礙・不動・不壞にし

【一六】 菩薩所行の五根は何なるか  
 【一七】 信根の義解。

て、力自在なることを得、是を信根と名く。(垂) 精進根とは、晝夜常に精進を行じて五蓋を除却し、五根を攝護し、諸の深き經法を得んと欲し、知らんと欲し、行せんと欲し、誦せんと欲し、讀まんと欲し、乃至聞かんと欲す。若し諸の不善惡法起れば、疾く滅せしめ、未だ生ぜざる者は生ぜざらしめ、未だ生ぜざる諸の善法を生ぜしめ、已に生ぜるは増廣ならしめ、亦不善法を惡まず、亦善法を愛せず、等しく精進を得、直に進み轉せずして正精進を得、定心の故に名けて精進根と爲す。(五) 念根とは、菩薩は常に一心に念じて、布施・持戒・禪定・智慧・解脫を具足せんと欲し、身口意の業を淨めんと欲し、諸法の生滅・住異を、智中に常に一心に念じ、一心に苦集滅道を念じて、根力・覺道・禪定・解脫・生滅・入出を分別し、一心に諸法の不生・不滅・無作・無説を念じて、無生の智慧を得て、諸の佛法を具足するを爲すが故に、一心に念じて、聲聞・辟支佛の心に入ることを得せしめず、常に念じて忘れず。是の如く諸法の甚深・清淨の觀行を得るが故に、是の如き自在の念を得。是を念根と名く。(五) 定根とは、菩薩は善く定相を取り、能く種種の禪定を生じ、了了に定門を知り、善く入定を知り、善く住定を知り、善く出定を知り、定に於いて不著・不味にして、依止を作さず、善く緣する所を知り、善く壞緣を知り、自在に諸の禪定に遊戲し、亦無緣定を知り、他語に隨はず、專ら禪定に隨はず、行自在にして、出入無礙なる、是を名けて定根と爲す。(六) 慧根とは、菩薩は苦を盡す爲に、聖智慧を成就す、是の智慧を諸

- 【五七】 精進根の義解。
- 【五八】 念根の義解。
- 【五九】 定根の義解。
- 【六〇】 慧根の義解。

法を離ると爲し、涅槃と爲す。智慧を以て、一切の三界は無常にして、三衰三毒の火の爲に燃ると觀じ、觀じ已つて、三界の中に於て智慧にも亦著せず、一切の三界を轉じて、空無相無作寂脫門と爲し、一心に佛法を求むること、頭然を救ふが如し。是の菩薩の智慧は、能く壞る者なく、三界に於て依る所なく、隨意の五欲の中に於て、心常に離れ、慧根力の故に無量の功德を積聚し、諸法の實相に於て、利く入つて無疑無難に、世間に於て憂ふること無く、涅槃に於いて喜ぶこと無く、自在の智慧を得るが故に名けて慧根と爲す。菩薩は是の五根を得て、善く衆生の諸根の相を知り、染欲の衆生根を知り、離欲の衆生根を知り、瞋恚の衆生根を知り、亦瞋恚を離るるの衆生根を知り、愚癡の衆生根を知り、亦愚癡を離るるの衆生根を知り、惡道に墮せんと欲するの衆生根を知り、人中に生せんと欲するの衆生根を知り、天上に生せんと欲するの衆生根を知り、利なる衆生根を知り、上中下の衆生根を知り、罪の衆生根を知り、罪なきの衆生根を知り、逆順の衆生根を知り、常に、欲界色界無色界に生ずる衆生根を知り、厚き善根、薄き善根の衆生根を知り、正定邪定不定の衆生根を知り、輕躁なる衆生根を知り、持重の衆生根を知り、輕貪なる衆生根を知り、能く捨する衆生根を知り、恭敬の衆生根を知り、恭敬ならざる衆生根を知り、淨戒、不淨戒の衆生根を知り、瞋恚と忍辱との衆生根を知り、精進と懈怠との衆生根を知り、瞋心、攝心、愚癡、智慧の衆生根を知り、無畏と有畏との衆生根を知り、増上慢と不増上慢との衆生根を知り、正道と邪道との衆生根を知り、

知り、根を守ると、根を守らざるとの衆生根を知り、聲聞を求むるの衆生根を知り、辟支佛を求むる衆生根を知り、佛道を求むる衆生根を知り、衆生根を知る中に於て、自在方便力を得るか故に、名けて根を知ると爲す。菩薩は是の五根を行じ、增長して能く煩惱を破し、衆生を度し、無生法忍を得、是を五力と名く。

復次に、天魔外道も沮壞すること能はず。是を名けて力と爲す。六二 七覺分とは、菩薩の一切法に於て憶はず念せざる、是を念覺分と名け、一切法の中に善法・不善法無記法を求索するに不可得なり、是を擇法覺分と名け、三界に入らずして、諸界の相を破壞する、是を精進覺分と名け、一切の作法に於て、樂著を生せず、憂喜の相を壞するが故に、是を喜覺分と名け、一切法の中に於て、心縁を除いて得べからざるが故に、是を除覺分と名け、一切法は常定の相にして、亂れず散せずと知る、是を定覺分と名け、一切法に於て、著せず、依止せず、亦是の捨心を見ざる、是を捨覺分と名く。菩薩は七覺分の空を觀することは是の如し。

問うて曰く、(空三) 此の七覺分は何を以てか略説するや。答へて曰く、七覺分の中の、念と慧と精進と定とは上に已に廣く説けり。三覺は今當に説くべし。菩薩は喜覺分を行じ、是の喜の實に非ざるを觀ず。何となれば是の喜は因縁より生じ、作法、有法、無常法にして、著す可きの法なり。若し著を生

【六二】 七覺分の義解。  
【六三】 第二三問、七覺分を略説する理由如何。

せば、是れ無常相なり。變壞すれば則ち憂を生ず。凡夫人は顛倒を以ての故に心著す。若し諸法の實に空なるを知れば、是の時、心悔い、「我は則ち虚誑を受く。人の暗中に飢渴に逼られて、不淨物を食し、晝日、觀知して、乃ち其の非を覺るが如し」と。若し是の如く觀じて、實智慧の中に於て喜を生ずる、是を眞の喜と爲す。是の眞の喜を得て、先づ身の麤を除き、次に心の麤を除き、然る後に一切の法相を除き、快樂を遍身心中に得る、是を除覺分と爲す。既に喜を得て諸の觀行を除捨す。所謂無常觀・苦觀・空觀・無我觀・生滅觀・不生不滅觀・有觀・無觀・非有非無觀、是の如きの戲論を盡く捨す。何となれば無相・無緣・無作・無戲論にして、常寂滅なるは、是れ實の法相なればなり。若し捨を行せざれば便ち諸諍あり。若し有を以て實と爲さば、則ち無を以て虚となし、若し無を以て虚と爲さば、則ち有を以て虚と爲し、若し非有非無を以て實と爲さば、則ち有無を以て虚と爲し、實に於ては愛著し、虚に於ては悲憎して、憂喜の處を生ず。云何ぞ捨せざらん。是の如きの喜を得て除捨し、七覺分は則ち具足し滿つるなり。

八正道分とは、正見・正方便・正念・正定は、上に已に説けり。正思惟は今當に説くべし。

薩は諸法の空にして、所得なきに於いて住し、是の如きの正見の中に、正思惟の相を觀じ、一切の思惟は、皆これ邪思惟なりと知る。乃至涅槃を思惟し、佛を思惟するも皆亦是の如し。何となれば一切の思惟分別を斷する、是を正思惟と名くるが故なり。諸の思惟分別は、皆從つて不實なり。虚誑顛

【二二】 八正道の義解。  
【二三】 正思惟を釋す。

倒たうの故ゆゑに分別ぶんべつあり。思惟しゆいの相さうは皆無みなむなり。菩薩ぼさつは是こゝの如ごときの正思惟しせうしゆいの中なかに住ぢゆうし、是こゝれ正是しせうと邪じやと見みす、諸もろの思惟しゆい分別ぶんべつを過すぐ、是こゝれを正思惟しせうしゆいと爲なす。一切いっさいの思惟しゆい分別ぶんべつは、皆みな悉ことごとく平等びやうどうなり。悉ことごとく平等びやうどうなるが故ゆゑに心著しんぢやくせず、是こゝの如ごとき等とうを名なづけて、菩薩ぼさつの正思惟しせうしゆいの相さうと爲なす。(卷しゆうご)正語しせうごとは、菩薩ぼさつは一切いっさいの語ごの皆みな從したがつて虚妄不實こまつふじつにして、顛倒てんだうして相さうを取り、分別ぶんべつを生しやうずることを知る。是こゝの時とき、菩薩ぼさつは是こゝの念ねんを作なさく、「語ごの中なかに語相ごさうなく、一切いっさいの口業くごふ、滅めつして諸もろの語ごの實相じつさうを知る、是こゝれを正語しせうごと爲なす。是こゝの諸もろの語ご從來ぢやうらいする所ところなく、滅めつして亦去またさる所ところなし」と。是こゝの菩薩ぼさつは正語しせうごを行ぎやうじ、諸有しじゆうの所語しよごは皆實相みなじつさうの中なかに住ぢゆうして説とく。是こゝれを以もつての故ゆゑに諸經しよきやうに、「菩薩ぼさつは正語しせうごの中なかに住ぢゆうし、能しやうじやうくごふく清淨じやうじやうくごふの口業くごふを作なし、一切いっさいの語言ごごんの真相しんさうを知しり、所説しよせつあり」と雖いへども邪語じやごに墮だせず」と説とけり。(突んやうごふ)正業しせうごふとは、菩薩ぼさつは一切いっさいの業ごふは、邪相じやさう虚妄不實こまつふじつにして、皆作相みなささうなしと知る。何なんとなれば一業ごふとして、定相ぢやうさうを得うべきこと有あること無なければなり。

【六五】 正語を釋す。  
 【六六】 正業を釋す。  
 【六七】 第二四問、一切の業若し空ならば、佛陀は何故に布施等は善業、殺害等は不善業、餘事の動作は無記なりと説き給ひしや。

問とうて曰いはく、(三毛)若もし一切いっさいの業ごふ皆空みなくうならば、云何いかにんが佛ほとけは、「布施ふせ等は是れ善業ぜんごふ、殺害せがひ等は是れ不善業ふぜんごふ、餘事よじの動作どうさは是れ無記むきの業ごふなり」と説ときたまふや。答こたへて曰いはく、諸業しよごふの中なかに尙なほ一ひとあること無し。何いかに況いはんや三さんあらんや。何なんとなれば如ごとし行おこなふ時ときに過すぐれば、則すなはち去業こごふなく、未いまだ至いたらざるも亦去業またこごふなく、現げん在ざいする時ときも亦去業またこごふなければなり。是こゝれを以もつての故ゆゑに去業こごふなし。

問うて曰く、交す已に過ぐる處は則ち應に無かるべく、未だ到らざる處も亦應に無かるべきも、今去る處は應に是れ去ること有るべし。答へて曰く、今去る處も亦去ること無し。何となれば去業を除いて、今去る處は得べからず、若し去業を除いて、今去る處を得べくんば、是の中に應に去ること有るべし。而も然らず、今去る處を除いては則ち去業なく、去業を除いては則ち今去る處なし。是は相與共に緣するが故に、但今去る處に去ること有りと言ふことを得ず。復次に、若し今去る處に去業あらば、去業を離れて、應當に今去る處あるべく、今去る處を離れて、應當に去業あるべし。

問うて曰く、元ち若し爾れば何の咎あるや。答へて曰く、一時に二の去業あるが故なり。若し二の去者あれば、則ち二の去る者あり。何となれば去る者を除けば則ち去ること無く、若し去る者を除けば今去る處は得べからず。今去る處なきが故に亦去る者なし。復次に、去らざる者も亦去らざるが故に去業なし。若し去者不去者を除いては、更に第三の去者なし。

問うて曰く、二の不去者の去らざるは、應に爾るべし。何を以てか去る者を去らずと言ふや。答へて曰く、去業を除いて去る者は得べからず。去る者を除いて去業は得べからず。是の如き等の一切の業の空なる、是を正業と名く。諸の菩薩は一切諸業の平等に入り、邪業を以て惡を爲さず。正業を以て

【六】 第二五問、過去と未來とは則ち然り、されど今去る處は應に是れ去るべきにあらすや。

【六】 第二六問、若し今去る處に去業ありと言はく、何の誤謬ありや。

【七】 第二七問、去者を去らずといふ理由如何。

善ぜんを爲なさず、所作しよさなく正業しやうごふを作なさず、邪業じやごふを作なさざる、是これを實智慧じつちゑと名なく、即すなはち是これ正業しやうごふなり。復次またつぎ  
 に、諸法しよほふの等ひとしき中なかには、正しやうなく邪じやなし。如實によじつに諸業しよごふを知しり、如實によじつに己おのれを知れし、造つくらず休やすまず、是かくの如ごと  
 きちの智人にんは、常つねに正業しやうごふあつて邪業じやごふなし、是これを名なけて菩薩ぼさつの正業しやうごふと爲なす。〔七二〕正命しやうみやうとは、一切いっさいの資生しやうくわつ活かつ  
 命みやうの具ぐは、悉ことごとく正しやうにして邪じやならず。不戲論ふぎろんの智ちの中なかに住せうして、正命しやうみやうをも取と  
 らず、邪命じやみやうをも捨すてず、亦また正法しやうほふの中なかにも住せうせず、亦また邪法じやほふの中なかにも住せうせず、  
 常つねに清淨しやうじやうち智ちの中なかに住せうし、平等びやうどうの正命しやうみやうに入り、命みやうを見みず、非命ひみやうを見みず、是かくの如ごときの實智慧じつちゑを行ぎやうず、  
 是これを以もつての故ゆゑに正命しやうみやうと名なく。若もし菩薩摩訶薩ぼさつまかさつは、能よく是この三十七品さんじちひんを觀くわんじ、聲聞辟支佛地しやうもんびやくしふちを過すぐるこ  
 とを得え、菩薩位ぼさつゐの中なかに入り、漸漸ぜんぜんに一切種智いっさいしゆちを成じやうずることを得と。

〔七二〕 正命を釋す。

# 卷の第二十

初品の中の三三昧、四禪、四無量心、四無色定を釋す。

三三昧、無相三昧、無作三昧、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處。

問うて曰く、何を以ての故に三十七品に次いで、後に八種の法を説くや。答へて曰く、三十七

品は是れ涅槃に趣くの道なり。是の道を行じ已れば、涅槃の城に到ることを得。涅槃の城に三門あり。所謂空と無相と無作となり。已に道を説く、次に應に到る處の門を説

くべし。四禪等は是れ開門を助くるの法なり。

復次に、三十七品は、是れ上妙の法にして、欲界の心は散亂なり。行者は何の地に依つてか、何の

方便を得ん。當に色界無色界の諸の禪定に依り、四無量心、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處の

中に於て、心を試み、柔軟自在に意に隨ふや不やを知得すべし。譬へば御者の馬を試み、曲折意に隨

ひ、然る後に陣に入るが如し。十一切處も亦是の如く、少許の青色を觀取して、一切の物を視、皆能

く青ならしむ。一切の黃、一切の赤、一切の白も皆是の如し。復た八勝處の縁の中に於て自在なり。

初二の背捨は身の不淨を觀じ、第三の背捨は身を觀じて還つて淨ならしめ、四無量心は、慈は衆生の

皆樂しむを觀じ、悲は衆生の皆苦しむを觀じ、喜は衆生の皆喜べるを觀じ、捨は是れ三心、但衆生を

【一】第一問、三十七品の次に八種の法を説く理由如何。

観じて憎愛あること無し。復次に二種の観あり、一には得解観、二には實観なり。實観とは、是の三十七品なり。實観を以て得難きが故に、次第に得解観を説く。得解観の中には心柔軟にして、實観を得易し。實観を用ゐて、三涅槃門に入ることを得。

問うて曰く、何等か空涅槃門なるや。答へて曰く、諸法は我我所なく空なり、諸法は因縁の和合より生じ、作者あること無く、受者あること無しと観ず、是を空門と名く。復次に、空門は忍智品の中に説くが如し。是れ我我所なきことを知り已らば、衆生は云何が諸法の中に於いて心著するや。行者は思惟して是の念を作さく、〔一〕諸法は因縁より生じて實法あること無く、但相のみあり。而も諸の衆生は、是相を取つて我我所に著す。我今當に是相實に得べき有りや不やを觀すべし」と。審かに之を諦觀するに都て不可得なり。若くは男相女相、一異相等、是相は實に皆不可得なり。何となれば諸法は我我所なきが故に空なり。空の故に男なく女なく、一異等の法は、我我所の中の名字にして、是れ一、是れ異なり。是を以ての故に男女一異の法は實に不可得なり。復次に、四大及び造色の虚空を圍むが故に、名けて身と爲す。是の中、内外入の因縁和合して、識種の身を生じ、是種和合するを得て、種種の事、言語、坐起、去來を作す。空の六種の和合の中に於て、強いて名けて男と爲し、強いて名けて女と爲す。若し六種是れ男ならば、應に六男あるべし、一を以て六と作り六を一と

【二】 二種の觀法。

【三】 第二問、空涅槃門とは何ぞや。

【四】 空三昧。

【五】 無相三昧。

作す可らず。亦地種の中に於て、男女の相なし。乃至識種にも亦男女の相なし。若し各各の中に無ければ、和合の中にも亦無なり。六狗の各各師子を生ずること能はず、和合するも亦生ずること能はず。無性なるが故なり。

問うて曰く、何を以てか男女なきや。神は別あると無しと雖も、即ち身は分別して、男女の異あり。是の身は身分を離るることを得ず、身分も亦身を離るることを得ず。身分の足を見て、有身の分法あることを知り、名けて身と爲すが如し。足等は身分にして、身に異なる、身は即ち是れ男女の相なり。答へて曰く、神已に先づ破すれば身相も亦壞す。今當に重ねて説くべし。若し是有分あるを身と名けば、各各の分の中に、具足して有りと爲し、身は分分に諸分の中にありと爲す。若し諸分の中に具足して身あらば、頭の中に應に脚あるべし。何となれば頭中に具足して身あればなり。若し身は分分に諸分の中に在らば、是身は分と異なること有ると無し。分ある者は諸分に隨ふが故なり。問うて曰く、若し足等の身分は、有分と異なるらば是れ答あり。今足等の身分は、有分の身法と異なるが故に答なし。答へて曰く、若し足等の身分と有分と異なるらば、頭は即ち是れ足なり。何となれば二事は是れ身と異なるらざればなり。又身分は多く、有分は一なり。多を一と作し、一を多と作すべからず。復次に、因なきが故に果は無なり。果なきが故に因なきに非ず。身分と有分と異なるら

【六】 第三問、男女の異なしと言ふ理由如何。

【七】 第四問、是等の身分は有分の身法と異なるが故に何等の矛盾なきにあらずや。

すんば、果なきが故に因も無なるべし。何となれば因果一なるを以てなり。若くは一、若くは異の中に身を求むるに待べからず、身は無なるが故なり。何の處にか男女あらん。若し男女あらば、即ち是れ身とやせん、異身とや爲ん。身は則ち不可得なり。若し餘法に在らば、餘法は色に非るが故に、男女の別なし。但二世の因縁相合して、顛倒の心を以ての故に謂つて男女と爲す。偶に説くが如し。

『俯仰・屈伸・立去來・視瞻・語言の中に實なし。風は識に依るが故に所作あり、是の識滅すれば相は念念に無なり。』

彼此男女は我心を生ず、智慧なきが故に妄に有りと見る、骨鏢相連り

皮肉覆ひ、機關の動作すること木人の如し。

内に實なしと雖も外人に似たり。譬へば洋金を水中に投ずるが如く、

亦野火の竹林を焚くが如く、因縁合するが故に聲あつて出づ。』

是の如き等の諸相は先に説くが如し。此の中に應に廣く説くべし。是を無相門と名く。

無作とは、既に無相を知れば都て無作なり。是を無作門と名く。

問うて曰く、是の三種は、智慧を以て、空を觀じ、無相を觀じ、無作を觀ず。是の智慧は何を以

ての故に三昧と名くるや。答へて曰く、是の三種の智慧は、若し定中に住せざれば、則ち是れ狂慧にして多く邪疑に墮し、能く作す所なけん。若し定中に住せば、則ち能く諸の煩惱を破し、諸法の實相

【八】 無相觀の偈。

【九】 無作三昧。

【一〇】 第五問、三種の智慧を三昧と名くる理由如何。

を得。復次に、是の道は一切世間と異なり、世間と相違す。諸の聖人は、「定中に在つて、實相を得」と説けり、是れ狂心の語に非ず。復次に、諸の禪定の中には、此の三法なし、名けて三昧と爲さず。何となれば還つて退失し、生死に墮すればなり。佛の説きたまふが如し。

「能く淨戒を持つを比丘と名け、能く空を觀するを定を行するの人と名け、一心に常に勤めて精進する者、是を眞實行道の人と名く。

諸樂の中に於て第一なる者、諸の渴愛を斷じ、狂法を滅し、五衆の身及び道法を捨す、是を常樂の涅槃を得と爲す。」

是を以ての故に三解脱門を佛は説いて名けて三昧と爲したまへり。問うて曰く、(二)今何を以ての故に、解脱門と名くるや。答へて曰く、是

の法を行じて解脱を得、無餘涅槃に到る。是を以ての故に解脱門と名く。無餘涅槃は是れ眞の解脱なり。身心の苦に於て脱することを得るは、有餘涅槃にして爲作門なり。此の三法は涅槃に非ずと雖も

涅槃の因なるが故に名けて涅槃と爲す。世間に因中に果を説き、果中に因を説くあり。是の空と無相と無作とは是れ定性なり。是の定相は心心數法に應じて、隨つて身業口業を行す。此の中に起る(三)

心不相應の諸行、和合するを皆名けて三昧と爲す。譬へば玉來れば必ず大臣營從あるが如く、三昧は王の如く、智慧は大臣の如く、餘法は營從の如し。餘法の名は説かずと雖も、必ず應に有るべし。何

【二】 第六問、解脱門と名くる理由如何。  
 【三】 心不相應の諸行とは、物質精神(色心)孰れにも相應せざるものにして、俱舍には十四種、唯識には二十四種を舉ぐ。

となれば、定力は獨り生ぜず、獨り所作あること能はざればなり。是の諸法は共に生じ、共に住し、共に滅し、共に事を成じ、互相に利益す。(二三) 是の空三昧に二行あり。一に五受衆は、一相も異相も無きが故に、空なりと觀ず、二に我と我所の法は得べからざるが故に、無我なりと觀ず。(二四) 無相三昧に四行あり。涅槃を觀じて、種種の苦盡くるが故に、名けて盡と爲し、三毒等の諸の煩惱の火滅するが故に、名けて滅と爲し、一切の法の中に第一なるが故に、名けて妙と爲し、無間を離るるが故に、名けて出と爲す。(二五) 無作三昧に十行あり。五受衆は因縁生と觀するが故に無常なり。身心は惱むが故に苦なり。五受衆の因を觀するに、四行の煩惱、有漏業和合して能く苦果を生ずるが故に名けて集と爲す。六因を以て苦果を生ずるが故に名けて因と爲す。四縁は苦果を生ずるが故に名けて縁と爲す。多からず少からざる等の因縁は、果を生ずるが故に名けて生と爲す。五不受衆の四行を觀するに、是の八聖道分は能く涅槃に到るが故に道なり。顛倒せざるが故に正なり。一切聖人の去處なるが故に迹なり。愛見の煩惱も遮らざるが故に必到なり。是の三解脱門は、九地の中の四禪、未到地、禪中間、三無色に在り、無漏の性なるが故に。或は説く者あり、「三解脱門は一向に無漏なり。三三昧は或は有漏、或は無漏なり。是の故に三昧と解脱との二名あり」と。是の説の如きは十一地に在り、六地と三無色と欲界と及び有頂地となり。若し有漏は繋つて十一地に在り、無漏は不繋なり。喜根、樂根、捨根、相應、初學は欲界の中に

【二三】 空三昧の二行。

【二四】 無相三昧の四行。

【二五】 無作三昧の十行。

在り。成就は色無色界の中に在り。是の如き等の成就と不成就と修と不修とは、阿毗曇の中に廣く説くが如し。復次に、二種の空義あつて、一切の法は空なりと觀す、所謂衆生空と法空となり。衆生空は上に説くが如し。法空とは諸法の自相は空なり。佛、須菩提に告げたまふが如きは、色と色相とは空なり、受想行識識相は空なり」と。

問うて曰く、(二)衆生は空にして、法は空ならざるは是れ信す可し。法の自相の空なるは是れ信す可らず。何となれば若し法の自相空なれば、則ち生なく滅なし、生なく滅なきが故に罪なく福なし。罪なく福なきが故に何ぞ學道を用ゐんや。答へて曰く、法空あるが故に罪福あり、若し法空なくんば罪福ある可らず。何となれば若し諸法實に自性あらば、則ち壞す可き無く、性相は因縁より生ぜず。若し因縁より生ずれば、是れ作法なり。若し法性は是れ作法ならば則ち破すべし。若し法性は作る可く、破す可しと言はば、是事は然らず。性は不作法に名け、因縁を待て有らず。諸法に自性あり、自性あれば則ち生ずる者なし、性は先より有なるが故なり。若し生なければ則ち滅なく、生滅なきが故に罪福なし。罪福なきが故に、何ぞ學道を用ゐん。若し衆生に眞性あらば、則ち能く害する無く、能く利する無し、「そは」自性定るが故なり。是の如き等の人は、則ち恩義を知らず、業の果報を破るし法空の中にも、亦法空の相なし、汝は法空を得て心著するが故に、是の難を生ず。是の法空に、

【七】第七問、法の自相の空なるは信す可らず、そは若し自相空なれば無性不滅、無罪無難にして、學道を用なければなり。

法空の中にも、亦法空の相なし、汝は法空を得て心著するが故に、是の難を生ず。是の法空に、

憐愍の心を以て、愛結を斷じ、邪見を除かん爲の故に説きたまへり。復次に、諸法の實相は能く諸苦を滅し、諸の聖人の眞實の行處なり。若し是の法空に性あらば、一切の法空を説く時、云何が亦自ら空せん。若し法空の性なくんば、汝何の難する所かあらん。是の二空を以て、能く諸法の空を觀じ、心諸法を離るることを得、世間は虚誑にして幻の如しと知る。是の如く空を觀じ、若し是の諸法の空相を取らば、是の因縁より憍慢等の諸の結使を生じて言はく、「我能く諸法の實相を知る」と。是の時應に無相門を學すべし、そは空相を取るを滅するを以てなり。若し無相の中に於て戲論を生せば、分別して所作あらんと欲し、是の無相に著す。是の時復自ら思惟すらく、「我は謬錯を爲す。諸法の空無相の中に、云何が相を得、相を取つて戲論を作さん。是の時應に空無相に隨ふべし、身に意を行じて所作あるべからず。應に無作相を觀じ、三毒を滅すべし。身口意の業を起すべからず。三界の中に生身を求むるべからず」と、是の如く思惟する時、還つて無作の解脱門に入る。是の三解脱門は、摩訶衍の中には是れ一法なり。行の因縁を以ての故に三種ありと説く。諸法は空なりと觀する、是を空と名け、空の中に於いて相を取る可らず、是の時空轉するを無相と名け、無相の中に所作あつて、三界に生ずることを爲すこと有るべからず、是の時無相轉するを無作と名く。譬へば城に三門あり、一人の身は、一時に三門より入ることを得ず、若し入るには、則ち一門よりするが如し。諸法の實相は是れ涅槃城なり。城に三門あり、空と無相と無作となり。若し入空門に入つて是の空を得ず、亦相

を取りせんば、是の人は直に入りて、事を斷するが故に二門を須あす。若し是の空門に入り、相を取つて是の空を得ば、是の人に於ては、名けて門と爲さず、通達更に奪れり。若し空相を除けば、是の時は無相門より入る。若し無相の相に於いて、心著して戲論を生せば、是の時無相の相を取ると除いて、無作門に入る。阿毘曇の義の中には、是の空解脱門は苦諦を緣じ、五衆を攝す。無相解脱門は一法を緣じ、所謂數緣盡く。無作解脱門は三諦を緣じ、五衆を攝す。摩訶衍の義の中には、是三解脱門は諸法の實相を緣じ、是の三解脱門を以て、世間は即ち是れ涅槃と觀す。何となれば涅槃は空無相無作にして、世間も亦是の如くなればなり。

問てう曰く、三經に説くが如くんば、涅槃は一門なり、今何を以てか

三と説くや。答へて曰く、先に已に説けり、法は一なりと雖も而も義に三

ありと。復次に、應に度すべき者に三種あり。愛多き者、見多き者、愛と見と等しき者なり。見多き者には爲に空解脱門を説く。一切の諸法を見るに、因緣より生じて自性あると無し。自性なきが故に空なり、空の故に諸見滅す。愛多き者には爲に無作解脱門を説く。一切法を見るに無常苦にして、因緣より生ずと見已つて、心愛を厭離して、即ち道に入ることを得。愛と見と等しき者には爲に無相解脱門を説く。是の男女等の相は無なりと聞か故に愛を斷じ、一異等の相は無なるが故に見を斷ず、佛は或は一時に二門を説き、或は一時に三門を説きたまふ。菩薩は應に遍なく學して、一切の道を知

【七】 第八問、總の所説によれば涅槃は一門なり、今それ三門と言ふ理由如何

るべきが故に三門を説き、更に説いて餘事を行はんと欲するが故に、三解脱門の義を略説す。

(一八) 四禪に二種あり、一には淨禪、二には無漏禪なり。云何が淨禪と名くるや。有漏善の五衆是れなり。

云何が無漏と名くるや。無漏の五衆なり。(一九) 是れ四禪の中に攝する所の身口業なり。是れ色法の

餘殘の非色法にして、一切不可見無對なり。或は有漏或は無漏なり。有漏とは善有漏の五衆にして、

無漏とは無漏の五衆なり。皆是の有爲有漏なる者は色界繫にして、無漏は不繫なり。禪は身業口業・

及び心不相應に攝す。諸行は是れ心に非ず。心數法に非ず、心相應に非ず。禪は受衆、想衆、及び相

應行衆に攝す。是の心數法も亦心相應なり。禪は心意識に攝す。但心な

り。四禪は或は隨心行にありて受相應に非ず。或は受相應にして隨心行に

非ず。或は隨心行にして亦受相應なり、或は隨心行にも非ず、受相應にも

非ず。隨心行にして受相應に非ずとは、四禪を、身業、口業、隨心行と心

不相應の諸行、及び受に攝す。受相應にして隨心行に非ずとは、四禪を心意識に攝す。隨心行にして

亦受相應とは、四禪を想衆及び相應行衆に攝す。隨心行に非ず、亦受相應に非ずとは、四禪の中に攝

する、隨心行と心不相應諸行とを除き、餘殘の心不相應なり。諸の行と想と行相應も亦是の如し。四

禪三禪中の二禪は、隨覺行に非ず、亦觀相應に非ず、初禪は或は隨覺行あつて觀相應に非ず、或は觀

相應にして隨覺行に非ず、或は隨覺行あり亦觀相應なり。或は隨覺行に非ず、觀相應に非ざるあり。

【一八】 二種の四禪——(一)淨禪、(二)無漏禪。  
【一九】 禪に身口業・心不相應・隨心行及び受相應等の四句分別を攝す。

隨覺行にして觀相應に非ずとは、初禪を身業・口業及び隨覺行・心不相應の諸行及び觀に攝す。觀相應にして隨覺行に非ずとは諸覺なり。隨覺行にして亦觀相應とは、覺觀に相應する諸の心・心數の法なり。隨覺行に非ず、亦觀相應に非ずとは隨覺行・心不相應諸行を除いて、餘殘の心不相應諸行なり。四禪は皆因緣あり、亦因緣に與みず、四禪の中の初禪は或は次第にして、次第緣に與かるに非ず、或は次第にして、亦次第緣に與かり、或は次第に非ず、亦次第緣に與かるに非ず。次第にして次第緣に與るに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心・心數の法なり。次第にして亦次第緣に與るとは、過去現在の心・心數の法なり。次第に非ず亦次第緣に與らすとは、未來世に生ぜんと欲する心・心數法を除いて、餘殘の未來世の中の心・心數の法、身業・口業及び心不相應諸行なり。第二第三禪も亦是の如し。第四禪は次第にして次第緣に與らすとは、未來世の中に生ぜんと欲する、心・心數の法、及び無想定にして、若くは生じ、若くは生ぜんと欲す。次第にして、亦次第緣に與るとは、過去現在の心・心數法なり、次第に非ず、亦次第緣に與るに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心・心數法を除いて、餘殘の未來世の心・心數法なり。心の次第、心不相應諸行を除いて、餘殘の心不相應の諸行、及び身業、口業なり。四禪の中に身業・口業、心不相應の諸行、是の緣に與ると、緣に非ざると、餘殘の亦是緣じ、亦是緣に與るを攝す。是の四禪は亦是増上緣、亦是増上緣に與みす。是の如き等は阿毗曇の中に廣く分別す。菩薩は禪方便及び禪相、禪支を得ることは、禪波羅蜜多の中に、已に廣く説けり。

問うて曰く、(三〇) 是の般若波羅蜜(多)の論議の中には、但諸法の相は空なりと説く、菩薩は云何が空法の中に於て、能く禪定を起すや。答へて曰く、菩薩は諸の五欲及び五蓋は、因縁より生じて自性なく空にして所有なきとを知り、之を捨つると甚だ易し。衆生は顛倒の因縁の故に、此の少弊の樂に著して、而も禪中の深妙の樂を離る。菩薩は是衆生の爲の故に大悲心を起し、禪定を修行して心を縁中に繋げ、五欲を離れ、五蓋を除き、大喜の初禪に入り、覺觀を滅し、心を攝して深く内清淨に入り、微妙の喜を得て第二禪に入る。深喜の散定なるを以ての故に一切の喜を離れ、遍滿の樂を得て第三禪に入る。一切の苦樂を離れ、一切の憂喜及び出入の息を除き、清淨微妙の捨を以て、而も自ら莊嚴して、第四禪に入る。是菩薩は、諸法は空無相なりと知ると雖も、衆生の知らざるを以ての故に禪相を以て衆生を教化す。

若し實に諸法の空あらば、是を名けて空と爲さず、亦五欲を捨つべからず、而も禪を得れば捨も無く得も無きが故に、今諸法の空相も亦得べからず。是の難を作して、「若し諸法空ならば、云何が能く禪を得ん」と言ふべからず。

復次に、是の菩薩は、相を取つて、以て愛著せざるが故に、禪を行す。人の藥を服して、以て病を除かんと欲するに、以て美とせざるが如し。戒を清淨にし、智慧を成就せんが爲の故に禪を行す。菩薩は一一の禪の中に於て大慈を行じ、空を觀じ、禪に於て依止する所なく、五欲の麤誑顛倒を以ての

【三】 第九問、若し諸法の相は空ならば、菩薩は如何が空法の中に於て、能く禪定を起すや。

故に細微妙の虚妄の法を以て治す。譬へば毒は能く諸毒を治する有るが如し。

四無量心とは慈、悲、喜、捨なり。慈は衆生を愛念するに名け、常に安隱の樂事を求めて、以て之を饒益す。悲は衆生を愍念するに名け、五道の中に種種の身苦と心苦とを受く。喜は衆生をして樂に從ひ、歡喜を得せしめんと欲するに名く。捨は三種の心を捨つるに名く。但衆生を念するに、憎ます愛せず、慈心を修するは、衆生の中の瞋覺を除かん爲の故なり。悲心を修するは、衆生の中の惱覺を除かん爲の故なり。喜心を修するは、衆生の悅樂ならざるを除かん爲の故なり。捨心を修するは、衆生の中の愛憎を除かん爲の故なり。

問うて曰く、(三二) 四禪の中に已に四無量心、乃至十一切處あり。今何を以ての故に別に説くや。答つて曰く、四禪の中に皆説くと雖も、是の法は若し別に名字を説かずんば、則ち其の功德を知らず。譬へば囊中の寶物は、開いて出さずんば、則ち人の知らざるが如し。若し大福德を得んと欲する者には爲に四無量心を説き、色を患厭すると牢獄に在るが如くんば、爲に四無量心を説き、緣中に於て自在を得ると能はず、意に隨つて所縁を觀するものには、爲に八勝處を説き、若し道を遮る有つて通達するを得ざれば、爲に八背捨を説き、心調柔ならず、禪より起ち、次第に禪に入ると能はざれば、爲に九次第定を説き、一切の緣、遍ねく照すとを得るも、意に隨つて解を得ると能はざれば、爲に十一切處を説く、若し十方の衆生を念じて、樂を得

【三二】 第一〇問、四無量心乃至十一切處は四禪の中にあり、今之を別説する理由如何。

せしむる時、心數法の中に生ずる法を名けて慈と爲し、是の慈に相應する受と想と行と識との衆は、是を心數法と名け、身業、口業、及び心不相應諸行を起すに、是の法の和合するを、皆名けて慈と爲す。慈の爲の故に、是の法生すれば、慈を以て主と爲す。是の故に慈のみ名を得。譬へば一切の心數法の如きは、皆是れ後世の業因縁なりと雖も、而も但思のみ名を得、作業の中に於て、思は最も力あるが故なり。悲喜捨も亦是の如し。是の慈は色界に在つては、或は有漏、或は無漏、或は斷す可く、或は斷す可らず。亦根本禪の中、亦是禪中間に在つては、三根相應して、苦根憂根を除く。是の如き等は阿毗曇に分別して説けり。衆生の相を取るが故に有漏なり。相を取り已つて諸法の實相に入るが故に無漏なり。是を以ての故に無盡意菩薩の問の中に説く、「慈に三種あり、一には衆生縁、二には法縁、三には無縁なり」と。

問うて曰く、(三) 是四無量心は云何が行せん。答へて曰く、(三) 佛處處の經の中に説きたまふが如し。「比丘あり慈相應の心を以て、悲なく、恨なく、怨なく、惱なく、廣大無量にして、善く慈心を修し、解を得て遍滿す。東方世界の衆生も慈心にして、解を得て遍滿し、南西北方、四維上下、十方の世界の衆生の悲喜捨相應の心を以てするも亦是の如し」と。慈相應の心とは慈の心數法に名け、能く心中の慣濁、所謂る瞋恨慳貪等の煩惱を除く。譬へば淨水の珠を濁水の中に著けば、水、即ち清きが如

【三】 第一一問、四無量心は何にして行すべきか。

【三】 以下衆生縁の義解。

し、嗔恨なしとは、衆生の中に於て、若くは因縁あり、若くは因縁なくして瞋り、若くは惡口罵言、  
 害罵辱せんと欲する、是を瞋と名け、時節を待ち、處を得て、有する所の勢力もて、當に害を加ふべ  
 き、是を恨と名く。慈を以て此の二事を除くが故に瞋恨なしと名く。慈なく惱恨なしとは、即ち是れ怨  
 の初め嫌を恨と爲し、恨久しうして怨と成り、身口業の害を加ふる、是を惱と名く。復次に、初めて  
 瞋結を生ずるを名けて瞋と爲し、瞋増長し、籌量し、著を持して、心中未だ決了せざる、是を恨と名  
 け、亦是れ怨と名く。若し心已に定まつて畏忌する所なき、是を惱と名く、慈心の力を以て除捨て、  
 此三事を離るる、是を瞋なく恨なく怨なく、惱なしと名く。此れ無瞋無恨無怨無惱なり。佛は是を以  
 て慈心を讃嘆したまふ。一切衆生は皆苦を畏れて樂に貪著す。瞋は苦の爲の因縁にして、慈は是れ樂  
 の因縁なり。衆生は是の慈三昧を聞き、能く苦を除き、能く樂を興ふるが故に一心に精進を勤め、是  
 の三昧を行す。是を以ての故に無瞋無恨無怨無惱なり。廣大無量とは、一心を分別するに三名あり、  
 廣は一方に名け。大は高遠に名け、無量は下方及び九方に名く。復次に、下は廣と名け、中は大と名  
 け、上は無量と名く。復次に、四方の衆生の心を緣するは是を廣く緣すと名け、四維の衆生の心は、  
 是を大に緣すと名け、上下方の衆生の心は是を無量と名く。復次に、瞋恨の心を破る。是を廣と名  
 け、怨心を破る、是を大と名け、惱心を破る、是を無量と名く。復次に、一切の煩惱心、小人の所行  
 は小事を生ずるが故に、名けて小と爲し、復此より小なるが故に、瞋恨怨惱と名け、是の小中の小を

破るは、是を廣大無量と名く。何となれば大の因縁は、常に能く小事を破すればなり。廣心は罪を畏れ、地獄に墮せんことを畏るるが故に、心中の惡法を除く。大心とは福德の果報を信樂し、惡心を除く。無量心とは涅槃を得んと欲するが爲の故に惡心を除く。復次に、行者は持戒清淨の故に是の心廣く、禪定を具足するが故に是の心大に、智慧を成就するが故に是の心無量なり。是の惡心を以て得道の聖人を念ずるは、是を無量心と名け、無量の法を用ゐて聖人を分別するが故に、諸天及び人の尊貴の處を念ずるが故に、名けて大心と爲し、諸餘の下賤の衆生及び三惡道を念ずる、是れを廣心と名け、愛する所の衆生の中に於て、惡念廣くして、念に於て已るを以ての故に、名けて廣心と爲し、惡念の中の人を以て、是を大心を名け、惡念を惡念して、其功多きを以ての故に無量心と名く。復次に狹縁心の爲の故に名けて廣と爲し、小縁心の爲の故に名けて大と爲し、有量心の爲の故に名けて無量と爲す。是の如き等は義を分別す。善修とは是の惡心牢固にして、初めて惡心を得るも、名けて修と爲さず。但、愛念するの衆生の中に非ず、但好き衆生の中に非ず、但己を益する衆生の中に非ず、但一方の衆生の中に非ざるを名けて善修と爲す。久しく行すれば得ること深く、愛樂愛憎及び中の三種の衆生は、正等にして異なることなし。十方五道の衆生の中にて、一惡心を以て之を視ること、父の如く母の如く、兄弟姉妹子姪の如くし、智識として常に好事を求め、利益安隱なることを得せしめんことを欲し、是の如きの心、遍ねく十方の衆生の中に滿つ。是の如きの惡心を衆生縁と名け、多く

は凡夫人の行處、或は有學の人の未だ漏を盡くさざる者に在り。

法縁を行すとは、諸の漏盡の阿羅漢辟支佛諸備、是の諸の聖人は、吾我の相を破し、一異

の相を滅するが故に、但因縁の相續に從つて、諸欲を生ずるを觀じ、以て衆生を慈念する時、和

合の因縁の相續より但空のみを生ずす。五衆は即ち是れ衆生なり。是の五衆を念するに、慈念を

以てす。衆生は是の法の空なることを知らず、而も常に一心に樂を得んことを欲す。聖人は之を慈

み、意に隨つて樂を得せしむ、世俗の法の爲の故に名けて法縁と爲す。無縁とは、是の慈は但諸

佛のみ有り。何となれば諸佛の心は、有爲無爲の性中に住せず、過去世

未來現在世に依止せず、諸縁は實ならず、顛倒虛誑なりと知りたまふが故

に、心に所縁なきなり。佛は、衆生の諸法實相を知らざるを以て五道に住

來し、心諸法に著して、分別し取捨する「が故に」、是の諸法實相の智慧を以て、衆生をして之を得せ

しめたまふ。是を無縁と名く。譬へば貧人に給賜するに、或は財物を與へ、或は金銀寶物を與へ、或

は如意眞珠を與ふるが如し。衆生縁、法縁、無縁も亦復是の如し。是れを略して慈心の義を説くと爲

す。悲心も亦是の如く、憐愍の心を以て遍ねく十方の衆生の苦を觀じて、是の念を作さく、「衆生は

慈む可し、是をして種種の苦を受けしむること莫れ」と。無瞋、無恨、無怨、無惱の心、乃至十方も

亦是の如し。

【四】 法縁の義解。

【五】 無縁の義解。

問うて曰く、三種の衆生あり。樂を受くる有り、諸天及び人の少分の如し。苦を受くる有り、三惡道及び人中の少分の如し。不苦不樂を受くる有り、五道の中の少分なり。云何ぞ慈を行じては一切衆生皆樂を受くと觀じ、悲を行する者は、一切衆生は皆苦を受くと觀するや。答へて曰く、行者は是の慈無量心を學せんと欲する時、先づ願を作さく、「願くは衆生をして種種の樂を受けしめん」と。樂を受くるの人の相を取り、心を攝して禪に入り、是の相漸漸に増廣して、即ち衆生は皆樂を受くと見る。譬へば火を鑽るに先づ輭草、乾牛屎を以てすれば、火勢轉た大にして、能く大なる濕木を燒くが如し。慈三昧も亦是の如く、初めて慈願を生ずる時は、唯諸の親族知識に及ぼし、慈心轉た廣くして、怨親同等に皆樂を得るを見る。是れ慈禪定の増長し成就せるが故なり。悲喜捨の心も亦是の如し。

問うて曰く、(三三) 悲心の中には、苦を受くるの人の相を取り、喜心の中には喜を受くるの人の相を取る。捨心の中には何等の相を取るや。答へて曰く、不苦不樂を受くる人の相を取るなり。行者は是の心漸漸に増廣するを以て、盡く一切の不苦不樂を受くるを見る。

問うて曰く、(三六) 是の三種の心の中には應に福德あるべし。是の捨心は、衆生の不苦不樂に於て、何

【三六】 第一二問、三種の衆生あり、何故に慈を行ずるときは一切衆生皆樂を受け、悲を行する者は、一切皆苦を受くと觀するや。

【三七】 第一三問、悲心の中に苦を受くるの相を取り、喜心の中には喜を受くるの相を取る。捨心の中には何等の相を取るか。

【三八】 第一四問、是の捨心は衆生の不苦不樂に於て何等の徳益あるか。

等の體露あるや。答へて曰く、行者は是の念を作さく「一切の衆生は、樂を離るる時は苦を得、苦の時即ち是れ苦なり。不苦不樂を得れば、則ち安隱なり」と、是を以て饒益す。行者は慈喜心を行じて、或る時は貪著の心生じ、悲心を行じて、或る時は憂愁の心生す。是の貪と憂とを以ての故に心亂る。是の捨心に入つて、此の貪憂を除くが故に名けて捨心と爲す。

問うて曰く、三心と捨心とは別あることを知る可し。慈心は衆生をして樂ならしめ、喜心は衆生をして喜ばしむ。樂と喜と何等の異なるや。答へて曰く、身の樂を樂と名け、心の樂を喜と名く。五識相應の樂を樂と名け、意識相應の樂を喜と名く。五塵の中に生ずる樂を樂と名け、法塵の中に生ずる樂を喜と名く。先づ樂の願を求めて、衆生をして樂に従ふことを得せしめ、因つて衆生をして喜を得せしむ。人の貧人を憐愍して、先づ寶物を施す、是を樂と名け、後賣買せしめて、五欲の樂を受くることを得せしむ、是を喜と名く。復次に、欲界の樂を願つて、衆生をして得せしむ、是を樂と名け、色界の樂を願つて、衆生をして得せしむ、是を喜と名く。復次に、欲界及び初禪の意識相應の樂、二禪の中の一切の樂は、是を喜と名く。巖なる樂を樂と名け、細なる樂を喜と名く、因の時を樂と名け、果の時を喜と名く。初めて樂を得る時は、是を樂と名け、心を觀じて内に樂相を發し、外に歌舞踊躍を現はす、是を喜と名く。譬へば初めて樂を服す

【元】第一五同、喜と樂との相異如何。

る時は、是を樂と名け、藥の發して身に逼する時は、是を喜と名くるが如し。

問うて曰く、**三〇** 若し爾れば何を以てか、二心を和合して一無量と作さずして、分つて二法と爲すや。答へて曰く、行者は初め心未だ攝せず、未だ深く衆生を愛すること能はざるが故に、但樂を興へ、心を攝して、深く衆生を愛するが故に喜を興ふ。是を以ての故に樂を先にして喜を後にす。

問うて曰く、**三一** 若し爾らば慈喜と次第せざるや。答へて曰く、慈心を行する時、衆生を愛すること兒子の如く、樂を興へんことを願つて、慈三昧を出すが故に、衆生の種種の苦を受くるを見て深く愛心を發し、衆生を憐愍して深く樂を得せしむ。譬へば父母は常に子を愛すと雖も、若し病を得ること急なれば、是の時愛心轉た重きが如し。菩薩も亦是の如く、悲心に入つて衆生の苦を觀じ、憐愍の心生じて便ち深き樂を興ふ。是を以ての故に悲心は中に在り。

問うて曰く、**三二** 若し是の如く深く衆生を愛せば、復何を以てか捨心を行するや。答へて曰く、行者は是の如く觀じて、常に衆生を捨てず、但是の三種の心を捨つ。何となれば餘法を妨げ廢するを以てなり。亦是の慈心を以て、衆生をして樂ならしめんと欲して、而も樂を得せしむること能はず。悲心は衆生をして苦を離れしめんと欲するも、亦苦を離るるを得せしむること能はず。喜心を行する時

**【三〇】** 第一六問、喜と樂との二心を和合して一無量心と作さず、分つて二法と爲す理由如何。

**【三一】** 第一七問、何故に慈喜と次第せざるや。

**【三二】** 第一八問、若し是の如く深く衆生を愛せば、捨心を行するは何故なるか。

も、亦衆生をして大喜を得せしむると能はず。此は但憶想のみにして、未だ實事あらず。衆生をして實事を得せしめんと欲せば、當に發心して佛と作るべし。六波羅蜜を行じ、佛法を具足すれば、衆生をして是の實樂を得せしむ。是を以ての故に是の三心を捨てて、是の捨心に入る。復次に、慈・悲・喜の心の如きは愛深きが故に、衆生を捨すること難く、是の捨心に入るが故に易く出離することを得。問うて曰く、三菩薩は六波羅蜜を行じ、乃至成佛するも、亦一切衆生をして、苦を離れて樂を得せしむると能はず、何を以てか但是の三心、憶想の心生じて實事あること無しと言ふや。答へて曰く、是の菩薩は佛と作る時、一切衆生をして樂を得せしむること能はずと雖も、但菩薩は大誓願を發し、是の大願に従つて、大福德の果報を得、大報を得るが故に、能く大に凡夫を饒益す。聲聞は是の四無量を行じ、自ら調へ、自ら利する爲にするが故に、亦但空しく衆生を念ず。諸の菩薩は是の慈心を行じ、衆生をして苦を離れ樂を得せしめんと欲し、此の慈心の因縁に従つて、亦自ら福德を作し、亦他をして福德を作さしめ、果報を受くる時、或は轉輪聖王と作つて、饒益する所多し。菩薩は或は出家して禪を行じ、衆生を引導し、教へて禪を行せしめ、清淨界に生じて、無量の心樂を受くるとを得しめ、若し備と作る時は、無量阿僧祇の衆生と共に、無餘涅槃に入る。空心の願に比するに、益是を大利と爲す。乃至舍利餘法をもて饒益する所多し。復次に、若し

【三】 第一九問、菩薩は六度を  
行じ、佛と成るも亦一切衆生  
をして離苦得樂せしむる能はず、  
然るに但この二心憶想の  
心生じて實事あることなしと  
言ふは何故なるか。

一佛盡く一切衆生を度せば、餘佛は則ち復た度する所なけん。是れ則ち未來の佛なく、佛種を斷すと爲す。是の如き等の過あり、是を以ての故に一佛は一切衆生を度せず。復次に、是の衆生の性は癡に從つて有り、實に定まれる法に非ず。三世十方の諸佛も衆生を求むるに實に不可得なり、云何ぞ盡く一切を度せん。

問うて曰く、若し空にして盡く度すべからずんば、少も亦俱に空なり、何を以てか少を度するや。答へて曰く、我は三世十方の佛は、一切衆生を求むるに、不可得なるが故に、度する所なしと言ふ。

汝は難じて、何を以て盡く度せずやと言ふ。是を負處に墮すと爲す。汝は負處に於て自ら抜くこと能はず、而も難じて、衆生の中に多少の一種なし、何を以てか少を度するやと言ふ。是を重ねて負處に墮すと爲す。復次に、諸法實相の第一義の中には、則ち衆生もなく、亦度もなし。但だ世俗の法を以ての故に、説いて度する有りと言ふ。汝は世俗の中に於て第一義を求む、是の事は不可得なり。譬へば瓦石の中に珍寶を求むるも得べからざるが如し。復次に、諸佛の初發心より、乃至法盡くるまで、其の中間に於て有する所の功德は、皆是れ作法にして限あり量あり、初あり後あるが故に、度する所の衆生も亦應に量あるべし、以て因緣果報有量の法に隨つて、盡く無量の衆生を度すべからず。大力士の弓は勢大なりと雖も、箭は遠くして必ず墮つるが如く、亦劫盡の大火は、三千世界を燒

【四】第二〇問、若し空にして得度すべからずんば、少も亦空なり、何を以てか少を度するや。

きて、明に照すと無量にして久しと雖も必ず滅するが如し。菩薩の成佛も亦是の如く、初發意より精進の弓を執り、智慧の箭を用ゐて深く佛法に入り、大に佛事を作すも必ず當に滅すべし。菩薩は一切種智を得る時、身より光明を出だして無量の世界を照し、一一の光明は變じて無量の身を化作して、十方無量の衆生を度し、涅槃の後、八萬四千の法聚舍利もて、衆生を化度するも、劫盡の火の照ること久しければ、亦復た滅するが如し。

問うて曰く、(三)汝は自ら光明變じて無量の身を化作し、十方無量の衆生を度すと言ふ。今何を以てか有量の因縁の故に、度する所も亦有量なりと言ふや。答へて曰く、無量に二種あり。一には實の無量にして、諸の聖人も量ると能はざる所なり。譬へば虚空涅槃衆生性の如し、是は量る可らず。二には法の量る可き有れども、但力の劣れる者は量ること能はず。譬へば須彌山大海水の斤兩滴数の多少の如く、諸佛菩薩は能く知れども、諸天世人は知る能はざる所なり。佛の衆生を度したまふも亦是の如く、諸佛は能く知りたまふも、但汝等が及ぶ所に非ざるが故に無量と言ふ。復次に、諸法は因縁の和合より生ずるが故に自性あること無し。自性なきが故に常に空なり。常に空なる中には衆生は不可得なり。佛の説きたまふが如し。

『我道場に坐する時、智慧は不可得なり。空拳にして小兒を誑し、以て一切を度す。』

【三】 第二問、先に光明變じて無量の身を化作し、十方無量の衆生を度すと言ひ、今又有量の因縁の故に度する所も有量なりと言ふは、抑も如何なる理由なるか。

諸法實相は則ち是れ衆生の相なり。若し衆生の相を取れば、則ち實道を遠離す。

常に常空の相を念ずる、是の人は道を行するに非ず。不生滅の法の中に、而も分別の相を作す。

若し分別憶想は、則ち是れ魔羅の網なり。動せず、依止せざる、是を則ち法印と爲す。』

問うて曰く、奚も若し樂に二分あり、慈心と喜心となり。悲心もて苦を觀せば何を以てか二分と作さ

ざるや。答へて曰く、樂は是れ一切衆生の愛重する所なるが故に二分と作す。是の苦は愛せず念せざ

るが故に二分と作さず。又樂を受くる時は心頓なるも、苦を受くる時は心墜なり。阿育王の弟、韋

陀輪の如きは、七日、闍浮提の王と作り、上妙を得て自ら五欲を恣に

す。七日を過ぎ已て阿育王、問うて曰く、「闍浮提の王として樂を受け歡

暢せるや不や」。答へて言はく、「我、見ず、聞かず、覺せず、何となれば

旃陀羅、日に鈴を振り高聲に唱ふらく、七日の中已に爾許の日過ぎぬ、

七日を過ぎ已つて汝當に死すべしと、我、是の聲を聞いてより、闍浮提の王として上妙の五欲を作

すと雖も、憂苦深きが故に聞かず見ずこと。是を以ての故に知りぬ、苦の力は多く樂の力は弱し。若

し人遍身に樂を受くるも一處に針を刺すことを得ば、衆樂都て失して但刺の苦のみを覺えん。樂の力

は弱きが故に二分すれば乃ち強く、苦の力は多きが故に一處にして足ると明なり。

問うて曰く、是の四無量心を行すれば何等の果報を得るや。答へて曰く、佛説きたまはく、「是の

【美】 第二二問、樂を二分して、苦を二分せざる理由如何。  
【毛】 第二三問、四無量心を行する人の果報は如何。

慈三昧に入れば、現在に五の功德を得。火に入れども焼けず、毒に中れども死せず、兵刃も傷けず、終に横死せず、善神擁護す、無量の衆生を利益するを以ての故に是の無量の福德を得、是の有漏の無量心を以て衆生を縁するが故に清淨處に生ず、所謂色界なり」と。

問うて曰く、佛は何を以ての故に慈の報は梵天に上生すと説きたまふや。答へて曰く、梵天は衆生の尊貴する所、皆聞き、皆識るを以ての故なり。佛は天竺國に在す。天竺國には常に婆羅門多し。婆羅門の法の所有の福德は、盡く梵天に生ぜんことを願ふ。若し衆生慈を行すれば、梵天に生ずと聞けば、皆、多く信向して慈法を行せん。是を以ての故に慈を行すれば、梵天に生ずと説く。

復次に、嫉を斷する天を皆名けて梵と爲し、梵と説けば皆色界を攝す。是を以ての故に。嫉を斷する法を名けて梵行と爲す。欲を離るるを亦梵と名く。若し梵と説けば、則ち四禪四無色定を攝す。復次に、覺觀は滅し難きが故に上地の名を説かず、譬へば五戒の中の口律儀の如きは、但一種の不安語のみを説けば則ち三事を攝す。

問うて曰く、慈に五功德あり、悲、喜、捨は何を以てか功德ありと説かざるや。答へて曰く、上の譬喩の如く、一を説けば則ち三事を攝す。此も亦是の如く、若し慈を説けば、則ち已に悲喜捨を説くなり。復次に、慈は是れ眞の無量なり。慈は王の如く、餘の三は隨從せる人民の如しと爲す。何

【六】 慈三昧の五功德。

【七】 第二四問、慈の報として梵天上に生ずと説く理由如何。

【四〇】 梵行の義解。

【四一】 第二五問、慈に五功德あらば、何故に悲喜捨にも功德ありと説かざるや。

となれば先づ慈心を以て、衆生をして樂を得せしめんと欲し、樂を得ざる者あるを見ることが故に悲心を生じ、衆生をして苦心を離れて、法樂を得せしめんと欲するが故に喜心を生じ、三事の中に於て憎なく愛なく、貪なく憂なきが故に捨心を生ずればなり。復次に、慈は樂を以て衆生に與ふるが故なり。増一阿含の中に、五の功德は悲心に有りと説き、摩訶衍經に於ても、處處に其の功德を説けり。明網菩薩經の中に説くが如し、菩薩は衆生の中に處して三十二種の悲を行じ、漸漸増廣して轉た大悲を成す。大悲は是れ一切の諸佛菩薩の功德の根本なり、是れ般若波羅蜜「多」の母なり、諸佛の祖母なり。菩薩は大悲心を以ての故に般若波羅蜜「多」を得、般若波羅蜜「多」を得るが故に佛と作ることを得しと。是の如き等の種種に大悲を讚す、喜捨の心は餘處にも亦讚するあり。慈悲の二事は徧く大なるが故に、佛は其の功德を讚したまふ。慈は以て功德の難きもの有るが故に、悲は以て能く大業を成するが故なり。

問うて曰く、佛は四無量の功德を説きたまひ、慈心は好く善を修し福を修するも遍淨天に極り、悲心は好く善を修し福を修するも虚空處に極り、喜心は好く善を修し福を修するも識處に極り、捨心は好く善を修し福を修するも無所有處に極まれり。云何ぞ慈の果報は梵天に上生すべしと言ふや。答へて曰く、諸佛の法は不可思議なり、衆生の度すべき者に隨つて是の如く説きたまふ。復次に、慈定より起つて、第三禪に廻向するは易く、悲定より起つて虚空處に向ひ、喜定より起つて識處に入り、

【四二】 第二六問、四無量心の果報の究極は各定れり、何ぞ梵天に生ずることを得んや。

捨定より起つて、無所有處に入るとは易きが故なり。復次に、慈心らて衆生をして樂を得せしめんと願ひ、此樂は自ら樂を受べし。三界の中には遍淨を最も樂と爲すが故に、福は遍淨に極まると言ふ。悲心もて衆生の老病殘害苦行の苦を觀て憐愍の心生ず、云何が苦を離るるとを得せしめん」と、若くは内苦を除かんとして外苦復來り、若くは外苦を除かんとして内苦復た來る。行者思惟すらく、「身あれば必ず苦あり、離身無きも有れば、乃ち苦無きを得、虚空は能く色を破す」と。是の故に福は虚空處に極まる。喜心もて衆生に心識の樂を與へんと欲す。心識の樂とは、心身を離るるとを得て鳥の籠を出づるが如きなり。虚空處の心は身を出づるとを得と雖も、猶心を虚空處の無量に繋げ、一切法の中に於て、皆心識あつて、識自在無邊なるを得、是を以ての故に喜福の極は識處に在り。捨心は衆生の中の苦樂を捨つ、苦樂を捨つるが故に眞の捨法を得、所謂無所有處なり。是を以ての故に捨心の福は無所有處に極まれり。是の如く四無量は但聖人の所得にして凡夫に非ず。復次に、佛は未來世の諸の弟子の鈍根なるが故に分別して諸法に著し、錯つて四無量の相を説くことを知りたまふ。

「是の四無量心は衆生緣なるが故に但是れ有漏なり。但欲界を緣するが故に無色界の中には無し、何となれば無色界は欲界を緣せざればなり」と。是の如き人の妄見を斷せんが爲の故に、四無量心を無色界の中に説く。佛は四無量心を以て普く十方の衆生を緣じたまふが故に、亦無色界の中を緣じたまふべし。無量意菩薩の問の中に説くが如くんに、慈に三種あり、衆生緣・法緣・無緣なり。論者の言はく、

「衆生緣は是れ有漏、無縁は是れ無漏、法縁は或は有漏、或は無漏なり」と、是の如く種種に略して四無量心を説く。

四無色定とは虚空處、識處、無所有處、非有想非無想處なり。是の四無色に三種あり。一には有垢、二には生得、三には行得なり。有垢とは、無色の中に三十一結を攝し、及び此の結使の中に心相應行を起す。生得とは、是の無色定を行じ、業報の因縁の故に無色界に生じ、不隱没なる無記の四衆を得るなり。行得とは、是の色の麤惡重苦、老病、殺害等の種種の苦惱の因縁は、重病の如く、癰瘡の如く、毒刺の如く、皆是れ虛誑妄語なり、應當に除却すべしと觀す。是の如く思惟し已つて、一切の色相を過ぎ、一切の有對相を滅し、一切の異相を念せず、無邊虚空處定に入るなり。

問うて曰く、因何が能く是の三種の相を滅するや。答へて曰く、是の

三種の相は皆因縁和合より生ずるが故に自性なし、自性なきが故に是の三種は虛誑無實にして滅することを得べきこと易し。復次に、是の色は分別するに、分分に破散し、後皆無なり。是の故に若し後無なれば今も亦無なり。衆生は顛倒の故に、和合の色中に於て一相異相を取り、心色相に著す。我は今愚人に隨ふべからず、學んで當に實事を求むべし、實事の中には是の一相異相なし。復次に、行者は是念を作さく、「我れ若し諸法を除却して離れば利を得るを深しと爲す。我先づ財物妻子を棄て、出

【四】 四無色定を釋するに三種の四無色を擧ぐ。  
【四】 第二七問、三種の相を滅する理由如何。

家して清淨の持戒を得、心安隱にして怖ぢず畏れず、諸欲諸惡不善法を離れ、離生喜樂の初禪を得、覺觀を離れて内清淨なるが故に、第二禪の中の大喜樂を得、喜を離れて第三禪地に在り、諸樂の中に於て最も第一なり。是の樂を捨てて念捨清淨の第四禪を得、今是の四禪を捨てて應に更に妙定を得べし。是を以ての故に是の色相を過ぎて有對の相を滅し異相を念せずしと。佛は(四)三種の色を説きたまふ。有色可見有對と、有色不可見有對と、有色不可見無對となり。色相を過ぐとは是れ可見有對色なり。有對相を滅すとは是れ不可見無對色なり。異相を念せずとは是れ不可見有對色なり。復次に、眼に色の壞するを見るが故に色を過ぐと名く。耳聲、鼻香、舌味、身觸は壞するが故に過ぐるなり。有對相とは二種に於て餘色なし。色をして種種に分別せしむるが故に異相と名く。是の如く觀じて、色界の中の染を離れ、無邊虛空處を得。三無色を得る因縁方便は禪波羅蜜(多)品の中に説くが如し。(四六)是の四無色は一は常有漏、三は當に分別すべし。虛空處は或有漏、或有無漏なり。有漏とは虛空處に攝する有漏の四衆なり、無漏とは虛空處に攝する無漏の四衆なり、識處無所有處も亦是の如し。一切は皆な有爲の善なり、有漏の虛空處は是れ有報無記なり、及び無漏の虛空處は是れ無報なり。識處、無所有處も亦た是の如し、善の、非有想非無想處は、有報無記なり、非有想非無想處は、是れ無報なり。四無色は、是れ可修無記、四無色定は、非可修なり。隱沒は、是れ有垢なり、

【四五】 三種の色。

【四六】 四無色定の中、一は常有漏にして、他の三は有漏無漏に通ず。

不隠没は是れ無垢なり。一は三の中にあり。有漏は是れ有、無漏は是れ非有にして、無色定の攝なり。心心數法は是れ相應因、心不相應の諸行は是れ非相應因なり。善法にして四無色の中に非ざる有り、四無色の中にして善法に非ざる有り、亦善法にして亦四無色の中なる有り、善法に非ず亦四無色の中に非ざる有り。善法にして四無色に非ざる有りとは、一切善の色衆、及び四無色に攝せざる善の四衆及び智緣盡なり。四無色の中にして善法に非ざる有りとは、無記の四無色なり。亦善法にして亦四無色とは善の四無色なり。善法に非ず亦四無色に非ずとは、一切不善の五衆、及び無記の色衆及び四無色に攝せざる無記の四衆、虚空及び非智緣盡なり。不善法の中に相攝せず。無記法にして四無色に非ざる有り、四無色にして無記法に非ざる有りとは、無記の色衆及び四無色に攝せざる無記の四衆、亦無記法にして亦四無色とは無記の四無色なり。亦無記法に非ず亦四無色に非ずとは、不善の五衆・善の色衆無色に攝せざる善の四衆及び智緣盡なり。或は漏にして四無色に非ず、或は四無色にして漏に非ず、或は漏にして亦四無色なり、或は漏に非ず亦四無色に非ず。漏にして四無色に非ずとは、一漏及び二漏の少分なり。四無色にして漏に非ずとは、漏に攝せざる四無色なり。亦漏にして亦四無色とは、二漏の少分なり。漏に非ず四無色に非ずとは、色衆及び漏無色に攝せざる四衆及び無爲法なり。或は有漏

にして四無色に非ず、或は四無色にして有漏に非ず、或は有漏にして亦四無色なり、或は有漏に非ず  
 四無色に非ず。有漏にして四無色に非ずとは、有漏の色衆、及び無色に攝せざる有漏の四衆なり。四  
 無色にして有漏に非ずとは、三無色の少分なり。亦有漏にして亦四無色とは、一無色、及び三無色の  
 少分なり。亦有漏に非ず四無色に非ずとは、無漏の色衆、無漏に攝せざる無漏の四衆、及び三無爲な  
 り。或は無漏にして四無色に非ず、或は四無色にして無漏に非ず、或は無漏にして亦四無色、或は無  
 漏に非ず亦四無色に非ず。無漏にして四無色に非ずとは、無漏の色衆、及び無色に攝せざる無漏の四  
 衆、及び三無爲なり。四無色にして無漏に非ずとは、一無色と及び三無色  
 の少分なり。亦是無漏亦是四無色とは、三無色の少分なり。無漏に非ず、

【四七】 見諦斷の義解。

【四八】 思惟斷の義解。

四無色に非ずとは、有漏の色衆、及び無色に攝せざる有漏の四衆なり。虚空處は、或は見諦斷、或は  
 思惟斷、或は不斷なり。見諦斷とは、信行法行の人、見諦を用ゐて忍斷するなり。何となれば是  
 れ二十八使、及び二十八使相應の虚空處、及び此に起る心不相應の諸行なればなり。思惟斷とは見  
 道を學し、思惟を用ゐて斷ず、何となれば是れ思惟の所斷の三使、及び此の相應の虚空處、及び此に  
 起る心不相應の諸行、及び無垢有漏の虚空處なればなり。不斷とは、無漏の虚空處なり。或處、無所有  
 處も亦是の如し。非有想非無想處は或は見諦斷、或は思惟斷なり。見諦斷とは信行、法行の人、見諦  
 を用ゐて忍斷す。何となれば是れ二十八使、及び此に相應する非有想非無想處、及び此に起る心不相

應の諸行なればなり。思惟斷とは、見道を學し、思惟を用ひて斷す。何をか是れ思惟所斷なる。三  
 使、及び此に相應する非有想非無想處、及び此に起る心不相應の諸行、及び無垢の非有想非無想處、  
 四無色の中に攝する心不相應の諸行なり。是は心法に非ず、心數法に非ず、心相應に非ず。受衆、  
 想衆、及び此の相應行衆、心數法、亦心相應の心意識、獨心、四無色は、或は隨心行にして、受相應  
 に非ざる有り、或は受相應にして隨心行に非ず、或は隨心行にして亦受相應なり、或は隨心行に非ず  
 受相應に非ざるあり。隨心行にして受相應に非ずとは、隨心行、心不相應の諸行、及び受なり。受相  
 應にして隨心行にあらずとは、心是なり。隨心行にして亦受相應とは、想衆、及び此に相應する行衆  
 なり。隨心行に非ず受相應に非ずとは、隨心行と心不相應の諸行とを除いて、餘殘の心不相應の諸行、  
 想相應、行相應なり。亦應に是の如く説くべし。虚空處は、或は身見の因に從つて還つて身見と與に  
 因と作らず、或は身見の因に從ひ、亦還つて身見と與に因を作す、或は身見の因に從はず、亦還つて  
 身見と與に因と作らず。身見の因に從ひ、還つて身見と與に因と作らずとは、過去現在の見苦斷の諸  
 使、及び此と相應する虚空處を除き、亦過去現在の見集斷の諸の邊結、及び此に相應する虚空處を除  
 き、及び未來世の中の、身見に相應する虚空處を除き、亦身見・生・老・住・滅を除いて、餘殘の有垢の虚  
 空處なり。身見の因に從ひ亦還つて身見と與に因と作るとは、上に除く所の者是なり。亦身見の因に  
 從はず亦還つて身見と與に因と作らずとは、無垢の虚空處なり。識處・無所有處・非有想非無想處も亦

是の如し。四無色定は一切因縁を有し亦因縁に與みず。虚空處は或は次第にして次第縁に與みせず、或は次第にして亦次第縁に與みし、或は次第に非ず亦次第縁に與みするに非ず。次第にして次第縁に與みせずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數の虚空處、及び阿羅漢、過去現在の最後滅の時の心心數の虚空處なり。次第にして、亦た次第縁に與みずとは、過去現在の阿羅漢、最後滅の時の心心數の虚空處を除いて、餘殘の過去現在の心心數の虚空處なり。次第に非ず亦次第縁に與みせずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數の虚空處を除いて、餘殘の未來世の中の心心數の虚空處、及び心不相應の諸行なり。識處、無所有處も、亦是の如し。非有想非無想處は、或は次第にして次第縁に與みせず、或は次第にして亦次第縁に與みし、或は次第に非ず亦次第縁に與みするに非ず。次第にして次第縁に與みせずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數の非有想非無想處、及び阿羅漢、過去現在の最後滅の時の心心數の非有想非無想處、及び滅受想の若くは生じ、若くは生ぜんと欲するなり。次第にして亦次第縁に與みずとは、過去現在の阿羅漢、最後滅の時の心心數の非有想非無想處を除いて、餘殘の過去現在の心心數の非有想非無想處なり。次第に非ず亦次第縁に與みするに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心心數の非有想非無想處を除いて、餘殘の未來世の中の心心數の非有想非無想處と、心次第、心不相應の諸行を除いて、餘殘の心不相應の諸行と、四無色の中に攝する諸の心心數の法と有縁と亦縁縁となり。四無色には心不相應の諸行と、非縁と縁縁とを攝す。四無色は皆是れ

増上にして亦増上縁と與みす。是の如く種種に、四無色を分別することは、阿毗曇分の中に説くが如し。此の中に應に廣く説くべし。

問うて曰く、(覺)摩訶衍の中の四無色とは云何。答へて曰く、諸法實相と與に智慧行を共にする、是れ摩訶衍の中の四無色なり。

問うて曰く、吾何等か是れ諸法實相なるや。答へて曰く、諸法は諸法自性空なるなり。

問うて曰く、色法は和合・分別・因縁の故に空なり。此の無色の中に云何が空なるや。答へて曰く、色は是れ眼見、耳聞、塵事すら能く空ならしむ、何に況んや不可見にして對ある無く、苦樂を覺せずして而も空ならざらんや。復次に、色法は分別するに、乃至微塵にいたるも、皆散滅して空に歸す。是の心心數の法は、日月・時節・須臾の頃、乃至一念の中に在るも不可得なり。是を四無色定の義と名く。是の如き等、種種に畧して四無色を説く。

【四九】 第二八問、大乘の四無色定とは何ぞや。

【五〇】 第二九問、諸法實相とは何ぞや。

【五一】 第三〇問、色法は和合・分別・因縁の故に空なり。然るに此の無色の中に空なりと言ふ理由如何。

卷の第二十一

初品の中の八背捨、八勝處、九次第定、十一切處を釋す。

(二) 八背捨とは 内に色あり、外に赤色を觀する是れ初背捨なり。内に

色なく外に色を觀する是れ第二の背捨なり。淨き背捨と身もて證を作す

は第三の背捨なり、四無色定、及び滅受想定、是の五を合して八背捨と爲

す。背とは是れ五欲を淨潔にするなり。是の著心を離るるが故に背捨と名

く。内外の色を壞らす、内外の色相を滅せず、是の不淨心を以て色を觀す

る是を初背捨と名く。内色を壞し内色の相を滅し、外色を壞らす外色の相

を滅せず、是不淨心を以て外色を觀する、是れ第二の背捨なり。是二は皆

不淨を觀す。一には内を觀じ、外を觀じ、二には内を見ず、但外を見る、

何となれば 衆生に二分の行あり、愛行と見行となり。愛多き者は樂に著

して、多く外、結使の行に縛在し、見多き者は多く身見等の行に著し、内、結使の爲に縛せらる。是

の故に愛多き者は外色を不淨を觀し、見多き者は自身の不淨を觀じて壞敗す。復次に行者初心なれば

未だ細ならず、心を一處に攝繫すること難し。故に内外の觀漸く習ひ、調柔にして能く内の色相を壞

【一】 八背捨 (Aṣṭā-vimokṣaḥ) の義解、或は之を八解脫ともいふ。

【二】 Ropi ropāni paśyaty ayaṃ prathamo vimokṣaḥ.

【三】 Adhyātman arūpasanji-ṃ bahirdhā rūjāni paśyaty ayaṃ dvitīyo vimokṣaḥ.

【四】 Subhan vimokṣaṃ kāya-ena sākaṅkriyopasamṇadyavi-  
haratyāyaṃ tītyo vimokṣaḥ.

【五】 衆生に愛行と見行と二分の行あり。

し、但外を觀す。

問うて曰く、若し内に色相なくんば、誰か當に外を觀すべきや。答へて曰く、是を得解の道と爲す、實道に非ず。行者は、未來死して火に焼かれ、蟲に噉はれ、土中に埋著さるれば、皆磨滅することを念じ、若し現在も亦、是身を分別して、乃ち微塵に至り、皆無なりと觀す。是を内に色相なく外に色を觀すと名く。

問うて曰く、二勝處は内外の色を見、六勝處は但外色を見、一背捨は内外の色を見、二背捨は但外色を見る。何を以ての故に但内に色相を壞する有つて、外色を壞する能はざるや。答へて曰く、行者は眼に是身の死相あるを見、是未來の死相を取つて、以て今の身を觀す、外の四大は滅相を見ざるが故に、無と觀す可きと難きが故に、外色の壞を説かざるなり。

復次に、色界を離るる時、是の時も亦外色を見ず。淨き背捨と身にて證を作すとは不淨の中の淨觀なり。八勝處に説くが如し。前八の一切處に清淨

の地水火風、及び青黃赤白を觀じ、青色を觀すると青蓮華の如く、金精山の如く、眞青の婆羅奈衣の如く、黃赤白を觀て、各色に隨ふとも亦是の如し。「之」を總て淨背捨と名く。

問うて曰く、若し總て是れ淨背捨ならば應に一切處と説くべからず。答へて曰く、背捨は是れ

【六】 第一問、若し内に色相なくんば、外を觀する者は誰ぞ。

【七】 第二問、内、色相を壞して、外、色を壞すること能はざる理由如何。

【八】 優摩伽華、(Limkita?)

【九】 婆羅奈衣とは、ベリナス産の絹布もて、作れる衣の義ならん。

【一〇】 第三問、若し總て淨背捨ならば、一切處と説くべからざるにあらずや。

【一一】 背捨・勝處・一切處は一人の行者の初中後なり。

初行の者、勝處は是れ中行、一切處は是れ久行なり。不淨觀に二種あり、一には不淨、二には淨なり。不淨觀の中に二背捨、四勝處あり。淨觀の中に一背捨、四勝處、八一切處あり。

問うて曰く、(三)行者は不淨を以て淨と爲さば名けて顛倒と爲す、淨背捨觀は如何が顛倒ならざる

や。答へて曰く、女色の不淨なるを妄に見て淨と爲すは是を顛倒と名く。淨背捨は一切實に青色なり

と觀じ、廣大なるが故に顛倒ならず。復次に、心を調ふるが爲の故に、淨觀は以て久しく習ひ、不淨

觀は心に厭ふ、是の故に淨觀を習ふとは顛倒に非ず。亦是の中に著せざる

が故なり。復次に、行者は先づ身の不淨を觀じ、身法の有ゆる内外の不淨

に隨つて心を觀中に繫く、是の時に厭を生じ姪・患・癡・薄し。即ち自ら驚悟

すらく、「我は無日と爲す、此身是の如し、云何が著を生せん」と。心を攝

して實に觀じて復た錯らしむると無し。心既に調柔し、身の皮肉骨髓の不

淨を除却せんことを想ひ、唯、白骨のみ有つて心を骨人に繫く。若し外に馳散すれば之を攝して還ら

しむ。深く心を攝するが故に白骨の流光を見ると、珂の如く、貝の如く、能く内外の諸物を照らす、

是を淨背捨の初門と爲す。然して後に骨人の散滅を觀じ、但骨光を見、外の淨潔の色相を取る。

復次に、若くは金剛眞珠金銀寶物、若くは清淨の地、若くは淨水、烟なく薪なき淨潔の火の如く、

若くは清風の塵なき、諸の青色の金精山の如き、諸の黄色の 瞻蔔華の如き、諸の赤色の赤蓮華の

【三】 第四問、不淨なるを以て淨と爲すに顛倒なり、今それ淨背捨は、何故に顛倒ならざるか。

【三】 瞻蔔華 (amurka)。香妙なる象牙色の花。

如き、諸の白色の白雲等の如き、是の相を取つて心を淨觀に繋く、是の諸色に隨つて各清淨の  
 光耀あり。是時に行者は、喜樂を受くるとを得て、身中に遍滿す、是を淨背捨と名く。淨を緣するが  
 故に名けて淨背捨と爲し、遍身に樂を受くるが故に名けて身證と爲し、是の心樂を得、五欲を背捨  
 し、復た喜樂せざる是を背捨と名く。未だ漏盡きざるが故に、中間に或は結使の心生じて、隨つて淨  
 色に著し、復た勤め精進して、此の著を斷するが故なり。是の如きの淨觀は心相より生ず。譬へば幻  
 主の所幻の物を觀じて、己より出るを知り、心に著を生ぜず、能く所縁に隨はざるが如し。是時に背  
 捨は變じて勝處と名け、淨觀に於て勝ると雖も、未だ廣大なると能はず、  
 是時行者は、還つて淨相を取り背捨の力、及び勝處の力を用ふるが故に、  
 是の淨地の相を取り、漸漸に十方虚空に遍滿す。水火風も亦爾なり。青相  
 を取ると漸やく廣大にして、亦十方虚空に遍からしむ。黃赤白も亦是の如し。是時勝處は、復た變  
 じて一切處と爲る、是の三事は一義、轉變して三名あるなり。

【四】第五問、此の三背捨と八  
 勝處と十一切處は實觀なる  
 か、將た得解の觀なるか。

一問うて曰く、(四) 是の三背捨、八勝處、十一切處は是れ實觀なりや、是れ得解の觀なりや。若し實觀  
 ならば身に皮肉あり、何を以てか但白骨の人を見るや。三十六物合して身法と爲る、何を以てか分別  
 して散觀するや。四大各自ら相あり、何を以てか三大を滅して、但一の地大を觀するや。四色は盡  
 く是れ青に非ず、何を以てか都て青觀を作すや。答へて曰く、實觀なり、亦得解觀あり。身相は實に

是れ不淨なり、是を實觀と爲す。外法の中に淨法の種種の色相あり、是を實の淨觀と爲し、淨不淨は

是を實觀と爲す。此の少許の淨を以て、廣く一切皆是れ淨なりと觀じ、是の一水を取つて、遍ねく一

切皆是れ水なりと觀じ、是の少許の青相を取つて、遍ねく一切皆是れ青なりと「觀す」。是の如き等は

是れ得解觀にして、實「觀」に非すと爲す。四無色の背捨は、四無色定の中の觀の如く、背捨を得んと

欲して先づ無色定に入る。無色定は是れ背捨の初門なり、色縁を背捨すれば無量虛空處なり。

問うて曰く、(五) 無色定も亦爾なり、何等の異なるや。答へて曰く、凡夫

の人、是の無色定を得ば是を無色と爲す、聖人は深く心に無色定を得て、

一向に廻せざる是を背捨と名く。餘殘の識處、無所有處、非有想非無想處

も亦是の如く、受想の諸の心心數法を背滅する、是を滅受想背捨と名く。

問うて曰く、(六) 無想定は何を以てか背捨と名けざるや。答へて曰く、邪

見の者は諸法の過失を審かにせず、直に定中に入つて是を涅槃と謂ひ、定より起つ時、還つて悔心を

生じ、邪見に墮在す。是の故に背捨に非ず。滅受想は散亂の心を患厭するが故に、定に入つて休息す

ること涅槃の法に似たり、身中に著はし身に得るが故に身證と名く。

(七) 八勝處とは、内に色相あり、外に色の少なきを觀す、若くは好、若くは醜、是の色を勝れて知り

勝れて觀する、是を初勝處と名く。内に色相あり、外に色の多きを觀す、若くは好、若くは醜、是の

勝れて觀する、是を初勝處と名く。内に色相あり、外に色の多きを觀す、若くは好、若くは醜、是の

【五】 第六問、無色定と背捨との異同如何。

【六】 第七問、無想定を背捨と名けざる理由如何。

【七】 八勝處 (Asāramāyikā) (Yāramāyikā) の義解。

色を勝れて知り、勝れて観する、是を第二勝處と名く。第三第四も亦是の如し。但内に色相なく外に色を觀するを以て異と爲し、内に亦色相なく、外に諸色の青黄赤白を觀ず、是を八勝處と爲す。内に色相あり、外に色を觀ずとは、内身の外縁の少なる者を見るところを壞せざるなり。緣少きが故に少と名け、觀道未だ増長せざるが故に少因縁を觀す。多を觀すれば攝すると難きを畏るるが故なり。譬へば鹿の遊べるを未だ調へざれば、遠く放つに中らざるが如し。若くは好、若くは醜とは、初學は心を縁中に繋げ、若くは眉間、若くは額上、若くは鼻端、内身の不淨相、内身の中の不淨相、外の諸色の善業報を觀するが故に好と名け、不善業報の故に醜と名く。復次に、行者は師より受くる所の如く、外縁の種種の不淨を觀する、是を醜色と名け、行者、或時は憶念を忘るるが故に、淨相を生じ淨色を觀する、是を好色と名く。復次に、行者は自ら身中に心を一處に繋げ、欲界の中の色を觀するに二種あり、一には能く淫欲を生じ、二には能く瞋恚を生ず。能く淫欲を生ずるは、是れ淨色なり、名けて好と爲す。能く瞋恚を生ずるは、是れ不淨色なり、名けて醜と爲す。縁中に於て自在に勝れて知り、勝れて見る。行者は能生の淫欲、端正の色の中に於て淫欲を生せず、能生の瞋恚、惡色の中に於て瞋恚を生せず、但色を觀じ、四大の因縁和合して生じ、水沫の如く堅固ならずと觀す。是を若くは好、若くは醜と名く。勝處とは行者、是の不淨門の中に住し、淫欲瞋恚等の諸の結使、未だ能く隨はざる、是を勝處と名く。是れ不淨の中の淨顛倒等の諸の煩惱の賊に勝つが故なり。

問うて曰く、行者は云何が内、色想、外、色を觀するや。答へて曰く、是の八勝處は深く定に入り、心調柔なる者にして得べし。行者は或時は内身の不淨を見、亦外色の不淨を見る。不淨觀に二種あり。一には三十六物等の種種の不淨、二には内外の皮肉五藏を除いて、但白骨を觀ること阿の如く雪の如し。三十六物等を觀する、是を醜と名け、阿の如く雪の如しと觀する、是を好と名く。行者は内外を觀する時、心散亂して禪に入り難く、自身の相を除いて但外色を觀す。阿毗曇の中に説くが如し。行者は解脫觀を得るを以て、是の身の死を見る、死し已れば豎して塚間に出で、若くは火にて燒き、若くは蟲噉つて皆已に滅盡す。是の時但蟲火を見て身を見ず、是を内に色相なく、外に色を觀すと名く。行者は教を受くるが如く、身は是れ骨人なりと觀ず。若し心外に散すれば、還つて骨人縁の中に攝せらる。何となれば是の人は初めて行を習ひ、未だ細縁を觀すると能はざればなり。是を少色と名く。行者は觀道轉た深く增長し、此一骨人を以て、遍ねく閻浮提は皆是れ骨人なりと觀す。是を名けて多と爲し、還つて復た念を攝して一骨人を觀す。是の故に勝知勝見と名く。復次に、意に隨つて五欲の中の男女の相、淨潔の相は、能く勝るが故に名けて勝處と爲す。譬へば健なる人の、馬に乗つて賊を撃つに、能く破るを名けて勝と爲すが如し。又能く其馬を制御するは、是を亦勝と名く。行者も亦是の如く、能く自ら不淨觀の中に於て、少を能く多とし、多を能く少とす、是を勝處と爲す。亦能く五欲の眩を

【二八】 第八問、行者は如何にして、肉、色想と、外、色を觀するや。

破るを亦勝處と名く。内、未だ壞ること能はず、外、色を觀するに、若くは多、若くは少、若しは好、若くは醜なる、是れ初と第二の勝處なり。内身を壞して色相なく、外色を觀するに、若くは多、若くは少、若くは好、若くは醜なるは、是れ第三と第四の勝處なり。心を攝して深く定中に入り、内身を壞して、外淨縁の青は青色、黄赤白は、白色なりと觀する、是を後の四勝處と爲す。

問うて曰く、(二五)の後の四勝處は、十一切處の中の青等の四處と、何等の異なるや。答へて曰く、青の一切處は、能く普ねく一切を緣じて青ならしむ。是の勝處は若くは多、若くは少、意に随つて觀じて、異心をして奪はしめず、勝れて是の縁を觀するを名けて勝處と爲す。譬へば轉輪王は遍く四天下に勝れ、閻浮提の王は一天下のみに勝るが如く、一切處は普通一切の縁に勝れ、勝處は但少色を觀じ、能く勝れ、一切縁に遍きと能はず。是の如き等は略して八勝處を説けり。

(三〇) 十一切處とは、背捨勝處は已に説けり。此は縁に遍滿するを以ての故に一切處と名く。

【二六】 第九問、此の後の四勝處と、十一切處中の青等の四處との異同如何。

【三〇】 十一切處 (Asakṛisanyatana) の義解。其の名辭は左の如し。

- ニラクリトスナーヤタナ (青遍處)
- Nīlakṛisanyatana
- ビタークリトスナーヤタナ (火遍處)
- Prāṇakṛisanyatana
- ロビタクリトスナーヤタナ (赤遍處)
- Lohitakṛisanyatana
- アワタークリトスナーヤタナ (白遍處)
- Avatālakṛisanyatana
- グリタイキークリトスナーヤタナ (地遍處)
- Grīhīṭhīkṛisanyatana
- アツクリトスナーヤタナ (水遍處)
- Āpṭakṛisanyatana
- デーチャヤスクリトスナーヤタナ (風遍處)
- Dhīcchāyaskṛisanyatana
- グニエクリトスナーヤタナ (風遍處)
- Gūṇiēkṛisanyatana
- アーカーシヤクリトスナーヤタナ (空遍處)
- Ākāśīkṛisanyatana
- マヤニニヤークリトスナーヤタナ (識遍處)
- Māyānīniyāṅkṛisanyatana

問うて曰く、三、何を以てか無所有處、非有想非無想處を一切處と名けざるや。答へて曰く、是の得解の心は、安隱快樂、廣大にして無量無邊なる虚空處なり。是れ佛の説きたまふ所、一切處の中には皆識あり、能く疾かに一切法を緣するが故に、一切法の中に皆識ありと見るなり。是を以ての故に二處に一切處を立つ。無所有の中には、物の廣むべき無く亦快樂を得ず、佛も亦是の無所有は、無邊無量なりと説きたまはず。非有想非無想處は心鈍にして、相を取つて廣大ならしむるとを得ると難し。復次に、虚空處は色界に近く亦能く色を緣じ、識處は能緣にして色を緣ず。又識處は起つて能く第四禪に超入し、第四禪は起つて識處に超入す。無所有處、非有想非無想處は無色の因縁に遠きが故に一切處に非ず。是三種の法は皆行じて勝處を得。一切處は是れ有漏、初の三背捨、第七第八の背捨は是れ有漏、餘殘は或は

【三】第一〇問、無所有處、非有想非無想處を一切處と名けざる理由如何。

有漏、或は無漏なり。初の二背捨、初の四勝處は初禪、二禪の中に攝し、淨背捨、後の四勝處、八の一切處は第四禪の中に攝す。二の一切處を即ち名けて空處と説く。空處は識處を攝し、識處は前の三背捨、八勝處、八の一切處を攝し、皆欲界を緣す。後の四背捨は無色界、及び無漏法の諸の妙功德を緣じ、根本の中に在つて善なり。無色の根本は下地を緣せざればなり。滅受想定は心心數法に非ざるが故に緣なく、非有想非無想處の背捨は但無色の四陰、及び無漏法を緣じ、九次第定は初禪の心より起つて次第に第二禪に入り、餘心をして入ることを得せしめず、若くは善、若くは垢なり。是の如く

して乃ち滅受想定に至る。

問うて曰く、三三 餘にも亦次第あり、何を以てか但九次第定と稱するや。答へて曰く、餘の功德は皆異心の間に生ずることあるが故に次第に非ず、此の中には深心にして智慧利き行者、自ら其の心を試み、一禪心より起つて次に二禪に入り、異念をして入ることを得せしめず、此の功德に於て心柔順にして、善く法愛を斷するが故に能く心心相次ぐ。是の次第は、二は是れ有漏、七は或は有漏、或は無漏禪なり、中間、未到地は牢固ならず、又是れ聖人の得る所なり。又此の大功德は邊地に在らず、是故に次第なし。八背捨、八勝處、十一切處、九次第定は聲聞法の中に略說せり。

初品の中の九想の義を釋す。

**釋** 九想とは脹想、壞想、血塗想、膿爛想、青泥、膿想、散想、骨想、燒想なり。

**論** 問うて曰く、三三 應當に先づ九想を習つて欲を離れ、然る後に諸禪を得べし、何を以ての故に諸の禪定の後方に九想を説くや。答へて曰く、先づ果報を讀じて、行者の心をして樂しましむ、九想は是れ不淨なりと雖も、人其の果報を貪るが故に必ず習行す。

問うて曰く、三五 行者は云何が是の 脹想等の九事を觀するや。答へて曰く、行者は先づ持戒清淨

- 【一】 第一一問、九次第定と稱する理由如何。
- 【二】 第一二問、諸の禪定の後に九想觀を説く理由如何。
- 【三】 第一三問、行者の九想觀を修する方法如何。
- 【四】 脹想 (Yadhinukkasam)。
- 【五】 骨想 (Kakkasam)。
- 【六】 燒想 (Kakkasam)。
- 【七】 散想 (Kakkasam)。
- 【八】 膿爛想 (Kakkasam)。
- 【九】 血塗想 (Kakkasam)。
- 【十】 壞想 (Kakkasam)。
- 【十一】 青泥 (Kakkasam)。

にして、心をして悔いざらしむ、故に易く觀法を受け、能く淫欲諸の煩惱の賊を破る。人の初めて死するの目を觀るに、辭訣言語の息出でて反らず、奄忽として已に死し、室家驚愕號哭して天を呼んで言説すらく、「方に耐く、奄便ら那ぞ去るや。氣滅し、身冷かにして覺識する所なし」と。此を大畏と爲し、免る可き處なきを觀す。譬へば劫盡き火燒くに遺脱あると無きが如し。説くが如し。

『死に至るに貧富なく、勤修善惡なく、貴なく亦賤なく、老少の免るる者なし。』

祈請の持ふ可きなく、亦欺誑して離るる無く、捩捨すとも脱するを得ること無く、一切免るる處なし。』

死法は名けて永く恩愛を離るる處と爲す。一切有生の惡む所の者、甚た之を惡むと雖も脱するを得る者なし。我身は久しからずして必ず當に是の如く、木石に同じく、別知する所なかるべし。我今五欲に貪著し、死の至るを覺らず、牛羊に同すべからず、牛羊禽獸は死者を見ると雖も、跳騰哮吼し、自ら覺悟せず、我は既に人身を得て好醜を識別す、當に甘露不死の法を求むべし。説くが如し。

『五情の身完く具し、智監も亦明利なり、而も道法を求めずんば、庸らに身と智慧とを受く。』

禽獸も皆亦欲樂を以て、自ら恣ままにすることを知る、而も方便を以て、道の爲に善事を修することを知らず。

既に人身を得て而も但自ら放恣にして、善事を修することを知らずんば、彼と亦何ぞ異なら

ん。

三惡道の衆生は修道の業を得ず。已に此の人身を得たり、當に勉めて自ら益利すべし。』

行者は死屍の邊に到りて、死屍臙服して、韋囊に風を盛るが如く、本の相に異なるを見て、心に厭畏を生ず。「我身も亦當に是の如くなるべし、未だ此の法を脱せず、身中、識を主として、此の身を役御し、視聽、言語、罪を作し福を作す、此を以て自ら貴ぶも何の趣く所と爲ん、而今は但空舍の此に在るを見るのみ。是身の好相細腰・姝媚・長眼・直鼻・平額・高眉、是の如きの好は人心をして惑はしむ。今但臙服を見るのみ、好、何の處にか在る、男女の相も亦識る可らず」と。此の觀を作し已つて、欲に著するの心を呵す。

此の臙尿の囊、臙服すれば惡む可し、何ぞ貪著するに足らん。死屍は風

熱轉た大なれば裂壞して地に在り、五藏より屎尿膿血流出し惡露已に現す。行者は是の壞相を取り、

以て己の身を觀す。「我も亦是の如く、皆是の物あり、此と何ぞ異ならん。我甚た惑を爲し、此の屎囊

薄皮の爲めに誑さるると、燈蛾の火に投じて、但明色を貪つて、身を焼くとを知らざるが如し。已に

裂壞して男女の相の滅せるを見、我が著する所の者も亦皆是の如し」と。死屍已に壞すれば、肉血塗

漫す。或は杖楚して死する者の青瘀黃赤なるを見、或は日に曝されて瘀黒す。具に是の相を取り、

著する所の者、若くは赤白の色の淨潔端正なるも、此と何ぞ異ならんと觀す。既に青瘀黃赤を見るに

【二六】壞想の原語は、未だ檢出せず。

【二七】血塗想 (Vijjitasakam-  
bhāsa)

【二八】青瘀想 (Vijjitasakam-  
bhāsa)

鳥獸も食はず、（二五） 理めず藏さざれば、久しからずして膿爛し種種の蟲生ず。行者は見已つて、此の死屍の本有の好色を念するに、好香を身に塗り、衣るに上服を以てし、飾るに華綵を以てす。今但臭壞膿爛塗染す。此は是れ眞實の分にして、先に飾綵する所は皆是れ假借なり。（二六） 若し燒かず理めずして之を曠野に棄つれば、鳥獸の爲に食はれ、鳥其眼を挑り、狗は其手脚を分ち、虎狼は腹を裂きて分聖鬪裂し、殘藉地に在り、盡きて盡きざるあり。行者は見已つて心に厭想を生じ、思惟すらく、「此屍の未だ壞せざる時は、人の所著の處たり、而も今壞敗して復た本の相なく、但殘藉のみを見る」と。鳥獸の食ふ處、甚だ惡み畏るべし。鳥獸已に去り、風日に曝曬せられ、筋斷じ、骨離れ各各處を異にす。行者は思惟すらく、（二七） 本身法の和合を見るに而も身相あつて男女皆分別すべし。今已に離散して各異處に在り、和合の法滅すれば、身相も亦無にして皆本に異なり、愛著す可き所、今何の處にか在ると。身既に處處に離散して白骨あり、鳥獸食し已つて唯骨のみ在るあり、是の骨人を觀する是を 骨想と爲す。骨想に二種あり、一には骨人の筋骨相連る、二には骨節分離して筋骨相連る。男女長短、好色細滑の相を破り、骨節分離して破る。衆生の根本實相は骨想なり。復た二種あり、一には淨、二には不淨なり。淨とは久しき骨は白淨なり、血なく膩なく、色白雪の如し。不淨とは餘血塗染し、膏膩未だ盡きず。行者は屍林の中に到り、或は多くの草木を積んで死屍を焚燒し、腹破れ

- 【元】 體欄想 (Anāyatana-samādhī)
- 【一】 厭想 (Vipassanā-samādhī)
- 【二】 散想 (Vipassanā-samādhī)
- 【三】 骨想 (Aśhisatvā-samādhī)

眼出で、皮色は焦黒にして甚だ悪み畏るべく、須臾の間にして變じて灰燼と爲るを見る。行者は是の  
三三 焼を取つて思惟すらく、「此の身未だ死せざる前は香華に沐浴し、五欲自ら恣ままなり、今火に  
焼かれて兵刃よりも甚だし。此の屍初めて死せる形は猶人に似たり、火に焼け須臾にして本相都て失  
せ、一切の有身皆無常に歸す、我も亦是の如し」と。是の九想を視れば、諸の煩惱を斷じ、姪欲を滅  
すに於て最も勝る。姪欲を滅さんが爲の故に是の九想を説く。

問うて曰く、三三 無常等の十想は、何事を滅せんが爲の故に説くや。答へて曰く、亦姪欲等の三毒を  
滅せん爲なり。

問うて曰く、三三 若し爾らば二相は、何等の異ありや。答へて曰く、九想  
は未だ禪定を得ず、姪欲の爲に覆はるるを、遮らんが爲の故にして、十  
想は能く姪欲等の三毒を除滅す。九想は賊を縛するが如く、十想は斬殺す  
るが如し。九想は初學の爲にして、十想は成就の爲なり。復次に、是の十想の中の不淨想に九想を攝  
す。有る人の言く、十想の中の不淨想と食不淨想と世間不可樂想とに、九想を攝すと。復有る人の言  
く、十想九想は同じく欲を離れんが爲なり、俱に涅槃の爲なり。何となれば初の死想は、動轉言語須  
臾の間に忽然として已み、死すれば身體腫脹壞分散し各各變異す、是れ則ち無常なり。若し此の法  
に著すると有れば、無常の壞する時、是れ即ち苦と爲す。若し無常苦なれば自在を得る者なし、是れ

【三三】 九想と十想との相異如何。  
【三四】 第一四問、十想を説く理由如何。  
【三五】 第一五問、九想と十想との相異如何。

則ち無我なり。不淨にして無常、苦にして無我なれば則ち樂なる可らず、身を觀する是の如し。食口に在りと雖も、腦涎流れ下り、唾と和合して味を成し、而も咽むと吐くと異なるとなし。下つて腹の中に入るは即ち是れ食不淨想なり。此の九想を以て身を觀するに、常に變じて念念に皆滅す、即ち是れ死想なり。是の九想を以て世間の樂を厭ひ、煩惱を斷すれば、則ち安隱寂靜なりと知る、即ち是れ斷想なり。是の九想を以て諸の煩惱を遮するは、即ち是れ離想、是の九想を以て世間を厭ふが故に、此の五衆滅して更に復た生ぜず、是の處は安隱なりと知る、即ち是れ盡想なり。

復次に、九想を因と爲し十想を果と爲す。是故に九想を先にし、十想を後にす。復次に、九想を外門と爲し十想を内門と爲す、是の故に經に言

【一】安那般那門なり」と。

【一】 Anāpāna は、譯して數息觀といふ。  
【二】 九想の効能。

く、「二を甘露門と爲す、一には不淨門、二には 安那般那門なり」と。  
是の 九想は人の七種の染著を除く。或は人あり色に染著す。若くは赤、若くは白、若くは赤白、若くは黄、若くは黒なり。或は人あり、色に著せず、但形容に染著す。細膚、纖指、脩目、高眉なり。或は人あり、容色に著せず、但威儀に染著す。進止、坐起、行住、禮拜、俯仰、揚眉、頓接、親近、按摩なり。或は人あり、容色威儀に著せず、但言語に染著す、軟聲、美辭、時に隨つて説き、意に應じ旨を承けて能く人心を動かす。或は人あり、容色威儀、軟聲に著せず、但細滑柔膚、軟肌に染著す。熱時には身涼、寒時には體溫なり。或は人あり、皆五事に著し、或は人あり、都て五事に著せず、但

人相に染著す。若くは男、若くは女なり。上の六種の欲を得と雖も所著の人を得ず、猶解する所なく、世の重んずる所の五種の欲樂を捨てて其死に隨ふ。死想は多く威儀語言の愛を除き、臆脹想、壞想、噉想、散想は多く形容の愛を除き、血塗想、青瘀想、膿爛想は多く色愛を除き、骨想、燒想は多く細滑の愛を除き、九想は雜愛、及び著せらるる人の愛を除き、噉想、散想、骨想は徧なく人愛を除き、噉殘離散せる白骨の中に人の著す可きあるを見ず。是の九想觀を以て愛心を離れ、臆脹も亦微薄なり、不淨の中の淨顛倒、癡の故に是の身に著す。今是の九想を以て身内を披折し、是の身相を見れば癡心薄し。癡心薄ければ則ち貪欲薄く、貪欲薄ければ則ち瞋も亦薄し。

何となれば人は身を貪るを以ての故に瞋を生ず、今身の不淨を觀じ心に厭

ふが故に復た身を貪らず、身を貪らざるが故に復た瞋を生ぜず、三毒薄きが故に一切の九十八使の山皆動き、漸漸に其道を増進し、金剛三昧を以て結山を摧碎す。九想は是れ不淨觀なりと雖も、是に依つて能く大事を成す。譬へば大海中には臭屍溺人も、依つて以て渡るを得るが如し。

問うて曰く、(三六)是の九想は何の性、何の所緣あつて、何の處にか攝するや。答へて曰く、取想の性緣は、欲界の身色にして想衆に攝す。亦身念處の少分にして、或は欲界に攝し、或は初禪、二禪、四禪に攝し、未だ欲を離れざる散心の人は欲界繫を得、欲を離れたる人心は色界繫を得。臆脹等の八想は欲界、初禪、二禪の中に攝し、淨骨想は欲界、初禪、二禪、四禪の中に攝す。三禪の中には樂多き

【三六】 第一六問、九想の性と所緣と處とを問ふ。

故に是の想なし。是の九想は是れ身念處門を開き、身念處門は三念處門を開き、是の四念處は三十七品門を開き、三十七品門は涅槃の城門を開く。涅槃に入りて、一切の憂惱、諸の苦を離れ、五衆の因縁生を滅するが故に涅槃の常樂を愛く。

問うて曰く、聲聞の人は是の如く、心の厭離を觀じて、疾かに涅槃に入らんと欲す。菩薩は一切衆生を憐愍し、一切の佛法を集め、一切衆生を度し、疾かに涅槃に入るとを求めざるが故に、是の九想を觀す。云何が二乗の證に墮せざるや。答へて曰く、菩薩は衆生に於いて心に憐愍を生じ、衆生は

三毒の因縁を以ての故に、今世後世身心の苦痛を愛くと知る。是の三毒はつひ自ら滅せず、亦餘の理を以て滅を得べからず、但著する所の内外の身相を觀じて然して後除くべし。是を以ての故に菩薩は是の姪欲の毒を滅せんと欲するが故に是の九想を觀す。人の病者を憐愍し、諸藥を合和して以て之を療するが如し。菩薩も亦是の如く色に著する衆生の爲に是の青瘀想等を説き、其の著する所に隨つて、諸相を分別するよ

【三九】 第一七問、菩薩は此の九想を觀じて、二乗の證に墮せざる理由如何。

先に説くが如し。是を菩薩は九想觀を行すと爲すなり。

復次に、菩薩は大慈悲心を以て、是の九想を行じ、是の念を作さく、「我未だ一切の佛法を具足せず、涅槃に入らず、是を一法門と爲す。我は此一法門に住すべからず、我當に一切の法門を學すべし」と。是の故に菩薩は九想を行するに妨ぐる所なし。菩薩は是の九想を行するに、或時は厭患の心起

る。是の如きの不淨の身、惡むべく患ふ可し、疾かに涅槃を取らんと欲す。爾の時に菩薩は是の念を  
 作さく、「十方の諸佛は、一切の法相は空なり、空の中に無常なしと説きたまふ、何に況んや、不淨  
 あらんや。但淨顛倒を破るが爲の故に不淨を習行す。是の不淨は皆因縁の和合より生じて自性あると  
 無く、皆空相に歸す。我今是の因縁和合の生を取るべからず、自性なく不淨の法なり、疾かに涅槃に  
 入らんと欲す」と。經の中に亦是の説あり、「若し色の中に味相なくんば、衆生は色に著すべからず。  
 色の中に味あるを以ての故に、衆生は色に過罪なくんば、衆生は色に過罪なくんば、衆  
 生も亦色を厭ふ者なし。色には實に過罪あるを以ての故に、色を觀すれば  
 則ち厭ふ。若し色の中に出相なければ、衆生も亦色に於て解脱を得ること  
 と能はず、色に出相あるを以ての故に、衆生は色に於て解脱を得。味は是  
 れ淨相の因縁なり、是を以ての故に菩薩は不淨の中に於て没せず、早く涅  
 槃を取る」と。九想の義分別し竟んぬ。

初品の中の八念の上を釋す。

佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、捨を念じ、天を念じ、入出の息を念じ、死を念す。

問うて曰く、何を以ての故に、九想の次第に八念あるや。答へて曰く、佛弟子は、

【四〇】 色に出相あるが故に、衆生は解脱すること可能なるなり。  
 【四一】 第一八問、九想の次に八念を置く理由如何。  
 【四二】 阿蘭若(阿蘭若)。

若處空舍塚間山林曠野に於て、善く九想内外の不淨觀を修し、其の身を厭患して而も是の念を作さく、「我は云何ぞ是の底下不淨なる屎尿の糞を擔つて、自ら隨つて慍然として驚怖し、及び惡魔と爲り、種種の惡事を作し、來つて之を恐怖し、其をして退かしめんと欲するや」と。是の故に佛は次第に爲に八念を説きたまへり。經の中に説くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、  
 【四三】 恐怖心變除の方法第一。  
 【四四】 三昧三昧  
 【四五】 阿蘭  
 【四六】 三昧三昧  
 【四七】 三昧三昧  
 【四八】 三昧三昧  
 【四九】 三昧三昧  
 【五〇】 三昧三昧

處空舍塚間山林曠野に於て、中に在つて思惟せよ。若し怖畏して衣毛爲に堅たば、爾の時當に佛を念すべし。佛は是れ 多陀阿伽度なり、阿羅漢なり、三藐三佛陀なり、乃至 婆伽婆なり「と念せば」。恐怖則ち滅せん。若し佛を念せずんば、當に法を念すべし、佛法は清淨にして巧に善説を出し、今世の報を得、有智の人の、心力の能く解するを指示し開發す。是の如く法を念すれば怖畏則ち除く。若し法を念せずんば則ち當に僧を念すべし、佛弟子衆は正道を修し法に隨つて行す。僧の中に阿羅漢向、阿羅漢乃至須陀洹向、須陀洹、四雙、八輩あり。是の佛弟子衆は、應に供養し合掌し恭敬し禮拜し迎送すべき世間無上の福田なり」と。是の如く僧を念すると作さば恐怖即ち滅せん。佛、諸の比丘に告げたまはく、  
 【四三】 恐怖心變除の方法第一。  
 【四四】 三昧三昧  
 【四五】 阿蘭  
 【四六】 三昧三昧  
 【四七】 三昧三昧  
 【四八】 三昧三昧  
 【四九】 三昧三昧  
 【五〇】 三昧三昧

恐怖あらば、當に我が七寶の幢を念すべし、恐怖即ち滅せん。若し我が幢を念せずんば、當に

- 【四三】 恐怖心變除の方法第一。
- 【四四】 三昧三昧
- 【四五】 阿蘭
- 【四六】 三昧三昧
- 【四七】 三昧三昧
- 【四八】 三昧三昧
- 【四九】 三昧三昧
- 【五〇】 三昧三昧

伊舎那天王の寶幢を念すべし、恐怖即ち除かん。(五) 若し伊舎那の寶幢を念せずんば、當に(五) 婆樓那天王の寶幢を念すべし、恐怖即ち除かん」と。是を以ての故に恐怖を除く因縁の爲の故に、次第に八念を説くことを知る。

問うて曰く、(三) 經の中に三念の因縁の恐怖を除くことを説く、五念は復た云何ぞ能く恐怖を除く

や。答へて曰く、是の比丘は自ら布施持戒の功徳を念じて怖畏も亦除く。何となれば若し破戒せば、

心に地獄に墮せんことを畏れ、若し慳貪の心は餓鬼及び貧窮の中に墮せん

ことを畏る。自ら念すらく、「我は是の淨戒布施あり」と。若くは淨戒を念

じ、若くは布施を念せば、心則ち歡喜して是言を作さく、「若し我命未だ

盡きずんば、當に更に功徳を増進すべし、若し當に命終するとも、惡道に

墮するとを畏れず」と。是の故に戒施を念すれば、亦能く怖畏の念を生ぜ

ざらしむ。上の諸天は、皆是れ布施持戒の果報、此の諸天は福徳の因縁を以ての故に彼に生ず。我も

亦是の福徳あり、是を以ての故に天を念するも、亦能く怖畏を生ぜざらしむ。十六行は安那般那を念

する時、細覺尙滅す、何に況んや恐怖塵覺の念をや。死者の五衆身の、念念に生滅することを念すれ

ば、生より已來常に死と俱なり、今何を以てか死を畏れんや。是の五念は、佛、説きたはずと雖も、

亦能く恐怖を除く。何となれば他の功徳を念じて、以て恐怖を除くとは則ち難く、自ら己が事を念じ

【五】 恐怖心変除の方法第四。

【五】 婆樓那(Vairavina)

【五】 第一九問、一二念の因縁の恐怖を除くことは、經驗によつて之を認む、今それ五念の能く恐怖を除く理由如何。

て以て恐怖を除くことは、則ち易きを以てなり。是の故に佛は説きたまはず。

問うて曰く、云何が是れ佛を念するや。答へて曰く、(曇)行者は一心に佛を念すれば、如實の智慧

を得、大慈大悲成、就す。是の故に言に錯謬なく、塵網多少、深淺皆實ならざると無し、皆是れ實なる

が故に多陀阿伽度と名く。亦過去未來現在の十方の諸佛の如きは、衆生の中に於いて大悲心を起し、

六波羅蜜(多)を行じ、諸の法相を得、來つて阿耨多羅三藐三菩提の中に至る。此の佛も亦是の如し。

是を多陀阿伽度と名く。三世十方の諸佛の身の如きは、大光明を放つて遍ねく十方を照し、諸の黒

暗を破り、心より智慧の光明を出して、衆生の無明の闇冥を破り、功德名

聞亦遍ねく十方に満ち、去つて涅槃に至る、此の佛も亦是の如く去りた

まふ。是を以ての故に亦多陀阿伽度と名く。是の如き功德あるが故に應に

一切諸天世人の最上の供養を受くべし。是の故に阿羅呵と名く。若し有人の言く、「何故に但佛のみ

實の如しと説くや。如來如去の故に、應に最上の供養を受くべし。佛は正遍智慧を得たまふを以ての

故なり」とし、正は諸法の不動不壞の相に名け、遍は一法二法の爲にせざるに名く。故に悉く一切法を知

るを以て、餘として盡さざる無きを以て、是れを三藐三佛陀と名く。是の正遍の智慧は、無因より得

ず、亦天より得ず、是の中、智慧持戒を具足するに依るが故に正遍の智慧を得。智慧とは菩薩の初發

意より乃ち金剛三昧に至る相應の智慧に名く。持戒とは菩薩の初發意より乃ち金剛三昧に至り、身業

【五四】 第二〇問、何故に佛を念するや。  
【五五】 佛陀の十號の解釋。



閻浮提の中に智慧威徳ある諸釋子の中に生れ、貴姓、奎、橋婆氏に生れたまふ。時に光明は三千大千世界を遍照し、梵天王は寶蓋を持ち、釋提桓因は天の寶衣を以て承接し、阿那婆踰多龍王、娑伽多龍王は妙香湯を以て灑浴す。生れたまふ時、地は六種に動じ、行くと七歩に至つて、安詳として象王之如く四方を觀視して師子吼を作さく、「我は是れ末後の身、當に一切衆生を度すべし」と。阿私隨仙人之を相して淨飯王に告す。是の人の足下の千輪相、指合縷網は當に自ら法の中に於て安平にして立つべし、能く動すること無く能く壞する者なし。手中の徳字、縷網莊嚴は當に此手を以て、衆生を安慰して畏る所なからしむべし。是の如く乃至肉骨髻相は青珠山の頂の如く、青色の光明は四邊より出で、頭中の頂相は能く上を見ること無く、若くは天、若くは人の勝る者あること無し。白毫は眉間に峙ち、白光は頰梨を踰え、淨眼は長廣にして其の色紺青なり。鼻は高く直好にして甚だ愛樂すべく、口には四十の齒あり、白淨にして利好に、四牙の上は白く其の光は最勝なり。唇は上下等しくして大ならず小ならず、長からず短からず。舌は薄くして大に軟に、赤紅色にして天の蓮華の如く、梵聲は深遠にして聞く者悦樂し、聽くに厭足なし。身色の妙好なることは閻浮檀金に勝り、大光は身を周り、種種の雜色の妙好なること比なし。是の如き等の三十二相を具足するを以て、是の人は久しからずして出家せば一切智

- 【三】 橋婆、Gautama は普通にキーターと發音す。
- 【四】 佛誕時の詩的光景。
- 【五】 阿那婆踰多龍王 (Amara-nāga) は譯して無熱龍王といふ。
- 【六】 娑伽多是波伽羅の譯。
- 【七】 阿私隨 (Asita) 仙の相佛。

を得て佛と成らん」と。佛身の功德は是の如し、應當に佛を念すべきなり。

復次に、佛身の功德は、身力十萬の白香象寶に勝る、是を父母遺體の力と爲す。若し神通功德力は無量無限なり。佛身は三十二相八十隨形好を以て莊嚴し、内に無量の佛法の功德あるが故に、之を

視るに厭ふと無し。佛身を見る者は世の五欲を忘れ、萬事を憶はず。若し佛身を見るに一處も愛樂して厭ふと無なく、移り觀ると能はず、佛身の功德是の如し、應當に佛を念すべきなり。復次に、佛は持戒具足して清淨なり。初發心より戒を修して

増積すると、無量なると、憐愍の心と、俱に果報を求めたまはず、聲聞辟支佛道に向はず、諸の結使に裸らず。但自心清淨にして衆生を惱まさざらんが爲の故に世世に戒を持ちたまふ。此故に佛道を成する時、戒を具足するを得。應に是の如く佛の戒衆を念すべし。復次に佛の定衆具足す。

問うて曰く、持戒は身口の業清淨なるを以ての故に知るべし、智慧は分別して法を説き、能く衆の疑を除くを以ての故に知るべし。定は餘人の定を修することすら尙知るべからず、何に況んや佛に於て、云何ぞ知ることを得んや。答へて曰く、大智慧を具足するが故に、當に禪定は必ず具足することを知るべし。譬へば蓮華の大なるを見ては、必ず池も亦深大なる

とを知るが如く、又燈明大なれば、必ず酥油も亦多きとを知るが如し。亦佛の神通變化力の無量無比

【六六】佛の身力に就て。

【六九】第二一問、佛の戒慧の大なることは知る、ことを得べし、而も其の禪定の大なることは如何にして知り得らるるか。

【七〇】蓮華大なれば池深く、光明大なれば油多きを比知すべし。

なるを以ての故に、禪定力も亦具足することを知り、亦果の大なるを見るが故に、因も亦必ず大なりと知るが如し。

復次に、有る時、佛自ら人の爲に説きたまはく、「我が禪定の相は甚深なり」と。經の中に説くが如くんば、佛、阿耨摩國の林樹の下に在つて坐して禪定に入りたまひき。是時大に雨ふり、雷電霹靂す。四の特牛の耕者二人あり、聲を聞いて怖れ死す。須臾にして便ち晴れ、佛起ちて經行し給ふ。一の居士あり、佛の足を禮し已つて、佛の後に隨從し、佛に白して言さく、「世尊よ、向に雷電霹靂せり。四の特牛の耕者二人あり、聲を聞いて怖死す。世尊は聞きたまひしや不や。佛の言はく、「聞かず」。居士言く、「佛は時に睡りたまひしや」。

佛の言はく、「睡らず」。曰はく、「無心想定に入りたまふや」。佛の言はく、「不なり、我は心想あつて、但定に入るのみ」。居士言く、「未曾有なり、諸佛の禪定は大に甚深たり、心想有つて禪定に在り、是の如きの大聲を、覺めて而も聞かず」と。餘經の中の如くんば、佛諸の比丘に告げたまふに、佛は諸の定に入出したまふも、舍利弗日躔連すら尙其の名をだも聞かず、何に況んや能く何者か是れを知らんや。三昧・王三昧・師子遊戲三昧等の如きは、佛は其中に入つて、能く十方世界をして六種に震動せしめ、大光明を放ち、化して無量の諸佛と爲り十方に遍滿したまふ。阿難の如きは一時心に念を生ずらく、「過去の燃燈佛の時、時世好

【七二】 佛は心想ありて定に入りてすら尙ほ雷電を聞きたまはざりし因縁

【七三】 燃燈 (Dipaṅkara)

燃燈佛の時、時世好

人壽長く、化度し易し、今釋迦牟尼佛の時は、世悪く人壽短く、教化し難し、佛事未だ訖らずして涅槃に入るや。清旦に是の事を以て佛に白して言す。已に日出でて、佛は時に日出たまふに、日出の光明は闍浮提を照すが如く、佛身も是の如く、毛孔より普ねく光明を出して、遍ねく十方恒河沙等の世界を照し、一一の光の中より、七寶の千葉の蓮華を出し、一一の華の上に皆坐佛あり、一一の諸佛皆無量の光明を放ち、一一の光の中より皆七寶の千葉の蓮華を出し、一一の華上に皆坐佛あり、是の諸佛等は十方恒河沙等の世界に遍滿して衆生を教化し、或は說法したまふ有り、或は默然たるあり、或は經行を以てし、或は神通變化して身より水火を出したまふ。是の如き等の種種の方便を以て十方五道の衆生を度脱したまふ。阿難、佛の威神を承けて悉く是事を見る。佛神足を攝して三昧より起ち阿難に告げ給はく、「是事を見るや不や、是事を聞くや否や。」阿難言さく、「佛の威神を蒙つて已に見、已に聞けり。」佛の言はく、「佛は是の如きの力あり、能く佛事を究見するや不や」と。阿難言さく、「世尊よ、若し衆生十方恒河沙等の世界の中に滿つとも、佛壽一日の用此の如し、力必ず能く究竟して佛事を施作せん。」阿難歎じて言さく、「未曾有なり、世尊よ、諸佛の法は無量不可思議なり。」是を以ての故に佛は禪定を具足したまふことを知る。

復次に、佛の 慧衆を具足したまふことは、初發心より阿僧祇劫の中に於て法として行せざる

【七三】 佛は一日の用もて、十方恒河沙の衆生を度し給ふ。  
 【七四】 佛は慧衆を具足す。  
 【七五】 慧衆とは新譯家の所謂慧蘊なり。

なく、世世諸の功德を集め、一心專精にして身命を惜まず、以て智慧を求めたまふ。其の如し。復次に、善く大悲の智慧を修するを以ての故に慧衆を具足す。餘人は是の大慧なく、智慧ありと雖も具足することを得ず、大悲は衆生を度せんと欲して、種種の智慧を求むるが故に、及び法を斷じ、六十二の邪見を滅し、二邊に墮せず。若くは五欲の樂を受け、若くは身に苦道を修し、若くは斷滅、若くは(七)計常、若くは有、若くは無等、是の如きは諸法の邊なり。復次に、佛慧の無上微盛なることは無比なり。甚深の禪定の中より生ずるが故に、諸の麤細の煩惱も動かす能はざる所なるが故に、善く三十七品、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定等の諸の功德を修するが故に、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法あつて無礙不可思議解脱を得るが故に、佛は慧衆を具足したまふ。復次に、「佛は」能く外道の大論議師を降伏したまふ。所謂優樓頻螺迦葉、摩訶迦葉、舍利弗、目犍連、薩遮尼迦子、婆蹉首羅、長爪等の大論議師の輩皆降伏せり、是の故に佛は慧衆を具足したまふことを知る。復次に、佛は三藏、十二部經、八萬四千の法衆の是の語言多きを見たまふが故に、智慧も亦大なることを知る。(八〇)譬へば一居士の清朝に大に雨る處を見て衆人に語つて言へるが如し、「昨夜の雨龍は、其の力甚だ大なり」と。衆人言く、「汝は何を以て之を知るや」と。答へて言く、「我は地濕

- 【七六】 *Saṅghapattiya.*
- 【七七】 計常とは永久常恒の靈魂又は神の存在を信すること。
- 【七八】 *Saṅghapattiya?*
- 【七九】 *Atsammā.*
- 【八〇】 雨猛きを見て、龍の力大なることを知るの譬を以て、佛の智慧力の大なるを知り得る所以を説く。

泥し、多くの山崩れ、樹折れ、諸の鳥獸を殺すを見る。此を以ての故に龍の力の大きなことを知るし。佛も亦是の如く、甚深の智慧は、眼の見る〔所に〕非ずと雖も、大法雨を雨らせば、諸大論師及び釋梵天王皆以て降伏せり。是を以て佛の智慧の多きことを知る可し。復次に、諸佛は無礙解脱を得たまふが故に、一切の法の中に於て、智慧無礙なり。復次に、佛の此の智慧は皆清淨にして諸觀の上に出で、諸法の常相、無常相、有邊相、無邊相、有去相、無去相、有相、無相、有漏相、無漏相、有爲相、無爲相、生滅相、不生滅相、空相、不空相を觀せず。常に清淨にして無量なること虚空の如し、是を以ての故に無礙なり。若し生滅を觀すれば不生滅を觀するとを得ず、不生滅を觀すれば生滅を觀するとを得ず。若し不生滅實ならば生滅は不實、若し生滅實ならば不生滅は不實なり、是の如き等の諸觀に皆爾も無礙智を得るが故に、佛は慧衆を具足したまふことを知る。復次に、(一)佛の解脱衆を具足したまふことを念ず。佛は諸の煩惱及び習を解脱し、根本を抜きたまふが故に、解脱は眞にして壞す可らず、一切の智慧を成就するが故に、名けて無礙解脱と爲し、八解脱を成就し、甚深にして遍ねく得るが故に、名けて具足解脱と爲す。復次に、(二)時解脱及び(三)慧解脱を離るるが故に便ち具足して共解脱を成就す。是の如き等の解脱を成就するが故に、解脱衆を具足すと名く。復次に、魔軍を破るが故に解脱を得、煩惱を離るるが

【一】 佛は解脱衆を具足す。衆の字は新譯には藏とせり。

【二】 時解脱とは鈍根の人の衣服、臥具、飲食、醫藥及び師友等の因縁の時機熟するを待つて解脱するをいふ。

【三】 慧解脱とは智慧解脱と言ふに同じ。

故に解脱を得、諸の禪法を離違するが故に解脱を得。「そは」諸の禪定に於て入出自在無礙なるが故なり。復次に、菩薩は見諦道の中に於て、深く十六解脱を得たまふ。一には苦法智相應の有爲解脱、二には苦諦もて十結を斷じ盡くして無爲解脱を得、是の如くして乃ち道比智に至る。思惟道の中に於て、十八解脱を得たまふ。一には或は比智、或は法智に相應する有爲解脱、二には無色界の三思惟結を斷するが故に無爲解脱を得、是の如くして乃ち第十八に至り、盡智相應の有爲解脱、及び一切の結使を盡して無爲解脱を得。是の如く諸の解脱和合するを名けて解脱衆を具足すと爲す。復次に、佛の解脱知見衆を具足したまふを念す。〔八五〕解脱知見衆に二種あり、一には佛は、諸の煩惱を解脱する中に於て盡智を用ゐて自ら證知したまふ。〔八六〕苦を知り已り、集を斷じ已り、盡を證し已り、道を修し已る、是を盡智と爲す。解脱知見衆は苦を知り已つて復た更に知らず、乃至道を修し已つて復た更に修せず、是を無生智解脱知見衆と爲す。二には佛は、是の人は空門に入つて解脱を得、是の人は無相門にして解脱を得、是の人は無作門にして解脱を得、是の人は方便なくして解脱せしむべく、是の人は久久にして解脱を得、是の人は久しからずして解脱を得、是の人は即時に解脱を得、是の人は轉語もて解脱を得、是の人は苦教もて解脱を得、是の人は雜語もて解脱を得、是の人は神通力を見て解脱を得、是の人は說法もて解脱を得、是の人は婬欲多し、爲に婬欲を増して解脱を得、是の人は瞋恚多

〔八五〕 佛は解脱知見衆を具足したまふ。

〔八六〕 二種の解脱知見。

〔八七〕 盡智の義解。

し、爲に願慧を増して解脱を得べることを知りたまふ。難陀、(八七) 優樓頻驪龍の如き是なり。是の如き等の種種の因縁によりて解脱を得。法眼の中に説くが如し。是の諸の解脱の中に於て、了了に知見するは、是を解脱知見衆を具足すと名く。

復次に、佛の一切智、一切知見、大慈大悲、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を念じ、佛の知りたまふ所の如く、無量不可思議の諸の功德を念す、是を念佛と名く。是の念は七地の中に在り、或は有漏、或

は無漏なり。有漏は有報にして、無漏は無報なり。三根相應の樂、喜、捨根と、行得と亦果報得となり。(八九) 行得とは、此の問の國中にて、念佛三昧を學ぶが如く、果報得とは、無量壽佛國の人の、生るれば便ち自然に能く佛を念ずるが如し。是の如き等は阿毗曇の中に廣く分別するが如し。

【八七】 ウルセルヴェーナーガ  
Dharmapala?

【八八】 念佛の義解。

【八九】 行得と果報得との義解。



大正八年六月廿七日  
昭和八年四月十五日  
昭和三年十月十五日  
發行  
再發行  
版發行  
刷

# 著作權所有

編輯者

國民文庫刊行會

東京市神田區淡路町二丁目十四番地

右代表者

鶴田久作

東京市本郷區西片町十番地

印刷者

君島 潔

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

## 發行所

電話 神田  
振替 東京  
一八五七二番  
一八三三八番  
一八五三五番

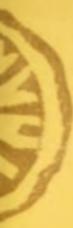
## 國民文庫刊行會

國譯大藏經論部第一卷 【非賣品】

(岡山製本)









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3811

